

【悪役を押し付けられた者】

ラスキル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

”悪役”どんな物語にも必ず登場するもの。そんな役割を望まれた一人の怪物が様々な英雄へと関わっていく、かも。ある時は、神すらも飲み込む怪物、ある時は泥人形の友人、ある時は麗しの狩人の伴侶、またある時は騎士王の……。どんな物語でも最後には必ず悪として倒される。あらゆる物語に登場し役割りをこなしていく。怪物が最後に辿り着き、そこで何を願うのか。

第一部的なものは完結しています。

現在、FGO編に向けてやり直し中

黒き怪物

メラニオス

フジマルさん

※不定期更新

文章力は無い。

目次

プロローグ

汝、悪であれ、怪物であれ

神喰い 「原初の罪」

泥人形編

短編① 泥人形と怪物 「家族」

短編② 泥人形と怪物 「人として歩もう」

怪物と狩人

狩人と怪物 「出会い」

狩人と怪物 「一目惚れ」

狩人と怪物 「汝は馬鹿」

狩人と怪物 「醜いもの」

狩人と怪物 「美の女神」

狩人と怪物 「汝」

狩人と怪物 「貴方の旅路に呪いあれ」

狩人と怪物 「幸せ」

狩人と怪物 「美酒に酔う」

狩人と怪物 「カリユドーンの怪物」

狩人と怪物 (短編) 「ピクニック」

狩人と怪物 「薪の英雄」

狩人と怪物 「カリユドーンの怪物狩り——十三番目の試練」

狩人と怪物 ED 「愛しています、いつまでも」

狩人と怪物 (短編) 「嫉妬」

狩人と怪物 (短編) 「もしも」

134 131 121 105 98 94 88 81 70 52 40 33 27 23 19 16 12 9 5 1

短編集

短編 魔女と黒い男

137

短編 騎士王と裏切者 「終わりの始まり」

140

短編 騎士王と裏切者 「崩壊の始まり」

148

短編 騎士王と裏切者 「カムランの丘」

153

短編 「勢いで買うと大体後悔する」

160

短編 「男の浪漫」

165

狩人と怪物 短編 「嵐の夜に」

171

短編 復讐と怪物 「お前を許さない」上

175

短編 復讐と怪物 「お前を許さない」下

182

短編 「注射は大人になっても怖い」

191

短編 虎とヒト 「今夜は月が綺麗ですね」①

197

虎とヒト 「今夜は月が綺麗ですね」③

201

Happy Halloween

205

虎と怪物 「今夜は月が綺麗ですね」④END

210

短編 後日談 『仕返し』

222

短編 お仕置き

229

短編最終話 「狩人と怪物」

240

桜と怪物

桜と怪物 「君の名前は」

253

桜と怪物 「勉強中」

265

桜と怪物 「化け物」

271

桜と怪物 「キャスター」

278

桜と怪物 「暗躍」

287

桜と怪物 「敗退者」

293

桜と怪物	「君がそれを望むなら」	303
桜と怪物 (幕間)	「いつかの夢」	312
桜と怪物	「反転」	315
桜と怪物	「妄執の果てに」	322
短編	天使と怪物	333
桜と怪物	幕間 「返して」	342
桜と怪物	「覚悟」	347
桜と怪物	「正義の味方」	355
桜と怪物	「選択」	373
桜と怪物	「暴走」	380
桜と怪物	幕間 「不滅の貴方」	384
桜と怪物	「愉悦」	387
桜と怪物	「お散歩タイム」	400
桜と怪物	「私の勝ち／裁定者」	404
桜と怪物	「Let's go イリヤ城」	408
桜と怪物	「人の軌跡」	415
桜と怪物	「蛇」	424
泥人形と怪物	「忘れるべからず」	433
桜と怪物	「反転」	443
桜と怪物	「怪物の日」	448
桜と怪物	「怪物」	463
桜と怪物	「冬木炎上」	474
桜と怪物	「顕現」	480
桜と怪物	「貴方とわたし」	491
あつたら良かったのに		507

桜と怪物 「悪役」 512

桜と怪物 「正義と悪」 516

桜と怪物 「前置き」 522

桜と怪物 「トゥルーエンド」 526

エンドロール 【明けない夜】 534

子連れの怪物

第一話 「子連れの怪物」 537

第二話 「娘」 545

幕間 【夢】 549

第三話 「真似事」 551

幕間 【恋】 2 / 1 561

幕間 「恋」 2 / 2 571

第四話 『親』 581

第五話 『幕切れ』 589

幕間 「怪物と狩人」 592

幕間 「メラニオス」 603

幕間 「臆病者」 616

2004年 『空腹』 631

幕間 「」 641

2005年 『嘘つきの2月』 646

幕間 「悪役」 653

2006年 三月 『青』 657

19??年 【徒に死を運ぶもの】 665

19??年 「Dream」 677

1999年 「悪魔払い」① 690

1999年	【悪魔祓い】②	694
1999年	「最新の怪物 上」	700
1999年	最新の怪物（中）	711
息抜きでも		716

プロローグ

汝、悪であれ、怪物であれ

昔々、あるところに妖精たちが暮らす小さな集落がありました。そこは妖精たちにとって理想郷であり彼らはそこでつつまじやかに暮らしていました。

ある日のこと、妖精たちは不思議な噂を耳にしました。人間たちが一人の青年に“この世全ての悪”をすべて押し付けて洞窟に閉じ込めてしまった、というものです。

所詮噂話程度なので詳しいことはよくわかりません。「何でそんなことをするのだろう、相変わらず人間は不思議だ」と、そのままほとんどの妖精はいつも通りの生活に戻りましたが

一匹の妖精は違いました。

“なんて面白そうなんだろう!!”

早速自分でも真似してみようとその妖精は思いましたが、すべての悪を押し付けただけではあまり面白くありません、それでは人間と変わりません。

三日三晩悩みましたがこれといった考えは浮かびません。

少々飽きてきたので、気分転換に外に出てみると遊んでいる妖精たちの姿がありました。何をしているのかと聞いてみると、どうやら英雄ごっこをしているそうです。噂で耳にした様々な英雄たちになりきって遊んでいるのだとか。

ただどみんなが英雄しかやらないので悪役がおらず、面白くないということでした。

“なら造ればいいじゃないか!!”

さっそく準備を始めます。まず必要となるのは素体となる人間です。

さすがに一から造るのはめんどくさいですから、近くの人間の村から持ってくることにしました。とりあえず村で最初に見つけた人間を持っていこうと探していると、一人の青年を見つけました。

青年はこれといって優れた能力もなく平凡な人間です。誠実で真面目で努力家で村のみんなから愛されている、そんな人間でした。

妖精は青年を眠らせると、さっそく自分の住処に持ち帰り準備に取り掛かります。

◇◇◇

「え…ここは…父さん？母さん？」

どうやら人間が目を覚ましたそうです。ちようど準備も整いましたし、妖精は儀式を始めます。

幸い妖精は魔術に精通しており、ある程度の実力はありました。手始めにあらゆる“悪役”とされた怪物、英雄の情報を人間に押し込みました。それは過去のものであったり、未来であったり、またまた別の世界のもの、それはそれは膨大な量でした。

「ひっ、な、なに…い、イタイイタイ！おねが、やめっ、あああああ ああ!!!」

当然、人間には耐えることができないほどの情報量です。このままでは死んでしまうので、治癒魔術などをかけながら少しずつ儀式を進めていきます。

恐らく人格や記憶などは壊れるでしょうが、そんなもの些細なものです。

「……………」

やがて青年は声も上げず、ただ妖精を恨めしそうに睨めつけるだけになりました。そんな人間の姿を見て流石に妖精も心配になったのか青年の頭をヨシヨシと撫でながら囁きました。

“もうすぐ終わるからね。そうしたら、みんなで遊ぼう。きっと楽しいよ！”

けれども人間はちっとも嬉しそうではありません。ますます憎悪を込めた目でこちらを睨んでくるのです。やっぱり人間はよくわからないとおもいました。

いよいよ最後の仕上げに取り掛かります。悪役は、最後には英雄に倒されるのは当たり前のことです。

ですが簡単に倒されるのは面白くない、少しぐらい英雄たちと戦えるくらいではないといけないと考えました。最初は魔術などで強化しようかと思いましたがめんどくさくなり、戯れに自分の魔術回路を移植することにしました。

それだけでは足りないと感じたのか一つ能力を与えました、”なんにでも姿形を変えられる”というものです。それは、竜であったり、悪魔であったり、またまた…

◇◇◇

“かくして悪役は造られた。”

妖精はとても喜びました。これでみんなも喜んでくれるでしょう！

——目の前の化け物は嬉しそうにしている

姿や表情はよくわかりませんが、この化け物も喜んでいるはずです。頭を撫でてあげましょう。

——自分の頭を触ってくる。気持ち悪い、不快感がこみあげてくる。

おや？どうやら他の妖精たちが訪ねてきました。ちようどいい機会です。みんなにも紹介してあげないと！妖精は入り口に向かいます。

——いよいよ我慢ができなくなってきた。込み上がる怒り、憎しみ、それらを吐き出す。

妖精が入り口にたどり着いた瞬間、後ろから迫る巨大な獄炎に飲み込まれるのでした。

——それは、巨大な炎の塊となり辺り一面を包み込みこんだ。

◇◇◇

そこからは地獄さながらでした。妖精たちの集落はあつという間に炎に飲み込まれました。

少し離れた人間の村でもきつと彼の姿は見えたことでしょう。ですが、人間だった頃の彼の面影は全くあらず、ある者は“竜”だと、ま

たある者は”悪魔”だと、そして彼の家族はそれを”神”であると言
い祈り始めました。

何もかも、何もかも燃やし尽くされ、食い尽くされる。もはや、人
ですらないその怪物は翼を広げ飛び立ちました。

”汝、悪であれ。英雄に打ち滅ぼされるべし”

これが記録に残る彼の最古の記録です。その後も彼は様々な神話
や物語に登場していきます。次に彼が登場するのは…

神喰い 「原初の罪」

大地が燃えている

世界が燃えていく

文明は踏み潰され、あらゆる生物は隷属さえ許されない

ある者は嘆いた

ある者は戦うことを決意した

ある者は諦めた

どのようなことを想おうが結末は変わらない

◇◇◇

紀元前1万4000年、世界は白き巨人セファールにより滅ぼされようとしていた。

あらゆる生物が立ち向かい、そして死んでいった。それは神すらも例外ではない。当時の地球を統べる存在であった神々の殆どが巨人に抗ったが、悉く敗北を繰り返していく。

命乞いをして辛うじて破壊を逃れたメソポタミアの神々とほんの一部の生き残り以外は全て殲滅された。

生き残りをかけた最後の攻撃が数刻前に行われたが、結果は惨敗。殿を務めた戦神はすでに破壊されており、残るのは後のギリシャ神話の最高神となる“ゼウス”を含むオリンポスの機神のみであった

「よもやこれほどとはな…。」

諦めにも聞こえる言葉を吐きながら、ゼウスは巨人を見つめる。

最も力のあった戦神アレスは破壊され、残った全機神の力を結集しても敵うすべもなく只々そこに立ち尽くすのみであった。

巨人はまもなく追いついてくるだろう。もはや逃げてても無駄だと悟り、残った全機神に告げる

「もはやここまでである。だが、最後まで我々は抗う！あの忌まわしい巨人にひと泡吹かせてやろうではないか！」

無駄だと分かっている、機神には機神なりのプライドがある。残った力を全て注ぎ、最後の一撃を放とうとした次の瞬間――

”G a a a a ー！”

待つてましたと言わんばかりの怪物の大きな口が巨人の脇腹を抉り取った。

その怪物はずっと待つていた、岩に化けていた自らの近くに白き巨人が来ることを。

怪物は”どんなものにも変化できる”能力を持つていたものの、所詮本体はただの人間。幾ら化けようがハリボテに過ぎない。そこで目を付けたのが白き巨人である。

巨人は自ら破壊した生命、建造物、概念を霊子情報として吸収し、巨大化していく能力を有していた。

ならば、その力を奪い取る、それが怪物の考えだった。正面から戦うのは分が悪い、ならば不意打ちあるのみである。力の一端でも奪えれば上々、結果それはうまくいった、うまく行ってしまった。

巨人は予想外のダメージを受けたのか驚いた表情で怪物を見ている。自らの体を食らう怪物を見て何を感じたのだろうか。ふらふらと立ち上がり、逃げるようにその場から離脱していった。

「ひっ…」

それはだれから漏れた声であっただろうか。

白き巨人は撃退された。

だが誰一人歓声を上げることはない、状況は変わらない、むしろ悪化した。

黒き怪物は巨人の力を取り込み、64、128、256mとその構造を巨大化させていく。

それが1,000mを超えたあたりであろうか、ようやくこちらに気づいたらしい。

ニタニタと気味の悪い顔を浮かべながら近づいてくる。

ある神は錯乱し、ある神は自ら機能を停止した。ゼウスは無駄だと悟りながらも最後まで立ち向かった。決着は一瞬で着いた。結果は語るまでもない。

◇◇◇

破壊した機神たちをむさぼりながら怪物は情報を整理していく。

巨人から奪った情報の中には人間であったり獣であったり様々なものがある。

怪物は理性を欲した。

あらゆる“悪役”の情報を押し込まれたもののそれは理性のないものであったり、ただただ破壊衝動のみのものであったり、あるいは理的であったり、怪物は存在するだけで矛盾を抱えていた。

よほど適当に積み込まれたのであろう、無駄な情報が多すぎる。機神や巨人の一部を取り込むことで人間と獣の中間程度の理性は獲得した。

だが足りない、巨人の一部しか奪えなかったせいかな物足りなさがある。

追いかけて今度こそ全て食らいつくそうかニタニタと考えていると、

——そこに一人の人間が現れた

小高い丘からこちらを見上げている。

怪物は人間ごときに何ができると嘲笑うが、ふと人間が持つ“剣”が目に入った。

瞬間、即座に攻撃態勢に移る。理性で判断するよりも早く本望が訴える。“あれはマズイ”と。

その剣はただの剣にあらず、星の祈りを集めた聖剣、異星からの侵略者を撃ち滅ぼさんとする物。

怪物は巨人の力の一端を奪ったことにより“異星からの侵略者”の特性を有していた。

故にこの結末は最初から決まっていたのである。

怪物は人間に向けてその力を振るおうとするものの、数秒遅かった。

振り下ろされた聖剣から放たれた眩い光は黒き怪物を包み込む。

天まで届くその光はあたり一面を照らし、その光景を見たものは例え神であろうと見惚れるほどであったという。

怪物の姿は消え去りそこには黒く光る塵が残るのみであった。

かくして“悪”は打倒され、一人の名もなき英雄が誕生した。神の時代は終わり、これからは人の時代が始まるのである。



戦いが終わり、黒い塵が残された大地。時間をかけ少しずつだが小さな塵が集まり、一つの形を成していく。

形成されたそれは一人の人間であった。

怪物は聖剣により打倒される瞬間自らの身体を塵に変化させた、大半は消し飛ばされたものの人型を構成するうえでは問題ない。

”やはり大きすぎる巨体は不必要だ”と考えながら歩きだす。ただ与えられた役割を果たすために。

ただ変化があったとするなら“人間”というものに興味を湧いたことであろう。とりあえず人がいるところに行こうと考え、あてもなく彷徨うのであった。

泥人形編

短編① 泥人形と怪物 「家族」

昔々あるところに黄金の王が続べる大きな国がありました。

王様には泥から生まれた人形のお友達がいました。二人は時々喧嘩をして周りを困らせましたが、いつも祭祀長に怒られて仲直りを繰り返す、そんな楽しい日々を過ごしています。

ある日のことです。突然、黒く大きな怪物が国を襲ってきたのです。

怪物はとても強く、国中の戦士達が立ち向かいましたが、全て返り討ちにあいました。黄金の王様はいよいよ不味いと思い、友と共に戦いに向かいます。

しかし、決着は中々つきませんでした。王様は剣や斧など様々な武器で攻撃をしますが、怪物は姿形をあらゆる物に変えて攻撃を躲けます。

泥人形の友も姿形を変え応戦を続けますが怪物の方が一枚上手のようで、スルスルと攻撃を躲しながら反撃してくるのです。

いよいよ痺れを切らした王様は自分の武器を怪物に向けて投げつけます。

するとその内の一つが見事に当たり、怪物は苦悶の声を上げました。中心部が怪物の弱点だと見破った王様は友に”中心部を縛り付けろ”といい、友は身体を鎖に変化させ怪物を縛り付けました。

中心部には怪物の正体があり、そこを縛られてしまつては姿を変えようにも変えられません。

ギリギリと締め付けられていき、遂には大きな姿を保てなくなりました。パツと大きな怪物の姿は消え、鎖に縛られた何かは地面に落ちてきました。

王様達は怪物の正体を見てやろうと近づき、それを見て驚きました。怪物の正体は何の変哲もない人間の少年だったので。

王様は少年に問います。

”なぜ、我の国を襲った?”

青年は言葉が通じてないのか、王様達を睨めつけながら”ヴううう”や”ガアアア”といった唸り声をあげています。

”ふっ、まるで獣のようではないか。だが、我の国を襲った罪は重い。子供であろうと容赦はせん、即刻首を刎ねてやる”

そう言い、王様は少年に向けて剣を振り下ろそうとしますが”待つてギル”

友が少年の前に出てそう言いました。王様は何のつもりだ?と思いましたが、友は続けてこう言います。

”この子は僕に任せてくれないかい?”

王様は一瞬ほか—んとした感じでしたが直ぐには”フハハハハ”と笑い出します。

”いつから冗談を言うようになったのだエルキドウ?面白い!そこまで言うのであればお前に任せてみようではないか”

少年がまた国を襲えばその時は分かるな、と釘をさして王様は帰っていきました。

エルキドウは少年に巻き付いた鎖を解こうとしましたが、あまりにも暴れるので鎖をそのままにして連れていくことにしました。

エルキドウが向かったのは、いつもお世話になっている祭司長のシドウリの家です。

シドウリは驚いた様子でしたが事情を説明すると少年を抱きしめました。身寄りのない少年を想つての行動でしょうが、少年には理解できません。

噛みついて引き離そうとしますが、エルキドウから”噛んだら怒るよ”という視線を向けられ大人しく抱きしめられることにしました。

最初は暴れていた少年も徐々に落ち着いたので表情も和らいできました。

すると”ぎゅるるる”とお腹を鳴らすので、シドウリは直ぐにバターケーキを持ってきてくれました。よほどお腹がすいていたのかガツガツと食べ始めます。

二人もケーキを食べながらニコニコとこちらを見ってきます。

“ みんなと一緒に食べるのは美味しいでしょう？これから毎日一緒に食べましょうね”

確かに今まで食べた巨人や機械たちよりも美味しいと思いました。何だか胸のあたりがポカポカとしてきます。

” みんなと食べるご飯は美味しい” 怪物はまた一つ学習しました。きっとこれを幸せと呼ぶのでしょう。

これは怪物が少しずつ自分を造っていく、そんな話。結末は決まっていますとも歩み続けていくのです

短編② 泥人形と怪物 「人として歩もう」

あれから暫くの時間が経ちました。怪物は王様の国で過ごすうちに少しずつ人間と関わっていきました。

「おう！いつも悪いな坊主。シドウリ様にもよろしく言っといてくれ」

「うん、分かった」

「それと、ほれ。こいつを持っていけ、娘が作ってくれた菓子だ。お前にも分けてやる、美味しいぞー」

「本当×ありがと」

シドウリとエルキドウ（あと王様）の教育のおかげもあり、言葉も上達し、次第に周りにも受け入れられていきました。

「ほう、良いものを持っているではないか。我に献上することを許す」
「あつ、かえせ！かえーせー、かーえーせーよー。返さなきゃ食べてやるぞー！」

王様はいつも意地悪です

「ふふははは！見るがいい、エルキドウ！ちっこいのが可愛らしく跳ねておるぞー！悔しければ我に対する讚美の言葉、一つや二つ覚えー！ゴフツ」

「ギル、僕は言ったよね意地悪しちゃダメだって」

「わー、ありがとう、エルキドウ！」

「おのれえ、かわい子ぶりよってから。ま、待てエルキドウ、我を引きずるな！民に面目が立たぬであろうが！」

ズルズルと引きずられる王様を満面の笑みで見送る怪物。こんな愉快な日々が続いていました。

ただ、怪物には一つの疑問がありました。

何故エルキドウは王様や人間達と一緒にいるのでしょうか？聞いた話によると彼？彼女？は神に遣わされた天の楔というものらしいのです。人と神を結びつける鎖、王を天へ連れ戻すのが役目。

ある日の夜、城塞で佇んでいるエルキドウと話をしました。

「どうして僕がギルと一緒にいるのかだつて?… そうだね、少し昔話をしようか」

◇

——泥から、僕は生まれた。神の手こねられた粘土。千差万別に変化する道具として作られたんだ。

起きたばかりの僕には理性がなかった。理性のない僕に嘆いた父は、僕に女をあてがった。鏡すら見た事のない僕にとって、そのヒトは自己を知りたい見本となった。

“ エルキドゥ ”

僕の役割。僕の使命。おごりきつたギルガメッシュに、神の怒りを示さなければならぬ。

「貴様が、我を諫めると?」

「そうだ。僕がこの手で君の慢心を正そう」

彼はいつも孤独だった。彼は生まれながらに結論を持っていた。神でもなく人間でもない生命として孤立していた。双方の特性を得た彼の視点はあまりに広く、遠く、神々ですら、彼が見据えているものを理解できなかった。

それでも彼は王である事を捨てなかった。自らに課した使命から、逃げる事はしなかったんだ。彼は真剣に神を敬い、人を愛した。その結論として、神を廃し、人を憎む道を選んだだけだったのだ。

戦いは数日に及んだ。僕は槍であり、斧であり、盾であり、獣であり、兵器だ。万象自在に変化する僕を相手に、彼は持ち得るすべての力を振り絞った。

「おのれ——泥人形風情が、我に並ぶか!」

はじめて対等のモノに遭遇した驚きか、怒りか。戦いの中、彼は秘蔵していた財宝を手を取った。

あれほど大事に仕舞っていた宝を持ち出すのは、彼に取っては屈辱以外の何物でもなかっただろうね。

初めは追い詰められて、やむなく。けれど最後は楽しみながら惜しみなく、持てる財を投入した。

戦いは——果たしてどちらの勝利で終わったのか。

彼はついに最後の蔵までを空にし、僕は九割の粘土を失っていた。衣服すら作れなくなった僕の姿は、さぞ貧相だったのだろう。彼は目を見開いて大笑した後、仰向けに倒れこんだ。僕も地に倒れ、深く深呼吸をした。

「互いに残るは一手のみ。守りもないのであれば、愚かな死体が二つ並ぶだけだろうよ」

その言葉の真意は、今でも分からない。

「使ってしまった財宝は、惜しくないのかい？」

なんとなく、そんなことを聞いた。

「なに。使うべき相手であれば、くれてやるのも悪くはない」

晴れ晴れとした声で、ギルガメッシュはそう言った。

それからの僕は彼と共にあった。駆け抜けるような日々だったんだ。

フンババという魔物がいた。僕たちは力を合わせてこれを倒した。僕は彼に問うた。なぜフンババを倒すと決めたのか。それは神々からの命令ではなかった。かといつてウルクの民の為でもないはずだ。「いや、ウルクを守る為だが？地上の全悪を倒しておかねば、民どもが飢え死のう」

何故か、と更に聞いた。彼はウルクの民を圧政で苦しめている。その彼が、なぜ民の心配をするのだろうか？

「不思議ではないだろう。我は人間の守護者として生まれたものだからな。この星の文明を築くのが、王の役目だ」

そう口にする彼の眼差しは、あまりに遠かった。同じように作られた僕でさえ、その見据える先が分からない程に。

「守護にも種類があろう。守る事だけが守護ではない。時には北風も必要だろうよ」

この時、僕は彼を完全に理解した。

「そうか。つまり君は、見定める道の方を尊んだんだね」

照れくさそうに彼は笑った。

◇

「だから彼と共に——人と共に歩むことを決めたんだ」

君はどうするんだいとその目は問うてるような気がしました。

怪物は今まで数々の国を、人間を滅ぼしてきました。それが役目なのです、彼に与えられたただ一つの役割。望まれたように生きる、そうしてきました。

ですが、王とエルキドゥに諫められこのウルクで暮らしています。

彼らは怪物のことを人として扱い共に歩んできました。

「僕は…」

もう少しだけ、この幸福に浸かっていたいのです。

「——人として歩むよ。」

怪物と狩人

狩人と怪物 「出会い」

彼が登場する物語で有名どころはいくつかありますが、私が選ぶならこの二つの物語です。一つは“ギルガメツシュ叙事詩”この物語で彼は緑の友人に出会います。友人を通して人を知り、愛を知ります。出会いと別れを経験しました一つ成長します。ですが最後には“悪役”として黄金の友と戦い、この物語での役割を終えます。今回はもう一つの物語、“麗しの狩人と黒き怪物”を語ろうと思います。



一人の青年が旅をしていた。名をヒツポメネースといい気ままな旅生活を過ごしていた。ある日立ち寄った国でヒツポメネースは一つの噂を耳にした。

“あのアタランテを妻にできる”

あのアルゴ船の乗組員である麗しの彼女を娶るために、国中の男たちが集まっているそうだ。

ヒツポメネースも噂に誘われ、アタランテがいると聞いた場所へと足を進めた。

だがどうも話を聞くと、彼女を娶るためには俊足の足を持つとされる彼女に徒競走で勝つ必要があるのだと聞く。

自分にそのような実力はない、どうしたものかと悩んでいると、愛と美と性を司る女神アフロディーテの神殿を目にした。

これ幸いとヒツポメネースは祈りをささげると天からアフロディーテが現れ、彼に“黄金の林檎”を授け、これを一つずつ落としアタランテの気を引き付けるように教えた。

「これなら、きつと勝てるー！」

そう確信しヒツポメネースはその晩すぐに眠りについた。それ故に、黒い影が近づいているのに気づかなかった。

翌朝、さっそくアタランテのもとを訪れ勝負を挑んだ。スタートの

号令がされ二人は走り出す。アタランテは少し距離を置いて追いかけてくる。必ず勝てることを見越してのハンドのつもりであろうが自分にはこの“黄金の林檎”があるのだ！と服の中から取り出そうとするが

「ない…： ないっ！林檎がない!?!」

いくら服をまさぐろうと林檎は見つからない。

そうこうしているうちにアタランテはすでに自分を追い越しており、一か八かで必死に追い付こうとするが当然距離は広がり続け、ついにアタランテはゴールした。

ヒツポメネースはゴールにたどり着くことはなかった、ゴールに着いたアタランテは弓を構え男に向け矢を放つ。その矢は正確に男の心臓を撃ち抜いた。

“私と勝負し勝った者の妻となろう。だが、敗者はこの弓で死んでもらう”

アタランテは宣言通り、自らに挑んできた男たちと勝負し、そして死を与えた。ヒツポメネースもその男たちの一人に過ぎなかった、最後に彼は何を思ったのであろうか。その日、一人の男がその人生を終えた。

◇◇◇

時を同じくして、一人の青年が黄金色の林檎を食べている。

“普通の林檎と味は変わらないな”と悪態をつきながらむしゃむしゃと頬張っている。

青年は気ままな旅生活を過ごしており、たまたまこの国に立ち寄った。

この辺りでは珍しい顔立ちで、髪は夜のように美しく黒く染まっている。青年が林檎を食べていると子供達が近づいてきた。

「すごいー！綺麗な色の林檎だね!!」

どうやら林檎に見惚れているようだ。“ああ、拾ったんだよ”青年は答えた。

「へえ〜ねえ、味は？味はどうなの？美味しいの？」

“味は普通の林檎と変わらないから美味しいよ。良かったら食べてみるかい？” そういつて黄金林檎を人数分に切り子供たちに渡した。

「いいの?!ありがとうー!」

“みんなで食べるほうが美味しいんだよ。そう教わったんだ。”
青年は笑顔でそう答えた。



ある日青年は一つの噂を聞いた。

“あのアタランテを妻にできる”

なんでも勝負に勝てばとんでもない美人を娶ることができそう。青年はあまり興味は湧かなかつたものの、やることもなかつたので足を運ぶことにした。

アタランテがいるとされる場所を訪れると、まず目にしたのは心臓に矢が突き刺さった死体の山。聞くところによるとアタランテに勝負を挑み敗れていった者たちの死体だという。

“私と勝負し勝った者の妻となろう。だが、敗者はこの弓で死んでもらう”

“そこまでして一人の女に執着するものなのだろうかと疑問に思い、” やっぱり人間は面白いな” と言葉を零しながらその場を後にしようとする。

「なんだ、汝は挑戦者ではないのか？」

後ろから声をかけられた。

ああ、前言は撤回しよう。これは確かに自分の命を懸けてでも、と思っても仕方がないのかもしれない。

振り返ればそこには美しい緑の狩人がいた。

―それが狩人と怪物の出会いであつた―

狩人と怪物 「一目惚れ」

彼女を目にした瞬間、青年は心を奪われた。その緑と金色に輝く美しい髪、そして気品に溢れたその姿に見惚れてしまうのだった。

「む？まさか言葉を喋れぬわけでもあるまい。もう一度聞こう、汝は挑戦者ではないのか？」

はっ、と頭を振り現実に戻る。質問に答えなければ今にも弓で射られそうな雰囲気である。青年は身振り手振りで違うという意味を示し「噂で聞いたあなたの姿を一目見たくて」と答えた。

「ふっ、安い口説き文句だな。まあいい、挑戦者ではない者に用はない、さっさとここを立ち去れ。」

そう言い、アタランテは森の奥へと駆けていった。

しかし、もう間もなく日も沈む。彼女には悪いが今日のところはここで一晚を越させてもらおう。まずは火をおこす準備をしなくてはと、木を集めるために森へ向かう。

しばらく森の中を歩いていると、上から果物が落ちてきた。見上げると、小さなリスがこちらを見ている。プレゼントのつもりらしい。”ありがとう、有り難く受け取らせて貰うね” そう答え森を進む。

青年が森を出る頃には手には一杯の果物があった。昔から動物に懐かれることが多く、今回も沢山の恩恵があった。森の動物達に感謝しながら今日のご飯にありつく。どうやら豪華な食事になりそうだ。

◇◇◇

翌朝、何やら騒がしい声で目を覚ます。沢山の男達が集まってきているようだ。話を聞くと

「今まで一人一人挑んだから勝てなかったんだ！何人かで妨害すれば簡単なこった！」

そう言っって意気揚々と勝負を挑んでいく。”無理だと思っけどなあ”と思っったがその勝負を見守ることにした。

アタランテと4人の男が走り出します。

アタランテはいつも通り男たちの少し後ろを走っている。

すると男の中の一人が彼女に向かってとびかかる。

それを横によけて躲し何食わぬ顔で走り続ける、他の男も次々とタックルを仕掛けたり無理矢理でも止めようとするが、ひらりと身を躲して一向に止まる気配はない。

男達は自分たちの中で一番足の速いものにすべてを託すつもりだったがそれもすべて無駄足に終わりそうだ。

あつという間に先頭の男を追い越しゴールする。そして男達を待っているのはアタランテによる平等の死だ。

それから男たちは様々な方法で妨害し続けるが、アタランテはそのすべてを打ち破ってみせた。

青年はその間ずっとアタランテに見惚れていた。彼女の走り、そしてその表情、一つも色褪せることなく記録されていく。

死んでいった男たちには興味はないが、彼女を誰かに取られるのは惜しい。

今日の日のうちにこの国を離れるつもりであったが、“彼女を見ていたい、もつと知りたい”と考えしばらく滞在することに決めた。

◇◇◇

その日の夜、森の中を散歩していると一頭の子鹿に出会った。

どうしたんだろうと見ていると、少し走っては此方を見て、また走っては此方を見てくる。

“どうやら”競争しよう!”と言っているようだ。もしかしてアタランテの走りを見て誰かと走ってみたくなつたのかもしれない。青年も少しばかり走ってみたかったのでそれを了承した。

しばらく人の姿で走ってみたものの、木々が生い茂る森の中ではないささか走り辛い。

そこで体を変化させ同じ子鹿の姿で走ることにした。青年はただの人ではない、身体をどんな物にも変化させることができる。

蹄を鳴らし森を駆け抜ける、木々を綺麗によけ爽快感溢れる走りでも駆けていく。

人の身体ではついていくのに精一杯だったものの今度は一緒に駆

けることができる、心なしか小鹿も楽しそうだ。

が、楽しそうに森を駆けるその二匹を狙う一人の狩人がそこにはいた。

確実に仕留めることができるように弓に矢をかけその時をジツと木の上から待つ。

◇◇◇

”狙われている?”森を駆けている中、自分達に注がれる視線に気づく。

その瞬間、子鹿の脳天に矢が突き刺さる。思わず脚が止まる、即死だ、もう治しようがない。悔やむ暇もなく自らに放たれた矢が飛んでくる、止まっている暇はない。

森を駆ける。いくら逃げようと矢が追ってくる。木から木へ飛び移りながら此方を追いかけてくる。

右に左に避けながら駆けるが躲し切れず次々と身体に矢が刺さる。 ”このままでは罅が開かない!”身体を大鷹に変化させ空へと羽ばたく。

やっと逃げ切れたと思ったのも束の間、翼を矢で撃ち抜かれる。そこで体力が力尽きたようだ、大鷹の姿を保てず人の姿に戻ってしまった。

”まさか自分が獲物になるなんてね”

そう失笑しながら地上へ落下していく。地面に叩きつけられ衝撃が身体に響く。

どうやら血を流しすぎたらしい、指一本動かせない。魔力は充分にあるので傷の治療に大半を回す。 ”よくもまあここまでやってくれたものだ”と思わず感心してしまう。

「確か、この辺りに落ちたはずなのだが…」

恐らく矢を放ってきた狩人だろう、此方へ近づいてくる。

「血の跡が……っ—どうして汝がいる?!それにこの傷、まさか汝がああな獣?いや、それよりも早く手当を…」

自分を心配してくれているのだろう、心配そうに問いかけているら

しい。返事をする前に意識は途切れていく。
麗しの狩人”アタランテ”それが彼女との2回目の出会いだった。

狩人と怪物 「汝は馬鹿」

懐かしい夢を見ました。

”父がいて、母がいる。そして自分がいる。”

顔は分かりません。黒く塗り潰されてるようで全く分かりません。

”なんでもない毎日、でもそんな日々が幸せだった。”

ふと後ろを振り返りました。そこにはのどかな風景などなく、気味の悪い笑顔を浮かべた怪物がいます。ニタニタと笑いながら青年で遊んでいます。“痛い、やめて、殺して”叫び続けても止まりません。それにとつてはただの遊び、一時の思い付きでしかないのですから。

”あまり思い出せない、これが自分なのかそうでないのか、それすらも分からない”

場面が変わり、青年だったものが辺りを燃やし尽くしています。逃げ惑う妖精たち、容赦はしません。なぜなら、あの怪物と同じ姿をしているのです。気持ち悪くて仕方がないのです。“痛い、やめて、殺して”と懇願してきます。それをニタニタと笑いながら、ゆっくりゆっくりと燃やしていきます。“なんて良い声を上げるのだろう！”もつと聞きたい、もつと聞かせてほしい、そう思い次のおもちやを探しますが、もうなくなってしまうみたいです。でも心配ありません、すぐ近くに人間の村を見つけましたから。

”…もういい”

人間達は、泣き叫んだり…。”もういいって”…してきます。色々な反応をしてくれました、嬉しくてたまりません！手始めにこちらを見て祈る夫婦を…。”お願い！”そして大きな口を開け”お願いい…。もうやめて…。”

夫婦は最後まで息子のことを案じ続けていました。

◇◇◇

”っ…!!”

目を覚ます。気を失っていたみたいだ、もう辺りも随分と暗くなっ

ている。

“誰か…”

返事はない、外で焚火が燃え盛る音のみが辺りに響き渡る。ここは誰かの天幕の中らしい、ごく丁寧に手当までしてくれている。傷は大体治っている、これなら明日にでも動けそうではある。

“つつと… 血、流しすぎちゃったかな”

立上がろうとするがどうも身体がふらつく。歩き出そうとするが足がもつれてしまう。

“やばっ… 転ぶっ！——ぐえっ”

転ぶ瞬間に後ろから服をつかまれる。間一髪で転ばずに済んだ。

「はあ、なにをしているのだ汝は…」

後ろを振り返ると、呆れと心配が入り混じった表情でこちらを見るアタランテがいた。

“え！、あ、その… ありがとうございます？”

突然のこと過ぎて頭が追いつかない、“なぜここに彼女が？”や“やった！また会えた、嬉しい！”といった感情が頭を飛び交う。

「全く… 怪我人なのだから大人しくしている。」

無理矢理に寝かされ触診を受ける。彼女の手が優しく体に触れる。ちよつとだけくすぐりたい。

“はわわわっわ”

情けない声を上げてしまう。だって仕方がないだろう！こんな経験今までなかったんだ…

「ふむ、傷は治っているのか… いったい何者なのだ汝は、あのようにな姿を変えたり、ただの人間ではあるまい？」

警戒に満ちた視線が注がれる。浮ついた気持ちがさあーつと冷えていく。返答次第ではただじゃすまなそうである。

（“困ったな… どう誤魔化そうか、嘘をついても気づかれるだろうし”）

あまり悩むとかえって怪しまれる… よし、この作戦でいこう。

“人間だよ、ちよつとだけ魔術が使えるね”

「魔術…？ 私もあまり詳しいわけではないが汝のそれは…」ぎゅ

るるる”…腹が空いているのか？」

”そういえば今日はまだ何も食べてなかったな、あははは…”
顔を赤らめ答える。アタランテは”はあ…”と呆れた表情で外へ何かを取りに行く。

”計画通り（ニタア）”

どうやら、外で肉を焼いていたらしい。焼きたての鹿肉を持ってきてくれた。

「私の今日の獲物を分けてやる、それを食べて精をつけろ。」

あの小鹿の姿を思い浮かべ”ごめんね”と心の中で謝る。これを食べれば少しは回復できるだろう。彼女には感謝しかない。

”ありがとう、傷の手当から何もかも…”

「気にするな、一応こちらにも責任はある。しかし…私はてつきり
汝が”黒き怪物”だと思ったのだが…”

”…黒き怪物?”

一瞬ドキツとする。詳しく聞くとこの辺りに古くから伝わる昔話のようだ。

”それは突然現れました。それは何にでも化けます。それは夜のように真つ黒です。それは次々と神様を食べていきます、ニタニタと笑いながら。ああ恐ろしい、恐ろしい。でも心配しないで、英雄がきつと来てくれます。彼らはいつだって私たちを助けてくれるのですから。”

大昔から伝わる話だそうで、多くの男たちは”自分が怪物を倒して英雄になつてみせる”と酒の席で豪語するのだとか…。酔つ払いに退治されるのは流石に勘弁だな。

「最初は勘のいい鹿だと思っていたのだが、次々と矢を躲すのでな、つい滾ってしまった。更に大鷹に化けるのだからこれはまさかと思つたのだがな…」

こちらをジツと観察するような目で見てくる。何だろうと首をかしげると、ふふつ、と少し小馬鹿にしたように

「汝の間抜け面を見ていると…ふつ、どうやら私の杞憂だったようだ」

むっ、間抜け面…。？確かに会話出来ることが嬉しくてにやけた顔
になっているのは否定しないけど、

“君ってその…。案外ハッキリ言うタイプなんだね、あははは。…”

そんな会話を続けているうちに肉を食べ終わってしまった。あま
り長居をするのも申し訳ないな、だいぶ体も動くようになってきた。

“ありがとう、だいぶ元気も出たしそろそろ自分の天幕に戻るよ”

「そうか…。もう一度忠告するが用が済んだのならこの国を去れ。次
にもし森で撃たれても文句は言えんぞ」

“あーうん、考えておくよ”

“じゃあね”と手を振るが彼女はこちらに一瞥をくれただけで中
に戻ってしまった。でも進歩はあった！なにせ会話もできた上に一
緒にご飯まで食べれたんだから！。自分の天幕に向かう足は思いの
ほか軽かった。

◇◇◇

次の日、腕一杯に果物を持ちながらアタランテのもとに向かう。森
の動物たちに美味しい果物が実る場所を聞き、一人で食べるのも勿体
ないしせっかくだしお裾分けというわけである。勿論、彼女と話した
いという気持ちもあるのだが。ちょうど今日の勝負から帰ってきた
アタランテを見つける。

“あ、おーい！”

アタランテは一瞬驚いた顔をするが、こちらを見ると呆れた表情で

“はあ”とため息をつき

「汝は…。馬鹿なのか？」

“ええっ?!”

怪物は少しづつ愛を知っていく。それはきつと無駄だとしても――

狩人と怪物 「醜いもの」

「汝の持つてくる果実は……モグモグ……相変らず旨いな」

果実を美味しそうに頬張りながら答える。こうやっておいしそうに食べてもらえるとこっちまで嬉しくなる。そんな彼女の姿を見るだけで僕はにやけてしまう。

あの日から果実を持ち何度も彼女のもとに通った。追いつかれたり、時には何か怒りに触れたのか矢を撃たれることもあった。だが、それにもめげず何度も何度も足を運んだ。

段々と受け入れてくれたのか、それとも諦められたのか、少しずつ会話をしてくれたり、持つてきた果実と一緒に食べてくれるようになった。

“ 友達が美味しいものが実っているとこを教えてくださいるんだ”
「友達……それは森の動物たちのことか？」

“ うん、他にもいろんなことを教えてくれるんだ。例えば天気の見分け方と「人間の友達はいないのか？」……い、今はいない？かな、多分、うん。”

哀れみや同情の視線が向けられる。そんな目で見なくてもいいじゃないか。別に人と関わってないわけじゃない。

“ で、でも子供には好かれるんだよ！たまに遊んだりするし……”
「そうか、子供か……それはいいことだな」

優しい声でそう答える、初めて見る顔だ。

“ 子供好きなの？”

「ああ、彼らの笑顔が好きだ。愛おしいと思う……」
初めて彼女の年相応の笑顔を見れた気がする。ああ、この笑顔は僕は……

“ ならば、今度一緒に遊びに行こう！みんなも喜んでくれるよ！”
「汝と……一緒にか？」

きつとそれは楽しいだろう、そうに違いない。そう確信し頷く。
「……そうさな、それは楽しみだ」

彼女は僕の目を見てそう言った。“それはきつと叶わない”、そん

な目をして

◇◇◇

アタランテは今日も競争を続ける。いや、正しくは続けさせられているというべきか。彼女の父、アルカディア王スコイネウスに。

そもそも事の始まりは王がアタランテを捨てたことから始まった。

“あるところに一人の王様がいました。王様の父は武勇と知略に優れており人々からは英雄だと讃えられていました。

そんな父の姿を見ながら育ったので” つか自分も父のように”と、ひたすら剣を振るい勉強に励み、努力を続けます。

ですが人生、そう上手くはいかないものです。

彼は平凡でした、いたって平凡な男でした。いくら努力しようとするには上がいるのです。

父とは違い自分には何も才能がないことを悟り、嘆きました。そして男はただの“王”になったのです。

王様を見る目はいつも同情や哀れみ、蔑みといった物。それもそうでしょう、彼の持つものといったら王としての地位しかないのですもの。

ただ利用する、自分の利益だけ求める。彼の周りはそのような人間しかいなかったのです。

そこで王は跡継ぎを求めました。自分ができなかつた功績を息子が成し遂げ人々から“英雄”と認められれば、きつと自分を見る目は変わるはずです。

近隣諸国の名のある王から嫁を貰い、すぐに子を授かりました。しかし、産まれたのは望んでいた男児ではなく女児。

王様は嘆きました、そして産まれた子を山に捨ててしまったのです。妻は泣き喚きましたがどうでもいいです。欲しいのは男、自分の後継なのですから。

それから王様は子作りに励みました。何人もの妻を貰いましたが、一向に子供を授からないのです。困りました、王様はもう歳で、子

を残すには限界が近づいています。

「何故だ！何故、私ばかりこのような事に！」

女神の神殿で王様は嘆きます。もはや神に継るしか方法はないのです。そうやって嘆き続けたある日、一つのお告げがありました。

”貴方の娘を探しなさい”

生きている筈がない、何故なら自分が山に捨てたのだから。しかし、万が一ということもあります。王様は兵士に命じ探させました。

娘はすぐに見つかりました。彼女は山に捨てられた後、女神アルテミスに見つけられ、女神が送った雌熊に育ててもらい、立派な狩人になっていました。

ですが王様にとってはそんな事よりも、もっと重要なことがありました。

彼女は数々の武勲を立てており、まさに英雄と呼ぶにふさわしい存在になっていたのです。

その事を聞いた王様はすぐに彼女を連れてくるよう命じました。一度自分を捨てた父の下に娘が帰ってくるものかと、心配はありましたが意外にも娘はすぐに王様の国に訪れました。

娘の名は”アタランテ”

親の愛を知らず、熊に育てられた者

アタランテは笑顔で王様の所に来ました。きつと父に会えるのが嬉しかったのでしょう。それはまるで愛情に飢えた子供のよう

王様も笑顔で向かい入れます。でも、娘に対する愛など微塵もありません。あつたのはただ一つ

”コイツに産ませればいい”

英雄にはアタランテが成ってくれました。後は後継だけです。

娘がこれまで歩んできた人生を楽しそうに語っています。数々の冒険譚、それを聞き流しながらニコニコと王様は微笑んでいます。話し終えたとみるや、アタランテに一つの提案をします。

「お前を王女として迎え入れたい」

娘は嬉しそうにしています。だって家族と暮らせるのです。喜ばないはずがありません。しかし、王様の言葉は続きます

「そこでお前に、媚を取ってもらいたい。」

娘の笑顔が消えました。必死に“自分は女神アルテミスを信奉しており純潔を貫いている”と訴えてきます。だから何なんでしょう？子は親に従うべきです。

「アタランテ… 私の、父の頼みをどうか叶えてはくれぬか？」

優しく、諭すかのように説得します。しばらく娘は駄々をこねていましたが諦めたのか一つの条件の元それを了承しました。

“ならば、私に走りで勝つことを条件にしてもらいたい”

少し面倒だと思いましたが、まあここが妥協だろうと考えそれを了承しました。

しかし王様は知りませんでした、アタランテが俊足の狩人として名を馳せていることを”

今日の競争も終わる、誰一人ゴールには辿り着けず、死体の山が積み重なる。

日に日に参加者の人数は増えている。だが、アタランテに勝てる人間がいるとはとても思えない。そう確信できるほど彼女は足が速いのだ。

”今日も行ってみようかな”

最近アタランテのどこに行くことが日課になっている。今日はまだ夕食を食べていないので誘ってみよう。

天幕へ向かう途中の道、前から二人の人間が歩いてきた。

一人は煌びやかな衣服を着ている男性、噂に聞くスコイネウス王だ。もう一人は… 小間使いの女性だろうか？全身を隠すように布で覆っているのでよく分からない。

「おや… 君は、もしかしてアタランテの所へ行くのかね？」

声をかけられる

”… ええ、そうです”

そうか、そうかと頷く、その男は貼り付けた様な笑みを浮かべその目は生気がない。

「あれは私の娘だね。全く、あのような条件を付けよって。親として

は早く相手を見つけて欲しいのだがね。」

嘘である、顔を見れば分かる。最初からこの男は娘のことなど考えてすらない。

”そうですか、でも彼女は結婚を望んではいないのでは？”

「いやいや、私がどうしても頼んだら快く快諾してくれたよ」

それならば、条件を付けるはずがないだろうに。

笑いながら答えるその人間にドス黒い感情が湧く。

「それにだよ、君？子が親に従うのは当たり前だと思わないかね？」

——殺すか？

「それに君だって娘に惚れているのではないかね？もし君が望むのであれば私が協力してもいいのだよ？」

ああ、やつぱり気に食わない。その顔が、その声が、いつか見たあの醜悪なものと同なる。

だが、王には生気がない。何かに妄信するように、その濁った眼には青年の姿は映っていないのである。今話したことは、確かに王自身の言葉であろう、だがそれとは別に違和感がある。昔味わった、傲慢の匂いがする。

“シユツ——”

腰に差した短剣を相手の喉もとに向ける。

自分の考えを証明するため。間違いであれば罰は甘んじて受けようとも。

王は微動だにしない。“自分の小間使いに刃が向けられているにもかかわらずだ”青年を見もしない、まるで糸の切れた人形のように。

『あら…まさか気づかれるなんてね。ただの人間に見破れるはずなのだけだ』

“…さあ？独特の匂いがした気がしたので。神様特有の傲慢さの匂いが”

女が正体を現す。

それを見れば同じ神々でさえも我を忘れ、求婚に走るであろう。

その名はアフロディーテ。美と愛の女神、それが青年の前に姿を現

した。

『その態度、本来なら八つ裂きにしてあげるところだけど今日は許してあげる。今日は機嫌がいいの』

“なにが目的なんです？”

『話してあげてもいいけど…急いだろうがいいんじゃない？彼女ちよつと体調悪いみたいだから』

視線がアタランテの方へ向いてしまう。その一瞬をつかれ、振り返ると二人の姿は消えていた。

『もし話がしたいなら、私の神殿にいらつしやいな。いつでも待っているわ』

そう言葉を残して。

…ここで考えていてもしょうがない。アタランテのもとに急ごう。

青年は夜に駆けて行った

狩人と怪物 「美の女神」

青年はいつもより足早にアタランテのもとに向かった。ただただ、彼女のことを気がかりだった。

“アタランテ… いる?”
返事はない。

でも、中に人がいるのは間違いない。申し訳ないと思いつつも中に入らせてもらう。

「… つ… ふう… ふう」

彼女はそこにいた。

横たわり、苦しそうにうめき声をあげている。

“大丈夫?! なんだ… この熱”

額を触るとものすごい熱さ。水をかければ蒸発してしまいそれほど熱い。とにかく何とかしなくちゃと、水で濡らした布を額に当てるが

ジユウウウ…

焼け石に水とはこのことであろう。何度冷やそうとしても意味をなさない。これはただの風邪じゃない、まるで呪いのような…

“どうすれば… 僕はどうすればいい、僕は…”

「… だ… だ、だれか…」

彼女が助けを、いや、熱によるうわ言だろう。手をこちらに差し伸べてくる。思わず手を握るが、どうしてあげればいいのか分からない。分からない、分からない、分からない… ああ、焦つちやダメだ。考えるんだ、考えなきゃ。なにか、なにか方法は、きつと、きつとあるはず。

… そうだ! あれが残ってる。曲がりなりにも神が授けたものだ、きつとそれなら…

『… 何でここまで必死になってるんだ?』

声が聞こえた。

何で必死か? そんなの決まってる

『ここで見捨ててもいいんじゃない？』

否。それはあり得ない。

僕は彼女の見せる笑顔が好きだ。声が好きだ。顔が好きだ。彼女の全てが好きなんだ。

だからこそ走り出す、自分の天幕へと。神に頼るようなのは癪だが、この際手段は選ばない。

”黄金の林檎” あれならきつと治すことが出来るはず。

『きつと僕は後悔する。こんなことなら初めから...』

ああ、僕は彼女を愛しているー

◇◇◇

”これで、よしつと”

流石に切って食べさせるのは難しいから、食べやすいように林檎をすり潰す。

相変わらず彼女はうなされているが、無理矢理でも食べさせる。

「んぐつー」

効果はすぐに現れたようだ。

飲み込まれた林檎はアタランテの身体の中で黄金に輝き、その力を発揮した。

あれだけかいていた汗も落ち着き、あれだけ苦しんで歪んでいた顔も和らいで見える。

「すう... すう... すう...」

これほど効果があるとは驚いたが、本当によかった。これなら明日には大分落ち着いている筈だ。

”はあくよかった”

思わず座り込んでしまいそうになる。

”... さて、行かないや”

まだ、やることはある。休むのは後でいい。

——天幕を出て、神殿の方へ走り出す。

◇◇◇

王様は困っていました。

娘が提案した”自分に競争で勝つ”

そんなもの、直ぐに終わると思っていました。ですがいつまで経っても娘に勝てる男は現れません。

それもそのはず、彼女はギリシヤにおいて最も足の速い狩人なのですから。

時には大勢の男で挑ませました。時には妨害をさせました。時には……そのすべてを娘は打ち破り何日たっても勝者が出ることはなく、只々、男たちの死体の山が連なっていくばかりです。

「なぜだ、なぜだ！どうしてこうも思い通りにいかない!!」

王様は嘆きます。全て上手くいくはずだったのに、なぜ自分ばかり、アイツが悪い、なぜ従わない。そういった想いばかりが湧きおこります。

——その嘆きが届いたのでしよう

王様は再び神に縋りました。

「おお、神よ！女神アフロディーテよ！どうか、どうか私に神託を!!」
あるいは利用されたのかもしれないが——

『——いいでしょう、スコイネウス王。お前の願い聞き入れてあげます。』

おお！、と歓喜の声を上げます。まさか神から直接お言葉を聞けるとは思ってもみなかったのです。

ですが、

『でも、貴方、自分の顔よく見たことがあるのかしら？——私、醜いものは嫌いな』

王様は鏡をとって自分の鏡を見てみると、そこには、酷くやせ細り、頬もこけ、とても王族とは見えない容姿。他人の目に怯え、自身の存在意義すら見失い、王としても親としても価値はなく、ただ不気味な存在がそこには映っていました。

「どうか心配しないで頂戴。お前はただ、私の言う通りに動く人形になればいいのよ。幾ら醜い人形でもその価値程度はあるでしょう。」

目の前に女神がその御身を現します。全てを包み込むようなその

美貌。そしてのぞき込まれれば何も考えられなくなるほど美しい魔眼。

王様は段々と消えゆくその意識の中、思い浮かんだのは、娘の顔——ではなく、“これで私の願いは叶う”という歪んだ希望に満ちたものでした。

◇◇◇

”ザーザー”と雨が降り、雷鳴が響き渡る。いつの間にか天候が崩れたらしい。

神殿の中には怪しげな光がともり、二人の声のみが響く。

「あらあら、どうしたの？ そんなに睨んじゃ怖いわ」

”…… あれは貴女の仕業か？”

怒り、殺意、それらすべてを押し込めて冷静に問いかける。

アタランテのあの熱、ただの風邪なのではない。”呪い”、いや、もつとタチの悪いもの

女神は一瞬キョトンとしたものの、すぐに笑いながら答える

「ねえ、逆に聞きたいのだけど——私以外にいますか？」

聞くまでもなかった、この時間はなんて無駄だったのだろう。

隠していた殺意を？ き出しにし、女神に向かって走り出す。姿を黒い獣に変化させ、喉元に喰らいつかんと牙をむきだす。もう一度喰らってしまえばいいのだ、あの時のようにもう一度。

「相変らず野蠻なのね。でも——」

”ガキンツ”

喰らいついた、そのはずなのに！ はじかれる、何度噛みつきようがはじかれる！

女神は一步もそこを動かさず、ただこつちを嘲笑うように笑みを浮かべる。

「やっぱり弱ってるのでしょうか？ この程度の魔力障壁を破れないなんて笑っちゃう。」

クソツ、ギルめ、とんでもない置き土産をしてくれたものだ。ここ

まで弱体化しているなんて思わなかった。いくらなんでも罰には大きすぎる。

「これがあの『怪物』だなんて。ゼウスは聞いても信じないでしょうね、彼が一番あなたを恐れているのですもの」

最初から分かっていたということか。だが、なぜ？

「なにが目的？ 僕が狙いなら彼女は関係ないはずだ」

「ふふっ、それとこれは話が別なの。でもそうね、理由があるとしたら『気に入らなかつた』。ただそれだけよ

…は？ 気に入らなかつた？ それだけで、そんな理由で？

「何が純潔を守るよ。気取っちゃって、それを誇りに思っていることも、それに群がる男達も、それを美しいと思う貴方も、すべてが気に入らないわ。いい？ 世界で最も美しいのはこの私、女神アフロディーテなの。」

「……ああ、これはそういう存在なのだろう。決して分かり合うことはできない、そもそも『これ』とは価値基準が異なっているのだ。

「最初は黄金の林檎をポセイドンの孫に分け与え… 本当ならそれで終わるはずだったのけれど、あの子、林檎を盗まれたらしくって」

…あの日か。あんまりにも綺麗な林檎だったからつい魔が差した。あの青年には少し悪いことをしてしまったな。

成程成程、この状況は自業自得というわけか。まあいい、彼女が誰の物にもならないのならそれで

「そんな時に『怪物』、貴方を見つけたのよ。ええ、しかもあの女に恋をしているのでしょうか？」

時間の無駄だ。この場で殺されないということは、僕を排除する手段は今のところないのだろう。早く彼女の元へ戻ろう。

「しかも、あの呪いを解こうと必死になっちゃって、本当に健気ねえ」人の姿に戻り、出口の方へ足早く向かう。

「……でもこのままじゃあ、あの子は誰かの物になってしまうわよねえ？ それでもいいの？」

…足を止めてしまった。

耳を傾けてはいけない、振り向いてはいけない、決して惑わされて

はならない。

「ふふっ。ねえ、取引をしましょう。この黄金林檎を貴方に授けてあげる。その林檎であの子に勝ちなさい」
……？

女神が黄金色に輝く林檎を差し出してくる。

”なにが目的だ。そんなことしてお前になんの意味がある？”

「単純なことよ、私を楽しませなさいな。貴方がどんな風に結末を迎えるか、その瞬間を見てみたいのよ」

”……僕は死ぬつもりはない”

「何言ってるの？此処がどこだか分かっていて？ここは私たちオリュンポスの神が祝福する地、ギリシヤなのよ。貴方を恨む神々は山ほどこにいるわ……まあ、ほとんどの神はその姿を見るだけで逃げ出すでしょうけど」

差し出された林檎を凝視してしまう、目が離せない。

アタランテと競争したとしても僕が勝てる可能性は低い。それほどまでに彼女の速さは本物なのだ。

”……一つだけ聞きたいことがあるんだ”

「あらかしらう？」

”王は……スコイネウス王は親として、娘を愛していたの？”

もはや王は手遅れだ。あの生気を失った顔、女神の人形としての役割を果たしているに過ぎない。既に意思などないに等しいに違いない。

でも、親として、人として、愛情があってもいいではないか。でなければ、あまりにもアタランテが……

「——ぶっ」

”……”

「ぶっ、あーははははは！馬鹿じゃない？あのような男に？愛？そんなものあるわけないじゃない、アレはね自分の娘がいたことすらハナから忘れていたのよ？娘のことなんか子供を産む道具としか考えちゃいなかったわよ」

“ …… そう ”

怪物は林檎を乱暴に奪い取り、再び出口へと足を進める。

背後に響くは女神の笑い声

ただ、今は彼女のもとに急ぐことしか考えは浮かばなかった。

狩人と怪物 「汝」

最初は軟弱な男、という印象だった。

「汝は挑戦者ではないのか？」

“ち、違います。噂で聞いた君の姿を一目見たくて…その…”
それが彼との最初の会話。私の語気が荒かったのか、それとも目つきがアレだったのか。あたふたと答えるその姿を見て、変な奴だ、勝負に挑む度胸すらないのか等々と思つたのを覚えている。

所詮、挑戦してきた男たちと同じ、もう会うことなどないと、そう思っていた。

その次の日だったか、確か獲物を探していた時だと思う。珍しく見つけることが出来ず、今日の夕飯は諦めてしまおうと考えていた。

何時間か森をさまよつた頃だった、二頭の鹿が此方に駆けてくるのを見つけた。

一頭は何の変哲もない小鹿、だがもう一頭は別格だった。

黒く鮮やかなその美しい毛並み、雄々しいその角。

思わず見惚れてしまうと同時に、“何としても仕留めたい”、私の狩人魂に火が付いた、付いてしまった。

慎重に矢をつがえ、先ずは小鹿を狙う。シュツと放たれた矢は確かに小鹿の頭を貫いた。

“次はお前だ”と狙いをつけた瞬間、——凄まじい速さで“それは駆けだした”

私も足の速さには自信があるものの、森の中では鹿の方が一枚上手。こちらは木から木へ飛び移るに對し、あちらは縦横無尽に地を駆けている。何とか仕留めようと何本か矢を放つものの、右へ左へ避けられる。

だが、私にも狩人としての意地がある。あちらの回避地点を予測し矢を放つ。急所をとらえることはできないものの、着実に傷を与えていく。

おそらく血を流すぎたのであろう、確実に距離は縮まる。ここまでくれば確実に仕留められる、そう確信し脳天めがけて矢を放とうとし

た瞬間、

「えっ——」

有り得ない光景が目に入り、息を呑んだまま唾然としてしまった。確かに直前まで鹿の姿だったのだ。それが今はどうであろうか。

それは、一瞬にして姿を変化させ、黒き大鷹となり大空へと羽ばたいているのだ。

それを見上げる私の頭には一つの昔話が浮かんでいた。

——昔、狩人の仲間から聞いた話だ。

曰くそれは何にでも姿を変えられる。それは黒い怪物である。それを仕留めた者は英雄となる。

所詮、酒の席で聞いた話だ。酔っ払いの冗談だと聞き流していたが、今なら信じる事が出来る。

「(手を動かさせ、これは絶好のチャンスだ!!)」

止まっていた思考を動かし、空を飛び逃げようとする怪物に再び狙いを定める。

怪物は判断を二つ誤った。

一つは大鷹のではなく、もっと小さな物になればよかったのだ。それならば幾ら狩の名手であろうとも見逃していただろう。

もう一つは、わざわざ視界の悪い森から出てきたことだ。これなら、障害物を利用して矢を避けられることもない。

狙いを両翼定め、矢を放つ。

”——!?”

突然襲ってきた痛みに驚いたのだろう。ここからでも、その慌てようが手に取るように分かる。

止めと言わんばかりに、怪物に向け矢を放ち続ける。慢心はしない、今度こそ確実に仕留させて貰う。

最初はなんとか避けようとしたようだが、次々に矢が突き刺さっていく。

「その傷では羽ばたくのも難しかろう——墮ちろ」

その言葉とともに放たれた矢が心臓部を貫いた。

それが最後の決め手となった、力尽きたように、地へ向かって怪物

は堕ちていく。

「~~~~ツ!!」

達成感と喜びで体が打ち震えてしまう。

私が!この手で!あの怪物を仕留めたのだ!この興奮を抑えられるものか!!

アルテミス様にいい報告ができそうだ。父にも報告してあげようか、もしかしたら... などとくだらない考えが浮かぶが、いかんいかんと冷静になる。

まだ、死体を確認していない。これで逃げられてでもすれば滑稽にもほどがある。怪物堕ちたほうへ足を向ける。

「だが... あれの正体はどのような物なのであろうな」

きつとすさまじく醜悪なものに違いない。かつてのアルゴ―船の旅で遭遇したハルピュイアを思い出す。当時はあれほど醜悪なものに出会ったことはなく、暫く夢にまで出てきたほどだった。

「.....」

やはりやめておこうかと足を止めそうになる。が。仕留めた責任は自分にあるのだ、致し方なし。

「確かこの辺りに... む?これは血の跡か——ツ!」

それを見て、さっきまでの興奮は一気に冷めた。

そこにいたのは、怪物でもなく、醜悪なものでもなく

「どうして、どうして汝がいる!?!... まさか」

あの青年だった。

「(これがあの怪物の正体だとも?!)」

思考が追い付かない、様々な疑問で頭が割れそうになる。

“ぐっ——”ぷっ”

血を吐く青年の姿を見て我に返る

「っ!今はそんなことより手当てをしなければ!!」

そうだ、事情は後で聞けばよい。このままでは後味があまりにも悪

い、青年を肩で担ぎ、自分の天幕へと急ぐ。幸いそう遠くない。

◇◇◇

”やばっ、こ、転——ぐえっ”

怪我人のくせに動こうとして転びそうになっている馬鹿の襟首を掴んで引き戻してやる。

「はあ——なにをしているのだ汝は…」

“えっ！、あ、その、ありがとうございます？”

はあ、と心の中でため息をついてしまう

「(いったい何者なのだコイツは)」

あの後、青年に対し応急処置を施したものの、野生の中で学んだ知識のみで行ったので、このままでは今夜が山場かどうかの状況に陥った。

「くっ、アスクレピオスの処置をもう少し見ておくべきだったか」

だが、その心配も杞憂に終わった。

突然、青年の身体に刻まれた回路のような線が光り出す

「…これは、確か魔術回路だったか？」

以前、王女メディアが魔術を使う際に見たことがあった。魔術師にとっての疑似神経だとか、魔力の変換機だとか説明を受けた気がする。話を聞いてもあまり理解はできなかったが。

おそらくだが、自分の魔力を傷の治療にまわしているということだろう。事実、傷が少しずつ修復されていってる。

顔色も大分よくなっている。しばらくは様子を見ておくのが一番だろう。

「そういえば、小鹿も仕留めていたな…今のうちに取りに行つてこようか」

…そうして、帰って早々これだ

「全く…怪我人なのだから大人しくしている。」

無理矢理、床に寝かし傷の具合を確認する

“はわわわっわ”

… 驚いたり、照れたり、騒がしい奴だ。

とはいえ、傷もすつかり塞がっている。とても人間とは思えないほどの回復力。

「いったい何者なのだ汝は、あのように姿を変えたり、ただの人間ではあるまい？」

どうしても疑問がぬぐい切れず、問いかけてしまう。

あまり聞かれたくないことなのだろう、あんなに騒がしかった顔も血の気が引いたように青ざめている。

暫く悩んでいるそぶりを見せていたが、観念したのか、静かに口を開いた。

“人間だよ、ちよつとだけ魔術が使えるね”

嘘だ… とは言い切れない。随分とあっけらかんと答えたようだが、その目は真剣だ。

「私はあまり魔術に関して詳しいわけではない。だが、汝のそれは…」

”ぎゅるるる”

響き渡る、腹の音。

… この状況で？

「腹が空いているのか？」

” そういえば今日はまだ何も食べてなかったな、あははは… ”

その一言を聞き、何だか馬鹿らしくなってしまった。

外で焼いていた、小鹿の肉を差し出してやる。

「私の今日の獲物を分けてやる、それを食べて精をつけろ。」

そう言っ手渡すと、少しぎよつと顔をゆがめたが、直ぐにガツガツと肉を食べ始めた。

少しだけ、“黒い怪物”の話題を出したものの、

“えくく酔っ払いに退治されるのはちよつとなあ”

などと、冗談めいた答えを返された。結局、コイツの正体は分からないままだが、まあいいだろう。

暫く、観察するようにその様子を眺めていると、不思議に思ったの

だろう。首を傾げ何か言いたそうにしている

「汝の間抜け面を見ていると…ふっ、どうやら私の杞憂だったようだ」

「君ってその…案外ハッキリ言うタイプなんだね、あははは…はあ…」

そんな話をしているうちに、食べ終わったようだ。

「ありがとう、だいぶ元氣も出たしそろそろ自分の天幕に戻るよ」

…なぜもう動けるのだ、やはり人間ではないのでは？

「そうか…もう一度忠告するが用が済んだのならこの国を去れ。次にもし森で撃たれても文句は言えんぞ」

「あーうん、考えておくよ。じゃあね」

手を振り、帰っていく。こちらが手を振りかえすことはしなかった。

今度こそ、もう会うことはない。

ない…はずだったのに！

その次の日、いつものように狩から帰り、焚き火の準備をしている時だった。

「あ、おーい！」

聞き覚えのある声が後ろからする。

振り向けば、手に一杯の果実を持ち、笑顔でこちらに近づいてくる彼の姿。

「はあ…」

頭が痛くなる、何なのだった。

私は確かに、この地を去れと言ったはずなのだが。

「汝は…馬鹿なのか？」

「ええっ?!」

その日から、彼が毎日訪れてくるのが日常になった。

「今日はブドウを持ってきたんだ、よかつたら」

「いらん、去れ」

「え、」

次の日も

“今日はザクロを…”

「…（無言で矢を放つ）」

“ひええええ”

そのまた次の日も

“あれ？居ないのかな…”

「…（木の影に隠れている）」

“はあ… また明日来るか”

「何なのだ、まったく」

性懲りもなく私のもとを訪れてくる。それが何日続いたのだろうか。

ある日のこと、こちらもいい加減、我慢の限界がきた。

“今日はね、林檎を貰つ」「… ええい、寄越せ！」え、あ”

一度、食つてやれば満足するだろう。それに、林檎などに食べ飽きている、こんなくだらないもの…。

そう考え、少々乱暴に口に入れる。

「もぐっ———こ、これは！」

口いっぱい広がる甘美な味わい。噛めば噛むほど溢れてくる旨味。何なのだこれは、私が今まで食べた林檎は腐つてでもいたのか？一口食べるたびに身震いするほどの快感が全身を駆け巡る。噛むたびに溢れる果汁、とにかく甘い！思わずほっぺたが落ちそうになる。

口に運ぶ手が止まらない、あつという間に完食してしまう。

思わずもう一つ食べようと手が伸びてしまうが、ふと、視線に気づいた。

「…なんだ」

“ん？いや別にー。まだまだ沢山あるし、良ければ一緒に食べない？”

「…好きにしろ」

林檎につられたとか、断じてそういうわけではない、決して。

彼はどこか嬉しそうに私の隣に座って、話し始める。

“森にいる動物たちがね、美味しい果実が実っている場所を教えてください”

「モグモグモグモグ…（林檎を食べるのに夢中）」

“え、もしかして聞いてない?!”

“… そういえば、名前をまだ聞いていなかった。あちらは知っていて、こちらが知らないのは不公平だろう。”

「… 汝、名はなんという?」

“え、ああ、そういえば名乗ってなかったね。僕の名は——”

その日から、彼が何か持つてくるたびに、ともに食事をするようになった。始めは、話をただ聞いていることが多かったが、次第に私からも話題を振ることが増えていった。

“友達が美味しいものが実っているとところを教えてください”

「友達… それは森の動物たちのことか?」

“うん、他にもいろんなことを教えてくれるんだ。例えば天気の見分け方” 「人間の友達はいないのか?」 “… い、今はいない? かな、多分、うん”

少し揶揄ってやると、彼は子供ののような表情を見せる。その顔がなんだか面白くてつい笑ってしまう。

まあ、友達がいないのはどうなのか、少し哀れと思う。この様子なら友の一人や二人簡単に作れそうではあるのだが。

“で、でも子供には好かれるんだよ! たまに遊んだりするし…”

“子供” その言葉に反応してしまう。

「そうか、子供か… それはいいことだな」

“子供好きなの?”

無論だ。彼らが幸せに暮らすことが出来る世界を、私はいつも願っている。それが、どんなに難しいことか

「ああ、彼らの笑顔が好きだ。愛おしいと思う…」

子ども達の笑顔を思い浮かべると自然に笑みが浮かんでしまう。

“ならば、今度一緒近くの村に遊びに行こう! 子ども達も喜んでくれるよ!”

急に何か思いついたような顔すれば、そんなことを提案してくる。

「汝と…一緒にか？」

”うん！”

ああ、それはきつと楽しい日になるだろう。想像しなくても分かる。

だけど、

「…そうさな、それは楽しみだ」

ーきつと叶わない、私にそんな自由などないのだから。

◇◇◇

「アタランテ、いい加減父の言葉に従わぬか」

「申し訳ありません。ですが、これが私の信仰なのです。」

「そんなくだらない信仰など捨て置け！」

このような問答をするのも初めてではない。

数か月前だろうか、私のもとに一人の使者が来た。なんでも、父を名乗る者が私を呼んでいると。

嬉しかった、嬉しかったんだ。今まで親の顔すら知らなかったので

一目会いたいと常々思っていた。

私はすぐに父のもとに向かった。

「おお、アタランテ…会いたかったよ」

父は暖かく私を向かい入れ、温かい食事まで用意してくれた。

「そこでイアソンの奴が…」

「ほう、そうかそうか」

つい口が軽くなり、これまでの旅の話をしていった。嬉しかった、私のお話を楽しそうに聞いてくれて、それだけでも、もう満足だった。

話がひと段落ついた頃、父から一つの提案を出された

「お前を王女として迎え入れたい」

「本当ですか！」

今まで生きていて良かった。やっと家族と暮らすことが、

「———そこでお前に、婿を取ってもらいたい。」

「え…」

時間が止まった気がした。

ああ、結局のところそれが目的だったのだな

「で、でも、私はアルテミス様に誓いを…」

「だからどうした？子は黙って親に従うものであろう？」

「アタランテ…私の、父の頼みをどうか叶えてはくれぬか？」

肩に手が置かれる。

口調はこちらを諭すようなものだが、その目は濁り、自らの欲望に取りつかれている。

この男は、自分の父だというのに、“嫌悪”その感情が湧きおこる。「っ…なら条件があります」

この時点で、逃げ出していればよかったのだ。それができなかつたのは――

「私に走りで勝つこと。それでなければ結婚には応じません」
嬉しかったのだ、必要とされたことが

それから、求婚してくる男を打ち負かす日々が始まった。

私に足の速さで勝てる男など、ギリシヤ中探してもいないだろう。だから時間の無駄だ。だというのに日に日に参加者は増え続ける。どうやら、父が手をまわしているらしい、小賢しい男だ。

父は時折、私のもとを訪れては先程と同じようなことを繰り返す。まるでそれしか言えない人形のように。

「アタランテ、何のためにお前を呼び寄せたと思っている！」

だが今日は少し状況が違った。いつもは一人で来るのだが、今日は一人の女性を連れてくる。顔はよくわからないが…

「お帰り下さい。貴方と話すことはない」

「お、おのれ…！」

いつもならこれで終わりなのだが

『あらあら、父に対して随分厳しいのね』

「…何者だ？」

『あなたに名乗る気はないわ。それ、よ、り、も、やっぱり、貴方気

に食わないわね』

女性がこちらに手をかざし、なにか呪文のようなものを唱えだす
いったい何のつもりだ!と抵抗しようとした瞬間、

「あれ…!」

突然、力が抜け、ガクツと膝をついてしまう。身体が燃えるように
熱くなり呼吸をするのも辛くなってくる。

「はあ… はあ… な、なに… を」

『せいぜい苦しみなさいな。さてそろそろ戻りましょう』

何か言っているようだが、もうよく分からない。
ドサツと床に倒れ込む。

既に二人は立ち去っており、この場は私一人。

「…っ… ふう… ふう」

このまま、死んでしまうのだろうかと覚悟した。

“アタランテ… いる?”

声が聞こえた。

”大丈夫?!なんだ… この熱”

誰か来たらしい。

意識がハッキリしないのでよくわからない

「…だ… だ、だれか…!」

思わず、手を伸ばしてしまう。

コレは幻かもしれない。もしかしたら誰も手を掴んでくれないか
もしれない。

”…っ!”

——でも、しっかりと手は握られた。

その手の温もりに安心した。

意識を手放す瞬間、目にしたのは、心配そうにこちらを覗き込む彼の
顔だった。

◇◇◇

「…ん、うる、さい…!」

雨が天幕にあたる音で目を覚ます。

どれほどの時間が経ったのだろう

「身体が軽い…」

あれほど、辛かった身体が嘘みたいだ。

なんだか、以前よりも力が湧いてくる、今にも走り出してしまいうな。

”すう… すう… すう…”

!?!?

横を見ると、座りながら寝ている彼を見つけた。

服もびしょ濡れのままで、完全に疲れ切ってしまったのだろう。

「… 汝はどうしてそこまで、私に構う」

答えは返ってこない。

ここまで、看病してくれたのも彼であろう。

でも、私には理由が分からない。

所詮、他人でしかない、それなのに何故

” んん… アタ… ランテ”

「!?!?… … 寝言か」

今はただ感謝しよう。

彼は紛れもなく、私を救ってくれたのだ

「ありがとう、”メラニオス」」

初めて彼の名を呼ぶ。

「… 意外と気恥ずかしいものだな」

そうして、再び眠りにつくのだった。

◇◇◇

「(えー！今！名前呼んでくれた!?!?)」

当の本人は名前を呼んで貰えたことに大興奮であった。

狩人と怪物 「貴方の旅路に呪いあれ」

相変わらず、土砂降りが続いている。この様子では夜まで止むかどうかといったところか。

『ありがとう、”メラニオス”』

「~~~~~!!」

一方、メラニオスは、いまだに喜びで眠れなかった。体力的にも精神的にも、すでに限界を超えていたが、アタランテの一言でそのすべてが吹っ飛んだのだ。

「すう… すう… すう…」

隣にはアタランテが眠っており、寝息を立てている。

その寝顔を見るたび、心臓が高鳴るのだ。

「(寝顔が可愛いというか、美しいというか… ご馳走様です!)」
何度もちらちらと見てしまう。

もう少し、近くで見てもいいかなと身体を近づけようとした、が

「… (目を開けこちらを見ているアタランテ)」

「… (まさか起きてるとは思わず固まるメラニオス)」
欲をかいたのが仇となった。

意図せず、見つめあう二人。この状況でなければ踊りだしたいものだ

「… 私の顔はそんなに面白いか？」

「えっ?!… いやーそのー、お、おはようございます？」

「… ああ、おはよう… 汝は眠れたのか」

「えっ、うん、バツチリ！」

無論、嘘である。

「… 礼を言わなければならないな」

一言二言、言葉を交わした後、少し気まずそうな感じでアタランテは頭を下げる。

「お互い様だよ。僕も君に助けってもらったし」

「… そうか」

そう言った後、こちらに背を向け黙ってしまった。

「… 気まずい沈黙が続く。こういつた空気は苦手だ、思わず逃げ出したくなる。何か、話題はないものかな」

「… どうやって、この呪いを解いたのだ？」

それはあちらも同じだったようで。

さて、どう答えたものか。懐にある林檎を握りながら考える。

「ん〜内緒！」

やはりごまかしてしまう。林檎のことをあまり知られたくないのだ。

「… 汝は隠し事ばかりだな」

こちらからは顔が見えないので、どのような表情なのかわからない。

そうだ。僕は結局のところ彼女に、本当のことを何一つ話していない。

「隠し事する人は… 嫌い？」

嫌われたくないんだ。ただそばにいたい、それだけだ、それだけなんだ。一人になりたくない、そばにいてほしい。

それは孤独感によるものなのか、それとも独占欲なのか。

「隠し事や、卑怯な手を使う者は、あまり好かん」

「… そっかあ」

やっぱりダメかと、絶望的な雰囲気醸し出しながら答える。本当のことを話せばどうなるのだろう。彼女はそれでも笑ってくれるかな、隣にいてくれるのかな

「——ふふっ、そんな顔をするなメラニオス」

彼女は微笑を浮かべこちらを振り向く。

「人は誰しも言いたくないことの二つや三つあるものだ。私もそうだが、言えないことなどたくさんある。汝が言いたくないのであればそれでいいんだ… 私を助けてくれたことに変わりはないのだからな」

僕の頭を撫でながら「ありがとう」と、そう言ってくれる。

——『ありがとう、愛してるわ。私の愛しい息子』
遠い記憶が呼び起こされた。優しい声だ、そして懐かしい。しかし、これが誰の声なのかはわからない。

けれども胸の奥が熱くなり、目からは今にも何かがあふれ出しそうになる。

「あれ?… なんてかな、止まらないや」

ぽたぽたと目から流れ落ちる涙。流がすのは何百年ぶりだろうか。拭っても、拭っても、それは流れ続ける。

別に悲しいわけではない、ただ「ありがとう」と言われただけ、それなのになぜ。

——なぜこんなにも心が苦しいのだろうか

「なぜ汝が泣くのだ、まったく…」

アタランテはメラニオスをそっと抱き寄せ、胸を貸す。

訳も分からず泣き続ける彼を、黙って見守る。

「今は少し休め… 私にはこれぐらいしかできない」

◇◇◇

どうやら、雨は止んだようだ。空には満天の星空が広がる

「もう、大丈夫なのか」

アタランテが心配したように声をかけてくる。

随分と恥ずかしいものを見てしまった。泣き顔を見られることすら情けないというのに、幼子のように抱きしめられては、恥ずかしいやらなんやらだ。今後、まともに顔を見れない気がする。

「うん、ありがとう。だいぶ憑き物が落ちたみたい」

事実、心はだいぶ楽になった。結局のところ、あの声が誰なのかはわからない。でもいいのだ、今はこれでいい。彼女と過ごすこの時間を噛み締めていこう。

二人は共に星空を見上げる。空は雲一つなく、星を見るのなら絶好の日だ。

「あ、ほら見て流れ星だ」

メラニオスは空に向かい指をさす。それに目を向けると、きれいな

尾を引いた流れ星が見えた。一つや二つどころではない、それは、まるで星空が泣いているように次々と降ってくる

「これは… 素晴らしいな。これ程のものは初めて目にする」

二人は目を輝かせ星空に魅入る。今、この時間だけは二人で同じものを共有できている、それは何よりも喜ばしいことだった。

「そういえば、願い事をしなきゃ」

「願い事… 流れ星にか？」

彼は手を握り、流れる星に祈りをささげる。

「昔、旅先で聞いてね。星の光が消えるまでに願い事を心の中で祈ると叶うんだってさ。何だか幻想的だと思わない？」

メラニオス^{怪物}が何かに祈ることは滅多にない。神に向かって祈ろうものなら、空からは轟雷が、雨が、矢が降り注がれる。それほどまでに神々は彼を恐れ、怒りを向けるのだ。

しかし、星々は違う。どんな時でも明るく照らしてくれる。たとえその手が血に塗れようと、別れに涙しているときも、常に見守っていてくれた。だからこそ祈れるのだ、「明日も生きれるように」とだが今日ばかりは違った。いつもは、ただ感謝を祈るだけであったが

「(いつまでもアタランテが笑顔でいられますように！アタランテが幸せでいられますように！アタランテと… ええっと… ご飯を食べられますように！それから、それから…)」

実に欲望に忠実だった。

アタランテはというと、ただ静かに祈っていた。その姿は美しいもので、メラニオスも祈りを中断し見惚れてしまうほどであった。

「… 何を願ったの？」

「そうさな、こゝだ… いや、ふふつ——内緒だ」

口到人差し指を当て、お茶目にそう答える。その姿は『んくく内緒！』と自分をごまかした時と重なった。

「——ふふつ、あはははは」

お互いの顔を見ながら笑いあう。なんて幸せなんだろう、そうだ、僕はこの笑顔を見るために生きてきたんだ。



さて、楽しい時間はいったん終わり。

——『単純なことよ、私を楽しませなさいな。貴方がどんな風に結末を迎えるか、その瞬間を見てみたいのよ』

別に言う通りにするわけではない。ただ、確認というか、覚悟を示したい。

「君の父上に会ったよ」

「そうか」

「結構、傲慢な人だったよ」

「そうだな・・・初めて会った時からそうだった」

感情のこもっていない声。僕がこれからいうことを知っているのだろう。

「君は父上に・・・きつと・・・」

“愛されていない”その言葉を紡げない。でも、彼女は理解しているのだ

「“愛されてない”か・・・そうであろうな、分かっているさ」

「ツ・・・！分かっているなら何で、何で、従い続けるんだ！」

逃げ出してしまうばい、投げ出せばいい、彼女にはその資格がある。これは八つ当たりに近い。「逃げたい、助けて」、それを言ってくれのであれば直ぐにでも行動に移せるというのに。

「どうしてだろうな・・・家族だからかな。あれでも私の・・・血の繋がった、たった一人の家族、親なんだ」

メラニオス^{怪物}はその思いを理解できない。根本的に無理なのである、“彼”自身には親、ひいては本当の家族と過ごした記憶などない。だから分からない、子が親を思う気持ちなど。その愛が決して満たされ

ることがないことも。

「父から、私に勝負を挑めとでも言われたか？」

「…直接的にってわけじゃないけど」

実際、あの男ではなく女神から言われた事ではある。

「やめておけ。汝は私には勝てない」

それは確信めいたものだろう。彼女の足の速さにかなう“英雄”
など今まで現れなかったのだから

「やってみなくちゃ分からない」

「姿でも変えるのか？やめろ、人でない姿になろうものなら、周りのものに反感を買いどんなことをされるか…」

別にそれでもいい、どんなことを言われようと、何はともあれ勝てばいいのだ。でも、それを彼女は望んでいないだろう。だから、その選択はしない。

「大丈夫、僕は人として勝負を挑むよ」

「なぜっ!!… 私は、お前を」

“殺したくない”、それがアタランテの本心。たった数日の関係、それでも彼女にとってメラニオスは、『生きてほしい』、そう心から思えるほどの存在となった。

「それは… 僕は君を——」

愛している、愛して、愛して愛して、愛している。

君を… 君が、大切な人だから」

「だから、君を手に入れてみせる」

どんな手を使っても、と懐にしまっている林檎を握りしめる。

「… 愚か者」

——ただ、幸せに生きてほしい。自分なんか気にせず、貴方な
らもつといい人と出会えるはず。

その思いは彼には伝わらない。その言葉では彼を救えない。

それで会話は終わり。もはや言うべきことはない、互いに背を向け、いるべき場所へと帰る。

「僕は、必ず…君に勝ってみせる」

その言葉に応える者はおらず、ただ静かに響き渡るだけだった。

◇◇◇

最初から気づくべきだった

「あれ程忠告したにもかかわらず、それでも私に挑むのか」

なぜ周りを囲む者たちが武器を持っているのか、なぜその者たちが獲物を狙う目をしているのか

「言つたら、君を手に入れてみせるって」

全ては女神の手のひらの上ということ

「…加減はせん。全力でこい」

「言われなくとも」

スタートの合図が鳴り響く。

相も変わらず、アタランテは少し遅れてから走り出し、メラニオスの後を追う形となる。

しかし、二人の距離はどんどん近づいていく、もとよりハンデなどないに等しいのだ。

『林檎を後ろに投げなさいな、そうすれば彼女は足を止めるわ』

頭に声が響く、そうだ、そうすればいいんだ。
懐に手を入れ林檎を掴む、後はこれを――

“隠し事や、卑怯な手を使う者は、あまり好かん”

「あつ――」

駄目だ、できない。林檎を投げれない。
これで勝つても、彼女の笑顔は見れない。

ゴールまであと半分といったところでメラニオスは追い抜かれる。
彼女が後ろを振り返ることはなく、ただいつも通り走り抜ける。

「(僕自身の力で勝たなきや意味がない)」

だからと言って諦める？ 勿論、否だ！

今の今まで彼女に敵う“英雄”は現れなかった。無論、彼も”英雄”
ではない。

『私に力を 私は地を駆け 森を駆け 風となる』

全ての魔力回路を起動。全魔力を駆け抜けるためのブースターと
して放出させる。

それでも勝てるか五分五分といったところか。だがそれでいい、彼
女の隣に並ぶことはできる。さあ、足がもげようと走り続けよう、そ
の覚悟はできているのだから。

「――うおおおおおつ！」

「つ！… メラニオス?!」

背後から吹っ飛んでくる者に驚くアタランテ。それもそのはず、今
まで彼女に追い越された者は皆、諦めるか、逃げ出すかの二択だった。

だがメラニオス^{怪物}は違った。彼はその背中を追う、自分自身の力で、全力で。強化された身体能力によりグングン差を詰めていく。

——ゴールまであと数十メートル、ついに彼女の隣に並ぶ

アタランテは追うことはあっても追われることなどなかった。だからこそ負けられない、俊足の狩人としての意地がある。それがたとえ己が愛する男でも。

——ゴールまであと数十歩、残るは猛烈なデットヒート、二人は必死の形相でゴールを目指す

「あと一歩、あと一歩前に出なければ、勝てない」
ならばどうするか、まあ、答えは決まっているのだけでも。

“ 敢えて魔力を暴走させる ”

勿論、彼女を巻き込まないように小規模にはあるが。

“ B O M ”

メラニオスの身体が小さな爆発を起こし、ゴール直前に前に吹っ飛ばす。

必死に、がむしやらに走り抜けた。誰一人、たどり着くことなかったゴールに、彼はたどり着いた。ずぎざいと、頭から突っ込む形とはなったものの、それは確かに記録に残った。

「ゴホツゴホツ… かつこ悪いなあ… もう」

それでもいいとメラニオスと思う。勝たなければならない、それは勿論そう。でも、どんなに無様でも、彼女と並び走れたことが何よりも喜ばしいことなのだ。

アタランテがこちらに歩いてくる。

「… 無茶をする」

「あはは… 絶対に勝つって言ったろう？」

「そうだな… お前の勝ちだメラニオス」

手が差し伸べられる。

ああ、言わなくちゃ。今まで言葉にできなかつたけれど、今ここでいうのがふさわしい、そうに違いない。

手を取り立ち上がる。彼女に向かいあい、僕は口にする。

「僕は… 君のことを——」

『——今よ！矢を放ちなさい』

愛し〜——ゴフツ」

突き刺さる、一本の矢。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

沸き立つ観衆。それに呼応してか次々と矢の雨が二人に降り注ぐ。

「ああ… そうか、最初からそういうつもりか。」

メラニオスはアタランテを引き寄せ、庇うように抱きしめる。それでは守り切れないと巨大な翼を自分たちを包み込むように展開する。それでもなお、矢の雨は降りそそぐ。

「お、おい。いいのか？アタランテごと撃つちまつても？」

「ああ？知らねえよそんなの。あの怪物を退治すれば、この国の王にしてやるって」アフロディーテ”様から直々の神託だぞ。へっ、それによお——王になれば、あの程度の女、いくらでも抱き放題だぜ？」
「そ、それもそうだな。競争に勝つより、こっちのほうがいってもんだもん!!」

「おい！早く矢を持ってこい!!あいつを殺し続けろ!!」

「へへっ、この槍もぶん投げちまおう！」

「おい！翼じゃねえ胴体だ！胴体を狙え!!」

男たちは矢を放ち続ける。誰もかれもが、チャンスを狙い続ける。あの怪物を退治すれば王になれるのだ。誰もが最後の一撃をお見舞いする、その瞬間を今か今かと待ちわびる。

アタランテは自分をかばい続けるメラニオスを前に何もできない。何が起きているのか、理解するにはそう時間はかからなかった。

やはり、彼が黒き怪物だったのだ。自分は怪物退治に利用されたのだろう。だが、そんなことどうでもよかった。数百もの矢を受け、いまだ自分をかばい続ける彼のことが何より心配だった。“もういい、私を置いて逃げてくれ”と、胸の中で訴え続けるのだった

その光景を見下ろす神が二柱

一柱は女神アフロディーテ。楽しそうにその光景を眺めている

もう一柱は羊飼いの神“アポロン”。アフロディーテにお願いされて仕方なく手伝っている

『アハハ！見なさいよアポロン！あの無様なさま！私の言う通りにしないからよ！』

『ああ、勿体ないなあ。私が神じゃなかったら、絶対に手を出していただけどなあ』

『…それはアタランテのことかしら？それとも、怪物…いえ、今はメラニオスと名乗っているらしいわね』

『どちらもさ。でも、アタランテちゃんはアルテミスの信者だし、メラニオス君は立場的にね』

『…相変わらずの好色家ね、人の形をしていればなんでもいいのかしら』

『それは心外だなあ。まあ、君を抱ける権利を貰えたんだ、それぐらいは許容しようじゃないか』

アフロディーテ単独ではここまで行えなかったので予言の神としての側面を持つアポロンに協力を仰いだ。その代わりに自らを抱く権利を与えたのだ。

だが、アポロンは内心めんどくさがっていた。

“怪物”を殺して見せる。それを聞いたときは、何を寝言を抜かしているのだと考えた。理由を聞いたら、“私を見てもあの怪物は表情

一つ変えなかったわ。美の女神たる私を見たのによ!!」だと

それは当たり前なのだ、神や人間がアフロディーテを美しいと思うなら、その真逆の存在である彼が好ましく思うわけがないのだ。むしろ嫌悪したに違いない。そもそも、価値基準が違うのだから。

それに、アポロンは他の神々ほど怪物を恨んでいるわけではなかった。殺したいという気持ちは確かにある。だが、機神としての身体を失ったことで、こうして色々な人間と関わることができるのだ、その点は感謝している。

いつか、お礼という名の復讐をしてやろうと思うほどに

『でも、これは上手くないかないんじゃない?』

『はあ? どういうことよ、アレは不死身ってわけじゃないでしょう? 矢を撃ち続けていればいずれ死ぬわ』

『あー誤解しているようだね。確かに彼は不死身ではない。だけど、我々神や普通の人間では殺せないんだよ。彼はね——英雄にしか殺せないんだ』

“それに”と、笑いながら指をさす

『彼ら、我慢できなくて、突っ込んでやっているよ』

『——っ!!あのバカ共!』



『もういい!メラニオス!私を置いて逃げろ!』

『…ぐっ… そういうわけにはいかないなあ…』

何百本の矢が突き刺さりながらもしっかりと抱きしめアタランテを離さない。既に広げた両翼はボロボロになり限界が近づいている。

「ごめんね…ごめんね…」

最初から間違えていたのだ。僕と関わらなければ巻き込まずに済んだのに、本当に申し訳ないな。

「もういい… もういいから… お願い…」

アタランテ、アタランテ、アタランテ、愛してごめんなさい、欲し

「やあ！メラニオス君、いや、黒き怪物といった方がいかな？」
何か声が掛けてきた。

「アハハ、そんなに睨まない、睨まない。私は君に危害を加える気はないよ、少なくとも今はね」

「なに、おまえ、なんようがある？」

誰かは分からないが、邪魔をするのなら食べてやろう

「早くその子を抱えて逃げたほうがいいよ。アフロディーテが結構怒っていてねえ。追手が来ちやうかもね」

腕に抱く女に目を向ける。寝息をたて眠っている。こうしてみると、ただのあどけない少女。

・・・そうだ、

自由にしてあげるんだ。だって、アタランテはお姫様のように煌びやかにいるよりも、森を、大地を駆けている方が美しいと思うから

メラニオスはふらふらと森の方へ歩き出す。腕にはしっかりと愛する人アタランテを抱えている。

「——君の旅路に祝福あれ——ふふふつ、私たちはいつでも君を見守っているよ」



日が暮れたのか、少し寒くなってきた。

ただ、腕の中で眠るこの少女の体温のみが僕の身体を温めている。

「・・・んっ・・・んっはっ..」

アタランテは歩く振動で目が覚めたようだ。きよろきよるとあたりを見まわしている

「あ、おはよう。起こしちゃったね」

「メラニオス！よかった無事だったのだな...」

彼女は嬉しそうに声を上げ、そして気づいた。自分が両腕で胴と脚を抱えられ。いわゆるお姫様抱っこをされていることに

「お、降ろしてくれ...その、恥ずかしい」

「可愛い（ごめん、すぐおろすよ）」

「な?!」

赤面するアタランテ。

もう少し見ていたかったが、流石にそろそろ噛みつかれそうなので地面に降ろす。

彼女は僕の身体を見ると悲痛な表情をする。そんな顔であれば見たくなかったんだけどな。

「… 酷い傷だな」

「なーに、唾でもつけとけば治るよ」

今の僕の姿は酷いものだろう。あらゆる場所に切り傷や矢で貫かれた痕がある。まあ、じきに完治するだろう。

「… 此処はどこだ?」

「うーん、森を抜けて… 出鱈目に歩いたからよく分かんないや、ごめんね」

「そうか… 汝はこれからどうするのだ」

「また、旅にでるよ。神様に目をつけられちゃったみたいだし… だから、君とはこれでお別れだ」

「…」

何も言ってくれない。ううん、それでいいんだ。

「君は自由に生きていいんだ。父に縛られることはない、お節介だったかもしれないけど」

「だから、バイバイ。またいつかね」

せめて最後は笑顔で!

そう告げ、背を向けて歩き出す。

これでよかったんだ。僕は彼女が幸せで生きてくれたらそれでいい。でも、他の男の人といったら妬いちゃうかもな――

「――まして、

腕を掴まれる。

アタランテが腕を掴んでる。

此方を見上げてる。僕を見ている。

私も共に行く。汝と共にだ」

「どうして…見ただろう？僕は君が言っていた通り”怪物”だ。物語で語られた通り、醜い怪物だ。君を巻き込みたくない。今日みに殺されるかもしれない。君を不幸にしたくないんだ」

それに、また、人間を殺してしまうかもしれない。あの姿を見たら、君はどんな顔するのだろう

「構わん。私はこれでも数々の冒険をしてきたんだ、今更というやつだ」

「でもっ」「ーメラニオス。汝は私に勝つたのだ」…え」

「汝は言ったな、”私に勝って手に入れてみせる”と。それを投げ出すのか？」

確かに言った。でも、君を失いたくない。巻き込みたくない。自分なんかほっという幸せに生きていってほしい。

「それにだ。汝は、私のーー大切な人だからな」

そうやって笑顔で手を差し伸べてくれる。

その姿は月明かりに照らされとても神秘的な光景だった。

恐る、恐る、手を伸ばす

”ダメだ”

手を握ってしまふ

”きつと不幸にする”

彼女が握り返してくれる

”後悔する”

それでも僕はーー彼女が欲しい

「私に勝つたのだ。その責任、取ってもらおうぞ」

「ああ… 勿論！」

思わず抱きついてしまふ。アタランテはまた顔を赤くさせあたふたとしている。

本当に可愛い、好きだ。

「お、おい☒わ、私はアルテミス様に純潔の誓いを… まったく、汝は

困ったやつだな、もう」

” ああ、僕はこんなにも幸せでいいのかしら”

狩人と怪物 「幸せ」

——この時間がいつまでも続けばいいのに——

「お姉ちゃーん！早く早くー！」

「こら、そんなに走ると危ないぞ」

走っていく子供たちを追いかけながらそんなことを思った。

◇◇◇

私たちは追手から逃れるため、あてもなく各地をさまよっていた。辛かったことばかりという訳ではない。旅の途中、森で一緒に狩りをすることもあったし（彼は何一つ仕留めることはできなかったが）、時には共に水浴びをしたり（一度もこちらを見てくれなかった）、星を眺めたり（どちらかという彼の顔ばかり眺めてた気がする）、幾度となく共に楽しみを分かち合った。

私はこの時間が何よりも愛おしく思った。

…でも、彼はどうだったのだろうか、ふと思ってしまう。どこか私に対して遠慮している気がするのだ。近くに行こうとすると顔を赤らめ何かと理由をつけて離れてしまう…。誓いに触れない程度であれば触れてくれてもかまわないのにな。

◇

旅を始めて幾ばくかの年月が経った頃、一つの村に立ち寄った。

その村は小さな村で、村人は数百人にも満たないほどだった。だが、一つの問題を抱えていた。

飢餓だ

こここのところ、雨も降らず農作物が育たない。水不足と飢えに苦しみ、誰もが生きる気力をなくしている。既に餓死者が出始め、村人の全滅も目に見えていた。

別に、この時代では珍しい話ではない。これも自然の摂理の一つ、わざわざ関わる理由もない。そうやって私たちは村を離れようとした、

——ま、待って。お願い、助けて

後ろで今にも消えそうな声が聞こえ、なにかに手を掴まれた赤子を抱えた少女が、袖を掴み縋ってくる

——妹だけでもいいから、助けてえ

体は骨が浮き出るほどにやせ細り、立っているのもやっとだろう。抱えた赤子も鳴き声すらあげられないほど衰弱している。

メラニオスはすぐさま姿を変え、食糧の確保のため飛び去った。“
小一時間で戻ってくる、それまでその子たちをお願い！”　そう言い残し。

私は急いで二人を抱えて、村の中の少女たちの家に向かう。扉を開けてみれば、大人二人の死体が転がっている。思わず鼻を曲げてしまふほどの腐敗臭、死後からかなりの日数が立っているらしい。だが、今は気にしている場合ではない。手持ちの果実をすりつぶし、赤子に啜えさせる。少女にも、あまりの果実を渡すと、勢いよく貪り始める。いったい何日間、口にしていなかったのだろうか。

ひとまず、この二人は大丈夫だろう。

“メラニオスはまだ戻らない”

ふと、外を見る。大勢の村人がこちらを覗き込んでいる。

——お願いします。私たちにも

——うちの子もお願い、もう何日も食べてないの

——お母さんがあ、お母さんが死んじゃいそうなの。お願い、お願いします

「な、汝ら、落ち着け。今、私の夫が食料を取りに行っている。だからもう少し、

——もう、なんでもいいんだ。

——口に入れれるなら何でも

——その赤子でもいい。頼む、ワシらを救ってくれ

——救ってくれ、救ってくれ、救ってくれ、救ってくれ、救って
くれ、救ってくれ、救ってくれ、救ってくれ、

落ち着けと言っているだろう！おい、その子から手を離せ!!」

幼子やその母親、老人、その者らがアタランテに縋ってくる。彼女にはどうすることもできない。村人たちの目は狂気に染まりかけており、ここを離ればこの子たちが無事に済まないだろう。

「私では汝らを救うことはできない…。すまないっ」

あれ程子供たちを救いたいと願っておきながらこのぎまだ。私は、無力だ、何一つ救うことすらできない。視界が涙で滲んでしまう、いけない、彼が戻るまでしつかりしなくてはならないのに
縋りつく子供のその手を握ってやることしか…

「——もう大丈夫だよ」

優しい声でした

「ちよつと時間がかかったけど、ほら」

かご一杯の果実と、巨大な猪をもって

「ははっ、猪を仕留めるのに苦労しちゃって、やっぱり君の様にはいけないね」

そこにいた、いてくれた

「さあ、立ってアタランテ。君は肉を、僕は果実を配って回るから」

私の——

◇

「ありがとうございます。ありがとうございます。」

「そんなに焦らなくてもたくさんあるからね。はい、次の人どうぞー」

「おいしー——い！お兄ちゃん、お姉ちゃんありがとう！」

私たちは村人全員にいきわたるように食料を配っていった。皆、安堵の表情をしており口々に感謝を述べる。

「あんたたちには何とお礼を言ったらいいか、ありがとう」

「礼なら、彼… メラニオスに言ってあげてください。私は何も…」

何もできなかつた。私だけでは何も

「いえいえ、貴方たちが見捨てていれば、この村は全滅していました。我々がこうして生きているはあなた方のおかげなのですよ」

村人たちからは沢山の感謝の言葉を貰った。子供達も元気を幾ばくか取り戻したようで、家族と一緒に笑う姿も見られる。

・・・ そうですね、あの子たちはどうしたんだろう、暫く姿が見えない。あの子たちの家に向かうとしよう

「おや、寝ているのか・・・」

すやすやと、可愛い寝顔で二人は眠っていた。よかつたと安堵の息を漏らす。

「——お疲れ様、アタランテ」

「ひゃっ・・・ う、後ろから急に声をかけるな！驚いてしまっだろう」

突然後ろから声をかけられてしまい思わず変な声を出してしまった。当の本人は、珍しいものを見たと笑っている。少しその顔に怒りが湧くものの、同時に安心感も湧いてくる。

「あはははっ、ごめん、ごめん。さっきまで働きっぱなしだったからご飯食べてないだろう？」

そういえばそうだった。夢中になっていて気が付かなかつたみたいだ。

余った肉と果実が今日の夕食、いつもと変わらぬ光景。

それを食べながら、私は言葉を零す

「・・・ 私は何もできなかつた。汝を待つことしかできなかつた。あれ程、子供たちを救いたいなどと言っておきながら・・・」

後ろで眠っている子供たちも彼が来てくれなかつたらどうなっていたことやら。

しかし、本来ならこの子の親たちも一緒に寝ているはずなのだ・・・ もう少し早く訪れていればあるいは救えたのかもしれない。この子たちはこれからどうするのだろうか、二人だけで生きていけるのだろうか

「私は、無力だ」

いくら狩りがうまかろうが、足が速かろうが、私では
「子供たちが、愛される未来など私などでは——」

メラニオスは静かに私を抱きしめる。それを拒むことは決してない。

何も言わず、落ち着かせるように頭を撫でてくれる。悲痛に満ちた自身の顔を隠すよう彼の胸に埋めながら、それを受け入れる。

この胸の鼓動が私を落ち着かしてくる。

「… 僕一人だったら、ここまでしたか分からないだろうね」

嘘だ。汝はきつと手を差し伸べていた。そういうものなのだ、知っている。この数年の旅でメラニオスという存在を常に見てきたのだから

「僕は君が居てくれたから安心して飛べたんだよ。君のおかげなんだ」

顔をさらに埋める。こんな顔、見られたくない

「君は彼らを見捨てなかった。それでいいんだ、何も一人で解決しようなんてしないでいい。今君ができる精一杯のことをやればいいんだよ、今までだってそうしてきたじゃないか」

「だからその夢をあきらめないで。前を向いて歩こう一緒に、ね」

たとえ、叶わぬ夢だとしても

「そう だな、汝と共になら、きつと…… もう少し強く抱いてくれ。今は…… そういう気分だ」

今はただ、その体温が愛おしかった。



「昨日は本当にありがとう。あなた方のおかげで、皆が死なずに済みました。」

年老いた老人が頭を下げる。この村の村長だという。

「…ワシらは、人として間違うところじゃった。何とお礼したらいいか」

そんなに頭を下げなくてもいいと、メラニオスは声をかける。自分たちはたまたま通りかかっただけで、そこまでたいそうなことはしていない。

「飢餓で苦しみながらも、何とか女、子供は生かそうと頑張ってきたが… 情けないのお、結局ここまで追い込まれ、若者を苦しめ、老いぼれはワシだけが生き残ってしまった」

この村に残るのは、若い衆、子供、そして最年長の村長のみ。親たちは、子供たちのために自分の分の食糧を分け与え真つ先に死んでいった。そして、村を出たり、遠くの方へ食糧を探しに行った者は帰ってこないのだという。

「今は貰った食糧で何とかなつとるが… まだ、水不足の問題があるのです」

すでに村の井戸は枯れはて、近くの川の水は干上がっている。農作物は育たず、ただ飢えるのを待つのみ

こればかりはどうしようもないのだ。自然界は時に牙をむく。この時期は雨の量が少なく、ここらいったいも同じような状況だろう。私たちができるのはここまでだ。食糧を集めることはできても、水を作り出すことはできない。魔術を使っても限度というものがある。

メラニオスの方を見る。なにか考え込んでいるようだが、

「——雨を降らせればいいんですね？」

「そ、それはそうじゃがあ…」

無茶だ、いくら彼でもできないことぐらいはある。

「僕が降らすわけじゃない。”降らせてもらうんだよ”」

「… できるのですか？ ですが、貴方にそこまでやっていただくわけには」

「あまり期待はしないでください。それに…」

彼は私を見つめながら宣言する。

「子供たちの苦しむ姿を、僕たちは見たくないから」



村人たちには家で待機してもらい、私たちは少し離れた場所にある神殿へと向かっていた。

「君までついてこなくてもいいのに。あの子たちといてもよかつたんだよ？」

「汝ひとりにしては何をしでかすか分からんからな…。そ、それに汝は私の、お、おと、おとt…くっ」

「(いぎ、言葉にしようとするど恥ずかしくてできぬ。他人の前では堂々と言えるのにつ!)」

二人は”夫婦”と呼べるほどの関係ではなかった。どちらかと言うと、初々しい恋人同士である。

本来あるはずだった婚姻の儀式も台無しになり飛び出してきたので、メラニオスには”夫”と”妻”という自覚がないに等しい。

彼女に辛い思いをさせてしまったという負い目から”愛すべき存在ではあるが、自分なんかより、自由に生きて欲しい”という思いある。

まだまだ、アタランテの苦難は続きそうだ。

「ぶつぶつぶつぶつぶつぶ」

「…?」

まあ、確かにしでかすんだけどね。つと、さあ、ついたついた」

目の前に見えたのは、オリンポスの主神”ゼウス”を祭る神殿。しばらくの間、人の出入りがなかったのか所々薄汚れている。

「一体何をするとさいうのだ、かの主神に祈りでもささげるとでも?」

「その通り…さすがアタランテ、勘がいいね」

親指をぐつと立て、笑いながら答えるのだ
意外だった。

今まで私がアルテミス様に祈りをささげているときも「汝は祈る神はいないのか?」と聞くと「…恨まれてるからねえ」と遠くを見るように答えていた。昔、神々と争いがあつたようだがいったい何をし

でかしたのやら…

「さてと… ちよつと離れててね。——危ないから」

神殿に祭られている神像の前に座り、祈りの準備を始める

「大丈夫なのか？ 汝に何かあったら私は…」

「大丈夫だよ、多分… もしもの時はよろしく！」

信頼されているのは嬉しいのだが、心配なことには変わりな——

むっ、今、多分といわなかったか？!

「よし、ん”ん”… えーと、確か…」 大いなる天空の神ゼウスよ。

貴方に祈りを捧げます、ちやつちやと雨降らせやがれこの野郎、食っ

てやるぞ”… アタランテ、離れて！」

”…ゴロゴロゴロ…”

突然、空が唸りだした。雨雲がこの神殿を中心にして集まり、そして——

”…ピシャーーン”

雷が槍となり、メラニオスの頭上に降り注いだ。

その槍は神殿の上部ごと貫き、崩れてきた瓦礫に下敷きになってしまった。

「…ごっほ、ごっほ… ツ、無事かメラニオス?!」

言う通りに少しだけ離れていたの、怪我を負わずに済んだのだが、いったい何をしたのだ？

彼の姿は見えない、下敷きになったのだろう。急いで、救出しようと向かうが…

”ドカーン”と、勢いよく瓦礫がはじけ飛んだ。メラニオスがはじけ飛ばしたのだろうが、その姿は悲惨なものだった。皮膚は焼き焦げ、放電の影響だろうか身体には稲妻の模様が浮かんでいる。すでに、治癒が始まってるとはいえ思わず目を背けてしまうほどだ。

「… 熱い」

と、一言つぶやき。そのまま倒れ伏してしまった。そばに駆け寄る、気を失っているだけのようだが、このままこの場所に留まるのは危険だろう。彼の身体を肩で担ぎ、なんとかその場を離れようと歩き出す。

「まったく…無茶をしすぎだ、汝は」

外では、土砂降りの雨が降り始めていた

◇◇◇

「ん…もう、大丈夫、ありがとうアタランテ」

しばらく歩いていると、目が覚めたらしい。身体を動かして離れようとするが、そうはさせない

「まだ歩けないだろう。大人しく担がれておけ」

「いや、これはちよつと…まるで僕が荷物みたいだよ」

…何か問題なのだろうか？効率的だと思っただが、やはり脇に抱えたほうがいいのだろうか

「それよりもだ。いったい何を祈ったのだ？」

あれでは最早天罰に近い。何をどうすれば、あんなことになるのやら

「いやー、雨降らせなきゃ食べちゃうぞ、テヘツ。的なの？」

「もはや脅迫ではないか☒汝には敬いというものはないのか!?？それで死んでしまつては元もこうもないであろうが！」

彼は”ごめん、ごめん”とヘラヘラしながら笑っている。こっちは本気で心配したというのに。

まるで、”自分は死なない”と分かっているようなその態度が嫌いだ。

…彼が死んでしまつたら、私はいきていけるのだろうか？

◇◇◇

「ひゃああー——雨じゃあ！恵みの雨じゃああああああ！」

「わーいわーい！久しぶりの雨だねお母さん！」

「ええー！これなら何とかかなりそうだわ」

村に帰ると、突然降った雨に村人は狂喜乱舞していた。特に村長に

関しては常軌を逸した喜びようだ、もはや狂氣的とまで言える。

「おおおおお！あなた方よくぞ帰ってきてくださった！一体どうやってこの雨を？・・・いや、聞きますまい、今はどうか体を休めてください！」

そういった後“ひゃっほ——”と走り去っていく。まるで水を得た魚だなど二人で顔を合わせながら苦笑した。

◇

「もう、この村を出られるのですか?!もう少しごゆっくりして行かれても・・・それに今夜は宴会を予定しております、是非お二人にもご参加いただきたいのですが・・・」

「ありがたいのですが、皆さんに気を遣わせるわけにはいかないので、気持ちだけ頂きます」

この村はもう大丈夫だろう、自分たちがいても迷惑になるだけと考え直ぐに村を発とうとした。心残りがあるとすれば、あの少女たち。きっと村の人が助けてくれるには違いないが、少し心配だ。

物思いにふけてっていると、不意に腕を引つ張られた

「お姉ちゃん、もう行っちゃうの？」

「あ、ああ。申し訳ないがそうだな・・・」

あの少女だった。背中には妹を背負い、涙目でこちらを見上げてくる。

くっ、そんな目で見られると・・・

「ぐすっ・・・ 寂しいよお」

「え、えっと、そ、その泣かないでくれ。いつかまた此処に訪れるから・・・」

「うっ・・・ ぐすっ・・・ うええええん」

「ううっ、そんなに泣かないでくれ」

困り果ててしまう。こんなときどうすればいいか分からないのだ。助けを求めるように視線を送ると

「ははっ・・・ うーん、じゃあもう少しだけお邪魔しちゃう？」

少しだけ困ったような声で彼がそう言ってくる。彼もこの子たちが心配だったに違いない。

「いいのか?!…で、ではなく、汝がそういうなら仕方ない。村長、いいか?」

「ええ、もちろんです!さっそく宴の準備をしませんとなあ!」

「いいの、お姉ちゃん?」

「ああ、勿論。しばらくここで世話になる。」

「わーいわーい!やったー!」

ぴよんぴよんと飛び跳ねる少女。背中に背負っている妹もキヤツキヤツと嬉しそうに笑う。やはり、子供の笑顔というのはいいものだ。顔がにやけてしまう。

「さあ、家に戻ろう。宴までまだ少し時間があるからね。妹ちゃんは僕が背負おう、アタランテはその子と手をつないであげれば?」

「やったー!」

「へっ?!いい、いいのか?」

「うん!はやくはやくー」

「こ、こら、そんなに急がなくても——」

振り回される私をメラニオスは後ろでおかしそうに笑い歩き出す。私も戸惑いながらも少女に手を引かれ歩みだす。

——こんな光景を私は望んでいたのかもしれない。

狩人と怪物 「美酒に酔う」

この村に来てから彼女はとても幸せそうだった。子供たちと過ごすこの日常が何より楽しそうで、その姿を見る僕の顔も自然と緩んでしまう。僕らは子供の世話や狩りの手伝いなどをして、村の人たちと助け合いながら生活をしている。

「いつもありがとうね、メラニオスさん。これ、うちでとれた野菜です、貰って下さい」

「おーメラニオスの旦那、お疲れー。そうだ、いい酒が手に入ったんだ。アタランテさんと飲みなあー！」

「メラ兄ちゃん、かけっこ、かけっこしようぜ！…え？アタランテお姉ちゃん？あの人全然手加減してくんないんだもん」

「ねーこれあげる。お花の冠、みんなで作ったのいつもありがとうつて」

この村の人たちは僕らをすんなりと受け入れてくれた。仕事をくられたり、世間話をしたりよくしてもらってくれる。

「お帰り、メラニオス、今日は肉料理だ。あの子たちも手伝ってくれたんだぞ、早く手を洗ってこい」

仕事が終わりに家に帰れば、彼女がご飯を作って待っていてくれる、そんな理想の生活。

「うん、ありがとう。それと、お酒を貰ったんだ…良かったらあの子たちが寝付いた後、どう？」

「ほう、これはいいものだな。楽しみにしておこう、汝と酒を飲み交わしたことはなかったからな」

彼女と子供達との食事。その後は二人と少しだけ遊び、風呂に入り、寝付かせる。全てが終わった後、二人だけの時間を過ごす、これが僕たちの日常。

幸せな日々だと思う。

こんな日常がいつまでも続けばいいと、彼女は笑っていてくれる。



「今日は子供たちとどんなことをしたの？」

晩酌を始めて少し経った頃、いつものように会話をする。アタランテはこの酒が気に入ったのかぐびぐびと景気よく飲んでいる。

「…ん、ああ。かけっこだ、もちろん私が勝ったがな！」

胸を張ってこたえるアタランテ

飲む前は酒豪を豪語していたものの、今や顔を赤らめ、完全に酔っ払っている。「らいじょーぶ」と本人は答えるものの絶対大丈夫ではない。

いつものキリツとした感じも好きだが、酒で蕩けたこの顔はまた違った雰囲気新鮮だ。

「んんんほめれくれ！」

「あーはい、はい、えらいえらい（手加減しないところは相変わらずだなあ）」

「むう… もっとちゃんとはめて！ほら！」

無理矢理に頭に手をのせさせられる。撫でてくれということだろうか？ 試しに撫でてみると嬉しそうに顔を綻びさせる…可愛い。

でも、心臓が悪いから勘弁して欲しい、ただでさえ普段から彼女を見るたびドキドキさせられるのだから

「もう少し、手加減してもよかったんじゃない？ ちよつと大人げないなあ」

「えへへ、だってあなた以外に負けるなんて嫌だもん」

っ… 危なかった、僕じゃなきゃ死んでた。死因が尊死なら本望だけど

というか、流石に心配になってきた。顔を赤らめたこの姿も魅力的なのだが、これ以上はまずいだろう。酔っ払いほど怖いものはない、何をしでかすかわかったもんじやないのだから。

「アタランテ、もう寝よつか。さすがに酔いすぎだと思うし…」

「…」

「ほらっもつとのむー！」

「がっ…!!」

無理やり口を掴まれ酒を流し込まれる。

絡み酒なんて一番めんどくさいパターンだ。けど、こういった一面すら愛おしいと思ってる辺り相当絆されているらしい。

ただ心配なことには変わりがない

「ほら、いい子だから」

「… 私と一緒にいるのが嫌なのか？」

「え!! いや、そういうわけじゃあ」

「… 私のこと、嫌いなんだ…ぐすつ…」

感情の起伏が激しい。何とかなだめようとするが

「そんなこと一言も

「お兄ちゃん、どうしたの？」

あー、いや、なんでも

「こつちが話しかけるとすぐ目を逸らすし… あの時、抱きしめてくれたのに今じゃ、近づくだけで離れようとするし… 自分といると、迷惑がかかるからとかそんなことを盾にして、私はそんなの覚悟の上で一緒にいるのに！」

分かった、分かったから、ね？一旦外に出よう。子どもたち起きてきちやつてるから、ね？」

それでも駄々をこねるアタランテの口をふさぎ無理矢理でも外に連れ出す。

子どもの前で聞かせるにはいささか恥ずかしすぎる！

「ゴメンね起こしちゃった。直ぐ静かにさせるからまた寝ようね」

「む」――「む」――「む」――「――！」

◇

とりあえず外に連れ出すことができた。

外の空気にも当たれば少しは酔も覚めるだろう

「えへへ〜メーラーニーオースー」

ダメかもしれない。

こつちを見てにやにやしなから近づいてくるアタランテ。

「な、なんだい？」

「だっこ」

「へ?!あ、ちよっ」

思いつきり抱きつかれる。

顔が近い、彼女の呼吸が間近に感じられるほどに

「うふふ、すべすべ」

「ひ、人が来たらどうs「嫌なのか」え、いやあ「見られたらいやなのか」

有無を言わせぬほどの迫力がある。も、もう、心臓がもたない。

「嫌とか、そういうのじゃなくて「ならいいな」だけど「どつちなのだ!ハツキリしろ!」ええ...」

どうしたんだろう、こんなにも荒れることは今までなかった。僕は彼女にどうしてあげればいいんだろう。

「私たちは夫婦なのだぞ。これくらい...いいではないか」

ああ、そうだった。

今まで考えるのを避けていた気がする。

「...うん、そう、だね。僕らは夫婦だ」

あの日、彼女に勝った日、彼女は僕の物になった。

”私に勝ったのだ。その責任、取ってもらおうぞ”

”ああ...勿論!”

あんなこと言っておきながら、今でも後悔している。もし、もし断っていれば、彼女はこんな怪物と旅に出ることはなかった。

彼女が不安そうにこちらを見上げ、尋ねてくる。

「汝は...私を愛しているのか?」

当たり前だ、あつた時から、今だつてずっと、君のことを僕はずっと愛してる。愛してるんだアタランテ!

「僕は——...」

...何も言えなかった、言葉にできなかった。あの日の後悔が今でも縛りついている。

何も言えず、ただ黙っている僕を彼女はどう思っているんだろう。

その時の彼女の顔は見れなかつた

「こつちを見る、メラニオス！」

「ブヘッ」

突然顔を手で押さえられ、強制的に見つめ合う形になる。彼女は先ほどと打って変わって真剣な表情をしている。

「私の目をよく見ておけ。いいか。あなたが言わないなら私から言つてやる」

逃げられない。

言わないでほしい、それはきつと君を縛つてしまう。

「私は… 貴方を——」

目をつぶってしまった。見つめてくるその目が辛かったから。

でも、彼女から言葉が続けられることはなかった

「…… アタ、ランテ？」

おかしい、いつまで経つても次の言葉が聞こえない。彼女は何故か下を向いている。

恐る恐る、もう少し顔を近づけると

「すう… すう… すう…」

「…… 寝ちやったか」

眠る彼女をいつかのように、お姫様抱つて寝室へと連れて行く。「ごめんね… でも、愛してるんだ。本当に愛してるんだアタランテ…」

少しだけアタランテが笑った気がした。

… 今はこれでいい、これでいいんだ。今はこの幸せを噛み締めていよう、願わくば——

「… お酒はもう、こりこりだな」

◇◇◇

アタランテを寝かした後、少し夜風にあたっていた。今日も相変わらず星は美しく、月は僕を照らしている。

違ったことがあるとしたら

『やあ、メラニオス君。元気ー？』

——招かざる客神が来たことだ

「… 何の用だ、アポロン」

『そんなに睨まないでほしいな。ただちよつとお願いがあつて来ただけなんだ』

胡散臭い笑みを浮かびながら近づいてくるアポロン神。ここで争うわけにはいかない、今は守るものがある。警戒心を隠さず相手をにらむ。

しかし、こちらの気も知らず神は淡々と話を続ける

曰く、カリュドーン王オイネウスがオリュンポスの神々の生け贄を捧げる際に、女神アルテミスを忘れてしまった。これにより女神は怒り、その国に天罰を与えるつもりなのだ

『最初は魔猪を放とうと思っただけけど… 君がいることを思い出してねえ』

怪物として振舞えと。人々の厄災となれと。

「… 僕が大人しく従うとでも？」

『——従うとも、今の君ならね』

村の方に目を向ける。

『私は疫病の神としての側面を持っていてね、この指を振るえばあつという間に感染させることができる。分かるだろう？ つまり——この村が人質というわけさ』

グシヤリ、となにかを咀嚼するような音が聞こえた。

アポロンは自分の下半身が喰われたことに気づく、どうやらかなり怒らせてしまったみたいだ。だが、心配することはない。笑顔崩さず語り掛ける。

『ははっ、相変わらず手が早いなあ。でも残念、私は分霊みたいなものでね。ほら、この通りすつかり元通りさ』

メラニオスは忌々しそうに睨めつけている。実際、アポロンは何ともなかったように振舞っており、捕食が無駄だったことを理解する。なら従うしかないのだ。あの時のように理性のない怪物ではない、最もそれが何よりの弱点ではあるのだが。

『君はただ暴れてくれるだけでいいんだ。そうすればギリシヤ中の勇士が集まり君を討伐しようとするだろうからね。勿論、殺しつくして

もかまわない。まあ、こちらとしては君が死んでくれた方がありがたいんだけどね』

怪物は答える

「…分かった。けど、この村…彼女には手を出すな」

アポロンはにつこりと笑って

『もちろんさ！いや—君に理性があつて本当に助かるよ』

怪物はもう用がないと背を向け家へと戻る。その姿を見送りながら、アポロンは笑った

『——君がどんな最期を遂げるのか、せいぜい楽しませてもらうよ』

狩人と怪物 「カリユドーンの怪物」

「ん…」

頭の痛みで目を覚ます。酒に弱かったわけではないが、存外飲みすぎてしまったらしい。

起き上がろうと体に力を入れたところ、なにかに掴まれているようで全く起き上がることができない。隣を見てみると、アタランテはすやすやと寝息を立て、僕に抱きつきながら眠っている。

こちらの背中に腕を回し、足をしっかりと絡め、絶対に逃がしてなるものかという気概が伝わってくる。

「一応、離れて眠ったつもりなんだけどなあ」

嬉しいのは山々だが少し苦しい。ひとまず彼女が目覚ますのを待つしかないようだ。

彼女の緑の髪が朝日に照らされ輝く。綺麗だなとそつと撫でてみた。するとそれが少しくすぐったかったのか小さく身じろぎをし、瞼をゆつくりと開いた。パチパチと瞬きを繰り返しこちらを見つめてくる。

「おはよう、アタランテ——ぐへっ」

優しく頭を撫でながら挨拶をしたはずだったのだが返ってきたのは「おはよう」ではなく、ピンタである。「パンツ」と軽快な音が鳴り響く。

「な、な、なんで抱き着いているのだ!？」

誤解だ。そもそも抱き着いているのは君じゃないか、と訴えると彼女もそれを理解したようで、申し訳なきそうにしながらも、その頬を赤く染めていた。

「… すまない」

大丈夫だよと声をかけるも、気まずそうに俯き布団の中に隠れてしまう。

「昨日はだいぶ飲みすぎたみたいだけど体調は大丈夫?」

返事は返ってこなかったものの頷いたのは分かった。とりあえずは安心なので起き上がることにする…。出かける準備をしなくては

「…メラニオス。その、昨日のことは、だな…」

布団からひよつこりと顔を出しどこかぎこちないアタランテ。

はて、昨日のこと… ああ、可愛かったなあ

「すっ——ごい可愛かったよ。ほめて！だなんて言われたときはびつくりしたけれど」

「っ…!!そのこと、じゃなくて、いや… もう知らん！」

顔を真っ赤に染め恥じらう姿はもはや芸術物だ。しかし、不機嫌にさせてしまったようだ、少しからかいすぎてしまった。しばらくは布団から出てこないようなので、一足先に朝食の準備でもしておこうか
そうして、アタランテ一人が部屋に残される。

「~~~~~!!」

“ん~~~~ほめれくれ!”

“…私のこと、嫌いなんだ…ぐすっ…”

“私たちは夫婦なのだぞ。これくらい…いいではないか”

昨日の失態が次々と頭の中に溢れてくる。広くなった布団で転がりながらアタランテは恥ずかしさで悶えてしまう。飲み始める前は、酔った彼をあれこれ世話してやろうと考えていたのに、まさか自分がされる側になるとは

「次こそは…!」

リベンジを誓い、再び布団にもぐる。彼の前では平気だといったものの、酔いはまだ残ってるようで。このまま二度寝するのも致し方ないことである。

『僕は——…』

再び眠りにおちようとする中で、ふと思い出してしまった。辛そうにこちらに顔を向けるメラニオス。聞くつもりはなかった、最初から分かっていたのに。彼が私をどう思っているなんて、見ればわかるのに。やはり言葉にされないと不安になってしまうのだ。

「どうしてだろうな… こんなにも思っているのに伝わらないなん

て」

◇◇◇

「おねーちゃんー！おーきーてー！」

身体を揺らされる。正直なところまだ起きたくないのだ。酔いは覚め切っておらず、ボーっとしてしまふ。

「むくくおーきーてー！」

とはいえこれは嬉しいものである。まさか子どもに起こしてもらえる日が来ようとはー！ここは私にとつての理想郷のようだな。少しばかりこの状況を堪能させてもらおうとしよう。

そうして、寝たふりを続けるつもりだったが

「お兄ちゃんがでていつちやう——！」

一瞬で飛び起きる事態になった。

◇

「うえええええええん」

「はあ… どうしたのか… おー、ほらほら、泣かないでー。大丈夫大丈夫すぐ帰ってくるからねー」

玄関で妹をあやすメラニオス。いざ出発しようとしたところ、子ども達が起きてしまい、しばらく出かけると伝えた途端この始末である。せめて、アタランテを起こして出るべきだったと絶替後悔中である。

どうしたものかと嘆いていると“ドタドタ”と寝室の方から勢いよくアタランテが向かってくる。泣き声を聞きつけてくれたのだから「助かった」と声をかけようとしたのだが

「たすく——ええ!? どうしたの？」

助けてくれるどころか、抱き着かれる。まさかの本日二回目「ど、どうしたの? できれば離してくれと…」

「… さん」

「ほっ」

「ごべんなぎい。わた、わたじがあんなごと聞いたから…」

泣きながら抱きしめてくるアタランテ。恐らくまだ酔いが覚め切っていないせいだと思うが、こうもカオスな空間になってしまおうとは。

「うええええん「いかないでー——！」「ぐすつ…ぐすつ…」」

◇

床に正座させられるメラニオス。

「一言も言わず、出ていこうとしなくてもいいではないか」
怒りたつぷりのアタランテ。

一応、置手紙はしていたもん。それに、湿っぽいのは嫌いなんだと、言い訳を重ねるメラニオスに呆れた目を向ける

「それで、いつ帰ってくるのだ？」

「一週間、いや、一か月くらい、かな？」

「すぐに帰ってくると言っていたではないか…」

「一か月なんてあつという間き。ちゃんと帰ってくるよ」

また嘘を重ねる。帰ってこれる保証などないに等しいのだ。

「…本当だな？本当に帰ってくるんだな？」

「勿論。みんなで待っていてよ、きつとお土産でも持って帰ってくるよ」

僕が死んでも、この村でなら彼女は幸せに暮らしていける。

笑顔で会話しながらもメラニオスの心は後悔を続ける。

「分かった、この子達と村は任せておけ。そのかわり、なるべく早く帰ってこい」

「うん、ありがとう…そうだ、これを渡しておくよ」

そうして手渡されたのは、黄金に輝く林檎。

「これは…」

「お守り代わりと言っちゃあなんだけど。怪我した時や病気になった時に使うといいよ」

「ああ、分かった…いつてらっしゃい」

振り返れば、いつまでも手を振る子ども達。不安そうに目を伏せるアタランテ。

メラニオスは死地へ赴く。それでも胸の中で必ずと帰ってくと誓う。それが決して叶わぬと分かっているも――

◇◇◇

ここはギリシヤ西部にある都市、カリュドーン。四方を山に囲まれ自然豊かであり、そしてアルテミス神とアポロン神を祭る大神殿があるギリシヤ有数の都市である。先日までこの都市ではこの二柱の神に生け贄を捧げる儀式が行われていた。

しかし、問題が起きた。カリュドーン王であるオイネウス王はなぜかアルテミス神に対しての生け贄を忘れてしまったのである。気づいたころには時すでに遅し、カリュドーンは神の怒りを買ってしまった。

――それはある日突然現れた。

「…おい。何だあれ」

まさか自分たちが神の怒りを買ったとは知らず、いつものように農作業をしていたカリュドーンで暮らす人間たち。その中の一人が勢いよく山からこちらへ向かってくる巨大な黒い影を見つけた。

「逃げt――」

声を上げる暇もなくその人間は踏みつぶされた。他の人間たちもなすすべなく蹂躪されていく。あるものは喰われ。あるものは触手で貫かれる。

辺り一面は血に染まり、さながら地獄のような景色ができる。

「G A a!!」

身体をどす黒い血で染めたそれは咆哮する。大地を揺るがし、天に

まで轟くその叫び。聴いたものはその場で凍り付き、死を悟る。
これこそが後の世で語られることとなった、神話の汚点

——カリユドーンの怪物である

◇◇◇

「…お兄ちゃんまだかえってこないね」

あれから、一週間、一か月と日々は過ぎていった。まだメラニオスは戻らない。

「そう、だな… きつともう少しで帰ってくるからそれまで元気で待っていてよ。ほら、そんな悲しそうな顔をしてるとメラニオスが悲しむぞ」

こうやって元気づけるのも、もう何度目だろうか。

やはり何かあったのではないか。無理にでもついて行くべきだったか、などと不安ばかりが積もっていく。

”コンコン”

玄関の扉が叩かれる。

「もし。ここにアタランテは居られるか？」

村人ではない。

子ども達を奥に連れていき、アタランテは扉へ近づく。

「どなたか居られるのか？この扉を開けてもらいたいのだが」

「(聞き覚えのある声だ。もしや….)」

警戒はしつつも扉を開けると

「汝は…」

「おお、アタランテ!! 久しぶりだな、アルゴ―船以来か? 元気なようでは何よりだ」

そこに立っていたのは、一人の青年。

「メラアグロス… なぜ此処に来た」

カリユドーン王の息子であり、かつてのアルゴ―船の船員。

薪の英雄と称される王子メラアグロスであった。

「何故って… お前に会うためだとも、麗しのアタランテ」

狩人と怪物（短編）「ピクニック」

今日はアタランテと子ども達と僕の4人で森へピクニックへ来ていた。

「お兄ちゃん、お姉ちゃん！早く早くー」

「ここら、そんなに走ると転んでしまうぞ」

こうして出かけることは今までもあったが、今回は少し遠出をしている。初めて見る景色に少女は大興奮。

「あー、あえ。リスさん」

「ん？おーそうだね、リスさんだ。よく見つけたね」

肩車をしている妹ちゃんも楽しんでいるようで何よりである。最近は簡単な単語程度なら喋れるようになったようで、これからの成長を見守るのが何よりの楽しみだ。

そうして、歩いていると湖にたどり着いた。周りに危険な気配もなく、ここに天幕を貼ることにする。

「さて、私は肉を獲ってくるでしょう。なに、立派な獲物をしとめてみせるさ」

久しぶりの狩りで滾っている様子。弓をとるや否やすぐさま森へ駆けて行った。どうやら子供たちがいい格好を見せたいようで…空回りしないといいが、彼女に対してその心配は無用だろう、多分。「ねえねえお兄ちゃん、なにかお話して」

どうやらある程度自然を堪能したようで少々手持無沙汰の様だ。

「うーん…じゃあ、おとぎ話なんてどうかな？」

そうしてメラニオスは懐かしそうに語り始めた。

◇◇◇

あるところに王様と泥人形と怪物がいました。その三人はときどき喧嘩をしたりしていましたが、とても仲が良く楽しい日々を過ごしています。

ある日のことです、天の神様が王様の国に巨大な牡牛を向かわせました。神様は王様たちを殺そうとしたのです。けれどもうまくいき

「あつ。ごめんなさい」

「気にしないで、まだまだいっぱいあるし。ほら、」

一方そのころアタランテは

「よし、これほど獲れば十分だろう」

すっかり気分が高揚したアタランテはあつという間に獲物をしとめていた。

「ふふふつ、あの子たちの喜ぶ姿が目には浮かぶ。よし！もう少しだけ…むっ」

ふと目に入ったのはコロコロと転がってくる

「(林檎ではないか!!)」

思わず駆け寄るアタランテ。迷わず林檎に齧り付く。

「美味しい…はっ、いかんいかん思わず口にしてしまったー！なんど！」

何故か次々と転がってくる林檎たち。アタランテはそれを夢中で拾い集める。

「おお！ひよつとしてこの近くに果実の楽園があるのやもしれん」

狩を中断しまだまだ転がってくる林檎を拾い集めながら進んでいきます。

「食後にピッタリだな。子ども達も喜ぶに違いない」

後でメラニオスに調理してもらおうと嬉々としながら進んだその先で見たのは

「やったやった！キャッチできたよー！」

「ふふつ、よかったね。でも随分と林檎の数がー！あつ、おかえりアタランテ」

林檎を手に取り喜ぶ少女。ようやく、この林檎が転がってきた経緯に気がつき肩を落としてしまう。

「…罨だったか」

「何かあったの？…それより早くご飯にしよう。僕ら待ちくたびれちゃったよ」

思えば、狩に夢中になりすぎて時間を忘れてしまっていた。

「(この林檎が呼んでくれたのかもしれない)」

アタランテは腹を鳴らして待ちくたびれた三人のもとへ急ぐの
だった。

狩人と怪物 「薪の英雄」

「お前に会うためだとも、麗しのアタランテ」

そう答えるのは、カリユドーン王子メラアグロス。アルゴ―船の冒険など数々の試練を打ち破り英雄と謳われる人物である。

「どうだ久しぶりに狩りでも… もちろん俺とお前二人きりで、な？」
そうしてアタランテの腰に手を回し手を取る。そのまま壁の方へ押し付ける形になるが

「――断る」

振り払われるメラアグロス。

「生憎とそのような気分ではないのでな。用がないのであれば帰れ」

“ でなければ殺すぞ ” と殺気だった目で睨みつける。メラアグロスは冗談だというようにわざとらしく振舞う。

「ははっ、相変わらずだな。いやなに、お前が ” 攫われた ” と聞いたのでな俺は心配で心配で」

聞けば、アルカディアに訪れた際、ある噂が広まっていたそうだ。青年がアタランテに競走を挑み、卑怯な手を使い勝利したや、黒い怪物が現れ戦士たちを皆殺しにした。アタランテはその怪物に攫われた、などなど

「して、噂によるとお前はある男と競走して ” 負けた ” と聞いたが… 一体どのような手を使われたのだ？」

「… 彼は、メラニオスは私に正々堂々挑み勝利した。過程はどうであろうと私は自分の意志で彼と共にいる」

メラアグロスは少し驚いた様子だ。おおかたアタランテは無理矢理ここに連れ込まれているとばかり思っていたのだろう。すぐさま頭を下げて謝罪をした。

「ギリシャ最速の狩人といわれるアタランテに走りで勝ったというのか?! …… すまない、俺は何という失礼なことを。して、そのメラニオス殿はここに居られるのか？」

アタランテは少し顔を曇らせながら首を横に振り不在だと答える。残念そうに肩を落とすメラアグロス。

「そうか… お前に勝つほどの男、ぜひ一度手合わせを試してみたいものだったが仕方ないか」

「ふっ、なにせ私を追い越した男だ。もしかしたら腕っぷしでも汝に勝つやもしれんぞ」

夫をあげられて気分が良くなったのか自慢げにそう話す。アタラントテがそこまで言うのが意外だったのかまたも驚きの表情を見せる。

「なんと、そこまで言わせるほどか。うーむ、なおさら惜しいな」

悔しそうに声を唸らせる。どうやら何か事情があるようだ。

「実をいうとなアタラントテ。俺はお前に力を貸してほしくてここに訪れたのだ」

「私の力を？ どういうことだ」

メレアグロスはこれまでの経緯を話し始めた。

「私の国カリュドーンでは先日アポロン神とアルテミス神に生け贄を捧げる儀式を行ったのだが… 我が父オイネウス王はあろうことかアルテミス神に対しての生け贄を用意してなかった」

毎年恒例で行われる神々に対して感謝を捧げる儀式。あろうことかその儀式で最もやってはいけない行為をしてしまったという。

「… 愚かな」

ただ吐き捨てるように告げる。アルテミス神を信仰している身にとつてはその一言しか浮かばなかった。

神々に対して失礼を働いた者の結末は古来からきまっている。

「まったくだ、我が父ながら愚かしいにもほどがある」

同意するように頷く。

「しかし、問題はここからなのだ」

語気を少し強め本題へと移る。その顔は怒りに満ちている

「それからしばらくした後、ジユゴス山から『怪物』が現れたのだ！」

「怪物…？」

何か引っかけかりを覚えた。

「ああそうだーそれは民を踏みつぶし、喰らい、田畑を荒らした。国中の勇士が挑んだもの——壊滅してしまった」

「……」

弓の名手数いれど、アタランテ以上の狩人はいない。そう確信に満ちた顔でメレアグロスは答えを待つ。

“当然だ。ぜひ参加させてもらう”と言いたいところではあるが。こちらを覗き込む子供たちがアタランテの目に映る。彼女らを置いていくなどできない。それに

『勿論。みんなで待っていてよ、きっとお土産でも持って帰ってくる
や』

——待っていないくは。約束したのだ。家に帰ってきたとき思いつき抱きしめ“遅すぎる!”と叱ってやらねばならない

メラニオスのことを想い、自分の信念を曲げてでも彼女は参加しないことを選ぶ。

「悪いが、私は——」

参加できないと口にしようとしたとき

「おや、ここにいらしたのかメレアグロス殿」

突然後ろから声が聞こえた。

振り向けば、そこにいたのは“村長”。どうやら玄関の方からいつの間にか入ってきたようだが、一言声をかけてくれればいいもの。“ご老人！先ほどはありがとうございました。おかげでアタランテと会えましたよ”

「ほほっ、それはよかった」

メレアグロスは村長の案内でここまで来たようだ。どうやら村長は今までの話を聞いていたようで

「聞きましたよアタランテさん。カリユドーンで怪物が現れたとか、貴方は討伐隊に参加なさらないのですか？」

「あ、ああ。子供たちのこともあるが……私はメラニオスを」

そこまで言いかけて、

「そんなものワシに任せておきなさい！」

村長の言葉にさえぎられた。子供たちのことは自分にまかせて討伐隊に参加してこいということだ。

何故そこまで村長がこだわるのかは疑問ではあるが…

「アルテミス神を信仰している貴方が参加しないでどうするのですか！」

確かに、その怪物がアルテミス様が遣わせたものであるならば放っておけるはずがない、しかし

「いや、そうは…言ってもだな」

渋るアタランテに村長は詰め寄る。

「——既に神託はくだっております。あの怪物はあなた達、英雄が殺すべき存在なのです」

村長の目が金色に輝く。その目に覗き込まれてしまい私は…

『今こそアルテミスに報いるときだろ？』

声が頭の中で響く。

ああ、そうだとも。あれは私達が殺さなくては。捧げるのだあの怪物を。

「そう、だな。アポロン神の神託なら従うほかなかろう。メレアグロス、私も参加させてもらおうぞ」

その答えを聞いた途端、待ってましたとばかりメレアグロスは声を上げる

「よし！アタランテ、お前ならきつとそう言ってくれるに違いないと思っていたー！」

早速出発しよう、先に出ておくぞと出て行ってしまった。アタランテも狩猟服に着替え、弓と矢を担ぎ外へ向かう。

「お姉ちゃん…どこいくの？」

呼び止められた。少女は涙目でこちらを見上げてくる

「ああ、いかねばならない」

“子供たちをよろしく”

声が聞こえた気がした。

少女が縋るように手を伸ばしてくる。

「村長がお前たちのことを見てくれる、何も心配することはない」

「でも…でも…ぐすっ」

「きつと帰ってくるから」

…なにも心配はない。私はすべきことをする、それだけ

アタランテがその手を取ることは無かった。ただ冷徹に突き離すように。既にその目は獲物を狙う狩人の目をしており、何を言っても無駄だとわかる。

「では村長、後は頼んだ」

「ええ、任せてください…お気を付けて」

少女がなにか言っていた気がするが、アタランテは振り返らない。

——さあ、怪物狩りの始まりだ

◇

『ふふふっ。さてと私も用意を始めるとするかな』

不気味な笑顔を浮かべる村長？それを不思議そうに子供たちは見ている

『おや？』

見られていることに気づいたのか、それは子供たちを見る。特に危害を加えるつもりはないのか、はたまた興味がないのか…『はあー、せめて男の子だったらなあ』と愚痴をこぼしたかと思うとその場で動かなくなってしまった。

「おじいちゃん…？」

少女は心配そうに声をかける。

「ほあっ…わ、ワシは一体？」

村長はまるで今まで意識がなかったかのようにうろたえている。

「私たちの面倒見てくれるって…おじいちゃんが言ったんでしょ？」

「はへ？そうじゃったかのお…もう歳か、死んだばあさんに怒られるわい」

アタランテが村から出ていったことさえどうやら記憶にないよう。だが、メラニオスに頼まれたことがあることを思い出したようだ「そういえば！アタランテさんを村の外に出さないと言われとつた

んじやった、しまったのお」
今更追いかけてようとも時すでに遅く、村長は申し訳なさそうにうなだれるのであった。

狩人と怪物 「カリユドーンの怪物狩り——十三番目の試練——」

くジユゴス山く

この山は深い森で囲まれており狩りには絶好のスポットともいえる。しかし今日は状況が違った。森の入り口には次々に人が集まってくる。その表情は決意に満ちており、まるで死を覚悟した戦士の様。それもそのはず、彼らは命を捨てる覚悟でこの場に集まった。無論誰一人自分が死ぬなどと考えている者はいないのだが。

「皆の者よくぞ集まってくれた!!」

メレアグロスが演説を始める。群衆は皆彼の方に視線を向けやつと始まるかといわんばかりの盛り上がりを見せる。

「此処に集いしは一騎当千の英雄たちだ。みんな俺の国のために集まってくれて本当にありがとう!!」

当然だ自分たちがやらなくて誰がやるのだと、誰もが自信に満ちた顔でその演説を聞く。アタランテもその中の一人である。

「今回我々が対峙するのはアルテミス神が遣わしたカリユドーンの怪物である!!……心してかかって欲しい」

ウオオオオオオ!と雄叫びが上がる。遠く離れた国々から自分の名を上げるため、メレアグロスの気概に惚れたから、理由は様々だが怪物を討伐するという点では英雄たちは一丸となった。

「今回の最大の功労者には怪物の毛皮、牙、諸々を与える!それを身につければ自身の武勇を広めることができるであろうよ」

そうして盛り上がったのち、メレアグロスは作戦を告げる。

「この森をしばらく歩くと円状に開けた空間があり、そこにあの怪物はいるはずだ。それを囲むようにして近接武器を使うものは一旦待機。準備ができ次第弓を使う者が一斉に矢を放つ。それが止み次第待機しているものも一斉に突撃してくれ」

“あの怪物には武器の類が効かなかつたと聞いたぞ”と誰かがヤジを飛ばす。カリユドーン国の戦士たちが挑んだ際、幾ら剣で切りつ

け、斧で叩き切り、数千の矢で撃ち抜こうとも無駄足に終わったという噂が広がっており、まさか武器の類は通じないのでは？という意見がちらほらと上がる。しかしながら怪物の身体に傷をつけることは確かにできたのだ。だが何度致命傷を与えようともその傷はすぐさま修復されたという。

「それについては問題ない。ある人物から怪物に対して最も有効だといえる“毒”を用意していただいた!!この毒を怪物に撃ち込めば必ずや討伐の道が開ける!!そしてこの毒を撃ち込める弓手が必要だ。その役目を——アタランテ、お前に任せたい」

群衆の視線が一斉にそそがれる。だがアタランテが動揺することはない。むしろ自分こそがふさわしいといわんばかりの気概である。「俺たちはアタランテが毒を撃ち込むまでの困だ。攻撃を適度に加えながら時間稼ぎをする、しかしそれは毒が撃ち込まれるまでの辛抱!撃ち込まれ次第、各々全力で攻撃!以上がこの作戦の概要だ、異論はあるか?」

周りを見渡し異論者を探す。特にいないと思われ作戦開始を告げようとしたが

「——ちよつと待て。お前ら本当にそんな女に任すつてのかよ?」

一人の男が前に出た

「冗談じゃないぜ、女に俺たちの命を預けるってことだろ、他の奴に変えたほうがいいんじゃないのか?」

そう声を上げたのはアンカイオス。彼は女であるアタランテと狩りをするのが不服だと唱えた。

「それによーアタランテといやアルゴ船の奴だろ?知ってるか船長のイアソン。王になるとかほざいていたくせして今じゃあ惨めな生活を送っているらしいぜ」

この場にはかつてのアルゴ船の船員も多数いるというのに。よほど自分の腕に自信があるのだろうか。周りの視線を気にせず喋り続ける。

「所詮口だけ、あいつ自身何も力も持っていない奴だったのさ、そんな奴の仲間だったお前らも口だけなんじゃ…っ!!」

後ろから発せられた怒気に気が付いたアンカイオス。空気が凍る、このまま振り向けばその威圧だけでバラバラに肉体が砕けようかと思える。

この場には各地からの英雄たちが集まっていた。勿論、世界最高峰の英雄である彼も

「——我が友の蔑みはよしてもらおうか」

大男が静かに口を開いた。

「それにお前の言うことが事実であれば、この私も口だけということだが」

神々しい肉体。全てを見通す目。その口から発せられるのは正しいことであると思ってしまう尊大さ。全てを持った男がそこにいた。

彼は理解した、言っではならぬことを言ってしまったのだと。

「い、いや。その、あ、貴方がまさか、いるとは……クソツ」

アンカイオスは吐き捨てるようにその場を去っていった。

アタランテが大男に声をかける

「久しぶりだな——ヘラクレス」

「……アタランテ」

数々の冒険を共に乗り越えた仲間との久しぶりの再会を彼女は喜ぶ。ただヘラクレスの方に喜びの表情は浮かばなかった。

「……アタランテ、お前はここk「おお!!ヘラクレス来ていたのであればひと声かけてくれればいいものを!!どうだ、我が妹ディアネイラは元気か?」

メレアグロスの妹、カリュドーン王女ディアネイラはヘラクレスの妻である。彼の英雄譚を聞いたオイネウス王が婚姻話を持ち掛け、ヘラクレス自身も彼女に惚れていたので結婚することとなった。

割り込むように話に入ってきたメレアグロス。どうやら喜びを隠しきれぬようで

「……すまなかつたなメレアグロス。ああ、彼女は元気だとも。息子も生まれ今は家で留守を任せている」

難行を終えたヘラクレスは妻と共に穏やかな日々を過ごしていた。“あれ”に呼ばれるまでは。この場にいるのはメレアグロスを助け

るためだけに来たというわけではない

「そうかそうか、やはりお前に妹を任せてよかった。幸せそうで何よりだ」

それを知らずとも満足そうに頷くメラアグロス。そうして幾らか会話を交わし、群衆の方へ再び向き直る。

「よし——皆の者!!もはや異論はあるまい。このヘラクレスが我らにはついていなのだ!もはや勝利は確定である!...だがなヘラクレス、ぎりぎりまで手を出さないでくれよ。お前が本気を出してしまえば、俺たちの出番などなくなってしまうのでな」

どつと湧く群衆。決戦前の緊張感を少しだけ緩めることとなったが皆一層闘志が高まり準備完了といったところか。

だが、ヘラクレスはどこか暗い。この歓声の中ただアタランテを悲しそうに見つめるのみである。

「どうしたのだ先ほどから... それと何か言いかけてはなかったか?」

アタランテはまだ気が付いていない。自分が何を殺そうとしているのか。ヘラクレスが何のためにここにいるのか

「...今のお前に何を言っても無駄だろう...後悔の無いようにな」
「?...?」

彼女がそのことを理解するのはもう少し後である



英雄一行は森を進み遂にそれを見つけた。報告では靄で覆われ正体が見えぬということであったがどうやら今日は事情が違うらしい。

「なんて禍々しい...」

例えるならそれは猪。とてつもなく大きな魔猪。それだけなら問題ない彼ら英雄はその程度見飽きているのだから。

しかし目の前の怪物は違った。身体は無数の触手に覆われており、

その口から生える巨大な牙はドス黒く染まっている。数え切れぬほどの人間を食らったのであろう。その怪物はその場にただいだけで周囲を恐怖に貶める、事実この森にいるはずの獣たちも一切姿を見せないほどに。

もう引き返すわけにはいかない、ここで逃げ出せば名が廃るというもの。

怪物の周りを囲み息をひそめる。弓兵は弓を引き合図を今か今かと待ちわびる。

「——討伐開始!!」

メレアグロスの掛け声とともに矢が雨のように怪物に降り注がれる。しかし——

「■■■■——!!」

それが怪物に届くことはなかった。叫び声と共にその身体から伸びた触手がすべて叩き落したのだから。自らを害する者たちに気づいた怪物は蠢く触手を英雄たちに向けている。

一方、すべての矢を撃ち落とされる光景を目にした英雄たちは特に落胆する様子はなかった。この程度で倒されるのであれば自分たちの存在など必要ないのだから。さあ、次は自分たちの出番だと剣、斧、槍など武器を持つものは吠える。凄まじい威圧感、かつてないほどの試練に英雄たちは感謝した。

「よし！俺たちも行く。いいか、ただ生き残ることを考えろ!!アタラシテが矢を射るまで囷に徹するんだ!!」

こちらに向かつてくる触手を槍で受け流しながらメレアグロスは叫んだ。勇ましい英雄たちは物怖じせず怪物に向かつていく。

「.....」

◇ その光景をヘラクレスはただ静かに見守っていた。

「ちっ——マジで効いてねえじゃねえか」

槍使いのカイネウスが切りつけながら愚痴をこぼす。触手を躲しながら一撃離脱で攻撃を加えているが今だ怪物に傷を与えることが

できずにいた。

「口より手を動かさなさいカイネウス。死にたいのですか？」

「全くだ、ポルクスを見習うがいい」

それを嗜めるはディオスクロイ兄妹。迫る触手を華麗にかわし、見事なコンビネーションで怪物に向かつていく。それに続きあらゆる英雄が時間稼ぎのために各々防ぎながら攻撃を行っている。

「へっ、イアソンの野郎がいたらどうしてただろうな。勇ましく…いやそりゃないか。あいつのことだうるさく逃げ回ってんだだろうな。まったくアイツがいてくりやもう少し愉快な戦いになったんだが、な!!」

槍を振り回しながら嘆くカイネウス。アルゴ船の面々には

” おいお前たち!!私を守r——ひいひいひいひい”

逃げ惑うイアソンの姿が浮かぶ。

「…居ない者を求めてもしょうがなからう。我らはただその時を待つのみ」

しかし怪物の攻撃は凄まじいもので次第に英雄たちは押され始める。幾ら傷つけてもすぐさま癒えるその身体、隙について矢を射ようとも触手ではじかれる。これではアタランテが矢を射ても無駄足で終わるといふもの。次第に周りの士気も下がり始める。

だが、その状況でも男は自らの渾身の一撃を加えようと槍を構える。カリュドーン王子メレアグロス、槍投げの名手であり薪の英雄と称される者。狙うはただ一つカリュドーンの怪物。

「ぐぐぐぐぐつ——止めてやったぞメレアグロス!やれええええ!!」

怪物の突進を受け止めた男が叫ぶ。メレアグロスはその瞬間を待っていた。

大きく振りかぶった腕には何の変哲もないただの槍。しかし、彼には槍投げの名手として逸話が残されている。曰く、この男が投げればその槍は相手を貫くために流星のごとく飛んでいくという。

薪の英雄は上体を反らし——

「我が槍、その身で受けてみよ——!!!」

怒号と共に、その槍を怪物に放った。

「■■■■■■■■■■■■■■■!!」

己を穿たんとする槍が迫る。全力でこれを防ごうと身にまとった触手で迎撃する

が、

「.....■■■■■■■!?!」

星が落ちる速度で放たれた槍に敵うはずもなく触手は全て砕かれていく。それでもなお槍を止めようとするが

「——獲った!!」

受け止めることはなく、その横腹に槍が突き刺さることとなった。■■■■■■■■■■■■■■■!!!」

予想外の一撃に悶える。この槍を放った者を最大の脅威と決め周りを見渡す。

その時、一瞬たった一瞬ではあるが怪物の意識が全てメレアグロスの方へ向かった。

——その隙を“彼女”が見逃すはずがない

遠く離れた場所から神速のごとく放たれた矢が深々と怪物の耳の後ろに突き刺さった。

◇◇◇◇

英雄たちが戦うその様子を少し離れた場所からアタランテは見下ろしていた。そばには顔を布で隠した男がいる。

『さてと僕らも用意を始めようか。もたもたしていると彼らが可哀そうだからね』

そうやってケラケラと笑う男。アタランテはその態度が癪に障つたものの今はあの怪物を殺すことだけを考える。

「しかし、あれに効く毒などあるのか？」

『あるとも、これさ』

小瓶に詰められたものを見せられる。それは思わず顔をそむけてしまうほど禍々しい醜気を放つ液体。

「っ...それは、いったい」

小瓶を振りながら男は答える。

「ヘラクレス君が行った12の難業は知っているね。その中の二番目の試練で倒された九つの頭を持つ蛇——ヒュドラの毒さ」

その毒はあらゆる生き物を蝕み即座に死に至らしめる。その毒を塗られた矢で射られたケイローンはあまりの苦痛にその身に宿る不死性を捨て去るほどだったという。

『この毒は不死を持つ者に対して天敵のようなものでね、疑似的な不死性を持つ彼にはこれ以上ないものさ』

そうして小瓶を投げ渡す。それを受け取ったアタランテは自らの矢に毒を塗り込む。触れてしまえば簡単に死に至るその毒を全く臆することなく使うことを選んだ。

アタランテにはカリュドーンの怪物の姿は見えていない。話に聞いた通りまるで霧に包まれているようにその姿は分からない。それを疑問に思うことはなかった——そういうものだど認識するように魔術をかけられたのだから

「我が槍、その身で受けてみよ——!!!」

メレアグロスの放った槍が怪物に突き刺さったのだろう。その意識が一瞬逸れた

その時をアタランテは待っていた。弓を振り絞り狙いを定め、矢を放つ

「ふっ——!!」

神速の速さで撃たれたその矢は怪物の耳の後ろに命中。これによつてアタランテは役割を果たしたのである

『いやー見事見事！少し誤認させたただけで本当にやってしまうとはね』

男は拍手でその行動を褒めたたえる。

『——自ら夫を撃ちぬくなんて、ね』

静寂が訪れる。アタランテは目の前の男が何を言っているのかわからない様子。

「——はっ？・汝はなにを言って…」

夫？なにが、誰が？何処に、メラニオスー？

に排除するための齒車に過ぎなかつたことを。

頭を抱え泣き叫ぶアタランテに男は話しかける

『はあくアルテミスの時もそうだったが、女性を騙すのは心が痛むなあ…ほらいいのかい？このままじゃあ彼、殺されちゃうよ』

そうだ…まだ間に合う。アタランテは懐にある黄金林檎を握りしめた。

「ああ、これ、これならばきつと——！」

“お守り代わりと言っちゃあなんだけど。怪我した時や病気になるった時に使うといいよ”

彼の言葉が正しいなら、ヒュドラの毒であろうと治せるかもしれない。事実、アタランテの持つ黄金林檎はあらゆる病、致命傷すらも治せるほどの代物だった。

こうしてる合間にも英雄たちの攻撃ははじまっている。時間はなにとすぐさま走り出したが、動揺からか、それとも焦りからか、かつて最速の狩人と言われたその走りはなくアタランテがメラニオスのところへたどり着くのは遅れることとなる

その場に一人残された神は呟く

『——まあ“彼”がいる以上結末は決まってる。そのために呼んだから』

◇◇

「■■■■——かあああああああああああああああああ」

毒矢を撃ち込まれた怪物はあまりの苦しさのにたうち回っていた。もはや魔猪の姿を維持することも敵わず所々ドロドロと溶け始めている。これが普通の魔獣の類であれば、手を出す間もなく討伐ができたことだろう。

誰もが勝利を確信し、互いの健闘をたたえていた。我々の勝利である、と

しかし、ある男は“このままでは怪物討伐の功績は全てアタランテのものになってしまう”と考えた。自分は名を上げるために参加し

たのにこれでは得るものは何もない。そうして男は走り出した。

「お、おいアンカイオス！不用意に近づくと…」

「うるせえ！（あんな女に負けてたまるかよ!!）」

自慢の斧を振り上げながら怪物に向かい走り出したアンカイオス。怪物はその場にうずくまり苦しそうに唸っている。獲った!!そう確信し斧を振り下ろした――

「へっ――」

と、同時に全身に痛みが走る。一瞬何が起こったか分からなかった。自分は確かに斧を振り下ろしたはず、そのはずだが。

「うおおおおお!? 離せ! 離しやがれ!! あがあああああああ――」

男の身体は怪物の巨大な口の中にあつた。鋭い牙に啜えられており怪物が少しでも力を籠めれば断ち切られるだろう。だが…

「ひっ!?――痛、イダイ!! おねが、やめ、やめで、あ、あ、あ!!」
怪物はすぐに殺そうとするのではなく、啜えたまま男をぶんぶんと振り回し始める。そのたびに骨が碎かれる音と泣き叫ぶ声が鳴り響く。必死に助けを懇願すアンカイオス、だが誰も動くことはできなかった。

それを何度か繰り返すうちにアンカイオスはぐったりとして動かなくなってしまう。怪物はその後もしばらく振り回してたもののがて興味をなくしたのか、その死体を一口で平らげてしまった。

英雄たちはその場に立ち尽くすことしかできなかったのである。

ヒュドラの毒は確かに怪物に対して効果はてきめんだった。事実、その身体は溶け治癒能力も身体の修復の方にまわしているため普通であればもはや動くのも不可能のはず。

もし誤算があつたとするならば――既にこの怪物は一万年以上前に同等以上の苦しみを味わっていたことであろうか。この程度の苦しみでは彼は死にきれないのだ。

「■■■■■■■■■■!!」

再び触手をまとい英雄と相対する怪物。誰もが自分たちの勝利を疑わなかった、しかしどうだろうこの怪物は猛毒を射されてもまだ死

なない。諦めよう、撤退だと叫ぼうと考えたとき

「……何を立ち止まっている。見よあの怪物を、すでに身体は溶けだしており、口から血を零している!!まさに今が好機!!」

そう鼓舞するのはこの男メラアグロス。槍を抱え果敢に怪物に突っ込んでいく。

「ツ…俺たちも続くぞ!!ここであの怪物を倒す!!」

「おおおおお!!」

それに続いて彼らも走り出す。勿論無策などではない、自身が持つ肉体の極致それをいかに発揮させながら怪物に挑むのだ。迫りくる怪物の魔の手、それを振り払いながら攻撃を繰り返す。

「がっ——」

一人また一人と貫かれ、押しつぶされていく。それでもなお英雄たちは止まらない。

「合わせろ!ポルクス!」

「はい!兄様!!」

双子のコンビネーション攻撃により正面の触手が切り裂かれた。と同時に怪物が突進をしてくる

「オラア!!」

それをカイネウスが槍で無理矢理受け止める。だが完全には抑え込めず、身体が後ろに仰け反りながらも必死に耐えている。

「よくやったカイネウス!!あとは俺が——」

怪物の首筋にメラアグロスが槍を突き刺す。鮮血が宙を舞う。

「ぐっ——」

槍は怪物の首に深々と突き刺さっている。それでも怪物は止まることはなかった。押しとどめていたカイネウスを吹き飛ばし、触手でメラアグロスの心臓を貫いたのである。

「?????」
「?????」
だが、メラアグロスが死ぬことはなかった。むしろ突き刺さっていた槍で怪物の首を捻じ切らんと力を込めた

「はああああ!!」

怪物は疑問に思ったことだろう。

” 心臓を貫いたはず、何故この男は死なない?”
自分の首を槍で振じ切ろうとしている男に対して恐怖を抱いたに
違いない。

カリユドーン国の王子であり薪の英雄と称されるメラアグロス。
その由来については彼が産まれたときに女神から祝福され、そして予
言された呪いによるものである。「この一本の薪が燃え尽きるときこ
の赤子は死ぬ」それを聞いた彼の母親は薪の火を消し大事に保管し
た。

「それ故彼は——」

「」

「カリユドーンの怪物よ… 覚悟!!」

「——不死身の英雄である

怪物の首が斬られる。巨大な頭が地面に落ち、その巨体は崩れ落ち
た。しかしメラアグロスは侮らない。怪物がこの程度で死ぬはずが
ないのだ。再び槍を握り振り下ろす。

「あ——」

もはや限界だった。首は落とされ、毒も回り身体を変化させること
ができなくなった。槍が振り落とされる瞬間、人間の身体に戻ってし
まう。メラアグロスと目が合った。

英雄と怪物、言葉は交わされることなく槍は怪物の心臓に突き刺
さった。

◇◇◇

アタランテがたどり着いたとき目にしたのは心臓に槍が刺さった
メラニオスの姿だった。

「メラアグロスもうやめてくれ!!」

すぐさま駆け寄る。既にメラニオスの意識はなく、アタランテに寄
りかかるように倒れ込んだ。メラアグロスは少し驚いたようだが、ア
タランテの様子から察したのだろう。

「そうか、貴殿がメラニオスか」

周りの英雄達は”とどめを刺すべきだ”と野次を飛ばす。メラア

グロスの手にはなおも槍が握られている。

「頼む… 彼は、メラニオスは私の「……何人も死んだ、民も、戦士も。俺はその怪物を殺さなくてはならん」

血を吐き、今にも倒れそうな身体を支えながら冷徹に告げる。

「っ… それでも命だけは… 私が出来ることならなんでもする、だから…」

それにもかかわらずアタランテは懇願し続ける。愛する者を救うため、たとえそれが怪物だとしても。己が髪に背くとしても。

「なにしてやがる！とどめを刺せ！」

「アタランテ、テメエ邪魔してんじゃねえ。お前ごとやってもいいんだぞー！」

もはや我慢の限界だと、次々と英雄達から不満があがる。それをメラアグロスは手で制し、小さな声でアタランテに告げた

「アタランテ、逃げる用意をしておけ」

「えっ……」

地面に転がっていた怪物の頭を持ち上げ宣言する

「聞け！——カリユドーンの怪物はこのメラアグロスが討ち取った！！よって今回の最大の功労者であるアタランテに褒美を与える！」

メラアグロスはアタランテと向かい合い

「ほら、約束通りの毛皮だ。その男もついでに貫つていけ」

切り取った毛皮、そしてメラニオスに目を向けながら差し出した。一度も話すことはなく、殺し合うだけの関係。それでもアタランテのことを想っていたのは同じであった。

「メラアグロス！… すまない恩に着る」

毛皮を受け取り、肩にメラニオスを担ぎアタランテはすぐさま森へと駆けて行く。

だが、英雄達が黙っていない。不満、怒り、それをメラアグロスにぶつける。

「メラアグロス、貴様どういふつもりだ！」

「どういう？はて、なんのことやら」

「なぜあれを殺さなかった！これでは死んでいった者達の無念が報わ

れぬではないか！」

「… 惚れた女の願いだ。叶えてやりたいのが男というもの… なんだ？ 不満があるのならば武器を構えろ、存分に受け止めてやる」

「き、貴様——！」

そうして不満を持った英雄達とメラアグロスの戦いが始まった。これが原因で後に彼は命を落とすことになるのだが、それはまた別の物語である。

「たくつ、何だつてんだ。なあ、ヘラクレス。お前も見てるだけじゃないか何か？ ———ヘラクレス？ どこ行つたんだ？」

◇

「メラニオス！ おい、メラニオス！ 頼む目を、目を開けてくれ…！」

浅い呼吸を続けるメラニオス。毒が完全に回り心臓は貫かれ既に虫の息。まだ命を落としてないのは彼が怪物たる所以だろう。

「林檎、この林檎を食べてくれ！ 汝が言っていただろう、あらゆる傷を癒すと。さあ、食べる！」

黄金の林檎を口元へ差し出すが、当然口を開けられるはずもない。

「… ならー！」

林檎を齧り、直接メラニオスの口へと運ぶ。苦しそうに唸っているが今は時間がない。無理矢理でも口をこじ開け、口移しをした。

「むぐつ… ゴクツ」

林檎を飲み込んだとたん身体が光りだし、みるみるうちに傷が癒されていく。身体を蝕んでいたヒュドラの毒さえも消え去りメラニオスは目を覚ました。

「アタ、ランテ？… アタランテ！ なんで、なんでここに…！」

彼女を守るために怪物として人間を蹂躪したのだ。怒りがこみあげてくるのがわかる。あの神は結局のところ最初から約束を守る気などハナからなかったのだ。

今からでも喰らいに行つてやると立ち上がろうとするとアタランテに引き留められる。

「すまない… 私は、汝を信じて待つことができなかった。アルテミス様の信奉者としての自分しか見えていなかった。汝に矢を、毒を撃

ち込むなど……本当に、本当に——」

涙ながらに話すアタランテ。

……そんな顔を見たくない、君には笑っていてほしいから。僕がいなくても、子供たちと一緒に

「ごめんね、ごめんね。ああ、どうか泣かないで。大丈夫だから、帰ろう。ね？」

まだ、完全には回復しきっておらず少しふらついてしまう。血が止まらない、このままじゃ貧血になるかもしれない。林檎をひと齧りし歩き出す。勿論二人で一緒に。

「子供たちが待つてるんでしょ？……約束したんだ、帰るって」

もう間もなく日が暮れる。二人は共に歩き出し、再び安らかな日々を送ることが出来る。争いとは無縁の生活。きっとそれは幸せな——

「——それは無理な話だ」

大男が立ちほだかる

「黒き怪物よ、私は神々の命により——お前を殺す」

ギリシヤ最大の英雄が、十三番目の試練のため二人の前に現れた。

狩人と怪物ED 「愛してます、いつまでも」

「お前を殺す」

神々の命に従い、二人の前に立ちはだかったヘラクレス。手には光り輝く名剣マルミアドワーズを握っている。かつて火の神が鍛えヘラクレスに授けし剣。奇しくも一万年以上前、怪物を撃退せしめた聖剣と起源を同じとする神造兵装である。

「へ、ヘラクレス。なぜ・・・」

アタランテが驚愕の表情で尋ねる。追手がくるだろうとは読んでいたがまさかこの男、ヘラクレスが自分たちを追ってくるとは、考えうる最悪の展開だ。

・・・いや、当然のことだろう。この男は先ほどの討伐作戦の中でただ一度もその力を振るうことがなかったのだ。全ては今日、この時、完全に弱り切った怪物^{メラニオス}を確実に殺すため。

メラニオスはヘラクレスを睨みつけ臨戦態勢へと移る。だが魔力切れなのか、それとも一度「核」を完全に貫かれたせいなのか定かではないが身体を完全に変化させることすらできず。人の形を保ったままアタランテを庇うように前に出ることしか出来なかった。

「怪物の姿を形取ることも叶わず、か」

「・・・お陰様でね」

向かい合う二人。アタランテはどうすればこの場から彼を連れて離脱できるか考えを巡らせていた。自分だけなら可能であろうが、立ってるのもやつとな彼を背負っては不可能だろう。何よりヘラクレスがそれを許すはずがない。ならば、と弓を構えメラニオスの隣に立つ。

「アタランテ・・・お前に用はない。ここから立ち去れ」

「断る。生憎と私たちの帰りを待つ者がいるのでな、ここで終わるわけにはいかない」

手が震える。真っ直ぐ視線を合わせることすら恐怖で染まりそうになる。相手はギリシャ最大の英雄、相手にとつて不足はない。

「駄目だ・・・アタランテ、君は・・・帰らなくちゃ」

メラニオスはさすがのような目で否定してくる。一人で立ち向かうつもりなのだろう。まったく、無茶なことだと分かっているだろうに。

「メラニオス、私たちはいつも共に乗り越えてきただろう。今回も同じだ……一緒に帰ろう」

そうだ。帰らなくては、あの子たちが住む家へ。しかしあの村で暮らすことは難しくなるだろうな、二人を連れて旅に出るのもいいかもしれない。きつとそれは幸せだろうな。

そんな叶うはずのない幻想をアタランテは思い描く。

「……わかった。」

覚悟を決めたような声で呟き、メラニオスは垂れ流されていた血に魔力を込める。自らの身体をなんにでも変化、擬態させることができる力。呪いともいえるその力でその血を一振りの剣に変化させた。残存魔力全てをつぎ込みその血は不完全ながらもヘラクレスの持つ“マルミアロワーズ”に擬態して見せた。

「どういうつもりだ。剣を創った程度で私に勝てるんでも？」

それは怒りか、それとも侮蔑か。“怪物の力を振舞えないお前に何ができる”その目はそう語っている。

「怪物としての僕は死んだ……だから今からは、人としてメラニオスとして、貴方を乗り越える」

人の身で神の領域まで至った者。対してこちらは瀕死の怪物に獣に育てられた狩人。どう考えても無謀だ。でも、それでも彼女とアタランテとならもしかしたら……

「愚かな。自分がしてきたことを分かっているのか」

ここに至るまで多くの民、英雄が犠牲となった。それを大英雄は許さない。人々の恨み、憎しみ、それらを背負って彼はここにいる。

「それでも僕は——生きたい」

剣を構えヘラクレスと相對する。無謀な戦いだ。でも……

——よかった

誰に感謝すればいいのか分からないけど

今度こそ

生きる

今回こそ

帰る

君と、アタランテ

死にたくない

この日のために生きてきたのかもしれない

ああ、誰かのために戦えるのはなんてすばらしいんだろうか

「そうだ、僕は……」

◇

ふと気が付くと地面に倒れ伏していた。どうしたんだろう、僕はさつきまで……

『うん、うん、ヘラクレス。よくやった流石だね』

……?

「ゴフツ…… かなり、こちら痛手を負った」

——あれ?

「メラ…… ニオス。お願い、にげて」

え…… なにが?

『あ、起きたんだメラニオス君。——もう終わったよ』

…… おわた?

『ヘラクレス、君はもう下がっている。傷の治療も必要だろう』

ニコニコと笑みを浮かべ覗き込んでくる。何、何で、嘘、やだやだ

やだやだ

『負けちゃったね。メラニオス君』

……… たまけ?

『君は本当に手ごわかった。まさか戦いのさなかでヘラクレスの剣術を完璧に模倣してしまうとはね。でたらめもでたらめ、怪物の名にふさわしかったよ…… まあ彼の方も存外でたらめだね、君のカウンターに更にカウンター仕返ししたところなんて思わず手をたたいてしまったよ』

アタランテはうずくまっている。吹っ飛ばされたのかもしれない。

血が出てる、血を吐いている。早く行ってあげなきゃ、駆け寄ってあげないと。

『アタランテちゃんの援護も素晴らしかった。君の攻撃に合わせて的確に矢を放つのが。流石の腕前と言うべきだったから思わず邪魔をしてしまったよ。こちらが一手誤っていればさすがのヘラクレスもただでは済まなかったかもしれないね』

ズルズルと身体を引きずる。手足は既に切断され地を這うことしかできない。言葉を発しようとしても掠れた呻き声が漏れるだけ。

『にしても人としてか…馬鹿だなあ。君は所詮怪物なんだ。分かっていたらろう？』

” ひいい、や、ヤダお願いします。許してください”

『いくら人を愛そうと』

” 愛しているアタランテ”

『誰かを助けよう』

” ありがとう。メラニオス”

背中を踏みつけられる。それでも僕は芋虫みたいに這い続ける。ズルズルと身体を引きずるたび自分の口から洩れる呻き声がひどく耳障りだ。

『君は、倒されるしかない悪なんだ』

「…やだ」

まだまだ、おわてない。

手足に魔力を込め治す。治すんだ。だって今までもそうしてきたんだ。

なおれなおれなおれなおれなおれなおれなおれなおれなおれなおれなおれなおれなおれなおれ…

「やだやだ死にたくない死にたくない死にたくない死にたくないお願いやだいやだいやだいやだ。まだ、まだ…死にたく、ない」

涙で顔を歪ませながらも前進し続ける。もう自分でも何を言っているのか分からない。ただ彼女にたどり着くために進むんだ。

進み続けるメラニオス。それでも神は前に立ちふさがった。

『———それ、君に殺された者たちも同じこと考えたと思うよ』

神は語る

『どうやって君を殺すかいつも考えていたんだ。どうせなら絶望的に終わってほしいから』

『だからまず最初に君をうんと幸せにしてあげることにしたんだ。彼女が君に興味を向けるように、君が彼女に恋をするように、アフロディーテを利用しながら少しずつ仕向けた。… まあ、あそこまで大ごとになるのは予定外だったがね』

『結果的に君はアタランテを愛し、疑似的な家庭を作り。… あははっ幸せだったろ？ そのおかげで家族を引き合いに出せば、まんまと怪物として暴れまわってくれたんだから』

『だいたいさあ——神を喰らい、人を殺めたお前が人間として生きていこうなんて望んでいいはずがないだろう？』

… そっかあ。じゃあ、もう終わりかあ

結局、何もかも幻想に縋っていただけなのかもしれない。アタランテを愛する心は偽物だったのかもしれない。何にも意味がなかったのかもしれない。

——それでも

渾身の力を振り絞った。手足を。… いや手足と呼ぶにはおこがましいな。風が吹けば崩れる四本の触手でしかないそれを生やした。

「やっど… 届いた」

メラニオスはようやくアタランテのもとにたどり着くことができた。

『… まだ動けたのか。いやあ、本当にしぶといなあ君』

アタランテを抱きかかえて歩き出すメラニオス。しかしながらその身体は既にひび割れてきており、風が吹く度に崩れ落ちていく。

アポロンは自らの弓をメラニオスに向ける。既に興味はないが、あまりにもそれが哀れだったので矢を放って終わらせてやるべきと考えたのだ。それをヘラクレスは止めた。

『何のつもりかなヘラクレス？』

「… もうあれは死んでいる。わざわざ貴方が手を下すまでもない」

『まさか慈悲のつもりかい?… まあ、いいや』

あつさりと引き下がり、アポロンは何処かへと消え去った。

その場に残されたのはヘラクレスただ一人。

「あなたは悪くない。どうか恨まないで。自分を信じて。あなたは強いから——私には、できなかつた」

愛した女が最後にそう言い残したのを思い出した…。私は正しいことをしたのだろうか。

——あの怪物にも誰かを愛する心はあつたのかもしれない。

ヘラクレスは歩み続けるメラニオスの背中をただ見送った。

◇◇◇

「まつて、待つて…。もういい、もういいのだメラニオス!…。お願いだから…。もうやめて」

ボロボロと崩れ去りながらも歩き続けるメラニオス。だがそれもここで終わり。身体を支えていた触手が崩れ去り地面に倒れこむ。それでも彼女を手放すことはなかつた。

ここまでか…。もう少し、もう少しだったんだ。君と子ども達のところに戻りたかつた。まだ生きていたい、死ぬのが怖い。なんでだろうな、2回目だつてのに慣れない。怖いんだ。

「そうだ…。林檎。まだ林檎を全部食べたわけではないだろう?!?さあ、口を開けろ!…。お願い、お願いだから」

首を振る。もう手遅れだ。自分を構成する核は砕かれこの時代から退去するのも時間の問題。既に下半身は崩れ去っている。

「私を置いて行くのか!…。いつまでも共に居てくれると言つていたではないか!…。置いていかないで…。私はまた一人に…。」

涙を拭つてあげる。大丈夫、君はもう一人じゃない。子ども達も村の人達もいる。きっと君を助けてくれる。だから…。そんなに泣かないで

上半身のみで身体を起こしアタランテを抱きしめる。アタランテは泣きじやくりながらもそれを受け入れた。それは、ほんの短い時間だったのかもしれない。それでも僕らにとつては永遠とも感じられ

るほどだった。

「また会えるさ。いつか遠い未来で」

さて、そろそろ限界だ。湿っぽい別れはあまり好かない。どうせならとびっきりの笑顔で、だろ？

メラニオスはアタランテの目を見つめ愛を伝える。

「アタランテ。僕は…君を…——愛しています」

…ああ、でも、願わくば…帰りたいな

出会った時と変わらぬ笑顔で彼女に別れを告げた。

身体が崩れ去る最中、最後に思い出したのは手を振り僕の帰りを待っていてくれる家族の姿だった。

◇

アタランテは涙を流し続ける。あんなに聞きたかった言葉なのに、とても嬉しいのに。

私は貴方に伝えれてない。まだ言えてないんだ。

「わた、私も。貴方のことを——愛し」

——全てを言い終わる前に、メラニオスは崩れ去ってしまった。

残ったのはただ黒い塵だけ。それも風が吹いたかと思うと何処かへと消え去ってしまう。一欠片でも掴もうと手を伸ばしたが、ただ空を切るのみで私の手には何も残ることは無かった。

「…まだ、言い終えてない…何も伝えていない…いつも、いつも貴方はそうだ…うう…ううううう」

抱きしめてくれる彼はもういない。残されたのはかつて夫だった怪物の毛皮と齧られた黄金の林檎。

嗚咽が止まらない。涙が止まらない。

「うう…ああ…あああああああああああああああああああああああああ——」

その姿をいつまでも月は照らし続けた。

◇◇◇

アタランテはいつまでも泣き続けました。その姿があんまりにも哀れだったのかある神がアタランテの姿を獅子に変えてしまったとも、アタランテはやがて獣のように狂ってしまったともいわれれています。

そのどちらが真実かはわかりませんが、やがてアタランテはある村にたどり着きました。その村の人々は快く向かい入れ、彼女を手厚くもてなしました。その後子供たちの世話や村の手伝いをしながら静かにその余生を送ったそうです。

アタランテは時折、獣の毛皮を撫でながら寂しそうに月を見上げていました。いつかまた、あの人と出会える日を願いながら、いつまでも、いつまでも――

◇

“いつかまた、遠い未来で”

彼の言葉を思い出す。どれほどの時が経ったのだろうか。すでに肉体は滅び、この魂は座に存在するのみ。

… 声が聞こえた。助けを求める声。その声にこたえるように手を伸ばし、私は何処かに召喚された。

「召喚に応じ参上した―― 汝がマスターか。よろしく頼む」

目の前にはまだ幼さが残るマスター？らしき者がいた。このような子供が英雄を召喚するなどという状況なのだろう。聖杯戦争… というわけではないのか。

「あつ、ああ!!ちよつとごめんマシユ、説明おねがいできる!?!用事ができちゃった!」

「え!?!先輩、何処へ…!」

そういうと眼鏡をかけた少女にこの場を任せられたのちどこかへと走り去ってしまった… 元気な子だ。あの子たちを思い出す。

「え、えつと… ます私たちの状況を説明させていただきます。ここ

は人理継続保障機関フィニス・カルデア——」

◇

ふむ… どうやら大変な状況ということは分かった。このような子供でさえ戦わないといけないなど。とはいえ耳を疑ってしまった。様々な時代の英雄達がこの場に集まっているとは… もしかしたら彼も。いや期待は辞めておこう。

「了解した。私でよければぜひ力を貸そう… ところであのマスターはどこへ向かったのだ？」

一向に帰ってこないマスターのことが気になった。挨拶ぐらいはしておきたいものだが

「すみません。もう間もなく戻られるかと…」

少し困ったような顔で眼鏡少女は答えた。

「——早く、早く!! もっと急いでよメラニオス!」

「こらこら。そんなに引つ張らないでよマスター。一体どうしたっていうんだい?」

おや、どうやら戻ってきたらしい。足音からして二人… ? 誰かを呼びに行っていたのだろうか。

召喚室のドアが開き二人が入ってくる。

「じゃじゃーん! 連れてきちゃいましたー!!」

振り向くとそこには

「あっ——」

あっけにとられた様子で彼はこちらを見ている。その黒い髪、赤い目。出会った頃と何一つ変わらぬ姿。

「アタ——ちよ?!… どうしたの?」

いつのまにか私は彼のもとに飛びつき、その胸に顔を埋めていた。この時をずっと、ずっと待ちわびていた。彼はちよつと困った顔をしながらもあの頃と同じように頭を撫でてくれる。

「… うう… うううう… ずっと待っていたのだ… ううう」

別れではなく再会による喜びからアタランテは涙を流した。

今度こそあの時叶えれなかった言葉を言える。誰が見てようが構うものか。この時間は二人だけのものなだけだから。

頬染めながらメラニオスは口を開く。

「えつと… ただいま、アタランテ」

叶うことのなかった、聞くはずがなかった言葉。ようやく、ようやく私たちの願いは叶ったのだ。

「——お帰り。メラニオス」

時代、場所は違えど再び出会えた。願わくばいつまでもこの幸せが続きますようにと二人は願うのだった。

〈 f i n 〉

狩人と怪物（短編）「嫉妬」

「むう…遅いな」

天幕の中でなにやら不機嫌そうなアタランテ。どうやら果実を売
るために出かけたメラニオスが中々帰ってこないので暇を持て余し
ているようだ。

「…迎えに行つてやるか」

幸いにもすぐに彼を見つけることができたが…

「まったく…何をやってい——」

声をかけようとして思いとどまった。

その目線の先では別の女性に話しかけられているメラニオスの姿
が。どうやら果物の話題でたいそう盛り上がつてゐるようで…

「えー！お兄さん凄いいですね!!」

「そんなことないよ。友人から教えてもらったただだし…」

「またまた謙遜しちゃつてえ…どうです？良かったら私の家で
もつとお話とか…？」

「いや、それは流石に「おい…何をしている」あつ、アタランテ。ご
めん待たせちゃつたか」

突然後ろから声をかけられたので女性は驚いたようだがそんなこ
とはどうでもいい。当のメラニオスは呑気に手を振つてくる…な
ぜだか胸の中でモヤモヤしたものが溢れてきた。

女性をぎろりと睨めつけながら彼を引つ張る。

「…帰るぞ」

「え、ちよつ——いたたた！首！首が絞まつてる！」

ズルズルと首根っこを掴まれ引きずられるメラニオス。必死にア
タランテに訴えるも彼女は何も答えず無視するばかり、これは抵抗は
無駄だと考え大人しく寝床まで引きずられることにした。その様を
道行く人々にみられるのが何とも恥ずかしいことやら。

「えつと…なにかあつたの？」

着いたところでメラニオスは開口一番そんなことを聞いてきた。

「…先ほどの女は誰だ」

「え」

「誰だと聞いている！」

「ぼ、僕が持つて行った果実を買ってくれた人… それだけだよ」

「… ほお、それだけと言う割には随分と盛り上がったではないか」

怒り心頭のアタランテ。このような彼女を目にするのは初めてのためメラニオスはタジタジになってしまう。

「その… 果物を美味しいって言ってきて… つい話題が… 盛り上がって…」

「それで私をほったらかしにしたと」

「…ごめん」

しゅんつと小さくなるメラニオス。彼女の機嫌は治らず、この雰囲気気になりますすぎて逃げ出したいという欲求に駆られている。

「… できる」

「え？」

「私にも汝とそのぐらいの話ならできるのに…」

涙を浮かべ、ぼそつと言葉を零す。

「嫌だった、汝が他の女と話しているのが… 心配だった」

「… うん」

「今までだって我慢してたのに…」

「我慢？」

「そうだ… それなのに汝は誰にでも笑顔を振りまく。だから今日みたいなことになるのだ」

“ そんなことないと思うけど ” と苦笑いをしながら両手を広げるメラニオス。大人しくその胸に身体を預ける。

「私が汝の妻なのに… 他の女と仲良くするのは… ダメだ」

ぐりぐりと頭を押し付ける。彼は優しく頭を撫でてくれた… ふっ、くすぐりたい。

「ずっと… ずっと、私だけを見ていてほしい」

「うん」

「本当に汝のことを… その… ゴニョゴニョ」

面と向かって言うのはやはり恥ずかしい。でも本当に貴方のことを私は――

「ん……ふふっ、そんなに抱きしめられると苦しいぞ」

黙って抱きしめてくるメラニオス。それが何とも心地いいもので顔がとろけてしまう。

「好きだ」

「……もっど」

「君が好きだアタランテ」

「もう一回」

「……大好き」

「うん……私も」

より一層強く抱きしめる。この空間には二人だけの時間が過ぎていく。

「でも……私を不安にさせるところは嫌いだ」

「あははっ……うん、気を付けるよ」

いつまでもこの時間が続けばいいのにと思うアタランテであった。ずつと、ずつとそばにいてくれ――メラニオス」

狩人と怪物（短編）「もしも」

「——怪物はいつまでも…ありや、寝ちやつたか」

メラニオスが二人の子供を寝かしつけていた。二人の可愛らしい寝顔を見ると自然と笑みがこぼれてしまう。

「寝かしつけご苦労様…ふふっ、いい寝顔だな」

子供たちの頭を優しくなで、アタランテは微笑む。

二人はあの戦いから逃げ出すことができた。大英雄は追い付けず、神はその姿を見失った。命からがら逃げてきた二人は数か月ぶりに子供たちの下へ帰ることができたのだった。

「帰ってきてからは貴方にべったりだな…少し妬いてしまう」

「え〜大人げないなあ」

意地悪く笑みを浮かべる彼にアタランテはムツとした表情で答える。

「…私だって貴方とこうして暮らせるのを夢見ていたんだ…少しぐらいいいではないか」

その肩によりかかるとしてアタランテが隣に座る。子供たちが寝静まった今だけはこうして二人の時間が訪れる…それがたとえ幻想にすぎないとしても。

「どうしたんだい…珍しいな君がここまで…その…あははっ」

「…んん、笑ってくれるな」

しばらくの間、寄りかかるアタランテの頭を撫で、時々零れ出る色っぽい声を楽しむメラニオス。ふと撫でるのを止めてしまうと不満げにこちらを見上げる彼女の姿が可愛らしい…そんなことを続けていると

「これではまだ満足できない。ほら、腕を広げろ…そう、そうだ…そのまま抱きしめて」

首に腕が回されしっかりと密着する形となる。

「こうして甘えられるのは今だけなのだ…もっと強く…貴方を感じさせてくれ」

お互いが相手の体温を確かめ合う。それはぬくもりがあり、相手が

そこに存在しているのだと実感することができる。

「… 昼はあの子たちに譲ろう… でも今だけ、この時間だけは私の、私だけの貴方でいて欲しい」

抱きしめあう力が強くなる。彼女の顔を見ようとしてもこちらの胸に顔を押し付けているので赤く染まったその耳しか見ることができない。でも、どんな顔をしているのかは容易に想像することができた。

「たとえ老いてもずっと私の側にいてくれ」

「… ああ」

「なにがあっても帰ってきて」

「………」

「… 愛してる」

「うん」

——時間は刻々と過ぎゆく。覚めてしまうからこそ夢は幸せな記憶となる。

「……… そろそろ眠らなきゃね」

「もう、か?… もう少しこのままでも——わっ」

彼女の身体を抱え寢床に運ぶメラニオス。突然のことで動揺する彼女だが、いつかの光景と重なりまた笑みを浮かべる。

「では、昔の様に一緒に寝よう… そうして起きたときには、その笑顔を見せてくれ」

黙って頷く。

ふと、窓の外を覗いた。

「ああ、見てくれ。今日も——月がきれいだ」

◇

古ぼけた小さな家に一人の老婆が住んでいた。かつてはギリシヤ随一の狩人と謳われたその面影は見られず、ただ静かに外の景色を見つめるだけの生活。

それでも多くの村人が彼女を慕い、いつも誰かが訪ね、世間話をしてくる。それに彼女は優しく微笑み耳を傾けていた。

「… いかんな、こう歳をとるとつい眠ってしまう… な」

子は巢立ち、孤独を感じることは多々ある。そんな時は目を瞑り夢の世界へ浸る。そうすることで、寂しさが紛れるような気がしている。

『——アタランテ』

その姿が色褪せることはなく、いつまでもそこにあり続ける。

「貴方は嘘つきだ。結局私は一人… 年甲斐もなく涙をこぼすこともあるのだぞ」

誰が答えるわけでも、誰に伝えるわけでもない、ただの独り言。

「… つか、また」

—— 遠い未来で、また貴方に…

月はその姿を見守るように、彼女を照らし続けていた。

短編集

短編 魔女と黒い男

ある海に囲まれた島国に魔女がいました。

魔女の名は“モルガン・ル・フェ”

「妖精のように無垢かと思えば戦乙女のように壮麗、かと思えば魔女のように残忍」

それは彼女を表すのにふさわしい言葉です。

魔女には一つの望みがあります。それはこの島、ブリテン島の王になることです。

彼女は父からブリテンの王に選ばれた者に与えられる神秘の力を受け継いでおり、自分が王になるのだと信じて疑っていませんでした。

しかし、邪魔が入りました。

魔術師マーリンの策略により、父ウーサーと異母の間に子が産まれていたのです。

魔女は焦りました。いずれ自分の脅威になりうる存在に違いないと。ですが、手を出そうにもマーリンや父が邪魔をしてきます。

自分には手駒となる存在がまだいません。何とかしなければと思いつつも、あてはなかつただ日々が過ぎゆくばかりでした。

数年が経った日のこと。海岸を歩いていると、一人の男が倒れていました。

男の側には折れた真紅の槍があり、その胸には何かに貫かれた様にポツカリと穴が空いているのです。

” づ… ”

驚きました。まだ息があるようです。もしかしたら純粋な人間ではないのかもしれませんが。

どうやら強力な呪いがかけられており、それが男を蝕んでいるようです。幸い魔女は解呪にも長けておりすぐに治してあげました。

「????????????」

魔術をかけるとあつという間に傷が完治していきます。よかった、これで安心です。

”ガハツーーーあ…生きてる”

驚きです。もう目を覚ますとは。

”…あの女が来るとは…予想外だった”

なにやらうわ言を言っているようですが、このまま無視されるのは癪に障ります。

”ん…貴方は…そうか、助けてくれたんですね。ありがとう”

ええそうです。助けてあげたのです。

”…じゃあ何かお礼をしなければ。とは言っても差し上げれるものもない…何か困りごとでもありますか？僕ができそうなことなら何でもやりますが”

ええ、当然です。

魔女は喜びました。この者が何者かはわかりませんが、その身に宿る魔力は絶大なものであり駒にするにはもってこいです。

「…私をこの国の玉座につかせなさい」

魔女の願いは生まれた時から何一つ変わっていません。この国を支配し自分の理想の国を造る。

そのためなら何だって利用します。それが例え、邪悪なものだとしても。

”綺麗な女性は誰も彼も、望みが大きいものだね”

そうして男は笑みを浮かべ

”ああ、いいとも！必ず君に”玉座”を渡そう!!”

それが魔女にとって最悪の結果を招くことを彼女は知る由もありません。

こうして、ブリテン島の崩壊は始まりを告げるのでした。

ーーーいえ、そもそも始まつていたのかもしれない。

ここは神秘の島、ブリテン。時代に残された、ただ一つの楽園。

…そういえば、この男の名を魔女は知りません。いちおうこちらも名乗り聞いてみることにします。

”そうだな…ギル…いや、ギルベルト。僕の名はギルベルトだ

”

男は名乗り、一体どこから出したのか黒い甲冑を着て歩き始めました。

こうして彼の名は歴史に刻まれることになります。アーサー王を裏切り、ブリテンの、円卓の崩壊を招いた騎士。

”裏切りの騎士ギルベルト”として

短編 騎士王と裏切者「終わりの始まり」

く決別く

一人の王と黒い騎士が塔の上で言葉を交わしていた。

騎士は語る。凶作は続く、異民族は増えこの地は人の住めぬ暗黒の大地になると。卑王ヴォーティガーンの力は増し、間もなくブリテンの民は死に絶える。

“君が頑張ってもこの国が豊かになることはない。例え戦いが減ろうとも、豊かになることがなければ民は不満を持つ。そうすればまた争いが起こる、ハナから詰んでるんだよ”

王はそれを踏みつぶし、理解されることなく進み続けることになる

それでも王は笑う。

“……つ、人のために自分を犠牲にすることはないだろう!”

彼はマーリンとは違い昆虫的な思考は持ち合わせておらず、人に近い感情的な思考で物事を判断する。それ故に非道に成りきれずにいた。だからこそ目の前の王を、どこにでもいる普通の女の子として見ていたのかもしれない。

しかし王は笑顔を浮かべ答えた。

『私が傷つけば国が豊かになる。見ていてください、サー・ギルベルト。すぐにではないが、この島を善き国にしてみせます。伝説に言うアヴァロンにも負けないように』

だから貴公も力を貸してくれ、と。

騎士は己の間違いに気づきそして嘆いた。

“……君は、王になるべきではなかった。どうせなら玉座に座するのではなく、王に仕える騎士であるべきだった”

その言葉が王に聞こえたかは分からない。

彼女は作り上げられた王に過ぎない。民の『理想』を実現すべく、自ら先陣を切り戦う。王としての尊厳など初めから持ち合わせてなかったのだ。

騎士は最初から分かっていた。あの日出会ったその時から、彼女は

人のためにその身を滅ぼすのだと。

だからこそ、いつか現実を知り膝をつく日がくる。その時に玉座を降りることを促せばいいのだ…。そう、目を背けていた。

騎士は彼女を侮っていたのだ。

こうして二人は決別した。二つの道が交わることはなかったのだから。

一方は繁栄を望み、もう一方は破滅を望んでいたのだから。

◇◇

く卑王と騎士く

ここは卑王ヴォーティガンが統治する城塞都市。その玉座でもう間もなく行われるアーサー王率いる軍との決戦のための会議が開かれていました。

周りには異民族の族長らが参列し王の言葉を待っています。

「王よ…間もなくアーサーが来ます！我らは一体どうすれば!？」

誰かが声を上げる。焦る必要はない、既に手筈は用意されている、そう王は答えました。

“バンツ”

突然、扉が開き一人の騎士が現れます。

『おお、待っておったぞ。円卓の騎士ギルベルトよ』

この場にいた誰もが驚きの声をあげました。まさかこの男が来るとは。

騎士ギルベルト。円卓に空気があつた際、番外としてその席に座るもの。

手には大英雄が振るつたとされる”大剣マルミアドワーズ”。その剣技は彼のランスロット卿にも及び、数々の敵を葬ったアーサー王の右腕ともいえるこの騎士が卑王の側に着くのだと。

“随分ピンチのようじゃないか、卑王よ”

『なに、予想通りの展開よ。奴らはこの玉座まで突破してくるであろうが、その時こそ奴らの最後。この儂自らが、ブリテンの黒き竜として存分に力を振るってくれようぞ』

歓声が上がる。

「冷酷なる卑王！偉大なるヴォーティガン！栄光あれ我が王
!!!」

卑王は不敵に笑う。

『それにサー・ギルベルト、貴様もいるのだ…フハハ!!楽しみである
ぞ、あのアーサーの悲痛に歪んだ顔を拝むのは!!』

アーサー王は信頼する臣下の裏切りに遭い戦意を消失、そこを一気に叩けば卑王の勝利は確実。ついにブリテンの地は人が住まれぬ暗黒の時代になるのだと、喜びの声があがったことでしよう。

しかし、その騎士は喜ぶことも、いえ…表情一つ変えることなく『クハハハハッ!!…おいまて貴様なn——!』

その手に握った大剣を振るい、その場にいた人間たちを例外なく切り裂いた。

飛び散る血しぶき、零れる苦悶の声。玉座はあつという間に地獄絵図と化した。

『…儂すらも裏切るといふのかギルベルト?』

部下たちが殺されたのは問題ではなかった。竜の血を飲み、ブリテン島の意志その物と化した王にとって人間など下等種、取るに足らない存在だった。だがこの騎士は違う。人間ではないことは知っていた、自分と近い存在であると分かっていた。だからこそこの話に乗ったのだ。

“悪いね。うん、悪いと思ってるよ僕は…それに、戦わないわけじゃあない”

笑みを浮かべ、ゆっくり、ゆっくりと近づいてきます。

『何が言いたいのだ』

“どうせ、あの娘には勝てない…それほどまでにアレを縛る運命
というのは強固なんだ”

一步、その足を進めるたびに騎士の体には触手が巻き付いていく。
異形のものへと変わるその姿に王はたじろぎます。

かつてギリシヤ中を恐怖に貶めた異形の姿が闇の中で照らされました。もうすでに騎士としての姿はなく、本来の悪の者がその場に顕現したのです。

しかし流石は卑王、すぐに立ち直り威勢を放ち

『はっ、貴様程度、アーサーとの決戦の前の前座にすぎぬわ!!』

王は暗黒を身にまとい黒き竜と化します。そうして、大きなその手を振り上げ…

“ぶちgちやあgちやぐちや”

振り下ろされたその手は異形の怪物を叩き潰した。ぐちやつとそこから広がる肉片。実にあっけなく決着はついてしまいました。

『フハハハハハ、どうだ!!儂にかかれれば幾ら円卓の騎士だろうと——
—なんだ?』

王は気づきました。散らばった肉片が蠢いているのを、そして我が身に少しずつ纏わりついてくるのを。

『な、なんだこれは。ぐっ…と、取れぬ。ええい!やめい!儂にまわりつくな!!』

体中を掻きむしり必死に振り落とそうとしますが、そのたびに肉片の侵食はより深くなっていくのです。

“…君じゃ勝てない。だけどねブリテンの黒き竜。その身体が無惨に切り裂かれ、貫かれ、灰塵に帰すのは勿体ない…だから、ね?僕がその体を、その役目を引き継ごうじゃないか”

その言葉と共に王に纏わりついていた肉片が穴という穴から内側へ侵食し始めた。

『あああああああ!やめ、やめろおお!!入って、入ってくるなあ!!』
体を掻きむしり、壁に体を打ちつけますが何もかも手遅れ。

“お疲れ様、卑王。さようならヴォーティガン…どうか僕に身を任せて——”

◇

「王の力を疑ったことはありません。あの方こそ騎士の理想、自ら先陣を切る御姿、その背中を追いかけるたび私はブリテンの良き未来を確信したのですから」

そう語るのには円卓の騎士ガウエイン。前に座る誰かに我らが王の偉業を興奮気味に語っている。

「ですが、一度だけ……一度だけ、王の勝利を危ぶみ、その背中を見送ることしか出来なかった戦いがあります……魔竜ヴォーティガン、それがブリテンを破滅させようとする敵の正体だったのです——」

◇

あの日、卑王ヴォーティガンとの決戦の日。平野に展開されていた異民族の連合軍を蹴散らし、ついに我々は卑王が待ち構える城塞へとたどり着きました。敵城に乗り込み、残る兵士を叩き潰さんと突撃しましたが城内には人影一つなく、我々は困惑しました。

しかしながら、奴は城の奥にある玉座の間にて待ち構えていました。

『■■■■■■■■■■』

そこにいたのは人ではなく、黒き竜と化した異形の化け物、卑王ヴォーティガン。

ヴォーティガンの体から伸びた黒い触手により前線の兵士は貫かれ、口から放たれたその一撃により残りの兵士も蒸発し、我が聖剣ガラティーンの輝きは失われた。そして我が王の聖剣エクスカリバーの輝きも、もはや暗闇にともる篝火のようだった。

戦いは数時間に及び、ヴォーティガンの咆哮は暗雲を呼び、その身体を巨大化させていった。兵士たちの武器、死肉、崩れた城塞、それらを取り込み顕現する黒き竜……王は知っていたのでしよう。ヴォーティガンはブリテンそのものだと。

「アーサー王!!敵はブリテン島の化身、いくら聖剣と言えど敵いません!今は撤退を!!」

「もう少しだけ手を貸すものだぞガウエイン卿」

「王!?!」

何とアーサー王はこの状況でも戦い続けるというのです。そうしてこう続けました。

「私と貴公が揃っているのだ。島の癩癩の一つや二つ、静めてみせなくては聖剣の立つ瀬がない」

「っ!?!?..... はっ!」

この場に立っているのは我々二人のみ。恐れを知らぬのではなく、恐れを受け入れて尚立ち向かう姿に私は闘志を奮い起こし、共に魔竜へ挑みました。

そうしてついに...

「はあああああ!」

『■■■■!?!?』

魔竜ヴォーティガーンの手を切り裂き、飛び立たんとするその巨体を大地に体を墮とすことに成功。しかしながら武器を突き刺してしまい王は丸腰となってしまいました。

ですがその時、王の手に光り輝く槍が現れたのです。

「それは!?!」

「———最果てに光を放て」

「その輝く槍は...!」

「其は嵐の怒り———ロンゴミニアド!!」

そうして魔竜ヴォーティガーンは心臓を貫かれ敗れたのでした。

◇

「ヴォーティガーン...」

アーサー王は倒れ伏す卑王に近づいていく。それは宿敵の最後を見届けるため。

人の姿に戻ることなく、心臓を貫かれ死の間際の卑王はアーサー王を睨みつけ口を開きました。

『... 愚かな。ウーサーの子よ、貴様ではこの国は救えない。なぜなら、もう神秘の時代は終わったのだ... これからは文明の時代、人の時代が始まる。取り残されているんだ、僕も、君も。我らの根底にある力は決して人間と相いれない... お前がいる限りブリテンに未来はない』

「っ———」

『恨むがいいさ、このブリテンは当の昔に滅んでいる』

王が心臓に突き刺さる槍を引き抜くと卑王は笑い声をあげ、塵に帰っていきました。

戦いの終わりを告げた王の姿は何時にも増して光に溢れていた。あの姿を見届けたものは誰もがその力に感服したでしょう。それほどこの戦いは神々しかった。

我らがアーサー王がいる限り恐れるものはないと、そう確信したのです。

◇◇◇

「ぐっ…ガハッ…ガッ…不味いなこれ」

心臓を苦しそうに抑えながら黒い騎士は逃げるように森を進んでいきます。しかしながら限界がきたのかその場に崩れ落ちてしまいます。血反吐を吐き、切り裂かれた体は今にも消えてしまいそうです。

「(流石に、聖剣相手は分が悪すぎたか…卑王の力を得たのは大きい
が、これではな…)」

ですが騎士は一人ではありません。彼の主はいつも見ているのですから。

「——何をやっておるのだ我が騎士」

騎士に近寄り、治療を始める一人の魔女。

「ああ、助かるよ。モルガン…」

暗躍し続ける、魔女モルガン。それに仕える円卓の騎士ギルベルト。互いに利用し合う歪な関係がそこにはありました。

「些かお遊びが過ぎるのではないかギルベルト。あの場で愚妹を殺してしまえばよかったものを…まさか、絆されたとも言えないか？」

「…いくら何でも分が悪すぎたんだよ。聖剣の使い手が二人、そしてあの輝く聖槍…僕じゃあ勝てない」

しかしながら事は上手く運んでいる。城塞都市を落とすことにより新たな城が築かれることになる。そう、アーサー王はついに王都を奪還したのだ。

「…ああ、待ち遠しい。あの玉座に私が座るのを夢見るのは何度目であろうか」

魔女は確信する。もうすぐ、もうすぐだと。既に円卓の中には我が

子を幾人か入れている、後は内部から破滅するのを待つのみ。
「ギルベルト。お前には期待している…もうすぐ我が最高傑作を円卓に送り込む、利用してもかまわん。どんな手段を使っても私に玉座につけよ」

そういった後、魔女は闇夜に消えていった。

一人残った騎士は独り言を零した。

「モルガン…君の願いもまた、決して叶わないんだよ」

崩壊するブリテンの中、騎士は再び歩を進めるのだった。

短編 騎士王と裏切者「崩壊の始まり」

くアーサー王の栄光く

卑王ヴォーティガーンを倒したことにより、アーサー王は王都を奪還し、王妃を迎えた。

しかしながら作物の凶作は続いた。卑王を倒してしばらくは大人しくなっていた異民族も遠く離れた帝国からの援助もあり再び力をつけ始めている。

もはや軍を維持することもままならず、この国は限界を超えていた。それでもなおこの国を守らねばならないアーサー王は、小さな村を干上がらせ、わずかに得た資源で軍備を整える。それが焼け石に水だと分かっているが。

そのような非道な行為に多くの騎士は反対した。皆はそうでもしなければ国が維持できないことは百も承知であった。そう、理解しているとしても受け入れがたいことであった。

無論、村人の命は保証し別の移住先も用意してある。だがこの村の出身者にとっては生まれ故郷を奪われるに等しく、誰もが嘆いた。

当然、騎士たちや村の住人達から反感を買い、それによって手に入れた軍備で敵を殺すのだから、敵からも恨みを買う。

それでもアーサー王はかつて僕に宣言した通り、自分一人が辛いことになればこそ国は富むのだと信じて王は感情を殺して治世を続けた。

その思いは誰にも理解されることはなかった。王の行動は先代のウーサーよりも… 卑王ヴォーティガーンよりも冷酷なものや兵、騎士たちの目に移ったことだろう。

「王は人の気持ちに分からない」

そう言つて一人の騎士は去った。王の在り方は彼らの理想とかけ離れていたのだ。

… 王は人の気持ちに分からなかった、では騎士や民は何か一つでも彼女のことを理解しようと歩み寄つたのであろうか？

僕は今でも考える。彼らは王を“理想の王”としての側面しか見

ていなかった。そりやそうだ、あの子は普通の女の子に過ぎなかったのに、と。

それでも王は戦いを続け、ついに異民族達との最終決戦。数と勢いに勝るアーサー王の勝利。圧倒的な戦果の前に異民族は屈し誓いをたてた。

『アーサー王あるかぎり、我らはブリテンの地に踏み入らない』

異民族との戦いはひとまず終わりを告げ、そうして、内なる敵に滅ぼされようとしていた。

ランスロット卿と王妃ギネヴィアの不義の恋。魔女と魔女の騎士による策略を契機にブリテンは崩壊してゆく。

↳ランスロットとギネヴィア↳

王妃ギネヴィア、彼女と王の関係は極めて良好。彼女はアーサーを愛していた…。そう、初めはそうでした。アーサーに恋をし、慕い続け、そして結ばれた。

ですが…。その恋はすぐに打ち砕かれました。初夜、その場において彼女が恋した王は…。自分と同じ女性であることを知ったのです。十年の恋が実った、その日にそれが決して叶うことのないものであると思い知らされました。絶望へと叩き落とされた彼女は、しかし同時に王の境遇への同情を抱いたのだと花の魔術師は語りました。

女性として扱われることない王と自分の境遇を重ね、王の良き理解者として寄り添い絆を深めていきました。民衆には仲睦まじい夫婦に見えたことでしょう。

しかしながらこの状況を快く思わない者もいました。アーサー王の宿敵である妖妃モルガンの実の子であり、彼女がアーサー王を破滅させる為にキャメロットに送り込んだスパイと言われている“アグラヴェイン”彼は王と王妃の関係があまりよくないと考えました。

「貴方は王にふさわしくない。王が貴方との関係を不安がっているのがその証拠だ」

アグラヴェインは王妃に出くわすたびにそう告げ、次第に王妃は精神的に弱っていきました。勿論その小言を窘める騎士もいます。ギ

ルベルト卿とランスロット卿です。

彼はモルガンの実子ということ、いつか裏切るかもしれないという決めつけと、眉一つも動かさずに騎士を死地に送り込む冷徹な采配を行う人柄からか、円卓内においての嫌われ者でした。

そんな中でもギルベルト卿とは気楽に話す仲だったと言われています。表情は相変わらず硬いままでしたが、卿と会話しているときだけは肩の力が抜けているようだったそうです。

『君が王のことを気にかけているのは理解できるが、少々強引すぎる。もう少し見守ってあげるのもいいと思うけどね……それよりも最近眠れてるかい？随分と隈が深いようだけど』

諸々の事情を知るギルベルト卿はやんわりと注意しているに過ぎませんでしたが、ランスロット卿はそうはいきません。明確な怒気を持って詰め寄りました。

「卿はなにゆえ王妃を愚弄する!? 知らないのか、王妃が王に寄り添いその負担を減らすべく尽力しておられることを！」

「……だからこそだ。今の王にはあの女は必要ない」

「っ——」

二人が王の絶対的な忠臣ということには違いはありません。価値観の違いから相互理解することなど無理な話でした。

◇
なので……私たちはそれを利用することにしましたのです。

月明りもない暗い夜の目。ランスロット卿はいつも通りに自室へと戻ろうとしていた。そこであることに気が付いた、自分の部屋の前で誰かが立ち止まっている。はて？ 客人などいたものかと考えていると……それはこちらに顔を向けた。

「——王妃!? 何故このようなところに！」

ああ、見間違うはずもない。この女性は王の妃ギネヴィアその人だったのだ。いつもと違う真っ黒なドレスに身を包んでいる。

「一体どうしたのですk——」ぼすっ

突然、王妃はランスロット卿の胸に飛び込んできた。腕が背中に回り強く抱きしめられる。

「お、王妃」

「… お願い。今はこうさせてください」
「……」

心なしか震えている王妃のことを拒めず、その震えを鎮めようとするように優しく抱きしめかえすのだった。

「アグラヴェインめに何か言われたのですか」

「いえわたしが… わたしが悪いのです。あの人、王の苦しみを私人では負担することは出来なかったのです」

その気持ちはランスロット卿にとって痛いほどわかった。同時に目の前の女性を放っておけるほど腐ってはいなかったのだ。

王妃に跪いて誓うのです。

「あなた一人に背負わせるわけにはいきません。このランスロット、微力ながらお力添えさせていただきます」

それは嘘偽りのない言葉でした。

「ああ、嬉しい、嬉しいわランスロット様。きっと貴方となら！」

王妃は涙目ながらにその手を取り、答えたのです。

◇

「あら？ランスロット様、こんな夜にどうされたのかしら？」

時を同じくして寝床にへと戻ろうとしていた王妃。扉の前に佇む騎士を見つけた。

「御機嫌よう王妃… 風のうわさで少しばかりお疲れのようだと聞きましたので」

いつもと違う漆黒の鎧を纏う騎士は心底心配そうに王妃へ近寄る。

「いえ… わたしの事など王の苦悩に比べれば些細なものです。気にしないでください」

王の支えとなるべく健気に振舞う王妃。

意地を張る王妃を懐柔するように優しく騎士は声をかける。

「どうか私を頼ってください。貴方が苦しむ姿を見たくはない」

「ランスロット様…」

王の秘密を知ってからも偽りの夫婦生活を続けてきた。その間にも騎士の離反や相次ぐ問題の発生、王の精神は次第に摩耗していき、

それを支えていた王妃ギネヴィアも限界が近かった。

そんな時にあのランスロットが自分の助けになってくれる。自分一人では背負いきれないが彼となら…

「さあ、私の手を取って。大丈夫です、私たちなら」
思わず、その手に縋ってしまった。

「さあ」

「私たちで」「貴方と共に」

「アーサー王を」「ブリテンを」

「救いましょう」

その後は悲惨な結果が待っていた。

二人は共通の目的を持つ者として語り合い、認め合い、そして寄り添う関係に変化していつてしまった。

「ふっ、やはりか… 貴様らは王の側に仕えるのは間違いであったな」
二人が蜜月の時を過ごしている場を暴いたアグラヴェイン卿が発した言葉にランスロット卿は逆上。彼を斬り殺し、応援にきた他の円卓の騎士までも叩き斬って逃亡。

魔女達の思惑通り円卓は内部から崩壊してゆく。

ブリテンの終わりは刻一刻と近づいている

短編 騎士王と裏切者 「カムランの丘」

「息子と認められぬと… そうおっしゃるのですか騎士王!？」

兜を外し素顔を明かしたモードレッド卿は自らの父がアーサー王ということを知り意気揚々と話しかけに言ったものの、王がそれを認めることはなかった。

「お、俺は貴方の後ろにいるだけでよかった。なのに一度も振り返ろうとしないお前を、貴様を、貴方を!!… 何もかも!何もかも!!破滅させてやるぞ!!アアアアアアアアアアアアアアアア!!」

ただ認めてほしかった。振り返ってほしかった。その願いが伝わることはなく親子の溝は深まり破滅に向かう。

「——モードレッド?」

王が立ち去ってなお怒りに肩を震わせるモードレッドの前に黒い騎士が姿を現した。ランスロット卿の討伐事件において多くの騎士が失われても変わらずアーサー王に仕え続ける最古参の一人“ギルベルト卿”であった。

「ギルベルト」

「… ああ、そういうこと」

何やら悟った風なこの男が来たのは好都合だった。

「母上がいざというときはお前に頼れと言っていた。なあ?裏切り者のギルベルトさんよお、俺に力を貸してくれんだろ?無理ってんならこの場で貴様をぶった切る!!」

脅すような口調で詰め寄るモードレッド卿。既にその目はアーサー王への憧れなど一切なく、只々憎悪の炎をたぎらせていた。

「あははっ… 勘弁してくれよ。そんなに脅迫めいたことしなくても協力させていただくとも」

黒い騎士は薄っぺらい笑みを浮かべていた。

順番が違っていればこの騎士は王のため破滅を阻止しようともがいただろう。しかしながら魔女に助けられた。それ故彼は

「もう少し、安寧な終わりを考えていたけど… とうとう夢から覚めるときなのかもねアルトリア」

一人の女の夢を壊す。

◇

「では、後のことは任せましたギルベルト卿」

異民族を送り込んでくる元凶たるローマに反撃すべくブリテン軍は多数の船団を用意し攻め込もうとしていた。アーサー王の作戦はローマ軍が海に出る前に上陸し陸上戦闘において相手を蹴散らす。相手に反撃の余地を与えぬほど攻め込み講和会議に引きずりだすというのが狙いのようだ。

「了解した。でも王自ら出陣することはないんじゃないかい？いくら何でも危険すぎる」

「いえ、私自ら先陣に立ち兵を鼓舞することがこの戦いに必要なのです…。それにこれ以上民たちを苦しめるわけにもいかない」

「僕もついていこうか。ローマの大地を駆け、迫る敵を蹴散らすぐらいはできるけど？」

「ふふっ、その言葉はありがたいですが…。今この国を守れるのは貴方しかいませんギル」

先のランスロット卿の乱においてガウエイン卿は負傷、モードレット卿とケイ卿はそれぞれの担当地区で内政を行っているので離れることができない。他の騎士や領主も自分の仕事で精一杯であった。

「その呼び方はよしてくれと言ったら、虫唾が走る」

嫌そうに顔をしかめそっぽを向くギルベルト。その様子を微笑みながらアルトリアは言葉を続けた。

「覚えてますか？いつの日か貴方に宣言したことを」

「… うん」

“ 見ていてくださいギルベルト。すぐにではないがこの島を善き国にしてみせます。伝説に言うアヴァロンにも負けないように”

塔の上で少女は騎士に宣言した。絶対に実現して見せる、と希望に満ちた目で。

「貴方は無理だと、この国は滅びると…。そう言っていましたね。」

「ああ、それは今でも変わらないさ…。君がいくら自分を犠牲にして頑張ろうがね」

「いえ、この戦いでその戯言を終わりにしてみせます」

ブリテンの宿敵であるローマを討てば異民族の侵攻も収まる。ようやく安寧な時がこの地に訪れる。

「… 結果は変わらないさ」

「悪い冗談はよしてください、いい加減私も怒りますよ」

アルトリアは穏やかな笑顔で答えた。

「——戦うと決めたのです、選定の剣を抜いたあの日から。たとえばがあっても、この国を滅ぼさせたりなどさせない」

そう言つてアーサー王は軍を率いて港を出港していった。

それを黙つて見送るギルベルト。後ろを向いているので表情はよくわからない。

「… 僕を止めようとしませんか、マーリン？」

ギルベルトは背を向けたまま背後に佇んでいた魔術師に声をかける。

「おや、気づかれてたか。いやはや参ったね」

わざとらしく微笑むマーリン。

「止めるも何も… 君たちがどうしようがこの国の運命は変わらない。君だつてわかつていただろう？」

特に表情は変えず淡々と魔術師は喋る。

「… 貴方は間違えた。あれを王として作り出すべきじゃあなかつたんだ。もはや向けられた憎悪すらわからず、自分が苦しむことがさも当然であるとする。それが今のアルトリアだ」

理想の王は確かに完成した。しかしながら彼女はウーサーとマーリンが求めた理想ではなく人々の幸福のために戦い続けた。お互い見ていたものが違ったのだ。

「ああ、そうとも… もう少し早く気付くべきだったのさ」

“ ありがとう、マーリン。あなたに感謝を。私にとって、あなたは偉大な師だった”

「さて、私は引きこもるとするよ… 君もアルトリアも悔いのない結末を迎えられるよう祈っている」

「……」

◇◇◇

ブリテン軍とローマ軍の戦争は結果的にブリテン側の勝利に終わった。

『アーサー王ある限りローマはブリテンに侵攻しない』

かつて異民族相手に誓わせた約定と同様のものである。それは“アーサー王ある限り”というアルトリア自身が生きている間だけという仮初のものに過ぎなかったが…

凶作はまだ解決の目処は立っていない、だがこれで人同士の争いで国が滅ぶことはなくなつた。不安を胸に抱えながらも兵たちは安どの表情で故郷へと目指す。

しかし、彼らを待ち受けていたものは…

「お、王よ。み、港が、我らのブリテンが——燃えています!!」

一斉にどよめきが走る。何故?何故?

「伝令!伝令!モードレット卿とギルベルト卿が蜂起!!すでにキャメロットは陥落したとのことです!!」

二名の円卓の騎士の反逆。既に疲労困憊の兵の心を折るのには十分だった。

「(そんな、どうして…ギル)」

ようやく前に進める希望が産まれたところで積み上げた物が一瞬で崩れ去る。それが彼女の功の酬いだった。

◇◇◇

王に恨みがあるわけではない。只々限界だったのだ。

「ひ、ひいいいい」

民衆は「今は耐えてほしい、未来のために」という王の言葉を信じてここまでやってきた。しかしどうだ?争いは終わらず凶作は続く。

この戦乱はいつまでも続く困窮に耐えられぬ者が反逆者たちに縋ってしまっただけなのだ。

「お願いします!どうか、どうか命だけは…」

黒い騎士は剣を振りかぶる。目の前の騎士の命を絶つために。

「生まれたばかりの子供がいるんです!!」

振り落とされる剣が止まる。

「嫁は身体が弱くて、自分がいないと食っていけない。今ここで死ぬわけにはいかないんです……」

「……」

「殺さないで」 「家族に…… 家族に会いたい」 「助けろ——」

首が落とされる。黒い騎士は剣を納めており見逃すつもりであった。しかし隣にいる反逆者はそれを許さなかった。

「駄目だここで死ぬ。騎士の荣誉ある死だ、敵に命乞いなどするな」

モードレット卿は血でぬれた剣を拭い、黒い騎士を睨みつける。

「なに今更いい子ちゃんぶってんだ…… それとも何か、俺まで裏切ろうってんのか？」

「…… まさか。少しの気の迷いさ」

肩をすくめ歩き出すギルベルト。すると二人のもとに兵士が近づいてきた。

「モードレット様、ギルベルト様、ガウエインが挙兵しました。アーサー王上陸の援助ため港に向かっているようです」

「チッ、あの野郎大人しくしとけばいいものを」

舌打ちをして馬にまたがるモードレット。兵を集め指示を出す。

「半分はついてこい！俺がガウエインを討つ!!もう半分はギルベルトについてアーサー王上陸を阻止せよ!!」

兵士を引き連れモードレットはガウエインのもとに向かう。残った兵はギルベルトと共に港を目指した。

この反乱においてモードレット側に着いた諸侯は多くアーサー軍は劣勢である。それでもなお王に味方をする者はいた。

「——よお、相変わらず馬鹿げたことしてんじやねえか」

先王ウーサー・ペンドラゴンの騎士エクターの嫡男。幼少期からアルトリアとギルベルトと共に苦楽を共にし、長年王のそばにあり続けた円卓最古参の騎士「ケイ」である。

「驚いた…… 君のことだから真っ先に逃げ出したものだ」と

「はっ、そうだとも。こんな内輪揉めに付き合う義理はねえしな。今も逃げてる途中だ…… 偶々お前たちが俺の逃げ道に居ただけだ」

剣を構えるケイ。これは避けられないとギルベルトも同様に構え

る。それと同時に兵に向かって指示を出す。

「ケイ卿は僕が相手しよう。君たちは港にm「させねえよ」… ああ？」

ケイの背後に現れたのは多数の兵。

「逃げ回ってる途中にいつの間にか集まってきちゃってな… 悪いが付き合ってもらうぞギル」

「……」

僅かに顔を歪ませながら軍を率いて突撃をするギルベルト。それを迎い打つケイ。

「クソツ、いい迷惑だぜ… お前もアルも揃いもそろって大バカだったな」

◇◇◇

聖剣の輝きは失われ、大地は血に染まった。反逆者モードレットとギルベルトは討たれ、戦争は終わりを告げる。滅びゆく国をキヤメロットの上から魔女は見ていた。

「… ギルベルト。貴様これはどういうことだ！」

ワナワナと身体を怒りで震わせ魔女モルガンは血まみれの騎士に吠えた。

体を切り裂かれ、心臓を聖槍で貫かれ体は塵に帰り始めている黒い騎士。既に息絶え絶えの彼はズルズルと身体を引きずり魔女の顔を見て笑った。

「どういうことって… 玉座は手に入り名実ともに君がキヤメロットの、ブリテンの支配者だ」

よかったじゃないかと笑う騎士に魔女は怒りをあらわにする。

「支配する国も民もいなければ意味がないのよ!!」

腕を振るい騎士に向かって魔術を放つ。凄まじい爆発。

「」

特に抵抗することなく、騎士は地に倒れ伏した。

「あははっ… 神秘が支配する時代は今日で終わりだ。これからブリテンは人の時代が始まる。もう必要ないんだよ、アルトリアも君も… 僕も」

笑いながら塵に帰っていく。

「!!」

憎しみを込めた魔術をモルガンは再び放つ。ありったけの呪いを込めて、目の前の存在をこの世界から消し去るために。

死が迫ってくる。これはいつたい何度目の光景か。最早恐怖もない、淡々と自らの運命を受け入れる。

“ さあギル、剣を構えてください!! 今日こそ私が勝ちますから!! ”

騎士が最後に思い浮かべたのは自分に笑いかけてくる少女の姿だった。

「…アルトリア。君はやっぱり——」

◇◇◇

「違う、こんな結末私は認めることは出来ない」

屍が積み重なった丘で一人の王が嘆いている。

「私が誰よりも惨く惨めに死ぬのは受け入れていた。それだけの事をしてきた。だが、こんな筈じゃなかった。こんな終わり方になる筈はなかった!! 終わるなら、もつと穏やかな、眠るような終わりだと信じていたのに」

だから世界に望んだ。望んでしまった。

「これは違う。断じて受け入れられない!! 私の死は容認できてもこの光景は容認できない!!」

そうしてその願いは聞き届けられた。

“ いいでしょう。願いを叶えられる機会を用意します。そして願いの成就を条件に、その死後をもらい受けます”

… こうして一人の王は未来永劫叶うことのない、救われることのない運命へと歩んでいくのだった。

短編 「勢いで買うと大体後悔する」

誰しも勢いで買って後悔することは多々あるだろう。

例えば使いたくないのに便利さに目がいつてしまい、つい買ってしまった家電。

いつか使いたいと思っていたけど一回しか使わなかったマニアックな調理具。

結局のところ埃を被るのがオチである。だが、無駄な物を買うことを非難するわけではない。自分が本当に欲しい物であれば、有無を言わず買うことだって大切なことである。欲望に忠実と言うのは悪いことばかりではない。

長々と言いつつ語っているわけだが、何が言いたいかというと

——欲望に偏り過ぎると思わぬ災難が訪れることもある、ということだ。

◇

「まずいな」

僕の目の前には一つの枕がある。それは通常の枕ではなく、いわゆる抱き枕というやつだ。

この枕に抱きつく事でリラックス効果が出るとかなんとか…確かそんなことを猫耳商人が言っていたような気がする。

限定品だとか、あなただけのオリジナルが作れるとか、なんだか上手い話に乗せられた気がしなくはないがそこはいい。

ただ自分の好きなモノを枕にプリントできるといふ、その時は大変素晴らしい商品だと思ったのが運の尽きだった。

今この枕にプリントされているのはもちろんアタランテ。ただ困ったことに、なぜか赤面して恥ずかしがってる照れ顔と、まるでこちらを誘ってるようなポーズが問題なのだ。

「勢いで買ってしまったが、これは… まずいな」

こんな注文した覚えはないのだが、知識人曰く、そういう物らしい。

この頃はレイシフトがどうかで僕も彼女もなかなか一緒になれ

ないことが多い。部屋に帰ってきてても、一人でいるというのはなんとも寂しいものだ。

まあ、そういう時は賑やかそうなどころに行くのだが…

『弥助！ちようど良いところに来たの、ほれ儂が今川を撃つべく出陣した時の…もうその話は聞いた？なんじゃ沖田冷めること言いおつて。弥助、お主からも何か言つて…儂があの時ビビり散らかしてたじゃと？そ、そんなわけないもん！』

『おや、アタランテは留守なのですか。なら私の部屋で飲みに来ませんか、あの時と同じように共に月でも見上げながら…あはははは！冗談、冗談ですよ…でも、ときどきで良いので私にも構ってくださいね？』

夜は酔っ払いどもが蔓延っているので、絡まれること絡まれること。一緒に騒げば、その時は気を紛らわせれるものの、部屋に帰れば再び襲う恋しさ。

でも、

「いくら寂しいからって、これはないな」

やはり本物には敵わない。作成者には悪いが処分することにしよう。今日はアタランテも帰ってくるらしいし、久しぶりに一緒に寝れるだろう…でも一度も使わないというのは勿体無い。これでも意外と高かったのだ、料金分は満足しなければ。

そう思い、枕と一緒に毛布をかぶる。

「……」

彼女のイラストと向かい合う。

照れた彼女の顔…目を逸らさずこちらをじつと見つめてくる。

「困った…悪くない」

普段、というか見たことすらない新鮮な表情。なんとも言えない背徳感が押し寄せてくる。これを書いた方は素晴らしいな、いい感じにモフモフ感と可愛さを両立してある。うん、本当に困った。捨てることは、とてもじゃないができない。

とはいえ、とはいえだ。もうすぐ彼女が帰ってくる、捨てるのはやめにしていい隠し場所はないか…くっ、ここで等身大なのが足を

引っ張るなんて。

とりあえず、ベットから出て…

「帰ったぞメラニオス！」

この時、思春期男子の親が突然部屋のドアを開けて慌てふためく気持ち がわかった気がした。

「む、もしかして寝ていたのか… すまない、悪いことをした」

「い、いや。今起きようとしてたから」

我ながらこの時の毛布を被るスピードは素晴らしいものだと思自負している。

さて、どう誤魔化すか

「だが、もう昼時だ。そろそろ起きたほうがいいのではないか？それに、その… 汝の顔が見たいというか。べ、別に寂しかったというわけではないぞ！」

… うーん、好き！

だが、なんとも間が悪いことか、というか僕が悪いんだけども！彼女にこの枕を見せるわけにはいかないのだ、最悪この生活にヒビが入る。

「さてはベットから出られなくなったか？しょうがない、私が無理矢理でも」

「こ、来ないで！」

「え…」

しまった、つい言葉が強く

「そ、そうか。寝起きに話しかけるのは、鬱陶しかったな… ごめんなさい、ここ数日汝のことばかり想っていたので、ついはいやいでしまった」

「え、いやその」

「少し、外に出てくる」

「違うんだ、待ってお願い！」

罪悪感が二倍！

ああ、こんなはずじゃなかったのに、もうこれは駄目だ。見たかあの顔を？あんな悲しそうな顔をさせるなんて、夫として失格だ。

出て行こうとする彼女の手を取り、必死に事情を説明した。普段は凜とした佇まいの彼女だが、振り返った姿は弱々しい少女の顔だった。その顔を見て再び罪悪感に襲われたのはいうまでもない。

「そう、だったのか……だが、少し妬けるぞ。責任は取ってくれるんだろうな?」

そういうとアタランテは僕に向かって腕を伸ばした。僕はそれを黙って受け入れ、彼女の背中に手を回す。お互い隙間がないほど密着する、互いの体温がしつかりと感じられる距離。アタランテは目を閉じ、ゆっくりと深呼吸をしている。

「汝の香りがする」

「あはは、そんなに臭う?」

自分では分からないが、意外と加齢臭でもしているんだろうか。いや、この姿はまだ若い時のままだしそんなことはないと思うけど。子供に「臭い」って言われたらショックで寝込んだじゃうかもなあ。

アタランテは鼻を寄せて再び大きく息を吸った。

「私はこの香りが好きだ」

「……」

「暖かくて落ち着く……何より、あなたが生きていることを実感できる」

参ったな、今日はずっと赤面しっぱなしかもしれない。彼女が発する言葉を聞くとたびに心臓は飛び上がり、心は幸福感で満たされる。それは彼女も同じことだろう、今僕たちは思いを共有できているんだ。

「……もっと強く抱きしめてくれ」

「……うん」

いう通りに彼女の体を強く引き寄せる。彼女は僕の胸に顔を埋め、心地よさそうにしている。抱き返してくる力も強くなり、これが僕に対する想いの強さだと思ふと、より一層愛おしく感じた。

だが、

「……それはそれとして、枕は捨てる」

そうは問屋が卸さないそうぞ。

「……嫉妬してる?」

「違う」

「本当に？」

「・・・少しだけ」

渋る僕を、じつと目を細め睨んでくる表情は内心かなり嫉妬していたことを示してるようで、なんだか笑ってしまった。

「あはははは！」

「なにがおかしい。早くそれを渡せ」

「いやあ、君が物に嫉妬するなんてね」

「私だって・・・嫉妬ぐらいする」

この枕のことは非常に残念だが、彼女をこれ以上嫉妬させておくのも悪い。今回は縁がなかったと諦めることにする。

それに最近は、君のことを想って待つということも楽しいと感じるようになってきたんだから。

手をこちらに向け、早く渡すように催促する彼女に枕を手渡すために持ち上げた。表面のアタランテと別れを告げる。

「まったく、これのどこがいいの・・・っ！」

「どうしたの？」

なぜだか、みるみるうちに赤面していくアタランテ。そのうちワナワナと震え始め、どうやら怒りが込み上げてきているようだ。

今彼女が見ているのは裏面。そういえば買ってから表面しか見えないからどんなアタランテが描かれているのか僕は知らない。

これは後から知ったことだが、裏は過激だったらしい。その後のことはお察しのとおり。

アタランテはしばらくこちらを見るところか、口を聞いてもくれなかった。

（Fin）

短編 「男の浪漫」

このカルデアには古今東西、様々な英霊が集う。武勇に優れた者、一国の王、音楽、芸術などが優れた者など十人十色。

その中には当然、他の英雄に憧れた英雄もいる。

◇

「今日のお菓子は何かしら。わたしとつても気になるわ」^{アリス}

「わたし達も！おとうさん早くちようだい！」

「二人とも行儀が悪いですよ。こう言う時は静かに待っているのが常識です」

おやつどき、この時間になると様々なサーヴァントが食堂に訪れる。まあ、主に子供達が多いのだが

日替わりで、というか作る人の気分でおやつの種類は変わる。今日の担当はメラニオスのように、どうやら色々な形のクッキーを焼いたみたい。誰かと分け合って食べることで楽しめると考えたようだ。

「はい、お待たせー。みんなは今日もお茶会かな？」

「ええそうよ！今日はフランスの王妃様もいらっしゃるの」

「それは凄い。僕も気合い入れて作った甲斐があるよ」

ナーサリー、ジャック、リリイに手渡す。三人とも嬉しそうに受け取ってくれた。自然と彼も笑顔になってる。

ジャックとナーサリーは、おやつを受け取るとすぐさま自分達の部屋へと駆け出していく。きつとお茶会の準備に忙しいんだろうね。

「そんなに急ぐと危ないよ！…はあ…ん？どうしたんだいリリイ、君は一緒に行かないのか？」

何故か一人残っている、ジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリイ。「えつと、そのお。う〜」

もしかして何か言いたいことでもあるのだろうか？モジモジとして中々言えないみたいだけど

「どうしたんだい？」

少しかがみ込み、同じ視線に立ち、しっかりと少女の目を見る。

少女は何度か口籠った後、

「私、その、前よりも綺麗に名前書けるようになったんです。だから、今度は、他の字も書けるようになりたいから」

以前、食堂で名前が字で書けないことをオルタに馬鹿にされてから、一人で名前を書く練習をしていたのを見かねたメラニオスが手伝ってあげたことがあった。その甲斐あってカリリイは無事に書けるようになり、他の字も書けるようになりたいと思ったようだ。

「その、また教えて貰いたいんです」

「勿論いいよ」

「本当ですか！これで、あっちの私に追いつけます！」

そう言うカリリイは嬉しそうにしている。

「それにしてもカリリイは上達が早い。いっぱい頑張ったんだね」

そつと頭を撫でてメラニオスは微笑んだ。

かつての聖女と同じように、熱心に勉強する姿が重なった。きつとカリリイも彼女と同じように優しい子になるのだろう。

「はい！頑張ったんです！あつ：：コホン、じゃ、じゃあまた教えてもらうと言うことで：：お願いします」

少し照れくさそうにお礼を言った後、カリリイは二人の後を追いかけていくのであった。

その姿を手を振って見送るメラニオス。

さて、今日の当番はこれで終わり。そろそろ帰り支度を始めるようだ。

そこへ、

「すまないメラニオス。少し時間を貰ってもいいかね？」

食育の英霊エミヤに声をかけられた。

彼は食堂部門のトップとして朝、昼、晩の食堂メニューの栄養管理などを仕切る、カルデアにとってオカンと言える存在なのだ。

そして、食堂で働くメラニオスの上司でもある。

「なにさ改まって：： 残業は勘弁してよ、僕だってプライベートは大切にしたいんだ」

このタイミングで声をかけられたということは残業、あるいはミス

があつたなど面倒臭いことに違いない。顔を顰め露骨に嫌そうにする。

しかし、エミヤの顔を見るにどうやら違うようだ。

「そうじゃない。少し手伝って欲しいことがあつてな。なに、時間は取らない」

「?… まあ、いいけど」

椅子に座らされ、何やら真剣そうな雰囲気少し押される。

「実はある依頼を受けてね。君にも協力を仰ぎたいんだ」

「はあ…」

少し前、エミヤはある英霊から依頼を受けた。

『すみません、エミヤさん。少し時間もらっても大丈夫つすかね?』

『ああ、マンドリカルド。どうしたのかね』

何やら神妙な面持ちで話しかけてきたのはマンドリカルド。どうやらエミヤに頼みたいことがあるようだ。

『実は、この前マスターからバレンタインチョコを貰ったんです。で、後から知つたんすけどバレンタインってお返しが必要なんすよね?』

『あくまで、日本を含めたアジア地域の文化だがね』

『うっす。で、俺からも日頃の感謝を込めてお礼をしたいと思つて悩んだんすけど… その、中々思いつかなくつて』

誰しもその経験はある。

相手が欲しいものが分かればいいが、いざ自分で選ぶとなると難しいものだ。

『だから俺が欲しかつたていうか、失つたつていうか… その、デユランダルを模した何かを渡したいと思つて』

なるほど、自分の思い入れのあるものを渡すということか。

『それはいいと思う、しかし、私の手が必要とは思えないが』

『自分で作ってみようといくらかやってみたんすけど、中々難しくて… それで、その道のプロと言われるエミヤさんに是非製作を依頼したくきたわけなんです』

『ふむ。玩具であるなら、何とかなるだろう』

『本当つすか!』

『ああ、君の力になることを約束しよう』

『———ありがとうございます!!』

そう言って彼は頭を下げるのだった。

「なるほど、話はわかったけど、別に僕は必要ないじゃないか。アンタだけで十分だろう」

「いや、他の者の意見も聞きたくてね。それに古今東西の英雄と関わってきた君の意見も聞きたい」

皮肉かこの野郎と一瞬考えたがそんなつもりはなく、本心で言っているんだろう。

だが、そこまでクオリティーを追求することだろうか？

「かのトロイア戦争においての大英雄ヘクトールが所持したとされるデュランダル。それを踏まえると生半可なものは作れない。それすなわち、至高の一品を作るのは当然の…。」

「はあ」

「私の真価が試されてると思うのだよ」

「つまり？」

「———オレも欲しい!!」

思わずガクツと倒れ込みそうになる。

そこに行き着くのか。大の大人がそれでいいのか。

馬鹿じゃないの、と言いつ捨てるのは簡単だったが…

「あんまりにも少年のようなキラキラした目で語っているので

「ふふっ、あははははは！」

つい面白くて笑ってしまった。

「なっ、笑うことではないだろう!？」

「いや、ふふっ…。らしい顔も出来るんだなって」

彼の表情は、どこか気を張ってるものや、顰めっ面ばかり見えていたので少し新鮮に思えた。

「分かったよ。僕も出来ることは手伝おう」

「…。本当か！」

「さ、設計図とか作ってるんでしょ？どうせならロマンめいた物作っ

「てやろうぜ」

「ああ、当然だ。これが、今のところの設計なのだが…」

「へえ、流石だね… そうだ、剣のグリップ部分に細工して——」

「！、なるほどモードチェンジか。ならばここをこう組み込んで…」

「…そこに音声認識を」

「それは流石に——」

二人はアイディアを出し合い、至高の一品を作り上げる。時には意見がぶつかるが、お互いのいいところを組み合わせたり、男のロマンを思いつきり積み込んでいく。

◇

「二人とも楽しそうですね」

「… ああ」

その様子を少し離れたところから見守ってた、アルトリアとアタラシテ。

アルトリアは小腹が空いたので間食をもらいに、アタラシテは帰りが遅いメラニオスの様子を見にきていたところ、談合する二人を目にした。

「ふふっ、まるで子供だな。あの二人は」

「ええ、あんな顔もできたのですね」

二人の目線の先には楽しそうに玩具を作っている、赤毛と黒髪の少年の姿。

「… 少し安心しました。私が知る二人は、どこか悲痛な顔をしていることが多かったですから」

二人の少年にはしがらみはなく、本音同士で話すことができているようだ。

「だが、少し妬けてしまうな。たまにはその笑顔を見せてくれてもいいだろうに」

その光景をしばらく、微笑ましげに見つめているのだった。

◇

シャキーン！（武器の効果音）

あのデュランダルがついにオモチャに！！

武器を振るうと音が鳴るぞ！（シャキーン！ジャキーン！！）

さらにグリップの部分を引っ張ると

（グリップ部分が伸びて変形する）

モードチェンジ！ドウリンダナに変形するぞ！！

そしてボタンを長押しで…

『標的確認、方位角固定…：不毀の極槍！ドウリンダナ吹き飛びなあ！！』

ヘクトールの宝具音が鳴るぞ！！

その他にも様々な機能がついてくるDXドウリンダナ絶賛好評中

！！

狩人と怪物 短編「嵐の夜に」

外の雨音が洞窟内に響く。

旅の途中、突然の雷雨に見舞われ雨宿りできるところを探している
と幸運なことにこの洞窟を見つけることができた。おかげで今晚は
何とか凌げそうだ。

轟音を上げ雷が鳴り響く。

しかし今日は一段と酷い。もしかしたらどこかの誰かがゼウスを
怒らせたのかもしれない…。なんてくだらない考えが頭をよぎる。
ああ、もちろん僕のせいじゃない、あの神に手を出すのは今の時点で
は部が悪い。それに、今は一人じゃないんだから。

「にしても明かりがないのは少々困るな」

生憎のところ火をつける道具は持ち合わせていない。火種を起こ
そうにも湿っていて使い物にもならない。気温はどんどん下がって
いく。このままじゃ命に関わる。

けど問題はないのです。以前、鹿を狩った時に毛皮を剥ぎ取ってお
いた。この自然の毛布、大きさも十分でこれなら二人でも使うことが
できる…。少し密着するけど、うん、明後日の方向でも向いておこう。

「アタランテ、毛布用意したからこつちおいで…。アタランテ？」
返事はない。

この洞窟はさほど広くはない。数メートル歩けば奥にたどり着け
るぐらい、まあ二人だけならちようどいい広さだ。しかし、明かりも
ないので真つ暗。ここからでは彼女がどこにいるか分からない。

「アタランテ、どこ？大丈夫？」

もう一度暗がりに声をかける。

「こゝ、いる」

か細い声が聞こえた。

その声を聞いて安心する。良かった、姿は見えないけど確かにそこ
にいるようだ。

「そんな奥の方にいないでこつちこない？」

「……………やだ」

思考がフリーズ。

頭を切り落とされた時のように意識が一瞬断絶される。

「……っ、あ……拒絶？あ、まって泣きそう。何か気に触ることもしたのか、心当たり……心当たりしかない。こういう時どうすれば？……教えてよシドウリ。」

何秒かその場で立ち尽くしてしまいが、このままではいけないと考えると自然に口から言葉はこぼれ出た。

「ごめん……そっちに毛布置いとくから使ってください。僕は入り口のところにいるから」

毛布を置いた後、悲しげな後ろ姿で入口の方へ向かう。

……今日は寂しい夜になりそうだ。雨は僕の心情を表すかのように一層激しく降り注ぐ。

「あつ、待って——きやつ……！」

光が視線をよぎる。

その数秒後、先ほどとは比べ物にならないぐらいの轟音で鳴り響く雷。

しかし確かに聞こえた小さな悲鳴。沈んでいた心なんか吹き飛び、すぐさま彼女がいると思われるところへ駆け寄る。

「ねえ返事をして!?!できるなら僕の名前を呼んでみて!」

「うう……」

啜り泣きのような声は聞こえるけど依然として彼女の姿は見えない。手探りで探してみるもなかなか触れることはできない。

どうして気ばかり焦ってしまうのか。落ち着け、落ち着けよ、何も死の危険があるわけじゃない。ただ彼女は泣いていて、その涙を一刻もはやく拭いたいただけなんだ。

「——っ」

その時、再び雷が落ちる。有難いと言っているのか分からないが、光のお陰で彼女の姿が一瞬見えた。

膝を両腕で抱え込み、震えながら隅にうずくまる彼女が

「……大丈夫？側に行ってもいい？」

「……」コクリ

返事はなかったものの頷いたのはわかった。そつと側に近づき隣に座る。

「おつと」

すると僕は勢いよく彼女の方へ抱き寄せられてしまった。ここに僕がいるのを確かめるように思わず痛いと感じてしまうほど力強い抱擁。突然のことで驚いていると、彼女の頭が僕の首元へ埋められる。サラサラとした髪が肌に触れる度、くすぐったくて身を振れさせてしまうも絶対に逃さんと言わんばかりに体を押し付けられる。

「大きい音とか光とか苦手？」

片手で彼女の背中を抱きしめ一方の手で優しく頭を撫でながら聞くと彼女は小さく頷いた。

悪いことをしてしまった。きつとこんな奥にいたのは雷の音を聞いて動けなくなっていたんだろう。もっと早く側にいてあげるべきだった。あいも変わらず雷鳴は響いている。彼女の震えは少しは収まっているがこの様子じゃ、しばらくはこうしておくほうがいいだろうが、寒さで震えているのなら話は別だ。

「毛布： ああ、あそこに置きっぱなしだ。ごめんアタランテ、少し放してくれるかな？」

「やだ」

より一層抱きしめられる力が強くなる。まだ、怖いのかな。不安がってるのがよくわかるけど、毛布があつたほうがいいのでは？

そう聞くと。

「いい、このままでもいいから…今は、そばにいて」

その言葉で胸が高鳴るのがわかる。

僕もこうしてるほうがいい。この状況を満喫するというのは気がひけるけど、とても心地よいから。彼女から伝わる熱が僕の体温を暖めていき、きつとこの熱も彼女に伝わってるだろうから。

互いに存在を確認し合うように抱擁は強くなっていく。

「大丈夫。ここにいろよ、だから今日はこのまま眠ろう」

「…うん」

彼女は安心したような笑みを浮かべて目を瞑る。そのうち静かな

寝息も聞こえてくるだろう。

夜はまだ長い、この嵐もしばらくは続く。それでも、今だけはこの状況を密かに楽しむとしようか。

短編 復讐と怪物 「お前を許さない」上

「よっと…これで最後かな」

最後のニワトリを仕留める。

カルデアの食糧庫の鶏肉はまだ十分あったと思うけど、まあ、あるに越したことはない。

「でも、聖杯から受肉したニワトリが溢れるなんて。これ食べてもいいのかな」

回収した聖杯の誤作動か、それとも誰かの悪戯か。突如発生した異空間の中には鶏が溢れかえっていた。そんなわけで、聖杯の再回収と鶏討伐のためにここに来たわけである。

「あはははっ。まあ、原因はともかく…真つ当なニワトリならありがたくいただかなきゃ」

そして、その回収に充てられたのが厨房組のブーディカと僕。本来ならエミヤが彼女と解決にあたるはずだったようがなにやら急用ができたらしい。そこで非番だった僕に手伝って欲しいと声をかけられたのだ。

「そっちも終わりましたか？」

「あらかた。悪いね、付き合わせちゃって」

「いえ、役に立てたなら何よりです。それに今日の献立も楽しみになりますから」

あれだけ溢れ出していたニワトリもようやく打ち止めなのか、聖杯が出現したのちぱったりと消えてしまった。

残った大量の鶏肉と聖杯。これを回収してカルデアに戻れば問題解決だ。

「でも珍しいですね。こういう問題にはマスターと一緒に解決するのが普通なんですが」

今回はなぜかマスターは同行していない。

相手は魔力により強化されただけのニワトリなので別に居なくても問題ないといえそうなのだが。

「…うん、マスターに無理して言ったんだ」

カルデアには様々な英霊が集う。夫婦や、かつての臣下。戦場で共に戦った者、殺し合った者。栄光の英雄、悲劇の英雄。

そして、

「あたし一人で解決するって」

——憎しみを抱く者。

「……」

首筋にヒヤリとしたものがあてられる。

彼女が腰にかけていた剣が今にもこの首を刈らんと握りしめられている。

「これはあたしの中にとまるところって思っていた……けど、うん、やっぱり無理」

口調はいつもの様に穏やかだ。だが、その言葉の節々に憎しみの色が滲み出している。

「許せないんだ、君が笑っているのが……ごめんね。こんなの八つ当たりだよ、あたしの復讐は結局終わったことだもん。今更な話だもんねアンタたちにとっては」

黙って話を聞く。

僕から言えることは何もない。彼女の言い分は正しくて、そうされて当然のことをしてしまっただけだから。

「でもね、いくら名を変えようが……容姿が変わろうが、魂が別物だろうが」

このカルデアには様々な英霊が集う。

中には顔を合わせたくないものもある。彼女もそのうちの一人だった。

「あたし達はお前を……お前達を絶対に許さない——！」

結局のところ、僕が悪いのだから。

◇

あの時の僕は皇帝ネロの家庭教師として、そして軍人としてローマ帝国にいた。

帝国をあてもなく放浪していたところをアグリッピナ……ネロの母君に拾われた。よほど気に入られたのか、あの女には色々と融通

して貰うことができた。特に今まで学など身につけてこなかったため、勉学に励めたのが大きかった。

そのおかげで哲学や帝王学、兵法など新鮮な知識が手に入れることができた。その後、哲学者という地位も獲得し、それなりにこの生活を楽しんでいた。

それから何年経つただろうか。勤めていた元老院を追放され、いよいよこの国ともお別れかと旅立とうとした時アグリツピナに呼び出され皇帝のネロの家庭教師にならないかと申し出があった。断る理由もなかったし、その皇帝が女性だと聞いていたので興味があったのもある。

「ほう、そなたが余の家庭教師か…。 てつきり腰の曲がった老人だと思っていたが意外だったぞ」

「あははっ、若作りが趣味ですから」

「む、意外と歳を食っているのか？まあ良い…。 そなたもとんだ貧乏くじを引いたよな。」

余は哲学——ましてや帝王学など興味はない。任について早々に荷物をまとめることになるだろうな」

「そうはいきません陛下。 あなたの母君には恩がありますゆえ、あなたには立派な皇帝になっていただきます」

最初こそは警戒されたよ。 ネロは元々皇帝にはなりたくなかったようで、あの女に連れて来られた僕を信用するのは難しかったのだから。

ふと、彫刻が目に入った。

「あれは陛下の作品ですか？」

「うむ！余は指導者である前に優れた芸術家なのだ。 どうだ？見事な作品であろう」

確かに見事。

薔薇のような…。 いや、異形の植物か。 なんとも形容し難い作品だ。 迫力だけはある。

「彫刻のことはよく分かりませんが…。 ぶつちやけ微妙な出来ですね」

「な、なにいい…」

「外の世界を知らず自分の世界に籠るから勘が鈍るのです。僕と一緒に見識を広めましょう」

「ふん。背が高いものは好かん！首疲れる!!」

「あはっはっは、皇帝陛下はまだまだお若い。身長のことでお悩みなら自身の可能性を期待すべきです」

「よっ… 余の前で身長の話をするとは。ことごとく地雷を踏むなそなた。その様だから追放の憂き目を見るのだぞ!!」

ただ一つ言えるのは彼女の才覚は本物だった… 芸術はともかく。

「まあ良い、退屈凌ぎにはなる。貴様、名を名乗れ」

「僕の名は——」

ネロが皇帝に即位してからの日々。彼女が示す改革は茨の道だったが次第に多くの人々に賛同された。彼女は民のため改革を続けた。芸術を愛し、人の手に余る程の贅を凝らす代わりに民の困難には惜しみなく手を差し伸べた。自分がこんなにも民を愛しているのだから、たみも自分の子を愛してくれると信じて。

「見よこの舞踏技を！見事な男装であろう！」

「そ、それが男装？」

「攻めも守りも完璧だ… 余がデザインしたので。この舞踏技に合わせて赤い大剣も欲しいな、あぁどんどんイメージが湧いてくる♪」

「舞踏… また劇をやるのですか」

「うむーいま建築中の劇場が完成次第、余が長年暖めておいた創作劇を行う！余は至高の宝剣を掲げ神話に語られる黒き怪物を打ち倒した勇者の役だ。デウス・エクス・マキナより大胆な結末にするつもりだ!!歌も歌うぞ！」

「… 歌はやめた方が」

しかし、ネロの改革をよく思わない者も当然居る。あの出来事はそれが原因だったとも言えるだろう。

ネロと出会って数年が過ぎ、ある国との同盟の話が上がった。その国の名は「イケニ」

ブリテン東部を治めたケルト部族の国であるイケニは度々ローマ

と衝突しており、じきに大々的な遠征を行うという話もあった。しかし、ブラスタグスという男が王になったことで、彼らはローマに交渉を求めた。

その交渉役として、僕は何度か王のもとに訪れた。ブーディカと出会ったのもその時だ。と言つても挨拶を交わす程度の関わりだったが。

「我々はローマと同盟を結びたい。これを降伏と捉えていただいても構わない、私はただ妻や子、そして民が平穏に暮らせる国を築きたいのです」

王は武力に優れており賢王でもあった。

彼を弱腰の王だとなじる者もいた。帝国の強大さに気概を失い国を明け渡した愚か者とも。

「陛下も争いを望んでいる訳ではありません。共同統治という名目で、ローマ帝国はあなた方の後ろ盾となりましょう」

「おおーこれはありがたい…： 恩にきます」

けど、王の家族の愛は確かなもので、帝国に戻る途中に横目に見た王とブーディカ、そして二人の娘が笑い合う姿はどこか懐かしさを感じられるものだった。

羨ましいとなぜか思ってしまった。

「後は総監であるスエトニウス殿に任せておきます。何かあれば彼に」

ここで失敗した。

「はっ！イケニとローマに栄光あらんことを——」

総監など通さず直接情報が耳に入る様にすべきだった。

いつだって上手くいかない。人間の悪意より醜いものなどないのだ。

数年後、ブラスタグス王の崩御が告げられた。だがイケニとの同盟が失われるわけではない。彼は亡くなる前に、あらゆる根回しをして土地や財産、名誉全てを娘が引き継げるようにしていた。

これによりローマと共に共同統治は続いていく、はずだった。

「はっ、我がローマ帝国が貴様らのような蛮族と手を繋ぐとでも？し

かも、その様に幼い女子に継承権などあるわけなからう」

「何を!?この遺言状には…」

「ええい黙れ!貴様らの財産は全てローマ帝国のものとさせてもらおう!!」

あろうことかスエトニウスは独断でイケニの権利を奪うべく国に押し入りその全てを奪わんとした。

「このお…!卑怯者!!」

「——なんだと?」

それは吐き気を催すような残酷な行為だったという。激昂したスエトニウスはブーディカを鞭打ちし陵辱の限りを尽くした。それだけで終われば、まだマシだったかもしれない。

「いやあ!お母さん!お母さん!!」

「お願い… 娘には、手を出さないで…」

「いやいや、母子ともに蛮族にしては美しい顔をしている。これは楽しめそうだ」

彼女達の目にはローマはどう映っていたのだろうか。悪魔の様な笑みを浮かべながら近づいてくる彼らのことがどう見えていたのだろうか。

「そいつらはローマ帝国の奴隷だ。何をしてもいいぞ、何をしてもな」
「ヒュー、さすがはスエトニウス様だ。へへへっ、楽しませてもらうぜ」

「離せ!あたし達は!次期イケニの王だぞ!… やだ、やだあ!来ないで!!」

「いやああああああ!!痛い、痛い、イタイ!お母さん!!いギイッ!」

「話が違うぞ!あたしが抵抗しなければ娘達に手は出さないって…」
「ああ、そうだったかな?すまんなあ蛮族の言葉はちと難しいものでね」

「おかあさ…」

「つく… (許さない、許さない、許さない!!)」

ブーディカは顔を覆うことも許されずその光景を目に焼き付ける

こととなった。

「ほら、よく見るんだ。娘達の晴れ姿だぞ？母親として誇らしいことではないか」

「うううう…（許さない、絶対に許すものか!!スエトニウス、あの男、皇帝、ローマを!）」

こうして、復讐の女王は誕生した。ローマ帝国に復讐することだけが生きがいとなった女王は全てのローマを憎んだ。

女王が反旗を翻し、近隣部族と結託し反乱軍を率いたと僕の耳に入ってくるのはこのしばらく後だった。

「立ち上がれイケニの戦士たちよ!もはやローマの悪行に付き合う道理はない。あたしは戦う!この国のために、傷ついた者たちのために!

貴方たちも戦う理由を思い出して!あたしは一人の女として、女王としてローマに復讐する!!」

l t o b e c o n t i n u e d |

短編 復讐と怪物 「お前を許さない」下

気づいた時には既に手遅れだった。復讐の炎が都市ロンディニウムを包み込む。

当時まだ出来たばかりだったこの都市はローマの士官をはじめ、商人や旅行人などが多く滞在する活気のある商業都市であった。それだけにスエトニウスはこの都市を引き渡すことはしたくなかった。

だが、

『突撃だ！ローマの血は一滴残らず皆殺しにしろ！』

『嫌……ッ、降伏したはずじゃアアッ』

チャリオットに乗った女王に引き連れられた反乱軍の怒りが民に向けられる。

『お、お願い……この子だけは……ゆ、許してください！』

『やだよお母さん！私だけ逃げられないよ』

『お願いします！どうか、どうか！お慈悲を!!』

『……恨むならローマを……いや、あたしを恨んでいいよ』

『アッ——』

女も子供もなりふり構わず反乱軍は殺し尽くした。その時反乱軍の数はローマ軍の数十倍の規模にまで膨れ上がっており、ここで戦ったところで勝ち目はないと悟ったスエトニウスは誰よりも早く逃げ出した。彼はロンディニウムに住む市民等を犠牲にしたのだ。

『ブーデイカ様。ローマ軍が撤退しました』

『そうか。なら残った者は殺せ、一人も残すな！』

反乱軍は市民を奴隷や人身売買にかけるという選択は一切せず虐殺を続けた。ある者は槍で串刺しにされ、ある者は乳房を切り取られ、それを口に入れられ唇を縫い合わせられ窒息、ある者は内臓を引き摺り出され晒し者に。

——殺す

——みんな殺す

——ひと思いに殺す

——男も女も、子供も隷属の侮辱は与えぬ

——死だ、ローマという国に、ローマ人というものに
——すべてのローマに死を与えてやる

こうして都市は次々と陥落。

ああ、繁栄した美しい都市は何処に、何処に。

ロンディニウムの陥落の知らせが僕の元に届いた時には既に手遅れだった。

「反乱軍…?」

「は、はい。既に数十万の兵力で次々と都市を陥落していると…」

「そんな話聞いてないぞ…」して、首謀者は」

「イケニの女王ブーディカだと」

「——なんだと?」

ブラスタグス王が崩御してからは二人の娘を共同統治者とする約束を交わしていたはず。スエトニウスからはすべて滞りなく上手くいっていると報告を受けていた。なのになぜ、反乱など起こる?」

「スエトニウスはなにをやっている!」

「現在ワトリング街道にて反乱軍を待ち構えているとのこと。こちらに援軍を要請しています」

「ネロは…陛下はなんと!」

「そ、それが今日は一段と頭痛が酷いらしく、こちらの報告すら聞いていただけない状況で」

事態は一刻を争った。このままでは反乱軍は街道を抜け首都に迫る。そうすればこのローマも憎しみの業火に包まれる。しかし、僕の頭には娘を愛おしそうに抱きしめる母としてブーディの姿が浮かんでいた。

なぜ、なぜ、なんで。

どうしていつも上手くいかない。今度こそは上手くいく、上手くいっていたはずなのに。

そして僕は選んだ。

「…兵を集めろ。5000ほどでいい」

「はっ、それで将は誰が」

「僕が行く…それと兵には大楯とあの槍を持たせろ」

ネロを、陛下を、ローマを守ることを選んだ。

その戦いは平地で行われた。ブーディカ率いる反乱軍はおよそ10万、こちらはその十分の一以下。士気は十分だが相手の圧倒的物量に気押されている兵も多数いる。

早馬で駆けつけた僕らをスエトニウス直属の兵士が向かい入れる。

「総監！ローマからの援軍が合流しました」

「よし…それで誰が、なっ!?!」

そこにはふんぞり帰っているスエトニウスがいた。なぜこの男はそこまで傲慢でいられる？

「スエトニウス殿、これは一体どういうことか」

「どういうことだと?…どうもこうもない!奴ら突然反旗を翻し、我がローマ帝国に刃を向けておる!見てわからぬのか!」

「だからどうしてこうなったかと聞いている。貴様が行った所業のせいではないのか?」

「し、知らん。そんなの出鱈目だ!」

これが行ったことはこれの部下に聞いた。よくもまあ、独断でそこまで出来たものだ。そうまでして利益が欲しいのか。女、子供をなじってまで自分の利を優先するのか。

少し問い詰めただけで泥を吐き出した。

「あの皇帝は我ら貴族を冷遇し、下民どもばかり目を向けている。それに解放奴隷だと…?ふざけるな!!そんなことをすれば、我らがより不利になるだけではないか!!」

「あろうことか蛮族どもと同盟なぞ結びよって、なぜ我らがあの様な者共と手を繋ぐ必要がある!今に見てろ、ここで奴らを潰し——
がはっ」

「もういい。もう十分だ」

ネロの改革は元老院など権力に固執するものには反対されていた。今回の反乱もそれが一つの原因だろう。

もうこれには用はない。この戦いが終わった後、然るべき処罰を受けてもらう。

「凄い数ですね。軽く20万は超えている」

「僕らの十倍近くか」

「いけますかね」

「ここは両側の森が深く、見た目より狭い。あちらの数の利は生かせない」

決戦の地となったワトリング街道は山峡に阻まれた地形をしていた。これによりローマ軍が囲まれる心配もない。つまり正面衝突する形になる。

「お母さん、あの軍。今までと違う」

「あれがローマの本隊……本物のレギオンというやつか」

女王は既に戦況が見えていなかった。それが連戦の勝利によるものか、怨讐によりその目が曇っていたせいかは分からない。

「なんだっていいわ。数はこっちが圧倒してるんだ。蹂躪して、一人残らず殺してやる」

勝利の剣を掲げブーディカは兵士を鼓舞した。

「突撃！アンドラスタは我らと共にあり!!」

「オ オ オオオオオオオー!!」

一斉に突撃してくる反乱軍。女王もチャリオッツに乗りこちらを蹂躪しようと走り出す。

「……各班に通達。大楯を構え盾壁を築け」

「ハッ！」

「^{プルム}投槍用意…… 投擲!!」

ローマ軍がとった行動は二つ。盾を構え相手を迎え撃つ。そして新たに開発された革新的な武器「プルム」を放つこと。

「くっ…… 投擲か。盾を上げろ!!」

「お、重ッ！」

「なんだこの槍!? 抜けねえ!」

このプルムという槍は、穂の先が柔らかく盾に刺さると曲がり抜けなくなるという厄介な武器だった。

「重……ッ!」

「仕方ねえ! 盾を捨てろ! 突撃を続けるぞ!!」

そのため、反乱軍の多くは機動力を失うか、もしくは盾を捨てた無暴力な状態で戦わなければならなくなった。

「くそッ、なんてでけえ盾だ」

「押せええー!」

そしてローマ軍は突撃してきた敵を盾壁で受け止める。密集して作られた防御陣形はいくら数の有利がある反乱軍でも突破することは敵わなかった。

「反撃開始! 敵は無防備だ、存分に切り殺せ!!」

「おぐっ」

「刺せ刺せ刺せえ!!」

「ギヤッ」

「ダメだ! 下がれ、下がれ!!」

「押すな! これ以上は下がれねえんだよ!!」

「前線はどうなってる!?!」

「ひいい殺さr... あゝあゝあゝ」

こうして一瞬にして数千の兵士を失った反乱軍は袋の鼠状態となり、その命を一人また一人と刈り取られていく。

「お母さん、逃げよう!」

「逃げ... ツ?」

「早く立って! 逃げなきゃ!!」

「でも!」

「ここは俺たちが! 女王は生きてください!」

「...」

「お母さん!!」

後に「ワトリング街道の戦い」と語られるこの戦いで死者数は、ローマ軍が約800人に対し反乱軍は80,000人に達した。敗軍の将となった女王ブーディカは戦場から逃げ出し、戦いはローマ軍の圧勝に終わった。

「女王は?」

「ハッ、娘と共に戦場から離脱したと報告が!」

「そう... この場は任せる。僕は少し用ができた」

敗残兵の末路は生きたまま捕らえられ捕虜にされるか、最悪、陵辱され殺されるか。このままではあの家族も…まだ間に合う。他の兵に見つかる前に探し出してしまえば、まだ助けられる。

そして、見つけた。

「お前は…あの時の！」

赤く輝いていた美しい髪は色褪せ、僕を見る目は憎しみで黒く染まっていた。

「女王、投降してください。今なら僕の権限で…」

「巫山戯るな!!我らを再び貶める気か！」

「ち、ちが」

「何が違う？夫はお前のことを信頼し同盟を結んだ…その結果がこれさ。裏であたし達を笑っていたんでしよう？」

既に手遅れだった。女王もその娘達も僕が何を言っても憎しみの言葉で返してくる。近づけば殺すと、死にたいの体で抵抗する。

「ローマ、皇帝ネロ…あたし達の全てを奪ったお前達を恨む。死んでも忘れてなるものか…！」

そうして懐から小瓶を取り出し、

「おかあさん…」

「ごめんね…一人にしないからね。あたしも一緒に逝くから」

「待て！」

その中身を一気に飲み干した。

それは自決用の毒だったのか、それを飲んだ娘達は眠るように息を引き取った。

「呪うぞ…いずれお前も、ローマもあたしと同じ運命を辿ることだろう」

血涙を流し、娘達を抱きしめながらブーデイカは死んでいった。 ”

お前のせいだ ”と恨み言を残しながら。

「ちが…ぼくの…ぼくのせいじゃ…」

これでこの話はおしまい。

女王ブーデイカはローマ軍に敗れて自害。ことにあたっていた総監スエトニウスは責任を追求され罷免された。

「そなたはまだ怒っているのか？あれは手違いだ。議会で余を批判していた件も許すぞ。余は寛大だからな」

「…ではお暇をいただきます。僕は、少し疲れました」

「どこに行く？」

「あなたの手の届かないところへ」

「…そんな場所などないぞ… 待て、本当に行くのか？」

待て！余にはそなたが必要なのだ!!待ってくれ、ひとりにしないでくれ!!——セネカ！」

◇

「あたしは結局のところ、全てを奪われたイケニの女王そのものとは違う。君だってそう、ただそっくり同じってだけの別人」

終わったことをやり直すことはできない。

「ねえどうだった？王なき女王の異郷を蹂躪したりさ、辱めたり、奪ったり、殺したり——」

なら償うことはできるのか？否、どうしようが無理な話なのだ。償うことができるのは生きている時だけ。

「あの時だって笑ってたんでしょ？あの平地で、あたし達が無様に死んでゆく様を見てお前は笑っていた」

なら、僕はどうすればいいのでしょうか

「でも良かったよ、君もローマも酷い末路だったんだよね…少しはあたし達の気持ちわかってくれたかな」

首に当てられた剣が首に食い込み始める。抵抗することは容易い、一瞬で無力化することも可能だろう。

けど、僕はできない。

「なんで君が英霊としてここにいるか分からないけどさ、また裏切るのかな？あたし達を裏切ったみたいだにマスターのことをさ」

困った様に微笑みながら

「ねえ、答えてよ… 答えろ！」

霊器を変質させるほどの魔力を纏いながら問いかけてくる。

答えなければ殺される。だから、僕は。

「僕、は… ただ『ブーディカさん？帰りが遅い様なので通信させてい

たですが、何か問題でもあったのでしょうか?」

カルデアからの通信。この声はマッシュだろうか。

「… あはは、ごめんね。ちよつと休憩してたんだ、すぐ帰投するよ」
『良かった、無事解決したんですね…。あれ?もう一人反応がありませんが、どなたか同行されていたのですか?』

「ああ…。うん。あたしがお願いでして手伝って貰っていたんだ。

そうだ、今晚のご飯楽しみにしててね。お姉さん、腕に寄りをつけて作っちゃうんだから!」

『わあ!では、先輩と共にお待ちしていますね!』プツツ

それで通信は終わった。

いつの間にか剣は収められ、纏っていた憎しみの魔力も無くなって
いる。

「駄目だなあ、あたし。ごめんね、君に言ってもしょうがないのに」

「――」

「でも、言っておく。ブリタニアのブーディカはお前達を許さない。
永遠に」

僕は、

「それで構いません…。けど、今はまだ貴方に殺されるわけにはいき
ません。僕は、役目がまだありますから」

本心からの言葉を話す。

裏切る。それは分からない、けどやるべきことがまだある。どうで
あれ、僕の旅は続いて行く。

一応は納得してくれたのか、彼女はいつもの顔に戻り

「… あたしはカルデアのあたしだ。よく似ているけど、どうしたつ
て違う。だから――」

マスターを裏切らない限り、あたしは君のことを容認する。許す
わけじゃない」

「ええ」

「今のあたし達は、まず第一にマスターのサーヴァントだ。けど、いつ
か正々堂々、人理も何もかもちゃんと無事に済んだ後で名乗りを上げ
て――その首を刎ねてやるよ。怪物」

そう笑みを浮かべて宣言するのだった。
〈 e n d 〉

短編 「注射は大人になっても怖い」

さて、いよいよこの日がやってきてしまった。

カルデア中を逃げ回る子供系サーヴァント。それを捕まえようとする大人達。今日は予防注射の日なのだ、逃げ回る子供達の気持ちは痛い程よく分かる。

誰だつて注射が好きだななど居ないのだから。

「嫌だつたら、嫌です！サーヴァントに注射は必要ありません！
もつともな意見だ。」

元来、僕たちサーヴァントは風邪や病気になることはない。だが、このカルデアではサーヴァントは簡易的に受肉している状態だ。もしも、というのもあるし、何より前例があるのだ。

「リリイ、大丈夫だから。すぐ終わるよ」

「嫌です！近づかないでください！」

「づつ…」

鋭い一撃。

こころも拒絶されると思わず泣いちゃう。

「そもそもワクチン自体が安全である可能性がないのです！それに、あの痛みと打たないリスクを比べれば当然前者。つまり注射しない方が正しいのです。はい論破!!」

随分と口が回っているが、つまり痛いのが嫌ということだろう。

けど、ここで引き下がる訳にはいかない。これも子供達のためなのだ。

「うーん、困ったなあ。このままじゃ、またオルタに揶揄われちゃうなあー」

「!?」

「『え、なに、まさかアンタ注射が怖いのはつ、やっぱりお子ちゃまね。格の違いを知りなさいな』って言われてもいいの？悪いけど、今回ばかりは庇ってやれないな」

「ううう。でも、でもお」

まあ、リリイがここまで苦手ならあつちも多分… 確かオルタの方

はジャンヌが連れてくると言っていた気がする。

っと、噂をすればなんとやら。

騒がしい声がこちらに向かってくる。

「嫌、嫌よ！なんで私が注射なんか打たなきやいけないのよ!」

「安心して下さいオルタ^妹。お姉ちゃんが手を握っていてあげますからね♪」

「誰が妹か！変なルビ振らないでちょうだい！ああ、もう、離しなさいてっば、この！」

「ふんふんふー♪さて、着きましたよオルタ^妹。一緒に頑張りましたよね！」

「ちよ、アンタ力強すぎだつて…え、嘘、もう着いたの？嫌、嫌よ！ひ、ひいひいひいー！」

ニコニコ顔の聖女に引き摺られていく魔女。

悲しいかな、これが姉と妹の力の差なのです。

「…私、行きます」

覚悟を決めた目でリリイは言った。

人の振り見て我が振り直せとはまさにこの事か。ズンズンと医務室に歩いていく。もはや僕の手など必要ない。彼女自ら進んでいく。

「今なら、あつちの私にマウントを取れますから！」

そう言い、彼女は医務室へと入っていった。

うん、やっぱり子供の成長というものは良いものだ。

思わず涙が滲むが、これは悲しみからではなく嬉しさからである。

「うわーん！やっぱり痛いですー！」

頑張れリリイ。たとえ未来が変わる事ないとしても、努力し続けるのだ。

◇

とはいえ、ここからが本番である。

子供達の番が終われば次は我々大人なわけでした。

「やだなあ、痛いんだろうなあ」

憂鬱だ。

歯医者も大概だが、注射もどうかしてるぞ。なぜ、体内に鋭い針を

刺さなきやならないんだ。しかし、子供達に打たせた手前、逃げるわけにはいかない。

自室にアタランテを呼びに行く。基本的にあいうえお順で順番が来るのでアタランテは割と最初の方なのだ。それに一緒に行った方が手間が省けるだろうし。

「アタランテ、僕らも行こうk... 何やってるの？」

扉を開けるとそこには毛布で全身を包んだアタランテ。こちらが声をかけるとビクツと肩を震わせる。

「な、ナンノヨウダ」

「注射の受付がそろそろだから一緒に「私はもう打った！」... 本当？」

えらく食い気味に答えられた。

そんなはずはない。何しろさつき受付が始まったのだから。

「そ、それは... ここ、子供達と一緒に打ったのだ！だから私は行かない、行かないからな！」

「そうなの？ならまあ良いけど」

うーむ、困った。なら1人で行かなきやならないのか。

はあ、心細いなあ。

なんて、思っていると放送が流れてきた。

『アタランテさん。アタランテさん。まもなく予防接種のお時間です。医務室までお願いします』

「.....」

受付案内の放送だったようだ。

これはもう言い逃れは出来ないな。アタランテの方を見ると顔まで毛布を被り、その隙間からこちらをキツと睨みつけている。絶対に行かないと言わんばかりだ。

「ほら、観念して」

グイツと毛布を引き剥がそうとするが力強く被っているらしく引き剥がせない。むむむ、かくなる上は、

「ひゃっ!？」

毛布ごと抱き上げるしかあるまい。少し照れ臭いが、この際やむ負

えない。

彼女は突然のことで吃驚したらしく体をジタバタとさせているが、それで離すほど柔じゃない。

今の僕は楽しさ半分、焦りもあるのだ。このまま待たせてしまうとあの看護婦が突貫してくる予感がする。生前と変わりないというかさらに悪化しているとは、これだからバーサーカーは苦手だ。

「わ、わかった！わかったから下ろしてくれ。これは、その、流石に恥ずかしいから」

毛布から顔を出した頃には既に真っ赤つか。まだまだ、その顔を拝んでいたい仕方がない。

彼女の手を引き、医務室に向かおうとするが、そう上手くは行かないようだ。

「どうしても行かなきゃ駄目か？」

「駄目」

「むう……その、今日は予定があるのだ」

「なら明日にしてみらう？」

「あ、明日も予定が……できる気がする」

「おっけい。じゃあ行こうか」

気持ちには分かる。僕も一度やらかして聖堂教会に捕まった時は散々な目にあつた。彼ら僕を実験動物としか思っていないのだもん。注射やらメスやらで身体中をいじくり回すんだから、死ぬかと思つた。

とはいえ罫があかないのでこのまま連行させてもらう。アタランテは継るような目で訴えかけてくるが、屈するわけにはいかない。

「うう……」

「僕は君が病気で苦しむ姿は見たくないんだよ。できれば二度とね。」

あんな姿を見るのはもう勘弁だ。君にはいつも健康でいてほしい。

「……なら、手を握っててくれ」

「わかった」

「あと、できれば抱きしめて欲しい」

「……善処するよ」

ようやく医務室に向かえる。

正直、逃げ出したいなあ。

◇

「お、終わったか!？」

「まだ消毒しただけです」

アタランテは僕の膝の上に乗り怯えながらもその瞬間を待っていた。見てるこっちも怖い。ここに彼女がいなかったなら僕は逃げ回ってるだろうな。

「では、力を抜いてください」

「~~~~~!!」

そんなに針を凝視しては抜けるものも抜けないだろうに。

「ほら、僕の間を見て」

「？」

「そう、大丈夫。痛みなんて一瞬さ」

頭を撫でながら安心させるように声をかける。力さえ抜いておけばどうということない…。らしい。

「はい、終わりましたよ。しばらく手で押さえておいてください」

「お、終わってみれば大したものではなかったな。うむ!」

胸を張って答えるアタランテ。できれば最初からそうして欲しかったが。

さて、これで終了。とつとと部屋に戻ろう、うん、そうしよう。

「ミスター、次はあなたの番です。さあ、座ってください」

だめでした。

扉に手をかけた瞬間、引き戻されてしまう。

「奥様はやり遂げました。次は貴方が頑張る番よ」

「…はい」

そう言われてしまったては逃げようがない。

大人しく腕を差し出す。

そういえば他にも注射をしている人もいるようだ。少し耳を澄ませしてみよう。

『ふんっ!』バキッ

『ガウエイン卿、いい加減力を抜いてもらえるかい？注射針は無限にあるわけじゃないんだ』

『くっ、申し訳ありません。頭ではわかっているのですが、いざ肌に針が触れるとどうしても』

『いいですか？リラックス、そう深呼吸して…よし』プス

『ふんっ!!』バキッ

… 脳筋 is power

『身体に針を刺すなど正気ではありません！』

『ランスロット卿、後がつかえてますので』

『離していただきたいベディヴィエール卿！わたしは断固拒否する！』

『… マシユ殿が見ていますよ』

『はっ!?!』

『ジーーーーー』嫌悪的視線

スススー

『———さあ、一思いにどうぞ』

『まったく、トリスタンを見習ってください… トリスタン卿？もう注射は終わって… 気絶している!?!』

… 彼らと一緒にされたくないなあ。

意識を前に向けよう。

ひんやりとした物が肌に触れる。いよいよ消毒が終わりお注射の時間がくる。

「大丈夫だ。汝にはわたしが付いているぞ！」

あははっ、さつきと立場が逆転してしまったなあ。でも、安心する。

「では、力を抜いて」プスッ

「———痛っ！」

けど、痛いものは痛いのだ

短編 虎とヒト 「今夜は月が綺麗ですね」①

その目はいつまでも、虎を見ていた。幸せそうに胸に顔を埋め、自らのものだと言示するように強く抱きしめる虎を。命の炎がきえ、虚いでいく目で、いつまでも、いつまでも。

虎は気づいていなかった。男が朽ちていくことに、取り返しのつかないことをしてしまったことに。

その後のことは誰にも分からない。ただ事実として、その日、二人の人間が死んだことは確かだった。

◇

ある日のこと、ボイラー室に一人の狩人が訪ねてきた。

中に入れば黄金が散りばめられた異様な光景が目に入る。この光景に一瞬たじろいだものの彼女は意を決し、ある人物を呼んだ。

「んあ？なんじゃ弥助のこの… ああ、そうじゃった今は名が違うんじゃない。まあそう睨むではない。して何用じゃ？」

そう、自分が知らない彼を知る日本の英霊である織田信長。彼と関わった英霊の一人である。

ことの発端は、自分の夫を度々訪ねてくるあの日本の武将。名を長尾景虎と言ったか。二人の関係は知ったことではないが、頻繁に夫を酒の席に連れ込もうとし、彼も断ればいいのに結局絆されその席に参加するのだ。

それが気に食わなかった。

狩人は問うた。

「あの軍神とあやつの関係？ふむ、それにはまず、わしと弥助との出会いから。え、そこはどうでもいい？そっかー」

御託をいくらか並べながらも信長は語りだした。

◇

さて、どこから話すか… あの頃の儂はお上の怒りを買っておつての、周りは敵だらけ一世一代の大ピンチで困ってたわけじゃよ。てことで、どこかの国と同盟を組もうという話になり、白羽の矢が立ったのが越後の上杉家。

越後の龍なんて言われとつてぶいぶい名を馳せとつた上杉家の力があれば対抗できる。で、儂が誠心誠意書いた手紙を送ってもらおうと、弥助に命じたのよ。

「書けた！書けたぞ弥助、どうじゃ！わし渾身の一筆は！」

「——よくもまあ、こうつらつらとお世辞が出ることに。下手に出ることに関しては天才的ですね殿は」

「うははは！わしにかかれればこの程度の諂いとか楽なものよ」

「褒めてないですけど……この程度の使い、秀吉殿に任せればいいのでは？あの猿、功績が欲しいようですし」

「それも考えたんじゃが、てか猿に対して当たり強くない？そんなことない？……まあそれは置いて、最近は戦場に出てばかりじゃろう？少し休暇のつもりでこの任を当てようと思うのだ」

ぶつちやけ奴には戦場に出てほしくなかった。死んでほしくなかったとか、そういう情があつたわけではない。

あの時のあやつはどこかネジが外れておつた。特に勝蔵めと組ませた時は酷いもんじゃつたぞ。

『よつしや、足軽は10点、女子供は3点、大将首は100点つてどこか？』

『女子供はご勘弁……そういうのは好きじゃない』

『へっ、相変わらず甘ちゃんすぎやしねえか？あんま腑抜けてんと後ろから刺し殺すぜ』

『なんとも言うといい。死ぬなら本望だ。』

それに、戦場でいちいち数なんて覚えてられないよ』

『あー、じゃあいつも通りにするしかねえなあ』

『敵味方なんか関係ねえ、首を多く取った方が勝ち』」だな』だね』わしですら引いてしまったぞ。戦が終わって報告に来るかと思つ

とたら全身血まみれで現れるんじやから。手負いなのか聞いてみたら、これは返り血だ、とか笑顔で抜かしよるし。

その有り様を見ていた兵どもはよく分からんこと喚きながら帰ってきて使い物にならんくなるわで散々じゃつた。誰も味方までS A N値直葬までしろとか言つてないんじやけどな。

「つまり殿は、休暇ついでに死んでこいと申すわけですか」
「誰もそんなこと言つたらんわ！死にたがりも大概にせい。」

「これでもわしはお前を信頼しておる。桶狭間で勝てたのもお前の知略のお陰じゃった」

「帰蝶様に恩を返しただけです」

「ならば今回も同じことよ。織田家と上杉家を結び、恩を返して見せよ」

「…はっ」

そうしてあやつは上杉家に同盟を結びに行った。

まあ、わし自らの直筆の手紙を持たせてたわけじゃし？上手くいくのは目に見え取ったがな！

わしの考え通り、あやつは五体満足で帰ってきた。若干、げっそりしとつたのは気になったが些細のことよ。

「よくやった弥助！これでひとまず落ち着けるじやろう」

「まあ、はい」

「どうした？さては、あの龍に何かされたか」

「… 同盟の条件に定期的にもってこいと」

「なんだ、声がちっそうてよく聞こえん。はつきり申せ」

「僕の、秘蔵の酒を、定期的にもってこいと… くっ」

どうやら交渉の際に振る舞った酒が大層美味かつたらしく、えらい気に入られたようだな。あの時の弥助の顔は今でも覚えとるわ。

「殿の手紙が謙るにも程があつたんです。それで酒を振る舞ったらぐびぐび飲まれて… チビチビ飲むのが好きだったのに」

「… 是非もなし!!」

「どの口が言うんですか！」

まっ、そんなこんなで同盟は締結され、弥助は月に何度か上杉家まで足を運んだ。最初は渋々と言った感じじゃったが、時が経つにつれ景虎めのところに行くことを楽しみにしとるようじゃった。

◇

「わしが語れるのはこのぐらいじゃ

…ん？それで二人はどうなったかとな？」

信長は数刻の間何かを考えるそぶりをし、やがて口を開いた。

「あれは桜が咲き誇った日だったか。」

いつも通り弥助は景虎の元に向かい……。それっきり帰ってこなかった」

景虎の享報が届いたその日から彼が再び信長の前に現れることはなかった。

真相は本人達には知り得ない。あの日あの晩、一体何があったのか。

アタランテは勢いよく部屋から飛び出し、彼の元へ駆けていくのだった。

「……獣に好かれやすいのも難儀なものよな」

続く？

虎とヒト 「今夜は月が綺麗ですね」 ③

季節が巡り、紅葉が赤く染まった頃。

私達は月を着にしながら酒盛りを楽しむ。

どうやら少し酔ってしまっただけ。だから、それを口実にいつも
のお願いをするのだ。

「…少し膝を貸してもらえますか？」

彼の膝に頭を乗せ、そのまま寝転がる。上を見上げれば私を見つめる彼の顔がある。

「(うう、やはり気恥ずかしい)」

思わず目を逸らしてしまうと、彼はその様子を可笑そうに笑いながら優しく頭を撫でてくる。ひんやりとした冷たい手が肌に触れるたび熱った顔が冷やされ心地の良い気分になる。

「(少しぐらい照れてくれればいいでしょう)」

もしかして慣れているのだろうか。考えてしまうと何故か胸の当たりがズキリと痛む。

けど、今は私のものだ。彼は私だけを見ていてくれている。

それだけで今は満足なのだ。

「その、其方はどういった女子が好きなのでしょう？」

その場の空気に酔ってしまったのか、思わずそんなことを尋ねてしまった。

また、熱くなった顔を手で覆う。なぜだろうか、今までこのような気持ちを抱いたことはなかったのに。

「どうやら私も人並みの女であるようだ。」

「そう、ですね…」

彼は暫し考えた後、困ったように答えたのだ。

◇

「たのもー！ー！」

「はっ、はいいいー！」

彼が帰った後、私はすぐさま行動に移した。

「むっ、これは似合ってるのでしょうか？」

「え、ええ。とてもお似合いですよ。景虎様」

まずは国一番の着物屋で着付けて頂きました。

こういった女子らしい格好はしたことがないため自分ではよく分かりませんが、形から入るのが大事だと思うのです。

ですが、慣れないことをするのは難しいものですね。

『強いていうのであれば・・・女子らしい方、でしょうか？』

彼が言った理想の女性像、それは私と真逆の存在だった。

酒を阿呆のように飲む私はどんなに大目に見ても彼の言う女子には見えぬだろう。まあ、最近には彼に言われて自制するようにはしているのだけれども。

女子らしい、といえば可愛らしい着物という単純な考え。ですがこれだけでは足りません。

かといって今さら立ち振る舞いを正すのも中々苦労というもので

ならば・・・料理を。自らの手料理であれば、喜んでもらえるのでは。

とは言つても自ら台所に立つなどしたこともありませんし・・・私でも作れそうなものとなると、さて。

「餅、ですかね」

小さい頃、姉君がよく作ってくれたものだ。甘いものはあまり食べない私ですが、あの餅だけは不思議と好きなのです。合戦の前に料理番に作らせ兵に振る舞った事もあったか。

あれなら、私も。

「そうと決まれば、早速用意しなければ」

家臣たちが戸惑いながら右往左往していますが、知ったこっちゃありません。

私がやりたいからやっているんです。

ですが、

「ふふふっ・・・ あはははははははははは！！」

いやはや、我ながら何をしているんでしょうね。可笑しくて、可笑しくてつい声を出して笑ってしまいます。

最近の私はもしかすれば壊れてしまったのかもしれない。

誰かのために着飾り、誰かのために思い料理を作るなど！

こんな初めてで不思議な経験をし、こんなにも心が躍るなど！

「毘沙門天よ。私は今、初めて人間らしいことができているのです…。
そうは思いませぬか」

◇

「…モグモグ…モグ…モグモグ」

私が作った餅を頬張る彼。

紆余曲折ありましたが、味には特に問題なく作ることができたと自負できます。

「どうでしょうか…？」

反応を伺う。

やはり何か言ってくれないと不安になってしまう。ひよつとしたら甘い物は苦手だったのだろうか？

そんな不安をよそに彼はごくんと喉を鳴らし飲み込み、私の目を見て言った。

「うん…とても美味しいです。景虎殿が作った物だからでしょうか、今まで食べたどんな餅よりも美味しく感じます」

一つ、また一つと手に取り口に入れてゆく。頬張るたびに笑みを浮かべながら。

「…知りませんでした、誰かに喜んでもらえるのがこんなにも嬉しいことだなんて」

「何か言いましたか？」モグモグ

「いえ、なんでもありません。」

ささっ、私に構わずどんどん食べてください」

彼の笑顔を独り占めしたいのは我儘なのだろうか。ずっと側で、私に、私だけに、その笑顔を向けてほしい。

そう思ってしまうのは駄目なのでしょうか？

◇

一つ、また一つと餅を口に頬張る。

味はよく分らない。仄かに甘みがある…。というぐらいしか言い表すことが出来ない。

ただ、彼女が丹精込めて作ってくれたということは伝わってくる。

「とても美味しいですよ」

そう答えると彼女は気恥ずかしいのか視線を背けながら、それでも満足そうに笑っているのだ。

「何が人が分からないだ。今の貴方は誰よりも人らしいじゃないか」

いつにもなく着飾っていた彼女の姿はこの月夜の景色に溶け込んでおり、まるで天女のようにだと錯覚してしまう。

「とても美しく、そして可愛らしい」、そう告げるといつものように顔を赤く染め、顔を背ける。

神の化身と敬われ畏れられてきた貴方。

人を知りたい、理解したい。そう嘆いた貴方に少しだけ同情したのです。

「一つ我儘を申してもいいでしょうか」

「僕にできることでしたら」

誰かを思い、誰かの為に祈る。それを人と言わずしてなんと云えばいい。

「これからは、お虎と…呼んで、欲しいのです」

最初から答えは出たであろうに。

ああ、君が羨ましかった。

それゆえ、干渉し過ぎたのかもしれない。

Happy Halloween

「Trick or treat!!」

今日はハロウィン。

様々な仮装をし子供たちがお菓子をねだりにくるといふ、大人たちにとってはとても忙しい1日となるが子供にとってはお菓子を貰うことができる夢のような1日になるだろう。

「Happy Halloween、楽しいハロウィンを」

そう言つて子供たちに手作りのお菓子を配る。

受け取つた子供たちはお礼と喜びの声をあげる。

「わー、ありがとう!!」

「ふふつ、喜んでくれて何より。でも、食べ過ぎちゃあ駄目だよ。じやないと怖い看護婦に怒られちゃうからね」

「うんー」

足早に次の標的を目指す子供たち。まだまだお祭りは続くようだ。

さて、ハロウィンとあつてか子供達もだが、大人の方も個性あふれる仮装をしている。

簡素なものから、思わず二度見してしまうほどの過激なものまで、多種多様なものだ。

中でもフロレンス… 婦長のは酷い。

『ハロウィンには危険がつきもの！我々医療班も厳戒態勢で見回りをするべきです。もちろん雰囲気壊さないように』

君の衣装が最も危険だ。

なんでそんな破廉恥な衣装で歩けるんだ。鉄仮面にも程がある！

みる、すれ違う男はガン見してるぜ!?少しは恥じらう気持ちを持つた方がいい!

一部サーヴァントの暴走はあるが大体は平和だ。

「あら、騎士の仮装かしら似合ってるわね」

「…でしよう?」

僕はというと、霊器を一段階切り替えた姿である騎士の格好で出歩いている。

本当は僕自身に戻ってもいいんだけど、流石に泣かれるのでやめておいた。

これも一応は仮装といってもいいだろう。名まで変えないといけないのは面倒ではあるが。

とりあえず、手持ちのお菓子を配り終えてカルデア中をぶらぶらしている

「くっ… 我々は一体どうすれば…!!」

何やら騒がしい声が聞こえた。

どうやら、円卓組の部屋のようにだ、

「なんと…!!」

「まさか王があのようなお姿に…」

「またしても、お一人で苦渋の決断を下したというのですか…!」

一枚の礼装写真を囲み何やら嘆いている円卓の騎士たち。

誰が言ったかどすけべ礼装。ロイヤル・アイジング

煌びやかなドレス、そしてほんのり透けて見える黒い下着。雪のよ
うな衣装に身を包んだアルトリアの写真。

ほのかに染まった赤い頬がまたしても、グツとくるものがある。

「——何を悩んでいるんだい」

「はっ、その声は!?!」

「王の歩む道の後ろに従うというのが臣下というもの」

彼らの前に現れた一人の男。

「「ギルベルト卿!!」」

よし決まった。

しっかりと決めポーズを決め登場する。

女性を語る会の仲間、そして元同僚たちが困っているなら手を貸さない訳にはいかない。

おっと、どの口が言いやがるってのは禁句ね、心は硝子だから。

「しかし、一体どうするっ…」

「決まっている」

勢いよく、着ていた鎧を脱ぎ去る。

そしてその下に来ていた本当の仮装が姿を現した。

「そ、それは王と同じ…!」

即席で作ったロイヤル・アイジング礼装（サイズぴったり）
もはや恥もプライドもない。

「ふっ、勿論君たちの分も用意している」

彼らの目の前に差し出す。

一瞬神妙な面持ちになったものの決断は早かった。

「感謝します、ギルベルト卿！

こうしてはいられません」

鎧を脱ぎ捨て衣裳に身を包む馬鹿ども。

この場に四人の怪物が揃った。

「さあ、我らも王に続きますよー!」

各々ポージングを整える。

全ては王のため。その顔に一切の曇りなし。

王の待つ会場に足を運ぶためドアを開けた、

その瞬間、

「何やってるんですか
閃せよ――!」

彼らの目の前が光り輝いた。

そこに立っていたのは円卓唯一の良心。

「この馬鹿どもー!!
銀の腕!!」

「「ぐわあああああああ!!」「」

銀の腕の騎士、ベデイヴィエール卿。

彼により、ハロウインの怪物たちは打ち倒された。

「急患――!!急患でーす!!」

◇

「何があったのだ…!?!」

「い、いや〜、あははは」

アタランテがあらかたお菓子を配り終え、帰った時目にしたのは包帯にぐるぐると身を包まれミイラ男となった夫の姿だった。

お仕置きを食らった円卓たちは医務室に搬送され、各々治療を受けた（お説教付き）

「大袈裟に治療されただけだからさ」

「はあ…： 羽目を外しすぎだ汝は。また問題を起こしたのだろうか？」
「うっ…：」

包帯を取りながら呆れたように言うアタランテ。
正論なので反論はできない。

包帯が外され、いつもの自分に戻る。

部屋に入り、今日の出来事を語り合った。

「子供達、すごい喜んでいたよ」

「ああ、一緒に作った甲斐があつたな」

一人で用意するのもアレなので、夫婦の共同作業ということと一緒に作りのお菓子を作った。苦労した甲斐もあつてか大好評のようで、こちらも嬉しい限りだ。

本当にハロウィンという行事はいいものだ。

怪物である僕でも彼らに混じって心置きなく参加できるのでから。

「そういえば言い忘れてた、その仮装、すごく可愛いね」

「そ、そうか。あまり派手では無いのだが」

「それぐらいがちょうどいいんだよ」

アタランテは申し訳程度の白い布を被つたお化けの仮装といったところか。

欲を言えば、もっと派手なものを期待したのは言うまでもないが、その場合は部屋から一步も出すことができないのでこれでいいのだ。

「あ、あまり見てくれるな…： 恥ずかしいから」

「そういうところが好き」

「なっ!?…： うう」

反応が面白くてつい揶揄ってしまう。

うん、そのむすつとした顔も可愛い。

思わず頭に手を乗せ撫でてあげると、擦つたそうに身を振りながらも満更でもなさそう。

ひとときしり楽しみ、彼女の可愛いさに満足したあと、そろそろ寝るかアタランテに背をむけベットに向かう。

「んっ？」

すると、キュツと袖を引っ張られた。

どうしたのかなと後ろを振り返ると、

「が、がおー」

「…」

可愛く両手を上げ、こちらを威嚇するようなポーズをとっているアタランテ。

その姿が可愛過ぎて呆気に取られてしまう。

「今日はハロウィンだからな、trick…その、イタズラだ！」

少し照れたように頬を染め、そして、してやったりと胸を張るアタランテ。

「ふっ…ふっ…あはははは！」

なんだか、可笑しくって二人で笑ってしまう。

うん、いい。凄くいい顔だ。

悪戯されるのもたまには良いものだ。

そう言えば、これも言い忘れてたな、

「…Happy Halloween、アタランテ」

虎と怪物 「今夜は月が綺麗ですね」 ④END

私は気がつけば彼が来るのを心待ちにするようになりました。

今日は来るだろうか、来てはくれないのか、なら明日はどうだろうか。

「お久しぶりです。」

「今日も随分着飾っているんですね」

「はい！其方が褒めてくれましたので…！」

「それで、どうですか、今日の私は？」

「大変お可愛らしくて、目の保養になります。また一段と綺麗になりましたね」

「可愛い… ふふつ、あつははははは!!」

ええ、そうでしょうとも！なにせ、頑張ったんです、私！」

季節が変わるごとに、月日を跨ぐごとに私たちの距離は縮まってく。

遠慮することはもうありません。

彼なら、私を受け入れてくれるのですから。

「ねえ、今度は私が膝を貸しましょうか」

「え、それはちよつと…」

「いいですから、ほら、遠慮なさらず。ね？」

「……」

「仰向けにならないと寝づらくはありませんか？」

「… これで、十分です」

「あはは、其方もそのような顔ができるんですね」

「… お戯を」

「ふふつ、可愛いですねえ。いい子、いい子」

「ん、ん」

季節は巡り再び春になった。

桜は咲き誇り、鳥は唄い、そしてお酒が美味しい。あいも変わらず私たちの関係は続いている。

着物で着飾るのはやはり慣れない。しかし、彼はこの姿を見るとい

つも笑ってくれるのだ。それがなんとも言えぬ心地になり私を温める。

理解されなくても良い、私も理解するつもりはない。けど、彼には、其方には私を見てもらいたいのです。

「実はですね…。」

これからも彼との関係は続くだろう。否、何を言われようと続けてみせます。

しかし、何も変わらないというのは些か飽きた。

初めは待ち焦がれる時間が愛おしく感じた。待った分だけ、再び会う時に喜べるのだから。

だがそれも次第に苦痛になってきた。

何故其方はここに居ない、私のそばに居てくれない。あのうつけの元ではなく私のそばにいれば良いのに。

だから考えたのだ。

これなら家臣達も納得する。我ながらいい考えだ。

「そろそろ身を固めようと考えていました」

「おお、それはそれは、めでたいですね」

他人事のように言う。

それが少し気に食わない。

でもいいのです。これで私たちは次に進めるから。

「それで、そのお相手というのは？」

「えっと、その… 其方です」

「？」

ああ、顔が熱くてたまらない。

「ですから、その… 其方に、私の伴侶となって欲しいのです」

「…。」

意を決して言った。

思わず俯いてしまう。見れない、彼の顔を見れない。誰かに想いを伝えるというのはこんなにも難しいものなのか。

けど、返事を聞かなければならない。

顔を上げ、彼の目を見つめる

彼は少し困ったような、面食らったような顔をしている。

そして、口を閉ざしたまま俯いて、再び顔を上げて口を開くまで少々時間がかかった。

その時間が煩わしい。

私は分かっています。其方ならきつと、私のことを受け入れてくれると、

「ごめん、なさい」

「——はい？」

… あれ、可笑しいな。

そんな、こと。いや、そんなはずない。そうだ、聞き間違いだ。そうに違いない。

視界が酷く歪む。

「い、今なんと」

「ごめんなさい。貴方の気持ちに伝えることはできないのです」

「… 他に相手が？」

なら、殺そう。奪おう。

そうすれば手に入るのであれば、私はそれを成そう。

彼は肯定はしなかった。しかし、否定もしない。

「いえ、そういった方は居ない… 今は居ません」

「なら、どうして…」

彼は月を見上げながら、どこか懐かしそうに話す。

「約束… そう、約束したのです。誰かと、遠い昔に誰かと。もう顔も思い出せないけど、僕を待っている人がいるのです。

だから… 貴方の想いに応えることはできません」

どこまでも優しい声で私に語る。

愛おしそうに、遠く離れた誰かに思いを馳せる彼。

——ああ、そうか。そうだったのか、

結局のところ、彼は私を見ていなかった。私を通して、どこの誰かも解らぬ者を重ねていたのだ。

初めて会った時よりも明るくなった彼。何もかも諦めていて、何をすることも受動的だった。

今はどうだろうか。

“おかげで思い出せた”と希望に満ちた目で私を見る。

「僕も貴方に言わなければならぬことがあります」

——やめろ

「随分と一つのところに滞在しました。そろそろ潮時かと思いで」

——ねえ、お願いだから

「織田家には僕はもう必要ないでしょう。だから、また旅に出ようと思っ

——私のことを

「しばらくは日の本を見て回ろうと思います。お土産期待してくだ

s...」

——私のことだけを...！

行動に移すのに躊躇はなかった。

鮮血が飛び散り部屋が血に染まる。

「あつ...?」

ポタポタと落ちる血。

どこから溢れているのだろうか。男は不思議に思った。

視線を女へと向ける。
目の前の女は何かを嘆きながら刀を握っている。その刃先には血が付いており、数秒間硬直した後、それが自分の喉から溢れていると気づいた。

「ガヒュッ!? コヒュッ...!?!?!」

ゴボゴボと鳴る喉。

哀れな男。これにより伝えたいことも、何一つ話せなくなりまし

た。
喉を押さえても血は止まらない。

“なぜ?、どうして?、その言葉が発せられることはない。喉を切り裂かれ、戸惑いを隠せない。

目の前には虎がいる。

虎は刀を握り、再び男に切り掛かった。逃げようにも、動揺により

体を上手いこと動かせない。

「私以外のことを口にするならもう必要ないでしょう?」

再び刀が振るわれる。

男の視線に銀色の輝きが見えたかと思うと、一瞬にして視界が真っ赤に染まる。

走る激痛。あまりの痛みに叫び声を上げたつもりだが、

「……………!!……………!?!」

漏れるのは不快な呼吸音。

もう目の前の虎がどのような顔をしているのかも分からない。

「私のことを見てくれないのなら、そんな目は要らない」

虎が近づいてくる。

男は痛みを耐えることが精一杯で反撃することができない。

それでも、せめてもの抵抗として虎に向かい腕を伸ばすが、

「邪魔」

ぼとりと音を立てた。

伸ばした腕が軽くなる。どうやら切り落とされたらしい。もう一方の手も同様だ。

最早、男に残るのは二本の脚だけ。それも時間の問題だろう。

「笑顔が好きだからと…女子らしいのが好きだと…其方が言ったから私は…!」

斬り裂かれ、斬り落とされ、男が懇願してもそれが止むことはない。

幸運だったのは、男がただのヒトではなかったことか。たとえ致命

傷でも心臓を貫かれぬ限り絶命することはない。

しかし、いくら傷が治ろうとも虎の捕食が止むことはない。次第に回復力も落ち、最後には虎に抱きしめられることになった。

「あはは、これで良い。」

其方はただ、私のことを思ってくれるだけで良いのです。ここに居てくれるだけで良い」

男は微かに回復させたその目で虎を見ていた。幸せそうに胸に顔を埋め、自らのものだと誇示するように強く抱きしめる虎を。命の炎がきえ、虚いでいく目で、いつまでも、いつまでも。

「嫌だ」

「そばに居てください。私のことを拒絶しないでください……」
だが、虎は気づいていなかった。

男の斬り裂かれた手足に触手が生え始めていることに。

「まだ、終わりたく、ない」

それは逃走手段。

拒絶するつもりはない、傍にいる事もある程度は善処しよう。

だが、生き餌いされるつもりは毛頭ない。

虎の手を振り解き、男は逃走を始める。

この行動は矛盾している。これまでの男は「死にたい」と願っていた。しかし、今はどうか。

「死にたくない」、その生存本能が死にゆく男を突き動かした。

「なんで、なんで…… どうして私を、私だけを見てくれないんですか？」

顔を歪ませ、虎はその後を追う。その目に光はない。

今度こそ手に入れて見せよう。もうドコヘタリトモイカセナイ。

男は既に死に際の獲物に過ぎない。自慢の足はなくなり、ただ歩行機能を持った触手を引きずりズルズルと逃げ場を探している。後ろからは自分を探す虎の鳴き声が響いている。

「……！」

思わず逃げ込んだ狭い一室。だが、それは悪手だった。

そこは廁。

もう、逃げも隠れもできない。

扉が開く。

虎が血の匂いを嗅ぎつけ追いついた。

「見つけた」と感情のない笑みを浮かべ虎は再び刀を振りかぶる。

その醜い触手を切り取り自分のものにする為に。

男に刃が迫る。もう逃げることはできない。しかし、それを受け入れることもできなかつた。

だから、思わず、

「あれ…… ゲホッ…… あ、あはははっ!!」

女の体を貫いてしまった。
血に染まる白銀の髪。その胸には心臓を貫いた触手。
致命傷である。

いかに神仏の化身といえど、死は避けられない。
それでも景虎は笑っていた。

「これで、これで…一緒にいられますね！」

男の胸に深々と刀を突き立て、その命が果てるまで笑う。

もう逃がさない。これで何時迄も彼は自分のモノだと、笑った。

それが叶わぬことだとしても。

男は朽ちていく。また一つの生を終わらせようとしている。

女は最後まで力強く抱きしめてきた。事切れるまで、何時迄もずっと、ずっと。

「(ああ、どうしてこう、上手いかぬ)」

最後に浮かべたのは後悔か。

消えゆく体に別れを告げ、冷たくなる彼女の頭を撫でる。

「(似ていたんだ、似ていたから入れ込んでしまった。ごめんなさい…ごめんなさい…ごめん、な…さい)」

そうして塵となって何処かへと消えていった。

その後のことは誰にも分からない。ただ事実として、その日、二人の人間が死んだことは確かだった。

◇

「大丈夫…大丈夫だから。そろそろ離してほしいな」

「…」

先程から何も喋らず、ただ抱きしめてくる彼女に優しく話しかけた。

押さえつけられた時はどうなるやらと思ったが、抱擁してくる彼女を受け入れるだけで済んでいる。

「何もなかった、何もなかったんだ…お虎さんは、その、大切な人であることは変わりないけど、ただそれだけだ」

そう、何もなかったのだ。

それで良いじゃないか、その方がお互い幸せだ。

嘘で隠した方がいいこともあるんだ。

けど、そう上手くはいかない。

君が嫌いなことは、嘘……僕は結局どうすればよかっただろうか。

「……嘘吐き」

顔を上げたアタランテに睨み返される。

しまった、どうやら誰かに話を聞いていたらしい。殿か、森君、それとも茶々、はないか……誰にせよ余計なことをしてくれたものだ。

抱きしめてくる腕の強さはより一層強くなる。

「忘れてしまえばよかったのだ」

「……」

「百の人生を繰り返せば、それだけ生の実感が薄れていくだろう。それは薄い生を放り捨てているだけだ。だから、忘れてしまえばいいのだ。」

そうすれば、苦しむこともなかっただろうに」

それは、確かにそうだ。

そうすれば、ただの怪物として死ねただろう。誰を理解することもなく、理解されることもなく、純粹な悪役として。

でも、できなかった。できなかったんだ。

「それでも……覚えていたかったんだ。馬鹿な真似もした、救えなかった、人もたくさん殺した、殺されることもあった。それでも、忘れたくなかった。良いことや、大切な出会いもあったんだ。勿論、君と出会ったこと、恋をしたこと。それも大切な物の一つなんだ」

これは本心だ。

嘘偽りない、僕自身の思い。

けど、彼女は納得してくれないようだ。不機嫌そうに耳を絞り、あいつも変わらず目すら合わせてくれない。

「ふんっ、都合の良いことだけでは納得せぬぞ。この浮気者……!!」

「ん……ん」

ズキリと胸が痛む。

そんな言い方はないじゃないか。

まだまだ、彼女の怒りは鎮まらない。

「私は汝のことを、ずっと、ずっと想っていたのに。お前は他の者になんかつつを抜かしていたというのだからな」

「そんなこと……僕は君のことを愛していた。それは今でも変わらないよ」

たとえば、僕が偽物だとしても。僕が抱いていた^彼「愛している」というこの想いは本物のはずなんだ。

「っ……どうだか？愛してるというなら、私を放つてあの女のところなどに行かぬであろうよ」

「むっ……」

それは、悪かったと思ってる。

けどそれとこれとはまた、別じゃないか。

「あの女が好きならば今からでも行つてくればいいだろう！ああそうさ、何処へなりとでも行つてしまえばいい!!汝などもう知らん!」

そう吐き捨てるのと、ベットから離れ部屋の隅っこの方へ毛布を被り塞ぎ込んでしまった。声をかけても「うるさい!」、その一言で終わりだ。

何処なりとでも、か。行かないでって言ったのは君じゃないか。

その通りに出ていくこともできる。一度、頭を冷やすのもいいかもしれない。

けど、それは違うのだ。悪いのは僕だし、原因も僕だ。

なら、謝るのが筋というものだ。

「ごめん、ごめんね……もう黙って何処かに行かないし、出かける時は一声かけるよ。君との時間をもっと大切にす。だから、さ」

それでも、返事が返ってくることはなかった。困った、完全にヘソを曲げてしまったみたいだ。

ならば、

「今日は……寒いね」

「知らん」

「……一緒に寝たら暖かいだろうなあ」

「……」

「…」

待てども、待てども返事は返ってこない。

仕方ない、今夜は一人寂しく寝るかなと彼女から視線を外し、体も反対に背ける。

すると、毛布が捲れ隣に暖かな体温が現れた。腰に回される腕が愛おしい。僕は黙ってそれを受け入れる、お互い顔を合わせぬまま数刻、また数刻と時は流れる。

「愛してるって言って欲しい」

掠れた声が聞こえる。今にも消えそうな小さな声で、

「愛してる」

それくらいお安い御用だ。

「本当？」

「当然」

「… なら良い。でも… できればあの女のところに行って欲しくない」

「善処するよ」

少し力が強まる。

「わ、分かった。月一ぐらいにしておく」

「… 朝帰りは無しだ」

「ははっ、うん。了解です」

つい飲み過ぎてしまうのは悪い癖なのだろう。人のこと言えないな。

彼女の方へ向き直り、今度は僕の方から抱き締める。このまま眠ってしまおう。でも、アタラントはそれを許してくれなかった。

「寝る前に風呂だ。汝から私以外の匂いがするのは… あまり好かん」

スンスンと匂いを嗅ぎながら彼女は上目遣いで言ってきた。

「… お手柔らかに」

自分のモノだと主張されるのも悪い気はしないのだ。

◇

今日も美しい満月… といってもシュミレーター内の景色なので

風情などないのだが。

一人寂しく酒を飲む。いつからだろうか、一人で飲むのがつまらないと感じてしまうようになったのは。

・・・私だけを見て欲しかった。ただ、そばに居て欲しかった。まあ、今更虫が良すぎるというもの。

「でも、安心しました。其方は再び会うことができたのですね」

彼がああ、狩人に向けている笑顔は私が見たことなかったもの。それを思い知るたび、心が苦しくなる。

けど、彼は彼であつて彼じゃない。私が恋した彼は、私自身で殺してしまつたのです。

だからこうして一人で酒を飲む。いつもと変わらぬ一日の終わり。

しかし、今日は来客がいるようで、

「もしよ？よろしければ同席させて頂いても？」

「んあ…？」

声が聞こえた。その声は何処か懐かしくて、反射的に後ろを向いてしまった。

そこには、あの頃と変わらず同じ格好で、いつも通りお酒を手に私のところに来てくる彼がいた。

「どうして。今日は、駄目だつて…」

「ん？ああ、そうですね。アタランテのことはあつちの僕に任せます。

この僕は…まあ亡霊みたいなモノです。一時的に体を得ているだけですから」

彼はよく分からないところを言いながら私の隣に座る。

そして酒を注ぎ私に差し出すのです。

「んぐっ…んぐっ…美味しいです」

「でしよう？蔵から拝借して来た甲斐がありました」

今まで飲んだことのないような優しい味わい。彼の故郷の酒だと言ふ。

これはあの日の再演なのだろうか？なら、もう一度聞いてみようか。

「——今夜は… 月が綺麗ですね」

以前聞いた話では、当世ではこのような言葉で相手に思いを伝えるのだとか。答え方を彼が知っているかは定かではないが思わず言うてしまった。

返事を待つ。

答えはわかっている。これは意味のない問答、それでももう一度聞いてみたかったのだ。

彼はあの日と同じく口を閉ざしたまま俯いて、暫くした後、再び顔を上げ口を開いた。

「…死ぬのはごめんです」

「そうですか」

ああ、これで良い。これで良いのです。

私たちはこの関係が心地良い。

「それにしても… 其方が持つてくるお酒は、本当に美味しいですね」

ああ、今日もお酒が美味しい。

短編 後日談 『仕返し』

俺は姐さんのことを好いている。分かってるさ、これは愛だとかそういうもんじゃない。どちらかという憧れに近いものだ。子供の頃に親父から聞かされた数々の武勇伝、多分それが原因だ。やれ、アルゴ船での活躍だとか、怒りを買ってヘッドロックされただとか、心躍る話もあれば親父の不甲斐なさを知れるものまでいろいろんことを聞かされたもんだ。

その中でも印象に残ってるものは親父も参加したっていう「カリュドーン」の怪物狩り。その狩りの中で酷え目にあつたのが親父なんだがそれは今は置いておこう。

親父が語ってたのは姐さんの活躍のことばっかだ。アタランテが一番に怪物に毒矢を打ち込んだとか、あの怪物を殺せたのはアタランテのおかげだとか。

… 実際のところ、聞いてた話とは全く違ったんだがな。

——メラニオス

それが怪物の正体で、姐さんが愛した男の名。それは時が経った今でも変わらないようだ。

あいつには少しばかり因縁がある。最も相手にとっては身に覚えのないことだろうが、俺にはある。何せ、あいつの邪魔さえなければ、あの矢に射抜かれる事はなかった、少なくともそうだと考えている。

恨んでるわけじゃない。ただ気に食わないってだけだ。第一、俺の方が速いし。

「はあ…」

ため息を吐く。

まあ、なんでこんなこと考えてるかかっていうと、
「なんら〜アキレウス。私の酒が飲めないのかあ〜」

俺の隣で酔っ払っている姐さんのせいだ。

”すこし付き合え”と誘われた時は少々面食らったが姐さんのお誘いとなると断るわけにはいかない。一体なんのようだろうかと胸を弾ませたもんだ。そうして連れてこられたのが、このBAR。こん

な小洒落た店に来るのかと少し意外に感じた。まずは乾杯に一杯。ここまではよかった。そこから姐さんはもう飲むこと飲むこと。あつという間に酔っ払いやがった。

で、始まったのが愚痴大会。それも自分の夫の関してのことばかりときたもんだ。

「林檎酒、おかわり。林檎は黄金の林檎でたのみゆ」

「申し訳ありませんお客さん。先ほども申し上げた通り、当店では黄金林檎は取り扱っておりません」

「むう... なら銀の林檎だ。あれもおいしいから、

... そえでなアキレウス。彼がな、私にな、黙ってだなあ」

「その話は何度も聞いたぜ？」

バーテンダー、酒はもういいから水、水を持ってきてくれ」

「少々お待ちを... こちらになります」

「どうも。ほら、姐さん。あんま酒強くないのに飲み過ぎだ。酒も過ぎると毒になるぞ」

姐さんは同じ話を何度も何度も繰り返している。相当酔っ払っているらしい。あいつが姐さんを酒の席に連れてきたがらないのも分かった気がする。こんな姿、誰にも見せたくないもんな。

「汝も同じことを言う！かえだつてな、自分は黙ってお酒を飲みに行くのに、私には一滴たりとも飲ませようとしなない！」

「そりやそうだ」

「むくくなげだ！」

水をがぶ飲みしながら絡んでくる。他の客の視線もお構いなくだ。

まあ正直いうと普段見れない一面を見れて少し嬉しく感じてしまっている。日頃の悩みを話してくれるのは、姐さんが俺のことを信頼してくれていると思っても良いだろう。これで姐さんの気苦労が晴れるなら付き合っつてやるのもいいもんだ。

「それでな、かえがな...」

まだまだ、続くらしい。そこで一つ聞いてみた。『そんなに不満があるならなんで一緒にいるんだ』つてな。

そしたら、

「それは私が彼のことが好きだから、愛してるのだ！そえ以外に何がある！」

今度は惚気話が始まっちゃった。他人の惚気ほど面白くねえ話はねえ。それが気に入らねえ相手とのもんだと尚更だ。

「私が求めると必ず抱きしめてくれるんだ。それにな、近くに寄ると撫でてくれる、それがとても心地良くてだな……」

「……ああ」

けど、話をしている時の姐さんはとても幸せそうだな、照れたり、笑ったり、泣いたり、色んな感情を交えて話すのさ。そこからは姉さんが惚気て、俺が相槌をしながら話を聞く、その繰り返しさ。

「子供たちと戯れる彼の顔を見たことあるか？……まるで、父親のようなのだ。」

あの頃と何一つ変わらない。わたしたちは……かわれない」

うとうと、首を上げ下げしながら姐さんは語る。そろそろ限界らしい。さつきから何度もあくびをしている。

「ん……ふわああ」

俺が部屋まで運ぶのもいいが、面倒くさいことになるのは目に見える。迎えを呼んでやるか。

バーテンダーに目配せをする。察しのいい男だ、すぐにどこかへ電話をかけ始めた。

「あーもしもし？うん、私だよ。今忙しい？人を探してる？……うん、うん。彼女ならここにいるよ。あー、そんな急がなくていいからネ、君が走ると被害が出ちゃうから……ああ、アキレウス君が一緒だ。うん、場所は分かる？はい、お待ちしております」

数秒後……

バタンツ、とドアが勢いよく開かれた。息を切らせながらアイツは店に入ってくる。

「はっ……はっ……はっ……アタ、ランテ……」

どうやら姐さんが中々帰ってこないのを心配して随分と探し回ったらしい……何を言わず来ていたのか。そういえば、コイツも姐さんに黙って出掛けるのか言ってたな。

「ほら、姐さん。迎えがきたぜ」

「ん…」

「寝ちまったか」

顔を伏せて、スヤスヤと寝ている。無理に起こすのも悪いだろうし、後は任せても良いだろう。

「姐さん、アンタのことずっと話してたんだぜ？少しは大事にしてやれよ」

「…うん。ごめんね、迷惑かけちゃったね」

「気にすんな。ここの代金払ってくれたら、それでチャラだ」

なんだかしおらしい反応で拍子抜けしちまった。いつもなら「お前に言われなくても」やら言ってくんだけどな。姐さんの作戦は成功ってことか。

「了解… 本当ありがとう。君以外の男と一緒にだったら、暴れてたかも」

「ちよつと!?!アラフィフの折角の楽しみ場を奪うのは勘弁して?」

「冗談、冗談さ。本気にしないでよ」

嘘だコイツ。目が本気だぞ。

「ごめん。ここのソファァー使うね」

「ああ、どうぞ」

姐さんのことを店のソファァーに寝かして、心配そうに頭を撫でるメラニオス。まあ、ここから先は野暮ってもんだ。そろそろお暇しますかね。静かに出入り口の方に向かい外に出ようとしたが、最後にアイツの方へ振り返った。

「姐さんのこと、また不安にさせたら許さねえからな。そのうち奪い取っちゃうぜ」

アイツは少し押黙ったが、すぐに「させないよ、絶対に」と俺に言った。ふん、それが嘘じゃないことを願う。そうして俺は今度こそBARを後にした。

◇

「んん… ハハハッ」

アキレウスが帰った少し後、目を擦りながらアタランテは目を覚ま

した。しばらく状況が掴めてないようでキョロキョロと辺りを見渡していたが僕の姿を見つけると、顔を綻ばせた。

「わたしの気持ち、分かったか？」

「え？」

悪戯をする子供のよな表情でそう言ってきた。

「汝も、何も言われず置いていかれる気持ちが分かった…？」

ああ、分かったとも。君が帰ってこないのが時間に経つにつれどんどん不安になってきたんだ。

帰ってこないのか？何かあったのか？、そんな考えばかり頭を駆け巡った。そしたら、いても経つてもいられず、そこらじゅうを探し回った。食堂に、マスターのところ、子供たちのところ、他の英霊たちの部屋まで。ようやく場所がわかった時どれほど安堵したことか。

「分かった。もう分かったから…心配したんだよ。本当に」

「ふふつ、なら良い。心配させてすまなかつたな」

愛おしそうに頬に手を添わせてきた。それを黙って受け入れる。

「よし。わたしは動けないからな…抱っこして帰って」

手を広げてじつとこちらを見つめてくる。いつもは照れちやう癖に、こういう時は積極的なのがずるい。彼女の体をそのまま抱き抱えると首に腕が回される。我ながら慣れたものだと思う。

「…重いかな？」

「ん？全然、むしろ軽すぎて心配になっちゃうぐらい」

「そうか…えへへっ、そうか」

彼女を抱きながらドアに向かう。ようやく眠れると、開こうとした時、

「これお会計ね」

伝票を手渡される。そういえば、奢るって約束したんだっけ。どれどれ…

「えっと、百万QP…百万？」

見間違いか？桁を何度も確認する。おかしいな、何度やっても百万QP

「彼女も結構飲んでたけど…アキレウス君もかなりお高いの頼んでたからね」

「つ、ツケ払いつて…」

「ふうむ、この値段だと流石にねー」

「な、なら。黄金林檎！、黄金林檎を仕入れるってのはどう？」

最近、栽培に成功したのだ。もちろん神話のような効力はないが通常の三倍の旨味と果汁、そしてカロリー。それらを備えたものがやつと作れたのだ。ほとんどはマスターに奪われたが、苗がある限りいくらでも栽培できる。ゆくゆくは食堂や商店に売りつけようと思っていたがこの際仕方ない。

「…半額でくれるならイイよ」

「なつ、足元見過ぎじゃない？」

「ならこの話はなかったことで」

「…八割引き」

「半額」

「七割！」

「半額」

この…だが、百万一括は厳しい。むしろ買い手ができたのは得な
のでは？なぜか上手いこと載せられている気がするがしょうがない。
そう、しょうがないのだ。一応僕の責任でもあるわけだし。

「…分かったよ。背に腹は変えられないもん」

「毎度ー、明日からよろしくね」

疲れ果てた顔で店を後にするのだった。

◇

部屋に戻るため、僕はアタランテを抱えながら廊下を歩いている。
するとこんなことを聞いてきた。

「なあ、汝にとって私とはどのようなものだ？」

難しい質問をしてくるものだ。君がどのようなもの…思い浮かぶのは、愛する人、そばに居てほしい人、君が居てくれないと僕は寂しい。そんなところだろうか。

…いや、違うな。きつと、そんな軽い想いではないのだ。

「渡したくない。手が離れないことを知っていても、渡してなるものかと、守ってしまう…。そんな存在かな」

誰にも君を渡さない。君を傷つけさせない。これは独占欲だろうか、側から見ると醜いものかもしれない。

それでも、

「ふふっ、私は愛されてるな」

僕を愛してくれる君をみてしまうと、そう思ってしまうのだ。

短編 お仕置き

カチコチ、カチコチ……

時計の針が鳴る音が部屋に響く。

「……………」

私はこの部屋でただ一人、彼の帰りを待っている。

時計は22時を過ぎ、既に23時に差し掛かろうとしている。

「遅いな……」

何かあったのだろうか。

胸にザワつきを覚える。

『22時ぐらいには帰るよ』

その言葉を信じて、私は待っている。

「宴会……?」

「そうそう。ギルガメッシュに誘われてね」

夕食を終え、後片付けをしている最中、彼は口にした。

「汝は……いくのか?」

「うん。前々から付き合えとは言われてたからいい加減行ってあげないかね」

「正直、面倒くさいけどね」と口では言いながらも、どこか嬉しそうな彼。

むう。それでは引き止めにくいではないか。

「良かったら君も来る? 他のサーヴァント達も来るみたいだし」

「いや、私はいい。あまり酒に強くないからな 汝だけで楽しんでくるといい」

「そっか。なら、お言葉に甘えて」

本当ついでに行きたいが、私が居ては気を遣わせるだろうと遠慮しておく。

……少しだけ離れるだけなのに、どうして胸が締め付けられた様に痛むのか。

彼は片付けを終え、すぐさま出かける準備をしている。鼻歌を歌い

ながら容姿を変え、浮き足立つのを見ていると余計に行って欲しくな
い。

「じゃあ、いつてきま... どうしたの?」

「...」

扉を開け、出て行こうとする彼の袖を引いてしまう。

不思議がる彼だったが察したのだろう。私を抱き寄せ、頭を撫でて
くれる。

「心配しなくても早く帰ってくるよ」

「... 何時だ」

「えっと、22時ぐらい?」

「ん...」

今は19時。

... 長いな。

「なるべく、早く帰って来てくれ」

「先に寝てもいいんだよ?」

「やだ... 一人で寝るの寂しいから...」

彼の胸に顔を埋めていて良かった。

きっと、耳の先まで赤く染まっているだろうから。

「うん。わかった」

抱きしめる力が少し強くなる。

尻尾を彼の足に絡め、その時間を堪能させてもらった。優しい匂い
が鼻をくすぐる。

名残惜しいが、そろそろ行かせてあげなくては。

「じゃあ、行ってくるよ」

「ああ。」

最後にもう一度抱擁を交わし、彼は宴会へと向かった。

「... 遅いな」

彼の匂いが残ったクッションに顔を埋め、一人寂しく私は待ってい
る。

◇

一方その頃、ワイワイガヤガヤと騒がしい宴会場にて一際目立つ一席があつた。

「ん… もうこんな時間か。僕はそろそろお暇するよ」

「なに？ 我の話は終わっておらんぞ！」

「はいはい、アルが振り向いてくれないって話でしょ。何千回も聴いたよ」

「たわけ！ 貴様もセイバーの可憐さは理解しているはず。それならば、我の口から語られる奴への賛美の言葉は何千回聴いても飽きぬであらう」

「口説き文句は本人に言いなよ」

「居ないから貴様に言っておるのだ！」

「ええ…」

酒に酔つたギルガメッシュが女とも男とも言えるような外見をした者に面倒くさい絡み方をしている。時刻は22時もう直ぐ掛かろうとする頃で、約束をしている怪物にとって少し急がないといけないようだ。

「誰に言い寄ろうがギルの勝手だけど、いい加減やめてあげなよ。」

「苦情は全部僕にくるんだ」

「はっ、この我に苦情だと？ バカも休み休みに言え。そんなもの誰が、」

「アルトリア『料理で私が釣れると思わないで頂きたい。それにその料理はギル… ベルト卿が作ったものです。確かに美味しかったです。その程度で私は屈しません。次はフルコースをお願いします』
オルタ『汚らわしい。寄るな』… 他のアルトリアからも多数あるよ」

「なっ…」

「一途って言うか、気が多いっていうか。あの顔ならなんでもいいの？」

顎に手をつきながら渋々と言つた感じで相手をする。

英雄王を知る者にとつては、その様な態度を見せれば殺される、と感じているだろうが、それを許されている辺り二人の間には深い関

係があるのだろう。

「たわけ！ 我が求めるのは騎士王ただ一人のみよ！ 黒かろうが、大きかろうが、幼かろうがそれがセイバーであることは変わらぬのだ」
「おー」

「フハハッ、あの笑みが我に向けられるのも思い浮かべると酒も進むというものよ」

「わあ凄い全然心に響かない。数打ち戦法はやめなよ、ノーコンなんだから」

「なに。その苦情とやらも照れ隠しにすぎん。まったく、愛い奴らよ」
「ポジティブにも程がある。その思考ストーカーと変わりn」むっ、英雄王。それに其方も居たのか。なんだ、それならば余にひと声かけぬか」… こんばんわ、ネロ陛下。それは申し訳ないことを」

「うむ。気にするでない。余も心地よい気分酔っておったからな」

赤い男装に身を包んだ皇帝が二人の間に割って入る。

「良かったねギル。 そっくりさん来たよ」

「チツ… 2Pカラーは求めておらん」

「なっ!? 人を2Pカラー呼ばわりとは何事か！ なんだか知らぬが、非常に腹立たしいぞ」

「うるさい。 貴様は呼んでおらんチェンジだ」

「ははーん。 さては余の魅力が理解できぬと見た。 いいだろうこの場を持って余が自ら語ってやろうではないか」

「いらん」

「まずは余の礼装からだな。 見よ、余がデザインした嗜好の一品を！」
「要らぬと言ってるのがなぜ分からん。… ええい寄るな！」

一方的に迫られるギルガメッシュを尻目にこれ幸いと席を立つ。アタラシテを待たせるのは流石に気がひけるのでなんととして帰らなければいけない。

足早に出口に向かうが、

「あれ、もう帰っちゃうんですか？」

「お虎さん」

再び呼び止められてしまった。

振り返ればつまみに舌鼓をし、こちらを見つめる虎の姿が。

「まだ夜は長いですよ。私の相手してくれないんですか？」

「ごめんなさい。心配させちゃうと悪いから」

「にやあ…」

残念そうに項垂れるのを見て足が止まりそうになるが、約束は約束だ。

頭を下げて帰ろうとしたが、

「…んふふつ。 えいっ！」

「ちよっ!?… むぐつ… ゴクツ」

突然羽交締めされ、無理矢理なにかを飲まされてしまった。

喉元に熱いものが流れていく。

「ぶはっ… 何を、飲ませたんです」

「倉庫から拝借したこのお酒です。いやー、一度味わって見たくてどうです？もっと飲んでみませんか」

「だから今日は、だめだひえっいつてるで… んん？」

視界がぐらつく。呂律もまわらない。

「なんだろうか、初めての経験だ。」

「ありえ？世界がぐるぐるまわてる？」

「おやおや？どうしたんですか」

景虎が持ち込んだその酒は「奇奇神酒」。大いなる神に捧げられるために永い時をかけ熟成されたそれは、人ならざる怪物や神でさえも酔っ払いに変えてしまうほどの一品。

今まで頭が機能停止するほどの酔いというものを経験したことがない怪物はその場に倒れ込んでしまう。ぐるぐると回る視界、思考は完全に飛び散り意識は朦朧。

「ううん… ううん」

「はて、困りました。ここまで酔いが回るとは、好奇心に身を任せすぎましたか」

怪物と会話を楽しみたかった景虎にとっては作戦失敗のよう。しかしながら、悪戯な笑みを浮かべ怪物の首筋に顔を近づけた。

「んっ… ふふっ、また怒られちゃいますね。まあ役得ということ

で良しとしましょう」

頬を突きながら悪戯が成功した子供のようにならな

「もしもーし、起きてますかー?」

「んんん…」

「起きないと… 部屋に連れて帰っちゃいますからね?」

「…」

「返事なしと、では仕方ありませんね」

目を細めて不敵に笑う。

今夜は邪魔者は来ていない。ならば独り占めするのも不可抗力により致し方なしと、怪物に手を伸ばすが、

「——駄目だよ、そんなこととしては」

「… おや」

「彼には帰る場所があるんだ。君が邪魔をしてはいけないと思うな」

「… そうですか、ではこの場はお任せします。残念です、今日こそはと思ったんですけどね」

優しくかけられた声により怪物の意識が徐々に戻り始める。

「ほら、起きれるかい?」

「ん… 今、何時?」

「そろそろ日が変わるかってところだね。君は早く帰らないといけないんじゃないかな」

「うん、かえらなきや」

フラフラと支えられながら立ち上がりよろけながらも出口に向かう。

「一人で帰れるかい? その様子では歩くのも一苦労だろうからね。肩ぐらいは貸すよ」

「いい。自分でかえる」

「そっか、じゃあ気をつけて… おやすみ、クル」

「うん…」

今度こそアタランテの元へ足を進める。

随分と遅くかかってしまった。もう彼女は眠ってしまっただろうか、起きていたらどう言い訳しようと頭を働かせようとするも酔いは

冷めきつていなようで、そんな考えなどすぐに消えてしまうのだ
た。

「さて、僕もギルを迎えにいかない」と

◇

「…ぐすつ…ぐすつ… あっ」

日付が変わる頃、扉が開く音で顔を上げる。

直ぐに顔を拭い、彼の元へと向かう。

「…おかえり。随分と遅かったな」

ぶつきらぼうに出迎える。

こんなに遅くまで帰ってこなかったのだ。それはまあ楽しんだこ
とだろう。

もし、言い訳でも申すのであれば是非とも聴いてみたいものだ。

「んんくただいまあ」

「!？」

しかし、何やら様子がおかしい。

フラフラと近づいてきたかと思うと突然抱きつかれてしまった。
いつもは言い訳をあれやこれや並べるのに今日はどうしたのだろう
か。

「こ、こちら！急に抱きついてくれるな」

「ふふっ、いい匂い」

抱擁され、匂いも嗅がれ、普段の彼とは思えないほどの積極さに狼
狽えてしまう。

「汝、もしかして酔っているのか？」

「うん、酔ってるかも！」

「自信満々に答えることではないだろうに。それにしても、汝にして
は珍しいな。そこまで酔った姿は初めて見る」

ハメを外しすぎたか。それとも悪ノリに乗せられたか。いずれに
せよ、今は大人しく抱擁される気分でもない。

彼は私の顔を不思議そうに見る。

「…？ 目、赤いね。大丈夫？」

「ツ… 何でもない。いいから早く離れろ」

小首を傾げるその仕草は容姿も相まって、どこか妖艶的。

人の気もしらないで、よく他人の心配ができるものだ。今、私が何を思っているのかわかっていないのだろうか。

抱きしめてくる腕を無理矢理解こうとする。

「えへへ、好きだよ。好き好き好き」

「~~~~~!」

なんなのだ一体…!

頭を優しく撫でられ、思わず力が抜けてしまう。いつものであれば抱き締め返していたに違いない。

「(好きだというなら、なぜ約束を破る)」

「私は…怒っているんだぞ」

「うん」

「心配させるようなことしないで欲しい…不安になるから」

「? うんうん、分かるよ。分かっているとも」

「絶対分かってないだろう…もう」

今の彼に何を言っても無駄だろう。今日のごことはまた朝にでも問い詰めてやればいい。

黙って彼の抱擁を受け入れることにする。胸に顔を埋め、いつもの様に彼の匂いを嗅ぐ。

ほのかに香るお酒と…他の誰かの匂い。

もやもやした感情が湧き出してくる。

やはり、一人で行かせるべきではなかった。

「もう満足しただろう。早く風呂に入ってこい…少し臭う」

「えー、もうちよつと」

「駄目だ」

「…じゃあキスして。いつもの様に、ね?」

唇に手を当て悪戯に笑う。

今後、お酒を飲ませるのは禁止させようと心に誓おう。私が見てないところで、他の者にもこういった態度を取っているのだろうか。

「嫌だ、今日は絶対にしない。少しは反省しろ」

「…ダメ?」

「酔いが覚めて、ちゃんと反省したら… してやらないこともない」
「むう…」

「ほら、私は先に寝ているから」

「一緒に寝なくていいの？」

「… 待ってるから早く行ってこい」

不満げにしながらも私から離れる彼。

取り敢えずは帰ってきたことに安堵しよう。朝まで帰ってこなかったのなら本気で怒るところだった。

「ん？」

寝室に向かおうとした時、服を脱いでいる彼の首筋に目線が向いてしまう。

なぜ違和感を覚えた。

その首筋には小さな赤い跡がくつきりと付いている。

「その首の跡はどうした」

「跡?… 本当だ。えへ、何だろうねこれ」

表情が徐々に歪んでいくのが嫌でも分かってしまう。あの跡は間違はなくキスマークに違いない。ああ、許せない。どこの誰が… いや、今はどうでもいい。

彼は私の様子を見て不思議そうに首を傾げているが、私はそれどころではなかった。

「こっちに来い」

「えっ、でもお風呂」

強引に引き寄せ、その口を塞ぐ。

「… んっ…」

キスはしないと云ったが撤回しよう。

私の想いが分からないから、そういつた行動をするのだ。

首に腕を回し、跡をもう一度確認する。首筋をなぞれば、微かに滲む赤い跡。再び黒い感情が湧き立つのを感じた。

「… つふ… ん…」

一度唇を離し、彼の様子を伺う。突然のことで思考が動いてないの

か目を右往左往させ戸惑っている。

私は勢いのまま、彼を強引にベットに連れて行き、そのまま押し倒す。

困惑する彼を押しつけ、耳元に顔を近づける。

「これはお仕置きだ。その惚けた頭が理解するまで… 逃がさない」

「…??… んっ」

再び唇を重ねる。今度は触れ合わせるだけの軽いものではなく、もつと長いもの。互いの唇の感触を確かめ合う様なキス。柔らかな唇からは温かな感触が伝わってくる。

「んっ!？」

だが、私がそれでは満足できなくなってしまった。

薄く開かれた口を強引に舌でこじ開け、その中に侵入させる。

動揺して身じろぐのを後頭部を押しさえつけ、逃がさない様にする。しばらく抵抗は続いたが、やがて観念した様に大人しくなった。

「まっ… ふあっ… アタ、息できn… ンンツ…」

息をする暇も与えず、口内を蹂躪する。苦しさに顔を顰め、僅かに目を潤ますその姿に加虐心を煽られる。

何度も角度を変え唇を重ね合わせる。

「好き… んっ… 好き… はっ… 愛してる…」

クチュクチュと厭らしい水音が静かな室内に響く。何度も舌を絡め合い、私の息が続かなくなったところでようやく口を離す。ぷはつと大きく息を吸う。二人の間に引かれた銀色の糸を絡め取り、再び彼の様子を伺った。

快樂と酔いと酸欠により、心ここに在らずといったところだろうか。肩で息をし、ただ私を見つめている。

その姿がどうしようもなくいじらしい。

「どうだ、私の想いは伝わったか？」

「…??…?」

「言葉を口にしなければ分からんぞ… しかし、やはり気になるな」

私以外の匂いが彼からするのは癪に触る。それが他の女の匂いであれば尚更。

「風呂にいくぞ。その匂い洗い流す」

「じ、自分でできる」

「駄目だ。私が汝の体の隅々まで洗う…その鼻につく匂いを塗り替えてやる」

「う、うん」

「いい子だ…んっ…ほら、私が肩を貸そう」

軽いキスをし、彼を浴室まで連れて行く。

——私たちの夜はまだ明けない。

次の日、アタランテに全力で土下座をする怪物の姿があつたとか
なかつたとか

短編最終話 「狩人と怪物」

その記憶はとうに薄れ怪物が思い出すことは決してない一時の幕間。

ある夜、焚き火にあたっていた怪物の前に、月明かりに照らされながら女神が現れた。その腕には毛布に包まれた赤子の姿がある。

「この子、親に捨てられちゃったらしいの。山で一人は寂しいだろうから、つい拾っちゃった」

” 珍しい、人間嫌いの神が慈悲を与えるなど” と怪物は言う。この女神が人間に慈悲を与えるのは滅多にないことなのだ。

「だって赤ちゃんには罪はないもの。それに、ほら！可愛いでしょ？」
「別に」

横目でちらつと見るも、特に興味を示したわけでもなく焚き火にあたる怪物。彼にとっては一人の赤子の見分けなどつくはずもなく有象無象の人間の一人という認識でしかない。可愛いか、と言われてもよく分からない。

赤子は女神の腕で寛いでいる。女神はその様子を見て微笑み、怪物に見せびらかすが、依然そっけない態度。

「もー素直じゃないんだから」
「…… 近い」

ほっぺを指でグリグリとしながら絡んでくる女神様。一体何のようなんだと、目で訴えると、

「そうそう！この子、ちよつと見ててほしいの」
はい、と赤子を手渡される。訳もわからず抱き抱えると、

「その子のためのお乳を取りに行くつもりだったの。でも、連れ回すのも危ないじゃない？ちよーど貴方がいたから、お願いすればいいと思って。さすが私！ナイスアイデアよね！」

じゃあよろしくねー！と有無を言わず、何処かへと飛び去る女神。突然のことで呆気にとられる怪物。

「嘘でしょ……」

腕には触れると壊してしまいそうなほど繊細な生き物。以前に、赤

子の抱き方を教えてもらった記憶がある。その記憶を辿って、恐る恐る、されど優しく赤子を抱く。

赤子は不思議そうに怪物を見上げている。彼女にとって久しぶりの「人」の暖かさだった。

「はあ…」

女神の突発的な行動に呆れる。自分をなんだと思っているのだろうか。

やはり完全に壊すべきだったなと後悔するが、もう何万年も前の話だ。結局、過去の罪が自分に返ってきているだけなのだ。

それにしても、あの女神どこか狂っているのではないか？

ため息を吐き、赤子に顔を近づける。

「… 憐れな子。お前は親の愛を知らずに生きていくのだ。きつと、手に入らない物を永遠と求め続けることになるだろう」

憐憫の表情で赤子に語りかける。

「女神に拾われたのは、幸運か、災難か。なんにせよ、僕には関係ない話だ」

赤子には怪物の言葉の意味はまだ理解出来ない。しかし、悲しいことを言っているのは何となくわかった。

だから何だか居心地が悪くなり、涙が溢れてしまうのだった。

◇

”カチ カチ”

時計の針が進む音が響く。時刻は深夜12時をまわり、1時に差し掛かる頃。

「…」

「…」

二人は何も喋らず、沈黙がこの場を支配していた。

私たちはソファアに座り向かい合うわけでもなく黙り込んでいた。最も、彼が黙っているのは私が話すのを待っているからである。

話を切り出したのは私。ならばこちらが話し出さなければならぬのだが、

「…くっ」

どうしても、切り出すことができなかった。

“なぜだ、なぜこうなってしまったのだ…！”

心の中で頭を抱える。拒絶されたらどうしようやら、くだらない考えばかり駆け巡る。

きつかけは些細なことだった。

『最近どう？あの子と上手くやれてる？』

『上手く、ですか？』はい。私としてはあの頃と同じように彼と過ごせていると思いますが』

ある日のこと。

いつものようにアルテミス様に祈りを捧げていると、なんと女神アルテミスが私のもとを訪れたのだ。

何事かと思わず身構えてしまったが、どうやらアルテミス様は私たちの様子を知りたいらしい。向けられた質問を当たり障りもない会話で返すが、

『同じって、何も変わってないってこと？』

『はい…何か問題が？』

『え〜っつまんなーい！』

『ええ…』

つまらない…だと。

なんてことを口にするのだろうか。しかし、アルテミス様ほどの方が仰るのだから、間違いではないのか？

何も変わらず、不変であることが幸せだと思っていたが考えを改めるべきなのかもしれない。

『もー。私はてつきり、あの子が純潔を奪ってるって思ったのに〜』撤回しよう。

何を言い出すのだろうか、この女神は

『なっ!?…。そ、そのような行為は生前はおろか、カルデアに召喚されてからも行なっておりません！第一、私は貴方に誓いを捧げた身です。ですから、そういったことは…』

出来る筈ない。

精々、抱き合うのが限度。それ以上は一度も行ったことなどない。

一度も彼は……求めてくることなど無かった。ならばそれでいいと、それ以上私たちは進まなかったのだ。

『そうだったけ？うくん。確かに女神わたしに誓ったんなら破っちやダメよねえ』

『……』

『あ、でもね？わたし、純潔を失う日のシミュレーションは毎日やっているのよ？』

『……んん？』

待て、待て待て！

やめてくれ。このままではわたしの中のアルテミス様像が完全に破壊されてしまう。いや、カルデアに召喚されてから何度も砕け散ってきたような気はしなくもないが。ああ、そうか。これは夢だ。耳を塞いで、再び目をあければ覚める夢に違いない。

だが、こちらが耳を塞ごうにも、乙女の妄想は止まらない。

『あのね、あのね。ダーリンがね、まず壁をこごう、ドンってするのよ。ドンって。で、耳元で「俺じゃダメか？」って言うのよ！渋い声で！それから、わたしの顎をクイッと上げて——。』

とても純潔の女神とは思えぬ恋愛脳全開の妄想を浴び、頭がクラクラしてきた。

頑張れ私、ショックで倒れそうだが、頑張れ私！

『そして最後は、わたしを優しく抱きしめるの。きやくく♡もう、最高よねー！』

『あはっ、そうですね』

『でしよ？……あれ、何の話してたんだっけ？』

ひとまず落ち着いたのか、アルテミス様は何か別のことを考えている。

よくやった私。

愛の妄想に、私は打ち勝ったんだ。はああ、どうしてこうなったのか。できれば早く戻って彼に慰めて欲しい。胸に顔を埋め、優しく髪を撫でて貰おう。そうすれば、この悪い夢もきつと忘れられる。

『あ、そうそう。ねえ、アタランテ？』

項垂れている私に声がかけられる。

先ほどとは打って変わって、慈悲深い女神の音が、

『不変も悪くないと思うわよ、つまんなけど。きつとお互いが願った形なんだろうし。でもね……誰かに奪われるとは思わない?』
はっ、と顔を上げる。

『このカルデアにはたくさんさんの女が集っているの。わたしのオリオンだったら他の女にうつつを抜かしちゃって、今日も2回ぐらい撃ち抜いたのよ。』

そういえば野太い叫びが聞こえたような気がする。自業自得なので特にコメントはない。

巻き込まれなくてよかったと心底安堵した。

『あの子とダーリンは違うと思うけど、万が一って事もあるじゃない?』

「それはあり得ない」と否定したかったが、思い当たる節がチラホラと浮かんでできてしまう。彼は他の英霊たちとも縁があるようだと聞いた。もしや、わたしが居ない間に他の女とうつつを……いや、そんな事ない……本当にないだろうか?

そういえば、召喚されてからというもの何だかよそよそしい気がした。最初の頃よりは改善してきている気がするが

もしや……

『だから一歩ふみ出して見るのも大事だと思う、って、あれ?もしもし、わたしの声届いてる?』

今日もあの聖女に字を教えるとかで側に居てくれなかった。昨日も聖剣使いにご飯を作るやらで随分待たされた。その前も――

このままではいけない。

『ありがとうございますアルテミス様。この御恩、一生忘れません』
『??.よく分かんないけど、頑張つてね!わたし、あなた達を応援しているから!』

その夜、私は話があると彼の部屋に押し入り、今に至るというわけだ。

声をかけるまではやってやる!、と自信を持っていたのだ。だが、

中々言い出せないでいるのが現状といったところだ。もう夜も遅い。彼はじつと黙って、私を待ってくれるがなんだが申し訳なくなってきた。

「すまないな、迷惑をかける」

「……」

「ははっ、なんだか可笑しいな。汝を前にすると気が上がってしまうのだ」

「……」

「……何か、言ってくれても良いのだぞ?」

呆れて物も言えないといったところだろうか。そう思われても仕方ないな。

それにしても静かなものだなど彼の方を見ると、

「……すう……すう……すう……」

寝息を立てて寝ていた。

「……」。ピキッ

穏やかに眠るその顔を見ているとなんだかムツときてしまう。なので頬をつねることにした。

「——いーい、いひゃー……めにゃひゃいー」

「……」

痛みで飛び起きたようで。それでも続けよう。ぐりぐりぐりぐり。

「ひひれひゃうー!ほっへひひれうー!」

はて?何を言っているのやら。

「なんだ?聞こえないぞ」

「うえええええええ」

それからしばらく彼の柔らかい頬を堪能し、いい加減話が進まないので解放してやることにする。赤く染まった頬をさすりながら「ちよっと楽しんでなかった?」と目を向けているが、それは気のせいだ。

「まったく、人の気も知らないで眠るなど……私は怒っているぞ」

彼は頬をさすりながら

「うう…ごめん。でも君が部屋に来てから3時間も何も言わないから、つい眠気が来ちゃって」

「それはこちらが悪かった…もう少し待ってくれ」

確かにこちらにも非がある。すでに時計の針は2時を指している。驚いた、時間というものはどうしてこう早く過ぎてしまうのか。彼の時間は1秒でも大切にしたいのだ。あとは言葉にするだけだというのに、中々上手くいかないものだ。しかし、あと少しなのだ。必要なのは口にする勇氣。もう少し、もう少しだけ時間を貰おう。

彼は優しく微笑み、

「ん〜もう少しだけだよ」

まるで駄々をこねる子供をあやす親のように私の頭を撫で、受け入れてくれた。

だが、そんな彼の態度になぜか寂しさを感じる。私たちの距離はそんなにも空いてしまったのだろうか。なぜか、そんなことを考えてしまう。

「…私は、子供じゃないぞ」

「ん？知ってるよ」

「なら、子供扱い、しないでくれ」

ずいっと彼の方へ身を寄せる。開いている距離を埋めるように。

「そんなつもり…ち、近いよ」

同時に彼は後ずさる。

なぜ逃げるのだ。もう一度詰める。このソファーはあまり大きくないのでこれ以上逃げられないだろう。

よし、と覚悟を決め彼に問うた。

「汝は、私のことをどう思っているのだ」

顔を思いつきり近づける。

あと少し踏み出せば唇が触れてしまうほどの距離。

「どうって」

目を背けながら彼は戸惑う。また逃げようとする。

「どう思っているんだ？」

もう一度問う。

これではさつきと立場が逆だなと心の中で苦笑する。私は彼の目を見つめ、答えを待つ。いよいよ観念したのか顔を赤く染めながら彼は口を開いた。

「ふ、ふつうに… すき… だから。もう、許して…」
「… は？」

微かに聞こえた「すき」は私の胸を高鳴らせた。

ただ、ふつうに「とはどういうことだ？ お前の特別は私ではないのか？ それに、愛してる」ではなく「すき」だと？

嬉しいやら悲しいやら、様々な感情が駆け巡る。

「…」

取っていた手を離し、ソファアームに押し倒す。わっ、と声が聞こえた気がするが知るものか。こうなったら力技だ。マウントを取れば逃げることなどできまい。それに、見下ろすことで表情もよく見える。

「汝はあの日、私に勝った。そうだな？」

「え？、う、うん」

「ならば、私は汝の物。汝が望むなら何をしたって良いのだぞ？」

「はっ!？」

彼の上に跨り、両腕を押さえつける。

振り解こうと力を込めているようだが、筋力のランクが違うのだ諦めるといい。

「ダメだよ」

「… なぜだ」

「君には誓いがあるだろう… それを破ってまで君を傷つけたくない」

「…」

「それにね。僕は傷つけるよりも、君とこうして何事もなく暮らす方が良いよ」

やはり汝は優しいな。困ったように笑みを浮かべた彼を見て思う。

だが、今日はそれで引き下がるわけにはいかない。

「無論、私から捨てる訳ではない。これはそう… 不可抗力だ」

「いや、それは。あの女神に何されるか、君ならわかっているだろう」

？」

「心配するな、言質は取ってある」

『確かに貴方が破るのはダメだけど…その覚悟があるなら、思いつきり攻めちやいなさいな。』女神の言葉を反芻しながら私は言葉を紡ぐ。

「耳も、尻尾も、この身体は全て汝のものだ…お前が獣のように交わりたいと言うなら喜んで差し出そう。その覚悟はできている」「ッ…」

「それとも私には魅力がないのだろうか？まあ、私は貧相な体だからな。欲を抱くというのも難しいかもしれないが、」

「そんなこと…！…ない。君は凄く、魅力的だし…可愛い」

「ンツ——。そ、そうか」

うう…： 我ながら慣れないことをしているな。えらく食い気味に答えられたせいで自分の顔が火照ってしまうのが嫌でも分かってしまう。掴んだ手から彼の脈拍が早まっているのが伝わってくる。うん、嘘ではないのだろう。もう、止まらない。私の想いをどうか受け止めてくれますように。

「私は愛を知らない…： 知らなかった。子供が愛される世界を望むこの夢も、親から愛されなかった私を子供達に重ねているだけかもしれない」

私は我儘だ。いつ何時でも、汝からの愛が欲しい。いつだって私は、愛に飢えているのだから。

「だが、汝に教えてもらったんだ。誰かを愛する、誰かに愛される喜びを」

「私を愛して欲しい…： 愛してもらった分、いや、それ以上に汝を愛す。私の願いを受け止めてはくれないか？」

瞳が震えている。こうまで言ってもまだ迷いがあるのか。少し目を伏せながら彼に問う。

「それに、だな…： 伴侶の願いを足蹴にするのは、その…： 悲しい、ぞ？」

その言葉が決め手になった。彼は目を見開いた後、瞼を下ろし再び

目を開けた時に見せた顔はあの頃と同じ笑みを浮かべている。そして、私の首元に腕を回し優しく抱き寄せ、

「――ずるいよ、君は」

そう告げるのだった。

耳元で聞こえた言葉は鼓動をより一層高鳴らせる

汝がどれだけ遠くにいこうと、逃さない。今はまだ、私と汝の距離は離れたままかもしれないが

それでも、

「…目を、閉じてくれ」

――私は、あなたに追いついてみせる。

だからそこに居てくれ。汝はもう逃げる必要などないのだから。

◇

「う、ぐ…：うええええええええつ…」

「えっ？あれ、えつと…」

突然泣き出してしまった赤子を、怪物は目を白黒させながら見ている。そして大いに戸惑った。

「え、あ…：よ、よしよし。大丈夫だよー、どうしたんだー？」

などと、不器用にあやすものの泣きじやくる声は止むことはない。

「びええええええええつ…」

「あわわわわわわ」

涙を拭いても溢れ続けてしまうので、どうしようもなくなってしまふ。

何を思ったか怪物は、赤子を泣きやます方法をあれやこれやと探し始めた。

「そ、そうだ…：ほら、花で作った冠だ。綺麗だろ？」

怪物は器用に花を編み冠を作り出したが、今の赤子にはそんなもの目に入らない。赤子は泣き続ける。

「だ、だめ？　ならこれでどう？　ほら、可愛い小鳥だ。どうだ？」

小鳥を呼び寄せ、赤子に見せることであやそうとするも無意味に終わってしまう。

「じゃ、じゃあ！　…：ばあつ、変な顔だ！　ほら！笑って…：くれな

いか」

あらゆる方法を試したが、泣き止む様子はなく困り果てた。さて、一体どうしたものか。

「こうなったら……—それっ」

その身に翼を生やし怪物は天へと羽ばたいた。もちろん、赤子を落とさないようにしっかりと抱き締めながら。鳥のような翼で羽ばたけば一瞬で雲を抜け、その上に飛び出す。

いきなり変わった景色に呆気に取られたのか赤子は泣き止んでいった。

「どうだ、綺麗だろう」

怪物は上に向かって指を差す。

そこに目を向けると、まん丸と輝くお月様。二人は月に見惚れる。「あの女神は苦手だが月は好きなんだ。どうしてかな、なんだ見守ってくれてるような気がするんだ」

月に向かって手を伸ばす怪物。それを真似してか、赤子も手を伸ばしてみる。掴めるはずなのに、届くはずなのに。

「きつと、お前のことも見守ってくれる」

どうかこの娘を、らしくないことを祈った。

「……さつきは酷いこと言って悪かったね。たとえば、親からの愛がなかったとしても、お前なりの愛を知れるように祈っているよ」

凍えないように、少しでも幸せになりますようにと優しく抱きしめる。

それがとても嬉しかったのだろう、赤子とはびつきりの笑みを浮かべた。

「いやはや、うん……これが可愛いってことかな。いつか、その笑顔を見せてくれるお前に会いたいものだ」

赤子の頭を優しく撫で、怪物は言葉をこぼした。

そんな機会などないだろうかと、少し残念がらながら。

「さて、お姫様のご機嫌取りはここまでだ。そろそろ五月蠅い女神も戻ってくるだろう」

凍えないように羽毛を纏いながら二人は降下していく。

「こ、こりゃー！ほっへをひっふあるな… ったく、もう」

これは誰も覚えていない、二人の邂逅。

いつの日か、自分達だけの愛を手に入れた二人の始まりのお話。

◇

栄光の船旅を終え、故郷に帰った私を待っていたのは醜い願望だった。

「ふん… 口ほどにもないな。私を手に入れたのであれば己を鍛えるべきだったのだ」

今日も今日とて、挑戦しにきた愚か者どもを矢で射抜く。変わり映えのない地獄のような日々。やはり帰ってくるべきではなかったのだ。

私に速さで勝るものなど居るはずもなく、ましてや誰のものにもなるつもりはない。こんなくだらない事に付き合っているのは、私があの男に親の愛があると信じてしまったから… 結果はこの様だ。遺体の山を積もらせながら私は月を見上げる。

「…」

ふと、手を伸ばした。届くことのない、輝く月に。

どんな時でも、月は私を見守ってくれる。月の女神と称されるアルテミス神もきつと見てくださっている。ならば、この耐え難い屈辱にも抗って見せなければ。

「…！」

そんな思いに耽っていると、人の気配を覚える。

振り返れば、ここから去って行こうとする人影が見えた。

「なんだ、汝は挑戦者ではないのか？」

大方、遺体の山でも見て怖気付いたのだろう。去りゆく人影に声をかけた。

「…」

振り返ったその顔は、少年と少女、矛盾した印象を併せ持つ人間離れしたものであったので少し面食らってしまう。

目の前の人物も、なにやら呆気に取られたようで、お互い無言で向かい合ってしまう。

「…どうした。言葉を喋れぬわけではあるまい。もう一度問おう、
汝は挑戦者なのか？」

それが、彼と私の出会い。

「——いいえ。噂で聞いた貴方を一目見たくて」

私達はここから始まった。

桜と怪物

桜と怪物 「君の名前は」

——覚えていますか？まだ私が先輩のことを知らなかった頃の話——

校舎の窓から少女が外を見ている。運動場では一人の少年が永遠と走り高跳びの練習をしていた。バーを飛び越えることができず何度も何度失敗している。それもそのはず、その高さは同年代では記録保持者でも飛べないような高さなのだから。

“失敗しちやえ”

少女は凍てついた心の中で呪いの言葉を吐いた。ただの八つ当たりだ、少年が挫けるさまが見たいだけ。

“諦めちやえ”

それでも少年は何度も何度も挑戦し続けた。ひたすらに高飛びを機械的に挑戦を続けるその姿ははたから見れば狂氣的ともいえる。

少女はいつの間にか夢中になって外の様子を見ていた。少年が高飛びを失敗し続けるその様子を。

——ああ。この人はきつと何も裏切らない人なんだろうな

なんてことない、いつかの記憶。

これが先輩を知るきっかけだった。



懐かしい夢を見た気がする。いつの日か見た大切な思い出。

制服に着替えながら夢の余韻に浸る。今日はいつもより少し早く家を出なければ。部活の朝練があるのだ。けどその前に行かなければいけないところがある。

そうして今日も私は先輩の家を訪れる。

「おはようございます...」

返事はない。家の中にいるのは確かなようなので居間の方へ向か

う。「トントントン」と包丁の小気味いい音が聞こえる。どうやら先輩は朝食を作っているらしい。

「はっ!?なにしてるんだよ俺」

「おや?・・・どうしたのだろうか」

「なんてこった・・・時間があるからって余計な料理を作っちゃうなんて。一つの空にふたつの太陽はいらないのだ・・・」

よくは分からないが、おそらく朝食の主菜を二品作ってしまったのだろう。先輩はこだわりが強いのだ

「もしかして・・・作ったのに食べないんですか?」

私の質問に先輩はきりつとした表情で答えた

「いや食べる。予定にはなかったけど弁当のおかずにしちまえば――

――って、ええ!?!」

突然声を上げたのでこちらまでびっくりしてしまう。朝食作りに夢中で私の存在に気が付いてなかったのだろう。驚いた先輩の顔がなんだかおかしくて笑ってしまった。

「おはようございます先輩」

「なんだ来てたのか・・・おはよう桜。朝食の支度はもうすぐ終わるからゆっくりしていてくれ」

この人が私の先輩の衛宮士郎。こんな私なんかを気にかけてくれていつも優しい人。

「でも先輩、お弁当も作るんですよね?」

「ああ、その流れになった」

「じゃあ、私も作っていいですか?自分のは自分で作りますので」

エプロンを着ながら台所に立つ。

「いや、待った。それなら俺のおかずを分けるよ。桜はご飯を炊いてくれ」

「はい!二合ぐらいでもいいですか」

「ん〜いいんじゃないか?」

米を研ぎ、炊飯器のスイッチを入れる。最初はこの使い方すらわからなかったけれど先輩に料理を教わっていくうちにだんだん慣れてきた。

すると――

「おつはよー！今朝もいい匂いね!!」

藤村先生が今日も元氣いっぱい居間に飛び込んできた。この藤村先生は先輩のことを小さいころから知っているみたいでよくご飯をたか r. . . 食べにくる。私が所属する弓道部の顧問で、とつても頼りがいがある. . . かも

「おはようございます藤村先生」

「あれ？桜ちゃん士郎と一緒に朝食作ってるの？」

「いえ、今は先輩と一緒に弁当を作ってるんです」

「ご機嫌に答える私を見て先生は“うんうん”と頷いている

「そっかそっかーそりや朝からそんなご機嫌にもなるか。楽しいことだらけだもんね！」

テーブルに置いてあつた急須からお茶をつぎ、いつもの様にくつろいでいる。そんな姿を見て先輩は少し不満げに言った

「. . . ったく。いつまで寝ぼけてんだよ。学校前に台所に立つことの何が楽しいってんだ」

不満を零すその顔が面白くてまた笑ってしまう。

「悪いな桜。今日こそはゆっくりしてもらおうと思っていたんだが」

先輩は私に苦勞をさせたくないと思っっているのだろうけど、私はこの時間が何よりも楽しいのだ

「そんなこと. . . こうして台所に立つのは楽しいですよ」

「でもな、あんまりうちにばかりかまけてると好きなことする時間もないだろうに」

「あははは. . . 大丈夫です。わたしの趣味は料理と弓道ですから」

それに家に帰ったって辛いだけ. . . でも最近は少し気が楽になった。

「ちなみに将来の目標は先輩の味を超えることでもうすぐ射程圏内だったりします！覚悟しておいてくださいね。絶対に参ったって言わせてみせますから」

そんなたわいもない話をしていればいつの間にもやら料理は完成していく。

「——つと、桜これ頼む」

その時私は気づいてしまった。

「……桜？」

何も言わず動かない私に先輩は怪訝そうな顔を向ける

「……先輩。なんですかその手の痣」

「痣？」

先輩は左手を見て初めて気づいたようだ。それはまるで紋章のよ
うな痣

「あれ……ほんとだ。ぶつけた覚えはないんだけどな」

不思議そうに先輩は痣を見つめている

「悪いあと任せた。湿布かなんか貼ってくる」

その場を任せると奥へと行ってしまった。その言葉に答えること
ができず私はその場にへたり込む

◇——先輩 まさか、そんな

「それじゃあ先に行ってますね」

「桜……体調が悪いなら朝練ぐらい休んでいいんだぞ？」

「いえ、大丈夫です。少し頭痛がするだけで……わたしすごく元気で
すよ」

「朝食一つも食べられなかったのか？」

あの後、朝食に手を付けることができず結局先輩に心配させてし
まった……。もしかしたら私の勘違いかもしれない。そんなことばか
り考えていたら気分はどんどん沈んでいくばかりで

「……失礼します」

◇そのまま何も言えず先輩の家を後にした。

いつもの様に授業が終わり、外は夕焼けに染まっている。もうそろ
そろ部活動に向かわなくてはいけないのに身体が重い

教室には私以外誰も残っていない。私だけが取り残されてい
た。

◇そのはずなのに——

「桜」

「えっ…先輩？」

いつの間にか先輩が教室に来ていた。心配そうに声をかけてくる「桜の様子が気になったんだ…気分が悪いなら一緒に帰らないか？」

「…いえ、いいです。わたしどこも悪くありません。いつも通り部活に出て、終わったら先輩のところまで夕ご飯をご馳走になるんです」そう、それが私の日常。だから早く、いつも通りに部活に向かわなくてはいけない。そうして逃げるように席を立とうとしたが、よろよろと先輩に倒れこんでしまった。

「ちよっ…びっ…びっくりした。本当に大丈夫か桜？…いいから今日は部活を休め。大体そんな調子で弓を引いても帰ってくるもんなんかないだろ」

私を抱えたまま先輩は言った。申し訳なさと顔を反らしてしまう

「…でも、兄さんが…呼んでるから…だからいかないと」また怒らせてしまう。また殴られてしまう。その傷を見れば先輩に迷惑をかけてしまう。

「…そうか。要するに慎二の顔を立てるだけってことだよな」

「あ…はい。流石に弓は引けないので」

ため息をつきながらも先輩は納得してくれた

「分かった。部活に行くのは止めない。でも少し休んでいけ」

そうして私を座らせるとなにやら準備をしている

「ほら、桜。これでも飲んで少し休め」

どうやら生徒会室から急須セットを持ってきていたらしい。本当にこんなところで飲んでいいのかと思っていたが“生徒会室のお茶は飲みなれてるし、廊下にはだれもいなかったから”と先輩が答えた。せつかく注いで貰ったのだお言葉に甘えることにする。

しばらく静かな時間が過ぎた。

私は窓から外を見ている…そういえばいつの日かこうして窓の外を見ていたことを思い出す。

「先輩…覚えてますか？」

あの日のことを先輩に聞いてみた。どうやら覚えていないようだ
「四年前、私が進学したばかりの話です——」

それは一人の少女が、青年を見ていた話。何度も何度も飛び続ける
彼を応援してしまっていた話。

「——そうして日が落ちて、結局その人帰ってしまったんです。す
ごく疲れていたはずなのに、なんでもなかったみたいになんて一人で片付け
をして」

「…わかんないやつだな。結局飛べたのか？」

「ふふふつ、いえ結局飛べなかつたんです。何時間もやってどうして
も飛べないと納得しただけだったんです」

「なんだそりゃ。変な奴もいるんだな」

「その人はきつと頼りがいのある人なんです。一人できつと進んでい
ける人。けどそこが不安で…寂しかった」

もつと力になりたい。それなのに私は助けてもらえばかりで、本当
にこのままでいいんだろうか。

「…私にはそう見えただけで、その人にとってはそれが日常茶飯事
だったんですよね」

そこまで言うと言いつつ流石に気が付いたらしい。恥ずかしそうに頬か
いている

「えつと…つまり」

「はい。その人は今私の目の前にいる上級生さんなのでした」

先輩は顔を赤らめそっぽを向いてしまった。

「そ、そっか…それは、その、恥ずかしいところを見せていたんだな
「はい。わたしたち同じものを見ていたんです」

「——え」

「キーンコーンコーンコーン」

チャイムが鳴り響く。そろそろ部室へ向かわなくてはならない。

「ありがとうございました先輩。おかげで元気いっぱいです」

「そうか。今日は無理に家に来なくてもいいからな」

「いえ、夕飯だけ作っておきますね。それじゃあ」

少し足早に教室を後にする。先輩のおかげで何とか乗り切れそう

だ。今日も私は普通に生きている。それだけで今は幸せだ

◇

先輩の家で夕飯を作り終え、自宅に帰る。いつも通りに家に来ていた藤村先生に“送っていいこうか？”と言われたが迷惑をかけられないので断った。

あとはこの坂を登れば家に着く。

ふと坂を見上げると一人の青年が歩いてきた。この町では珍しい金髪の外国人。

『いまのうちに死んでおけよ娘』

すれ違いざまに声をかけられる

『馴染んでしまえば死ぬこともできなくなるぞ——』

「……」

私は何も言えずその場に立っている。

——なんでわたしばかり

なにも考えることはできず、考えることが嫌でいつの間にか家にとどり着いていた。玄関のドアを開ける。

「ん……ああ、お帰り桜^{マスタ}」

彼が向かい入れてくれた……兄さんの服まで着てだいぶ現代になじんでいるらしい

「……ただいま、キャスター」

二日前、召喚されたサーヴァントである彼。その姿を見たとき少しだけ安心した——

◇◇◇

く間桐邸く

——僕がこの家に生まれたとき、間桐の血はその役目を終わらせていた。

間桐の一族はこの地で滅びる

でも、それでも

間桐が魔術の秘蹟を伝える一族に変わりはない
選ばれし一族、間桐家。僕はその後継者なんだ

◇

『繰り返すつどに五度　ただ、満たされる刻を破却する』

間桐慎二は魔法陣のようなものを描きながら、詠唱を続ける。

『――Anfang』

ここは間桐邸の地下にある蟲蔵。当主である間桐臓硯の魔力工房でありその身体を構成する蟲たちがこれでもかと蠢きまわっている。

『――告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ』

全裸で宙に縛られている桜を中心に描かれた召喚陣は詠唱が進むにつれ輝き始める。その様子を臓硯はニタニタと気味の悪い笑みを浮かべ見下ろしていた。もとより召喚される者には期待はしていないが、愛しい愛しい孫が苦しむ様を見るのはまさに愉悦というもの。

『誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者』

英霊を呼び寄せる触媒はあらず、ただその場の縁によって召喚される

『汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ』

――その瞬間辺りは光に包まれる。召喚陣からは何かが現れようとしている。

『(はっ――)』

慎二が目にしたものはおおよそ英霊と呼べる類ではなかった。

それは巨人だった。触手に覆われた怪物だった。黒き竜だった。厄災だった。恐怖だった。やがてそれは一つに固まっていき、人の姿を形どる

召喚陣の中心にいた桜は力なくその場に倒れた

「サーヴァント… キャスター召喚に応じ参上しました」

それが口を開く

「(凄い、これが魔術。これがサーヴァント！凄い凄い、これを使って僕は聖杯戦争に勝つんだ!!)」

慎二は興奮していた。自らが行った大偉業に。この光景に酔っていた。

「おい… ——— ひっ、なにやって、るんだよ」

声をかけようとした時、キャスターはしゃがみ込み桜をじっと見つめていた。すると何を思ったのか桜の心臓辺りに腕を突き刺し内臓をまさぐりはじめた。当の桜は何がなんやら分からず困惑しており、声にならない呻き声をあげている。

「うっ… え… あっ」

やがて何かを見つけたらしくその手を引っこ抜いた。不思議なことに桜の身体には傷一つ付いていなかった。

“ぎゅぐgyぐgyぐgyぐy”

その手には気味の悪い蟲が蠢いている。

「お、おい お主待て！ いったい何をするつもりじゃ!!」

それまで傍観していた臓硯が急に慌てだす。何を隠そうこの蟲こそが臓硯を構成する核であり、桜の心臓に忍ばせていたのだった。

キャスター？ はそれを指でつまみ興味深そうにいじっていたがやがて飽きたのだろう。老人の質問に答えることなく——— ぷちっと握り潰した。

「お お おお おおおおお」

あっけなく老人はその身体を保てなくなり間桐邸から姿を消した。残された蟲たちは苦しそうに蠢めくだけ。そのうち生き絶えるに違いない。

「… 気持ち悪いなあ」

手に残った蟲の死骸を払いながら答える。その目はじっと桜を見つめていた。

「え、えっと… 「おい！ 凄いなお前お爺様を殺しちゃったのかよ！… あっ… 兄さん」

大興奮の慎二。あれだけ恐れていた老人はもういない、ここまで喜べるのも頷ける。しかしそれは後ろ盾がいなくなったということ

彼はまだ理解していない。

「……」

その問いにも答えずキャスターは黙って桜を見ている。自分を無視しているのが気に入らない慎二は桜を突き飛ばし目の前で叫んだ

「おい！…… お前の主人はこの僕だ!!」

桜は痛みにも呻いているが知ったことではない。もとより役目は終わっている

「……君が?…… 本当に?」

胡散臭いものを見るような目で慎二をみるキャスター。

「だからそうだと言っているだろう! 見ろこれがその証だ」

慎二は持っていた一冊の本を見せた。それは桜の持つ令呪一画を媒介に作成された「偽臣の書」。令呪一画分と同等の効果を持つ書である。

「こ、この力は分かっているんだろう!」

いかに強力なサーヴァントとはいえど令呪による命令には逆らえない。まあ、例外はあるのだが……

「……ふーん」

別段それを言われたからと言って興味が慎二に向いたわけではない。とりあえずマスターと認めたということだろう

「は…… はは。 やつと自分の立場をわきまえたみたいだな。僕がマスターの間桐慎二だ。で、キャスターお前はどこのどなた様だ?」

一体自分は何を呼び出したのだろうか。慎二は全く分からない。キャスターの外見は黒髪に赤い目、服装は…… 古代ギリシヤの服飾に近いようだ。ということはギリシヤ神話関連の英雄だろう。期待に胸が弾む

「僕は、かつてギリシヤの地で英雄たちに打倒された怪物。真名を――」

「…… ハア?なんだよお前…… それのどこが英雄なんだよ(むしろ英雄に倒された化け物じゃないか)」

数々の武勇を立てた英雄たちが聖杯を求めて戦う聖杯戦争。そう聞いていたのに召喚されたのは化け物。期待外れもいいところだ。

キャスターはそれを否定することなく黙っている

「クソツ… つ、けどまあ結局僕が采配を振るうしかないってことだよな… よしお前は僕の言うことだけを聞け。絶対に逆らおうとするんじゃないぞ!!」

… その言葉にキャスターが答えることはなかった。慎二にとって聖杯戦争はスリルのあるゲームに過ぎないのかもしれない。

「一応今後の方針について話し合おうぜ。僕が思うに今回の聖杯戦争では——ん？」

床に転がっている桜に気が付いた… 何でまだいるんだコイツ。もう用はない、この僕が聖杯戦争に挑むんだから

「おい… お前は上に行っているよ。もうお前は関係ないだろう? ——早く消えろよ!!」

桜はふらふらと立ち上がり蟲蔵から出ていく

「… たつく、本当にグズなんだから…!」

◇ ——服を着てベットに寝転ぶ。眠っているときは忘れていられる、辛い記憶も全部。

それに今日はよく眠れそうだ、もうあの恐ろしかったお爺さまはいない。もう蟲による調教は受けずに済む。もう全部終わったのだ… キャスターのおかげで

その日は久しぶりによく眠れた。

◇ 目が覚める。どうやらもう朝らしい。なんだか懐かしい夢を見た気がする。いつか見た大切な思い出。

制服に着替えながら夢の余韻に浸る。今日はいつもとより少し早く家を出なければいけない。部活の朝練があるのだ。けどその前に行かなければいけないところがある。

部屋を出て玄関に向かう

「あ…」

キャスターが廊下に立っていた。親しげに“やあ”と手をかざし

ている。急いでいたのでとりあえず頭を下げ通り過ぎようとする
「…君の名前は？」

通り過ぎざまに聞かれた。

「桜…間桐桜…です」

「——サクラか」

玄関を出て先輩の家に向かう。

「先輩、起きてるかな…」

今日も私は生きています。

桜と怪物 「勉強中」

今日も先輩の家に訪れる。まだ先輩は起きていないようなので朝ご飯を作っておくことにする。今日は焼き魚と付け合わせの白菜の漬物と味噌汁で中々の自信作だ。

「おはよー桜ちゃん！うくん、今日もおいしそうな匂い!!」

そうこうしているうちに藤村先生もいらつしやった。その元気なあいさつで先輩も目が覚めたようで、私に寝坊したことを謝るとすぐに朝食の準備のお手伝いをしてくれる。

「「いただきます」」

… うん、美味しい。途中から先輩に手伝ってもらったけど我ながら成長していると思う。先輩の様子が気になり横目で見てみると…何だか調子が悪いようだ。顔色もあまり良くない。

「そうだ、士郎 今日朝起きるのが遅かったみたいだけど何かあった？」

さすが藤村先生。先輩のちょっとした変化も見逃さずはつきり聞くなんて… 私もそんな勇気が欲しい。

「… 昔の夢を見たんだよ。目覚めが悪かっただけで全然大丈夫」

「なんだあーいつものことか。じゃあ安心安心」

そう言っただけで食事に戻る先生。先輩は昔からうなされることが多いようで今日もそうだったのだろう。

朝食を食べ終わり学校に登校する支度をする。藤村先生は一足先に原付で向かった。「遅れちゃダメよー」はお決まりのセリフ。

「よし行こう… 桜、どうしたんだ？ また気分でも悪いのか？」

「… いえ、わたしは大丈夫です。先輩の方こそ今朝は体調が悪そうでしたし… 昨日の痣が悪化しているんじゃないですか」

「いや、あれきりとくには…」

やはり左手には令呪のような紋章がうつすらと浮かんでいる… やっぱり見間違いないじゃなかった。

「あー… 心配すんな。こんなのつばでも付けとけば治るって。それ

ともなんだ、桜が間違えて踏みつけちゃって、とかだったりするのか？」

む… それはあんまりだ

「そんなことしません！… そんなに重いわけじゃありませんし わたしは、ただ… 間違いだったらよかつたなって？」

先輩はまだ聖杯戦争のことを知らないはずだ。でもいずれ巻き込まれてしまうかもしれない。それは嫌だ。

「先輩お願いがあります」

「うん？」

「わたし明日の夜までここに来られないんです。その間なるべく家の中においてくれないか？」

「バイトとかも休めってことか？」

「はい、最近物騒みたいですし」

少なくともこれで先輩が巻き込まれる可能性は減った。夜に出歩かなければ安全なはずだから。

「ふーん… じゃあ久しぶりに羽を伸ばすかな」

やはり不自然だっただろうか。不思議そうに先輩は見てくる。それでも——私は先輩を守りたい

それから特に会話はなく、私たちは登校するのだった。

◇

「あつ桜… ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

「遠坂… 先輩… はい、何ですか？」

廊下を歩いていると声をかけられた。

この人は遠坂凜。同じ学校の先輩で時々私に声をかけて気遣ってくれる… わたしの——

「ちよつとしたことなんだけどね… その、昨日桜が帰る途中だったんだと思うんだけど、金髪の外国人に話しかけられてなかった？」

「っ——」

“いまのうちに死んでおけよ娘”

あの人に言われたことを思い出した。

「…見てたんですか」

「ん たまたまね… 知り合い？」

本当のことを言ったところで意味はない。結局のところ何も変わらないのだから。

「…道に迷っていたみたいなんです。何を言っていたのかはちよつと…」

「ん、そっか。ならよかった」

何でこんな時だけ気にかけてくれるんだろう

「桜…最近どう？」

「あ、はい。元気です、わたし」

「慎二はがまた何かやったら言いなさい。あいつは度つていうのを知らないみたいだから」

私が何をされていたのか知らないくせに

「心配いらないですよ先輩。兄さん最近優しいんです」

私はまた一つ嘘をつく。

◇

今日は兄さんの言いつけ通り先輩の家に向かわず自宅に帰る。今日は部活で少し遅くなつてしまい、既に辺りは真っ暗だ。

「——おい！どうなつてんだよキャスター!!」

家の前に着くと外からでも聞こえる怒号が響いていた。兄さんがキャスターに怒りをぶつけている。

「なんなんだよあの学校の結界、あつさりど封印されてるじゃないか!!しかもろくに魔力は集まつてない！」

「…まあ適当に張つたからね」

「適当つて… お前キャスターなんだろう!？」

「人には得意不得意もあるつてことだよ。だからこうして魔術の勉強をしてるんじゃないかシンジ」

キャスターは目の前に間桐家が所有する魔導書を広げている。しかしながら、そのどれもが初歩的なものばかりだった。

「…ばかにしてるのか」

「まさか、それに僕だって成長してるよ。使い魔程度なら作れるようになったし…。まあ視覚共有は練習中だけど。褒めてほしいくらいさ」

「クソツ…！」

慎二はイラつきが隠せないようだ。キャスターは相変わらず魔導書を読みふけており既に目の前の兄さんのことはどうでもいいみたい。

「兄さん？」

恐る恐る声をかけるが、怒りで周りが見えてない兄さんは私を無視してどこかへと出て行ってしまった。最近はや遊びが激しい、お爺さまがいなくなったことでより態度が増長しているのだ。

「あつ… 兄さんご飯は… 行っちゃった」

まあいつも食べてくれないし、機嫌が悪い時は食器を投げつけてくる始末なので放っておくのが一番かもしれない。

残るのはキャスターだが…

「お帰り桜 どうしたの？」

「いえ、その… 兄さんが怒鳴っていたので」

「さあ？ 思春期ってやつじゃないかな？ 可愛いもんさ」

… 多分違うと思う。

「そうだ、晩ご飯食べますか… あつ、サーヴァントには必要ない「本当に!? 是非食べたい!!」 あははっ… すぐ作りますね」

凄いい喰いつきようだ。もしかしたら食べるのが好きなのかもしれない。キャスターはすぐに机に広げていた本をしまい大人しく座っている。

キャスターはギリシャ出身だと言っていたから洋風な料理にしよう… グラタンなんてどうだろうか。慣れた手つきで料理を作る、いつも先輩の家で食べることが多いのでこうしてこの家で誰かに料理を振舞うのは久しぶりな気がした。

出来上がった料理をテーブルに置くとキャスターは早速食べ始めた。

「うーん！ 美味しいよこれ!! 桜は料理が上手なんだね！」

「そんなことないです…。まだまだわたしなんて」

まさかこんなうれしそうに食べてくれるなんて。作った甲斐があったというものだ。

「そうだ、作り方を教えてよ。作ってあげたい人がいるんだ」

「構いませんけど…。誰に作ってあげるんですか？」

彼はサーヴァントであるためこの時代に知り合いがいるわけでもないだろうに…

「うん…。僕を待っていてくれる家族がいるんだ。いつかまた会えた時に…。喜んでもらえたらいいなって思ってるね」

どこか遠くを見るような目で答えるキャスター。

家族…。少しだけうらやましくなった。わたしにはそんな存在程遠いものだから。メモに作り方などを書いて渡し、自室へ戻ろうとした、その時

「んん…。なんだ？」

何かあったのだろうか。キャスターの顔が険しくなる。

「どうかしたのキャスター？」

「試しに使い魔を遊ばせていたんだけど、大きな魔力を感知したらしくてね…。多分新しいサーヴァントが召喚されたんだろう」

いやな予感がする。

「…場所は分かるの？」

「多分、武家屋敷のあたりかな。ほらサクラが朝に通ってる」

——先輩の家だ

「魔力の大きさからしてサーヴァントが三騎と魔術師が二人かな。うん視覚の共有の仕方がよく分からないなあ、実際に行った方が早いかな」

…。本当にキャスターなのだろうか？いくら何でもここまで魔術の知識がないなんて

「で？どうするサクラ」

キャスターが尋ねてくる。どういう意味だろうか。

「生憎シンジはいない。つまり今はサクラが僕のマスターってことさ。でだ、あの場所には恐らくだが他のマスターもいるに違いな

い……今がチャンスだ。命令してくれたらサーヴァントが争ってるうちに一人くらいマスターを殺すぐらいならでき「——やめて!!」……」

まだ確定したわけじゃない。でも、もし先輩がマスターになっていたら……そんな嫌だ。

「もし、他のサーヴァントと戦うことがあってもマスターだけは殺さないで……」

令呪を使ってもいないただのお願い。私は俯きながら話しているのでキャスターの表情は分からない……何を言っているんだろう私、戦うのが怖くって兄さんにキャスターを押し付けているのに、卑怯者の癖に。

——先輩にこんな姿を見られたくない

キャスターが口を開く

「——分かった。他ならぬサクラのお願いだ、善処するよ。ご飯も食べさせてもらったしね。それに、そこまで言うのは何か事情があるんだろう？ 大丈夫、知り合いと戦いたくない気持ちはわかるつもりだから」

そう言っただけ私の頭を撫でてくれた。どうやら今回は傍観に徹してくれるらしい。少しだけほっとした。

「でもシンジに無理矢理命令されたときはちよつと難しいかもしれないな。一応手加減はするけど……期待しないでね」

兄さん……あの人なら平気でそんなことをするかもしれないけど今はキャスターを信じるしかない。いざとなったら私の令呪で——

「さてと僕は魔術の勉強に戻るとするかな。サクラも早く寝るんだよ、女の子なんだから健康にも気を使わないとね」

「あつ、はい。えっと……おやすみなさい」

まるで子供を窘めるような言い方をしてキャスターは書庫へと向かっていった。

いくつかの不安が残ってはいるが、私には何もすることができない。明日の夕方にも先輩のうちに寄ってみよう。きつといつも通りの日常があるはずだから——

桜と怪物 「化け物」

「今日から家に下宿することになったセイバーだ。二人ともよろしくしてやってくれ」

「……………」

学校が終わった後先輩の家に訪れるとそこには金髪でとてもかわいらしい外国人の女性が座っていた。先輩の育ての親である人の親戚……らしい。

「……………」

「……………」

「——とにかく切嗣を訪ねてきたんだから帰ってもらうわけにはいかないだろ。最近は何騒だし、どこかへ放り出すわけにもいかないな」

チラツと横目で藤村先生を見る。先ほどから唸ったり、腕を組んで悩んだりと言も話さない。きつと反対するに違いない、先輩と女性が二人つきりなんてそんな……

「……まあ、切嗣さんの親戚ならしょうがないか」

「えっ——」

「ごめんね……桜ちゃんが言いたいことは分かるけどこの家は切嗣さんのだから。外国に親せきがいるって言ってたし、それを頼りにしてきた子を放り出すわけにはいかないからね」

それは……そうだけど

「先輩はそれでいいんですか?」

「ああ。桜はセイバーがここに下宿するのは反対か?」

そんな言い方はズルい。別に反対というわけでは……ない。

ただ、

「いえ……お知り合いの方が住まれるのは反対しません。——けど……セイバーって名前」

「ん?ああ、ちょっと珍しい名前だろ。名前の通り不愛想な奴だけではないやつなのは保証する。まだ日本に来て日が浅いらしいから桜がいろいろと教えてくれると助かる」

…先輩は私が知っていることを知らない。セイバーさんはその名の通りサーヴァントに違いない。でもそれを指摘することはできない。結局のところ受け入れるしかないのだ

「先輩がそう言うなら…」

「うん、ありがとう桜」

◇

四人での食事は終わり、今は先輩と二人で後片付けをしている。藤村先生はセイバーさんを連れこの家の案内をしているようだ。

なんだかこうして二人つきりで何かするのは久しぶりな気がする。

「桜、これ拭いてくれるか」

「はい、（確かタオルは引き出しの中に）」

引き出しを開けタオルを取ろうとしたとき、私は気づいてしまった
…減ってる

「先輩タオルが減ってますよ それに食器の置き場所もいつもと違いますし…」

「あれ？おかしいな…泥棒でも入ったか？」

タオル専門の泥棒とはおかしな話だ。私が来なかった間になにかあったのだろうか

「———そうか、遠坂だ」

なんで

「遠坂って、遠坂先輩のことですか」

なんであの人の名前が

「ああ、昨日つまらんことで怪我をしちゃってな。偶然通りかかった遠坂に手当てをしてもらったんだよ。多分その時使ったんだろうな」

いつも何で

「…どうして」

「えっ…」

「どうして遠坂先輩がここに来るんですか…」

———今ここにいるのは私なのに。先輩とあの人は関係ないは

ずなのに。

「…ごめんなさい。なんでもありません」

◇

そのまま気まずい雰囲気となり、もう夜も遅いということで藤村先生に連れられて家へと帰る。

私はなんだか暗く、下を向きながらとぼとぼ歩く。どうしてこんなにも胸が痛むのだろうか。先輩のことが心配…それもあるが。

「——新たな恋のライバル登場って感じだねー桜ちゃん」

「え!?!…ふ、藤村先生!わたしそんなこと…」

急にそんなことを言われるので驚いてしまう。確かにセイバーさんはとても可愛らしかったけど…

「ふふふつ、桜ちゃんはすぐ我慢が出来ちゃう子だから今悩んでいることもきつと我慢しちゃうんだろうね。でもたまにはわああああって伝えちゃうのもいいんじゃない?」

きつと私のことを心配して言葉をかけてくれているのだろう。やっぱり藤村先生は優しい。

——そうだ、身を引くことはいつでもできる。だからこそ先輩の傍にいたい。先輩の役に立ちたい。大丈夫

「はい…わたし頑張ってみます!」

今はまだ、大丈夫——

◇◇◇

「じゃあ行こうかセイバー」

「ええ…。何度も言いますが私の傍を離れないでください」

俺たちは他の聖杯戦争の参加者を見つけるため深夜の巡回に行くことにした。何せ昨日や今日のこともある。決して人ごとなどではないのだから。

今日、学校に結界が仕掛けられていたことを知った遠坂と俺は起点となる場所をしらみつぶしに探していたが、あまりにもあつさりが見つかったので拍子抜けしてしまった。遠坂曰く。

『あんな適当な結界見たことないわ よほどのド素人が張ったのね
同く魔術を扱うものとして恥ずかしいぐらいよ』

らしい。魔術に関してよくわからない俺でも見つけられたくらいだ。他のマスターと考えるべきだが… 魔術師があんなバレバレなことをするのか？

「夜の巡回は危険でもありません。本当ならシロウには家で待機してもらいたいのですが」

「ああ これだけは譲れない。わがまま言っただけで悪いな」

… そういえば結局桜の様子はおかしいままだった。最近では元気がなくて、ぼんやりしていて

「ではシロウ。まずはどこに向かいますか」

思えばこの数日前から様子がおかしかったな…

「シロウ聞いているのですか？」

… 今度改めて桜に聞いてみようか

「シロウ！私の話を聞いているのですか!!」

「えっ!? あっ… すまん 気が緩んでいた。これからどうするかだよな」

しまった。セイバーのことをないがしろにしていた。セイバーはむすつとした顔でこちらを見ている。

「地脈の流れに僅かながら異常を感じます。他のマスターが行動を起こしているでしょう。 選択によっては今夜中に一人減らせます」

いきなり戦うことになるってことか… もしバーサーカーのマスターと思われるあの子だったら不味いな。

教会で言峰と名乗る神父から聖杯戦争の概要を聞いた後、あの子と出会った。雪のように白い髪と赤い目、なぜか俺のことをお兄ちゃんと呼ぶあの子はバーサーカーを従え突然俺たちの前に現れた。

圧倒的な力の前にセイバーとアーチャーを持つとしても太刀打ち出来ず、俺がセイバーを庇ってしまい瀕死の傷を受けた後、何処かへと去っていったらしい。

「その場合のみ撤退することにしてしましましょう。バーサーカーの宝具がなんであるか、それを見極めるまでこちらの宝具を使えませんから」

セイバーが警戒してるのはバーサーカーだけ……か。さすがは最優のサーヴァントってわけだ。遠坂があそこまで言うのも納得。

「セイバー、確認するが俺の方針はマスターとサーヴァントが降伏した時は戦いをやめて——」

「令呪を使い切らせてマスター権をなくす……ですがシロウ、敵がもしそれを受け入れない場合、その時は」

「……ああ、その時は仕方ない。マスターとして戦う以上その覚悟はあるはずだ」

できればそんなことはしたくない。誰であろうと命を奪うのはごめんだ。

◇

しばらく二人で新都のあたりを歩き回ったものの特に異常は見られずもう一度深山町まで戻ろうかとセイバーに提案する。周りに人影はなく、道路を走る車の影もない。静まり返った夜の中、セイバーと共に歩いている。

「きい、やああ……つあ……—！」

「——!?!」

瞬間

背筋が凍るような悪寒と共に、誰かの悲鳴が響き渡った。

「セイバー、これ……!?!」

「サーヴァントの気配ですシロウ。場所はすぐ近くの公園の様ですが」

戦う覚悟があつてここまで来た。ためらいはあの夜死にかけたときに消え失せた。それにもかかわらず体は動かず、頭は逃げる逃げろと叫んでいる。

初めから覚悟なんてできてなかった、戦うということは襲われたとき、殺される前に敵を殺すということなんだ……救われたことがあつても誰かを殺そうとしたことはない。

「マスター指示を。何が起こっているのかはわかりませんが、今ならまだ間に合います。貴方の指示次第で、悲鳴を上げた人間を救うことも可能なはずです」

冷静なセイバーのおかげで固まっていた頭、身体のしびれは解けていく。殺し合いをする、その恐れは、誰かを見殺しにするという恐れにかき消されていく

「悪いセイバー…！」

全力で走りだす。悩んでいる暇などない、悲鳴のもと、恐怖の根源がそこにいる。

「——俺はなんて間抜けなんだ、大馬鹿野郎が…！」

故に、戦う覚悟など後から幾らでもついてくるのだ

◇

「は、あ——」

脇目もふらず公園に駆けこむ。溢れ出ている魔力は強大で、この上なく恐ろしいものだった。

セイバーの脚が突然止まる。彼女の目は俺より早く、その場で何が起きているのか捉えていた。

「な——」

目を背けることすらできない。

逆上する頭には嫌悪と恐怖しかない。

……俺にはそれがなんであるか分からなかった。

人の生き血を啜る吸血鬼、死体を貪る獣、死臭をまき散らす黒竜、カニバリズムをする狂人……そのどれもが当てはまるようで、全く別物それ以上の恐ろしいもの。

黒い装束の男が、女性の手足をもぎ取りその血肉を貪っていた。公園一帯にはそれが肉を喰らう音があまりにも生々しく響いている。

……それは人を食っていた。比喻表現なんかじゃない、あの黒い男は女の泣き叫ぶ声を聞きながらニタニタと気味の悪い笑みを浮かべ肉を貪っている。やがてその声がやんでも、びくびくと震えるその様子を見てより一層笑みを浮かべた。

「——」

声が出せない。

あんな化け物がサーヴァントだということに驚いているのもあるが、俺はその後ろ——黒い男を嘲笑うように見ている見間違いよう

の無い人影を凝視していた。

「… 慎二、お前——」

頭が働かない、現状が理解できない

何でお前が、どうしてこの様子を見てそんな笑みが浮かべられるのか。

俺にはまだ分からなかった。

桜と怪物 「キャスター」

「——はっ、まさかお前が釣れるとはね衛宮 凄いな、間の悪さもここまでくると長所だね」

俺には分からない

なんであいつがここにいるのか。

その手に持った本はなんなのか。

どうして死にかけた女がいるのに笑えるのか。

どうして、どうしてこんな馬鹿げたことが目の前で起こっているのか——

「なに固まってるんだ衛宮？ サーヴァントの気配を嗅ぎつけてやって来たんだろ？ ならもつとシヤンとしろよ。 僕は優しいからさ、馬鹿なお前にも判りやすいようにわざわざ演出してやったんだぜ？」
聞き慣れたはずの慎二の声が、ひどく不快に感じた。

「——殺したのか、お前」

手に力が入る。慎二の目の前にいるサーヴァントは目に入らない。今は目の前の脅威よりも己の目の前にいる友人が行った所業が許せない。恐怖心などとうの昔に消え去っていった。

「はあ？ 殺したのかってバカだねお前！ サーヴァントの餌は人間だろ？ なら結果は一つじゃないか」

「——」

「ま、僕もどうかと思うけど仕方ないだろう？ こいつらは生しか口に合わないってんだ サーヴァントを維持するには魔力を与え続けるしかない そりや最初はコイツも嫌がってたけどさ、僕にかかればこの通り」

何が可笑しいのか、黒い男を嘲笑うように慎二は笑う。

黒いサーヴァントは動かない。あの本によって動きを縛られているのか、アレは自らの意志で動くことはできないようだ。主人——マスターの命令がなければ何もしない人形。

「そこを退け慎二」

時間がない 急げばあの女性は助かるかもしれない。

「はあ？ 退けて、お前本気で言ってるの、それ？ 食い残しが欲しいなら——ほら サーヴァントを戦わせてみようぜ」

「——慎二」

「僕はサーヴァント同士の戦いが見たくて人を呼んだんだ。お前だつてマスターなんだろう？ なのにごるぶる震えちゃってき、そんなんじやそこの女と変わらないじゃないか！」

「退く気はないんだな、慎二」

「しつこいな。どかしたかったら力づくでやれよ。ま、震えてる分には構わないぜ？ どのみち、お前にはここで痛い目にあつてもらおうんだからね」

慎二の目に敵意がともる。

それを命令と受け取ったのか、黒いサーヴァントがゆらゆらと立ち上がりこちらに凄まじい速さで飛び出してきた。とてもじゃないが目で追えない。

「——来ます!! 土郎は後ろに下がって！」

響く金属音。地にしつかり構え防御に徹しているセイバーと、目まぐるしく地面をかける黒いサーヴァントは対照的だった。

セイバーは敵のスピードについていけず、ただ足を止めて敵の攻撃を受け流している。

敵は黒い髪をなびかせ、鈍重な獲物を追い詰めるように畳みかけてくる。

「やっぱり逸話通りの速さじゃないかキャスター！ やっぱり僕の采配は正しかったんだ!! はははっ、なんだ、相手はただの木偶の坊じやないか！ マスターが三流ならサーヴァントも三流だったな！」

俺と同じく戦いの場から離れて慎二は笑う……。どうしてあいつがマスターになったのかは知らないが魔術師としての力はないようだ。その力があるなら遠坂のように魔術を使うはずだが慎二にはその様子はない。

慎二はサーヴァントの援護をしない、いや出来ない。となると、あいつも俺と同じで偶然マスターに選ばれただけなのか？

「くっ——」

何度目かの攻撃を受け、セイバーの脚が止まる。その顔を苦しげだ。高速で襲いかかってくる敵に、苛立ちに似た視線を向ける。今のところ大した傷は負っていないのでセイバーにとっては鬱陶しい羽蟲と同じなのかもしれない。

「いいよ、決めちゃえキヤスター！衛宮のサーヴァントを始末しろ！」

黒い影が迫る

——キヤスターは主の命に従いセイバーの首を刈らんと加速し、

「ガッ——」

一撃で、その首を斬り落とされた。

「…え？」

勝負は一瞬で付いた。

セイバーの剣は敵の首を斬り落とし、首を失ったキヤスターは力無く膝から倒れ伏した。

慎二は自身の元へ転がって来たキヤスターの生首を呆然と見つめ

「——嘘だろ」

俺は愕然と、つまらなそうに剣を収めたセイバーを見つめていた。

「なっ、なにやってんだよお前…！」

罵倒する声。

首を斬り落とされたキヤスターが反応するわけもなく、ただ叫び声が響くのみ。

「ふざけるなよ！誰がやられていいなんて命令した！この僕が召喚してやったんだぞ、こんな雑魚な筈がないだろ！くそっ、衛宮のサーヴァントなんかにはやられやがって…！」

キヤスターは答えない。そもそも答える口もなく、頭もない。その身体からはドス黒い血が流れ出ている。

「おい、さっさと立ち上がれよ、この死人！どうせお前らは生きてないんだ、首なんかなくてもいいんだろう!?ああもう、恥かかせやがって、これじゃあ僕の方が弱いみたいじゃないか！」

キヤスターの生首を踏みつけながら罵倒し続ける慎二。

それを見かねたのか

「キヤスターを責める前に自身を責めるがいい。どんな英霊だろうと、主人に恵まれなければ真価を發揮できないのだからな……しかし、キヤスターが魔術を使わないとは」

セイバーが慎二に向かつて歩きながら正論を繰り出す。

キヤスターは接近戦が強いサーヴァントではないと聞いた。自身の陣地に結界や工房を作り上げ、魔術による戦闘が得意なクラスの筈だ。いくらなんでも近接戦闘が得意なセイバー相手は分が悪すぎた。「っ……！ば、ばばバカ、いつまで寝てるんだよ！マスターを守るのがお前らの役目なんだ、早く！早く立ち上がれよ！」

「……無駄だ、いくらサーヴァントだろうと首を刎ねられれば命はない。じきにキヤスターは消失する」

キヤスターから流れ出た血で公園は赤く染まっていく。

「ここまでだキヤスターのマスター。我が主の言葉に従い、降伏の意思を尋ねる。令呪を破棄し、敗北を認めるか？」

「う、うるさい 化け物が偉そうに……立てよキヤスター！ 僕の命令が聞けないってのか……！」

キヤスターの身体から火花が散る。

慎二の命令を守れない罰なのか、キヤスターの死体は青白い放電に包まれる。しかし、そんなことをしても死体が立ち上がるはずもなく、ただ慎二の罵声が響くのみ。

「……なんだ？」

少し違和感を覚えキヤスターの死体を見つめた。

いつの間にかセイバーの足元まで流れ出た血は広がっていた……おかしい。明らかに人体が含んでいる血液の量を超えている。

それに……なんでまだ消滅していない？首を刎ねられたんだぞ？

セイバーの手が慎二に伸びる。

「ひ、ひいいい お、おい待て、待てよ！」

セイバーが一步踏み出した

「あれでも僕のマスターでね…この身に変えても、とは言いたくはないが一応守ってやらなくちゃいけない」

先ほどの狂気的な表情はどこへ行ったのやら、驚くほどに理性的に話すキャスター。悲しいことに慎二に対しての忠誠心などはそのままで持ち合わせてないようだ。

「ごめんね、僕が治療でもできればよかったんだけど、他人を治すのは苦手だね…ふむ、僕の一部を繋ぎ合わせてみるか」

心配そうに自らが喰らっていた女性に声をかけるキャスター。魔術かどうかは分からないが女性の手当てをしている様子。

とりあえず今は敵意が見られないと考え慎二のことを聞いてみることにする。セイバーが何か言いたげにしているがここは抑えて、後ろに下がってもらう。

「悪いセイバー。聞かなきやいけないことがあるんだ、すぐに済ませる。また、戦うかどうかはセイバーが決めていい」

「……………」

わずかに体を引くセイバー。警戒は解いてないものの一応は従ってくれるらしい。

改めてキャスターに向き直る。

「…少し聞きたいことがある。なんで慎二がお前のマスターになってるんだ」

キャスターは女性の手当て?をしながら答える。

「なんで?…うくん、そう言われてもな。間桐の家が魔術師の家系だったから、これじゃあ駄目かい?」

つまり、慎二も魔術を学んでいて…

「君も魔術師なら知ってるんじゃないかい?この地は間桐と遠坂、この両家が魔術の根を張ってるってこと」

「遠坂?…じゃ、じゃあ遠坂も知ってるっていうのか 間桐の家が魔術師の家系だって!」

「…僕に言われてもねえ。今は知識しか持ち合わせてないんだ、そういうことは本人同士で聞いてくれ」

どこか面倒臭そうに答えるキャスター。

そりやそうだ。キャスターはサーヴァント、間桐の人間でもないし知らないのは当然。

でも間桐家が魔術師の家系ということは；

「まあ、彼らの血にこの国は合わなかったようだね、既に間桐の子供から魔術回路は失われている。おかげで魔力を集めるのも一苦労というわけさ。まったく、かつての魔術の名門はどこへ行ったのやら」
そんなことはどうでもいい。

じゃあ、慎二が魔術師の家系だとしたら――

「ん…どうしたのさ？聞きたいことがあるならハッキリ言うべきだよ」

桜、は

もしかして桜も

「――じゃあ。桜は――桜も、マスター、なのか」

一瞬、ほんの一瞬だがキャスターの動きが止まる。

それから俺を見て、何やらおかしそうに口を開いた。

「いやはや、桜がマスター？それはあり得ないよ…フフツ、僕は君を少し過大評価していたようだ」

「あり得ない…？桜に魔術師としての素養がないってことか？」

少し癪に障る言い方に腹が立つが今は我慢しよう。

「それ以前の問題だ。魔術師の家系は一子相伝が基本。よほどのことがなければ後継者意外に魔術を伝えることはない。跡継ぎは二人もいない…って本に書いてあったよ」

…こいつもよく知らないんじゃないか？

でも、その話を聞くと桜は

「じゃあ。桜は――」

「ああ、僕は確かに間桐慎二によって召喚された。桜はそもそも、間

桐の家が魔道であることも知らないよ」

胸をなでおろす。

…本当に良かった。間桐が魔術師の家系ということは驚いたし、慎二がマスターになっているのは問題だ。

それでも、桜後こんな戦いにかかわらなくていいのだと思うと、今

は素直に安堵できる。

「さてと… うん、太さとか細かいのは教会の人に任せるとしてつと、ほら、この人を頼むよ」

そうして女性をこちらに預けてくる。

… 驚いた。喰われていた四肢は外見だけ見ればもと通りに見える。女性は意識はまだ戻ってないものの教会に行けば大丈夫だろう。どうやって治したのかは分からないが、キャスターの名の通り魔術を使ったのだろうか。

「それで、どうする？…まだやるかいセイバー？」

「… 今はこの女性を教会へ送り届けることを優先する」

剣をおさめ女性を抱えてくれるセイバー。直ぐにでも教会へ行かなければ。

だが、言わなきゃいけないことがある。

「キャスター。お前も慎二のサーヴァントならあいつをちゃんと見ていてくれ… できれば今日みたいなことをしないでほしい」

敵にお願いをするのは妙な話だが、このキャスターは話は分かるやつだ。少しでも慎二のストッパーになってくれれば。

「うん。でも慎二がどう動くかは保証できないよ？ 僕はあくまでサーヴァント、命令されればどうしようもない。 あれは魔術師であることに執着しているようだからね、まったく… 劣等感の塊というものは度し難いものだよ」

キャスターの身体が霊体化していく。 慎二のもとに戻るのだろうか。

「じゃあね。セイバーのマスター、あと——アルトリアも」

「——!？」

その言葉を最後にキャスターの身体が夜の闇に消えていく。

ふと、横を見るとセイバーがなにやら動揺している… こんな彼女を見るのは初めてかもしれない。

「どうしたんだセイバー、キャスターと何かあるのか？」

「いえ。なん、でもありません」

足早に歩き出すセイバー。どうしたのだろうか最後にキャスターが何か言っていたがよく聞こえなかった。機会があればいつか聞いて

みよう。

「(なぜキャスターは私の名を...)」

∴ 動揺した頭でいくら考えてもそれを彼女が理解することはな
かったのだった。

桜と怪物 「暗躍」

「はっ——はっ——はっ」

慎二は走り続ける。

もちろん彼を追ってくるものはいない。戦場から逃げ出した彼に興味があるものなどあの場にはいなかった。

存在しない敵を恐れながら、慎二はただ「こんなはずじゃなかった」と心の中で叫び続ける。

「(キャスターなんて知るものか!!あんな役立たず、衛宮のサーヴァントに殺されちまえばいい!)」

いつからこうなってしまったのだろうか。

自分は選ばれた者。

優れた才能を持つ間桐の後継者。そのはずだったのに…

◇

「…さん。お父さん!」

古い書庫にあった本を抱え、お父さんに駆け寄った。

「この本。間桐家のご先祖様が書いたんだよね? 最初はマキリの魔術師のお話だと思ってただけけど、でも気づいたんだ! これって僕らのことってことに!! ねえ、そうなんですよお父さん?」

お父さんはただ「そうだ」と答えた。

やっぱりそうだったんだ! なら僕も勉強すれば、魔術師に——

『慎二、間桐家は力を失ってただの人間になった。今の間桐は魔術を使えない——お前は決して魔術師にはなれない』

『忘れる、二度とこの話はするな… お前は運がいいんだ慎二』
でも

僕は知っている。お父さんとお爺様が隠れて何をしていたか

——マキリの物語に書いていたもの 命を懸けた大魔術の儀式

あの場で見た景色は絶対忘れない。

輝く魔法陣、召喚された黒い騎士。それを従えるお父さん。

「(なんだ。やっぱりお父さんは魔術師だったんだ)」

魔術の名門である間桐が滅びるなんて嘘さ。だってその血を受け継ぐ僕がいるんだから。勉強やスポーツだって他の人よりうまくできたんだ。お父さんは忘れろって言ってたけど一生懸命頑張れば僕だって――

そんなある日、お父さんたちが養子を貰ってきた。ずっとビクビクしてて、陰気臭い年下の女の子が僕の妹になった。

「おい、ここで何してるんだよ。ここは間桐の跡継ぎである僕だけしか来ちゃいけないんだぞ」

そうだ。この書庫は、魔導本は僕だけのもの。少しだって見せてやるものか

「ごめんなさい... 兄さん」

「ちえっ」

◇ よそ者なんか教えてやるものか

でも、いくら努力したって魔術が使えることはなかった。そんなある日。地下に通じる階段を下りてみたんだ

今まで行っちゃだめって言われてたけど

「なんだ、ここ...?」

そこで――僕は知ってしまった

なんで?

「なんで、なんで!! どうしてだよーこんなことって... ありえないありえないありえるもんか!!」

どうして

「父さん、どうしてだよ。なんであんな奴が... なんで... なんで、クソっ...」

どうしてこんなに頑張っているのに

『お前は魔術師にはなれない』

父さんの言葉が頭に響く

僕だって、僕だって頑張っていたのに...

「うっ... うう... ううっ... ううえ...」

◇

「はっ、——はっ、——はっ、——」

あれからどれくらい時間がたったのだろうか、慎二は町中を逃げ回っていた。後ろを振り返る。もちろん誰もいない。

疲れ切った体を引きずり家へと向かう。もう夜も深い、他のマスターと出会う可能性もある、その恐怖心が急に襲ってきた。

これも全部あいつらのせいだ。

「クソツ…」

この怒りと憎しみの感情をぶつけるため、慎二は家へと戻った。

「はっ?——」

家へと戻った慎二。そこで目にしたのは——

「これを、ひっくり返す…。おお!綺麗に焼けてる!」

「凄いねキャスター。二回目までここまで綺麗に焼けるなんて」

「あははっサクラの教え方が上手なんだよ。うくん、いい匂い。さっ、早く食べよう」

エプロンをつけ楽しそうに話す二人。仲良くパンケーキを作るキャスターと桜の姿だった。

「何やってんだよ…。お前」

キャスターに向かって声をかける

「どうキャスター、美味しい?」

「うん。初めてにしてはとっても美味しい!すごいなあ現代の食事がこんなに素晴らしいものだなんて」

聞こえてないのか、慎二に気づかず会話を続けている。

ふざけるなよ…。っ!

「おい!キャスター、どういうつもりなんだお前!」

びくつと肩を震わせる桜。キャスターはそこでようやく慎二の気が付いたのか

「ああ、シンジ。無事だったんだね、よかったよかった」

「なにが…。っ、なにがよかったって言うんだよ!おかげでセイバーに殺されるところだったんだぞ!」

怒りを露わにする慎二。

コイツのせい、衛宮のせい、僕は悪くない。

「兄さん、先輩と戦ったんですか!?先輩には手を出さないって言ったのに……」

「うるさい!……お前、お前いま衛宮のこと考えたろう!!」

腕を振りかぶり桜を殴りつけようとする慎二。自分ではなく衛宮士郎を心配されたことに腹が立ったのである。

“ガツ!……べちゃあ”

鈍い音と、なにかが床に転がる音

「ひっ、——」

殴られたのは桜をかばう様に立ったキャスター。殴られた拍子に首が転がり落ちたのだった。

「おおっと、まだくっついてなくてね。あの剣、僕と相性が悪いんだ」
首を拾い上げ再びくっつけ慎二に向き直る。

「な、なんなんだよお前 お、お前が悪いんだぞ、お前が弱いから衛宮のサーヴァントなんかに負けちゃうんだ! そのせいで僕は「死にかけた?」……っ、そ、そうだ。お前のせいだぞ!」

叩きつけられる言葉にキャスターは笑いながら言葉を返す。

「ふふふっ、死ぬ、死ぬねえ……そりゃ死ぬさ、この戦争をゲームかなにかと勘違いしてるのかい?」

「はっ?」

「だいたい君らこの戦争に参加した時点で死んでると同じようなもんさ。まあ、僕も叶えたい願いがあ。君がマスターである限り命は保証するよ」

「ぼ、僕はただ——」

「覚悟しろよ慎二。今日の一件でセイバー陣営とは完全に敵対している。あんなに派手にアピールしたんだ他のマスターからも狙われるかもね」

「ま、守ってくれるんだろう!?それがサーヴァントの役目なんだからさー!」

怯える慎二。

縫るような目でキャスターを見つめる。

もちろんと頷き

「けど悪役の最後はどれも惨めなものだ。だからさ、シンジ。しばらくは僕に任せて何か策でも考えていてよ。——ねえ、優秀な魔術師さん？」

「あ、ああ… わかった」

部屋へ戻っていく。これではらくは大人しくしているだろう。セイバーのマスターとの約束は守った。

「… キヤスター、その」

恐る恐る声をかける桜。

「さつきはありがとう… でも首は大丈夫？」

「うん。ほら、もう完璧に修復した」

見ると首は完全につながり傷跡すら残っていない。ほつとしたように息を吐き無茶をしないようにとキヤスター窘める。

「先輩を殺さないでくれてありがとう… あの人が居なくなったらわたし」

黙って頭を撫でるキヤスター。

だが、その顔は酷く歪んだ笑みを浮かべていた。

「さあ、もう夜も遅い。また明日、セイバーのマスターのところへ行くんだろ？ 早く寝なきゃ」

そうして“おやすみなさい”と声をかけ自室で眠りにつく桜。

キヤスターは料理の片づけを済ませ外へ出る。向かうは柳洞寺。死にかけの害蟲と、今この時召喚されようとするアサシンに会うためキヤスターは足を速めた。

◇

く柳洞寺く

人の気配もなくなつただ蟲の鳴く声が響く静かな夜。この寺にその醜い害虫は巣くつていた。

「お、おのれ、キヤスターめ。まさかワシの本体を潰すとは…」

現在の臓硯は本体であった蟲を失い、予備として残っていた羽虫一匹の姿をかううじて保つことで生きながらえていた。

「五百年、五百年じゃぞ… このような匙で終わらせるものかつ！」

地面が輝き始める。その姿になってもその歪んだ願いが消えることはなかった。

「まだあきらめるものか…！」

霊脈が十分に通っている柳洞寺、そして聖杯戦争のシステムを作り出した張本人である彼がそうすることでアサシンが召喚されようとしていた。

「……。……。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

地面がより一層輝きを放つ。

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者」

辺りから魔力が収縮してゆき

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ」

そうして姿を現したのは――

「サーヴァント・アサシン。影より貴殿の呼び声を聞き届けた。貴殿が私のマスターか？」

「かかかつ、左様。お主の力存分にふるってもらうぞアサシン。白き杯はこの間桐臓硯がいただく」

笑い声が響き渡る。永遠を望んだ魔術師、名前のない暗殺者、この二人が聖杯戦争にて暗躍を始めようとしていた。

一方、その様子を見ていたキャスター。

「なるほど…。あれじゃあ五百年の妄執は消えなかったか」

若干、そのしごときに引いたような表情を浮かべ声をかけるか暫く迷ってしまったのだった。

桜と怪物 「敗退者」

いつも通り先輩の家に夕食の支度をしに訪れる。玄関前で先輩と他愛のない話をし家に上がろうとしたところで唐突に話を切り出された。

「ところで、な… 桜 今日から家に泊まっていけ」

「えっ、先輩の家にですか？」

どうしたのだろうか？… 兄さんがそれを許してくれるはずもない。先輩もそれを分かっているのか

「無理を言ってるのは分かってる。けど… 最近物騒なことが多いだろ？今もニュースで連続怪死事件なんてのもやってる」

たしか新都の方を中心とした殺人事件のことを朝のニュースで見た気がした。なんでも心臓が握りつぶされたように破壊されていたとか。昨日なんて柳洞寺の方でガス爆発があったとか、おかげで寺にはだれ一人寄り付かず、お坊さんたちもガスの影響で病院で入院しているらしい。

でもキャスターは特に気にしてなさそうだったし、あまり心配しなくてもいいような気がする。

「できれば一週間ぐらいいてほしい 心配しなくても藤ねえにはもう許可も取ってあるから」

… 何でそこまで

「——どうしてですか？」

何でこんなわたしを気にかけてくれるんだろう。貴方にとってわたしは…

「理由は言わなきゃダメか」

わたしが…

「…わたしが心配だからですか？」

「——うん桜が心配だ。だからここにいてほしい」

胸の奥が温かくなった気がした。先輩がそれを望んでいるのなら

「はい… お世話になります 先輩」



「藤村先生… その相談があるんですけど。あのですね… えつと…」

「あ そつか… そうね、制服ならわたしの家にあるけど」

流石に服や下着を持ってきているわけではないので藤村先生に相談する。何日も同じものを身につけるわけにもいかないし…

「それとも家に一回取りに帰る？」

「いえ… その家に帰るのは、兄さんが、その…」

まだ兄さんに先輩の家に泊まることを伝えていない。もし家に帰った時鉢合わせてしまったらと思うと…

「ああ、それなら大丈夫。さつきお家に連絡して許可を取ったから」

「えっ。本当ですか!？」

でも一体… 兄さんが許可してくれるわけないし、お爺様はもういないし…

「うん。桜ちゃん、いま家に親せきの人がいるんだってね。えーっと、キヤスターさんが『先生のうちなら安心です』って」

キヤ、キヤスター、意外と臨機応変というか… でも後でお礼言っておかないと。でもこれでわたしは先輩の家に泊まることができる。

「なら、わたし本当に泊っていいんですね？」

「そだよー でも困ったな、部屋着はわたしのをあげてもいいんだけど流石に桜ちゃんのサイズの下着までは持ってないなあ」

そういえばこの一年で少しずつ大きくなってきたような… 先輩に聞かれるのは恥ずかしいし、いくら同じ女性のセイバーさんに聞かれるのも気まずいので先生に耳打ちをする。

「あつ、なにー士郎? もしかして気になっちゃったのかなあー」

先輩は少し顔を赤らめそっぽを向いている… もしかして聞こえて

「… 俺は聞いてない。何も聞こえてないぞ」

いなかったようだ。そう聞こえていなかったの、じゃないとあまりにも恥ずかしすぎて

「じゃあ士郎は気にならないのかな——? 桜ちゃんのバストサイズ…」

「ふっ、藤村先生——!!どうしてそうゆうことするんですか——!!」

思わず先生の口を手でふさぎに行ってしまう。なんでこの人はこうお茶目なんだろうか!っ…先輩も目を合わせてくれないし、セイバーさんは興味深そうにこつちを見る。

「もう!お風呂先にいただきますねっ!」

わたしは恥ずかしすぎて逃げるようにお風呂場へと向かった。

既に湯は沸いていて、身体をゆっくりと湯船につける。こうしてお風呂に入っているといるろんなことを考えてしまう。

「キヤスター大丈夫かな」

夜な夜などこかへ出向いているし、危険なことをしてなきやいいんだけど…

「っ——」

突然、視界が眩む。のぼせてしまったのかな、思うように体が動かない。

あれ?おかしいな何だか…頭がボーつとして…違う…何か私の中に入って…

「おい桜? 大丈夫——桜!?おい桜!!」



く柳洞寺く

人の気配はなく、季節外れの虫たちの泣き声が響いているこの寺に一人の男が降り立った。青い衣装に身を包んだ男は真紅の槍を携え辺りを見渡している。

「ちっ、鼻が曲がりそうなくらい酷い匂いだ」

男は醜悪な匂いに顔を歪め境内の中へ入っていく。

「最近の坊主ってのは呪術やらも嗜むのかねえ…いや、違うか」

すでにこの寺には人はおらず蜘蛛やカエル、腐った小蟲など、主不在の廃屋に巣食うものが男を囲んでいる。男が一歩進むごとにその鳴き声は大きくなっていく。

「蜘蛛、蛙だの陰気な奴らが多いな、おおかた蟲使いの魔術師か、ある

いは未だに姿を見せねえキャスター…。いや、セイバーに負けたって聞いたな」

男は講堂に向かい迷わず進んでいく。

「にしても一匹でかいのがいるな。何だこりや砂の匂いか？」

講堂の奥で何かが動いた。

「あーやだやだ。なんで俺がこんなしけた連中の偵察なんてしなきゃ

——」

“ガキンツ”

「——なつと！」

講堂の奥から放たれた短剣を槍で防ぎ、それを放った者に目を向ける。

「いい腕だ。けどな二度とはするなよ砂虫。挨拶もなしで命を取られるのは趣味じゃねえ…。俺を殺したアイツですら礼儀だけはしつかりとしてたぜ」

暗い講堂の闇の中に髑髏の仮面が浮かび上がる。

「…流石はランサーのクラス。この程度では仕留められぬか」

黒い布に身を包んだそれは言葉を発し、その姿を男に現した。

「へっ、そういうお前はアサシンか。俺の前に姿を現すのは悪手じゃねえの？」

「——シャアア！」

掛け声とともに再び放たれた無数の短剣がランサーと呼ばれた男に向かつていく。短剣はランサーに突き刺さっていく——

「なにっ!？」

かに思えたが、まるでランサーを避けるかのように短剣は通り過ぎてしまい一本たりとも刺さることはなく槍を構えランサーはアサシンに突進する。

これにはアサシンもたまらず講堂を飛び出し、扉を飛び越え森の方へと逃げ出していく。仮面により表情は分からぬが焦りが浮かんでいるに違いない。

「逃がさねえよ」

ランサーは自慢の脚に身を任せアサシンに負けず劣らずの速度で

その姿を追っていく。森を駆け抜ける二つの影。時折、金属音が響き木が揺れ動いている。

しかし、短剣を投げ、それを弾くだけの単調な戦いに飽きが生じたのか、アサシンの上空に飛翔し槍を振り上げる。

「まさかと思うがお前の芸は短剣を振るうことだけか？——なら、これで終いだ」

「ぐげっ——」

アサシンに槍が振り下ろされ湖に叩きつけられる。すぐさま体制を立て直そうとするものの、ランサーによる槍の連撃は止まらず、ついにはアサシンの仮面は吹き飛ばされた。

「がっぎぎぎぎぎ」

痛みに悶えるアサシン。

「馬鹿が。忠告はしたぜ、俺は生まれつき名見える相手からの飛び道具なんざ通じねえんだ」

アサシンは仮面をかぶり直しランサーを睨みつける。

「わた、しの顔を見たな、ランサー」

「そりゃこれからだ。テメエがどこの英霊かはつきりさせなきやな」

ランサーは主の命より全てのサーヴァントと戦いその実力を測るという縛りがあった。故にアサシンをすぐさま殺そうとはせず、その正体を見極めようとしている。

「なる、ほど通りで殺さぬ、わけだ… 流れ矢の加護か。さすがは名付きの英霊、私などとは格が違う」

アサシンは跳躍し再びランサーと距離をとる。

「ちっ、喉を潰したと思ったんだがな… ありやあ薬か何かやってんな」

薬に頼るような英霊に治癒能力はないと考え、次でけりをつけるため距離を詰めようとするが…

「!? (来る)」

突如、湖の底から這いよる黒い影に気づき跳躍するが、その影もランサーの後を追ってくる。

「(なんだコイツは)」

下を見るとそこには――

「(これ……は――!)」

無数の触手のような影が蠢いていたのであった。

「虎の子だな……!」

このままではマズイと防御のルーンを刻んだ石を着地と共に投げつける。これにより簡易的な結界が紡がれ、宝具すら防ぐことのできる防御結界がランサーを囲む。

が……その触手は結界すら侵食してしまった。

「(宝具でさえ防ぐルーンの守りを侵食するだ?!?) ちっ」

「くくっ、どうしたランサー? そのままでは影に? まれてしまうぞ」

嘲笑うかのようにアサシンはその様子を見ている。妙なことにアサシンに対しては触手は興味を示していない

「テメエ……これがなんなのか分かってんのか」

直感的にこれがサーヴァントや人間に対してもっとも厄介な存在と認識したランサーはアサシンに問う。

「だが……貴様を仕留めるのはその影でもなく――私でもない」

「(ここで撤退するのが吉なんだろうが……こいつらを放っておくわけにはいかねえ) ここでけりをつけてやらあ――アサシン!!」

大きく跳躍するランサー。おおきく振りかぶった腕には“放てば必ず心臓を貫く”魔槍。

ぎしり、と槍が纏った魔力により空間が悲鳴を上げる。

狙えば必ず心臓を穿つ槍。躲すことなぞ叶わず、躲すたびに再度標的を追尾する呪いの宝具。それが、ランサーの持つ“ゲイボルグ”、生涯一度たりとも外すことなく、また自身の命ですら奪った破滅の槍。

ランサーの全魔力で撃ち出されようとするソレは防ぐことさえ許されない。

つまりこの名を冠した槍は“必中必殺の一撃”この魔槍に狙われた者に、生きるすべはない――

「――突き穿つ」

故にランサーは見誤った。

今まさに宝具が放たれようとしているにもかかわらず、アサシンはその場を“一歩たりとも動いていない”まるで自身にその槍は届かないというように…

「——なに!?!」

気づいたときにはすでに手遅れ。湖を超えた森の奥から放たれんとする槍は既に…その心臓をとらえていた。

「——刺し穿ち」

光速の速さで放たれた一本の槍がランサーを空間に縫い付ける。空中で投擲の構えをしていたランサーに避けるすべなどない。

「がっ——!?! (この、宝具は…!?!)」

「突き穿つ!!」

それでは終わらず、特大の魔力、呪いが込められた二本目の魔槍が放たれる。因果逆転の呪いを纏うそれは、確実にランサーに向かっていき——

『ゲイ・ボルク・オルタナティブ貫き穿つ死翔の槍』!!』

——その心臓を貫いた。

◇

力なく倒れ伏したランサーに、一つの人影が近づいていく。

「て、テメエ…なに、もんだ。その槍は…その宝具…は」

突き刺さったのは、自身が所有する槍と類似する魔槍。実際は別物、名が同じだけ、古き時代に冥界の門番が作り上げた物。

「——おや? まだ息があったか。さすがだなクーフーリン」

紫の衣服に身を包んだ女は意外そうに声を上げた。

「違う…そんなはずはねえ。アンタがいるはずがねえんだ!!」

クーフーリンがその姿を見間違うはずがない。その女は自分が殺せなかった、間に合わなかった、だからサーヴァントとして召喚されるはずもない…じゃあ目の前にいるのは誰だ?!

「ふふふっ——流石に見破るか。自信があったんだけどなあ」

女の顔が半分溶け、黒髪の男の顔が現れる。その顔には邪悪な笑みが浮かび、驚愕の表情のランサーを嘲笑っている。

「テメエ…キヤスターか。クソツたれ、卑怯な真似しやがって」

「勝負に卑怯も糞もないさ。英雄としての矜持を誇りとするならこんな戦争お門違いってもんさ。それに、こうでもしなければ君には勝てない——あの時のようにね」

「まさか!?お前、あの時の。ガハッ——」

ランサーの身体はズルズルと水中へと引き込まれていく。黒い影はランサーを取り込もうと次々にまとわりついていく。

「そいつはちゃんと消化するんだよ。下手に黒化しても手に余る」

薄れゆく意識の中、ランサーはこれから起こるであろうことに、これから犠牲になる人々に詫びた。

「じゃあねクローブリン。また僕の勝ちだ」

黒い触手がランサーを取り込み始める。

「(——こいつは、つまらないことになっちまったな)」

湖には貪り食う音だけが響いていた。

◇

「計画通りだなキャスター」

アサシンが声をかける。キャスターは愉快そうに喜んだ。

「うん。悪いねえ囀を頼んじやって」

「他愛無い。しかし、その能力は未恐ろしい。姿、形だけではなく宝具ですら模倣して見せるとは」

キャスターの持つスキル『擬態』このスキルによりあらゆる存在への擬態が可能であり、その能力あるいは宝具ですらある程度の再現が可能とするスキル。勿論それ相応のデメリットはあるものの絶賛ステータスが下降しているキャスターにとって宝具と呼べるほどのスキルになっている。

「ふふふつ、何なら君たちが一番恐れている“初代”になってあげてもいいよ」

「。ご勘弁を。この戦いに身を投じた時点で首を墮とされるのは道理なのだ。ただ、まだその時ではない。私の願いがかなった時、彼の方は私の前に姿を現すのだから」

その言葉を聞いたキャスターはつまらなさそうに肩をすくめている。

「して、次はどうされる?」

「セイバーかな。どうせ明日辺りに嗅ぎ付けるだろうからね」

「ふむ… 貴殿はセイバーに一度敗北していると聞いているが問題ないのか?」

訝しげに尋ねるアサシン。キャスターの実力を疑っているわけではないが、最優と謳われるクラスであるセイバーは手ごわい相手に違いないのだから。

「心配ない… ちゃんとあの影は連れていくし、何なら取り込んで見せる。君は安心してアレのマスターもろとも殺してしまえ」

「了解した。魔術師殿にも伝えておこう… では、私はこれで」

そうして霊体化するアサシン。この場にはキャスターただ一人が残される。

夜空を見上げるキャスター。今夜は半月、綺麗な満月にはあと数日かかる。

「待っててね。もうすぐ、もう少しで… フフツ。アハハ！」

その願いは、本当に自身が望んでいることなのかキャスターは分からない。

“でも… 君に会いたい、会いたんだアタランテ。例え何を犠牲にしても、必ず届いてみせる”

雪が降り積もる中、キャスターはいつまでも月を見上げていた。

◇◇◇

「あ… れ? わたしなんでベットに…」

ふいに目を覚めしてしまった。ここは先輩の家の客室のベット。

どうやらお風呂でのぼせてしまった。ふと横を見ると先輩が手を握って顔を伏せている。

「ん… 桜!? 良かった、大変だったんだぞ。返事がなくて扉を開けたら倒れていたんだ」

心配そうにこちらを覗き込んでくる先輩。ここまで連れてきてくれたらしい。

… また迷惑かけちゃったな。

「… すいません。なんかわたし緊張しちやっってお風呂に入ったらの

「ほせちやったみたいです…」

「まあ、やっちゃったことはしょうがない。今夜は大人しくすること」
私の頭をポンポンとなで先輩は部屋を後にしようとする。

「あっ——」

思わずその腕を掴んでしまった。先輩は不思議そうにこちらを見
てくる。

「え?… あっ、す、すみません!わたし何だかぼうつとしちやつ
て… それで」

行かないでほしい

「桜… もしかして怖いのか?」

そばにいてほしい

「… はい。知らないところで一人で寝るのは… 怖くて」

いまでも、蠢く蟲のなかで犯される夢を見る… もうその心配はな
いのに。

「そっか、確かに初めての部屋で寝るのは不安だよな」

そう言う先輩はドアロックをかけ、ベッドの横に座り込む。

「あ、あの… 先輩?」

「もうちよいここにいる。あと三十分くらいは監視してるから、大人
しくしてろ」

こつちを見てくれないけど… 少しだけ安心した。

「それじゃあ… 監視よろしくお願いします」

「ああ」

時計の針が進む、カチ、コチという音が聞こえる。

「——先輩起きてます?」

「ん」

「… 今日ありがとうございます」

静かに意識が沈んでいく。今日はよく眠れそうだ…

桜と怪物 「君がそれを望むなら」

「それでねえ、士郎ったら勝つまでやめたがらないからしようがなしにお爺さまが弓を持たせたのよ」

「ちよつ、恥ずかしいからやめろつて！だいたい何年前の話してんだよ藤ねえは！」

「ほお… シロウが弓を使い始めたのはそのような理由が」

いつも通り食卓を囲み食事をとる。少し違うのは今日からは毎朝先輩の家で目が覚めて一緒に朝食を作って一緒に登校する。一緒に過ごす時間がいつもより多くなったこと。

幸せ… といえるのかな。私は、先輩といえるだけで嬉しいのです。でも――

◇

毎晩どこかに出かける先輩とセイバーさん。

… 聖杯戦争。

先輩がマスターということも分かつてる。先輩のことだ、きっと誰かを助けるために頑張ってるのだろう。

“ガチャ”

玄関口が開きセイバーさんが先輩を肩で支え帰ってきた。ぐつたりとしたその姿を見て思わず息が詰まる。

「桜？… 眠っていたのではないのですか？」

「――」

つ… そんなわけないじゃないですか。わたしがどれだけ先輩のことを心配しているのかも知らずに…

「退いてください、そんな支え方じゃあ先輩が辛くなります」

「いえ、これは――」

セイバーさんから半ば強引に先輩を引き寄せる。

「貴方が先輩となにをしているのかは知りません。わたしには答えてくれないことも分かっています」

… 嘘

本当は知っている。

「けど、貴方が来てから先輩は毎日辛そうです。セイバーさんの事情は知りません…。けど、もう少しうまいやり方があるんじゃないですか?」

貴方には先輩を守る力がある…。わたしにはできないことが、貴方には出来る。そのはずなのに…

「それができないなら先輩を巻き込むのはやめてください」

何か言いたげな彼女を無視し、寝室へ先輩を運ぶ。何やら魘されているようで時々呻き声をあげている。

どうして先輩だけがこんな目に

「ごめんなさい…。わたしがもつとしっかりしていれば」

わたしにあなたを守る力があればとできもしないことを思い浮かべる。

居間に向かうとセイバーさんは申し訳なさそうにうなだれていた…。流石にさつきは言いすぎてしまった、彼女に謝らなきゃ。

「あの…。セイバーさん。さつきはすみませんでした」

「え?」

「私にそんなこと言える資格なんてないのに、本当にごめんなさい」

セイバーさんに頭を下げて謝罪する。

「頭を上げてください桜。桜の言ったことは正しい。今夜シロウが倒れたのは私の不注意、私の責任です」

「シロウの傍にいながら…。申し訳ありません」

でも…

「いえ、そんな…。そんなこと言わないでください。わたしが悪いんですから」

それでも心のどこかで思ってしまう。

この人のせいで先輩は…。この人がいなければ——って。

「桜…。?」

でもそれは八つ当たり過ぎなくて…。分かってる。セイバーさんは強くて真面目で、いい人。

——先輩を守ってくれる人。

「セイバーさん…。先輩をよろしくお願いします」

…わたしには出来ないから。

◇◇◇

夢を見る。世界が真っ赤に燃える夢を

——点滅を繰り返す。

まるで蟲が体を這いずり回ってるようだ

——熱が体中に浸透する

熱い、熱い

後ろを振り返る、さつきまで住んでいたうちが燃えている

——息をすれば喉を焼かれ、生きているだけで地獄の様

苦しいから喉をかきむしる、肌が焼きただれ脳は蒸し焼きに

——でもこれは10年前の話

燃え盛る世界の奥で黒く輝く■ ■ ■

——この炎は過去の話

手を空へ伸ばす

酷く熱い… 恐ろしく寒い

——だから、あんなものは知らない

太陽は黒く輝いていた 空には黒い太陽があつた

そこからドロリとしたものが流れ出て世界を覆う

——そうして、あの日の光景が蟲の様に蠢いていた…

◇

「… ——っあ… はあ… はあ… 夢… か…」

最近はこの夢を見ることが多い… にしても今日はえらく鮮明な夢だった。

爆ぜる空気。 出口のない炎の壁。 昔はこの夢を見て何度も魘された。

それは十年も前の話、今でも眠りに落ちればあの日の空はそこにあり続ける… それでも傷はいえるものだし記憶は色あせるもの。

「… 何で今更」

肌が焼ける痛み迄実感することになるとは… それに、アレは何だったんだ。

“ 空に輝く黒い太陽 ”

あんなもの俺は知らないし覚えていない。そもそもアレは――

「――っ」

頭が痛む。

あれ、俺はいつ布団に入ったんだっけ？昨日は…夜にセイバーと町に行つて――

『アレは見てはいけない。触れてはいけない。知ってはならない』
確か…遠坂とアーチャーがアサシンと戦っていて…

――突然アレが現れたんだ

逃げなくては、逃げられない、動け、動くな――逃げてても無駄だ
『遠坂!!危な――』

そうだ…アレの影が伸びて…それで遠坂が飲み込まれそうになつて…

“ズリッ”

「ぐっ――ううウウ…」

ハハハハハ は 吐き気がする 吐きあ吐き気はくはくはく

吐き気がする

気持ち悪い気持ちいいいきもちわつるうるるキキキツキキキキ 気

モチワルイイイ

脳に蟲が絡みつく 体中に蛆が湧く

ミキサーの様にかき混ぜられる美味し死s美味しいジュースの出
来上がり

ぬちやぬちや食られ腐り落ち命が終わる美味しくない美味しい気
持ち悪い

気持ち悪い

「――シロウ?どうしました…何か音がしたようですが」
はっ、と意識が戻る。

襖が開かれセイバーが心配そうに見つめていた。そうか、もう朝
か。足に力を入れ立ち上がる。どうしてか、少し体がだるい。

「セイバー…いや、悪い。なんでも…ない…とつと」

力が入らず、その場に突っ伏してしまふ。クツツ…熱があるみたいだ。風でもひいちまったか。

「大丈夫ですか!?!…シロウ、もしや起き上がれないほど体調が悪いのでは?」

◇

藤ねえには俺が調子を崩したことが珍しうで、えらく真面目に心配された。

「もう、いつも通りご飯なんか作ってたら本当にカミナリ落としたんだから!」

…ほんと頭が上がらないな。

桜もおかゆを用意してくれるし、「本当に大丈夫ですか」と心配してくれたがセイバーもいてくれるので問題ないと伝える。

まあ、セイバーはというと

「はい、士郎が起き出さないよう監視をし食事を与えればいいのですね?」

胸を張ってこたえるその姿、思わず見惚れてしまふが…それ間違つちやあいないけど、なぜだか危機の予感がするぞ。

その後二人は朝ご飯を食べるため居間に行き、セイバーもお腹を空かせているようなので一瞬に行つてこいと促す。

いくら心配してくれるって言つても、こうジツと監視されていては休めるもんも休めない。はあ、とため息を吐きながらもセイバーは朝食に行つてくれた。

「ふう…(熱はそんなにないんだけどなあ、とにかく体が疲れ切つてるみたいだ)」

取り敢えず大人しくしとけばよくなるだろうと目を瞑る…

“シユツ”

襖が開く、桜が立っていた。ああ、そういえばおかゆ作つてくれるって言つてたな。

「ありがとう桜」

「先輩、体起こして大丈夫なんですか?」

「うん なんとかな」

やっぱり風邪の時はおかゆだな。早速いただこうとしてふと、気が付いた。

「そろそろ登校時間だろ？のんびりしてていいのか桜？」

「えっと…あの先輩。わたし此処に残っちゃいけませんか」

…？

どうして、という疑問が浮かぶ。ひよつとして桜もまだ調子が悪いのか

「その…ずるしちやおうかなって」

「なんでさ？」

まあ、先日風邪ひいていたみたいだし普通に休めばいいのではと思う。

「う…ええっと…わたしの体のことはいいんです」

「??」

「その…わたしは元気で、日頃のお礼というか…先輩の看病がしたいのでずるしちやいたいんです…っ」

顔を真っ赤にして伝えてきた桜。

———そこまで言われちゃあ断れないよな。

「…うん。それじゃあ頼む」

「そ、そうですよね。セイバーさんもいるしわたしなんかが残っても

—————」

… 相変わらずだ桜は。自分を卑下しすぎだぞ。

「あの…」

「うん、だから看病を頼むよ桜」

「…！は、はい！わたし精いっぱい頑張りますね先輩!!」

まるで花が咲いたような笑みを浮かべる桜

———うん、やっぱり桜はこういう笑顔が似合ってる。

… 少し眠くなってきたな。

「…先輩はちよつと人のことを大切にすぎだと思えます」

桜が何か言ってる気がするが、瞼がだんだん重くなってきた。意識が沈んでいく…

「———けど先輩？わたしは先輩のそういうところが…大好きで

す」

◇ さてと、おかゆを食べて少し眠ったことでだいぶ調子は戻った気がする。

「うん、手足のだるさはなくなった。」

やっぱりこれ風邪なんかじゃなく栄養が足りなかったんだ。この戦いが始まってから気を張りすぎてたからな、とは言えこの調子なら今日の夜にもまた街に行けるだろう。

そうだ、昨日何があつたか遠坂に聞いてみるのもいいかもな…。あの影のことも遠坂なら分かっているかも。

「先輩 お電話です」

「お?… 誰からだ?」

「… さつきから待ってますからどうぞ」
…?

藤ねえか?もしかして心配してくれてるのか。そう思い電話に出た瞬間――

「はい、衛宮ですが――」

『衛宮ですがじゃないっ!!アンタ何無断で学校休んでんのよ!!私がどれだけ心配したか分かってんの!?!』

~~~~~つきいたあ。耳が痛いほどの怒声。

『ちよつと聞いている!?衛宮君本当に無事なんでしょうね!?!』

「聞いている、聞いているから…」

俺が無事だと分かると”心配して損した”とか言う遠坂… 不満はあるがひとまずの鼓膜の安全は確保された。

「で?、あの影について何かわかったのか?」

『… まったく。アレがなんなのか皆目見当がつかないの。今はアーチャーが街を見張っているけれど成果は無し… お手上げね』

そんな… じゃあどうすれば。あれを放っておくのはヤバイ、そう俺の直感が告げている。

『取り敢えずは地道に調査するしかないわね。私たちは今日の夜もう

一度新都の方へ行ってみるわ、衛宮君たちはどうするの?…正直あなた達は巻き込みたくはないのだけれども』

そんなこと言ってられる場合か。体調はもう大丈夫、セイバーとならきつといける。

『そう…なら柳洞寺の方へ行つてくれるかしら』

「柳洞寺…?何でだ?」

どうやら先日、柳洞寺で大規模な戦闘があったらしい。そこにあの影も関係しているかもしれないことだ。

『その戦いでランサーは消滅したらしいわ』

なんでそのことを遠坂が知ってるんだ?…まあ、今はそんなことはいいい。

『柳洞寺には魔術的な結界が張られているの。もしかしたらアサシンのマスターがいるかもしれないわ…何かあったら直ぐに連絡して頂戴』

「ああ、分かっている。じゃあ切るぞ」

居間には桜がいるんだ、これ以上物騒な話はできない。そうして受話器を置こうとするが

『ちよ、ちよつと待った!!』

「…なんだよ、まだ何かあるのか?」

『あ、あるわよつ…いいから明日絶対に学校に来なさいよね!!大事な話があるんだから!!』

“がちちゃん”と一方的に切られる電話。何だっつてんだ一体…

「つたく…前は行ったら怒ったくせに」

今日は来いなんて勝手な奴だ。なんてことを愚痴りながら居間へ行くと

「ん?——」

桜が俯いていた。さつきから一体どうしたんだ?

「桜?どうした気分悪いのか」

「いえ、私は元気です…ただ先輩すごく嬉しそうだからどうしたのかなって」

…嬉しそう?今の電話がか?

確かに、遠坂の声が聞けてほっとしたのはあるが…

「…先輩。自分で気づいてない」

「…む？」

結局、俺には理由がわからなかった。

◇

「よろしいのですかシロウ？…まだ体の調子が」

「大丈夫だ。それに、休んでいられる状況じゃあないだろ」

…そんな会話が聞こえてきた。今日も先輩は行ってしまう。

わたしは止めることは出来ない。わたしにはその力はない。

でも――

「…キャスター、いるんでしよう」

虚空に呼びかける。

「――ああ、ここに」

黒い衣服を着た彼が現れる。

「…お願いがあるの」

「うん、いいとも…でも、口約束じゃあ保証はできないよ」

分かってる。だからわたしは…

「令呪をもって命じます…キャスター、先輩を…先輩を守って」

令呪が輝き、その一画が失われる。残る令呪は一画…大丈夫。こ

れで、きつと先輩は…

「承った。でも、彼だけでいいのかい？」

セイバーさん…彼女は…先輩のことを…

「…」

そうしてキャスターは微笑む。

「――君がそれを望むなら」

…お腹が減ったな。

## 桜と怪物（幕間） 「いつかの夢」

——夢を見た。

でもこれはわたしの夢じゃない。  
きつと…

◇

“子供なんて別に興味はなかった。君と話すキツカケにしただけ”  
目の前には新緑に輝く髪をもち、美しい女性がいる。

“でも…子供たちのことを語る君は嬉しそうで、まるで女神みたいな慈悲深い表情だった。その顔を見るのが日々の楽しみだった”  
焚火を囲んで二人の男女が談笑している。女は夢を語り、男はそれを相槌しながら聞いている。

“『この世の全ての子供らが、愛される世界を作る』…それが君の夢、願い”

“無理だ、そんなの叶わない” 心の中でそう思ったよ。まあ、希望に縋りたくなるのが人間…君はきつと人間の綺麗な面を信じているんだね”

『汝は笑わないでいてくれるんだな…ありがとう』

“でも、君なら…きつとその夢を”

場面は変わり、男が女を抱えている。女は照れ臭そうに顔を隠しているが、男はどこか悲痛な面もちだ。二人は傷だらけで、血にまみれている。それは自分らの血なのか、返り血なのか本人たちにも分からない。

“今でも後悔する。君と関わらなければよかった…君はもっと幸せになれたんじゃないかって。でも君は『ごめんね』って『ありがとう』ってそんな風に言葉をかけてくれる”

『ありがとうメラニオス』

“やめてくれやめておねがいやめて…ごめんなさい愛してるごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい愛してるごめんなさいごめんなさいごめんなさい愛していますごめんな

さいごめんなさい好きなんだごめんなさいごめんなさいごめんなさい

ごめんなさいごめんなさい君が欲しいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさい——”

二人が日常を過ごしている風景が流れる。それは一緒に狩りをしたり、一緒に水浴びをしたり、一緒に眠ったり：：女は笑顔で男を見ている、きつとこの日常が幸せなのだろう。それに対して男は哀愁に満ちた笑顔を浮かべる。

“君は一段と笑みを浮かべるようになった。それが嬉しくもあり：：こんなにも満ち足りていいのかと不安に思ってしまった”  
再び場面は変わり、村の入り口のようなところで二人が立ち止まっている。

“この辺りはほとんど雨が降らず、どこの村も飢餓状態だった。珍しいことじゃない、どうせ誰かが神の怒りを買ったのだろう：：そういう時代だったんだ。この世は弱肉強食、いつも通り村を無視し旅を続けようとしたとき：：”

『お願い：：助けてえ』

女の腕に、赤ん坊を背負った少女が縋っている。どうやら助けを求めているらしい。

“生憎僕らは手持ちの食糧は少なく、一時の慰めにしかない。それに他の村人ももうようよと生気がない顔でこちらに這いよってくる”

『メラニオス!!私はこの子たちの家に運んでくる。貴方は——』

“ああ、僕は飛んださ。数キロ、数十キロ各地で動物を狩ったり、果実を獲ったり：：本当は君を無理矢理でも村から引き離そうとしたんだ。けど、何でだろうな。ほっとけないって思っちゃったんだ”

巨大な大鷹に化けた男が大量の食糧を運んできた。村人は二人に感謝を告げ涙を流している。

『：：私は何もできなかった。汝を待つことしかできなかった。あれ程、子供たちを救いたいなどと言っておきながら：：』

“違う、君がいたから：：”



『私は、無力だ……子供たちが、愛される未来など私などでは——』  
男は女を抱き寄せ言葉を紡ぐ。

「僕一人じゃあ、できなかつた……君がいたから僕は飛べたんだ」

“そうさ、君がいたから……君が願ったから……僕は——”  
場面が変わる。

村で暮らす二人……いや、少女たちを加えた四人が暮らしている。  
それは……わたしが経験したことない……いつか夢見た、そんな光景のようだ。

“君はこの子たちを自分の子供の様に接していたね。生憎僕には難しいことだった。僕にとっては子供も大人も、等しく同じ人間という個体に過ぎないんだ……でも——”

『お兄ちゃん、あのねこれあげる』

男に果実が渡される。困惑した表情で男は受け取った。

『えへへ、お姉ちゃんと妹とね一緒に探してきたんだあ。お姉ちゃんがね、「彼は果実を食べているときが一番笑顔なんだ」っていつてたから』

『えっ、いやその……貴方の好物を私は知らなかったから……果実を食べてる貴方の姿が浮かんで……い、嫌だったか?』

“それは何の変哲もないただの果実。特別でも何でもない、何処にでもある普通のもの……それでも”

男は渡された果実に齧り付く。黙ってただ齧り続ける。

「ごっくん……うん、美味しい……ありがとう、とっても美味しい！」

“凄く美味しかったんだ。なんでもないその果実が……特別に感じただ”

◇

景色が薄れていく。

——もう目覚めなくちゃ

## 桜と怪物 「反転」

セイバーは柳洞寺の廊下を駆け鬨の面を追う。この寺に入った段階でマスターである士郎と分断された。これ以上アサシンの相手をする暇はないと足に力を入れる。

迫るたび無数の短剣が放たれるがセイバーには通じない。

“キンツ キンツ”

火花が咲く。

ランサー同様、セイバーにも射的武器に対する耐性が付いている。ランサーが風切り音と敵の殺気から軌道を読むのに対し、セイバーは風切り音と自らの直感で軌道を読む。

「チツ——」

黒衣に忍ばせておいた短剣をすべて使い切つてしまい、アサシンは忌々しそうに声を上げる。しばらくの間、地を駆ける獣のように後退する。

廊下の突き当りに差しかかった時、アサシンはようやく足を止めた。

「… 観念したのかアサシン」

後を追うセイバーも停止する。

… しかしこれ以上踏み込んではいけないと直感が告げる。

——— これ以上あの常闇に近づくな

はやる気持ちを抑えてアサシンに向き直る。

「… ああ、観念したともセイバー。こちらは弾切れだ。こうなつてはとどめの一撃が下されると覚悟したのだが… はて？なぜ近寄らぬのかな」

「———」

セイバーは何も答えず剣の切っ先を相手に向ける。間合いは数メートル、一刀するには二の踏み込みを必要とする。剣士であるセイバーではどうしても踏み込む必要がある。

されど彼女には一撃のみ。間合いなどお構いなしに振える秘剣がある。

『風よ』

セイバーの剣に光がともる。否、本来の姿を垣間見せる。それと同時に彼女の周りに風が吹き荒れ始める。

「——ほう。まじないで刀身を隠していたというわけか。なるほど、その風圧ならばその場からでも私を討てる。ここで決めるというわけだな」

黒衣が沈む。こうなっては思惑も策略もないセイバーが近づかぬというなら、アサシンは近づいてセイバーを捉えるのみ。

「立場が逆になったなアサシン。この風王結界見事踏み込んでみせるか」

「ふっ、ひどい女だ。蝗の群れに飛び込めという。さりとしてこのままでは竜の咆哮が放たれる…。これは、進退窮まったか」

髑髏の仮面が闇に浮かぶ。

「さて。どう見てもこれで最後になろう。その前に一つ語らせてもらおうかセイバー。」

——お前は、一対一なら私に勝てると思っているだろうか？」

会話に乗じて離脱など許さない。セイバーの目は確実にアサシンを捉えている。

「だからこそ私をマスターから引き離れた。主を守るといふその判断は正しい」

剣は頂点。後は振り下ろすだけ。しかしアサシンは更に深く身を沈めた。

「だが、そこにはお前自身を守ることが含まれていたかな」

アサシンからの問い。

それに、

「——先を急ぐ。さらばだアサシン」

セイバーはその一刀をもって答えた。

『舞い踊れ!!』

旋風が放たれる。それに触れれば黒衣はずたずたに引き裂かれるであろう。渦を巻いて迫りくる死の断層。

その真空の波へ、

「キキキツキキキキ！」

歡喜の声を上げ、アサシンは突進した。

「なに!？」

風に乗るようはこちらに向かってくる。

“シユツ”

「ぐ…!」

首筋に迫る一撃。それをとっさに弾く、黒衣は彼女の真上をすり抜け背後に着地する。

同時に、

「——な」

先ほどから感じていた“不吉な気配”が彼女の足元を覆っていた。

「!?!?!——が あ ああああ あああああ!!」

泥のような汚濁が彼女の白銀の鎧を侵していく。振り払おうとするも体が蝕まれ身動きが取れない。

「——さて。運がなかったなセイバー」

「アサ、シン… 貴様、は…」

「ここにはよくない者が棲むと、お前は気づいていたはずなのだがな」  
「つ——、——ああ」

アサシンの声はもう聴こえない。

最早この影に取り込まれるのはあと数秒。この影はサーヴァントを飲むものだ。薄れゆく思考より、体がそれを拒否している。

「はああああああ!!」

なりふりなど構っていられるか。足を切り落としても脱出しなければならぬ。

「——そうはいかん。お前はここで終わりだ、セイバー」

敵は影だけではない。

「く——初め、から」

「そう、お前は一人… まあ本来はもう一ついる予定だったが、こちらは二つ。私はただ、お前の注意を引く囮に過ぎないのだ」

「つ——… つん… あ がっ…」

足元から腐っていく。ひざ下までの感覚がまるでない。

彼女の両足は、既がないものと等しかった。

「…さて、それでは苦しかりう。一思いに…その心臓、私が貰おう」

アサシンの右手に覆われていた布が、封印が解かれる。

「な——！」

奇形だった。そうとしか言い表せない。

なんとという長腕。先ほどまで拳と思われた先端こそが“肘”だったのだ。

折りたたまれていた腕はセイバーの心臓を捉えている。

セイバーの思考が凍る。

届く。

あの腕ならば届く。

確実に心臓を抉り出される。

『<sup>ザバー</sup>妄想…』

セイバーは覚悟を決めた。

奇形の腕が迫る。

『<sup>ニャ</sup>心音…』

腕がセイバーの心臓を捉える前に——

「っ…」

彼女は影に取り込まれることを選んだ。

腕が虚空を掴む。

「…ほう、自らそこに飛び込むことを選んだか。強情な女だ」

腕を再び折りたたむ。残されたのはアサシン一人のみ。

「キャスターは間に合わなかったようだな…まあ好都合というものの」

主はセイバーのマスターと戦闘を行っている。アサシンは自分の役割を果たすべく再び闇夜をかけた。

◇

深く、深く落ちていく。

ここはまるで深海のよう。何もなく、ただ深く。

「(ここは…：：：そうか私は)」

負けた。負けてしまった。

上を見上げる。

「(あれは…：：)」

光が見えた。

光…：：：そう光だ。自分がずっと求め続けていた…：

「聖杯、の…：：：そうだ私の、ずっと求めた！」

手を伸ばす。届かない、体が沈み続けている。

『…：：：やめておいた方がいい』

「何を言う。アレは私が求めていた光だ」

腕を動かす、必死に登る。あと少し、あと少しで…：！

背後から声が聞こえるが構うものか。

『アレは君が望んでいるものではない』

「っ——…：：：先程から一体何を…：：：っ！」

振り返った。

「あ、貴方は…：：：どう、して」

そこにいたのは

『…：：：どうしてって。そりゃあ君のためさ』

黒い鎧を纏った騎士。

円卓の騎士が一人“ギルベルト”であった。

「ギルっ…：：：なぜです!?! あなたも言っていたではないですか! あの国はどうあれ滅びると!」

騎士はただそこにいる。彼女を見つめている。

「どうせ滅びるならあんな終わり方ではなく…：：：穏やかな、眠りにつくような最後を私は——」

『…：：：だから、選定の儀をやり直す?』

「そうです…：：：私ではない、他の王なら——きつと!」

少女はただ願った。どうか安寧の終わりを。

『——で? それがうまくいかなかったらどうするんだい』

「えっ…：：：」

『仮に他のものが王になったとしよう。だが結末が変わらなかつたら

「?もつと惨いものになつたら?」

「それは... そんなはず」

『こんなはずじゃなかった... そうやってまた嘆くのかい? またやり直しを求めるとのかい?』

「違う... 違う! 私はただ!!」

否定するが... 彼女も最初から分かっていたのかもしれない。それでも認めたくなくて、もがいていたのかもしれない。

『それにねアルトリア。君の願いは、君と共に歩んだすべての人間を否定することになる。彼らが君に願ったものを投げ捨ててもいいのかい?』

「あ...」

沈んでいく。もうきつと戻つてこれない。

「私の、私の願い、は...」

手を伸ばす。誰も掴んでくれない。思い浮かんだのは民、自分についてきてくれた騎士たち。そして... 己のマスターの顔。

「(すまない シロ ウ——)」

薄れゆく意識が浮上することは二度となかった。

『おやすみ、アルトリア... お互い碌でもない物に縋ってしまったようだ』

騎士は悲しそうに目を伏せた。騎士としてここに召喚されていれば彼はきつと彼女のために——

だが、それはまた別の話だ。

気持ちを切り替え、もう一人の彼女と相対する。

『さて、おはようセイバー。気分はどうだい?』

その肌は死人のように白く、また冷酷な目つきをしている。

泥に汚染され、彼女の奥底に眠っていた側面が“反転”し非常に徹しきった騎士王のもう一つの顔。

「.....」

彼女は黙ったまま騎士を睨みつけている。

『おや、嫌われてしまったかな』

「その口を開くな。貴公に語ることなど何一つない」

『それは… いやはや、傷つくなあ』

黒いドレスに身を包みセイバーは霊体化していく。

空間に取り残された騎士も本来の姿に戻る。

『さてと… 僕も命令は守らなきやね？』

ひとりの少女の願いを叶えるため黒い怪物が動き出した。



## 桜と怪物 「妄執の果てに」

遠くで暴風の音が聞こえた後、鋭い痛みが左手に走った。

「え———？」

嫌な予感がする。

でもそんなはずはない。

止まった風。

でもこの左手の痛みは確かなもので

「セイバー…？」

『ふむ、どうやら片付いたようじゃな。お主もマスターなら判ろう？

己のサーヴアントが、敗北したことがな』

目の前の羽蟲の言っていることが分からない。

思考が止まる。殺気は相変わらず向けられているが、体が動かな

い。目の前の現実を受け入れられない。

『何を呆けておる。セイバーは死んだ。アサシンを侮ったのが運の尽

きよ…そんなことも判らぬのか衛宮の子よ？』

馬鹿なことを言うな。彼女が、セイバーが負けるはずない。

左手は痛い。確かに痛い。

だが令呪は消えていない。

今にも消えそうに、だんだん薄れていつているがセイバーとのつな

がりは確かにある。

「来てくれ…セイバー!!」

左手の痛みをかき消すように叫ぶ。

ありつたけの魔力を令呪に注ぎ込む。使い方が正しいのか分から

ない、だが今はそんなことどうでもいい。

ただ、この令呪がマスターの呼び声にこたえるものならば、今すぐ

ここにセイバーを——

「っ———！」

…反応はなかった。

令呪は確かに起動使用したが止まってしまった。

令呪に問題はない…あるとしたら、それに答えるはずのセイバー

が既に……

『……一瞬肝が冷えたわ。令呪と言えど失われた命をよみがえらすことなど不可能。さて、これでようやく理解したじやろうて。セイバーはどうに、アサシンによって死に絶えたわい』

「寝、言……」

「では終いにするか。遠坂の小娘であれば新たな器にするつもりじゃったが、お前は…… 蟲の養分ぐらいには役立つか』

「——言ってんじやねぞ、テメエ!!」

走った。

現実から目を背け、敵に向かって一直線に。

相手はたかが蟲一匹。

持っていた木刀を振りかざし——

「がっ——、っ——!!」

壁に叩きつけられた。腹を殴られたのか息ができない。

耳に聞こえたのは俺を嘲笑うかのように響く蟲の鳴き声。

『間に合ったかアサシン。では小僧の始末もお主に任せるとしよう。セイバー相手に比べれば楽な作業、儂はその横で見物でもしているでしょう』

闇の中に髑髏の面が浮かぶ。

その白い面が笑っている。

「——」

殺される。

動かない思考。

左手の痛み。

心臓の鼓動が早まる。

“ シュツ ”

「あっ……」

眉間と心臓、確実に息を止めるため放たれた凶器を、なすすべなく受け入れた。

……だが、いつまでたっても痛みは訪れない。

恐る恐る目を開ける。

「え——」

俺の目の前に伸ばされた手。

その手に刺さっているのは放たれた凶器。俺の命を奪おうとした短剣は、目の前に立つ一人の男によって防がれていた。

「——」

そんなことをする奴は一人しかいない。

目の前——俺を目の前の敵から守るように現れたのは

「キヤス、ター…？」

『ぬ…？』

アサシンと同じく黒衣に身を包んだサーヴァント。

間違いない。こいつは慎二のサーヴァント、キヤスターだ。

『おお、キヤスター。待っておつて——グギギギッ!!』

キヤスターが放った短剣により羽蟲が壁に縫い付けられる。

「それ、返すよ」

蟲の喚き声に骸骨は答える。

「キヤスター!?何を——ガハッ」

吹き飛ばされるアサシン。

それは一瞬だった。キヤスターはアサシンへと詰め寄り。勢いよく蹴り飛ばした。

「チィ——」

ダメージを負いながらもアサシンは反撃に出る。

雨の様に打ち出される短剣。無論、短剣は目で追えるものではない。

アサシンは跳ねまわり、壁にいたかと思えば天井に、床に、ありとあらゆる場所から短剣を放つ。

キヤスターには対処できない。

セイバーとの戦いでキヤスターの底は知れている。セイバーでさえ防ぎきれぬか、というアサシンの猛攻。セイバーに一撃で首を切り落とされたキヤスターに勝てる道理はない。

「——な」

異常に気づいたのは、既に優劣が決した後だった。

…当たっていない。

放たれた短剣は一本たりともキャスターには当たっていない。

「き、さま」

天井から声が聞こえる。

短剣が尽きたのか、苦し気に腹を抑えたアサシンが見下ろしている。

そこに瞬間移動したように背後にキャスターが迫る。

「まっ——」

容赦のないキャスターの一撃が叩き込まれる。床に叩きつけられるアサシン。

「——」

そこにいるのは一匹の化け物だった。

俺を助けたときとは違い、短剣を受け止める必要などなく、キャスターはその速さでアサシンの猛攻を躲した。

『アサシン!!何をやっておる…!裏切者など早々に片付けんか…!』

「分かっております。しかし…」

今のキャスターは以前のキャスターとは違う。

「(というか、キャスターなのに凄く殴るんだな…)」

その身体にまとう魔力も、敵を威圧する迫力もまるで別人のよう。

「キャスター、貴様、なぜ」

「……」

キャスターは何も答えない。

まるで猛獣が獲物に狙いを定めたかのように鋭い目つき。気づいた時にはもう遅い。

「なっ!?!」

キャスターの体から触手が伸び、アサシンに絡みつく。

「くっ——放せ!」

「ふふふっ、放せと言われて放すものか」

「ぬう——!?!」

伸ばした触手を掴み、あろうことかキャスターは、

「え——ええ——!?!」

アサシンを振り回し始めやがった!

「ガッ」

「ギギギッ」

「ゴッ」

「がああああ——」

アサシンは苦悶の声を上げる。

キャスターは楽しそうにアサシンをぶん回している。

まるで鉄球投げだ。触手から抜け出せないアサシンはなすすべもなくキャスターに振り回され、壁や天井に激突し、そのたびに腕や足はあらぬ方向へ曲がっていく。

「が、が、ガガガ——!」

「あはははははは」

怪力とか乱暴とかそういう次元じゃない。

楽しんでいる。

相手が苦悶の声を上げるのを、キャスターは楽しんでいるんだ。

「そうれ——!!」

キャスターは思う存分振り回した後、その遠心力を利用し手を放した。

無惨にもアサシンは頭から壁に投げ飛ばされ。

「…あ」

飛んでいく。

アサシンはごみの様に境内に落下し、血をまき散らしながら山門へ転がっていく。

「あ…うわあ」

これは…敵ながら同情する。

今ので消滅するほどサーヴァントはやわじやないと思うが、アレでは戦闘不能だろう。

「——」

突風が吹いた。

キャスターはアサシンを逃がさないつもりだ…ここでとどめを

刺すつもりらしい。

「……何だつてんだ一体」

俺は何かできるわけでもなく、「キュルキュル」と気味の悪い喚き声をあげている醜い魔術師と共にお堂に取り残されることしか出来なかった。

◇

「がっ——グギギギ」

必死に山門へ向かう。

もはや這うことしか出来ず、長い長い腕を伸ばしながら進む。

「逃げなければ……！」

主を見捨てるわけではない。

だが、相手が悪い。あれを相手にできるはずがなかったのだ。利用しようとした此方が間違いだった。

後ろは誰もいない。

追手は来ていない。

「（機を見てマスターを助けなければ……）」

アサシンのスキルとして“気配遮断”を所持している。これは自身の気配を消すことができる能力であり、完全に気配を断てれば発見は不可能となる。

「（今はとにかく、ここから——）」

アサシンの気配が消える。

もはや誰にも見つけることは出来ない。アサシンは逃げ切ることができる。

「——逃がさないよ」

いつの間にかソレは目の前にいた。

「なに？」

曰く、その怪物はギリシヤで最も足の速い狩人と競争した際に一度は追い抜かれたものの、己の力を出し切り再び追い付き最後には狩人を追い越したとされる。

それ故、彼は必ず追い付く。決して獲物を逃がさない。

キヤスターは笑みを浮かべ地を這う砂蟲に顔を近づけた。そして囁くように言った。

「じゃあ———いただきます」

“がぶっ”

咀嚼音が響く。

「ギツ———」

地面が赤く染まる。

痛い、痛い

腰から下の感覚がなくなったことを自覚する。

「ガッ———」があああああああああああああああああ!？」

振り向けば巨大な口を開けた竜がアサシンの肉を食っている。

既に食べ進められ、原型がわかるのは仮面と、奇形の腕のみ

その仮面も落ちる。白い髑髏の下の素顔が露わになる。

「そういえば君らはいつも仮面で隠していたから気になっていたんだけど……なあんだ、もとから顔なんてなかったんだ。

隠していたんじゃないかと、隠すことで顔があると思わせていた……

つまらないなあ、どうせならもつと派手な素顔を期待したんだけど」

「キヤ、スター———キサ———」

「顔もなくして、名前も捨てた癖に、それでも自己の確立を求めるなんて……君らは個人の名を持たないことで成立している英霊だろうに」

「わ、わたしの……ね、がいを———」

「ご苦労だった山の主よ……君は何物でもない暗殺者の一人。誰でもない誰かを脱却することは出来ないのさ」

「ギ、ギやあああああああああああああ———!」

……断末魔ごと竜に吞まれる。

そこに残ったのは髑髏の面だけだった。

◇

『ガッ———』

アサシンを仕留めお堂に戻ってきたキャスターは壁に縫い付けられていた蟲を掴み今にも握りつぶそうとしている。

『ま、待て。よもや儂を殺すなど考えておらぬだろうな!』  
「……………」

実際、間桐臓硯が人の形を保てるほど力があれば考えただろうが、キャスターにとって目の前の蟲はもはや用済みであった。

握った手の力が強まる。

『ま——待て、待て待て待て…！あのような出来損ないよりも儂の方が優れておる!!儂はただ体を再び持てればそれでよいのだ。

お前が勝者となり、すべてを手に入れたいのであれば儂も協力は惜しまん。貴様も叶えたい願ひがあるのだろうか!?!』

蟲が蠢く。

手の中の汚物に、男は冷徹に告げた。

「…ほごくな若造が。貴様などセイバーが敗退した時点で用済み、とく失せよ」

『——！待て、待つのだ、待つてくれ…！儂はこんなところで終わるわけにはいかない、終わるわけにはいかないのだ…!?!』

…俺はなにも動けない。この状況についていくことができない。

キャスターはうんざりしたように蟲に目を向け

「間引きぐい苦勞…さあ、もう消えてくれ」

『待つ——』

“ぐちやあ”

容赦なく握りつぶした。

「——」  
思わず目を背ける。蟲の体液があちこちに飛び散り死臭が鼻に残る。

キャスターは気持ち悪そうに手を拭うと、まるで俺が此処にいるのを忘れていたのか俺に目を向けると、薄気味の悪い笑みを浮かべ近づいてきた。

「つ——」

痛みをこらえ後ろに下がる。



殺される。

本能的にそう感じた。

「…そんなに怖がらなくても大丈夫。少しジツとしていなさい」  
「え——」

キヤスターは俺の頭に手を当て何かを唱え始めた。

思わず身構えてしまうが… なんだか体の痛みが引いていく。もしかして治療してくれているのか？

「こんなところか… よく頑張ったね。立てるかい？」

「あ、ああ」

「それならよかった… ここにはもう近寄らない方がいい。良くない者がうろついているからね、君も身をもって分かったらろう？」

アサシンを相手にしていた時のような狂気的な印象はどこへ行つたのやら。優しい声でしゃべってくるのであつけにとられてしまう。

「さて、家まで送ろう。敵は消えたとはいえ、夜道の一人歩きは危険だからね」

「…え」

さつきから予想外すぎる。

「分からないな。それはお前のマスターの命令か？」

「——いや、そういうのじゃあない。ただ、気まぐれさ、他意はないよ」

「…悪いけど、見送りはいらさない。俺たちは敵同士だ、そこまで世話になるわけにはいかない」

「強がりだな君。まだ戦うつもりなのかい？ セイバーを失った、魔術師でもない君が」

左手の痛みはもう消えていた。

セイバーはもういない。ここで戦い、ここで倒れた。

「セイ、バー…」

令呪が消えたということは、その魔術師がマスターの資格を失ったということ。

俺は負けたんだ。

セイバーを失い、マスターの資格をこの瞬間になくしたんだ。  
… それでも

「――俺は進まないといけない」  
キヤスターに決意を示した。

変な話だ、目の前のコイツに宣戦布告するみたいになっている。

「そう… なら、せいぜい道中気をつけるといい」

感情のない声で答えられた。どうやら俺に興味はないらしい。

キヤスターは先に山門を下っていく。

「… さんきゅ」

忘れていたことを口に出した。

「……」

それにキヤスターは答えることなく、背を向けたままこちらに手を振っている。そうして山門に消えていった。

一人、キヤスターの姿が見えなくなったあと歩き始める。キヤスターがどうして俺を助けてくれたのか考えるのは後回しだ。

… いなくなった彼女の面影を振り払うため、ゆつくりと帰路に就く。

◇

玄関の明かりが目につく

どうやら屋敷に着いてしまったらしい。こういう時に限って時間の経過は早い。

「ゴホッ…」

咳き込む口に手を当てると血がついている。キヤスターが痛みを和らげてくれたとはいえ、体の損傷は激しいらしい。

「そっか、戻ったんだよな、そりゃあ」

セイバーがいなくなったことで、今までのような異様な回復力はなくなっちゃったらしい。

これからは些細な傷でも致命傷になる。

「あっ… 先輩」

ふと、前を見ると… 寒いだろうに桜が外で出迎えてくれていた。もしかしたら、俺たちが家を出てから数時間の間、ずっと帰りを待つ

てくれていたのかもしれない。

「――ただいま桜」

痛む腹を抑えて玄関に向かう。

桜はそんな俺を見て

「…はい。おかえりなさい、先輩」

どこかホツとしたように、言葉を返してくるのだった。

## 短編 天使と怪物

「婦長また急患です!!この人両目を撃ちぬかれてるみたいで……他にも腕や、足、体中に銃弾が……!」

185年、クリミアでロシアとイギリス・フランス連合軍との戦争が勃発した。これが世に言うクリミア戦争である。次第に戦争は激化したものの世界はあまり関心を示さず月日は過ぎていった。

しかし、新聞社の特派員により負傷者の扱いが後方部隊でいかに悲惨な状況になっているのかを伝えられると世論は一変した。事態を多く見た大臣は一人の看護師に戦地への従軍を依頼した。それが彼の“フローレンス・ナイチンゲール”彼女は数十人のシスター、看護婦を連れ後方基地と病院のあるスクタリへと向かった。

「っ——!すぐドクターのところへ!……出血がひどい、直ぐにガーゼを持ってきなさい!!少しでも止血をしなければ……!」

最初は陸軍の軍医達に冷遇されたものの、それでも自分たちができる最大限の働きをし、ついには軍医局が折れることで本格的に従事することとなる。彼女の働きぶりは凄まじいものであった。彼女はこの悲惨な状況を国に報告し、包帯、薬などの物資、人材不足などろくに補給されない現状を訴えた。彼女の戦時レポートは深刻に受け止められ、彼女が慈善活動を通して旧知の仲の国防相を務めていた人物の後ろ盾もあり順調に改革は進んでいった。

「——誰か、そこに、いるの?……目がよく、見えなくて……僕は  
いったい」

「ミスター、しつかり。大丈夫必ずあなたを助けます」

ここには多くの負傷兵が運び込まれる。そのための特別職や、後のナースコール設備となるものを取り入れて昼夜問わず患者の元へ駆けつけることができるようにするなど当時としては非常に画期的なアイディアを発案していく。

「……僕のごことは放っておいてくれ。」

「いけません!!貴方を必ず助けてみせます。だから気をしつかり持ちなさい!」

「いやあ、そういうわけじゃないけど…ゴホッゴホッ… 我ながら… 酷い、な」

「もし!?もし!?… 早くドクターを!!一刻も早く!!」

ナイチンゲールは患者に包帯を巻くために八時間も跪き通し、兵士が負傷した足をノコギリで切断されている際には、その絶叫と切断音の只中においても患者の傍を離れなかったという。夜はランプを片手に、何百、何千という患者を見回ったという。

彼女の献身的な働きにより負傷兵の間では「天使」と讃えられることとなる。

◇

「… (何も見えない、真つ暗だ)」

目覚めると暗く閉ざされた視界。手足はしっかりと包帯で固定されておれ一つも動かせはしない。

「——気分はどうですかミスター」  
声が聞こえる。

「最悪だよ… 君が助けてくれたのかな。そりやどうも」

顔も、名前すら知らない人間に礼を言う。

「… 私はこちらです。貴方が向いているのは壁、私は貴方の右側にいます」

「おっと、すまない。なにせ見えなくてね」

「貴方の目は… 大丈夫。しっかりと治療すればまた見えるようになります。脳にまで銃弾が届いてなかったのが奇跡なんですから」

… 嘘だな。完全に潰されたんだ、まあじきに修復されるだろう  
しかし困ったな。

最近の傷の治りも悪いし、自分で治療することすらままならない。

「貴方は軍人ではない… なぜあのようなところに?」

どうやら戦場で血を流しているところを発見されたらしい… 余計なことをしてくれたものだ。そのまま放っておいてくれればいいものを。

「——死にたかったんだ。いい加減長く生き過ぎた」

「… 馬鹿を言わないで。まだ若いのに、生きることを諦めてはいけない」

「はははっ、そうか、そうみえるか…：… 君には分からないと思うけどもう限界なんだ」

彼女にはきつと戯言を言っているように見えているだろう。

神代はとつくに終わり、世界に満ちる神秘は薄れていく。もはや人の形を保つのすらやっとな、だというのに英雄がいる限り無理矢理生かされる。正義があるなら悪も当然とでもいうように。

「名も知らぬ君…：… どうか僕を殺してくれ」

自分で死ぬことは出来ない。

この体は所詮端末にすぎず殺されるまで死ぬことは出来ない。

「なあ、頼むよ。もう終わりに——ンガッ」

口を掴まれ、スプーンを咥えさせられる。

「貴方に必要なのは安らぎです。まずはお腹を満たしなさい…：… そう、しっかりと噛んで」

「んぐ…：…」

「ご飯を食べるのはいつぶりだっただろうか…：… なんだか懐かしい味だ。」

「…：… 貴方が言っていることはよくわかりません。ですが、貴方が死ぬことで悲しむ人がいるはずですよ。少なくともここに一人」

彼女の表情は分からない。

でもきつと…：… 優しい顔なんだろうな

「貴方を悪く思う人はここにはいません。だからどうか安静に。大丈夫、必ず救ってみせます」

「——」

渋々頷く。

まあ、急ぐ必要はない。隙を見て——

「それと、今後「死」という言葉を発することを禁止します…：… いえ、死ぬことを禁止します」

「えっ」

そんな…：… そこまでするかい普通？

「私の前で死ぬことは今後一切許しません。いいですね?.....返事は?」

「...はい」

凄味がある。逆らうことは許されない、そんな凄味が。

目に見えなくても、言葉に込められている凄味はすさまじいものだ。

「それは良かった。さあ口を開けて」

彼女には大人しく従った方がいいようだ... うん、これも美味しい。

「そういえば... 名前は? 君の名前」

「フローレンス。フローレンス・ナイチンゲールです。好きに呼びなさい」

それが彼女との出会いだった。

◇

「なあ、せめて手の包帯だけでも解いてくれないかい?」

「いけません。只でさえ千切れかけだったので、当分はそのままです」

「もう治ってるかも」

「は?」ギロリ

「...ごめんなさい」

目は見えないけど、その分彼女がしっかりと支えてくれた。毎晩、この病室を訪れては声をかけてくれたり「常に清潔に!!」なんて言って患者の身体を拭いてくれたりもしてくれる。

まあ働くこと働くことこの上ない。彼女の方が休息を必要としてるんじゃないかって思うくらいに。

「そういえばフローレンス。君ってば「白衣の天使」って呼ばれてるらしいじゃないか」

「...?」

不思議そうに首をかしげている。どうやら知らなかったらしい。

他の負傷者や看護師たちが口をそろえて言っていたものだから、てっきり認めているものかと。

「私が天使?… フフツ、天使ですって?」

「そんなにおかしいかい? 君の働きっぷりを聞けば誰もがそう思うと思うけど」

「いいえ、そのように大層な存在ではありません。私は美しい花を撒くのではなく、苦悩する人々のために戦っているだけなのですから」

◇

「ねえフローレンス。窓を開けてよ」

「… 最初から窓は開いていますよ」

「そうか… 悪いね、風の音すら聞こえなくて… 今日の月はどうだい?… 昨日は雨だったんだろう? 今日こそはって思ったんだけど」  
「今日は綺麗な満月です。ああ… 雲一つありません。綺麗な星空が見えますよ、やはり都会の方よりも見え方がいいですね。とても美しいです」

日課になっていった会話。

「貴方、月がお好きなのね。毎晩聞いてくるんですもの」

「ああ、もうずいぶん前になるけど… えっと、誰だったかな… 確か、ア、アト… あー駄目だ… 思い出せないけど、一緒にさ、見上げた気がするんだ。あの月を」

思い出は日に日に摩耗していく。

肉体と共に劣化していく。

「そう。大切な人がいるのね」

「うん… もう会えないかもしれないけど… 約束したんだ、帰るって」

それでも忘れられない物はある。

「懐かしいなあ… また見れるといいんだけど」

「… ええ。きつと見えるようになります」

「それに君の顔も拝まなきやいけない。なんたって「天使」と称されるくらい美人さんなんだろう?」

「… まったく。人をからかうのが好きね。いい加減怒りますよ」

「あははっ」

彼女の嘘は、とても優しいものだった。



◇

戦争は日々激化していった。

次第に前線は後退していき、ここスタタリにもロシア軍が迫つてくるとの電報が届いた。こうなれば病院はもう大騒ぎ。急いで重症人たちを運び出すことになる。

「急ぎなさい!! 歩けるものは自分自身で外へ、手の空いている者は薬と医療器具の運び出しを!!」

そんな中でも彼女は率先して動き、的確な指示を周りに出していた。

「ミスター! 後は貴方だけです! さあ、私の肩に手を回して」

最後まで彼女は僕を死なせないつもりだ。

「… 置いていてもいいのに」

「いいえ!! 絶対に貴方を死なせません!! 抵抗するなら骨を折つても連れていきます!!」

「… 分かった。でも肩を貸す必要はない。自分で歩けるから」

「なにをバカなことを——っ!」

数か月もゆつくりできたんだ。流石に修復出来る。

手を振り払い歩き出す。

「もうだいぶ前から治ってたんだ。さあ行こう、時間がない」

「——」

もうこの病棟に残っているのは僕らしかいない。

敵軍の声が迫ってくる。

「… そっちではありません。まだ目が見えてないでしょう、ほら手を」

手を握られる。

「… 二人じゃあ逃げきれないだろうな。」

「ねえ、本当はあの部屋に窓なんてなかったんだらう?」

「… 何のことですか」

「何も聞こえなかったなんてあるわけないだろう? 流石に気づくさ」

「… ミスター。今はそんなことよりも生きることを考えてください!」

僕の手を引き彼女は走り続ける。

銃声が迫ってくる。

「——君は優しい人だ。ここで死んではいけない」

「止まらないで!?何を考えているのですか貴方は！」

手を振り払いその場に立ち止まる。

「後は僕が足止めをしよう」

「貴方に何ができるといいます!目も見えない貴方が!!」

頭に巻かれた包帯を外す。

「っ!?——貴方、その、目は」

彼女の目に僕はどういう風に映ったんだろう。

でもよかった、別れの前にその顔を見れたんだから。

「なんだ、やっぱり天使じゃないか」

彼女に背を向け歩き出す。

「待ちなさい!!そちらに行つては——ああ!!」

天井を崩し退路を塞ぐ。

これで追つてこれまい。もつとも彼女は掘り起こそうとするだろうが、お人好しはどこにでもいるものだ。

「——婦長まだ残つていらしたのですか!?早くこちらにロシアの奴らもう目の前なんですから!!」

「放しなさい!!まだこの向こうに彼が!!」

「なに言ってるのですか、貴方はここで死んでいい人間じゃないのです!!」

「駄目よ!私の前であの人を——」

本当に優しい人間だ。

だからこそ恩を返さなければ

「さようならフローレンス。またどこかで」

◇

ロシア軍がスクタリの侵攻において戦果を得ることはなかった。突然兵士たちが後退していつてしまったからである。このことは多くの謎に包まれており、近年においてもその真相は明らかになっていない。

確かなことは、誰一人死傷者を出すことなくナイチンゲールによって病院から患者は避難できたということである。

（ f i n ）

◇

おまけ 「現代医学」

「なるほど、つばをつけて治す治療法… 効くかどうかはさておき興味深いですね」

今日もナイチンゲールは医学書を読み漁る。カルデアに召喚された彼女は手が足りてなかった医療部門の一員となり自分の時代との医療技術の進歩の差に驚かされる日々が続いている。

レイシフトの度にけがを負ってくるマスターやサーヴァントの治療を速やかに的確に行うため知識を身に着けることは当然でそうして

そうして今日も患者は訪れる。

「すまないフローレンス。絆創膏を貰えるかい？」

「おや、ミスター。どうされたのですか」

「いやあ、料理中に指を切っちゃって」ならすぐさま指を切り落とさ「そこまで酷くないよ！」

「ここで彼女は考えた。」

治療法を試せるチャンスでは？と

「分かりました。それでは手をこちらに」

「？… ああ。つけてくれるのかい？悪いね助かるよ」

「べっ」

“ びちやつ ”

「——え？」

「治療完了です。お大事に」

「… え？」

◇

「… 絆創膏は貰えたのかね？まったく… 調理中に指を切るなど未熟の証拠だな」

赤い外套のアーチャーが声をかける。しかし返事は返ってこずうなだれている。

「つば…」

「は？」

しばらくの間、食堂内で落ち込む彼の姿が見られたそうなの

「… 僕が一体何をしたっていうんだよフローレンス」

誤解は暫く解けなかった。ちなみに傷はちゃんと治った。

## 桜と怪物 幕間「返して」

「じゃあね、あんたもさっさと帰りなさいよ」

「うん、お疲れ様——！また飲もうね——！」

手を振り友人を見送る。お互い仕事が忙しく中々都合がつかず、久しぶりの飲み会だったこともあり、つい話が弾んでしまいもうこんな時間。

酔いも進み、何だかぼーつとしてしまう。

「ふう——さてと、わたしも行くとしますか」  
歩を進める。

カツカツ、カツカツ、とヒールの音が響く。

夜の街には珍しく人の影すらない。何だか独り占めをしてる気分になってしまう。

「…ん？」

そんなこんなで歩いていると、ふと、いつもと違うことをしたくなった。

いつもは歩かない路地裏の脇道。それを見つけた。

「そうだ…今日はこっちの道を行ってみよう」

暗く狭い小道。

「なんだか最近物騒なものね」

今朝のニユースを思い出す。

集団幻覚だとか行方不明者多発だとか、暗いニユースばかり。何だか街の雰囲気も引きずられているような、そんなふわふわとした考えを浮かべる。

カツカツ、カツカツ、足音だけが響く。

「(いつもの道の方が近いけど、あんまりにも誰もいなくて寂しいのよね)」

だからこの道を進む…？

誰もいなくて寂しい道を…？

カツ、カツ、カツ、カツ、カツ、カツカツカツ——

それってなんだか——おかしい？

「あれ…?」

やがて気づいてしまう。

自分の足音が早まってることに。

「はっ…はっ…はっ…」

自分が何かから逃げるように走っていることを。

「ちよっと…なによ…はっ…なんなのよ…!」

おかしい。だって後ろには誰もいない。

分からない。

だって見られてる。そこら中に目があるみたいに。

きつと迫ってくる。何かが、影が、黒い黒い恐ろしいもの。

「早く帰らなきゃ。ここには駄目。安全で安全な早く早く」

走り続けた。

やがて開けた場所にでる。

「あ…れ…?」

そこは人がにぎわう街中… などではなく、人気のない木々がにぎわう広場。

十年前の火災後にできた鎮魂の広場。昼間ならまだしも夜は近づ

きたくない曰く付きの場所。

「おかしいな…わたしなんでこんなところに…?」

何だか笑えてくる。

乾いた笑いが口からこぼれ始めた。

「あはっ、なにしてるんだろ、あはははははは…」

黒い影が辺り一帯を暗く染め始める。

もう逃げられない。

「あははっ、アハハハハハハハ、は、あははははははハハハハハハ——」

「——」

“ シュツ ”

黒い影が迫り、切り取り始める。

幸いなことに痛みはなかった。一瞬で切り取られたのだから。

「あへえ…? わた、わた、しの…腕、どこ?…あはは、は、はは

は——」

現実を受け入れられず、もうない腕を探すように彷徨った。

“ シュツ・・・パクツ”

「あがつ——」

地面に倒れ伏す。

立てない。立てない。

足に力が入らない。足がまるでなくなったみたい・・・？

『——ここら。食べるならお行儀良くしてもらわないと。急にいなくなつた困る』

誰か来た。

助けを求める声を出す。

でもそれは人の形をしてなくて・・・

『・・・おや？』

その素顔を見たときの記憶が最後。

テレビの電源が落ちるように意識を失った。

◇

『おや、もうお腹いっぱいかい？』

ノイズが走るように黒い影は薄れていく。腹が満たされればしばらくは大人しくなる。まるで赤ん坊のような存在だ。

『・・・段々と自我を持ち始めたな。そろそろ取り込まれるのも時間の問題か・・・ん？』

考えに耽っていると、目の前に女の足を差し出される。

これじゃ、餌付けされてるのはどちらか分からないな。

『ああ、くれるのかい？そりやどうも』

・・・ どうやら個人の認識程度ならできているらしい。

何はともあれ新鮮なうちに食べる方がいいだろう。

「まったく。こうでもしないと人の形を保てないとはね」

肉を喰らい、魔力を満たす。触手の化け物から人に近づける。

・・・ 無理矢理に割り込んだつければ高い代償だ。サーヴァントであればここまで苦労しないだろうに。

「ここまで生に縋らないといけないなんて、我ながら馬鹿らしい」  
聖杯などどうでもいい。あんな偽物の遺物、目にするのもはばかる

というもの。

ようは利用するだけだ。

偽物とはいえ、純粋な魔力であることには変わりない。

「さて……まだ息があるのか……君は運がいい」

食べ残しが出たときは毎回こうしてる。残り物は利用してこそだ。

切断された四肢に肉片を埋め込む。次第に馴染んでいくだろう。

「ふむ、だいぶ上達したな。元通り……というわけではないけど誤魔化しは効く」

あまりここに留まるのはよくない。

あの王の庭でこのようなことをすれば打ち首確定。まだやり合うわけにはいかない。

あれを倒すなら真つ向勝負をしてはいけない。

「せめてもの償いだ。目に付きやすいところまで送ろう……フフツ、君はどんな子になるのかな？」

街は確実に染まっていく。

最後の夜、その時を待ち侘びるように。

◇

「おーい、アンタ大丈夫か？」

体を揺さぶられる。

「わた、わたし、わたしの……あははっ」

「……なんだなんだどうしたんだ？」

「いやよ、この姉ちゃん酔っぱらってるみたいだよ……おいおい立てるか？」

たてるわけない、うでも、あしも

「ないの、ないのよおおおおお」

「はあ!?……何がなくてんだよ」

「うでえ、あじも、ないの!!ないのよおおお!!」

ないのないのないのないのないのないのないのないのないの  
ないのないのないのないのないのないのないの  
ないの——

「……おいおい。ちよつとヤバいんじゃないか。薬でもやってると



か」

「警察… いや救急か？」

「最近こういうの多いよな… 怪しい薬でも出回ってるんだろ」

女を囲む人々。皆、怪訝そうにそれを見ている。

ないと叫ぶ女が求めるその手足はしつかりとついているのに。

それでも女は叫ぶ。失った手足を探すように。

「ない… ないの… ——わたしの… 返してよおおおおおおお  
お!!」

## 桜と怪物 「覚悟」

「じゃあ、ジツとしててくださいね」

「ああ… イテテ」

「あ、すいません。沁みちゃいますよね」

背中に塗りつけられた消毒液の鋭い一撃。

昔から苦手だ。こう、まるで肌を焼かれているような痛み、傷を癒してはるはずなのにまるで逆な行為。

必要な痛みというのは分かるが、もう少し手加減をしてもらいたい。

「もう、大丈夫。うん、大丈夫。」

「ダメですよ！背中一面真っ赤なんですから、ちゃんと消毒しないとイケません！それに痛いのは当たり前です。こんな大けがして帰ってきたんですから、少しは我慢してください」

… 容赦ないのは、藤ねえに似たのかもな。

「先輩。他に痛むところはありますか？」

「いや、怪我したのは腹と背中だけだ。他は何ともない」

「そうですか。なら、後はガーゼとテープリングをしておきますね」

テキパキと救急箱を扱う桜。

「——はあ」

さて。

この傷は桜には隠すつもりだった…。のだが早々にばれてしまった。玄関を一步進んだ瞬間、歩き方に違和感を覚えたのだろう。怪訝な顔で問い詰められた結果、自白させられ、こうして手当てを受けている。

最初、傷を見せたときの桜の慌てぶりは凄かった。腹と背中の怪我がそれほど酷かったのもあると思うが。

『せ、せせ先輩。その、服、脱いでください』

… その、頑張ってる桜を止めるのは悪いし、背中は自分で手当てできない。そんなこんなでシャツを脱いで、桜に背中を預けたわけである

「お疲れ様でした先輩」

まあ、それも数分前の話。丁寧な桜の手当ては終わった。

「ん、ありがとう桜」

……腹の打ち身はどうしようもないが、背中への傷はだいぶ楽になった。今日はうつぶせで寝れば、明日にはもっと良くなってるはずだ。

「悪いな桜。こんな夜中に起こしちゃって」

「え……いえ。わたしが勝手にしてたことですから。その、えつと……」

何か言いたげに俯く桜。

「桜？何かあったのか？」

「いえ、その……先輩、セイバーさんは帰られたんですか？」

鼓動が早まる。

“ 帰られたんですか？ ”

今でも『もしかしたら』という淡い願いを抱いている。でも、いざ自分以外の人間に言われると、その願いは打ち砕かれた。

「——ああ、急な話だけど、あいつは帰った。もう……ここには戻ってこない」

呼吸を整え、言葉を絞り出した。

それは当然の疑問だった。たった数時間前までここで一緒に飯食ってた奴が急にいなくなるなんてことあるはずない。何かあったって思う。

だから、平然と答えなくちゃいけない。俺が誰よりも落ち着いて、なんでもないかのように、既に決まっていたかのように振舞わくちゃいけない。

「セイバーは最後まで桜の事言ってたよ。ははっ、桜は思い詰めるタイプだから、もつとこう、気楽にいけってさ」

「そう、ですか……せめて最後までくらい挨拶したかったな」

—— そうだな、と頷くことはしなかった。

別れを言うことなく、その姿を見ることなくセイバーは姿を消した。

たった数日だけの関係。たった数日の相棒。たった数日……俺の剣でいてくれた彼女に俺は何をもつて答えるべきなのか。

「……でもよかった。あの人が来てから、先輩怪我をしてばかりでしたもん。これで今まで通りですね、先輩」

「……え？」

「そうですよ、何をしてたか聞きませんけど先輩はきつとセイバーさんの為に出歩いていたんでしょ？」

けど、そのセイバーさんは帰ってしまったんですから、先輩が危ない目に合うことはもうないじゃないですか」

駄目だ、それは出来ない。

心配してくれる桜には悪いが、セイバーのためにも今ここでやめるわけにはいかない。

「いや。セイバーがいなくなっても、夜に出歩くのは続ける」  
「で、でも」

「……その、セイバーに付き合ってたんじゃないかって、俺がセイバーをつき合わせていたんだ。だから悪い、これからも続けると思う」

腰を上げる。

……ようやく緊張も解けたんだろう。急激に眠気が襲ってくる。

「え——先、輩」

「おやすみ桜。明日からもっと家を留守にするけど、桜は今まで通りここを使ってくれ。今日みたいに玄関ですつと待つってのは無しだぞ」

「……はい。おやすみなさい先輩」

布団に横になる。ひと眠り着く前に闇をにらんだ。

「」

セイバーは何に破れたのか、自分は何と戦うべきなのか。覚悟を決めなければならぬ。

「——俺が戦うべき相手」

あの影は当然の事……だがもう一人、それが分からない。

セイバーはあいつを警戒していた。今回は俺を助けてくれたが、次に会ったときは多分……

もうセイバーはいない。傷をいやしてくれる奇跡もなければ、武器になるのは半人前の魔術だけ。あれらに立ち向かうのは自殺行為だと理解している。

手は震えている。

だけど、二度とあの惨状を繰り返してはならない。戦いを止めな  
きやいけない。

…だから。震えるのはこの夜で最後だ。

もういない彼女に宣言するようにこぶしを突き上げた。彼女に胸  
を張れるように強くならなくてはいけないのだから――

◇

部屋に戻ってくる。

少女は重い足取りでベットまで歩き、とすん、と力なく腰を下ろし  
た。

「先輩… まだ」

でもよかった。もう突然現れた金髪の少女は帰ってこない。邪魔  
な蟲はもういない。

「…」

そんなことはもうどうでもいい。彼は命令を果たしてくれた…  
少年が怪我していたのは少し許せないが。無事であるならそれでい  
い。

“衛宮士郎”が帰ってきてくれる。それが少女にとって何よりの  
喜びなのだ。

「… あれ？… 少し寒い… 今日は冷えるのかな」

寒気を覚え額に手を当てる。

… 熱い。熱い、燃えるように体は熱を帯び、気をしっかり持って  
ないと倒れてしまいそう。

軽い風邪だ。

何しろ少年たちが外に出た後から数時間、玄関前で待ち続けていた  
のだ。体調を崩すのは当然である。怠い体を起こし電気を消す。

「… あっ… ん… ふ――」

少年の傷跡を思い返す。

… 何かに齧られたような背中への傷。

… 重い鈍器で叩かれ、どす黒く腫れたお腹の痣。

それを思い返すだけで体の体温が上がってしまう。それが性的高揚ではなく憎しみによるものだ。少女は気づかないふりをした。

「ふふふっ… でも、もういない…」

… そう、

誰かは知らないが、彼をあそこまで傷つけたのは許せない。だから食べられた、だから殺された。

嫌いとか憎いとか、そんなのどうでもいい。彼に手を出したのが許せない。

あの人は大切な人、自分とは違う存在。だから、それを傷つける者は、誰であろうと許さない。

「あ——ん… だめ、だめな、のに——」

少年に対する思い、罪悪感が少女を覆いつくす。傷ついた少年、血の跡、大きな背中。

もう帰ってこない女。奪い返した事実。バカみたいな嘘。

「… あ、んあ… !ごめんなさい… あっ… せんぱい、ごめんなさい… !」

必死に自分を慰める。

… でも足りない。戻ってきたことは嬉しい。それだけでいいはずなのに。

傍にいてほしい。

それは強欲な願いなんだろう。言葉にしてはいけない、叶えられない、だからこそ少女の思いは悪化していく。

「… ん… あ… はあ… あ——」

終わった後はいつも自己嫌悪に陥る。

「どうすれば… このままじゃあもつと大きなけがしちゃう」

少女に止めるすべなどない。もとより解決しようがない問題なのだ。このまま夜が明けるまで考えたところで、少年を止めることは出来ない。

けれど

「——そっか。外に出さなければいいんだ」

安心したように、ごく単純な答えに少女はたどり着いた。

「うん。歩けなくなるぐらいの怪我をしちゃえば、もう危ない目に遭うことはないですよね、先輩?」

それを否定するものはいなかった。

◇

ここは石の匂いがする部屋だった。ランプの灯は男の背中を照らし、その手元に置かれた大量の羊皮紙を浮き彫りにする。

柳洞寺の破壊に始まり、増え続ける行方不明者、魔術の行使による精神異常者の多発、朝から晩まで行われる作業に終わりは見えない。

「——教会への報告書とやらか。お前も忙しい男だな言峰」

声は気配もなく、背後からかけられた。

それに反応することなく、椅子に腰を掛ける男：：言峰綺麗礼は次の書類に取り掛かる。

「ほう、例の篡奪者についてか。どれ、被害者は既に三十七人。うち死亡者は八名、行方不明者二十五名ときたか。監督役としてこれは多い方なのか?」

金色の男は机に置かれていた報告書を取り、興味深そうに読み進める。

「——そうだな。これほど大規模な怪奇事件は私も初めてだ：：しかし前例がないわけでもない。お前は覚えてないかもしれないが、さきの第四次において召喚されたキャスターにより子供の誘拐が発生している：：もつとも今回は夜を出歩く大人や浮浪者たちが標的のようだがね」

被害者には子供は含まれていない。それを幸運と見るべきか否かは定かではないが：：見境なしというわけではないようだ。少なくとも今は。

「この程度に留まるなら問題はない。どちらの教会も事態の後処理は承知の上だ。だが——」

犠牲者は今も増え続けている。

「それも今のペースなら、か… ふん、堕ちるところまで堕ちたものだ。ここが私の庭だと知りながら愚行を犯すとは大きく出たものよ」

「まるでアレの正体を知っている風な口を利くのだな」

「ふっ、さてな… だが、このまま放っておけばこの街は廃墟になるぞ」

「… 際限を知らぬというのか？」

「かつての奴であればそこまでは至らぬであろうがな」

突如現れた謎の黒い影と乱入者。今はまだ小規模であり誤魔化しはいくらでも効く。だが、その量は日に日に増え続けている。数日前から始まった異常ともいえる捕食行為、いずれは誰一人として夜を超えられぬほど大規模のものになるのは目に見えている。

「私は間桐のご老体が裏で糸を引いていると読んでいたが… 既にサーヴァント共々喰われたとは」

「はっ、あの手の輩にはふさわしい末路よ」

愉快そうな口調とは裏腹に、彼の表情は怒りを帯びていた。

「だが、我とておめおめと街の人間が喰われるのは性に合わぬ」

「… 驚いたな。どういう風の吹き回しだギルガメッシュ。己以外は何もいらぬと豪語するお前にそこまで言わせるほどの存在なのか、アレはっ。」

「我は我以外の者が人を殺めることを良しとせん。人が人を殺せばつまらぬ罪罰で身を滅ぼそう… その手の苦しみは見るに堪えん、つまらぬものよ」

「アレが人だど？」

「ああ、そうだとも。奴はその様に作られた物であり、正体はその雑種と何ら変わらぬ」

言峰にとつては、驚きの連続だった。乱入者の正体は当然の事、この自分以外なにもいらぬという男が、街の人間の安否を気遣うとは。「ならばどうする」

「なに、奴が何を願おうとこの我が裁定しよう。この場においては我が正義、奴が悪。この構図は何千年前から変わっておらん」

「… やはりお前は英霊だな。汚染されようと根は正気のままか」



「フハハハハハ！何をいまさら言うか。

だが… まだ早い、時が満ちるまでせいぜい我を楽しませてみよ

———なあ、モンスターよ」

黄金の王は笑う。好敵手と再び相まみえること喜ぶように。

それが例え期待に添わぬとしても、過去の過ちをただすために——

## 桜と怪物 「正義の味方」

「う… ——— つ、あいてててて」

痛みで目を覚ます。

やはり一晩寝たぐらいでは快復とはもういかないようだ。でも背中  
中の痛みはほぼ痛くなくなった。腹は動くど痛むけど我慢すればど  
うってことないレベルだ。

「————— やべっ、もう七時過ぎてる」

セイバーを失った俺には学校に行く余裕なんかない。けど今日だ  
けはどうしても外せない用事がある。

服を着替え居間に向かう。

台所からは朝飯を作るいい匂いが漂っており、どうやら一足早く起  
きた桜が調理しているようだ。

「おはよう桜。悪い寝過ぎしちゃった。」

「おはようございませ先輩。珍しいですね」

「う… 面目ない。なんか気が付いたら朝だった。」

「怪我してるんだから仕方ないですよ」

そう言ってくれるとありがたいが、桜に任せきりっていうわけには  
いかない。とりあえず寝ぼけた頭をはつきりさせないとな。

「すまんちよつと顔洗ってくる。すぐ戻るから—————」

「いえいえ！どうぞのんびり洗ってきてください！今朝は私一人で準  
備しますから、お味噌汁期待してくださいね！今日は自信作なんで  
す！」

ん…？

桜は実に元気だ… と言えば聞こえはいいが。なんか変だな？や  
けにハイテンションっていうかから回っているっていうか。まあ桜  
がそこまで言うならお言葉に甘えて…

そう思い洗面所に向かおうとしたとき

「あ…」

何かが倒れる音がした。それが人の倒れた音だと気が付くのは一  
瞬の事だった。

「桜——!?!」

すぐさま台所へ駆け寄る。床に倒れこんでいたのか桜はけだるげな仕草でゆっくりと起き上がる。

「あれ、どうかしましたか?先輩…」

赤く染まった頬、少し荒い息。もしかして桜の奴…!

「ッ…」

桜に駆け寄り肩を掴む。熱い…!額を触らずともわかる体温の高さ。なんだってこんな熱で立ってられたんだ!

乱れた息と汗ばんだ制服が、桜の状態を物語っていた。

「桜、お前すごい熱だぞ!」

「え?熱って…わたし、ですか?」

まさか自分で気づいてないのか?だからこんな無茶してたのか…とにかくすぐ休ませないと。

ふらつく桜の手を引き客間へ向かう。その手はいつかと同じように熱かった。

「……っ」

学校には欠席届を出して、朝食も消化しやすなお粥を作って…そうだ。藤村のじいさんをお願いして家政婦さんに来てもらおう。

「あ、あの…先輩?どこに行くんですか。学校に行く前にちゃんと朝ご飯食べないと」

桜はまだ状況が分かってない。

朝のテンションの高さは熱でぼーっとしていたものだったんだろう。

「馬鹿、学校は休みだ。俺が連絡を入れておくから熱が下がるまで部屋で安静にしてろ」

「えっ…学校を休むって、わたしがですか?」

「そうだよ。桜以外に誰がいるんだ。俺は…昨日より怪我の具合はいいかならな、休む必要はないだろ」

まあ、こっちだって無理して学校に行く必要はない。セイバーがない今、俺には学校に行く余裕なんかないからだ。

それでも、今日だけは行かなきゃならない、

昨夜見たことを遠坂に報せるまでは、家に引きこもってるわけには  
いかない。

「とにかく、今日は休め。いつも頑張ってるんだから、たまには休んで  
もいいだろ」

「あ……い、いいえ、わたし本当に平気なんです……！だからご飯を食  
べて、学校に行きましょう。そうすればこんな熱、直ぐによくなりま  
すから……」

「ばか、そんなことあるかよ。なんか言ってること滅茶苦茶だぞ桜」

「でも……わたし、わたしは学校に行かないと……」

「なんだって、そんなに学校に行きたがるんだよ。大丈夫だ桜、俺も用  
が済んだらすぐ帰るから」

「……」

ようやく観念したのか、桜はこちらに身を任せてきた。支えた体  
は、異様なまでに重い。桜にはもう立つ力がないのか、こんなにも身  
体が重くなったから立てなくなったのか。

どちらにせよ、桜は一人で歩けないほど熱があつて、元気だと思っ  
ているのは本人だけということだ。

客間に着いたとき、桜は既に眠っていた。

けど、眠ってるって言つても意識は半分ある状態だろう。呼吸は苦  
し気で、一度だけ、俺の手をしっかりと握ってきた。

「――」

取り敢えずベットに寝かせ、朝食のおかゆを用意する。

「よかった、眠れたみたいだな」

再び客間に戻つてくると、呼吸は落ち着いておりこの分なら大丈夫  
だろう。一人で歩けるぐらい回復したら、一緒に病院にでも行って風  
邪薬でも処方してもらおう。

「……じゃあな。学校行ってくる」

ベットから離れてドアに向かう。

――と

「……先輩と一緒に……学校に行きたいんです」

小さな声が聞こえた。

「桜？」

振り返る。桜は眠ったまま、目を閉じている。

「なんだ… うわ言かな」

今度こそドアを閉める。

さあ、俺にはやるべきことがまだある。玄関を開け、学校に向かって歩き出した。

「…だって。わたしが、先輩を守らないと」

◇

カチ、コチ、カチ、コチ、カチ…

ー熱い

カチ、コチ、カチ、コチ、カチ…

ー熱い

時計の音がひどく耳障り。

カチ、トク、カチ、トク…

いや、これは

ドクン、ドクン、ドクン、ドクン…

心臓の音のようだ。

ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、ドクンー

ー熱い

熱源はわたし以外の何か。血管と血管の間、神経と筋肉の隙間。

悲鳴を上げるように、中から飛び出そうとするように。必死に出口を探して、エンジンを全開にして。

「時計の音… うるさいなあ」

ドクン… 自分の声はよく聞こえない… ドクン… 聞こえるのは喧しい時計の音と苦しい心臓の音… ドクン

ずっと悲鳴をあげている体の中で蠢く赤子。奇怪で不快、異常な発熱、めまいと耳鳴り。苦しいのはきつと自分だけではない。体の中に這っているモノたちも大変なのだ。

それを考えるとなんだか愛らしい気がして、その感覚を憎むことは出来なかった。

虫に比べれば随分と愛らしいモノだから。

「…あれ…：なんかおかしいです、先輩、」

でも先輩が帰って来るまでに落ち着かせないとまた心配をかけてしまう。体の中の蠢きを鎮ませないといけない。

そうして下着に手を伸ばす。大丈夫度もしてきたことだ。

「あ…：んっ…：どうして?…：やだ…：なん、で…：」

いくら慰めても体は落ち着かない。今までできたことが出来ない。何が足りないのか、何が必要なのか、何が変わってしまったのか。それを考えようとしても、時計の針が邪魔して思考は纏まらない。

「ガラン、ガラン、ガラン、ガラン、ガラン…：」

「…あれ?…：この、音」

それが時計の音ではなく、衛宮の屋敷自体が侵入者を知らせる警告音だと気がついた時。

もう手遅れだと気づいてしまった。

「なんだ、衛宮はいないのか。そりゃ都合がいい」

「兄、さん」

「へえ?なんだ衛宮がいないと思ったたら1人で盛ってたのか。大方、キヤスターを勝手に使いすぎた反動かな?」

男は土足で居間にあがり、壁にもたれかかっている少女に歩み寄った。

「あ…：」

サクラは逃げようとするも力が入らないようで…：まあ、諦めていると言った方が正しいか。ここで逃げたところで、どうせ自分には逃げきれないと考えているのだろう。

「おまま…：この時間は終わりだよ、桜。お前言ったよな、僕のためになんでもするって」

引き攣った笑いで桜を見下ろす慎二。

「や…：嫌です、わたし…：!」

その返事が気に食わなかったのかシンジはサクラの首を手荒く絞め愉悅の笑みを浮かべた。見てて面白いものではない、かといって止めに入るほど親切でもない。

「そう逆らうなよ桜。思わず殺したくなつちやうじやないか。お前はさ、ただ僕のいうことを聞いとけばいいんだから」

「やだー！違う、約束が違う兄さん…！先輩には、もう手出ししないって言ったのに…！」

髪を振り乱して抗うサクラを、シンジは足で蹴り込む。鈍い音が響き、無造作に腹を蹴られたサクラは痛みでうずくまる。

「うーうーぐ…うえ…」

うずくまるサクラから嗚咽があがる。

「優しいな僕は。爺さんの遺品の薬もあるつてのに、使わないでやってんだから」

「あ…あえつ、ううー」

咳き込むサクラを抱き寄せ、もう一度首を掴んだ。

「安心しろ、約束は守るさ。あいつは殺さないし、今までのことは黙ってやる。ただちよつと、あいつには痛い目に会ってもらわないと気が済まないんだよ、こつちは」

「ーっ」

サクラの頬に触れるほど口を近づけ、愉しげに笑うシンジ。

結局、サクラは諦めてしまう。『どうあつてもこうなるのだと、もう何度も思い知つてることなんだ』とそれが当然と受け入れる。

それがこの兄妹の関係だと言つてしまえばそれで終わりだが…なぜだか胸の奥から沸々と湧き上がるものがあることに気づいた。これは一体なんなんだろうか。

「そうそう、いい子だ桜。それじゃあ先に行つていようぜ、ここは衛宮の陣地だしな、あそぶなら僕の用意した陣地じゃないと」

とはいえ、もうすぐだ。結果はどうなろうとアーチャーを誘き寄せることができると問題はないのだから。誰がどうなろうと…僕には関係ない。

慎二は乱暴に桜を突き放し、後ろに控えていた男に声をかける。

「キヤスター桜を連れて来い」

倒れ伏した少女は顔を上げる。

「ーキヤス、ター」

「ごめんね、シンジがどうしても我慢できないっていうからさ」  
そこには黒い衣服のサーヴァントがいた。  
「悪いけど君たちには付き合ってもらおうよ」

◇

もつと早く帰るべきだった。もつと真剣に考えるべきだった。こうなることを恐れて桜をうちに預かったんじゃないのか!?

『もしもし? やつと帰って来たの衛宮? 桜は返して貰ったぜ。あいつは僕のモノなんだからいつまでも他人の家に置いとけないよ』

今はそんな後悔をしてる暇なんか無い。冷静に、冷静に、冷静になつて対処を考えなくちゃいけない。

『ははーそうカッカすんなつて。何? 桜を取られて悔しいわけ?』

だというのに、頭の中は怒りで埋め尽くされちつとも働きやしない。

『いい加減カタをつけようぜ衛宮。お前だつてこの間の一件で済んだなんて思つてないよな?』

桜は無関係だとキャスターは言っていた。そんな言葉をどうして信じたのか。桜が間桐の、魔術師の家系の間桐である限り無関係ってことはない。なのにどうして、どうしてそんな

『違う!! あれはサーヴァントの差だお前の力じゃない! 今だつてセイバーが出てこなければお前に僕が負けるはずがないんだよ!!』

――俺にだけ都合がいい話を鵜呑みにした!

『場所は学校だ... くれぐれも一人で来いよ? ここにはキャスターが境界を張り直したからな、セイバーを連れて来ればすぐに分かる。まあ... お前が桜の前でそんな卑怯な真似をするとは思つてないんだけどね』

慎二の煽り文句に付き合う理由はもうない。

もはや学友同士の喧嘩では済まされ無い。俺は今度こそマスターとしてあいつと闘う。

「一応聞いておく、お前はマスターか、それとも桜の兄貴か」

『ハッ、冗談! なんて僕がこんなグズの兄貴なわけさ。ま、お前を誘き寄せるのには役に立ったけどさ』



なんでだよ慎二… お前はそんな奴じゃなかっただろ？どこで道を誤ちまったんだ…

「… 分かった。これで心置きなくお前をぶん殴れる」

『ああ、来いよ衛宮。まあ戦いになればの話だけどね』ガチャ、ツーツー

もう時間はない、すぐさま学校へ向かわなければ。

「ちよ、ちよつと待つて！まさか本当に一人で行くつもりなのアンタ!?」

… ああ。そういえば遠坂に着いて来てもらってたんだっけ。桜の様子を見てもらうつもりだったけど今はそんな場合じゃなくなつた。

「そういう指定だ。悪いが話なら後にしてくれ」

「っ… それはこっちのセリフよ！このまま行つても殺されるだけでしょ！… まずは落ち着いて作戦を立てましょう、目の前であんたが殺されるところみちや桜もたまったもんじゃないわよ」

確かに、それは困る。俺が死んで桜を助けられないのは最悪のパターンだ。

「… そうか。桜の前で殺すかな慎二」

「それは… 分からないけど。わざわざ人質として桜を使うつてんだから可能性はあるわね… 大丈夫、衛宮くん？貴方冷静そうに見えるけど内心は逆上してる？」

逆上してるかって？

ああ、してるとも。もう慎二を殴りつけることで頭の中はいっぱいだ。

「してる。もうそれしか考えられない。今まで兄妹のことだつて口出ししなかった自分にも…！」

それにあいつは言った。桜の家族として言うてはならないことを言った

「慎二は桜の兄貴じゃないつて言ったんだ。そんな奴に桜を奪われた。だから奪い返してくる。遠坂は手出ししないでくれ」

「ちよつと待ちなさいつてば!!貴方一人じゃ助けられるものも助けら

れないからわたしと組むって言ったんじゃないの!？」

「—————」

足を止める。

その言葉は、沸騰していた頭に冷水をぶっかけてくれた。そうだ、セイバーがいない俺にはできることは少ない。だから遠坂に協力を申し出たんだ。

「すまん。けど桜が危ない。一人じゃ自殺行為だって分かってるけど、こうするしか手はない」

それも遠坂には百も承知なんだろう。苦虫を潰したような顔で答えた。

「…でしようね。慎二が桜をおさえている以上、わたしもおいそれと手は貸せない。けど衛宮くん。貴方がなんとかして慎二から桜を取り返してくれたら…後はわたしがなんとかする」

「—————なんとかするって、慎二をか？」

「慎二じゃなくてキャスターよ。サーヴァントの相手はサーヴァントがするものでしょう…貴方の話を聞く限りアーチャーでも相手できそうだし。とにかく桜を助けてあげて、そうしたらたとえ一秒後に殺されるって状況でも、絶対に貴方を助けるから」

でも、それは確実に遠坂に負担をかけることだろう。俺はそれを承知で力を借りて、遠坂もそれを守ろうとしている。

「どうしてそこまで…」

「わたしを勝たせてくれるんでしょ？なら今死なれても困るのよ」

それで、怒りに走っていた心に覚悟が入った。

「分かった。後のフォローは任せる」

「ええ。けどそれには貴方がちゃんと無事で、きちんと桜を守ってあげるって条件付きよ。いくらアーチャーでも桜を守りながらキャスターの相手をする、なんて出来ない。自分の身と引き換えに桜を助けても、そんなの全然意味が無いんだから」

校舎には人気はなかった。

行方不明事件の多発が下校時間を早めた為だ。生徒はおろか教師さえ残ってはいないだろう。

「先に行く。遠坂は後から来てくれ」

「ええ、十分たつたらわたしも正門を潜るわ。ここにはライダーの結界が張られてる。気配を消した所で見つかったらちやうからそうならないように慎二とキャスターの注意を引きつけて」

「分かった」

校舎に向けて走り出す。

背中には熱い鉄が入っている。魔術回路はとつくに成っている。俺に許されたただ一つの強化<sup>ぶき</sup>は敵を倒すためじゃなく桜を助けるために使うのだ。

「！」

足を止める。

三階の廊下にはキャスターと、桜に刃物をあてている慎二がいた。

「慎二お前——！」

止まっていた足が再び駆け出す。

だが、目の前にキャスターが立ち塞がった。

「止まった方がいい。それ以上に前に出れば、マスターは彼女を傷つける」

前に出ようとする体を押しとどめる。強く噛み締めた歯が、ぎりぎり悲鳴をあげる。

「慎二——！」

「よう。思った通り飛んできたな衛宮。お前のことだからさ、ああ言えばホントに一人で来ると思ったよ」

頭が白熱する。

目の前のサーヴァントが目に入らないぐらい、頭がくらくらしている。

桜は慎二の妹だ。兄貴なら妹を守るべきだろう。肉親なら助け合って、一緒に笑い合うものだろう。なのにどうして分からないんだ。

ナイフを突きつけられる桜の気持ちはどうして——！

「お前、本気でそんなことやってんのか」

「当然だろ。本気だから最後の切り札を使ってんじゃないか。この期

に及んで何寝ぼけてんのさ？」

「っ…！」

今すぐあそこまで走って、桜を引き離さないと気が済まない。

それには、こいつが邪魔だ。キャスターは慎二を守るように、俺の行手を阻んでいる。

「分からないな…君は何しに来た？この場に訪れたということとは、マスターの意に従うという事。闘う気があるなら、一人で来るべきじゃないのは明白だろうに」

それはもつともない分だ、怒りに駆られてはいけない。慎二の言う通りにした以上、俺は慎二を倒すのではなく、桜を助けることだけを考えなければ。

慎二は桜を抱き寄せたまま、俺の狼狽を楽しんでいた。

桜は俯いたまま顔を上げる様子はない。気を失ってるわけではな  
いだろう。自分の足で立ってる。俯いてるのは、ただ、顔を上げるこ  
とができないからだ。

「ああ、こいつには全部話したんだよ。僕たちがマスターで、お互い殺  
し合ってきたってさ！こいつさ、お前が隠してることみんな気づいて  
たらしいぜ！けど自分はただの後輩だから聞けなかっただとき…：  
何黙ってるんだよ桜。聞いてやれよ、わたしが薄汚れた間桐の女って  
知って嫌われたかどうか、ちゃんと自分の口で聞いてみるよ！」

桜の頬にナイフが当てられる。

「もういいだろう。約束通りきたんだ、桜を放せ」

「はあ？約束なんてしてないよ？僕はただ命令しただけさ…そう睨  
むなよ、僕だつて鬼じゃない。妹を助けたいっていうお前の気持ちは  
嬉しいからね。僕の言う通りにするんなら桜は放す。これは約束だ」  
「…分かった。で、お前の要件ってのはなんだ。ここで土下座でも  
すればいいのか」

「そんなの要らないよ。男に頭を下げられて何が嬉しいっていうん  
だ。言っただろ、いい加減カタをつけようってさ」

キャスターが一步前に入る。

そこには殺気も敵意もない。ただ慎二の命に従って、俺へと歩を進

めてくる。

「けど、ただやり合うつてのもつまらないだろ？だからさ…キヤスターの相手をしろ」

「……」

言ってくれる。生身でキヤスターと戦え、か。そんなの死ねつて言ってるようなもんじゃないか…

「心配すんなつて、キヤスターには手加減するように言ってるからさ！お前はただ殴られてくれればいい。ああ、でも一発で倒れたりはするなよ？僕が満足する前に気絶なんかしたら足りない分は桜に払ってもらおうからね」

キヤスターは見るからに面倒臭そうに近づいてくる。確かに手加減はしてくれるらしい。

「ふん…抵抗はするな。けど簡単に倒れるな…矛盾してるぞ慎二。お前何がしたいんだ」

「はっ、そんなの決まってるじゃないか。僕はさ……ただお前をぶちめしたいだけなんだよ!!やれキヤスター！」

キヤスターが跳ねる。

両手を構えて防御に徹する。

その瞬間

「っ、ぐ……」

顔を防ぎに入った腕そのものを狙われた。軽い一撃だ、まだ右腕はついている。

だが…

「っ…！」

目にも留まらぬ速さの連撃が繰り出される。同じ腕をしつこく狙われだんだん麻痺してきた。

全速で意識を編み上げる。守りになるようなものを片っ端から強化しなければいずれ手足を碎かれる。薄い学生服を鉄に、無防備な体を少しでも硬くしなければ、

「っ……」

だが、少しでも意識をそらすと強烈な一撃が襲ってくる。音速で放

たれる一撃は強化した服を貫通し、容赦なく腕を壊しにくる。

「はー！、のー！、のー！」

両腕はたった一息のうちに使い物にならなくされた。いや、動くには動くが感覚がない。こんな鈍い動きじゃあ、もうキャスターの動きについていくことができない。

キャスターに容赦はない。こいつは命令通り、一切の無駄なく攻撃を繰り返してくる。

満足に動かない両腕で、とにかく顔だけはしっかりと守る。もとよりキャスターの拳を「見て防ぐ」など出来ないのだ。意識だけは奪われないように、頭を守ることに専念しなければ。

それをキャスターがどう取ったのか、隙間だらけの両腕の守りを狙ってこず、ガラ空きのお腹と胸ばかり強打してくる。それはそれで悶絶しかねない一撃だったが、痺れるほどの強さではなかった。

「ぐっ… あぐっ… つ… (おかしい。柳洞寺で見たキャスターなら一撃で俺を殺すことができるはずだ。

慎二の言う通り手加減してるのか… それを差し引いてもこのキャスターは、前の夜でセイバーに敗れたときのキャスターだ。

柳洞寺の時の迫力が全くない。これなら、まだ俺にも好機はある！」

ああ、だが勘違いだったかもしれない。

「ぐ、ぐ…！」

前に倒れ込む。

サンドバック相手のスパarringに飽きたのだろう。深く踏み込んだ一撃が叩き込まれる。杭打ちめいた一撃に、腹の中身が抉られる。

今のは効いた… 治り切っていない傷が悲鳴を上げ、足は膝から崩れ落ちようとする。

「どうした衛宮。簡単にくたばってちゃつまらないぜ！」

前に倒れ込む。

キャスターはわずかに身を引いて、俺の倒れを見届けようとするそこへ、

「っーあ..」

俺はキャスターの腕を掴んで、強引に体を持ち堪えさせた。

「ふーん、いいぞ衛宮。ゴキブリ並みのしぶとさだ！お前は本当に面白いぜ！..。けど、見せ物としては三流だったな。このまま続けても同じことの繰り返しだ。そろそろ豪快なKOシーンで締めくくろうか」

「ーー同じ？」

馬鹿、どこが同じって言うんだ。さっきとは立ち位置が違う。キャスターに寄りかかった時。あからさまに立ち位置を逆にした事をどうとも思わないのかアイツは。

すると、キャスターが口を開いた。

「ーー距離は五メートルほどだ。我慢強い君の勝ちだね」

「え..」

突然だった。だから思わずキャスターの目を見たんだ。その時のコイツはいつものようにどす黒く濁った目じゃなく、赤く煌びやかに輝いた目をしていた。

「いいぞ！手加減はなしだ、殺せキャスター!!」

「兄さんー！やめ..」

体は麻痺している。殴られた箇所は痣になっており、もう痛みさえ感じない。殴られる痛みより、体中に残っている痛みの方が強いからだ。

それで完全に思い知った。これは慎二の意思じゃない。俺の顔を狙わなかったのも、まだ俺がギリギリで体を動かせるのも慎二に手加減を命じられたからではなくー

「さあ覚悟はいいかい？」

キャスターは深く踏み込み、今までとは比較にならない一撃で、この胸を蹴り上げた。

「っー」

息が止まる。

分かっていても、意識が消えかける。

慎二の歓喜の声が聞こえてくる。おおかた、これで終わりだと確信

したのでろう。

普通ならこのまま、背中から落ちて死ぬ。落下の衝撃など考える必要はない。そもそも、人間を軽々と吹っ飛ばすほどの一撃だ。受けた時点で体に風穴が空いていても不思議じゃない。

「ハッ……」

だが生きている。あれだけタイミングを合わせられれば、誰だって後ろに飛べる。今のは殺すための一撃じゃない。あくまで、キヤスターの意思だったんだから。

「……え？」

間合いは万全。

飛んでる最中に体を反転させ、着地と同時に呆けている慎二が握っているナイフを左手で掴み取る。ナイフの刃が肉に食い込むが、麻痺してはおかげで気にならない。

「な、え……!?!」

腹に仕込んで置いた本を取り出す。魔術で強化しておいたおかげでなんとか助かった。これがなきや蹴りの一撃を受け止めきれなかっただろうから。

「……魔術……あ……うう……う……わあああああああ……!」

激昂した慎二が殴りかかってくる。

残った右手を振り上げる。手のひらが切れることも気にせず、強く握りしめた拳を慎二に放った。

「おおおおおおおおお……!」

慎二の拳が俺に届くことなく、俺の拳が慎二の顔を殴り抜いた。

「ガッ……」

フラフラと慎二は後ずさる。

が、

「ぐ……ううっ……キヤスター……!……いつを殺せえええ……!」

本のような物を取り出しキヤスターに命じた。それにキヤスターが抗うことはできず俺に向かって触手を……

……しかし、それは許されなかった。

ガラスが突然、突き破られ赤い外套が飛び込んでくる。



『Fixierung, EileSalve——!』

ガラスを突き破って乗り込んで来た遠坂により魔術が放たれる。キャスターは避けることなく直撃させられ一瞬動きが止まる。そこをアーチャーは見逃さない。

「できれば手加減してもらえるとー」

「……ふんっ!」

容赦ない剣戟によりキャスターは切り伏せられ、床にうずくまる。なんともあつけなく勝負はついた。

突然の乱入者に驚愕した顔で慎二は遠坂に向かい合う。

「と、遠坂!? ひ、卑怯者! 約束を破りやがったな衛宮。一人で来いって言ったのに!」

「そうね。けどアレは約束じゃなく命令だったんでしょ? なら衛宮くんを卑怯者呼ばわりするのは筋違いだわ」

「そ、そんなの詭弁だ! あの時、衛宮は一人で来るって言ったんだ。なら一人で来るのは当然じゃないか!」

「……わたしはただ来たかったから来ただけよ」

「嘘つけ! 呼びもしないお前がどうして来るんだよ! まさか衛宮の奴、馬鹿正直なふりをして僕を騙したのか!」

「ああそれ? そんなの単純よ。あの電話の時ね、わたしも側にいたの。衛宮くんが隠そうとしたって聞こえてたわよ。桜が攫われた以上わたしが大人しくしてるわけないでしょう?」

遠坂は怒りの表情で慎二に吐き捨てた。

「いい慎二? アンタは衛宮くんを誘き出す代わりにわたしを完全に敵に回したってことよ」

慎二の顔はワナワナ震え、自分に言いかけるように、自分を鼓舞するこのように叫び上げる。

「なんだよ、お前も桜かよ……桜、桜、桜桜桜桜! そんなヤツただ黙っていいじてるだけのグズじゃないか! よく見ろ! 僕をみる!! 僕はマスターになったんだ!! お前たちと同じマスターに選ばれたんだぞ!!」

「……そう。じゃあ自慢のサーヴァントに戦わせたら? アーチャーは

腹を裂いただけよ。そのサーヴァントは丈夫らしいみたいだから、まだ息はあるわ。一人前のマスターなら、今すぐにもキヤスターを治してあげなさい」

慎二は再び、本を取り出しキヤスターに命じる。

「立てよキヤスター！マスターの命令だ！立ってアーチャーを倒せ！！」

キヤスターは動かない。血は流れ続けている。

そんな姿にイラつくように、慎二は強く本を握りしめた。あの時と同じようにキヤスターの周りに火花が散り始める。それでもキヤスターが立ち上がる様子はない。

「この……！お前がこの程度で死なないことぐらい分かってんだよ！お前は僕のサーヴァントなんだ！死ぬまで戦えよ！！」

これまでと比にならないほどの火花が散る。

「……痛い……痛いなあシンジ……そんなに力を使っちゃあ……ねえ？」

キヤスターがなんとか立ちあがろうと素振りを見せた時、

「……何もできない、ただの人になってしまおう」

慎二の持つ本が突然燃え上がる。

「なっ……！！」

締め切られた廊下に風が吹く。それは倒れてたはずのキヤスターと、俺のそばにいる桜の体から吹いていた。

「……嘘、これがキヤスター……？」

身構える遠坂と、再び立ち上がった敵を無言で見つめるアーチャー。

キヤスターは完全に治癒していた。その体から発する威圧は、柳洞寺で見せたものと全く同じ。

「……え？」

唐突に、その姿が消えた。キヤスターの姿は忽然と俺の視界から消え。

「衛宮くん、伏せて……！！」

咄嗟にしゃがみ込んだ俺の真上を、閃光が通過していく

「桜!？」

一瞬の間に、キャスターは桜を抱いて跳んでいた。桜を抱えたキャスターは俺と遠坂とは反対方向。慎二がいる場所より少し前、俺たちと慎二の中間に着地する。

「お、おい。キャスター、お前なんのつもりだよ？誰が桜を連れて来いって言ったんだ」

キャスターは慎二を嘲笑うかのように笑ってみせ、一瞥した。

「そんな命令はもらってない。僕はただサーヴァントとして、自分のマスターの身を守っただけさ」

もうこの場には慎二の味方など居ない。目の前にいるのはただの、  
——濁った目をした怪物だった。

## 桜と怪物 「選択」

——僕だつて努力したんだ。

「そう…： そういうことだったのねキャスター」

「ご名答だ、アーチャーのマスター。いや、既に気づいていたというベキかな？」

——あの日からずっと分かってた。桜が間桐の家に来た時から僕の居場所はなかつたんだ。

「間桐の血はとうに廃れていて新たな魔術師は排出されない。わたしは間桐臓硯がキャスターを召喚して慎二に預けたのだと思つてた。

——それでも、振り向いてもらおうと頑張つてきたのに…：！

「けど話をもつと簡単だった。だつて今の間桐家に最もマスターに相応しい人間は、間桐の正式な後継者

——今代の魔術師である貴方だものね桜」

「そんな、桜が…： マスター？」

信じられないような顔で士郎は桜を見つめている。

桜はその視線に耐えることができないのか、顔を伏せたままキャスターの側に佇んでいる。貴方にだけは知られたくなつたのだと、謝罪するようだった。

「…： おい」

——なんで桜ばかり見てるんだよ。今、お前たちの敵は僕のはずだろ!?なんで誰も僕を見ない！

誰も慎二を見ない。

令呪の譲渡。

「間桐慎二の命令に従う」という令呪。それによって慎二はキャスターのマスターとなり、その間桜はマスターとしての権限を失う。実際、今の桜の手には一角の令呪が刻まれていた。

「おい！お前ら、こっち見ろよ!!」

——そうだ、まだ終わつてない。僕はこの聖杯戦争に勝つて、そして

一斉に慎二を見る。

その場にいた誰もが慎二の存在を忘れていた。今の彼はマスターですらなく、もはや聖杯戦争に関係のない一般人へと成り下がっているというのに。

「まだ終わっちゃいない……！もう一度だ桜！もう一度、支配権を僕に譲れ！」

継るように、懇願するように駆け寄る。

「……………」

「なに黙ってたんだよ！お前は戦う気なんてないんだろう？マスターになるのは嫌だつてさんざんお爺様に泣きついていたから、僕が代わりに引き受けてやったんじゃないか！なに今更、いい子ぶってただよ前は……！」

黙り込む桜に気が触れたのか、拳を振り上げる慎二。

……それを止める必要はない。

「キヤ、キヤスターお前、僕に逆らうのか」

「逆らうもなにも、最初から君をマスターだと認めたことなどない、シンジ」

慎二の腕はキヤスターに掴まれ、桜に届くことはなかった。

キヤスターはその手を話さず慎二に言った。

「——哀れだねシンジ。君が持つてないもの周りは持つている。さぞ苦しかっただろう」

「な、なにを」

「嫉妬？劣等感？そのどちらもか。ああ、君はあんなに頑張っていたのに努力が報われないのは悲しいことだ。まあ、例え魔術回路を持ち合わせたとしても、そのセイバーのマスターの方が資質はあるようだけどね」

「……うるさい」

黒い男は鼻で笑いながら言った。

「僕を見て、僕を、僕を……ふふつ、だあれも君を見ない。」

「うるさいー！」

慎二を見てキヤスターは笑う。

「ちよつとキヤスター、アンタ何を……」

遠坂が止めようとするも、アーチャーに制される。弓兵にとって目の前のキヤスターは既に敵であり、警戒を解くことはない。

「蔑んでいた妹にも、見下していた友にも、君は結局、哀れと思われる」  
慎二は士郎の方へと顔を向けた。その瞬間、目を逸らされる。士郎は慎二を憐れんだ訳ではない。ただ見ていられなかった、それだけである。

だが、それで十分だった。

「分かったた… わかってたわかってたわかってた!! 最初からこんな務まりっこないってわかってたさ!」

声を荒げながらその場で地団駄を踏む。それはもう子供の癩癩とやら変わらなかつた。

その様子を見ていられなかつたのか桜は声をかけた。

「… 兄さん、もうやめましょう」

それは逆効果だった。

今の慎二に言葉をかけてもそれは全て自分を憐れんでる、同情していると変換され意味をなさない。

年月をかけて歪んだその性根はもう戻らない。

… 亀裂が走る。

「やめろ! その目で僕を見るな! お前も! 衛宮も! 遠坂も! … 全部、全部全部全部!」

ピシリと音を立てて、間桐慎二という存在が罅割れる。

「——お前らなんか」

慎二は小さなガラス瓶を取り出す。

それにこの上のない悪寒を感じた時

「——死んじゃえよ、全員」

パキンとガラスが割れた音がした。

「あ、っ——!」

桜が突然倒れる。足元から力を無くして床にへたり込む。

慎二はその様子を後ろ目に、表情を無くしたままさつて行った。

桜は苦しげに胸を掻きむしり呻き声を上げる。

「あ——は、あ——!」

耳に付けられていた飾りが砕け、中から薬品めいた液体がこぼれている。

膝をついたまま痙攣する桜。

いや、もはや痙攣なんてものではなく、地震で倒壊する建物のように、そのまま崩れてしまいそうなほど桜という存在そのものが揺れている。

空間が歪む、桜を中心として魔力が広がり続けている。

「桜！」

士郎が駆け寄ろうとする。何が起こっているのは分からないが、桜の身を案じる彼にとって当然の行動だった。

「たわけ——この状況がわからんのか貴様！」

いつの間にか後ろにいたアーチャーによって肩を掴まれ、士郎はそのまま背後へ突き飛ばされる

「ここから離れろ。下手に魔力を<sup>カテ</sup>与えては戻せなくなる」

アーチャーが口にしたことを士郎は理解できない。だがそんな問いはすぐに消えることになる。

「悪いが逃すことは出来ない」

その言葉とともに廊下が赤黒く染まっていく。

たちこめる空気は霧状となって肌を濡らし、壁という壁は、蜜のような汗を浮かべ出す。

「がつ、ぐ——!?!」

肌が焼けるように痛い。

この空気。

この世界は魔術によって括られた異界へと変貌している。

学校という枠組みの中、この敷地内の生物から魔力を奪い尽くす、得体の知れない結界。

「前回の反省を生かしてね、吸収という点に絞ってみただ」

褒めてくれてもいいんだよ、というようにキャスターは笑った。

「確かに段違いね、これは……っ」

「な——」

士郎は視線を戻す。

… 赤黒く変色した通路の奥には、蹲って胸をかきむしる桜と、桜を守るようにアーチャーと対峙するキャスターの姿があった。

◇

「——そこを退けキャスター。おまえの主は暴走している。他人の魔力の味を知る前に止めなければ癖になるぞ」

… 想定外だ。

まさか蟲を暴走させる薬があったとは。やはり全て取り除くべきだったか？ それとも、シンジを必要以上に煽りすぎたか？… つい興が乗ってしまった。反省しなければ。

まあそれはさておき、目の前のアーチャーが言っていることはよく分からない。他者の味を知る、それはもう手遅れな話というものだ。誰がわざわざ餌付けしたと思ってる？

このままではサクラの命は危うい。ならば

「断る。君がサクラを殺すというのであれば、これ以上は進ませない」「そうではない、今ならまだ間に合うと言っている。それとも、みすみす主を死なせるのか。」

お前のマスターは著しく魔力を失っている。放っておけば確実に死ぬとわかっているのか？」

糧を与えればいい話ではないか

「なら、食べさせてあげればいい。魔力よりも多くの魔力を取り込めば少なくとも自滅は避けられる。幸いここには魔術師が二人もいる

——サクラが蟲に食い尽くされるまでに、君のマスターは貰い受ける」

辺りに広がっていた自らの血に魔力を流し、数本の剣を生成する。血も僕の一部であることには変わりない、変質させることなど容易いこと。

立ち尽くす魔術師に向かって剣を放つ。

「——チツ… 主が変わったところで性根は変わらんか！」

二対の剣によって振り払われる。

構うものか、近づけさせないように剣を生成しては放ち続ける。しかし、弓兵の癖に剣を使うとは、やはり見覚えのない英霊だ。早々に



片付ける必要がある。

「宝具は使わないのかい？いや、もしかして使えないのかな？」

変わらず剣を捌き続けるアーチャーに向かって問う。アーチャーであれば遠距離からの宝具は持ち合わせているはず。それでも使わないのは、自分のマスターを巻き込む恐れがあるのか、あるいはサクラを気遣っているのか。

「…ふん、お前も宝具は使えまい。先ほどまで間桐慎二がマスターだったからな。いかにキャスターとて宝具を使うだけの魔力が溜まっていないだろう。使わぬ相手に手札を晒す必要もない」

凶星か。

アーチャーは宝具を使わない。なら勝機は見えた。

「おいおい、なんのための結界だと思ってる？この学校の真下にも僅かながら霊脈は通ってる。それを利用することだって出来るんだよ」  
「なに!？」

さあ、起点はここだ。

今僕が立っている真下。ここから一気に汲み上げさせてもらう！

「——宝具」

空に亀裂が走る。

落ちてくる黒い影。かつての真体と言うべき神話。

ああ、そうだと。未だ魔力不足により不完全での発動。仮想顕現とも言うべきか。

それでも喰らい尽くすには十分。

「貴様一体…何を呼んだ？」

「さあ？知りたいなら、何もせずただそこにいればいい」

歯を噛み締めながらアーチャーは叫ぶ。

剣を握り、こちらへ向かって来る。流石は英霊、あれの危険性はよくわかってる。それとも似たような経験があるのかな？

「黙って見ているでも思うのか！ここで貴様を——」

「戦うかい？僕は別に構わないが、いいのかい？あれが堕ちればこの町の人間を喰らい尽くすまで止まりはしない」

堕ちきる前に僕を殺せるのかな。あと十秒もないが、さてどうする

？正義の味方さん」

選択を突きつける。

「アーチャー!!」

後ろでは彼のマスターが止めようとしている。彼がしようとしていることを分かつているのだろう。

人の命を選ぶか、世界の敵を打破するか。

彼が選んだのは

「I am the bone of my sword」

「…よかった。そう来ると思ったよ」

アーチャーの行動を見てキャスターは不敵に笑うのだった。

## 桜と怪物 「暴走」

空より産まれ堕ちてくる。それが学校に直撃する刹那、

「——<sup>「ロ!」</sup>熾<sup>「ア」</sup>天覆<sup>「イ」</sup>う七<sup>「ア」</sup>つの円環<sup>「ス」</sup>。……!」

大気を震わせ、その真名が開放される。

わずかな時間、それは停止した。

開かれた七枚の花弁はこの地を守護し、それが産まれ堕ちるのをアーチャーは「宝具」によって食い止めている。

誰が知ろうか、この守りこそアイアス。かのトロイア戦争において、大英雄の投擲を唯一防いだとされる絶対の盾。投擲武器、使い手より放たれた狂気に対してならば無敵と称される結界宝具。

キャスターの宝具が投擲に関するものであればここで勝負は決していた。

しかし、

相対するは、ただ重力に従って堕ちてくる物体。

「——っ……!!!」

花卉に亀裂が走る。

一枚、また一枚、花卉は四散してゆく。

「それ」に意志があるのかは分からない。しかしながら、大量の触手と共に花卉を砕きながら「それ」はこちらを見下ろしている。

「驚いた、あれはアイアスの盾か。いやはや、なんとも懐かしい物を見せてくれる」

外を見上げるキャスターはどこか懐かしそうに花卉を見た。

「ぐ……キャスター……」

アーチャー一人では抑え切れない。歯を食いしばり、天に掲げた両手によって花卉の盾は支えられているが、その膝が崩れ落ちるのはあと僅か。

手に剣を持ち、ゆっくり、ゆっくりとアーチャーの苦しむ様を愉しむように一歩一歩近づいてくるキャスター。

——ニゲろ

間拔けなことに、俺は一歩も動くことができなかつた。

——アレを打破デキルノハ正シイ英雄  
巻き込まれる。

——アナタは英雄デシヨウカ？なら挑ミマシヨウ。アレは乗リコ  
エルベキ障害

ここには、あの化物に完全に飲み込まれる。そう考えてしま  
うと、足は凍りついたように動かないのだ。

——アカイ眼がコツチをノゾイテいる。メノマエニ触手が迫ル  
立ち向かわなきやいけない、分かっている、そんなこと理解して  
いるはずなのに。それを本能は拒否している、無駄死にするだけだ。大  
人しく生き延びる努力をしろ。と

——触手が、セマル  
本能に従う、今はそれしかない。

俺はキャスターの後ろで蹲る桜をつれて退避するためにも遠坂の  
方を見たが

「——止まりなさい！」  
彼女は既に走り出していた。

キャスターに魔力がこもった指先を向け、アーチャーの前に立つ。  
だがキャスターは止まらない。

むしろ手間が省けたかと言わんばかりの顔で近づいてくる。  
「来るな…！ささっと逃げろ、たわけ…！！」

アーチャーが叱咤するものの遠坂は引かない。  
そればかりかキャスターに向かって魔術を繰り出した。

「Acht…！」  
先ほど学校に突入した際、キャスターに放った魔術は確かに効い  
ていた。

「Sieben…！」  
だが今はどうだ。  
放たれた魔術はキャスターの肉を抉り、魔術回路を焼き、命を穿た  
んと襲い掛かる。

「Sechs Ein Fluss, ein Hall…！」  
ああだが、それがどうした？

「痛いじゃないか」

肉が抉れようが、焼かれようが、たとえ命が削れようが、その肉体は瞬時に再生する。

「凜……よせっ！」

一歩、また一歩、ゆつくりと近づき、ついに遠坂の目の前に迫る。

「っ！」

剣が振り上げられる。

ここまで近づかれれば、もう防ぐことはできない。このまま脳天に振り下ろされて、それでおしまい。

廊下が血で染まろうとしたその時、

「……やめて……キャスター……」

小さな声が聞こえた気がした。

その声に反応し、キャスターの動きが止まる。

「……がぶっ」

結果的に、遠坂に剣が振り下ろされることはなかった。

「え、アーチャー……？」

遠坂が後ろを振り向く。

そこには、後ろの血溜まりから発現した長い槍に串刺しにされたアーチャーの姿があった。

「グ——」

同時に花卉の最後の一枚が砕け散る。

アーチャーは胸の部分を完全に貫かれ再生は不可能だところからでも判断できる。

それを悟ったのだろう。

遠坂は震えた声でアーチャーに呼びかけ、おぼつかない足取りで近寄っていく。

まだ遠坂は気づいていない。

既に盾は砕け、この校舎に無数の触手が入り込んでいる。

呆然としている遠坂に触手が迫る。

「遠坂——！」

そこでようやく足が動いた。

本能は相変わらず、〃逃げる〃と叫んでいるが知ったことか。まだ間に合う。

全力で走って、遠坂の手を引いて真横に跳べば、それで――

「あつ、やば……」  
最初は体を吹き飛ばされた感触、そして視界と知覚が真っ赤に染め上げられた。

「が――a――あ――」

続いて襲ってきたのは喪失感。

体はある。

まだ生きている。

「あ――あ」

ただ、あるべきものが、左腕の感覚が……二つある物が欠けるだけでこんな喪失感があるとは。

切り裂かれたのは左腕だけだったのは幸運だった。

まだ、生きてる。

「――いや」

遠坂は……大丈夫、そうだ。何を言っているかは聞き取れないが、取り乱しながらこちらに駆け寄ってくる。

アーチャーは、いた。もう消滅寸前だが、確かにいる。

桜は……胸を掻きむしったまま、床に転がった俺を見つめている。参ったな、早く助けないといけないのに。今の俺では駆け寄ることすらままならない。

周囲の魔力が桜に集まる。

「いやあ――ああ……!!!」

糸が切れた人形のように、魔力を暴走させ倒れ伏す桜の姿。それが意識を失う前に見た最後の光景だった。

「凜、聞け。このままでは死ぬのは二人だが……」

## 桜と怪物 幕間 「不滅の貴方」

人は誰しも永遠を手に入れたいと願う。それは憧れであり、常人には決して叶わない望みでもある。

だが、この場にはそれを手にした二人がいる…。正確には今から手にしようとする者とそれを見守る者だが。

一人は時間を手にする為に。永遠の時間が手に入れば自身の願いに手が届くと信じて。そしてもう一人は死を恐れた。ただ死ぬのが怖かった。それが自分の意思なのか、妖精の悪戯なのかは定かではない。

両者の違いがあるとすれば、自身で望んだか、考えなしに行った結果の末に後悔しているか、である。

暗い境界の中で二人の男が問いを交わしていた。

「……どうして、そこまで永遠を望むの？」

神父服の魔術師に尋ねた。とある田舎町で出会った男。数奇な縁から彼の研究を手伝うに至り、今この場にいる訳である。

彼らは友人であり共に苦難を乗り越えた中ではあったが、「永遠」を祝福するものと、否定するものと言う決定的な違いがあった。

「前にも言ったでしょうが、私は全てを知りたいのですよ。ですが人のままでは時間が足りない」

魔術師は黙々と研究資料をめくり儀式の準備を進めていく。これから行うのは魔術師が「永遠」を手にするべく行われる転生の儀式。

既に魔術師は転生先を決めており、あとは実行するだけであった。

「時間が足りない」

魔術師の言葉を男は否定した。

「だけど世界は今も、これからも広がり続ける。君がやろうとしていることは終わりのない旅に出ることと同義だ」

故に全てを知ることが不可能。彼は無駄なことだと吐き捨てた。

魔術師は答える。

「いいえ、必ず可能にして見せます。結論は必ず、何代かかろうが、必ず私自身の手で導き出してみせる」

魔術師は楽しそうに笑う。これから自分が歩む道を思い、いつの日かその願いに手が届くことを心から信じているのだ。

「私は終わりを見届けたい。それには『永遠』という時間が必要なのです。貴方のような欠陥だらけの物ではなく、終局まであり続ける自分自身の時間が」

男の不死性は元々あったものではない。

彼を作り出した妖精はそこまでは付与できなかった。元々はごっこ遊びの悪役。英雄に倒されて、死ぬのが役目。

巨神の一部を取り込み、機神を喰らい全てを手に入れた。そのことが関係していたのかもしれない。しかしそれを星の意思は許しませんでした。

「あの怪物をこの大地に残すわけにはいかない」

白き巨神に振るわれるはずだった聖剣は怪物を打ち倒すため作り出される。

本来なら彼はあの日、あの聖剣に打ち倒される筈だった。しかし、聖剣の光が迫る瞬間ある一つの感情が芽生えました。

『死にたくない』

だから逃げたのです。

体の大半を失いながらも世界の裏側へ。

「貴方だつて私と同じだったはずだ。『人のことが知りたい』『そう思ったからここにいます』」

「今になって後悔してるけどね」

裏側にいる彼は知りたかった。自分を殺せる人間のことを『英雄』のことを。

だから端末を産み出したのです。この彼もその一つに過ぎない。

「(人間の生きる意味が罪を乗り越える為だとすれば、僕は一体…何のために生きてるんだらう)」

約束があったのかもしれない。それを果たすためにこの世界にいる。

「——いつ日、い 来で っと」

が、とうに記憶は摩耗し、思い起こそうとしてもノイズ音が鳴るだ



け。

約束をしたんだろう、誰かと、大切な人と

「よし…準備は整いました」

魔術師はパンと手を合わせ完成を告げた。

その音で意識を現実に戻す。二人の別れの時は近づいていた。

「本当に行くのかい？」

「ええ、悲願のためです」

描かれた魔法陣が火花を散り始める。いよいよ転生の儀が始まるのだ。

「そうだ、私の教会を好きに使ってください。寢床にするもよし、信徒の真似事をするのもよしです。いい暇つぶしにはなるでしょうから」  
「…生憎、どちらかというと恨まれてるタチでね。祈ったところで何だというんだ」

「祈るだけでいいのです。貴方の願いが実現できることを願えば」

魔術師が光に包まれる。

男は苦笑しながらもそれを見送る。きつとお互い緑な結末を迎えないと実感しながらも。

「では、またいつか…次に会う時はお互いに姿、魂すら別物になっているでしょうがね」

——いつか。

それはきつと希望の言葉。明日、明後日、先のことを楽しみになる。いつか、か。僕にとってその言葉は…呪いだよ」

## 桜と怪物 「愉悦」

何かが流れ込んでくる。

入口は肩。あの触手に触れたせいかな、それとも意図的なのか。侵入してくる熱は餌に群がる蟲のよう。腕があつた所に蜂蜜でも塗られているのか、絨毯みたいな群をなした蟲が集まってきているようだ。ああ、でもその蟲は追われている。もう一つの大きな熱源が蟲を逃すまいと開いていた穴に蓋をし、蟲を追っている。

まるで病原菌を排除する白血球のようなそれは体中を駆け巡る蟲を殺すべく追い、やがて脳にたどり着く。

蟲は最後の抵抗なのか映像として脳に何かを映し出した。

◇

どこかの場所で英雄と黒い男は戦っている。一方は人に害をなす悪を倒すため、もう一方は生き延びるために。

男は大地から剣や斧、槍に鎖を産み出し英雄にぶつける。だがそれは英雄に傷一つ与えることなく薙ぎ払われてしまう。

いよいよ最終局面、お互いに同じ大剣を振りかざし似た剣技でぶつかり合う。だが、見れば分かる。劣っているのは黒い男のほうだ。英雄の剣戟と渡り合えてはいるものの次第に一つ、また一つと深い傷を負っていく。一方の英雄は傷は負っているものの、男の攻撃を自身の技術で受け流していく。

決着はついた。

黒い男の最後の一撃をカウンターで打ち負かし、英雄は怒涛の蓮撃を叩き込む。

血しぶきが舞った。

男はついに膝をついてしまう。英雄を見上げ、それを受け入れたくないように訴える素振りを見せる。

『僕は… 人として…』

しかし断罪は止まらない。

目の前の英雄が大剣を振りかぶり――

『いくら人として振る舞おうとも貴様は怪物だ。倒されるべき悪であ

ることは決められている』

冷酷に言い捨てる。

黒い男の四肢を切り裂き、トドメと言わんばかりにその心臓に剣を突き立てた。

『それでも… それでも… 僕は…』

そこで映像は途切れる。

蟲はもう一つの熱源にぶつた斬られ俺の体から霧散していく。

『お前が見るべきものはそれではない』とでも言うように頭の中は様々な剣… 宝具のイメージで埋め尽くされていき――

◇

――

… ゆっくりと意識が戻る。

俺は知らない部屋で、慣れない寝台に横たわっていた。

「… あ… れ」

体を起こす。

俺は確か――遠坂をあの手から守るために突き飛ばして… それから、俺は…

あの出来事を思い出す、その前に

ふと、自分の状況に違和感を覚えた。ダボダボの病人服… いや拘束着というべきか。事実、動かせるのは左腕だけ。

そしてその左腕は赤い布が巻かれていた。

「なんだ、これ」

恐る恐る、布を解こうとした瞬間、

「ぎっ――!？」

視界が真っ赤に染まる。

体を、長い刃物で串刺しにされた、かと、思った。

「は――ぎ、がっ――」

痛みに耐えかねて、右腕で胸をかきむしる。

だめだ、痛い、苦しい。

その痛みを和らげてもらえるように懇願するが誰が答えてくれるわけもなく、ただ胸をかきむしる。

「――落ち着け衛宮士郎。痛みには耐えるのではなく、左腕を押さえつけるといい」  
・・・と。

あまり聞きたくない声が聞こえた。

「あ――左、腕……？」

よく判らない。

それでも、何でもいいから、とにかく今はこの痛みから逃げ出したかった。

「――は――はあ、は――あ」

・・・落ち着け。

目を閉じて瞑想すれば、異常な箇所はすぐに把握できる。痛みのもと、異物が何であるか分かれば多少はコントロールできる。

「ふう……」

何とか痛みは落ち着いた。けど、何なんだ一体。俺の腕は、いやそもそも左腕はあの時確かに……

「ふむ、どうなるかと思っただが、今のところ反発する様子はない。運がいいな衛宮士郎」

少なくとも目の前の神父は事情を知っているようだ。

「言峰……」

「お前の聞きたいことは判っている。状況説明の前にまず、その左腕の疑問に答えておこう。あまり驚くなよ」

言峰の腕が伸びる。神父は拘束着のベルトを解いて、あっさりと俺を裸にした。

「え――」

そこにある腕は、衛宮士郎の腕ではなかった。何重にも巻かれた布の上からでもはつきりと判る。いま左腕になっているものは、自分以外の何か。それは本来あってはならないもの。この世の摂理を押し曲げてまで無理矢理取り付けられた異物だった。

現に、動かさそうとしても左腕は木の枝のように身動き一つすらしてくれない。

「言峰、これ、は」

「アーチャーの左腕だ。彼を尊重し、その遺体からお前に移植した」

「アーチャーの意思を尊重…？いや、それよりも遺体って、あいつは」

「移植が済んだ後、消滅した。ここに運ばれた時点で死に体だったのだ、よくも終わるまで保ったものだ。アーチャーの持つ単独行動故だろうがな」

アーチャーが、消滅した。

判っていたはずだ。最後に見たあいつは、胸を剣で貫かれていた。どうであれ、判っていたことだ。

「これは、本当に…あいつの腕なのか」

「無論だ。あのままではお前もアーチャーも長くはなかった。アーチャーはこの世に留まるための霊核を貫かれ、お前も片腕をもぎ取られ、出血よりも魂の方が損なわれていた。

幸い、アーチャーの体に傷は少なかったからな。感謝しておけ、彼が肉体を提供することで、死にゆくお前を生かしたのだ」

「その聖骸布は解こうと思えば簡単に解ける。だが、解いたが最後。お前はその腕に食い潰される。」

「選択肢はお前にある、その力を使うのは自由だが命の保証はせん」

「……………」

…喰われた左腕。

精神を侵すような熱と、他人のものとしか思えない左腕。その全てが、あの学校で起こったことを現実だと知らしめる。

赤黒く染まる視界。

赤い目の怪物。

空から迫る触手。

そして…魔力が暴走した桜——

「つ…！桜、それに遠坂は…？」

「無事、とだけ言っておこう…しばらく礼拝堂で待っているといい。凜もそこにいる」

まだやるべき処置があると言ひ、言峰は部屋を後にした。二人が無事なのは分かった。

けど、言峰の言い方から桜の容体は芳しくないのだろうか？

寝台から降り、用意されていた上着を羽織る。左腕は動かないので、とりあえず羽織っただけだ。

フラフラと立ち上がり、礼拝堂に向かう。

礼拝堂に入るなり、遠坂はジロリとこつちを睨んできた。

… あんなふうに睨まれる覚えはないが、とりあえず遠坂も無事だったと判つてほつとした。ひとまず少し離れた長椅子に座る。

気まずい沈黙が礼拝堂を包み込む。

「その… 気分、少しは落ち着いた？」

先に沈黙を破つたのは遠坂だった。

教会の長椅子に背を預けたまま、無言で頷く。

「衛宮君には大きな借りが出来ちやつたわね… アーチャーの死も無駄にならなくて良かった」

左腕がズキリと痛む。

俺の行動のせいで遠坂はアーチャーを失つた。そのことがどうしようもなく重くのしかかる。

外は暗雲に阻まれ、夜空は見えない。

雨雲らしいそれは、じき雨を降らすと告げている。

桜は危険な状態らしい。

耳飾りからこぼれた液体は毒薬で、言峰がその洗浄をやってくれていた。

遠坂はそれ以上何も語らない。

桜のサーヴァントであるキャスターも今は姿を消しているようで俺たちの前には姿を見せない。

「――遠坂」

座つたまま声をかける。

「なに」

「訊きたい事がある」

「…… でしょうね。いいわ、話してあげる。隠していても仕方ないし、もうその意味も無くなったし。訊きたいのは桜のこと？」

ああ、と頷いて答える。

遠坂は小さく深呼吸してから、いつもの調子で話し始めた。

桜が元々、遠坂の人間だったこと。魔術回路を失った間桐が神秘を受け継がせるため外から養子をもたらした、それが桜であること。

「そうか、それじゃあ遠坂と桜は」

「実の姉妹よ…… ま、一度もそんなふう呼び合ったことないけどね」

…… 簡素な言葉に、どれだけの感情が込められていたのかは分からない。ただ、それで納得がいった。

いつも桜のことを訊いてきたわけ。

アーチャーに宝具を使わせなかった、その理由を。

「…… 良かった。遠坂、桜の味方なんだ」

澄んでいた胸に微かな光が指す。これから桜がどうなって、どうするのかなんて考えもつかない。

だが、その暗い予感だけの道行きに、遠坂が桜を想ってくれるだけで、希望があると思えた。

「いいえ。わたし、あの子の味方でもなんでもないわ」

—— だというのに

こちらの心を見透かしたように、遠坂は宣言した。

「味方じゃ、ない？」

「ええ、このまま桜が治らないなら狂ったマスターとして処理するだけよ。それに、あのキャスターも放っては置けない。無差別に人を襲う魔術師とサーヴァントなんて放っておける訳がないでしょう？」

「な、何言ってるやがるお前……！桜はお前の妹なんだろう!? 殺すなんて、そんなこと間違っても口にするな！」

「…… ふん。桜が間桐の家に行った時点でわたしの妹じゃないわ。仮に、貴方の言うとおりに肉親としての関係があるとしても結果は変わら

ない。それこそ、他人が口出しできる話じゃないわ」

「——それじゃ、慎二と」

変わらないじゃないか、と

そう、最低なことを口に出しかけた時、

「何をしている。こちらの治療は済んだが、患者は未だ危険な状態だ。騒ぐのなら外でするがいい」

教会の奥から、言峰が現れた。

「言峰、桜は…!?!」

「綺礼、桜は——!?!」

「…まったく。いがみ合っているのか息が合っているのか。お前たちは判らん」

「あつ…」

「ふ、ふん。そんなのアンタの勘違いよ」

「そうか、では座れ。間桐桜の容体を説明する」

「——」

俺たちは離れた席で、同じくらい真剣に、神父の言葉に耳を傾けた。

「簡単に説明すれば、間桐桜の体内には刻印虫が混入している。本来この虫は寄生虫のようなもので、宿主から魔力を食い、ただ活動を続けるだけの使い魔でな。宿主の存命を発信するだけの、使い魔としては最低位のものだ」

「…ふうん。魔術で作った監視装置みたいなものね。臓硯はそれで桜を監視してるってこと?」

「監視していた、という方が正しいだろうな」

「…? まあ、いいわ。早く結論を言つて、桜は助かるのか、助からないのか」

「気が早いな凜。お前は彼女の容体を把握しているようだが、その少年は別だ。彼の為にも説明はしておくべきだろう?」

「っ…」

遠坂は気まずそうに視線を逸らす。

その顔は、俺には桜の容体を知られたくないと告げていた。

その内容は耳を疑いたくなるような話だった。



桜の中にいる刻印虫は11年間の桜の体で育て続けられ神経と、そして魔術回路と絡み合い身体中を蝕んでいること。一度起動すればあつという間に宿主の魔力を奪い、この状態が続けば桜は半日で死んでいただろうという。

そして、手術により半数の刻印虫は取り除かれたが、未だ神経に深く根付いている虫は摘出が不可能だということ。心臓を引き抜けば全ての刻印虫を摘出できるが、それでは桜も死んでしまいうらしい。

――  
神父の言葉を聞き続けるだけでどうかしそうだ。

神父のしたことではないと分かっていたとしても、それを淡々と語る言峰に手をあげそうになる。

外はどうやら雨が降り始めたらしい。土砂降りの激しい雨音が聞こえるが、それが気にならないほど神父の声は酷くはつきりと耳に残る。

「あの虫が起動する条件は間桐桜が戦いを拒むことだ。今までは間桐慎二にアレを預けることで戦いに賛同していたが、それを拒否した今、刻印虫は間桐桜を責め続けるだろう。」

「何をしている。」

マスターならば早く殺し合え。

出来ぬのならばおまえを食い殺す――「とな」

思考が壊れかける。

神父の言葉だけで視界に火花が散って、「なぜ桜だけがそんな目に」というぶつけようのない怒りが湧き出る。

「なら――！ マスターでなくなればいいんじゃないのか。令呪を使い切ってサーヴァントと契約を解除すれば、もうマスターじゃないんだから――」

「それは勧められん。言っただろう。刻印虫の作動条件は『マスターの責務を放棄する事』だと。」

自らの手でアレとの契約を断れば、刻印虫は今度こそ間桐桜を食い尽くすぞ」

じゃあ、一体どうすればいい。

このまま桜が死ぬのを黙って見てればいいとでもいうのか  
その場に立ち尽くしてしまおう。俺にはどうしてあげることもない  
出来

だが、そんな俺とは真逆に遠坂は立ち上がり言った。

「…ありがとう綺礼、もう十分よ。あとは私が処理するわ」

そのまま桜が眠っていると思われる部屋に向かって行く。

「遠坂？… なにを」

「さっき言ったでしょ？このまま治らないっていうなら桜を処理するって」

そう、冷酷に言い捨てるのだ。

「なに、言ってるんだ？… おまえ、桜を殺すつもりか」

理解が追いつかない。どうして姉である、遠坂がそんな決断をしてしまうのか。それが、魔術師だと言ってしまえば終わりだが、納得なんて出来るはずがない。

突き進んでいくその腕を掴む。

表情のない顔で遠坂は振り返った。

「じゃあアンタはどうするつもり？」

分かっているの、桜はマスターとして戦わないと生きていけない。マスターであるかぎり、他人から魔力を取らないとやっていけない体じゃない。

そんなの、どんなに手を尽くしても結果は見えてるって思わない？」

遠坂は感情を消した顔で言った。

そんなわけない。だってまだ、俺たちは何もやってないじゃないか…！

「思いか馬鹿！まだしてもない事に、なに勝手に結論をだしてんだよお前！」

「出すわよ… 桜の問題が桜だけならまだ希望はあるわ。でも、そうじゃないでしょ？」

悪いけど、わたしは貴方みたいに、一縷の希望にすがって害を拡げる事はできない。そんな、決断を先伸ばしにする弱さが、逆にあの子

を苦しめるのよ」

遠坂の言い分は正しい。

死が救いになる、ではなく人を救うという点ではその決断は正しいのだ。

対して、俺の思いつくのは打算と妥協に塗れた失策ばかりだ。

一人を殺して大勢を救う。

それは——

衛宮士郎がずっと否定してきて、けど、心の奥で受け入れてしまっていたことだ

けど、けどな

「——違う。お前は間違ってる」

「衛宮、くん？」

「俺は犠牲なんて出させない。

お前の方こそ…… やりもしないうちに結論を出す遠坂こそ、弱いんじゃないのか」

桜を殺すことが正義ってなら、俺は裏切っても、いい——

「ふざけないで！それがどんなことか分かって言ってるの!?桜を助ける?どうするっていうのよ!あの子を助けて、あの子に殺される連中も助けるってコト!?

笑わせないで!そんなの貴方一人で出来るわけないじゃない……

!!

「——ああ、出来ない。けど桜を守る。その結果がどうなるかは今から考える」

「っ……!そう、なら貴方は私の敵よ。

この掴んだ手を離して。さもないと、その根本から吹っ飛ばされることになるわよ」

「やってみろ。けどな遠坂。そう、何でもかんでも自分の思い通りになると思うなよ」

…… 握りしめた手に力がこもる。

売り言葉に買い言葉。互いに譲れないもののために、もう後に冷えない状況になつて——

パリンツ

「なんだ!?!」

「え、なに?」

教会の外。

ガラスが割れたような音がちちようど隣の部屋から響いた。

互いに目を見合わせる。

同時に、誰かが駆けていく物音もする。

「走っていく足音だったな。確かに出口はこの礼拝堂と裏口の二つだけだが、窓を割って外に出るとは驚いた。

・・・いや、そうか。この教会の窓は内側から開けることのできない仕組みになっている。仕方なく窓ガラスを割ったのだろうが、病み上がりにしては少々乱暴だな」

「病み上がりがりって・・・まさか、桜!?!」

「それ以外に誰がいる。彼女を寝かせていた部屋は、なぜか礼拝堂での会話が筒抜けでな。お前たちが殺すやなんだだと物騒なことを言うから逃げ出したのだろう」

そんな・・・!?

じゃあ、今までの会話も全部聞こえてたつてののか?

「ふふっ、許せ。構造的欠陥という物だ」

・・・絶対わざとだろ。

不敵に笑う神父に怒りが湧くが、それどころじゃない。

「それ絶対わざとでしょうが!!」

遠坂は俺の手を振り払って扉へ走り出す。

「遠坂!」

「話は後よ!今は桜を捕まえるのが先!...!あの子つてば、あんな体で動くのも辛いはずなのに!」

慌ただしく扉を開け外へ飛び出していった。

遠坂は傘も刺さず雨の夜へ駆けていく。

「っ————!」

俺もグズグズしてはいられない。

桜が何処に行ったのかは判らないが、今は一人にしておけない!

俺も遠坂同様に、雨の中へと走り出した。

◇ 騒がしかった教会もいつの間にか静まり返り、ただ一人の神父が残されている。

神父は少女を寝かせていた部屋の扉を開ける。

「監督役としてはあまり目立つ魔術行使は協力控えて欲しいものだがね」

「もちろん。善処するとも」

当然でしょ？とでも言うように目の前の黒い男は笑った。

本人にとつてはこれでも自重しているつもりなのだ。

「……」

また協会の気苦労が増えてしまうなど神父は内心感じながらも男に話しかけた。

「間桐の……老公を殺したのは君かね？」

男はただ微笑んでいる。

神父はそれを無言の肯定と受け取ったのか少し笑みを浮かべる。

「五百年がこうもあっさりか…… あっけないものだな」

「けど、全部は消えなかった」

——少年は少女を見つけた。しかし、少女は少年が駆け寄ってくるのを拒んだ。自分は罪を重ねてしまっているのだと。

「間桐桜はもう長くない。体に巣食っているあの蟲を放っておけばアレはじきに自我を失う…… 君もあの蟲を取り除こうとしたのだろう？ いくつか跡があった」

——「わたしは汚れている。あなたに相応しくない」と少女は言う。だが、少年はそれでも、それでもと一歩、また一歩と少女に歩み寄る。

「でも無理だった…… 助けるなら11年程遅かった」

男は別段興味もなさそうに答える。もうここまで来れば少女がどうなるうと、その末路を見届けるだけなのだ。

——「他の誰が許さなくても、桜の代わりに桜を許し続ける」

「そうだな、アレを救うなら聖杯の力でも借りん限り無理な話だろうよ」

「救おうとするなら…ね」

男は少女を救う気など毛頭ない。

この戦争が終わるまで最低限マスターとしての機能が残っていればそれで十分。もとより姿を保つための楔でしかない。

「子供から課題を取り上げすぎるのはあまり良くない。彼らがその課題を乗り越えるか、それとも屈するか、それを見守るのも大人の役目でしょ？」

そう言つて、まるで子を見守る親のように微笑むのだった。

——「帰ろう。桜」

## 桜と怪物 「お散歩タイム」

くアトラム・ガリアスタの工房く

魔術協会から参加したマスターの一人であるアトラムはサーヴァントを召喚したのはいいが、現状では直接戦闘に参加するわけではなく、この惨状を目にして静観に徹していた。

「既に4騎の脱落者が出ている。そろそろ僕らも参加する頃合いだと思わないかいライダー？」

「……………」

「チツ、愛想のない女だ」

アトラム家の歴史は浅い。元々、没落するはずの一族から金でその歴史ごと買い上げ成り上がった一族だ。魔術協会内での地位（勿論、金で買った）はある程度あるものの、生粋の名門には劣る。

今回の戦争に参加したのは、自分に箔をつけるためである。

「前回のエルメロイは遊び半分だったけど僕は違う。真剣に勝ちに行くつもりだ。

なにしろ投資した額が違うからね」

彼が召喚したのはギリシャ神話において英雄ペルセウスにより退治された怪物「メデューサ」。今回の聖杯戦争において申し分のない英霊だろう。

もつとも、彼がサーヴァントと信頼関係を築けていればの話ではあるが。

「……………ん？何事だ」

突然鳴り響く警報。

工房内に侵入者が侵入したことを知らせるものである。

アトラムはすぐに配置しておいた使い魔により情報を得る。

「マスターも連れず単身で侵入とは良い度胸じゃないか」

そこに写っていたのは、単身で工房へと遊びにきた黒い男。次々と仕掛けられている罠に嵌っていくものの、何事もなかったかのように進んでく。

どうやら、最下層にある錬成工房に向かっているようだ。

彼が魔術工房としているこのビルの最下層には彼の切り札とも言える魔術道具を作り出すための錬成工房がある。アトラムの魔術は「原始電池」と呼ばれるものであり、科学としての物ではなく、最初から魔術によつて伝えてきた最古の系譜にあたる。

この力を使えば神鳴、果ては天候まで操ることが可能だという。もつとも、その魔術道具を作り出すためには儀式が必要である。原始的な生贄の儀式が。

黒い男が……キヤスターが工房に入り目にしたものは、なんとも度し難い光景だった。

透明のガラスケースに狭苦しく詰め込まれた幾人もの子供。この工房で行われているのは一つの魔術道具を作り出すために行われる生贄の儀式であった。

キヤスターはガラスケースを粉碎する。

中にいる子供たちは意識がないものの息はある。もとより、効率よく儀式を遂行するため世界中から集められた孤児。このまま解放したところでどうなるかは知ったことではない。

だが、それでも生きているのならばマシだと考えた。

「ガツシユアウト猛れ」  
「っ……！」

キヤスターの背後から雷撃が襲い掛かった。

振り向くと、アトラムとそれに付き従うライダーの姿が。

「おいおい、敵地に来ておいて背中を見せるのはいけないなあ」

勝ち誇つたように笑うアトラム。

彼は使い魔を通して聖杯戦争を見ていた。その中で、キヤスターの弱点を見抜いたのだ。

「君は対魔力が低い。いや、あまりに低すぎる。キヤスターのクラスであること疑ってしまうほどにね！」

遠坂のマスターの魔術がキヤスターの体を傷つけたのを確認した彼は「原始電池」を利用した自分の魔術であれば十分に対処できる相手だと判断した。

それほどまでに、キヤスターの魔術耐性はないに等しいのだ。



実際、魔術を受けたキャスターは皮膚を切り裂かれ、身体中を焼き焦がされている。

しかし、その顔が苦痛に歪むことはなく、自身に纏わりつく電撃を興味深そうに見ているだけだ。

「うん。効くね、これ。」

よければ、もう少し肩のあたりの電圧を上げてくれないかい？最近肩こりが酷くって」

「なっ!？」

キャスターは肩を指差しながらアトラムに言った。

彼にとってその言葉は侮辱以外何にでもなかった。

かの大魔女メディアに匹敵すると自負していた己の魔術は目の前の敵にとつてマッサージ機程度なのだと。

「~~~~~!!」

やれライダー!!」

故に彼が取る行動は一つ。

己のサーヴァントに敵を排除することを命じる事であった。

ぶつかり合う、黒い影。

ライダーは鎖を操り、キャスターに向かって駆ける。

お互い自らの速さが強み。互いの攻撃を避け続け勝負は拮抗するかに思われたが…

「……………」

ライダーは自分のマスターから受けた扱いを思い出していた。

『ほう、なかなか可愛らしいじゃないか。長身であることを除けばだが…』

『どうだい、僕のハレムに加わるというのは?』

『いえ、お断りします』

『ふざけるな!使い魔風情が口答えをするんじゃない』

自分を殴ってくるマスター。その光景が脳裏に浮かんた。

命令には従おう、それが自分の役割であるのだから。

しかし…しかしだ。このままマスターに従っていても意味はあるのだろうか?

そう考えたライダーは、

「うわー、やーらーれーたー」

あつさりと負けを認めたのだった。

キヤスターは面を食らったようだが、まあいつかとアトラムに近づいていく。

もとより目的はライダーではなく、そのマスターの方なのだ。

「ふ、ふざけるなライダー!! 僕を守るのがお前の役目だろうが!」

「申し訳ありませんマスター。それでも私、全力を尽くしたのですが」  
「嘘つけ!?!——ひいつ」

首を締め付けられ、そのまま持ち上げられる。

キヤスターの目には僅かに怒気が浮かんでいた。その理由は本人にもわからないだろう。

「殺される!?!」

そう感じたアトラムの行動は早かった。

「ま、待ってくれ! 取引、取引をしようじゃないか!」

「はて、取引?」

「そ、そうだ。僕にできることならなんでも聞いてやる!

だ、だから命だけは...」

まだ自分は何もしていない。何も成していないのだ。だからここで死ぬわけにはいかないと懇願する。

「なんでも、なんでもかあ」

意地悪く笑みを浮かべながら思案する仕草を見せるキヤスター。

ビクビクと震えるアトラムの姿が面白くてしようがない。思わず、首を絞める力が強くなってしまうほどに。

ひとしきり反応を楽しんだ後、キヤスターは答えた。

「なら——」

それを聞いたアトラムは驚愕の表情を浮かべ、そんなのできるはずがないと首を振る。

だが、結局は自分の命可愛さにキヤスターの願いを聞き入れるのだった。

## 桜と怪物 「私の勝ち／裁定者」

先輩の家に帰る頃にはすでに雨は止み始めていた。

濡れた体をタオルで拭き、今はあてがわれている自室の椅子に座っている。

「サクラ…ごめんね。もう二度とあんな真似はしないよ」

部屋に戻るといつの間にか目の前にいたキャスター。

キャスターは鏡の前に座った私の髪を梳きながら申し訳なさそうに謝罪してくる。

うそつき

「もう二度とあんな事しないで」

わたしのせいで先輩を傷つけてしまった。

キャスターのせいで

先輩は左腕を失ってしまった。不気味な赤い布に包まれているのはアーチャーの腕。

動かせるようになるのは、まだ先になるだろう。

でもよかった。これで先輩は無茶ができない。

だから私が守ってあげなくちゃ。

キャスターの行動は許せない、許せないけど…

「…でも、咎めはしないわ。あの場では貴方が正しかった」

彼はサーヴァントとして当然の行動をした。私のサーヴァントとして、姉さんのアーチャーに勝った。

そう…私のサーヴァントが勝ったのだ。

「サクラ？」

私のキャスターが勝った姉さんのアーチャーに勝った私のキャスターが勝った姉さんに勝った私が勝った 先輩を傷つけた キャスターが勝った姉さんのアーチャーに私のキャスターが姉さんのわたしが姉さんよりも 先輩を 勝った勝った姉さんに勝った 許せない 私のキャスターが勝った 私が傷つけた 私たちが姉さんに勝った姉さんよりも強い 先輩に手を出した

姉さんに勝った

わたしのキャスターが

姉さんの

アーチャーに

わたしが勝った

勝ったの

わたしが

先輩を

わたし達が

姉さんに

先輩を傷つけた

姉さんのアーチャーにわたしのキャスターが勝った

「サクラ」

その声でハツと意識が鮮明に戻る。

わたしは一体、何を考えてしまっていたんだろうか。

「僕が勝つてみせるよ」

「え・・・」

キャスターはわたしの考えを見透かすように耳元で囁くのだ。

「君はマスターなんだ。なら、その資格はあるだろう？」

聖杯戦争で戦い、魔術師として姉に勝つ。その何が悪い？君はただ当然のことをしているだけじゃないか」

彼は笑みを浮かべわたしの手を握る。

わたしの目を見つめ、ただ優しくその手を包み込む。

「サクラが望むなら、僕は君に勝利を捧げる。僕は君のサーヴァント、そして武器だ。」

君はただ信じてくれればいい」

「信じる？」

「うん」

月明かりが差し込む。

どうやらもう雨は上がったようだ。

「君のキャスターは強い、そう信じてくれれば必ずや君に勝利を」

嘘偽りのない言葉で、彼は誓う。

そう、きつとわたし達なら勝てる。いつの間にかそう思ってしまうわたしが居た。

——夜はまだ明けない

◇

「サーヴァントが敗れたわけだが、これからどうするつもりだ凜。このまま大人しく屋敷に立て籠もり、聖杯戦争の終わりを待つのが正し

い選択だと思うが」

「いやよ。このまま終われるはずないじゃない」

凜は諦めるつもりはない。

妹である桜のこと、そして依然として正体が掴めていない謎の黒い影。

土地の管理者としての責任という物がある。

この一連の出来事にあのキャスターが一枚噛んでいることは間違いないさそうだが、真名すらわからない今、単独で手を出すわけにはいかない。

「お前ならそう答えると思った」

その時、教会内に靴音が響き渡る。

一歩進むたび高音の靴音と金属の擦れ合う音が響く。

奥の方から歩んでくる男は煌びやかな黄金の甲冑に身を包み、何を語らずとも男が偉大な者であると証明するかのようなオーラが溢れ出ている。

「ちょうど、マスターのいないサーヴァントがいてな」

それは本来であればあり得ないものだ。

シャンデリアの灯りが邪魔でしかないほどその身を光り輝く黄金で包む男。

黄金の男はただ歩くだけ。ただそれだけでその場にいるものを圧倒してしまふ。

「紹介しよう。前回の聖杯戦争の参加者であり、今回のもう一人のアーチャー」

男は少女を値踏みするかのように視線を向ける。

そして、冷酷な笑みを浮かべた。

「——英雄王 『ギルガメッシュ』だ」

王は舞台上上がる。

遙か太古の神話の決着をつけるため。

少女は声を発することできなかった。目の前に存る絶対的な「力」に人としても魔術師としてのプライドも屈してしまいそうになる。

「ふんっ、あのような道化と化して我の前に姿を晒すとは。ならば野次の一つでも飛ばしてやらねばなるまい」

どこか傲慢な物言いの男は、この後起こる神話の再現を愉しむように、そして裁定者として役割を果たすために。

「では、尋ねよう」

「英霊」としての義務である問答を交わすのだった。

「——貴様が不遜にも王の光輝に縋らんとする魔術師か？」

## 桜と怪物 「Let's go イリヤ城」

さて、衛宮一行は森の奥に佇む大きな城へと赴いていた。目的は同盟の締結。

桜の体調はひとまず安定している。

ならば今最も警戒するべきなのは未だ被害を出し続ける「謎の黒い影」である。その為には戦力が必要。凜とは桜に関して決別しているので論外。未だ、所在不明のライダーのマスターも期待できないだろう。

ならば、現状最高戦力のイリヤの元を頼るしか手はない。

「本当についてくるのか桜？話をしに行くだけだから、何も無理してこなくてもいいんだぞ」

「いいえ、先輩ばかりに負担をかけてしまうのは申し訳ないですし、それにこの頃は不思議と体調が良いんです」

桜はマスターとして戦うことを選んだ。

そう、彼女は一人ではない。

「いざとなったらキャスターが守ってくれます」

二人の少し後ろに控えているキャスター。

その表情はいつもと変わらずわざとらしい笑みを浮かべてはいるものの、どこか強張っている。

正直乗り気ではないといったところか。バーサーカーに近づくことを避けようとしている節がある。

「本当に、信用していいんだろうな」

士郎はキャスターに問う。

信用できない、と言うのが本音だが今の自分達には戦う力はない。アーチャーの腕を使うにしても、最悪の事態に陥る可能性が捨てきれない。

だからと言って、キャスターに頼るというのも危険なことには変わりはない。

「勿論、サクラを守るという点に関しては僕たちは手を取り合える。そうだろうか？」

「……」

「ふふつ、そんな顔しないでよ。サクラの味方である限り、君のことも守ってみせるからさ」

今は、その言葉を信じるしかない。

どちらにせよ、彼らは進むしかないのだから。

とはいえ、こんな季節に森に入るのは些か堪える。寒さで身が凍りそうだ。

士郎はキャスターに尋ねた。

「なあ、俺と桜を抱いて、城までひとつ飛びできないのか？」

キャスターの身体能力ならそれが可能であると士郎は考えた。時間をかけて進むよりもそちらの方が早いし、安全では無いかと。

しかしキャスターはそれを渋る。

「撃ち落とされる訳にはいかないからね」

「？」

ひよつとして、この森には何か罫でも仕掛けられているのだろうか。辺りを注意深く見渡すが特に変わった様子はない。

鳥の鳴き声すら聞こえないこの森はまるで屍のよう。

進めば進むほど深くなっていく木々の海は、果てが無いのではと危機感を抱かせる。

森に入ってから数時間。

キャスターはともかく、二人には若干の疲労が見られる。歩き続けるにつれ息切れも多くなってきた。

一度出直すべきかと考えた時、

「——見つけた」

キャスターが指を刺した方向を見る。

その先にあったのは暗い闇だ。

木々の隙間、注意していなければ見失うほどの隙間の向こうに、何か、ひどく場違いなものがあつた。

「壁……ですかね？」

不思議そうに言う桜。士郎にもそこにある闇がなんであるかは理解できない。



「聖杯戦争の拠点：雪国から空間ごと持つてくるとは無茶をするものだ」

何かをボヤきながら一足先に遠くへ見える闇へ向かうキャスター。まだアレの正体が掴めず、困惑しながらも二人はその後に続く。森を抜けた。

アレほどは手がないと思っていた森はあっさりとなくなった。いや、ここだけハサミで切り取られたように、森の痕跡が無くなっていたというべきか。

巨大な円形の広場に鎮座する雪の城。

それがイリヤスフィールの住処だった。

あの少女が住むには広すぎ、一人で暮らすにはあまりに寂しすぎる。

深い森の奥に佇む孤城がそこにはあった。

日本にあるまじき古風な城に圧倒されてしまう。

おそらく、イリヤスフィールは一行がやってきているのは知っているのだろう。

なら敵意がないことを示すために正門から堂々と入ろうと士郎は考えたが、

「よし、行くぞ桜…桜？」

桜はただならぬ顔で城を見上げている。

その顔は何かに怯えているような、そんな緊張感に満ちていた。

「桜、何か気になるのか？」

「… なにか、私たち以外の誰かがいます」

「そりゃいるだろう。イリヤとバーサーカーが住んでるんだ」

「そうじゃなくてそれ以外の、誰か、です」

「それ以外って…」

誰だ…？

しかし、その疑問は突然鳴り響いた轟音に掻き消された。

「ドゴーンツ」と豪快な崩壊音。

城壁はキャスターの触手によって無惨に崩れ去った。

「え——ちよ、おまえ、ええ」

「キャ…」

口を抑え驚愕する。二人の頭には「これ弁償額どれくらい？」という考えがよぎった。

そんなのお構いなしに黒い影は城内へと消えていく。

「っ——ああもう、なんなんだよアイツ…!!」

こっちは話し合いに来てるのに、これじゃあ城攻めと見られても言い訳できないぞ、と土郎は思う。しかし、やってしまったものは仕方がない、桜の手を引き、慎重に城内へと足をすすめた。

侵入した部屋から廊下に出る。

豪華絢爛な光景に目を奪われるが、それ以上に圧倒的な何者かの存在を感じてしまう。

これはバーサーカーのものではない。あの巨人以上の何者かが、この場に存在している。

「……そうか、来ちゃったかあ」

キヤスターは響いてくる戦いの音に耳を傾ける。

何かが絶え間なく降り注ぐ音、微かに響く剣と剣が打ち合う音。

嵐のような轟音が城中に響いている。

「ッ…」

桜の肩が震える。

嵐のような音を怖がっているのか、それともその正体に気付いたのか、

いずれにせよ、この城のどこかでバーサーカー達と何者かが戦争をしているのは間違いない。

一行は駆け出す。

音は下から響いてくる。

位置関係からすると、戦いは城の中心、来訪者を迎える大広間に間違いない。

降り注ぐ音に比例して打ち合う音は刻々と小さくなっている。

なにが起こっているのか、理解しているのはキヤスターだけか。しかし、意見を交わしている場合はない。



除するため黄金の王を従える。

「……ほう？」

自ら首を差し出しにくるとは、躰の甲斐があつたな雑種」

王の口元には不敵な笑み。

もとより、少女や士郎など眼中になく、ただ一人、黒い男にその言葉は向けられる。

「その物言い。泥を被ろうが変わらないなんて……相変わらずだねギル」

皮肉と少しばかりの喜びを込めてキャスターは答える。

「……貴様は随分と醜くなった。見るに堪えん、魂まで腐敗したか」

「酷いなあ、僕は人として歩んだだけさ」

王はあくまでも尊大なまま、それでも明らかに他の者達へとは違う態度で言葉を紡ぐ。

「くだらん。それが呪いであることがなぜ分からぬ。何度死のうが、そこだけは変わらん」

先程までの退屈に満ちた顔が嘘のように、嫌悪と憐れみ、そして僅かな喜び。複雑な表情を王は浮かべた。

目の前の怪物はあの頃と全く変わっていない。

姿形が変わろうと、あの日の想いだけは変わらなかった。

しかし、それが男を縛りつけているのは確かだ。

「悪意など一過性のものであり、いずれ薄れゆくものよ。それを何百、何千と繰り返せるほど貴様は狂人ではなからう」

「憐れみのつもりか？よしてよ、気持ち悪い。

それに今更遅い、手遅れだ」

あの日、共通の友の死をもって二人の道は分かたれた。

この会話は既に意味の無いもの。言葉を交わすには、遅過ぎたのだ、

「僕はただ、自らの願いを叶えるためここにいる  
だからさ、」

男の纏う霊基が変質してゆく。

本来の、彼らと共に生きた頃の姿へ。

ギリシヤの怪物など偽りの名、キャスターなど偽りのクラス。

これは二人にとつては再現にすぎない。あの日のように、ただ殺し合う。ここには止めれるものなど存在しない。

状況が掴めぬ子供らをよそに、二つのjokerはぶつかり合う。

「——おまえは邪魔だ、英雄王」

怪物の血が辺りを侵食し始め、周囲の地面と同化を始める。地面が蠢き、怪物の一部であるかのように、無数の触手として顕現する。

「そうか、ではこれ以上言葉を交わす必要もない。

——裁定の時だ。十分に役目を果たして逝け。我に醜態など晒してくれるな」

英雄王はそれを見て、宝具の力で宙へと浮かぶ。

王の背後に黄金の波紋が出現する。あらゆる原典が収納される宝物庫——「王の財宝」ゲート・オブ・パレロンより、数十、数百本の宝具が顔を出した。

それに呼応して、怪物の操る触手が、剣や槍、弓といったあらゆる武器……いや、彼がこれまで見てきた宝具へと姿を変えた。

相対する数多の宝具。

今ここに、かつての神話が再現されようとしていた。

## 桜と怪物「人の軌跡」

『擬態解除 class casterから… monster

ステータス 偽装停止 | | | | EX… error

ステータス E E A A++ E EX』

自身が纏っていた偽りの名を剥ぎ捨てる。これが彼の最初の姿。服装は黒い衣から純白の衣に、それはかつての友の面影を思い出させる。

class モンスター

そのクラスの該当者は英霊でも反英霊でもない。その該当条件は『怪物』であること。もしくは怪物として葬られたこと。

キヤスターなど偽りのクラス、この世界に現界するための楔にすぎない。

己の願い… 過ちを正すため怪物は再び人類に牙を剥く。

—— さあ、目を開けよう。敵は目の前にいる。

金色の鎧を纏うギルガメッシュの背後の空間から撃ち出される無数の宝具。このまま受け止めれば霊基ごと消滅させられるのは間違いない。ならばどうするか？そんなのことも考えるまでもない。

宝具には宝具で対抗すればいいのだ。

大地に血を一滴垂らす、それで事足りる。神代の頃の規模は不可能、不満はあるがこれは人類が選んだ道。それに関して口を挟むことはできない。

今できる全力の力を振るうのだ。

でなければ // 死 // だ。

「最初から… フルスロットル 全力でいくよ、ギル」

その怪物は迫る死の最中でさえも笑って見せた。

“人間が歩んだ道。それは星と共生する存在から星の命を消費する存在へ進化した”

“彼らは耕し、栽培し”

“収穫し、奪い合い、助け合い”

“創造し、破壊し”

“対話し、鬱憤し”

“威圧し、落胆し、加虐し、乱倫し”

“崇拜し、喝采し、繁殖し”

“そして愛し合い、殺し合うのだ”

「——今こそ紡ごう 人の歩み、その業を」

それは、怪物が普段から詠唱の必要もなく宝具と言えるものだった。大地に魔力が走る。怪物の血は大地を侵食し、己の一部へと強制的に塗り替える。

『テラス・オブ・バビロン  
人の軌跡——』

彼が人として歩んだ人生そのもの。そして、人の歴史を再現した宝具。彼が目にしたあらゆる宝具<sup>歴史</sup>が生み出され、収穫される。

底はある。確かにある。しかし、それは星の終わりと同義。ゆえに無尽蔵。

向かいあう二人。全ての砲門が狙いを定める。

そして一呼吸置いた後、双方合わせて百を超える宝具が放たれた。金属同士の衝突音が崩れかけの孤城に響き渡る。

一騎当千の男たちの戦いはまさに神話の再現そのものと言えるほど苛烈なものだった。

あらゆる宝具の原型を集めたとされる、最古の英雄が所有する黄金の蔵。

並の英霊にとっては必殺一撃になり得るもの。それが無造作に、そして凄まじい速度で蔵から射出される。

対する怪物は、大地そのものから宝具を強制的に“収穫”する。それこそが星を食い尽くす人の業。

神秘を纏った無数の宝具が生み出され放たれ続ける。

「ほう…安心したぞ。中身が腐ろうとその猿真似は相変わらずか」「酷い、そんな言い方はないじゃないか。アレより万能ではないにしろ、これで対等だ。あの日と同じように遊ぼう?」

「貴様のそれはどこまでいっても真似事に過ぎん…決して奴には届かぬ」

「… やだなあ、今は僕を見てよギル」

「言ったであろう、見るに堪えんと」

次第に砲門は百を越え、千へと昇る数ほど開かれる。対抗するように怪物も生み出す宝具を増やす。城への被害などお構いなし。寧ろ、彼らにとつてこの城は狭すぎたのだ。

だから、広げる。

遠慮なんてものはない。ここは既に彼らの遊び殺し合いの場なのだから。

「くっそ… 無茶苦茶だ。あいつ、俺たちが居ること忘れてんじやないのか…！」

士郎は宝具の嵐が飛び交う中、震えるイリヤと桜と共に、突然現れた壁に身を隠していた。壁は放たれた宝具を全て受け止め少年達を守っていたのである。

強い魔力を帯び、ある種の結界の役目を果たす黄金色の壁。それを構成する煉瓦の一つ一つに『ナブー・クドウリ・ウスル』という意味を表す楔形文字が刻まれた壁が二重、三重と重ね聳え立った。

まるで、少年達を守るように。

「我を前にして他の雑種を気にするか。随分と余裕があるな？」

「…？ああ、約束した… したような気がするから。それに、まだあの子には利用価値があるんだ。やすやすと死なせない。死なせてやるものか」

自覚が無かったのか、ギルガメッシュに指摘され自身の行動に疑問を浮かべた。しかし、少女を利用するためと自分を納得させた。少女は怪物の願いを叶えるため不可欠なのだ。どのような末路を迎えるであれ、死なせてはいけない。

「あれが何であるか貴様は理解しているはずだ。罪を背負う前に殺してやるのがせめてもの慈悲であろう… それが分からぬほど腐りよったか」

魂が腐れば外見もその思考も偽りのものへと塗り替えられていく。怪物は一つの願いに執着し続け、ついにはその願いすらも忘れ、別のモノへと塗り替えられた。

ギルガメッシュの言葉は、その願いを否定するもの。



願いを否定された怪物は、張り付いた笑みではなく苛立ちをみせ、  
絶るような声で王に叫んだ。

「…一人を殺して救える世界など滅んでしまえ。ああ、そうさ。正し  
しさや善行だけで救えるなら僕のことも救ってくれよ…！それを  
してくれないから、こうして自分で頑張っているのに…！！」

「溺れゆくものは、海の深さに気を取られ広さを知らぬ…今の貴様  
は駄々をこねる子供にすぎん。その願いは今を生きる人間にとって  
傍迷惑なこと。いい加減に目を覚まさんか、戯け」

城が崩れ去る。

いや、よくここまで持ち堪えたと言うべきか。巨人と王の戦いの時  
点で限界だったのだ。この城は十分にその役目を果たした。

士郎達は落ちてくる瓦礫をなんとか避けながら、城から脱出する。  
後ろを振り返る。凜は既に居ない。彼女のことだ、心配せずとも脱  
出している、ならば自分達の命を守らねばならない。

退路は幸いにも残されていた。問題は落ちてくる瓦礫と、未だ降り  
注ぐ宝具であるが、

「この壁…守ってくれてるのか」

彼らを守るように壁が現れる。恐らくはキャスター…モンス  
ターの宝具だろう。もう彼らがこの状況について行くのは不可能で  
あった。あれの正体も分からず、さらに疑心が増すのみ。とにかく自  
分達ができることはこの戦場から逃げ帰ることだ。痛む腕を抑えな  
がら少女達を連れ城の外へと飛び出す。

戦場は広場へと移る。

砲門の数はさらに増え、数千もの宝具がぶつかり合う。戦闘の余波  
により大地が抉れ、瓦礫は宙をまい、森の木は薙ぎ倒される。アイン  
ツベルンが張った結界のおかげもあってか外界への影響はゼロに等  
しい。それも時間の問題に過ぎないのだが。

「！！」

怪物の姿が一瞬揺らぎ、紫の衣装を纏った女に変わったかと思え  
ば、腕を前に出し無数の槍を発現する。己の内にある魔力を纏わせた  
真紅の槍が王の心臓めがけ射出される。その槍は因果によつて標的

の心臓を必ず貫く呪いの槍、いくら英雄王といえど心臓を潰されてはその命を絶たれるのみ。

向かいくる宝具の雨を貫き払い、無数の呪い纏いし槍が心臓めがけ突き進む。

だが、英雄王は一步も動かない。

「…小癩な真似を」

ギルガメッシュは『ゲート・オブ・バビロン王の財宝』から複数の盾型宝具を展開する。因果律を操る宝具が向かってくるならば、こちらも因果律により絶対に所持者を守る宝具で防げばいい。そうすれば矛盾が発生し、後は質が高い方が打ち勝つのである。

空間が歪む。

金切り声をあげ、矛盾がぶつかり合った。

目の前に迫ったその槍は数枚の盾を貫いたところで停止し崩れ去ってしまう。怪物の宝具は所詮『完璧に近い再現品』に過ぎない。その全てが宝具の原典である王の財宝と比べると質では劣る。

「ねえギル。ひよつとして『僕が間違っている』そう言いたいのか？」

口元を歪ませながら怪物は尋ねた。その問いに王は無言で答える。「可笑しいよ。だって、助けを求めるなら、救われないものはない。どんなものであれ、最後には救われるんだ。そうでなくちゃ不公平だ。そうさ、僕にだって権利はある、そのチャンスをくれたっていいじゃないか！なんで、どうして僕の邪魔ばかり…」

それを遮るようにパチンと英雄王の指が鳴る。

「見苦しい」

瞬間、怪物を取り囲むように砲門が開かれる。周囲360°を囲まれば逃げ場など存在しない。

冷静さを取り戻した怪物は身構え、

「…靈基偽装」

怪物の姿が再び変わる。精神も、感情すらも偽装し、世界を騙すのだ。

反撃の隙を与えぬほどの宝具の雨が降り注ぐ。怪物はそれを迎え撃つ。

「姫鶴飛んで山鳥遊ぶ… 谷切り結び五虎退かば… 祭剣まつりて七星流る… 松明照らすは毘天の宝槍」

詠唱を唱える。目には歯を、宝具は宝具で受け止めるしかない。

先ほどまで黒い衣を身に纏っていた男は、白い法衣を身に纏い長槍を天に掲げていた。そして周りに八本の武器が現れる。恐らくはそれぞれが名のある宝具。獲物を撃ち抜かんとする宝具の数々をその8つの宝具で薙ぎ払っていく。でも、駄目だ。それでも全ては受けきれない、手数が違いすぎる。

それゆえ、もう一つの手を繰り出す。

「運は天に在り… 鎧は胸に在り… 手柄は足に在り」

胸に手を当て、偽りの信仰で祈る。

生前、銃弾飛び交う敵の眼前で悠然と酒をあおるも、全ての弾はその者を避けて通ったといわれる、ある軍神の逸話がもとなった加護。自身の周囲に事象操作に近い現象を起こし、攻撃の軌道すら歪めるため本人が当たると思わなければ絶対に攻撃が当たることはない。そう、本人が当たると思わなければ。

「——はっ、所詮は猿真似よな」

「ちっ… ツー！」

ゆえに本人に当たると思わせる程の気迫を込めた一撃であれば加護を破ることは可能。

彼にとってギルガメッシュは絶対的な強者だった。

周囲に張り巡らされた加護が撃ち破られ射出された宝具が襲い掛かってくる。

それを八つの武具を同時に使いこなし、怪物は迫る宝具を払い落とすしていく。

が、打ち落とせたものは僅か数十本。打ち漏らした宝具が頬を掠める。

「貴様は他人の真似をせねば生きてゆけん。それゆえ個人に執着してしまう… 愚かなものよ」

「…うるさいなあ。個に囚われることの何が悪いのさ。誰かを愛して何が悪い。知りたいと思っって何が悪いのさ!!」

「分からぬか？貴様が関わるから碌なことにならないことを。己の胸に問うてみよ、今まで救えた者はいたか？最後まで愛せたか？…その者の名前すら臆げな貴様が愛を語るとは、片腹痛いわ」

「名前…違う…僕はただ、ただ」

思考にノイズが走る。

次第に撃ち落とす手数も追い付けなくなっていく。

このままでは、宝具の雨に押しつぶされるのは明らか。再び宝具を生み出したとしても焼け石に水。

ならばどうするか、

考える時間はない。王の言葉でぐちゃぐちゃになった自分を無理矢理正気に戻す。この1秒に満たぬ時間の中で、既に百を超える宝具が迫ってきている。

怪物は握った槍を振るいながら跳躍し、先程数十本の宝具を打ち払ったことで生まれた隙間へと身を躍らせた。迫る宝具の全てを躲すことは不可能。だが気にすることはない。修復に魔力の大部分を回しているおかげで致命傷には至らない。

そのまま、攻撃の余波で宙に浮かんでいる瓦礫に足をかけ、空へと駆け上がる。

「ほう、不遜にも我に向かってくるか」

突如怪物は空中で反転し、瓦礫を足場に四方八方駆け回り徐々に接近していく。

そも、聖杯戦争の戦いにおいて、人間離れした速さなど珍しくもない。しかし、それを加味したとしても迫り来る怪物の速さは異様であつた。

『ギリシャにおいて最も速いとされた狩人に追いついた』

そう謳われた、彼の一つの逸話。それに恥じることなき速さをもって戦場を駆け回る。

一瞬にして王の目の前に迫る剣先。

「読んでおるわ」

怪物の手持ちの武具が槍から一振りの装飾剣に変化しているのを見抜いた英雄王。『王の財宝』ゲート・オブ・パレロンを放ちながら大きく距離を開こうと

する。

が、それは怪物に絶好の機会を与えることになる。

「――永遠に遠き……勝利の剣！」

怪物の剣が光り輝き、斬撃が巨大な光の束となる。

それは決して彼の聖剣の輝きに届くことはない。それでも一人の王は、理想の王の伝説を追い求め続けた。その王の姿を模した怪物が手に持つその剣は、なんの変哲もないただの剣。限りなく聖剣に近づけた、ただの剣である。

その剣から放たれる光はただの模倣に過ぎない。しかし、限りなく本物に近いそれは、真に勝るとも劣らない威力をもって王に襲い掛かる。

「くだらん！」

ギルガメツシユは体の正面に盾を顕現させ、光の束を防ぐ。

「よりもよって、星の願いの贗作を我に向けるか！よほど死に急ぎたいようだな。その愚行、万死に値するぞ！……むっ」

光が晴れる。盾を散らすと、そこには怪物の姿はなかった。

そして、自分のすぐ真後ろ。空気が凍るほどの殺気が背中を刺した。

背後に浮かぶ瓦礫。

ギルガメツシユが目を細めながら振り返るとそこには、

「――獲った」

矢を振り絞り、王の背に狙いを定めた怪物の姿があった。

この至近距離であれば盾を出す前に射抜ける。

大弓が激しく撓み、真つ二つにへし折れようかというその瞬間、  
「射殺す……」

その宝具の真名が告げられる。

それは怪物が最も恐れた英雄の宝具であり、それが知っている人の到達点の一つである至高の絶技。かの大英雄が生み出し、ただ一人で完結させてしまった「一つの神話」。その矢は神気を纏い標的の命を射抜くまで戦場を駆け巡るのだ。

ああ、だが悲しいかな。

「百……ッ!？」

一瞬の隙だった。そう見えても仕方のないことであつた。しかし、この戦いにおいて英雄王は油断も慢心もない。ゆえに、怪物の浅知恵など手に取る様に読んでいた。

「——天の鎖よ——」

鎖の音が鳴り響く。

矢は放たれることなく、鎖に砕かれた。

両腕、両足、体の至る所の部位があらぬ方へ捻じ曲げられる。

「がっ…ギギツツツツ」

現れた無数の鎖によって、黒い怪物は捉えられた。

奇しくも、かつての神話を再現する光景。王の庭に手を出した怪物は、天の鎖によってその身を縛り付けられる。

抜け出す術はない。一度神を取り込み、その身に神性を宿す怪物には、この鎖は断ち切れないのだ。

そうして英雄王ギルガメッシュは、王ではなく、戦士ではなく、彼を打ち倒す英雄ではなく『裁定者』として言葉を怪物に紡いだ。

「喜べ。」

「——貴様を『人』として裁定する」

怪物の頭上に断頭台が顕現する。もはや逃げる術などない。

鎖の軋む音が鳴り響く。それにとつて死は何よりも望むものであり、何よりも恐れていることだった。

刃が降りる。

そうして、罪人のように

——首を断たれた。

## 桜と怪物「蛇」

鮮血が宙に舞った。

グチャツと音を立てて怪物の首が地面に落ちる。首を失った体がピクピクと痙攣し、ドス黒い血を垂れ流し続ける。これで怪物は死ぬ…。

断頭台により怪物は裁かれ、その命を散らした。

これにて終幕

ギルガメツシユの勝利でこの戦いは終わる… はずもなかった。

それを見た少年たちは息を呑む。

彼らは知っている。

「—g、Aaaaaa…」

瞬時に飛び散った鮮血、その生首が再び怪物の体に戻っていく。それはまるで映像の巻き戻しの様。

首がくつつく。

その目に光が戻る。

「逞帙>墓セ縷√い縷√い逞帙>縷√い苧?菴阪≠!？」

鎖が軋む。

怪物は、思考がまだ回復しないのか狂ったように痛みを訴え、鎖を砕こうと暴れる。

悲しいことに、いくら不死に近い体を持っていようとも痛覚は人並み、正気を保ち続けるのは難儀なことだ。

「ほう、やはりこれでは満足できんか」

「雖後□雖後□雖後□縷ゆ≧逞帙>豁サ縷オ縷溘?縷エ縷?勧縷!!」

獣のごとく唸り声を上げながらもがく怪物を王は冷めた目で見下ろす。

既に勝敗は決まった様なもの。

怪物になす術はない。

必死に触手を伸ばし、今から始まる裁定に抗うように抵抗するものの、その抵抗すらもギルガメツシユが取り出した剣の一振りにより斬

り捨てられる。

「なぜ拒む？ 貴様が欲していたものだろう、ありがたく受け取らんか」  
王の財宝ゲイト・オラ・パレロンが開かれる。

次々と宝具が射出され、怪物を殺していく。

何度も、何度も、何度も……

けれども怪物は死なない。

死ねない。

もはや生命維持すらおぼつかぬ。産まれたばかりの赤子同然だというのに、死ねない。

「…… あっ…… がっ……」

「ただ斬る、刺す程度ではダメか」

新たな宝物庫への扉が開かれる。

そこから顔を出したのは、武器だけではなく概念そのもの。銀色に輝く氷、白く輝く炎、重力を放つ砂…… 英雄王の蔵にある以上それは人が生み出したものなのだろう。

「さあ喜べ。」

圧死、轢死、焼死、好きなだけ味わうがいい。もはや普通の死に方では満足出来ぬであろう？」

「…… あ……」

拒絶の声を上げることも許されない。

死なぬというなら、死ぬまで殺す。

怪物は見上げることしかできない。受け入れるしかないのだ。

それらは確かな殺意をこもった動きをし、全ての砲門が狙いを定め

—— 宝具”の数々が怪物へ射出された。

◇

蘇生の痛みを形容するのは非常に難しい。

それは人知の及ぶものでなく、決して人知の内にあつてはならないものであるからとも言える。

『あ、あ、あああああああああああああ』

—— 正気を保つ事などできない。

自分とも思えないほどの醜い獣の叫び声が聞こえる。



死を何百と味わおうが慣れない痛み。

しかし、この痛みこそが僕を“人”に足らしめているのだと思う。痛みとは実在の証であり、その不自由さがなんとも心地よい快感を生み出す。

蘇生の瞬間、僕は何度でも産声を上げる。

僕は戻ってくる。

確信していたことではあるが、この男では僕を殺すことはできないようだ。……消し飛ばされれば、話は変わって来るだろうが。その際は仕方ない。この星ごと道連れだ。どうであれ僕の勝ち。

とは言えだ。

それでは人類に申し訳ない。彼らは愛すべき隣人なのだ。全てを巻き込むというのは本意ではない。僕は悪であるが故、彼らが居なければ存在ができない。

……おかしな話だ。僕が抱く願いは彼らにとって最悪であることに変わりはない。だと言うのに、なぜ僕は彼らのことを気に掛けているのだろうか？

自分が抱える矛盾に頭が痛む。

……そうではないのだ。人類がどうか、  
?????? のためではなく、ただ

自分のために。

盤上をひっくり返す。

僕は勝たねばならない。絶対的な強者であるこの王に。

これはただの意地だ。

怯えている少女に目を向ける。

彼女はどうかあれ“怪物”に至る。

それを私は祝福しよう。たとえ誰にも望まれず、誰もが君の排除を望んだとしても、

” やすやすと殺させてなるものか ”

何度目かの死を迎える前に、散らばった右手に意識を向ける。

その手の甲に描かれているのは令呪。

奪い取ったそれに魔力を流し、二画分の命令を下す。

——手の甲の令呪が輝いた。

” 助けを求める者は誰だって救われる。どんな者であれ救われなくちやいけないんだから”

◇  
キンキラキン

空に輝くお星様のようで、思わず見惚れてしまった

飛び散る肉片は、た一つの輝きを彩るイルミネーション

ビチャビチャと水音を立てて赤い血が降ってきます

結局、姉さんが全て奪っちゃうんです

あの人は表情ひとつすら変えず、金色の王様の後ろに立っています  
” ずるい”

いつもそう 私より強くて、幸せな癖に 私が持っていないものも全部持つてる癖に

” ずるい”

ぐっちゃつと、何かが私の側に落ちてきました

ピクピクと蠢くそれは私を見えています

” やだ”

金色の波紋はこちらを見ました

” 嫌”

その近くにいる私も殺されるのでしよう

” 嫌”

ドロドロとした何かが湧いてきます

「——桜！早くここから逃げるんだ…!!」

誰かに手を引かれました

ですが、私の目の前には もう 剣が

助け…

『ライダー』

風が吹いた。

突然何かがある場に現れたかのような突風が。

連続した金属音が響く。

少女と怪物を葬るべく降り注いだ武具の数々を鎖が防ぐ。

「え…」

少女達の前には大きな大蛇がいた。

黒の衣服に身を包み、呪われた目を仮面で覆い隠した大蛇が。

「だ、れ？」

見覚えはない。それもそのはず、この蛇とも言い表せる大女は今の今まで戦いの場に姿を表すことがなかったのだから。

問いを投げかけられた女はその質問に答えることはなく、こちらを見下ろす王に視線を向けていた。

「… 我の前に畜生如きが姿を晒すか」

裁定を邪魔されたのだ。

女に向けられるのは殺意と嫌悪。

それらに向けられてなお、女は物怖じせず王から視線を外すことはない。

「そう言われましたも… 私は現在のマスターに… この娘たちを守れぬ、ここから逃げ出せ」と命令されただけです」

◇

アトラムの工房

「ま、待て。取引をしようじゃないか… !私に差し出せるものなら何でもやる！」

だ、だから命だけは…」

懇願する魔術師。

「何でもねえ…」

クツクツと笑いながら怪物は思案した。わざとらしく腕を組み考えるフリをする。怯える魔術師を見ているのが楽しいのだ。

その一方、床に転がされたライダーは、いつ殺されるのかと内心落

ち着かなかった。

怪物は思いついたように魔術師の左手を指して行った。

「——なら、その令呪を貰おうかな」

魔術師の左手には三画の令呪が刻まれていた。

「…は？そんなの無理に、」

「無理、という訳じゃないようだね。間桐の家で色んな書物を漁ったんだけどその中で令呪に関する物があってさ…些か理解するのに時間がかかったが、まあ、何とかできそうなんだ」

「…そ、そんな馬鹿な。サーヴァントが令呪を持つなど…」

「駄目？酷いなあ、何でもするって言ったじゃないか。僕、他人に嘘つかれるのあんまり好きじゃないんだ」

首を絞める腕に力が入り始める。

このままでは死。

そんなことあってはならない、自分はここで死ぬわけにはいかない。魔術師は目の前の男が何を考えているのかなど理解すること以前に自らの命を最優先とした。

「わ、わかった！やる、令呪はお前にやるから！」

その言葉を待っていたと、怪物はにっこりと笑った。

首から手が離れる。

尻餅をついて倒れ伏す魔術師。

「じゃあ、左手を伸ばして。うん、そうそう、そのまま…」

怪物は魔術師に左手を伸ばさせる。

それはまるで、

「えい♪」

どこから切り落とそうか測っているようだった。

「え——」

ぼとりと腕が落ちた。

腕がなくなった体からはドクドクと血が流れ続ける。

魔術師は声にならない叫びをあげている。それもそうだ、腕だけであればともかく、己の魔術刻印ごと切り落とされたのだ。その痛みは想像を絶する物であることに違いない。

怪物は落ちた腕を拾い、

「よいしょつと…うん、いい感じ。欲を言うならもつと良質な物が良かったなあ」

自分の左腕と一体化させた。いや、取り込んだと言うべきか。怪物の左手の甲には確かに三画の令呪が刻まれている。

手を握って開いて、特に違和感はない。

マスター権も無事移り、目的は果たした。もうこの場には用はないと背を向け出口に向かおうとするが、

「たす…助け…た、たす…」

今にも消えそうな声が聞こえた。

「魔術師は体を引きずり、懇願した。」

その腕からは依然血が流れ続けている。止血すらできないのだろう。

助けを求めた。

「取引したはずだ」と必死の形相で怪物に絶る。

「んんんん…すまない。最近、どうも物忘れが酷くて酷くて。――

――誰だっけ君？」

あつさりとその希望は砕かれる。

魔術師はライダーの方を見た。助けを求める。

しかし、

「……」

彼女も動くこうとすら、ましてやこちらを見ることすらなかった。

マスター権のない、情もない相手を助ける義理などなかったのだろう。魔術師が少しでもライダーを尊重していれば結果は変わっていたのかもしれない。

「(なぜ、どうして。僕はまだ、なにも――)」

最後まで分からぬまま、意識は薄れ体温が奪われていく。それでも彼は救われたのかもしれない。少なくとも楽に死ねたのだから。自身の行った所業に比べればマシな最期である。

この場に残されたのは、二人の怪物。

傷も癒えたライダーは警戒しながら怪物に問うた。

「私は…何をすれば?」

逆らうこともできる。しかし、本能が訴えているのだ。目の前の怪物に手を出すなど。だから彼女は反抗することなく新たなマスターに従うことにした。

「今すぐ、と言うものは無い。時が来れば命じる。それまで姿を見せるな」

淡々と怪物は言った。

「ここで自害しろ。〃などと言われるのではないかと思っていたらイダーはホツと胸を撫で下ろした。

「…この子供たちはどうするのですか?」

床に転がる実験材料の子供。

死んではいけないものの、以前目が覚める様子はない。強い暗示がかけられているのか、いずれにせよ死ぬわけではない。

「良かったら食べるかい? お腹が空いてるならこれほど効率のいい食事は無いぜ」

眠る子供を尻目に答える。

思わず顔を顰める。

いくらライダーとはいえ、良心ぐらいいは持ち合わせている。命令とあれば大人しく従うが、流石に気の引けることだ。

しかし、怪物も子供を無碍にするわけではないようだ。どうやらライダーの反応を見たかっただけらしい。〃冗談だよ〃と笑った。

趣味が悪いものだ。

「君の好きにすれば良い…例えば、外に出しておくとかね。そうすればお節介焼きの誰かが手を回すだろうさ」

そう言った後、今度こそ出口に向かっていった。

取り残されたライダー。

「…人使いの荒い方ですね」

肩に数人の子供を担ぎ、ボソツと言葉を溢した。

結局何十往復かすることになったが無事子供たちは外の世界に出ること出来たのだ。

この話はただそれだけである。

◇ 相対する蛇と金色の王。

しかし、ライダーが不利なことに変わりはない。彼女単騎なら数秒程度は持ち堪えようが、背後には少女たちがいる。少女たちを守りながら離脱するのは不可能に近い。

「興が冷めたわ。そこの阿呆諸共、我の前から消え失せよ」  
砲門が開かれる。

ライダーの手に負えないほどの数の砲門が狙いを定めた。

「……」

ライダーは仮面を外す。

その下には赤く耀く魔眼。それは彼女が怪物と言われた所以たる  
「石化の魔眼」。その眼は確実に王を捉えた。

「くだらん」

ギルガメツシユの動きが一瞬止まる。されどたった一瞬である。

もとより動きを止めたとして、砲撃は止まらない。ライダーの行動は無駄な抵抗にすぎない。

だが、この一瞬。ギルガメツシユの意識は僅かに怪物から逸れた。

——それこそが怪物の狙っていたものだ。

此度の英雄王に一切の慢心と油断はない。

裁定すべき怪物はもはや動くことはできず——いや、辛うじて腕ぐらひは上げられたか——後は消しとばすのみだった。

しかし、王は一つの失点を負った。

まだ息をしている敵から視線を切った。複数対1では動けない敵から目を離すのは仕方がないことかもしれない。加えて、ギルガメツシユにはもう一人の明確な排除すべき敵がいた。既に動かない敵から視線を切り、新たな敵を見定める。その一瞬の隙は仕方がないことだった。

強いて言うなら、最初からその僅かな隙を狙っていた怪物こそが最低だと罵られるべきだ。

——「ガチャリ」と鍵の閉まる音が森に響いた。

## 泥人形と怪物 「忘れるべからず」

賑わう街道。その中を緑の人は進んで行く。

美しい緑の髪、透き通るような白い肌。人々は彼／彼女を目にする  
と様々な反応をする。それは畏敬だったり、あるいは畏怖だったり。  
それを気にすることなく彼／彼女は目的地へ進んでいく。

…ここでは彼と合わせて頂こう。

彼が目指すのは友達がいる場所。彼は今日も激務に追われている  
のだろうか。あの子はまた眠っているだろうか。

そんなことを考えながら友の居るジグラットへと足を進めた。

◇

怪物は人の姿をしていた。初めは恐ろしい異形の怪物だったが、王  
と泥人形に諭されたことで——簡潔に言えば分からされた——人  
として歩むことを選んだ。

その姿は泥人形と瓜二つ。違う事と言えば、彼が美しい緑の髪に対  
し、怪物の髪は夜のように黒く染まっていた。そして外見も人形に比  
べて幼かった。

泥人形が一人の娼婦の姿を模倣したように怪物は泥人形の姿を模  
倣したのだ。

怪物の名は「グルマヴロス」

神々に恐れられ、星にすら嫌われた怪物。

そして僕の小さな友達。

クルは今、ウルクの祭祀長のシドウリの膝に寝ていた。友達が遊ん  
でくれるのを待ち侘びながら。

煌びやかな装飾の椅子に座る王様は退屈な国政に追われていた。  
抜け出すのは容易いことではあるが、祭祀長であるシドウリの目が  
光っているうちは澁々ながらも作業にあたる。

そんな様子をシドウリは笑顔で見守り、膝に寝転んでいる怪物の頭  
を撫でる。

「…暇だなあー」

「…」



足を大の字に広げてクルは精一杯自分の退屈さをアピールした。その要求を王様は答えるでもなく、無視を選んだ。今は構っている暇はない。目の前に山積みされた粘土板に目を通さなければならぬ。

クルはそれを聞こえてなかったと判断したのかより一層声を張り上げるのだ。

「ねえ!!ギールー!!ボクは!!ひーまーだーよ!!」

「たわけ、少しは我慢を覚えよ... シドゥリ、次の粘土板を」

「はい、こちらになります。」

クル?王はお忙しいのです、もう少し待っていきましょうね。」

「ん~~~~」

シドゥリが宥めようとすることも、本人にとってはもう十分に我慢したのだろう。膝下を離れ、ゴロゴロと縦横無尽に王の間を転がり回った。

全ては目の前の友人の興味を引くために子供のように駄々をこねるのだ。

それでも王様はちつとも振り向いてくれない。

そんな騒がしい様子を僕は外から眺めていた。

彼らの楽しそうな様子を見るのもいいが、そろそろ輪に混ぜてもらおうか。

” やあ、今日も元気だねクル”

クルはこちらに気づくとすぐに駆け寄ってくる。以前は僕を怖がってる様子もあつたけど今では足に抱きついてくるほど関係は良好だ。

「遅いよーボクずっと我慢してたの!」

どうやら悪いことをしてしまったみたいだ。謝罪の意味も込めて先ほど市場で貰った果実を渡す。クルは食べることが何より好きだ。いや、どちらかと言うと取り込むことが好きなのかもしれない。

『これは魚です。さあ言ってみて』

『さ... あにや?』

『さ・か・な』

『さ…か…な』

『ええ！よく出来ました！』

『さかな。さかな、さかな…魚』

人の言葉が喋れなかった頃はシドウリが熱心に教育しようとしたが、彼は一度聴いただけであらゆる知識を自分のものにした。単純に貪欲なのか、それとも、そうあれと作り出されたのか。

『いいですかクル？誰かに親切にしてもらった時は、ありがとうございます』  
『うんです。あ・り・が・と・う、ありがとうございますよ』

『あり…と。あり、がと。ありがと！ありがと！』

『ふふっ、何度も言わなくてもいいですよ』

『シドウ、ありがと』

『まあ！ご覧下さい王よ、クルは本当にいい子です！』

『ほう？では我に対しての賛辞の言葉でも覚えさせるか。今のうちから教育するのも悪くない。ほれ、ギルガメッシュ王万歳』  
『と云ってみるといい』

『べ〜〜〜！』

『あら！』

『な!?おのれ、誰に向かってそのような無礼を…エルキドウ！また妙なことを覚えさせおったな貴様！』

僕の知るところではないが彼がそう望むのであればそれでいいのだと思う。

「甘やかすのも大概にしるエルキドウ。此奴は自分で待つと言っただ半刻すら経っていない。偶には辛抱というものを覚えさせねば…」

クドクドとギルは何かを言い始めた。君だつて何かと甘い癖に、といつもながら思ってしまう。今だつてこれから僕達との約束を守るために職務を済ませようとしている。

けど、クルはその言葉にムツとしたらしい。頬張っていた果実を飲み込み、再び大の字に寝転がると駄々をこね始めた。ギルの呆れた顔が面白そうなので僕も一緒に寝転がることにした。

「ヒマラー！！」

「ええい、うるさいわ！これでは終わるものも終わらぬであろうが！」顔を真っ赤にして怒る。それが面白くてクルと顔を見合わせて笑った。

◇ これは僕達が行った最後の旅のお話。その断片的なものである。

ギルの仕事も片付き、僕らは船に乗り込んだ。この船で今からユーフラテス川を下り運河に出る。そこから先は未知の世界。僕らが見たことないような景色が待っているのだという。

「エルキドウ、これを」

船に乗る際、シドウリにバスケットを手渡された。中を開けると美味しそうな匂いが溢れた。どうやら食事が入っているようだ。

「あの子はすぐにお腹をすかせるでしょうから。もちろん、お二人の分も用意しておいたのでお昼にでもお召し上がりください」

彼女が作る食事はどれも非常に美味しい。思わず頬つぺたが落ちそうなものというのは彼女の料理のことなのだろう。

「ありがとう」とバスケットを受け取り船に乗り込む。

既にギルとクルは乗り込んでおり、どちらが船を漕ぐかで揉めているようだ。ギヤアギヤアと騒ぐ声が聞こえてくる。結局順番で漕ぐことに決まり、最初はギルが漕ぐことになった。

「おのれえ、なぜ我がこのような雑事をしなければ」

見送るシドウリに手を振り、僕らは旅立つ。

こうして僕らの冒険は始まった。

旅は順調、天気は良好。僕らは運河を下り海へと出る。我らが目指すは世界の果て……それは言い過ぎた。でも、僕らならそれも可能なかもしれない。

さて、目の前に広がるのは青く澄み渡る海にどこまでも広い海、海、海……なかなか陸地は見えてこない。そもそもこの辺りの地理などわからないので適当に船を漕いでいる。だから当然と言えば当然なのだが。

国を出てはや数時間。目新しさがあったのも束の間、退屈を感じてしまっていた。

しかし、この暇の潰し方を考えるのも旅の醍醐味なのだ。

「……………」

というわけで僕とクルは海面に腕をつけ、ジッと待っている。

相手を誘うように、小魚のように腕を揺らす。こうする事で誘き寄せることが出来るのだ。

今か、今かとその時を待つ。

「……………!!」

どうやら先にかかったのはクルの方だ。

腕に喰らいつく大きな魚。引き摺り込まれないように体に力を込め一気に引つ張る。

「やった!」

それを見事吊り上げ自慢げに胸を張った。

「むふうー!」

ふふっ、だが甘いね。

狙うならもつと大物ではないと。

「…釣竿を使わぬか」

呆れたように見ているギルを尻目に僕は腕をさらに伸ばす。深く、深く、海底の底へと。

「きたね」

腕に何かが絡みつく感触。

それを合図に一気に引き上げる。

ザバっと水音を立て引き摺り出されたのは、

「オレハイカー!」

巨大な白い怪物—— 大王イカ——

突然引つ張り出されたのが頭にきてしまったのか、長い触腕を振りあげ僕らを叩き潰そうとしてくる。

「オコッター!オコッター!!」

どうやら怒らせてしまったようだ。謝れば許してくれるだろうか、駄目だろうな。それとも迎撃するべきか。

悩んでいる暇ない。  
ので、

「ギル？」

あくびをしている友に声をかける。

「……失せよ」

ギルはめんどくさそうに空に手をかざす。

「!?」

すると空間が煌めき、槍や剣が顔を出した。勢いよくイカに発射される。

武具が触腕を切り裂き、巨体が苦悶の声を上げた。

「イターイー・イターイー……!!」

予期せぬ反撃に恐れをなしたのか、武具が刺さったまま可哀想な大  
王イカは逃げ去ってしまった。

「はっ、回収する気にもならんわ……モグモグ……」

切り取ったイカ足を齧りながらギルは言った。

…… 姿焼きにしようと思っていたのに。

「これ、あんまり美味しくない」

味は大味だった。

何事も大きければ良いと言うわけではないようだ。

◇

船を進ませると、やがて陸が見えてきた。いよいよ見つけた新天  
地。

しばらく探索すると大きな洞窟があり、僕らはきつとお宝があると  
考え、中に入っていく。洞窟の中はジメジメしていてなんだか気味が  
悪い。

少し進むと、開けた空間に出た。まるで、何かの巣のようだ。

やはりと言うべきか、そこにいたのは、

「■■■■■■!!!」

九つの頭を持つ大蛇だった。

「ぬおおおおお!!」

意気揚々と大蛇に挑んだギルは、最初こそ首を切り落とし高笑いを  
していたが、大蛇はそれでは死ななかつた。なんと、首を切り落とさ  
れた全ての傷口から二本の首が再生し、あつという間に倍以上の首に

増えてしまった。

これにはびつくり仰天。再び全ての首を切り落とすが、またも再生を繰り返しさらに倍になった首。なので、たまらず逃げている訳である。

「よもやこのような結果になるとは、我の目をもつてしても読めなかった…！」

だからやめとこうって言ったのに。君は一度反省したほうがいいと思う。

そんなことを考えながら共に走る。

「モグ！モグモグ！…モグツ！」

ギルはクルを抱えながら逃げている。歩幅が小さいので抱えないと追い付かれてしまうんだ。

無造作に抱えられたクルが文句を言っていたようだが、口をモゴモゴさせていたので何を言っているのかはよくわからない。

「貴様、この状況で何を呑気に食べている！…何？さっきのイカが噛みきれない？ええい、ペっするか、飲み込むのだ！」

「…ゴクン」

「よし…」

後ろを振り向けば怒り狂った百の頭を持つ大蛇。

「このまま逃げるかい？」と問うが、「王が畜生如きに背を向けて逃げ帰るわけなからう！」と絶賛背を向け逃げているギルは答える。

とはいえ、どうしたものか。あの大蛇は致命的に僕らと相性が悪い。

あの再生力さえ阻害できればいいんだけど、

「あれ、焼いたら美味しい？」

クルが大蛇に指を指す。

…どうだろうか？

見たところ、あの大蛇は気味が悪いほどの鮮やかな体表をしている。ああいった生き物はたまたま大抵毒を持っているのだ。

「前に赤いキノコ食べてお腹壊してしまっただろう？あの蛇も同じようなものだから、ちよつと難しいかもね」

そう言い聞かせると、残念そうに項垂れてしまう。

「こんな時まで食い意地が張るとは……いや、待てよ」

ギルはニヤリと笑う。

「よくやったぞクル。後で褒美をやろう」

「?」

首をかしげる。

一体どうしようというのか。

「ふっ、万事この我に任せるが良い」

自信満々のようだ。

どうやら良い作戦を思いついたらしい。

「エルキドウ、クル。お前たちは奴を縛りつけろ。出来るな?」

“うん”と頷き、僕らは左右に展開する。

“クル、準備は良いかい?”

「うん!」

僕は大地に体を同化させ、少しだけパーツを鎖の生成に使わせてもらう事にした。クルも僕を真似して鎖を産み出す。僕らに違いがあるとすれば、借りるか、奪うかの違いだろう。

二人の鎖は大蛇に絡みつく。ギツチリと鎖に縛られ、大蛇はその場から身動きが取れなくなってしまった。

それを見計らってギルは勢いよく躍り出る。

「フハハハハハハハ!出し惜しみはせんぞ?」

こうなってしまうては大蛇は文字通り手も足もでまい。百の頭を数百の武器を持って斬り落とす。その様子は暴風さながらで大蛇の首を全て薙ぎ払ってしまった。しかし、大蛇の首はすぐさま再生を始めてしまう。

「させぬわ、火炙りにしてくれる!」

ギルの背後から溢れ出した炎が大蛇を取り巻く。

「善い、善いぞ。それでは傷の修復もできんだろうか?」

首を修復すべく傷を癒そうとするが、傷口を焼かれた事によりそれも出来なくなってしまった。たまらず大蛇は暴れ狂い逃げ出そうとするが

「ムムムツ…」

「しつかり縛っている貴様ら！」

鎖に縛られていてはそれも叶わず、ただ嵐のような蹂躪を受け入れることしかできなかつた。

数刻後にはプスプスと焦げ臭い匂いを立ち込めながら大蛇だった焼肉は地に倒れ伏した。

「この我が蛇如きに遅れをとるわけがないであろう。その身を持って理解できたことを光栄に思うがいいわ！」

「さすが我、さすが我！」と焼け焦げた死体の上で下品に高笑いをするギル。… ああいったことを言っちゃうから後で酷い目に合うんだと思う。突然やって来た部外者に殺された大蛇を少し不憫に思ってしまう。

「ね、ね？ ご褒美！ご褒美は！」

ギルの腕を引き、顔を輝かせながらクルは呼びかけた。よほど楽しみなのだろうか、ぴよんぴよんと飛び跳ねている。

「ハハツ、そう急かすでない。しばし待て… 確かこの辺りに仕舞っていたな。ええい、これでもない、あれでもない」

ガサゴソと蔵の中を漁る音が聞こえる。

「ほれ、此度の褒美だ。有り難く受け取れよ」

「おおく…？」

投げ渡されたそれはクルにはよく分からないものようだ。

ギルが渡した物それは、

「我の宝物庫の鍵だ」

「カギ…？」

「そうだ、お前に預ける。その鍵を無くさずに持っているのだ」

「持つてるだけでいいの？」

「ああ。我の財宝を盗み出そうとする不埒な輩が居る… とは思えぬが、なに万が一もあるだろう。お前が持っていることで我の財宝は守ることができる」

そして、とギルは言葉を続ける。

「この鍵は、我とお前の友の証でもあるのだ」



…ギルの言葉は幼い怪物にどれくらい伝わっているのだろうか。それでもガツチリと鍵を握りしめ、クルは顔を上げて答えた。

「うん、いいよ。ボクがギルの宝物を守るから。友達だもん！」

「ほう…よいかクル」

僕は背後にいるため、彼の表情を確認することは出来なかった。

「我にとって友とは我が財と同義である。お前も、エルキドウも我の友であり、財であることをゆめゆめ忘れるでないぞ」

けど、その優しいげな声色から分かる様に穏やかな笑みを浮かべていたのだろう。

満面の笑顔で首を縦に振りクルは此方に駆け寄ってくる。

”よかったね。大事にするんだよ”

抱き寄せ、優しく頭を撫でた。

暖かな体温が伝わり、ポツと僕の中に一つの暖かいものが生まれる。この胸に感じた想いを僕は理解することはできない。

…それでも

”誰がなんと言おうとも、誰もが君を憎んだとしても。僕は、僕らは君のことを祝福している”

どうか、この怪物が幸せになりますようにと力強く抱きしめるのだった。

## 桜と怪物 「反転」

ここで始めて、ギルガメツシユは眉を顰めた。

「何…？」

突如響いた鍵の閉まる音。その瞬間、ギルガメツシユの背後に展開されていた黄金の歪みが消え失せる。

それは、何者かが「王の財宝」に干渉したという事実を示していた。「王の財宝」を溜め込んでいるバビロンの宝物庫。それはこの世の何処かに現存しているとも、この世ならざる異空間にあるとも言われる。その宝物庫が一斉に閉じたのだ。

勿論、ギルガメツシユ自身がそのような真似はしない。

しかし、ギルガメツシユ以外にそれが出来るものなどいるのだろうか？

『——ようやく、隙を見せた』

声が聞こえた。

人のものではない。金属が擦れるような不協和音に塗れた言語。

「貴様…」

触手の怪物は散らばった肉片を取り込み完全に再生する。

起き上がり、ギルガメツシユに向かって笑った。

腕の様な形状の触手を掲げる。

「まだ、それを」

『約束したもんね？ずっと護っていたんだよ』

そこには煌びやかな拵えの鍵が握られていた。

宝物庫の鍵。

文字通り宝物庫を開くためだけの逸品である。しかしながら、常人が持っていたとしても意味はなく、ただの鍵にすぎない。

僅かながら動揺するギルガメツシユに向けその言葉を吐き出す。

『僕だって「掛け直す」ぐらいはできるさ…。中々その隙を見せないから随分と痛手を負った。これほど血を流したのは何百年ぶりだろう』

ギルガメツシユにとって致命的ともいえるその一言。

だが、王は問題ないと言わんばかりに不敵に笑って見せた。「吠えるではないか。もはや残ってないとも考えていたが、思い違っていたようだ。」

——だが、それがどうした？ 今の貴様如き、残りの財で事足りる」ギルガメツシュがこの程度で心折れるはずもなく、既に射出された財を持って対処を行う。

今の英雄王には油断も慢心もなかった。

『——だめだよギル。相手は僕じゃない、だろ？』

ただ間違っていたのは一つ。

旧友の相手に気を向けすぎたか、それとも最初から仕組まれたことだったか、今となってはどうでもいいことだが。

はなから怪物は一人で勝つつもりなど毛頭なかったのである。

最初に異変に気づいたのは現在のマスターである凜だった。

「——ギルガメツシュ!! 後……!?!」

空気が凍る。

辺りが死んだ様に静まり返る。

黒い影がいつの間にかそこに存在した。

それに気づき、後ろを振り返るが既に遅い。

影は既に、ギルガメツシュを打ち倒すための存在を吐き出していた。

もはや、その姿にかつての面影はなく、黒い鎧に身を包んだ黒き騎士王。

泥に塗れた騎士は既に、その剣を振りかぶっている。

「——<sup>エ</sup>約束<sup>ク</sup>された勝利<sup>ス</sup>……」

それは偽物ではなく、本物の星の光。

されど黒く染まり、全てを覆い尽くす光を呑む闇。

反転した極光がギルガメツシュを包み込んだ。

◇

『……』

歩行だけなら何とかなるというレベルまで体の再生は完了している。だが、外見はどうにもならない。

一步進むごとに、塵と化し消えゆく手足。それを過剰ともいえる魔力で即座に再生する。本来であれば必要のない英霊としての皮を被り、マスターを得たのもこのためである。マスターという供給装置としての楔がなければこの世界に存在するのも不可能に近いのだ。

…そこまで認めたくないのであれば、いつそのこと守護者でも回してくれば良いのに。それをしないあたり今はまだ脅威として見られてはいないということか。

『ああ… 腹が空いた』

サクラの魔力は現界するには充分といったほどの魔力が供給されている。

それでも、それでも足りない。

底が抜けた柄杓の様に零れ落ちていく。決して満たされることはない。

いくら泥を飲み込もうが変わらぬことだった。

「フ… フハハ… よもや、そこまで堕ちておったか」

既に満身創痍のギルガメッシュがそこに居た。四肢を黒い触手に囚われ、先程までとは立場が逆転している。

良かった。まだ残っていると怪物は歓喜した。

「冗談が過ぎるぞ。貴様にその泥は荷が重過ぎるだろうに」

それを飲み干した王は怪物の行為を愚かだと言った。

人類の悪意そのものを怪物は背負えないと断言する。

『確かに、あまり美味しいとは感じなかった… だが、取り込んでみれば馴染むこと馴染むこと。実に気分が良いぜ？』

「何度でも言おう。愚かにも程があるぞ、貴様…！」

『ふひひひ、その様では負け惜しみに過ぎんよ』

言葉に表わすのも恐ろしい笑い声が響く。

怪物は快楽に酔いしれ、体を踊らせた。

『ひひっ、ヒハハハハッ… ゴホッ、ゲホッ… くそ』

とはいえ、あまり時間は残っていない。

この戦闘は代償があまりにも大きすぎた。これ以上は避けるべきだろう。

何より、補給を急がなければ。

怪物は大きく口を開ける。

『… お別れだギルガメツシユ。数千年かかったがようやく言えた。

これはとても喜ばしいことだとは思わないかい?』  
腹部に牙が突き立てられる。

ギルガメツシユは苦悶の声一つ上げない。王はその命が消えるまで敵を前に膝を屈することはなかった。最後まで裁定者としてその場に立ち続けた。

それでも、少しづつ、少しづつ怪物に飲み込まれていく。

これにより、ギルガメツシユの敗退は決定的となる。

最後に怒りに満ちた目を向け、そして

「——大馬鹿者が」

諦めた様な苦笑と共に、飲み込まれていった。

◇

『うっ… ぐっ…』

反転した騎士が進む先には悶え苦しむ怪物の姿があった。

その姿は共に野を駆け、夢を語り合った彼の姿とは似ても似つかない。目の前にまで近づいてもこちらに気づく様子はない。それほどの非常時か。

辺りには黒い影、そして泥が蠢いており、まるで怪物を守護するようだ。

『ふうっ… ふうう… おのれ、食い破る気かこのツ…!』

怪物はギルガメツシユを捕食したのは良いものの、その消化に手間取っている。

このままでは逆に肉体の主導権を奪われかねない。さすがは英雄王というだけのことはある。

聖杯の泥を飲み干し受肉したギルガメツシユが、ただ食われただけで終わらなかつたことは怪物にとって予想外のことだった。

『大人しく、その靈基を渡せば良いものを… 何を見ているセイバー、貴様にはもう用はない。さっさと沈んでいろ』

ようやく目の前の存在に気がついたのか、忌々しげな声色で告げ

た。

現在のマスターでもない彼の指示に従う義理はないが、セイバーが彼にできることはもう何も無い。

「…哀れだな」

そう言葉を残して影に沈んでいった。

怪物にその言葉は届いたのか、否か。それとも、誰の言葉も彼に届くことはないのかもしれない。

『フハハハハ… もうすぐ、もうすぐだ。これで私の願いは叶う。』

これで終わる。全てを終われる——』

虚しい叫びが夜の森に響く。

活動を開始できるまで、あと数時間。それで全てが終わる。怪物はそう確信したのであった。

## 桜と怪物 「怪物の日」

「桜ーさくらー!!——」

黒い影が現れた瞬間、私の意識は深く沈んでしまった。  
苦しい、痛い、痛い、痛い、痛い……

全て吸い取られてしまう、何もかもが■■■■に……  
どうしてわたしだけ、わたしばかり。

こんなにも頑張っているのに、  
わたしはただ…… ただ

「おなかですきました」

…… 帰りたいだけなのに。

◇

夢を見ました。

幸せで、とっても優しい夢。

もしも、あのままお父様とお母様と一緒に暮らしていたら、なんて  
ずっと考えることすらできなかった夢

——姉さんと逆だったら

お母様が作った美味しいご飯を食べて、お父様に魔術を教えて貰っ  
て……

——そんな都合のいい夢

「桜は本当にいい子ね、ご褒美をあげなくっちゃ」

「上手だね、その調子だよ。桜は覚えが早い」

——そう、幸せな夢だった。

「ほら口を開けて?はい、」

血溜まりの上で私は口を開ける。

それは甘くて、まろやか、そして頬張るたびに満たされていく。ま  
るで子供の頃思い描いた夢のお菓子のように。

『どうだい、極上だろう?』

幸せな夢は続く。

場面は変わり、幼いわたしはドレスに着替えて夜のお城を散歩す  
る。

キラキラ輝くイルミネーション。心躍らせランランラン。

“くうくうおなががすきました”

満たされないなら一杯食べてしまえばいいのです。

お付きの騎士に命じればすぐにお菓子を持ってきてくれます。

小さく、小さく切り刻んで一口サイズになったら、パクリと食べる。

なんて美味しいお菓子たち。一杯持ち帰って、お母様たちにも分け

てあげましょうか？

『そうだね、美味しいね。ほら、口を開けて。』

もつと、いっぱい食べようね』

彼はわたしの味方の騎士様。いつだって私を護ってくれるのです。

もう一人の私の味方。

そう、正義の味方… 正義の…

『今度は新都の方へ行こう。さあ、手を取って。夜はまだ明けない、楽

しもうじやないか』

ね、サクラ？」

… あれ？

これは夢だったけ。それとも、

「――桜？」

はっ、と目が覚める。

いつの間にかベットで眠っていたようだ。

先輩と… 姉さんが心配そうにこちらを覗き込んでいる。

「… 貴方、当然倒れたのよ。あの影と入れ替わる様にね」

どこか警戒心を感じる言葉。

どうしてそんな目で見てくるんだろう。わたしは何もしていない

のに。

「先輩… キヤスターは？」

「あ、ああ。アイツはまだ、帰って来ていない。桜が倒れた後、ライ

ダーに運んでもらったんだ。

だから、その後どうなったのかは… 分からない」

「そう、ですか」

最後に見た彼の姿はとても人間のようなものではなく、まるで童話



に出てくる怪物のようで。

『サクラ』

脳裏に触手の怪物が浮かぶ。それはとても恐ろしくて…

そんな私の考えは先輩の言葉によって遮られる。

「俺たちはもう一度森の方へ行ってみる。アイツのことも、そこで確認してくるつもりだ」

「なら、わたしも」

「桜は「駄目だ」駄目よ」

「え…」

拒絶だった。

それは一番向けられなくなかった感情で。なんで、なんで先輩も

「…桜は昨日倒れたばかりだろう。心配しなくても遠坂もいるし、ライダーもついて来てくれる。

だから、今はゆっくり休め」

俯くわたしに先輩の表情は見えなくて、見るのも怖くて、ただ頷く。

「置いて行かないで」

その言葉を口にすることはできなくて、伸ばした腕は空をきり、二人の目には映らない。

取り残されたわたしは一人眠りにつく。

次に目が覚めるときには、きつと全部が元通りに違いない。

ああ、きつと、

「もう手遅れだというのに」

そんな夢を思い浮かべた。

◇

「くそっ、なんだよこれ!?!どうして入れないんだよ!!」

慎二は衛宮邸に来たはいいものの、何故か張られていた結界により中に入ることができなかった。

そもそも、彼の行為は不法侵入であり到底許される行為ではない。

彼の顔は酷くやつれ、目の下には深いクマが出来ている。プライドを余程傷つけられてしまったのだろう。散々荒れに荒れた結果、無理矢理サクラを脅しもう一度マスターに返り咲こうという考えに至っ

たか。

「つ… おい！桜あああ！

いるのは分かってるんだ、ここを開けろよ！

僕のいうことが聞けなにかよお!?」

必死に玄関扉を叩くが反応がない。防音性の魔術でも仕掛けられているのか。

どちらにせよ、魔術の才能などカケラもない慎二に破る術などない。誰かが手を貸せば或いは、

扉を叩く音が響く中、慎二は背後に気配を感じた。

空気が凍る。

「シンジ、どうした？ 中に入りたいのかい？」

不幸中の幸いと言うべきか怪物はシンジの前に姿を見せた。怪物は既に人の体を取り戻している、が、どこか以前の姿とは様子が違う。

僅かに幼さが残っていた以前と比べ、その体は成長し成人のような印象を感じる。夜空のように黒く輝く髪には僅かに金色の毛が混ざっている。

どうやら取り込みは成功したものの少しばかり侵食されてしまったようだ。

ニヤニヤと嘲笑いながら、声をかける。

「おいおい、まさかこんな簡易的な結界も分からののか？」

やはり、魔術の才能は微塵も無い。

神は二物を与えないとは正にこの事よ。本当に惜しい男よな」

「う、うるさい！ なんなんだよお前、僕をわざわざ馬鹿にしきたのか！

なんだよ糞、どいつもこいつも、僕のことを…！」

彼にはもう余裕がないのだ。

下手なことをすれば殺されかねないというのに慎二は唾を飛ばしながら怒号を震わせる。

「ふふっ、悪かった悪かった。で、何の用？」

「何の用だあ？そんなの桜を迎えに来たしかないだろ」

「サクラを？」

「ああ、そうさ。兄貴が妹を連れ戻しに来て何が悪い」  
もつともそれが本心かと言うと否である。

今の慎二に家族愛などあるものか。ただ、己の欲を満たすための言葉に過ぎない。

「ふむ。確かにそれはもつともだ。サクラの兄としての行動だもんね。我にはそれを邪魔する権利はない」

「そ、そうさ！ 僕は桜のことを思つて。

だって、あいつは僕のものなんだ。自分の物を取り返すのは当然の行為さ！」

うんうんと頷きパチンと指を鳴らす。

それを合図に扉はガラガラと音を鳴らし開かれる。

「サクラは奥の部屋で眠っている。あまり騒がしくしてくるなよ？」

「なんだよお前。随分と話がわかる様になつたじゃないか」

慎二は靴を脱がず家に入つて行く。

それを怪物は無表情で見送る。

後は桜がどう動いてくれるかである。ことが上手く運べばそれで勝利は近づくのだから。

怪物は再び霊体化し、事を静観することにした。

ギシギシと誰かが廊下を歩く音で目が覚める。

誰かが帰ってきたのか、重い瞼を開け身体を起こして扉の方を見る。

「先、輩？」

名前を呼ぶ。

違う。口に出してから後悔した。体が震える。それは嫌悪と恐怖か。

そこに居たのは、

「——おいおい、まさか少し見ないうちに兄さんの顔を忘れちゃったのかよ桜？」

「に、いさん」

「僕は悲しい、悲しいよ桜。そんなに怯えちゃったら、まるで僕が悪者みたいじゃないか」

抵抗する間もなく、組み伏せられる。

嫌だ

手足をバタつかせ抵抗するが、弱った身体では振り解くことができない。

嫌だ

血走った顔が近づいてくる。

「よし、令呪はまだ残ってるな。帰るぞ桜」

力づくで身体を引き起こされる。引つ張られる腕は気遣いなど微塵もない。

痛い、やめたと懇願すると苛ついた目で男は見えてくる。

「なんだよグズ。大人しく僕の言うことを聞けよ。」

抵抗など意味がない。

「っ、きやあ……！」

「この裏切り者、随分と偉くなつたじゃないか、ええ？

だつたらお望み通りにしてやるよ！」

掴まれていた腕が離され、ベットの方へ押し倒される。

男の指が肌に接触した。

奥底に縛り付けていた不快な記憶が呼び戻される。

「いやっ——！」

びくん、と顎が上がる。

肌……首筋から肩になぞられ胸元まで蹂躪する感触。それは私たちにとっての始まりの合図。

そう、これは決まっていた手順。

男は私にとって絶対者だった。

一度罵声を浴びせられれば反抗心は消え去り、体を明け渡し、満足するまで痴態を晒す。この行為が済むまで感情を表すことはしなかった。辛いだけなのだから。

ただ言いつけ通り犯され、奉仕し、淫蕩に溺れる。それで済む話。それが男とわたしの関係。

だが、今は違う。

「はっ、どんなに大人しいふりをしてても変わらない。お前は間桐の女だ。卑しい魔術師くずれの淫売女。」

それがお前なんだよ桜！」

荒々しく押さえつけられる。

「んっ…！だ、や…！」

体が跳ねる。

それをいつもの反応だと信じている男は気色の悪い笑みを浮かべた。

変わらない。自分の玩具は何も変わってないと、考えているのだろう。

だからきつと気づかなかった。

もがくわたしは、快樂に身を委ねるような昂揚などないことを。男に向ける反応は嫌悪と抵抗心しかないことに。

「なんだよ、意外に元氣じゃないか？…そうか、衛宮のやつ手も出してこなかったってワケ。そうか、そうか、そりゃあいい！」

久しぶりにやる気が出るってもんさ、なんたってお前はとんでもない色情狂だもんな？こんな家の中で我慢なんてできるワケないもんなあ？」

もはや犯すことしか考えてないのか、この瞬間が愉快で仕方ないのか。

男の手が服にかけられる。

丁寧に脱がす、なんてことはしない。ただ体を暴くのだ。

「だめ——止めて、近寄らないで、兄さん…!!」

渾身の力を振り絞り、押し掛かってくる男を拒絶する。

「——はっ？」

まるで奇怪な物と対峙したように男の動きが止まる。

見下ろす目は震えている。

「なんて言った？今、なんて言った？」

啞然とした声。

その姿を見てゴクリと唾を飲む。そしてありったけの勇氣を持つ

て見つめ返す。

「近寄らないで、と言ったんです。わたしはもう、兄さんの言いなりにならない。」

「……先輩は受け入れてくれた。こんなわたしでも守ってくれるって……！」

わたしは兄さんの物じゃない。この体に触れていいのは、貴方なんかじゃない！」

ああ、けど悲しかな。

必死に押し掛かった男を跳ね除けようとするも、よろめきすらしない。

それも当然。

弱った体にはそんな力など残っていないし、馬乗りになられては抵抗のしようがない。

「——けん、な」

空洞の様な声が響く。

「——ふざけんな。ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな、ふざけんなよ、この売女が！」

頬に痛みが走る。続いて腹、そして頬。

男は気が狂ったようにわたしに向かって拳を向ける。

「なんだよお前！僕の言いなりにはならない……!!」

勘違いするな、お前にそんな権利あるはずないだろ!?!決めるのは僕だ、いつだって僕だ。お前はただ、僕の指示に大人しく従ってればいい！人形のように頷いていればいいんだよ……!!」

手加減はない。

目の前の玩具、持ち物に逆らわれた男には、気にかけるほどの理性など消し飛んだに違いない。

「——」

抵抗はしない。結局出来ない。

顔を庇うことすらせず、殴られ続ける。

けど、強い意志を以って、男を睨み続けた。

それが、さらに男を逆撫でたのだろう。

自分を真つ直ぐに見つめられるのが男には何よりの苦痛だった。だから、

「…そうかよ。なら、こつちにも考えがある。衛宮が良いって言うんなら好きしろ。」

「けどさあ、桜？ それなら、好きな人に隠し事なんかしちやいけな  
いよなあ？」

「兄、さん」

今のわたしはどんな顔をしているのか。

「は」

目の前の男は笑う。どうやらこの表情は、少しだけ男の怒りを冷ましたらしい。

「そうだよ桜。二人で一緒に打ち明けようぜ。大丈夫だって、あいつはお前の事を受け入れてくれたんだろ？なら、それぐらいどうってことないよなあ？」

「や」

止めて、という言葉が口に出せない。

ただ愕然と、以前のような関係に巻き戻り。

「は。はは、あははははははははは！」

「そうだよ、そうだよなあ。結局はその程度さ！ いいな桜、それが嫌なら逆らわずに大人しくしている。お前は僕の人形なんだから。」

「…まあ、衛宮が帰ってきたらバレちまうだけどなあ？ 僕の趣味じゃないが、何、たまにはシチュエーションも変えないと。お前もマ  
ンネリは飽きるだろ」

「なんで、と虚な感情は答えた。」

先輩に秘密をバラされるのは、死んでも嫌だ。

兄との関係、お爺様に言い付けられこの家を監視していたこと、1  
年に渡る間桐での暮らし。

先輩も薄らと気づいている。

知らないのは兄との関係だけで、知られたとしても、嫌われること  
なんてことない。

それすらも受け入れてくれる。

だから、また我慢すればいいだけのこと。

「や」

けれど、それはもう容認できない。

…今までは我慢できたこと。

けれど願いを持つてしまったわたしには、兄であるこの男、慎二に体を許すなど、何者にも勝る嫌悪だった。

「や、だ」

だから願つてしまった。

男の手が胸元を掴む。

当然のように、わたしの体を晒そうとする。

「いや——いや、いや、いや、いや…！止めて、こんなヤダ、もう止めてよう、兄さん…っ！」

もう一度、必死に抵抗する。

その無力な抵抗を、男は笑った。

「はっ、何言つてんだ、お前だつて本当は欲しいんだろ？ お前は男なら誰でもいいんだ。衛宮にも教えてやらないとな。今までお前がどのくらい僕に縋りついてきて、どのくらい汚らわしく交わったかってコトをさあ…！」

笑う。

道化のように笑う。

「」

それで、全て理解した。

この人は言う。

何があつても、自分が何をしても、先輩に言つてしまう。

この人はただ自分が面白がりたいたいに、わたしの全てを台無しにする気なんだ、と。

なんで、なんでこうなるんだろう。

わたしは頑張ってきた。

嘘をついて、人に嘘をついて、自分にも嘘をついて、こんな自分でも幸せになれるんだって嘘で塗り固めた。

先輩のそばに居るだけで幸せなんだと、幸福なんだと思つてきた。





それで全てを悟った。

「ふむ。返答はないか……力加減が難しい。すまない、我も余裕があるわけではなくてな。どうか許してくれシンジ」

笑い声が聞こえる。

倒れ伏す男に再び目を向けた。

「あ」

即死だった。

ものすごく鋭いもので、ぱしんと頭を叩かれたのだろう。

後頭部にはナイフで切り裂かれたような線だけがある。

線は脳にまで達し、けれど幸いというべきか、細すぎる傷口は中身をこぼすことはない。どこまでも赤い血液だけが流れ出ている。

「ん？どうした、サクラ。てつきり笑ってくれると思ってたんだが」

「……どう、して」

疑問を口にした。

目の前の怪物は不思議そうに見下ろしてくる。理解できなかった。

「どうして、とは？」

君が命令したじゃないか。僕はそれを叶えた」

当然だと答えた。

子供のように、悪戯な笑みを浮かべながら。

「……ち、が」

手の甲の令呪を見る。

残されていた一角は消え、痕が残るだけ。

彼に命令したのはわたしで、だから殺したのもわたし。

兄を殺したのわたしだ。

でも、違う。違う、違う違う違う。

そんなことわたし望んでない。

「だって嫌いだっただろ？疎ましかっただらう？——居なくなってしまうと願っただらう？」

「そんな、こと やめて ない わたしは」

「嘘つき」

「兄さんはあんなんだけど『あはははははハハハ』可哀想だけどわたしの『うふふふふふ』昔は優しくてケーキを『ははハハハハハハハ』違うのわたし、違う」

「うん、うん。分かってる分かっている。楽しいねえ。嬉しいねえ」  
違う、わたしは楽しくない。嬉しくもない。

怖い、怖い、目の前の怪物が怖いという恐怖が心を塗りつぶす。

もうやだ、やだやだやだ

拒絶を示す。

それが正しく怪物に伝わっているのか、いや、わたしのことを見ているのかも分からない。

「もう遅い」

そう怪物は口にする。

「手遅れだぜ？」

何人食った、愉しんで食った、みんな食った、食べた食べた食べた食べた食べた食べた

今更引き返せない、引き返させない。だが心配することはない。

大丈夫、お前を助けてやる。お前を救ってやる。

だから僕を助けてくれ、僕を救ってくれ」

怪物の影が立ち上がる。

触手を広げ、わたしを包み込むように大きく立ち上がる。

「あは」

脳裏に浮かぶのはいつかの夜のこと。

夢。

夢。

そうだった、わたし夢なんか見ていない

夢なんかじゃなかった。

夜な夜な街を徘徊して、誰彼構わず食べたのは紛れもない自分自身。

そう、いつぱいたべた

いつぱいいつぱいたべた

ニゲルヒトカラたべたあしからのこさずたべたダレであろうとた





「ふふふふ」

少女は可憐に、クスクスと硝子のような声を零す。

・・・そうして。

邪魔な兄だったものをいじくりまわした後、ゆつくりとベットから立ち上がった。

「んんんんんん」

自らの体に指を突っ込み、ぐちゃぐちゃぐちゃ体を掻き探る。

少女の中には蟲が膿んでいた。それがとてつもなく不快で快感で邪魔くさい。

「気持ち悪い・・・でも、これでサヨナラです」

体から引き摺り出してぶちやぶちやと足で踏み潰します。

体は所々傷だらけ、でも心配ありません。すぐに治っちゃうんですもの。

「ふふつ。んんんんんん 　ふふつ、ふふふふふふ」

姿見の前で少女は笑う、少女は踊る。

その姿を見て満足したのか血に塗れたままで部屋から出た。

廊下を誰かと踊るように進んでいく。

誇らしげな微笑みを浮かべながら。

「桜・・・？」

玄関口に躍り出た時、少年と鉢合わせた。

肩で息をする少年。少女の危機を察して駆けつけたか、たまたま鉢合わせてしまったか。何にせよ少しばかり遅かった。

少年は少女を見て啞然とする。

「——お帰りなさい、先輩。どうしたんですか？まるで・・・怪物でも見ちゃったような顔をして？」

わたしは笑った。

## 桜と怪物 「怪物」

「で、わざわざ私を連れてきたの凜」

「ええ、衛宮君に宝石剣を投影して貰うために貴方が、アインツベルンの記憶が必要なのよ」

桜を家において俺たちは山中を歩む。

向かう先はアインツベルン城……ではなく遠坂が管理する地脈がある土地へと足を進めている。

不満げなイリヤと霊体化して護衛に当たってくれているライダーを連れて。

あの戦いの後、遠坂と合流した。

再びサーヴァントを失った彼女と俺は一時的な共闘を結ぶ。だが、お互いの目的は違う。

遠坂は桜を殺すため、俺は桜を救うために。

あくまでこの共闘を結んだのは、アイツを桜から引き離すため。

『キャスターなど偽りの皮、この世界に現界するための楔にすぎない』  
アイツは自分のことを『キャスター』じゃないと言った。

だったら一体何者なんだ。

桜を苦しめているアイツは、

「ねえ、シロウ？ 『黒い怪物』の伝説は知ってる？」

「——黒い、怪物？」

……記憶を探ってみる。

その名前はどこかで聞いたことがある。

確か、

「それ聞いたことあるわ。」

お母様がよく言ってたっけ。早く眠らないと怪物がくるぞーって。外国の方じゃ子供の躰の常套句よね」

そうだ、確か古い童話か何かで聞いたことがある。

でも俺が知ってる限りでは安倍晴明と戦う話や、鬼の一味にいる敵の一人とか御伽噺のそんな類だ。日本ではあくまで物語の悪役的立ち位置、倒されるべき象徴だったと思う。外国の方じゃ、黒い怪物が

モデルになっている映画なんかもあったような気がする。

「そう、日本にも伝わっているのね」

「でもイリヤ。それが一体どうしたって言うんだ？」

「まさか……！」

無理よ、だってあれはサーヴァントに収まるわけない」

あれの正体は、

「——マヴロス・モンスター黒い怪物

それがあいつの真名。かつて神を喰らい、星の願いの前に敗れた真正銘の怪物よ」

「……ちよつと待った。それは可笑しい。」

この聖杯戦争で召喚されるのは英霊しかいないんだらう？」

疑問を口にする。

遠坂から聞いた限りじや人類史に名を残した人間、それがサーヴァントとして召喚される。神話だったり、実際の歴史だったり出自は様々だが純粋な悪、怪物そのものが召喚されることはまずあり得ないって話だ。

「……以前まではね。でも、そこにいるライダーも純粋な英霊じゃないわ。今の聖杯戦争は純粋な英霊だけじゃなく、悪を以って善性を証明する反英霊も召喚されちゃうの」

「だとしても、不可能よイリヤ。聖杯は再現できる規模でしか呼べないし、そんな神霊レベルの現象を再現できるほどなら聖杯なんて必要ない。」

いえ、そもそも間桐家がそれほどまでの触媒を用意できたとは思えない。召喚できたとしても、依代なしじゃ活動できないはずよ」

「召喚された、なんて一言も言っていないわ。」

あれはまだ死んでない。この世界に存在している、生きている怪物」

「……ええ。もうずっと昔、言語が統一されてた頃の、ちっぽけな世界の話よ」

それは、一匹の妖精の悪戯によって産まれたの」

「昔々、世界は神秘に溢れていた。人間が住む身近にも幻獣や妖精が

いたし、神も実際に拝める存在だった。

ことの発端はある村から始まったの。

その世界にあった妖精の村には娯楽がなかった。毎日空を眺めて、人間を観察して、真似をして、それで1日が終わるぐらい退屈な世界」  
「その村ではね、ごっこ遊びが流行っていたの。でも悪役をしたい妖精なんか一人も居なかった。

だから悪役を作ってしまった。そうすれば自分達は正義の役でいられる。

そんな子供ような考えを一匹の妖精はしてしまった」

「そうして妖精は一人の人間を攫った。

妖精はその人間にあらゆる悪性情報を積み込み、戯れで〃あらゆる物に姿形を変えられる〃という特性まで付与した。魔術世界において妖精は人を超えた魔術を行使できるとされてるわ。それに時代は神秘溢れる神代だった、だからこんな無茶ができたのでしょね。

それでおしまい。

あらゆる悪を押し付けられた怪物は誕生した」

「結局、妖精の迷惑通りにはならず怪物は暴走。世界を焼き尽くし、あらゆる神を葬った。

でも、それ許さなかった星は一人の英雄に願いを託し、その聖剣を持って怪物を打ち倒した・・・と、されてるけど実際のところは分からない。

その後も歴史上に何度も名前が出ているわけだし、何かしらの方法で生き残ったのかもしれない」

「怪物は姿形を変え人類史を歩み続け、いつしか恐れられるようになった。

——それが〃黒い怪物〃

〃悪役〃を押し付けられた、ただ普通の一般人。妖精が作り上げた、今も生き続ける〃怪物〃という名の呪いのカタチ」

イリヤは淡々と大昔の出来事を語り終えた。

重苦しい空気が漂う。

「……………」



…しかし。

イリヤの話が本当なら、黒い怪物になった人間は今も悪役というものを背負い続けながら生きている事になる。それがアイツの正体。だとしてもどうして、桜のもとにいるのか。

一体、アイツの目的は何なんだ。

「…黒い怪物の話は分かったわ。

そういう事だったのね。やっとあの金ピカが言ってくれたことが理解できた」

『はっ、奴が英霊などになるものか。』

あれは未だ死に場所を求められで惨めな人間だ』

『それにしてもキャスターなどと、魔術の扱いも碌にできん阿呆が見栄をはりよって。』

雑種、貴様を月とするなら奴は犬の糞ほどの腕しかない。

おおかた、神代規模の使い手が呼ばれるのを恐れたのだろうさ』

『アレはその程度の臆病者。…ただの臆病な人間に過ぎん』

「英霊の皮を被った怪物だったってわけ。…いえ、あの怪物にも様々な側面があつてその一つが英霊に近い性質を持っていたとでもいうべきかしらね。」

けど、どう考えても規模が違い過ぎるわ。確かに圧倒的な力を持っていたけどあの金ピカ、ギルガメッシュには劣勢だったじゃない。結局騙し打ちの形でどうにかしたみたいだけど。逸話に対してどうにも見劣りしているようだった」

イリヤの話では神々を相手取ったとされるが…正直、あの戦いを見ていると凄まじい力を持っていることしか分からないため、俺には判断できない。それでも何処か勝負を焦っていたようにも思える。

「さあね。いわゆる死にかけなんじゃないかしら。」

最古の記録が紀元前レベルですもの。あの怪物にも寿命があるのかもね」

「だとしても、どうしてそんな怪物が聖杯戦争に参加するワケ？既に死にかけなら大人しくしとけばいいでしょうに」

「私に言われても困るわ。よくある不老不死を求めてかもしれない

し、或いは桜と繋がってる…。聖杯の中にあるものが目的なのかも」

◇

「うん…。上出来よ衛宮君」

「投影は成功…。したらしい。」

何だかよく分からない記録を見せられ、非常に重要なことであつた  
だろうが俺には理解できることではなかった。

投影は成功した、したんだけど、どうも記録の中で見たのとは違  
うような。

いや、そもそも創り出したこの剣にはまったく魔力を感じない。

こんな刀身では物を斬りつけることすら難しいだろう。

「ううん。投影だけなら完璧、非の打ち所のない剣製よ」

「う…。実感が湧かないんだけど、本当にこれでいいのか遠坂？なん  
かへぼっちいんだけど」

「いいのよ。その剣はシュバインオーグの系譜しか扱えないとびつき  
りの切り札なんだから。」

ま、本当ならもつと長い時間をかけて辿り着かないといけない魔法  
使いからの宿題なんだけど…。いずれは自分の手で作れるようにな  
らなくっちゃね」

「魔法使いからの宿題!?!…。この短剣、そんなに凄いものなのか――」

――と。

油断、した。

気を抜くと目の前が霞む。

大丈夫。大丈夫。

まだ、何も欠けてはいない。

一度でもアーチャーの腕を使い投影してしまえば何か失われる  
と危惧していたが、幸い何処も欠けてない。

「シロウ…。その腕を使って本当に良かったの？」

「ん、ああ。大丈夫」

「でも、このままじゃシロウは」

「イリヤは心配しなくていい。このくらいなら何とか我慢する。たとえ死にそうになっても我慢するから」

俺は桜を守るためなら。この命がある限り、何度だって…

心配そうに見つめるイリヤの頭を撫でようと手を伸ば——

「っ！」

悪寒がした。

ひやり、と背に冷たい違和感。

嫌な予感、早く戻らなければ、という蟲の報せが脳を駆け巡る。

体が勝手に走り出す…前に、俺の体は宙に浮いた。

「シロウ… 掴まってください」

「つて、わあああああああ！」

グイツと身体が引つ張られ宙に体が浮かぶ。

先ほどまで姿を消していたライダーが俺の体を抱いて地を駆ける。

「本来であれば、あの娘を殺す剣を創り出した貴方を殺してしまいたいところですが… 少々事情が違ってきました」

「桜のことか？、まさか」

「ええ、アレがサクラの側に。何重にも結界を張っていたのですが恐らく破られたかと」

冷静を保っているようにも見えるが、ライダーの走りには焦りがある。

彼女は桜に何やら思うことがあるようで一時的に力を貸してくれているのに過ぎない。

今はライダーの速さだけが頼りだ。

山を越え、川を越え、幾たびの国道を走り抜け僅か数分足らずで家が見えてくる。

家の壁が見えたところで降ろしてもらい、玄関に向かって走り出す。

「くそ、アイツ、桜に何をするつもりだ…！」

玄関の扉を勢いよく開く。

暗がりの中、ソレはいた。

そこに立っていた。

「——ああ、帰ってきたんですか。困ったなあ、もう少し綺麗にするつもりだったんですけど…。まあいつか」

血まみれの少女が立っていた。

玄関前は踊りでも舞ったのだろうか、ドス黒い足跡が床の所々に付いている。

誰の血か、そんな考えが頭をよぎった。幸いにも藤ねえは違う、靴はないし、このところ家に来ないように言っている。

だったら誰…。いや、それよりも…。目の前の桜は、本当に桜なのか？

姿形は桜そのものだ。違うところといえば、衣服は血のようにドス黒いドレスのような物を着ており、髪は黒く染まっている。

「やく、らっ。」

「お帰りなさい先輩。どうしたんですか、まるで…。怪物を見ちゃったような顔をして」

まるで再生テープのように、いつもの桜の言葉を再現していた。

「桜——その、姿」

「ういふふ、いふふいふいふ」

目の前の少女<sup>怪物</sup>は笑う。何が可笑しいのか。

「っ——」

ぞくっ、と背中が総毛だった。

ぎちり、とナイフで裂かれたような極寒の痛み。

「逃げろ 」、 「逃げろ 」と警告音。

「ねえ、先輩。そこに居たら苦しいでしょう、こっちに、わたしの傍に来ませんか？」

「え…。」

「先輩が来てくれたらわたしも喜びます。わたしにとって、嬉しいことは先輩だけだから。」

先輩だって、わたしから離れたくないですよね？」  
少女<sup>怪物</sup>の背後に影が浮かぶ。

影は踊る、まるで舞台に立った演者。

「わたし考えていたんです。どうすれば傍にいてくれるかなって」

——影が伸びる。

大きな触腕を広げ、俺を飲み込もうと次々に触手が、

「でも、わたしといるかぎり、先輩はずっと苦しみ続けてしまう。

だから殺してあげることにしたんです。そうすれば、わたしの傍にいてくれるし、それに——

君も、苦しまなくて済むだろう？」

「あっ……」

俺は怯えた。

もう俺には目の前の生き物が桜だとは認識できない。

その場から動けず、迫る触手を目で追った。

自分から避けようとは考えなかった。

——死ぬ

これに触れてしまえば死ぬ。

それが分かっているのに、どうしてか俺の足はすくんで動かない。

苦しい、恐ろしい、外に出たいと体は発狂する。

足は後ろに飛びのこうと震えだす。

だが、跳べない。

足を踏み出すべき地面は既に呑み込まれている。

俺はこのまま、

『シロウ、手を』

「あ——え？」

気がつく和外にいた。

目の前には、視界を覆うほどの紫の髪。

「……ライダー」

「これは貴方の命令です『衛宮士郎と間桐桜を守れ』と」

黒い触手から救い出してくれたのはライダーだった。

素早く俺の体を抱き抱え、外に躍り出たのだ。

「シロウ、私の後ろに。あの触手に触れてしまえば、たとえサーヴァントであれ無事では済みません」

いまだに震える膝を動かし、彼女の背に隠れる。

少女のカタチをした怪物はゆったりとした足取りで外に出てくる。

「姿が見えないと思つたら、そう、逆らうのねライダー」

・・・ 周囲はとうに黒く染め上げられていた。

少女の背後の影が大きくなる。

ライダーは逃げる素振りを見せず、襲い掛かろうとする触手に警戒を向け、少女に語りかける。

「その娘は私たちとは違う。カリユドーンの怪物として葬られた貴方なら分かるでしょう？」

・・・ まだ引き返せません。サクラをこちら側怪物にしてはいけない」

まるで子供に言い聞かせるような声で語るライダー。

しかし、目の前のそれは事の善悪がわからぬほど幼くはない。

ライダーの桜を思う言葉は本物だったとしても、もう怪物の中にいる彼女には届かない。

少女は嘲笑うようにライダーに視線を向け、

「つまり引き返せなくしてあげればいいんですね」

そう言葉を残した後、一瞬にして俺たちの前から姿を消した。

く柳洞寺く

主人が居ないこの寺は数日で寂れた雰囲気を出していた。

その寺の山門に少女は立つ。

ここからは冬木市の景観が一望できる。これが日常的一幕であったのなら実に映える一枚絵になっていた事だろう。

空に目を向ける。

既に日は沈み始め、しばらくすれば夜の時間が訪れる。

どこに行くのだろうか、飛行機は軌跡を生み出しながら飛び去って

いく。それを目で追いながら手を前に差し出す。まるで、町を包み込むように。

ズンと周辺の空気が沈んだ。

「――告げる」

町全体に響かせるように少女は呪詛を唱えたのだ。

曰く、ソレは全ての悪、怪物とされた者の祖であり、子である。

曰く、ソレは名を変え、姿を変え、その度に死を味わった。

曰く、ソレは個であり、群となった。

聖書の中に怪物とされる一文がある。

「主がその地に至った時、悪に憑かれた黒き人あり。この者、人に恐れられ鎖に繋がれたものの、鎖を千切り、足枷を砕き、その地を荒らす。誰も彼も、この黒き人を制する力を持たず。夜も昼も絶えず叫び、己の身を傷つける。その人、主を見て恐れ叫んだ。『いと高き神の子よ、我は汝と関わりあらん。願いたもう、我を苦しめるな』主は「穢れし悪よ、その者から出て往け」と言ひ給ひ寄る。主はまた「汝の名は何か」と問うた。

『我が名は「――」、我は悪であり――』

主はソレを聴き、手を掲げた。人は主に許しを乞う『神の子よ、我を諫める者よ。我は死ねぬ、約束を果たすまで死ねぬ』そう叫び海に向かい、崖を下り、海に逃げ込みたり。穢れし人が去り、その地は平穏となる。人々は主に感謝し、共にあることを願った。

主は一人崖に立ち、彼の者に祝福あれと祈りを捧げた。 ”

「――我は怪物、即ち悪である」

平らげろ、平らげろ。

全ては願いを叶えるため。

ほんの少しの犠牲はあろう。だが、人はいずれ死するもの。なら

ば、その時が少しばかり早まっても問題なからう？

「さあ、再現のお時間です。わたしのために一生懸命食べてください  
ね？」

平穏な日は終わり。

太陽は沈み、夜が訪れる。

明けない夜が冬木に訪れる。

『我々は怪物である』

宝具の名が告げられ、怪物達は産声をあげ始めた。



## 桜と怪物 「冬木炎上」

『ご案内します。客室乗務員は安全業務を行ないます。恐れ入りますがお手伝いが必要な方は後ほどお知らせ下さい。』

静かな機内に乗務員のアナウンスが響く。

機体名ボーキング334はもう間も無く優雅な空の旅へと出発しようとしていた。

「はあああ」

男はようやく離陸かとあくびを零した。

「今回の里帰りは散々だった」

男は自分の右腕をさすりながら誰に言うでもなく呟く。別に腕が痛むわけではない、ただ何となく気味が悪いのだ。

機体は離陸を始め、窓の外には冬木の街並みが広がる。

今でも目を瞑ると鮮明に思い出せる。

「俺は確かに化け物に襲われた…。間違いねえ」

あの日、男は酔っ払っていた。

久しぶりに帰ってきた故郷、気分が高揚していたのは間違いない。

そのせいで普段は行かないであろう裏路地なんか迷い込んでしまった。

そこで出会った。

「うっ…」

その姿を思い出すと吐き気が襲ってくる。

アレは絶対人間などではない。アレが人間であってなるものか。

あの夜、男は化け物に出会った。

触手に塗れたソレは男を見つけた時、ニヤリと笑い（…いや口があつたのか定かではないが確かに笑っていた）男の腕を触手でもぎ取った。

「うううう…」

幻視の痛みが襲いかかる。

そうだ、確かにもぎ取られた。だから男に右腕があることが可笑しいのだ。

笑っていた、あの化け物は笑っていた。ああ、聴こえる。咀嚼音を鳴らしながら笑い合う声が。

何度も医者に訴えた。

『俺は見たんだよ触手の化け物を！この右腕をもぎ取られたんだ！…今はあるだろうって？』

うるせえ！本当なんだよ！信じてくれよお！』

しかし答えは「幻覚だ」、「酔っていたのでしよう」、「など相手にされなかった。

笑い声が脳裏に響く。

ニュースにもなった。男の他にも同じ症状を訴える連中はいたのだ。だが、集団幻覚だと決めつけられ相手にされることはなかった。

「あのヤブ医者共め、買収されてるに違いねえ」

比較的正気だと判断された男は病院を退院し、帰路に着こうとしている。

アレは幻覚だと受け入れれば楽な話だ。だが、それはできない。だって、今この瞬間にもあの化け物の笑い声が響いて…

『ハラ、減った』

「ああ？」

異変に気づく。

「な、何だよこれ…どうしちゃったんだよ、おい！」

男のいないはずの右腕が突如として踊り狂い始めた。

まるで餌を求める蛇のようなソレは、男の意志関係なく暴れ出す。

「だ、誰か！おい、助けてよお！」

助けを呼ぶ。周りには他の乗客もいるが、男が助けを呼ぶ理由が分からないのだろう。側から見れば男が腕を振り回し気狂いのように叫んでいるのだから関わりたくないと思うのは日本人の性か。

そのうち、男の叫びを聞き乗務員が駆け付けつける。

不審そうに男を見て声を掛けるが、

「お客さま？ 危険ですのでお席にお座りください——い、い、ががごぼぼ…!!」

しかし、それ以上の言葉は続かなかった。

“あ？え、あ、あああああ”

乗務員を見つけた右腕は突如伸縮し……乗務員の体を貫いた。腕は四方八方に触手を伸ばし、次々に乗務員の体を喰らいつくしていく。

血飛沫が機内に飛び散り、ようやく状況を理解した乗客たちは一斉にパニックに陥る。

「いつ、いやあああああー！」

「やめろお！く、来るな食べないでくれ」

「ひい、化け物!!」

だが、ここは空中の監獄。いくら席を立ち、逃げようが無駄なのだ。触手は一度目の食事を終えると、まだ満足していないのか次の獲物に目をつける。

触手は歓喜する。 “ああ、ここにはたくさんのご馳走がある”

「——いやああああッ——たすつ、助けて!!!」

「だれがあああがごばばふうばば……!!」

「赤いよお全部赤いよおおおおばほぶつづけ……！」

縦横無尽に喰らい尽くす触手。

男を中心にして惨劇が繰り広げられる。右腕は男の意志などもう受け付けない。主の命を果たすため、触手は暴れるのだ。

”アア、アア、あ”あ”あ”

天井、窓、至る所を突き破る。

乗客だけでは満足できない触手は、男を飲み込み機内を飛び出し右翼、左翼、それぞれのエンジンを破壊し、空の監獄を地上へ墮とす。

「機長！機体の制御が利きません!!」

「なんだと!!!」

くそつ、何があった？ エンジントラブルか!？」

「い、いえ……エンジン、全機停止。このままだと、確実に墜落します！」

「つ……『メーデー、メーデー、メーデー。こちらボーキング334、操縦不能……どうぞ』……げギギいつつつて」

『ボーキング334……すまない。そちらの音声聞き取りづらい。』

もう一度、どうぞ」

「『が、が、が』」

『ボーキング334?、こちら管制室。ボーキング334、応答を...』

『めー...：メーデー...?、メ~~~~~デ~~~~!!メへえエええええええ』

この通信を最後にボーキング334は突如180°旋回、その後、冬木市内に炎上しながら墜落。機体上には謎の生物がいたという目撃情報も後に寄せられたが詳細は不明のままである。

なににせよ、これが後に伝えられる第二次冬木大災害の始まりだった。

「院長!大変です、例の患者さん達が...!」

「例の?... ああ、集団幻覚の連中か。どうした、また夜泣きが酷いのか? PTSD治療薬でも投与しておけ」

「い、いえ。違うんです!」

あの患者さん達、堰を切ったかのように暴れ出して——」

その数秒後、院内は地獄と化す。

肉の芽を埋めつけられた人間は怪物へと変性し、町中に飛び出す。

『おがあああさん、おがあああさんわたじ、わたじ、おながすいだあ  
あああ!!』

「あんだ、どうしたのよ... ひっ、なによその姿!!」

『■■■■■■■■■■——!!!?』

「なんだあれ?猪か、それにしてもこんな街中に... おい、おいおいおい!こっちに突っ込んでくる気かよおおお」

「なあ空見てみるよ。あの飛行機、燃えてね?」

「うわっ、マジかよ... こっちに向かっってきてないk——」

魔猪、魔狼、竜種... 神話の黒い怪物達は主のために肉を喰らう。

彼らに意識はない。ただ命令に従い暴れ、暴食する。

「——リンー!」

「解ってるってえの——っ!!」

一体一体の力はさして無い。

一般人でも拳銃さえ用いてやれば十分倒すことはできる。それが魔術による攻撃であれば過剰すぎる程だ。

「なっ…!?!」

「しぶとさは親と同様ってことね。リン、コイツらを相手にしてもキリが無いわ」

親の特性が埋め込まれた怪物達は一度死んだ程度では無駄。傷ついた箇所はすぐさま回復し、再び肉を喰らい始める。

「ああ、もう！」

捕まりなさいイリヤ。全力で駆け抜けるわよ!!」

少女達は走る。

周りはまさに地獄絵図。泣き叫び、助けをこう人々に足が止まりかけるが、それを食いしばって耐える。

今はただ、衛宮邸へと走り続けることしかできなかった。

◇

「ひい、ふう、みい…ざつと30か…年はとりたくないものね。昔はもう少し上手くできたんだけど」

過去に行った規模と比べるとどうしても劣ってしまう。不満はあるが、時間稼ぎにはなるだろう。

分体から供給される魔力は徐々に集まってきており、これであればなんとか実行できそうではある。

「さて、わたしはそろそろ行きますね」

後ろに佇む騎士に声をかける。

騎士は、ただ頷く。今の主は目の前の怪物であり、その決断に口を挟むことはない。

「始まりの地、大聖杯のもとに向かいます。アナタは邪魔者が来ないよう門番の役目を果たしなさい。

… ああ、でも姉さんがきたら通してあげてくださいね？わたしが殺しますから」

くすくすと笑う。

それは少女が笑っているのか、怪物なのか判断はできない。

楽し気な怪物に騎士は問う。

「シロウ… 衛宮士郎はどうする?」

「そりゃあ勿論… あっ… つ… なに?」

その問いに少女は答えることが出来なかった。

◇

「此度も、結果のみを見せられるとはな」

神父は燃え盛る町を見下ろす。

裁定者は消え、残るは己の醜い願望のみ。

「客席からは見えぬと言うのならば、私も舞台に上がるとしよう」

悪の誕生を祝うために、傍観者は舞台に上がる…

## 桜と怪物 「顕現」

笑う、笑う。

誰かがワタシを笑っている。

ワタシはただ、帰れたかった。

昔から妖精に捕まった子供は二度と家に帰れないという迷信がある。実際それは本当だ。現に、僕は帰る場所が分からなくなってしまった。

早く帰らなくてはいけないのに。いつの間にか帰る家は消えてしまった。

ずっと遠くにワタシの家。

ずっと遠くが僕の家。

『エイエンニ、エイエンニ、アソビツツケヨウ』

笑う、笑う。

脳裏で誰かが笑い続ける。

きつと、永遠に帰れない。

全部■べた。家族を■した。何度も■んだ。神も、人間も誰も  
ワタシを恐れた。

血に染まる両手。

それを見てワタシは笑った。

それでも、

『あ■■を■して■る、■つ■でも』

一度だけ、帰る場所を作った。

何万年もの時の中でほんの一瞬、何もかも、罪も忘れ、ようやく僕は帰——

消して消えてひび割れて、全部、全部ナイナイナイ

”ねえ、どうして動かないの?”

冷たくなった友の体に縋りつきながら僕は問います。

”……死だ。これが生きとし生けるものが決して避けられぬモノ

の名だ”

王様は涙を流しながら答えました。

ええそうです、僕は恐れたのです。死、という概念をそこで初めて理解したのです。

だから、逃げました。

別れも告げず、世界の裏側へ。だってそうすれば死ななくて済みます。

誰にも干渉されず、星の終わりまで眠りにつく。ほら、最高でしょう？

それを呪いは許してくれませんでした。

彼らは僕を攫っただけではなく、呪いまでくれていたようです。

英雄が生まれるたび、僕は世界に生まれるのです。

そして彼らの物語の時には悪役となり、打破されるのです。

何度も、何度も、何度も、繰り返しました。

それで気づきました。

これに終わりはないのだと。

ええ、正直喜びました。感謝さえしました、あの妖精達に。

老いもせず、死ぬこともなく、姿形も自由自在、そして巨人から奪った力もある。

終わりの遊び。

終わりのない旅路。

どうせ終わらないなら楽しもう、と英雄共の物語に介入したのです。

でも、楽観的でいられたのはア■■■■ン■■と出会うまで、そこでワタシは■■を、■■を知ってしまったのです。

幸せでした。

今まで奪い、奪われ、憎まれ、憎み、呪われ、呪うことしかできなかった僕に彼女は■■を教えてくれた。

共にいるだけで十分だった。

誰かを救うなど、彼女がいなければ決してやりもしない行いまでした。



家族ができた。帰る場所ができた。  
僕はそこで初めて、人として帰ることが――

はいはい、歩みの末に消えまして。

… はて、なんだったか。

ああ、そうだ。

ワタシは死ななければならぬ。

なぜか、と問われると返答に困る。

もう限界なのです。

次はもう自我は持てない。

どんなに優秀な機械だろうとメンテナンスは必要です。

ワタシの呪いは、この万年の歩みで錆びついてしまった。

次この世界に生まれるときは、自我のない地縛霊と同等になるだろう。

それでは駄目だ、約束が果たせない。

誰と、何を約束したのか、もう思い出せないがワタシは…

いつそ獣に堕ちてしまえば良かったのに

◇

怪物は祭壇に立つ。

呪いを身に纏い、異界に立った。

「アンリマユ…この世すべての悪、か」

黒く聳え立つと柱にそれは居た。

肉体はまだ形成されておらず、未だ胎児のまま、それでもしつかりと怪物を見つめていた。

「60億の人間を呪う英霊、泥、肉塊、なれ果ててまで産まれたいのか」

怪物は無表情のままソレを見つめ返す。

似た者同士、押し付けられた者同士、思うことはあるが言葉にするまでもない。

誕生しようとする者、死滅しようとする者、両者は決定的に違っているのだから。

「馬鹿が、させるわけないだろう。人類が滅んでしまえば人理も滅びる。それは認められない、それは望んでない。

せめて一人くらいは残しておかないと、呼べるものも呼べないでしょう？」

西暦後、人類は飛躍的發展を遂げた。

例を上げるならば、銃である。

起源は不明なものの年代が進むにつれ頭角を表したソレは容易く人を殺せるものに進化した。

例え赤子でも引き金を引けば殺せるのだ。これほど効率の良い発明は二つとない。

かつて剣や槍が競い合った戦場は、今や銃の撃ちあい。

これにより戦いで名を馳せる英雄は生まれにくくなった。人類にとって、殺す、ということは容易いものと化したのだ。

「今じゃ世界を救ったぐらいでは英雄と呼べない。それぐらいなら誰でもできることになってしまった、言い換えれば些細なことでも致命的な要素になり得てしまう」

世界を滅ぼすくらいなら核兵器の発射ボタンを押せばそれで事足りる。アメリカ大統領の机の引き出しにはいつでも押せるように発射ボタンがあるとされているが、仮にそのボタンが押されようとして、誰かがそれを暗殺か何かで阻止したとしよう。では、この阻止した人物は英雄なのか？

勿論、答えはNOだ。

だって次の大統領の人間が再びボタンを押すかもしれないのだ。一度止めた程度では、そんなものその場しのぎにしかならない。

脅威となる存在も引き金を引けばそれで解決。チャンスの有無は問わず誰だって可能なことなのだ。

正義のヒーロー 英雄も居なければ絶対的な悪も居ない。それが現在の理。

であれば、だ。

「簡単な話です。創ってあげればいいんですよ、星を救う英雄をね」

世界を救う程度では英雄とは言えない。じゃあ星を救ったのなら…… どうだろうか。

だが、実行しようと思いついた時には不可能だった。

自身の真体を引き摺り出す余力はとうになく。エーテルはとつくの昔に失われていた。

19世紀に入ってから死ぬことすら難しくなってきた。英雄など最早存在せず、ただ自分が朽ちていくのを実感していく日々。

自殺も試したがどうやら無駄らしい。ワタシはどこまで行っても倒される悪であるしかないのだ。

活動するために死肉を食らった。戦場の腐肉を漁った。

いつからか食事は捕食へと変わった。普通の食べ物では得られる魔力が薄い。それゆえ人を喰らった。

だが、足りない満たされない。失っていく魔力、朽ちゆく体。なんのために生きているのかすら認識できず捕食を続ける日々。

いよいよ靈魂だけの存在へと成り果てるかと覚悟した時、風の噂を聞いた。

極東の都市で行われる大儀式の話を。

そこからは早かった。

国を跨ぐ間に身体は失ったが問題なし。召喚儀式に潜り込み偽りのサーヴァントとして霊基を得た。幸いにもワタシには英霊として認められる素質があったらしい。(皮肉なものだが)

勝ち残れるかは賭けだったが結果はこの通り、どう転ぼうがワタシの勝ちに変わりはない。

「二から造るとなると難しい。英雄ではなく、星の脅威の方がね。

……南米の方に相応しいのが居るには居るんだがあれはダメだ、当分起きない。それにあれは星の脅威ではなく霊長の敵だ。区分が違う。

ならばどうするか、簡単なことだ。

——ワタシがなればいい。そのための聖杯、そして貴様だアンリマユ」

都合のいい肉体、そして最上級の霊基も手に入った。

この肉体は聖杯、強いてはその中身と繋がるもの。霊基は神代のもの。

素材は揃った。

「今のワタシでは星の脅威とは認知されないだろう。だから本来のワタシに戻る。英雄を産むために、死ぬ逃げるためにため。」

貴様はただの魔力源だ……もしくは触媒というべきか。

なに、心配するな。真体を引き摺り出した後は、ちやあんと食べてあげますから」

パチンつと指を鳴らす。

怪物の周りに召喚陣らしきものが描かれる。得体の知らない文字、有り得ざる異界への干渉。

「とはいえ、条件もなしにできるものではなくてね。」

だから、席を用意した。未だ埋まらない7騎目の席を」  
魔力が疾る。

世界の裏側に通じる道が開かれる。

触媒も呼水となる契約者もこの場に揃っている。

「さあ、来なさい。再びワタシはこの星の悪となる!!」

『ワタシは追い、奪い、引き裂き、喰らい、飲み干す！

神々は逃げ、隠れ、打ち震え、絶望し、亡びゆく！

廻れ、廻れ因果！

黒い、黒い月よ！

顕現せよ、我が真体！今ここに、道を開く——』

祭壇に招かれざる物が生まれ出でる。

産道を通り外界へと産まれる赤子のように堕ちてくる怪物を、両手で包み込むように受け止める。

もとより裏側にあつた真体は抜け殻のようなもの。故にその扱いは依代である子機に委ねられる。

「ぐっ……アアアアアアア——」

その巨体は押し潰さんと堕ちていくかに見えたが、少女怪物に触れた瞬間吸い込まれるように同化していく。

許容の範囲を超える異物を受け入れる身体は苦しみの声をあげ、徐々に徐々に変質していく。

その身はかつて神々を喰らった姿に。なり損ないの獣に。泥を纏うようにその身体をかつての在り方に…

「■■■■ツ!! あっ で ぢい い うーっ あーっ ふーっ、ふーっ、ふーっ」

しかし、事はそう上手くいかないようだ。

かつての姿を纏えたのは、ほんの一瞬。完全に顕現したかと思えたその身体は溶け崩れ、少女体へと戻ってしまった。

「足り、ない、かつ」

聖杯による補助、少女に宿る魔力、アンリマユの霊基、これだけあっても在りし日の姿を保つことができない。

神霊における分霊ならいざ知らず、真体そのものを召喚したのだ。それだけでも膨大な量の魔力を消費しており、ましてやその巨体を維持するための魔力を常に生み出し続けるのは不可能に近い。

この時代において、神や怪物など既に時代遅れの産物。だが、アテはある。

「ふ、ふふふっ。ようやく、ようやく元の体に戻れたんです。後は、お腹を満たせばいい、だけ——」

空洞の奥に佇む大聖杯には無尽蔵の魔力が渦巻いている。

世界中の魔術師がこぞって集まり、好き勝手くみ上げようと尽きない貯蔵量。

数回に渡る聖杯戦争の末に魔力は溜まりに溜まっており、たとえば底があろうとも、無尽と称しても間違いではない。

そして、その中にはアンリマユこの世全ての悪が居る。

今の怪物にとって、これほど上質な餌など存在しない。

「無様なものだ。あんな偽物の杯に縋らねばならんとは……ん？」  
祭壇から地上を見下ろす。  
崖の下。

黒い太陽を見上げながら、遠坂凜は己の妹であったモノを睨んだ。

「——っ」

その存在の重圧、変貌に圧倒され、凜は僅かに後ずさる。

「…少女の変貌は、あまりにも凄まじい物だった。」

アンリマユ…そして黒き怪物と同化したその姿は「悪を押し付けられた者」という呪い、それを周囲に振り撒き、役目を持たせる機能が、間桐桜という少女に課せられたもの。

「あら、もう少し足止めできるかと思っていたんですが…お早い到着ですね、姉さん」

「まあね。神父の暴走ドライブングがなかったらもう少し遅れてたかも…それより、くだらない三文芝居は止めてくれる？ 気持ち悪いから。」

もうほとんど残ってないんでしょ、あの子？」

「言ってくれるね」と肩をすくめ、姉に身体を向ける。

「それで？」

貴方の目的は達成できたのかしら。まあ、その様子じゃあ失敗しちゃったみたいだけど」

「ははっ、とんでもない。むしろここから始まるんだ。」

「そうだ、よかつたら見ていくかい？ その方が手間が省ける」

「冗談。」

でも不思議ね。邪魔されたくないならどうして私をここまで通したの？ もう貴方桜を縛るものはない、変な義理立てなんて不要でしょうに」

既に怪物に少女が飲み込まれたと言うのならば遠坂凜に構う必要などない。怪物にとって凜は取るに足らない存在なのだ。

それなのに悪意の目で怪物は凜を見下ろす。

「——いいえ。それがまだなんですよ、姉さん。」

まだワタシサクラは満足していません。なんだって出来ちゃうのに、ワタシはまだ囚われたままでいる」

それは怪物の遊びか。それとも少女の本心か。

少女体の怪物は凜を見下ろしながら淡々と喋る。

「…もう、姉さんなんてちっほけな存在なのに、姉さんはワタシの中から消えてくれない。姉さんはワタシの中でずっとワタシを苛め続

けている。

だから——お前がいる限り、サクラは自由になんてなれない」  
矛盾に満ちた言動は、怪物が既に正気でないことを明らかにしていた。

怪物の声は歌うように楽しげで、粘りつくような殺気を纏う。

大空洞に満ちるは優越と狂気が混ざった狂想。

「ふうん。なら私だけを殺せば良かったでしょうに。あんなに大勢の人間を、なにも関係ない人間を喰い殺す必要はあったの？」

「ええ。だつてお腹が空いたらなんだつて食べたくなるもの。喉が渴いたら水を飲むし、お腹が鳴れば食べます。

だから同じ。姉さんと変わらない。ワタシ達は当たり前のように、みんながしていることをしたんです」

外界では変貌した怪物達が人間を食らい続けている。

そこに何も感傷もなければ後悔もない。ただ、そうするように仕組んだのですから。

「——ねえ。今の屁理屈、本気で言ってる？」

「屁理屈などではない。ボクは間違つてない。

違ったのはこの世界だ。変わってしまったから、ワタシの在り方も変わらざるを得なかった」

「ボクは——ワタシは約束を守らなければなりません。そのためには何だつてやってやる。

……そう。守るためには仕方がないことなんだ。きっとそうだ。死んで償えば、今までしてきたこと全部当たり前、仕方ないことだつたつていえる筈です……!!」

懺悔とも取れる絶叫。

そう、信じることでしか逃げることができなかった、泣きじゃくる子供の訴え。

「……そ。そうやってアンタは逃げ続けてきたつてわけか。なによそれ、ただの八つ当たりじゃない。死にたきや勝手に死んでろつてえの。」

けど、士郎はどうなの。ああ、これはアンタじゃない。桜に聞いて

るの。ねえ、聞いてるんでしょ、あいつは今でもアンタを助けられると信じてる。それでも関係なく、アンタはあいつを殺す気？」

「っ——」

怪物の貌が引き攣る。

凜の問いかけは、桜と怪物にとって最後の関だった。

… 飲み込まれていた意識が浮かび上がる。少女は、もう間近に来てくれた少年を想い、手放しかけていた心を僅かに取り戻す。

そうして穏やかな笑みを浮かべ、

「はい。先輩だろうが関係ありません。

ううん——きつと殺したいじゃなくて。

ワタシ、早く——先輩も食べてしまいたい」

間桐桜であつた者の答えは、もう何もかも手遅れだった。

凜は手にある宝石剣を握り、頭上の「敵」までの距離を測る。

「… ふん。バカな娘だと思っていたけど、まさか怪物に魂売るようなバカとは思わなかった。完全に同化して、とっくに人間辞めていたのね」

明確な敵意。

遠坂凜はこの地を預かる管理者として、妹であつたものを「悪」と認定した。

「ふふふつ。強がりが好きなこと。素直になつてくださいよ姉さん。

こんな強い力を見せられて、本当は羨ましがってるんでしょ？嫉妬してるんでしょ？だからわざわざ、敵わないって知りながらワタシを殺しに来たんです。

… そう。またワタシから奪って、自分だけ幸せになる気なんだ」  
湧き上がる影の巨人。

それは怪物のものではなく少女の力。

彼らは守護する巨人のように、眼下のちっぽけな人間へと手を伸ばす。

「… 願いへの道は手に入れました。あと数歩でワタシの物語は終わります。

これより、邪魔するもの全てを抑止力とみなし排斥します」



影の巨人が迫る。

防ぐことも躲すこともできぬ圧倒的な力が、遠坂凜を飲み込む」

「——力の差を思い知らせてあげます。」

もう誰にも負けない。湖に落ちた蟲みたいに、天の杯に溺れなさい」

## 桜と怪物 「貴方とわたし」

時は少し戻る。

「それで… 一体どうするんだ」

イリヤを背負い、命懸けで走り抜けてきた遠坂に声をかける。先ほどまで肩で息をしていたのが嘘のように、遠坂は冷静に燃え盛る町を見下ろしていた。

「町では未だ怪物達が暴れ回っている。

本当であれば今すぐ走り出してアイツらを倒すべきなのだろう。

だが、そうすれば桜は救えない。中にいる怪物がきつと桜を…

だから俺は選ばなくてはいけない。

「当然、地下の大空洞に向かうわ。きつとそこに向かったんだろうし。

何より町のこと構って暇はないの。

怪物の目的は知らないけど、あの娘たちを放っておけばこの町だけでは済まないかもしれない」

「……」

「じゃあ、出発する前にお互いの目的を確認しておきましょうか」

俺は、

「私は、——桜を殺すわ」

「俺は、——桜を救う」

桜の、桜だけの味方であることを選んだ。

呆れるほど桜が、大切だったんだ。

叶わないと知りながらも、約束をした。

叶わないと知りながら、お互いを励まし合った。

けど此処には残ったものは何もない。

なら、取り戻しに行かないと。

それが俺の願いなんだから。

「… 行きましょう。足は用意してあるから」

玄関の外からクラクションが響く。

◇

時間がない。

すぐにも柳洞寺の地下へ向かわなければならぬ。

しかし、奴らは行かせまいと続々集まってきている。

空を飛び交う黒龍、暴れ狂う魔猪、血を求める食屍鬼が蔓延る道をなんとかして突破する必要があるのだが。

「——おっと、危ない」

勢いよく踏まれるアクセル。

無惨にも吹き飛ばされる食屍鬼。いくら束になろうと猛スピードで走る自動車の前では肉壁にすらならない。

「ちよつと綺礼!? アンタ安全運転ぐらいできないわけ!!?」

襲いくる黒龍達を撃ち落としながら遠坂が吠える。

「無茶を言う。止まってしまえば彼らの腹の中に収まってしまおうというのに。」

それに、もはや交通機関など機能していない。スピード超過できる機会など今しかあるまい」

時速100キロを超える無謀なスピードでクラシックカーを疾駆させる神父。時には轢き飛ばし、時には華麗なハンドル捌きで回避するという運転テクニクのお陰もあつてか彼らは無傷でたどり着くことができそうだ。

しかし、なぜこの男が協力してくれるのか、士郎は疑問を抱く。

「あれが完全に顕現するのは私にとって都合が悪い…。残された時間も少ないのでな。」

なに、目的の一致という単純なものに過ぎない。私は自身の願いを見届けるためにお前達に協力するだけだ」

くくくつ、と笑いながら神父は答える。

相変わらず気に食わないと思いつつながら窓の外を見る。

燃え盛る町。

ビルの頂上では巨大な竜が産声を上げている。

車から流れるラジオからは旅客機も墜落したようだと言った様子で速報を読み上げられていた。

きつと、この現状を解決したとしても、町と人々には十年前の比にならないほどの傷跡が残り続けることになる。

それでも、何もかも手遅れになる前に終わらせなくちゃいけない。  
「あの怪物達は全て奴の子供……いや、眷属というべきか。」

魔術は効くもののすぐに再生を繰り返し、暴食を始める。さながら女王蟻と働き蟻だな。今なお人間を食い続けてエネルギーを親に供給し続けている。

よくもまあ、あそこまで数を増やしたものだ。素体である人間を組み換えるのは中々手に余るというのに。正真正銘伝承通りの怪物だよ彼は」

妖精に攫われた人間が怪物になり、そして自分で人間を怪物にしているのだ。

もう、アレを人間とは思わない。

アレは人間にはなれない哀れな存在だ。

「そうだ。」

彼を哀れな人間だと考えるのはやめておけ衛宮士郎。

アレは人間気取りの紛い物、人間らしい行為を期待してはいけない。

彼はもはや同情される被害者ではなく、糾弾される加害者へと回ったのだ、下手に哀れむとお前が食われてしまうぞ」

「……分かってる。」

俺はあいつから桜を取り返す。ただ、それだけだ」

もとより八つ当たりにつき合うつもりはない。

◇

障害物を乗り越え車は石段の前で停車した。

出迎えはない。

闇に沈む柳洞寺は、異界そのものと化しており異質な力を放っていた。  
た。

上空には風が出ているのか、耳を澄ませば、ごうごうと強く大気を蹴る音がする。

「じゃあコトミネ。次はアインツベルン城に向かって。わたし、取りに行かなくちゃいけない物があるの」

「……いいだろう。寄り掛かった船だ。最後まで見届けさせて貰うと

しよう。

ではな、君たちの健闘を祈る」

車から降りず、そのまま城へと向かおうとするイリヤ。

「イリヤ……」

「大丈夫よ士郎。わたしにもアインツベルンとして果たすべき役目があるだけ」

俺にはイリヤに課せられた役目などよくわからない。

でも、ここで名前を呼んでおかないと取り返しがつかない、そんな気がしてしまった。

「生きていたら、また会いましょう。」

——頑張つてね。お兄ちゃん」

手を振り去っていく彼女になにも言えず見送る。

伸ばした手で虚空を掴むことしかできなかった。

「……階段の上に力を感じます。境内の裏手にある池に儀式的な場が作られているようですが」

「いえ、あつちに用はないわ。上にあるのは見せかけの、ただ聖杯を欲するマスター用の門よ。」

聖杯戦争の大聖杯おおもとに行こうっていうんなら、上じゃなくて下に行かないとね」

階段を離れ、遠坂は森の中に入っていく。

それに続いてライダーも。その後を俺は小走りについていく。

「ライダー大丈夫か？」

「……多少の重圧はありますが、耐えられるレベルです。それにこの土地はサーヴァントにとって最適な霊脈です。大気に満ちた魔力を吸い上げれば回復は容易いでしょう」

「そうか。辛いだろが、少しの間我慢してくれ」

木々をかき分けて、夜の山を歩いていく。

山には獣道さえなく、ほとんど絶壁じみた岩肌を降りることさえあった。

数分たっただろうか。

ようやく、それらしい洞窟を見つけた。

「… っっよ」

遠坂が洞窟の中を指を刺す。

しかし、どう見ても一メートルほど進めば行き止まってしまいうようにしか見えない。

「なるほど、天然の洞窟ですが、人間が入れないこともない。ここから一メートルほどで行き止まっているように見えますが、魔術による偽装が感じられます」

なるほど、これなら中に入ったところですがすぐに岩にぶつかると一目で分かり、真つ当な人間なら入ろうとすら思わない。

遠坂は振り返らずに暗い闇へと突入していく。

「先にどうぞ。後は私が守ります」

頷いて闇に潜る。

水に濡れた地面を急足で進んでいく。

地面は急激な角度で下へ下へ傾いている。

狭く、息苦しい闇の圧迫。

足を滑らせれば、すぐさま無限の闇へ転がり落ちていきそうだ。

「士郎。今のうち聞いておく」と。

先行する遠坂が、唐突に話しかけてきた。

「いいけど、なにさ」

「宝石剣。なんで作ってくれたの」

そっけない質問。

それはまるで、下に降り続ける作業に飽きて、暇つぶしに口にしたようなもの。

「なんでって」

「——だから。わたしは桜を殺すって言ってるのよ。あの怪物がどうしようが、あの子は救えない。まだ人の皮を被っているうちは諸共殺せるだろうし。」

そんなわたしに武器を預けていいのかってコト」  
なるほど、と頷いた。

それは、まあ確かに、遠坂の言う通りである。

背後からも悪寒が襲ってくる。

ライダーのものだろう。

彼女にとつて桜は似たもの、自分と同じ境遇だと感じている。

それゆえ、桜を殺す武器を作り出した俺の行動に疑問があるのだろう。

だから、正直に俺の気持ちを打ち明ける。

「そうだな。よくない、よくないけど、遠坂がいてくれないと桜は助けられない。桜を助けたいんなら、一人より二人の方が確実だ。

…それに、剣を投影するのは借りがあるからだ。

俺は遠坂を勝たせるっていう約束を果たせなかった。だから、この借りだけはキチンと返しておきたかったんだ」

もう随分前に感じる。

セイバーを失った後、俺は遠坂に助力を求めた。

遠坂はそれに応じてくれて、確かに約束したんだ。

遠坂を勝たせる。

聖杯戦争の勝者を遠坂にすると約束した。…それはもう守れない。

だから、借りだけが残っている。

あの時。

何も無かった俺を信じてくれた、遠坂凜っていう、好きだった女の子の為に返さなきゃいけないんだ。

「そう。律儀ね、貴方」

「ああ。遠坂ほどじゃないけどな」

会話はそれで終わった。

俺たちは互いの顔も見れず、黄泉への道へと降りていく。ぐらりと洞窟が揺れた。

巨大な何かが落ちたような音と共に。

奥で何が起きているのか、想像もつかない。

この洞窟には生命力で満ちている。

それがあまりに生々しい。

活気に満ち、生を謳歌しようとする誕生の空気。それが奥の空間から流されてきている。

「――」

交わす言葉はない。

ここは死地だ。

声をかけ合うなど余分な行為をすれば死につながる。

しばらく進むと、大きく開けた空洞が広がる。

横幅は学校のグラウンドほど。

天井は闇に霞んで見えないが、数十メートルほどの高さだろう。

そこに、

絶対の殺気を纏って、セイバーが待っていた。

空洞には彼女しかいない。

桜も……怪物もいない。

立ち塞がっているのは、黒く変貌した彼女だけだ。

「凜。私は貴方と争う理由はない。くれぐれも私に剣を向けないうに。――貴方をここで殺してしまつては、彼の命令に背いてしまふ」

「……！」

セイバーは静かな、以前と変わらぬ声で、後ろで宝石剣を握りしめた遠坂を諫める。

「どういうつもり？ 貴方はこの門番よね、セイバー」

「はい。相手がなんであれ、ここを通るものは潰す。ですが――」

「わたしは例外。そう……あの子まだ消えてなかったんだ。我慢強い子だとは思っていたけどここまでとはね。

セイバーは頷く。

「……せめてもの情けつてやつね」

短く呟き、遠坂はセイバーへと歩き出す。

「遠坂」

「悪いわね。そういうわけだから先に行かせてもらおうわ」  
堂々とセイバーの横を通り過ぎていく。



その姿が闇に溶け込む寸前。

「アンタがどうなるかは知らないけど、わたしは信頼してるんだから、ちゃんと期待に応えてよね」

「…？」

こんな時だつてのに、目的語がない文句を言われても、うまく頭が働かないのだが。

「だ、だから… その、桜を助けたいっていうんなら遅くなるなってコト！。ケリがついた後に来られて文句言われても迷惑なのよ！」

そのまま振り返らずに遠坂は奥へと消えていった。

今ので気合いが入った。

要するに、自分が終わらせる前に来いと、遠坂なりの応援なんだ。

まったく、何処からそんな自信が湧いてくるのか… いや、勝算のない勝負はしないタイプだもんな遠坂は。

「それは不可能だ、シロウ。貴方はここで死ぬ」

「… セイバー。どうあつても退かないんだな」

「くどい。それが私の役目と言いました」

左腕の聖骸布を握りしめる。

俺たちは敵同士。

それはもう覆りようのない事実。

それを、

「———そうか。なら、ここでお前を消滅させる」

はつきりと認識するために言葉にした。

セイバーの剣が上がる。

その剣気はライダーを捉えている。

「… シロウ。私では魔力を上回る彼女を石化することはできませんが、重圧をかける事はできる。全力でかかれば、二分は拮抗できるでしょう」

ライダーの眼がセイバーを捉える。

「状況は私が作ります。貴方は動かさず、気を逃さぬよう」

「ライダー」

「———では、私の命を貴方に預けます。 士郎」

ライダーの姿が掻き消える。

高速の足を以って、黒い騎兵は剣士へと疾走する――

◇

黒い波が迫る。

遠坂凜というちっぽけな人間を逃すまいと両手を広げ、覆い被さる  
ように襲いかかる。

それを

「Es last frei. Werkzug――！」

黄金の一閃が切り開く。

巨人を模った呪いを一瞬にして六体。

際限なく湧き上がるそれを、凜は一刀の元に両断する。

「は――」

驚きはその呪いを行使する、怪物のもの。

彼が目を見張るのも当然だ。

巨人は怪物自身の能力ではなく、依代としている間桐桜の虚数魔術  
によるものであるが、その一体一体がサーヴァントの宝具に匹敵する  
出力を持っている。

巨人は人間である遠坂凜にとって、一体だけであろうと逃れられな  
い死の化身なのだ。

それを既に六体。

しかも悉く一撃で消滅させられている。当の彼女は苦も無く崖を  
駆け上がってくる。

七体目の巨人も切り伏せられる。

「そんな、なぜ――」

「しつこいっての…！」

宝石剣が光を放つ。

透明だった刀身は七色に彩られ、その中心から桁外れの魔力が生み  
出され、

「Es last frei. Eilesalve――！」

大空洞を、眩いばかりの黄金色が照らしあげる…！

「ふっ——！」

接近を拒んでいた影の巨人たちを一掃し、凜は崖を上がり切った。目前には間桐桜の形をした怪物。

黒き怪物は愕然と、ここまで駆け上がった人間少女を凝視する。

「なんで——そんな、わけ」

……少女の呟きと共に、無数の巨人が立ち上がる。

その数は先ほどの比ではない。

少女の焦りか、それとも怪物の生存本能が告げているのか。

遠坂凜という、取るに足りない人間一人に対し、過剰といえる魔力が溢れ出す。

「——大盤振る舞いなこと。協会の人間がいたら卒倒するわよ。それだけの貯蔵力があれば、むこう千年は家を永続できるってね」

「——それを切り伏せる姉さんはなんですか。今のわたしは、姉さんの魔力の何千倍もの量を引き出せるのに。姉さんには一人だつて影を消す魔力なんてないのに、なんで」

「どうしても何も、純粋な力比べをしてるだけよ。」

わたしは呪いの解呪なんてできない。単に、影を作り出してる貴方たちの魔力を、わたしの魔力で打ち消しているだけ。桜はともかく、貴方なら見て分かるでしょう?」

「それが嘘だつていつてるんだ……！」

姉さんにそれだけの魔力はない。いいや、さつきから何度も放つてる光は、まるで」

かつて肉体を消滅されかけた、星の聖剣の光そのものではないか、と怪物は顔を歪ませる。

「ずるい、ずるい」と少女の意識が揺れ動く。

それを無理矢理押さえ付け、思考を巡らす。

あの剣はセイバーの宝具を写したものか?それとも私を殺すための限定武装——

いや、違う。

私はその光を恐れていない。

その剣、聖剣とも似ても似つかないその剣は見覚えがある。

「説明が必要かしら。これはセイバーの宝具のコピーでもないし、怪物殺しの魔剣でもない。これはね、遠坂に伝わる宝石剣で、その名を「ゼルレッチ」……っ」

二つの声が重なった。

「そうか、宝石魔術……シユバインオーグに連なるものだったか」

「……なに、知ってるの貴方。じゃあ、説明するのも馬鹿らしいけど、要するに貴方の天敵よ。」

今の貴方は魂を永久機関にして魔力を生み出し続ける、第三魔法の出来損ない。

そしてわたしは、無限に列なる並行世界を旅する爺さんの模造品、第二魔法のコピー品ってコト……！」

——宝石剣が振るわれる。

短剣は光を放ち、彼らを守る影を消滅させる。

それは、確かに単純な力勝負だった。

どのような魔術——いや、魔法を使ったのか。

今の凜は、確かに、怪物に匹敵するほどの魔力の貯蔵があるのだ。

光の衝撃により洞窟は激しく揺れる。

巨人は次々に引き裂かれる。

「っ——あ」

「このままどつちかの力が尽きるまで打ち合いをするのも悪くないけど、貴方が動けないうちに終わらしてあげる。」

かかってきなさい。貴方が何をしてきてもわたしには届かない。

荒療治だけど、ま、諦めてちょうだい。ちよつと強くなつたぐらいで我儘放題したこと、後悔させてあげる」

「——！」

閃光が煌めく。

「っ……！」

まだまだあ!!」

「E i e n, Z w e i, R a n d V e r c c h w i n d e n ——  
——!!」

複数の巨人が展開されるが、圧倒的な光によってねじ伏せられる。

目の前の光景を、間桐桜は理解できない。

姉への恐怖だけで巨人を使役する。

それを容赦なく打ち払う光の剣。

間桐桜は怯え、混乱していた。／怪物は勝利を確信する。

それ故に気付かない。／それに気付いている。

遠坂凜の額の汗。

一撃振るうごとに腕の筋肉を切断していく、宝石剣の、その代償に。

「ははっ——愚かだ。愚かだ！」

ただの人の身で際限なく振るえるはずないだろう。貯蔵の差もそれでは意味がない!!お前の体が持たない!!

わたしの、僕の勝ちだ。潔く砕けろ!!」

「——なら、大聖杯ごと砕くまで！」

両者の力は互角ではない。

遠坂凜と黒き怪物。二人の戦力差は変わっていない。

怪物の魔力貯蔵量は数億どころではない。時代の一生を持ってしても使えきれぬ量を、惜しみなく放出する。

振るわれる光。

千の魔力に対する千の光ならば、確かに拮抗することはできる。

だが、遠坂凜の魔力は百にも届かない。

その矛盾。

本来ならば成立しない拮抗を生み出すものは、言うまでもなく彼女が持つ「剣」の力だ。

一撃ごとに千の力を生み出し、更なる魔力を補充する光の短剣。

それは遠坂凜の魔力を増幅してのことではない。

彼女はただ、この大空洞に満ちる魔力を集め、宝石剣に載せて放つてるだけである。

「どうして...!!どうしていきなり、そんな都合よくわたしに追いつくんですか! 《うるさいうるさい 出てくるな 出てこなくていい》 姉さんの魔力じゃわたしに飲まれるしかないのに...! 《ああああ

「忌まわしき老害が!!」

「それが間違いだっていうのよ。いくら出鱈目な貯蔵があつても、それを使うのは術者でしょう。

分からない？　どんなに水があつても、外に出す量は蛇口の大きさに左右される。

アンタの敗因はね、間桐桜つて肉体を選んだこと。あの子の瞬間放出量は一千弱。

なら、どんなに貯蔵があつても、一度に放出できる魔力はわたしとさして変わらないのよ…!!

それが思い浮かばないあたり、とんだ三流ねアンタ！」

「っ——」

「だから！　わたしが用意するのはアンタと同じ貯蔵量じゃなく、毎回一千程度の魔力でいい…！」

そんなバカみたいに肥大な魔力なんて、今のアンタには宝の持ち腐れよ——！」

なるほど、確かにこの大空洞に満ちる魔力であれば届く。

一度きりならば魔力の助けを借りて巨人を退けられるだろう。

——だがその後は続かない。

大気に満ちる魔力とて有限だ。

使い切ってしまうえば人間と同じ、その回復には膨大な時間が必要になる。

この大空洞で、遠坂凜が怪物に対抗できるのはたった一度きりのはずである。

——だが、それが、もし、仮に。

ここに、もう一つの「大空洞」があるとしたら、対抗できる回数はもう一度だけ増えることになる。

その「もしも」を実現させるのが彼女が持つ宝石剣の力。

合わせ鏡のように連なる「ここと同じ場所」に穴をあけ、そこから未だ使い切っていない「大空洞の魔力」引き出す。

文字通り、平行世界の運営を司る第二魔法の力の一端。

「データラメがあ…！」

「どう、わかった？ そつちが無尽蔵なら、こつちは無制限つてゴト…!!」

… 何度目かの地響きが木霊する。

凜の宝石剣は影を斬り払うだけではない。

その余りある火力で、少しずつ大空洞を崩壊へと導く。

そうなつては大聖杯を飲み込むという怪物の目的を果たせない。

このまま徒に戦いを続けてしまえば怪物の敗北となる。

仮に、遠坂凜の体力が尽きるまで攻め続けたとしても、その後待つのは洞窟の崩壊なのだ。

「は——あ、あ——」

… 影が止まる。

大きく肩を揺らし、苦しげに吐息を漏らして、怪物は悠然と佇む姉を睨む。

「… 舞い上がっていた頭も、これで少しは冷えたでしょ」

「… 何で、何で、何で————何でそうやって都合よく！ そんなのって不公平です!!」

繰り返される攻防。

無意味と知りながら、自らの首を締めると理解しながら、桜は叫び続ける。

長く、長く鬱積し続けた、唯一の肉親への恨みを。

「良いなあ姉さんは、運命も人徳も正しさも、いつでも綺麗なものばかりに囲まれて！」

いつもいつも姉さんばかり愛されて。正しいなら、綺麗なら汚くなつたわたしを殺したつていいんですか！」

(幸せになりたかった)

「褒めて欲しかった！ 羨ましかった！ 遠坂の家に残った姉さんが憎かった!!」

良いじゃないですか、一度くらい。一度でいいから、姉さんに勝ちたかった。褒めて欲しかった。頑張ったねって。ただそれだけだったのに…！

なのにどうして、そんなことも許してくれないんですか…!!」

(おかえりって言って欲しかった)

「帰りました。わたしの家はすぐそばにあるのにつ！」

同じ姉妹で、同じ家に生まれたのに、どうしてわたしだけ…」

(もう一度、会いたかった)

「何で、何で、こんな役を押し付けられないといけないんですか。

わたしは、人間になりたいだけなのに。

人間として生きていただけなのに！」

泣いている。

泣いて縋ってくる怪物を、彼女は無言で切り伏せる。

「わたしのせいじゃない。わたしをこういう風にしたのはお爺様<sup>妖精</sup>で、わたしのせいじゃない…！」

何で救ってくれないんですか！ 何で見てくれないんですか！

何で奪っていくんですか！

わたしだって好きで怪物になったんじゃないのに…！ みんな

が、お前たちが追い詰めるからこうなるしかなかったのに…！」

もう、ぐちゃぐちゃになった言語を

「ふうん。だからどうしたって言うの、それ」

同情など、彼女は一切せず切り捨てた。

「そういうこともあるでしょ。泣き言を言ったところで今更何が変わるわけでもないし、怪物になったのならそれはそれでいいんじゃない？

だって、散々楽しんだでしょ、アンタ達」

冷酷な全肯定。

… 怪物の叫びは、行き過ぎてはいたが、温かさを求めただけの行為だった。

それを否定された。

怪物であることを肯定された。

そうだったのは運が悪かっただけ。そうだったのはお前が弱かったからだ、と。



「よくも——よくも、そんな——」

「ごめんなさいね。アンタの気持ちなんか分からないし、正直言つて興味もないわ」

それを合図に遠坂凜は走り出す。

怪物は動けない。

間桐桜の意識と怪物の意識が一致しない。

迫る脅威をただ見つめることしかできない。

狙うは心臓。

そこに宝石剣を魔力を一齐に放出させる。

いかに強大な力があるうと、依代にしているのは一人の少女。体ごと爆散して仕舞えば再生は困難なのだ。

「ひっ」

遠坂凜はあっさりと間合いをつめる。

… 確実に殺った。

これでおしまい、と短剣を振り上げ、

——あ、ダメだこれ。

自分の敗けを、悟ってしまった。

——ずん。

と、鈍い音がした。

あつたら良かったのに

◇

「ここで待ち合わせか」

待ち合わせは噴水の近く。

少し早めに着いてしまったのでベンチに座り時間を潰すとする。

「…だが、わざわざ待ち合わせをする必要などあるのだろうか」

そもそもここはカルデア内のシミュレーションの中だ。

ダヴィンチの気まぐれで水族館とやらを再現したようだが、私には関係のない話だと思っていた。

しかし

『あつ！ そうだ！』

アタランテさん、よかつたら一緒に行きませんか！』

『わ、私か？ 汝にはマシユや… あの人がいるだろう。私よりもそちらを優先した方がいいのではないか？』

『ううん！ アタランテさんと行きたいの！』

『そうか、誘ってくれるのであれば断る理由はないのだが…』

『やった。それじゃあ決まりですね！… ふっふっふっ』

マスターが、何を企んでいるかは知らないが、子供からの好意を無碍にすることは出来まい。

主従関係を良好にする為にもいい機会だろう。

それと彼女の要望として、わざわざメディアに貰った現代服を着ている。

まあ、いつもの格好ではこの場に似つかわしくないから、と納得する。

「しかし、これではまるで学生だな」

改めて自分の服装を見る。

白と黒のセーラに緑のパーカー。耳を隠すための帽子。パーカーには、ご丁寧にも私の顔をデフォルメまでしたワッペンまで着いている。

お陰でこの空間に馴染んでいるので口には出せないが、なんという

か、些か少女趣味が過ぎるのではないだろうか。  
辺りを見渡す。

シミュレーションにはよく出来ているもので、親子連れや恋人  
同士など多種多様な人々でごった返している。

見てると眩しくて、目を背けてしまいそうになる。

『…今度、彼を誘ってみようか』

誘ったところで来てはくれないだろうな、と心の中で苦笑する。

一体、どこで間違えてしまったのだろうか私たちは。

あの時に引き留めていれば、何か変わっていたのだろうか。

と、ありもしないことに耽っていると誰かが近づいてくる気配がし  
た。

席を立ち、その人物に声をかけようとして…

思考が止まった。

それほど予想外だったからだ。

『…な、なぜ汝がここに…？』

そこには、同じように現代服を着こなした彼が居た。

「モンスター…！」

彼も予想外だったのか頭を押さえながら口にした。

『…立夏に呼ばれたんだよ。君こそなんでここに？』

「私はマスターとこの水族館に行く予定だったんだ…が」

すると、通信端末にメッセージが届いた。

『お父さんをよろしくお願いします！』

… 謀ったなマスター。

「立夏から水族館に行くから着いてきてと言われたんだ。ちやんとオ  
シャレもして来てねって… まったく」

不機嫌そうな声で彼は答える。

いつもと違い、外出用に着替えているようで、この空間にも違和感  
なく溶け込んでいる。

困った、おそらくマスターは来ないだろうし、何せ突然のことなの  
で会話も続かない。

だが、こうして二人きりなのだからチャンスは生かさねばならな

い。

折角の機会なのだ。

彼と一緒に時間を過ごしたい。  
が、

「…帰ろうか」

「え、」

そんな私とは裏腹にもう用はないと言わんばかりに彼は背を向ける。

「君の時間を無駄にできないからね。あの子が迷惑かけてすまなかった」

彼はそう言っ去ろうとする。

まただ、また私から逃げようとする。

何度話しかけようと、何度距離を詰めようとしても、こちらに目もくれず逃げ去ってしまう。

拒絶されているのはわかっている。話すら聴いてくれないことも。彼が忘れたくてそうしてることも。

それでも、私は

「——ま、待ってくれ」

駆け寄り、彼の裾を掴む。

そうして口にする。

「よかったら、私と水族館に行かないか？」

彼の方へ再び歩み寄る。

「……………」

少し驚いたようにこちらを見つめてくる。

その目から逸らさないように見つめ返す。

「それとも、私と一緒に嫌、か？」

できれば、目を背けて欲しくない。から、もう一度しっかりと彼の目を見つめ返した。

彼の歩みは止まる。

悩ましそうにこめかみを押さえながら、否定した。

「そういうわけじゃ…ない」

「なら、一緒に行こう」

「…しかし、折角の時間をこんなことで過ごすのは…」

「いいや、私は行きたい。汝と共に、この時間を過ごしたいんだ」

本当はどこだっていい。

汝と共に居れるならどこへだって。それだけで私は心が満たされる。

「…ワタシはやることがある。忙しいんだ」

「今日は食堂の当番ではあるまい？」

「…林檎の様子を見なければ」

「心配ない。今、マスターから連絡が来た。

『マシユと二人でお世話するのでお父さんは心配しないでね』… っと写真付きで。ふふっ、随分と親想いの子だな」

「なっ」

お節介にも程があると、愚痴を零す彼。

うん、後でマスターには改めて感謝を伝えねばならない。

お陰で観念してみたんだ。

「はあ… 分かったよ、今日は君に付き合うよ」

「———本当か！」

鼓動が高音る。

相変わらず私には笑みすら見せず、無愛想な顔だがそれでもよかった。

今日をきっかけに、また距離を縮めることができるかもしれない。

そう思い、私を見つめる赤い目に笑いかけた。

すぐにフイツと逸らされてしまったが、少しだけ目が緩んでいた気がした。

彼は水族館の方へ足をむけ歩き出す。

「ほら行こう。時間は限られている」

「あつまっ、待ってくれモンス…」

クラス名で呼ぼうとすると彼はピタッと足を止める。

「…名前」

「え？」

「……じゃあ、似つかわしくないだろうソレは。気分が台無しだ」  
それもそうだな、と頷く。

再現といっても周りの人には違和感を覚えさせるだろうし、他人行儀に感じてしまう……。なんとなくむず痒いが、久しぶりのように口にする。

「……メラニオス？」

かつての名を口にする。

彼にしてみれば捨ててしまった名前。

一瞬、顔が歪んだように見えたが

「……行こう」

と短く言葉にし、はぐれないためか私の腕を引く。

しつかりと、けれど優しく握られた温かい手。

頬が紅潮する。

けれど、これは羞恥からくるものではなく、また別の感情のものだ。

私は手だけではなく、身体まで彼に寄せる。

この行動を彼が拒絶することはなかった。

◇

二人は共に旅をしましたが深い海の底を見ることはありませんでした。

きつと、水族館で美しい景色を見るんでしょう。

## 桜と怪物 「悪役」

… 殺される。

躲す余裕などなく、宝石剣で心臓を突き刺されると理解できた。体は反撃を試みる。だが、間に合わないだろう。

「—— 殺される、んだ」

恐怖はなかった／怖い、怖い、怖い。

他人に傷つけられるのは慣れている／嫌だ、嫌だ、嫌だ。

見慣れた光景だ。ひどく当然な結果／姉さん、姉さん、姉さん。

放出された魔力は体を破裂させるだろう。

痛いのは嫌だなあ、と目を瞑る。けど、このまま消えてしまえば、わたしたちはそれなりに楽だろうと少しだけホッとした。

「—— あ？」

けれど痛みは来ない。終わりは来ない。

代わりに、とても温かい気持ちになる（それを怪物は理解できない）その正体が何であるか気がついた瞬間。

間桐桜は消えかけていた意識を取り戻した。

抱きしめられていた。

今にも崩れ落ちそうな癖に、しっかりと優しく、力強く。

腹を食い破られ、ポタポタと血を流す遠坂凜が少女の体を抱きしめている。

「… あーあ。人のこと言えないな、わたしも」

ぼんやりとした声。

それは少女が求めていた、温かくて優しい、姉としての遠坂凜の声。なんてことはない。

凜は、ここ一番というタイミングで気づいてしまった。

たとえば変わり果ててしまっても、目の前で間桐桜を見た途端、自分には桜を殺せないな、と肉親としての情を、当たり前のように感じてしまった。

「… ねえ、聞こえてる桜？」

「ごめんね、最後まで勝手な姉貴で…本当にごめんね」  
もっと早く気づくべきだった。

自分はこんなにも桜を愛しているのだと。

「桜の事が好きだし」

（わたしは嫌いでした）

「いつも笑って欲しかったし」

（泣いちゃえて思っていました）

「…わたしが辛ければ辛いほど、アンタが楽できているんだって信じてた」

（いつも、いつも、姉さんに助けられてって言うてました）

一生で一度だけの、姉妹の抱擁。

凜は自らの腹部を貫いた妹を、二度と手放さないように、優しく抱き留める。

「—————助けてあげられなくて、ごめんね」

… 体温が消えていく。

恨み言など一つもない。

凜は、自分の死ではなく、抱きしめた少女を救ってやれない事だけを後悔し、

「…それと、ありがと。そのリボン、ずっと、着けていてくれて、

嬉しかった…」

舞い散った赤い花のように、祭壇に崩れ落ちた。

「………」

重みが消えた。

あれほど暖かった体温と一緒に、姉だった人が消えた。

「…何だっというんだ。驚かせやがって」

もう一人が口を開く。

残念そうに、姉だったものを見下ろしている。

彼は、先ほどの攻防がまるで無かったかのように、再び大聖杯の方へ体を向ける。

「良かったね、サクラ。これで君を縛るものが一つ消えた」  
深い意識の底で二人は向かい合う。



名前も、顔も、何もかも不確かな怪物は嬉しそうに、少女に話しかける。

「……もう」

少女の苦悩は少女だけのものだ。

それを理解し、解放することなど他人にはできない。それは怪物も同じことだ。

結局のところ、分かり合えるはずなどないのだ。

「もういいです」

「は？」

…… 何処で間違えてしまったのか。

全部あったのだ。

あんなに求めていたものは、本当はすぐ近くにあった。

「違ったんです。わたしは姉さん…… お父様がいて、お母様がいる、あの家に帰れたかった。ただ、家族というあの幸せだった家に帰れたかっただけだったんだ……」

それを、あんなに想ってくれていた家族を、わたしが——自分の手で壊してしまった。

「あなたも、同じでしょう？」

怪物を見る。

彼は怒っているのか、泣いているのか、その表情は霧がかかったよう  
で分からない。

帰りたい。

それはそう。確かに怪物は帰りたいがっている。

しかし、少女と違う点が一つある。

それは、

「…… 人が人を忘れる順番を知っているかい？ 最初に声、次に顔、そして最後に思い出を忘れてしまうんだ。

うん、帰りたいさ。でもね、もう思い出せないんだ。

僕は誰を愛していたんだろう。どこに帰ればいいんだろう…… もう疲れてしまった」

怪物は帰る場所なんてとつくに忘却してること。

故に諦めている。

何千年も探し続けたところで、過去へは戻れない。

手を伸ばそうにも届かない月のように、そこへは戻れないのだ。

「まあ… 君たちの家族愛？、うん、綺麗だね。僕にもそういつたことを大切にしていた時があったのかもしれない。久しく忘れていたよ」

だから、終わることを選んだ。

決して帰れないというなら、もうどうでもいいのだ。

怪物としての役目を終えて死ぬ。

それでこの物語はエンディングを迎える。

「——けどね、サクラ… それは都合が良すぎるだろうか？」

怪物は桜の首を掴む。

「今更引き返したところでもう遅い。

勿体ない、お前につながる胎児を墮すのは。なら僕が貰う。その胎盤ごと喰い千切って、この星全ての敵となってくれよう…！」

「——あ、ああ」

見下ろされる桜はもうどうすることもできず、ただ食らわれるのを待つのみ。

目の前にいるのは自分の味方などではない。

正真正銘、悪としての怪物なのだ。

大きな口が開かれた、その時

「——桜ッ!!」

正義の味方がやってきた。

## 桜と怪物 「正義と悪」

ドオン、と。

荒野のどこかに、大きな岩が落ちた音を聞く。

——震動は続く。

それが遠坂によるものなのか、怪物のものかは走り続ける自分には判らない。

「はっ——はあ、はあ、は——！」

後ろのことなどどうでもいい。

一心不乱に、泥に塗れながら崖を駆け上がって、

「——桜ッ！」

自分が一足遅かったことを悟る。

「……ああ、負けたんだ、アル」

その声は、俺に向けられたものじゃない。

先程、俺の手で殺めたセイバーへの言葉。

あいつは俺を認識しているのかすら怪しい。

だから、俺は桜に話しかける

「桜、大丈夫だ。遠坂は死んでいない」

——まだ、諦めるには早すぎる。

遠坂はかろうじて息をしている。

脇腹からの出血は酷いが、今から運び出せばまだ救える。

「……あ————えっ？」

桜の目に光が戻っていく。

怪物の拘束が和らいでいく。

桜はようやく、目の前にいる俺と遠坂を視界に収めて、ほう、と安

堵の息を漏らして……また、黒い影に覆い隠される。

「——で？ 今更やってきて騎士気取りかい。いやあ、素晴らしい。

円卓の騎士も手を叩いて賞賛するだろう。妬いちゃうよ」

再び怪物の影が発現し、桜を抑え込む。

「それで？、何ができるんだい、ただの子供が。もう、正義の味方は飽き飽きなんだ」

あの怪物にとって、桜は必要な体だ。

桜を取り戻そうとすれば、怪物がそれを許さない。

桜を救いたいのであれば、あの怪物を桜から引き剥がさないといけない。

「…違う。俺は、正義の味方なんかじゃない」

桜は桜だ。

どんなに変わり果ててしまっても、その芯は変わらない。

…桜をああしてしまったのは俺だ。

あの時…怪物に取り込まれた桜を恐れず、ぽかん、と叩いていた  
らこんな事にならなかった。

「俺は、桜の——桜だけの味方だ！」

聖骸布を解く。

歯を食いしばる。

投影魔術。自身を削る魔術。

俺の全てをかけて、桜を取り戻す！

「聞こえるか、桜!!」

俺は桜が好きだ。お前の罪の所在も、重さも、俺には判らない。けれど何度だって手を伸ばす！

たとえそれが偽善だとしても、好きな相手を守り通す!!」

『せん、——ぱい』

撃鉄を起こす。

「っ——くくっ、ふふはははあ!!」

その身体でか!? 只の人、それも子供のお前が!?

聖杯と繋がり無限ともいえる魔力、最強格の霊基を持つワタシにか  
?」

笑う、笑う。

怪物は俺を口汚く嘲笑った。

「良い良い、最後の余興にはもってこいだ。その蛮勇、その愚行に応え  
ようではないか」

怪物の背後が揺らぐ。

黄金の波紋が出現し、無数の宝具が湧き出す。

「ではな。存分に踊り狂え、雑種」

赤い目が細まる。

アインツベルン城で見た、黄金のサーヴァントの力。怪物はその力を所持している。

十、百……数え切れないほどの砲門が俺に向けられる。

それら全てを読み取り、投影を開始する。

その工程は一瞬で終わる。

——覚悟したところで、恐怖心は消え去らない。

俺は桜を救う。

——自分が消えゆくことが怖くて怖くてたまらない。

その後は……わからない。

自分がどうなるかなんて、考えたくもない。

——赤い後ろ姿が見える。

それでも、と。

足に力をいれ、魔力を回し、目の前の敵に手を伸ばす。

千の砲門から宝具が撃ち出される。

それは絶対の死。

たとえサーヴァントであろうと抗うことは難しいだろう。

「I am the bone of my sword」

魔力が荒れ狂う。

構わない。

向かいくる千の宝具を、千の贋作を以て相殺する。

「はっ——！」

繰り出される長刀に長刀を合わせる。

互いの剣は相殺され、大気に破片を撒き散らす。

「なっ——」

怪物はまたもや驚嘆の声を上げた。

(なぜだ、なぜ子供如きが抗うことができる?)

全砲門を少年に集中させる。

撃ち出される千の宝具。だが、それを自由自在に選り出すことは出来ない。

王の宝物庫を今の怪物は開くことはできる。

だが、その財の数々を把握できる目は持ち合わせていない。それは王にのみ許された特権。

一所有者である怪物には出鱈目に撃つ出すしか出来ないのだ。

それでもその量は過剰とも言えるほど数。

抗うことなどできないはずなのだ。

「おのれ、調子に——ちっ」

少年とは別に黒い影が怪物に迫る。

高速で駆けるもう一人の怪物は、宙に放たれる宝具を器用に避け、地表上空、前後左右から目まぐるしく襲いかかってくる。

だが、怪物の体を傷つけようとはしない。

ライダーと少年はただ怪物の数の暴力を受け流し、防ぎながら近づいてくる。

甲高く鳴る金属音。

響く鎖を操り、ライダーが迫る。

所詮は、小さな跳ね蟲。

平然と構えていれば、逃げ切れる。

いかにライダーが飛び回り、攪乱しようと砲門へ意識を集中させればいいのだ。

——そのはずなのにつ！

ライダーは怪物の周りを飛び回りながら、その瞳を開く。

彼女の目は魔眼である。

その中でもかなり上位に位置する宝石ランクの「石化の魔眼」。

その瞳に捉えられた者は、身体中の血液すら石化してしまう。

対魔力など無いに等しい怪物はそれに抗うことができない。

一瞬、思考が石化する。

その間に少年は前に進む。

「ぎ、ず…… つつつつつつ！！！！」

こわ。

かくじ、とりかえしのつ　ものが、コワレテイク。

宝具を投影するたびに何もかもが消えていく。

もとより、数回の投影で体は限界のはずなのだ。その限界すらも超え、宝具の嵐を駆け抜ける。

ライダーのおかげもあって一瞬の隙間を突くことができる。

およそ数十メートル。その永遠とも思える距離を徐々に詰めていく。

「何故だ、何故だ、何故何故何故!!」

気付かぬ間に攻守が入れ替わる。

一瞬、思考が停止したかと思えばいつの間にもやら詰められる距離。押し負ける。

一切出鱈目な力で、怪物は只の子供に押し負けようとしている。

「何故当たらない!」

さらに砲門が機能しない。

まるで少年を避けるように、撃ち出された宝具はその横を掠めていく。

「まだ分かりませんか?」

背後からライダーの声がする。

「あなたの中にはサクラがいる。

彼女が、愛する人を傷つけまいと必死にあなたを押しえつけている」

再び思考が停止する。

何故だ、何故だ、完全に押さえ込んだはず。

この娘は何故!?

『いめん、なさい』

思考が回復する。

既に少年は目の前に迫っていた。

「エルキドゥ天の鎖!!」

縫るように手を振り上げる。

咄嗟に叫んだのはもはや姿形すら思い出せぬ友の名。

その名を冠した鎖は少年を縛るために放たれる。

が、

「——なん、で」

その鎖は少年に向かわず、あろうことか怪物自身を縛り上げた。王曰く、神を律する為だけのこの鎖は神性が高い程抜け出すのが困難になる。僅かとはいえ、神性を所持する怪物にとって致命的な隙が生まれた。

『——駄目だよ、クル。』

◇ そんな事、君も望んでないだろう?』

◇ 前へ。

前へ、進む。

怪物は鎖に囚われ、宝具の雨は止んだ。

桜は目の前にいる。

『…先輩、わたし』

… 投影、開始。

思い浮かべるのは一つだけ。弓兵の記憶にある一つの短剣。衛宮士郎に残った魔力を、全てその複製に注ぎ込む。最後の投影。

契約破りの短剣を振り上げる。

「——貴様、それは知らない知らない、なんだそれは!!?」

雑音が聞こえる。

けど、関係ない。

「帰ろう桜。——そんな奴とは縁を切れ」

これが、彼女たちに、下される罰になるように。

一息で、心臓を突き刺した。



## 桜と怪物 「前置き」

嵐を伴った夜が来た。この世界においては、とても珍しいことだ。窓に打ち付ける雨粒は、耳を伏せたくなるようなやかましい音を立てている。

ゴー、ゴー、と唸る嵐は狩人の住む家を薙ぎ払わんばかりの勢い。その家には一人の狩人がいた。

年は十代後半に見える。身にまとっているのは古めかしい意匠が凝らしたインナーと緑のスカート。そして、獣の耳を生やしている。一人で住むには些か広いと言えるこの家に狩人は居た。

狩人は窓の外を見ている。真っ暗で、何も見えない。雨粒が窓を埋め尽くしているだけである。

それでも、狩人は窓の外を見る。別に何が見えるか、何が見えないかは、たいした問題ではない。

窓の外を見る。その行為は、生前からの習慣になっている、それだけなのだ。

狩人は待っている。

誰かが帰ってくるのをいつまでも待っている。

窓の外を見るのは、もしかしたら、という淡い希望に過ぎない。結局、待ち人は現れず、それで終わり。

その日もそのはずだった。

「コン、コン」

玄関扉を叩く軽い音。どうやら何者かが訪ねてきたらしい。

狩人の時間が止まった。

聞き間違いか、と身構える。しかし、再び叩かれる扉。

外からは嵐の轟音に遮られているものの、中に入れてくれと言っているようだった。

——私は、このドアを開けてもいいのだろうか

少し時間を置いてから狩人は玄関へと向かった。

扉を開けるのは大変だった。外の風が強すぎるのだ。まるで開けさせてなるものかと、誰かが、扉を押し返そうとしているを錯覚する

ほどだった。

人ひとりがようやく入れるほどの隙間が開いた時、音の主が転がり込んできた。一緒に突風と大量の雨粒が入ってきた。そのせいで家の中が酷く荒れてしまう。

『ありがとう、助かったよ』とその者はまどっていた黒いローブを脱ぐ。

見た目は狩人と同じく十代後半といったところだろうか。

黒く輝く髪に目がいく。まるで夜の闇がそのままやってきたと思うほど、綺麗だった。

中性的な見た目だった。一見すれば女か男か判断できない。だが、狩人は男だと判っている。彼は雨風に長い間晒されたのだろう。唇は酷く紫がかった。

『ごめんね、こんな夜に扉を不躰に叩いてしまった』

申し訳なさそうに男は答えた。

それを横目に狩人は言った。

『ここに他人が来るのは珍しい』

男のことなど、まるで知らないような口ぶり。

男は苦笑しながら『そうだろうね』と返した。

『なにか拭くものと…着替えを用意しよう。そこに暖炉がある。暖まるといい』

男は礼を言った。

狩人は体を拭ける布と、家に残されていた男物の服を持って、部屋に戻ってきた。男はまどっていた衣服を脱いで暖炉のそばに座っていた。衣服は蛇の抜け殻のように放つてある。

軽く身を隠すように布を羽織りながら男は微笑んだ。

『見苦しいものを見せてごめんね。でも許しておくれ。雨を吸った服はどうにも気持ち悪くてね。体に張り付いて、さらに重いんだ』

布と服を渡して、狩人は言う。

『私は…構わないが。随分と無防備だな』

『ふふっ、別に襲われはしまし。それとも君が僕を襲うのかしら？』

悪戯な笑みを男は浮かべる。

狩人は目を細め、

『… 私は汝の正体を知っている』

暖炉の横に掛けてあつた弓を取り、言った。

男は目を伏せ、

『そうだね、—— 僕は、黒き怪物。星に忌み嫌われ、神々を喰らつたもの… だった』

だった、と男は言う。

それはつまり、今は違うということだろうか。

『だから、君が弓を放つ必要はない。勿論のこと、君に危害を加えるつもりはないし、こちらの用が済めばすぐに出ていくさ。反撃する力だって持ち合わせていないとも。』

今の僕は、人として死んだ怪物の残滓にすぎないのだから』

『人として…？』

『うん。あれから色々あつたんだ』

男と狩人の時間は違う。

もう二度と重なることはないのだ。

狩人が住んでいるのは俗世間とは切り離された場所。

ただ、愛した男を待つだけの場所。

『まあ君は知らなくて当然だね』

男は再び苦笑した。

そして、窓を見る。

『日が登るころには、嵐は過ぎ去るだろうか？』

『どうだろうな。ここまで荒れたのは初めてのことだから、私が答えることはできない』

嵐は相変わらず吹き荒れている。

きつとこの時だけが、男に許された奇跡なのだ。

『汝がここに来られたのは、奇跡だ。その奇跡がこの家で、暖をとることを許している』

狩人は男に向かい合つて座り、そして、少し時間を空けて言った。

『もしよければ、汝の話を聞かせてはくれないか』

狩人は男を見る。

『彼を待っている時間の暇つぶしにはなるだろうからな』

『…待っている?』

『ああ、愛した彼を待っているんだ。』

なんだか、汝を見ていると彼の事を鮮明に思い出してしまう』

と狩人は答える。

男は目を伏せ、

『それは、その、つまり』

『ん? ああ、誤解するな。まだ生きているさ。きつとどこかで。ま

あ、私のことなど忘れてしまっているだろうがな』

『忘れていて欲しい』、と狩人は言った。

男の正体をわかっていてなお、狩人はそう言った。それが、目の前の現実を認めたくないという悪あがきなのかどうかは、彼女にしか判らない。

しばしの沈黙。

男は口を開けなかったし、狩人もこれ以上続ける気はなかった。

『面白い話じゃなけど、いいかな?』

『…残念だが、仕方ないな』

男はしばらく黙っていたが、覚悟を決めたように話し始めた。

『…僕は悪だ。人をたくさん殺し、喰らった。罪を問わず、善悪から目を背け、謀り、愚かな行為を繰り返した。それは全て自分のため。一つの約束のためにだ。…後悔はない。この場所に辿り着いた今でもね』

これから話すのは、

男にとつては、かつて愛したもののへ向けた懺悔であり

狩人にとつては、耳を塞ぎたいほどの醜聞である。

『——たとえば、やり直しができたとしても、僕は同じ道を歩む』

そして、男は自身の最期を語り始めた。

## 桜と怪物 「トゥルーエンド」

引き剥がされる。

桜の体に入り込んでいた怪物は、押し出されるように散っていく。契約破りの短剣。

あらゆる魔術効果を初期化し、サーヴァントとの契約すら破る宝具。

それは桜の命を奪わず、彼女を縛り付けていた契約だけを破戒した。

「せん、ぱい」

生きている。

桜は五体満足で生きている。目立った外傷もなく、いつもの彼女のままで。

遠坂——遠坂の方を見る。

出血は止まっている。傷口も塞がりつつある。大丈夫、あいつには真つ当な魔術刻印がある。

刻印は遠坂家が遺してきた魔術の結晶だ。所有者が意識を失っても、易々と死なせはしない。

あとは、ライダーに任せろ……

大空洞が再び揺れる。

「……そりゃあ、終わらないよな」

まだ追い出しただけだ。

俺ができたのは、あくまで奴と桜との契約を破っただけ。肝心の奴はまだ死んではない。

大聖杯から溢れた魔力が形を作り始める。

現れたのは、一人の青年。

桜という依代を失った、黒き怪物である。

「……………」

怪物は今にも消えそうなほど青白い顔で少年を見る。

既に決着は付いている。

間桐桜という依代を失った怪物は、この世界に顕現し続けることはできない。自身の魔力消費が供給量を上回り、じきに霧散する。

「君の、勝ちだ…満足して逝け」

それでも、自身の役目を果たす。

怪物は手をかざす。

その手に集まる大気中の魔力。この空間ごと消失させるには十分な量だ。

少年は立ち上がる。

今度こそ、怪物を消すために。

アレはこの場で、跡型もなく消し去らねばならないものだ。

「……、ごほ」

息が止まっている。

大丈夫…あと一回だ。たった一回投影をするだけで、全部にケリがつく。

手を構える。

これで全てが終わる。

「……、っ!!」

怪物の手から魔力砲が放たれる。

地表を抉りながら少年を丸呑みにしようと、津波となって襲いかかる。

「――トレース、オン  
投影、開始」

検索。選出。解析。投影。

俺はただ、投影するためだけの機械となる。

使うべきもの、選び出すものは決定している。

あの怪物を倒すために、俺アーチャーが知る中での、最強の宝具を。

少年の右手に光り輝く一振りの剣。

その真名を以って、この瞬間真実と成す

「『約束された勝利の剣』――!」

繰り出される白き光。

それこそは星の息吹。命の奔流。

奇しくも一万四千年前に怪物が相対した星の勇者と同じ状況。

しかし、力は拮抗する。  
いかに完璧な投影であろうと、偽物は偽物。  
決して本物には成れない。

「ぎ——ア、——！」  
跳ね回る左腕と、左肩から体内に打ち出される弾丸。  
抑えきれない魔力はザクザクと体内で跳弾し、  
消しゴムのように、エミヤシロウを塗り替えていく。

「ググググッ——」  
光を押し返す。 !!!!!!

なに、あの光には遠く及ばない偽りの聖剣にすぎない。  
自身の身体が壊れていくのお構いなしに、怪物は全力を込めて放  
射を続けた。

この戦いに意味はない。  
強いて言えば、ただの八つ当たりである。

あと一步のところまで邪魔をされた少年に対して、正義だというなら  
悪である自分を討つてみる、と。

それが相打ちだろうと、怪物の勝利で終わろうと、もはや意味を成  
さないのだから。

だが、勝負は着く。

「あ、あ——、」  
拮抗していた白と黒が僅かにブレる。

怪物は自身の異常に気付いた。  
胸に刺された契約破りの短剣。

それは少女と怪物の繋がりを断つだけではなく、丁寧に丁寧に一個  
ずつ、怪物を蝕んでいた呪いを解呪していった。

数万もある呪いは徐々に徐々に消え去り、怪物を人の姿に復元して  
いく。

その度に黒い極光は聖なる光に飲まれていく。

「ははっ、冗談だろ…… もっと早く…… 遅すぎるとよ」

もっと早く出会っていれば、なんて、そんな世迷言が浮かぶ。  
光が近づくと、力は失われていく。

数秒後、怪物からは完全に呪いは消え去った。  
そうして、怪物はただの人になった。

もう抵抗しない。

伸ばした手を引き戻し、ただ受け入れる。

聖剣の光は、もう目の前に――

少年は吠える。

体内の痛み、自分が失われていく恐怖を追い返さんと絶叫する。

「あ、アア、ああアアアアアアアアアア――！」  
叩きつけられる魔力。

それは完全に極光を押し返し、

(…あの時の光に比べれば輝きは劣る、が)

黒い極光を打ち砕き、

空洞を眩いばかりの白色に染め上げた。

――綺麗じゃないか)

◇

――ああ、アホらしい。つくづく上手くないかない。

まあ、散々思い知ったことではあるけど

悪事なんて、所詮そんなもの

「… っつ」

後悔はない。

これは望んでいたこと。結果は思うようには運ばなかったが、一つの結末としては

「… どうして…」

笑えるだろうか？

「どうして、なんで… お願い、上手くいって…！」

だからさ、なんで泣くんだよ。

笑えばいいのに、その権利はあるだろう、君には。

「ライ、ダー。お願い、回復が上手くいかないの… 助けて、お願いっ」



「… サクラ。無駄です、その男はサーヴァントではないのですから  
ああ、もつたいない。

せつかく綺麗な顔なのに、歪めちゃあいけない。

それに、

「…………… なにをしてるの？」

「回復をつ… ごめんさい、う、上手くいなくなつて…」

「必要ないよ」

「どうしてっ！」

あ、あなたはわたしを、助けてくれたのに… わたしは… あなた  
を」

よく、わからないことを口にするな君は

「どうして助けてもらったのに、わたしだけ」

どうしたもこうしたもない。

「言ったじゃないですか、助けを求めたなら、救われるのは当然  
だって

どうしてあなたは助からないのに、わたしだけ助かるんですか…」

「—— わたしたちは同じだったのに」

馬鹿だ。

なにが同じだよ。わかつたような口を聞く。

「同じ？ ふふっ、冗談がうまいね」

君が悪だなんて、笑ってしまふ。

ずっと泣いていたくせに。

「君は誰一人殺していない。

祖父も、兄も、街の人間も、サーヴァントも、みんな僕が殺し、食  
べた。君には餌付けのように与えただけだよ」

そういえば、姉の方は生きているんだっけ。

しぶとい子だ。

… そこだけは似ているよ、本当に。

「僕は怪物だ。

だから悪と成った、それだけ… 「ちがいます」… ?」  
「あなたは、人の形をしていました」

「——カタチ？」

「あなたは人の形を取る必要はなかった。ただの獣の姿でも良かったはずなのに、それでも人として生きた」

「私は思うんです。御伽話の竜も、獣も、怪物も、時には運命も。人を想うからこそ、人の形を取るんじゃないかって」

『愛している』

… そう言えば、一度だけ

確かに一度だけ、人を愛してしまった。

そうだ、なんで忘れていたのだろう。

「それに、どんなに手を汚そうと、あなたはわたしを救おうとしてくれた！

誰かを助けたいって気持ちがあったのなら、————あなた  
は、英雄だったんです」

「ははっ、そうか… 僕は、怪物にすらなれなかったか」

否定される。

自分の在り方を、ただの子供に。

少女は青年を抱きしめた。

それが同情であるのか、慈愛であるのかは青年にはわからない。

どうであれ、青年は死ぬ。

ここにいるのは古代人の抜け殻。存在するはずのない異物なのだから。

「どうして、わたしは助かるのに。あなたは助からないんですか」

その問いに、青年は答える。

「… 君には帰る場所があつて、僕にはなかった。それだけのことさ」  
青年の体が崩れ始める。

数万年の反動が、この時代に痕跡すら残さぬと迫ってくる。

もう、少女を見上げる力さえ残されていなかった。

「… ライダー、お願いできるかな」

もう一人の怪物に呼びかける。

「ええ、彼女たちは無事に帰します、ので、精々満足げに逝ってください」

「ふふっ、手厳しいね」

ライダーは少女とその姉を抱き上げる。

彼女の足なら、崩落に巻き込まれる心配もないだろう。

そのために、手を出さなかったのだから。

「待って！待ってよ！」

「…君の体の余計なものは全部貰っておいた。精々、長生きするといいな」

少女に巢食っていた蟲も、聖杯の欠片も全て持っていく。

これで、少女は救われたのならいいのだけれど。

「モンスター！、ねえ待ってよ！おいていかないでー！ー！ー！」

それ以上は聞こえない振りをした。

少女たちを見送る。

もつとも、もう見えないのだけれども。

再び地面に倒れ込む。

もう、立つ足も、伸ばす手も消えていた。

耳を澄ましてみた。

遠くで誰かが殴り合っている。

少年と…わからない。

拍手でも送ってやろうかと考えたが、する手が無いことに気づいた。

役者でも、観客でも無くなった自分にはその権利はないのだろう。

青年は自分の体を見る。

残された時間は、数分とあったところだろうか。

なら、自分の人生を振り返ってみようと記憶を遡ってみたものの、すぐに辞めた。

どうせ後悔するだけだ。

だから、一つだけ。たった一つだけ思い出すことにした。

「約束、守れそうもないや」

愛した人がいた。

必ず帰ると約束した人がいた。

どこで間違ったのだろうか。なにをすれば良かったのだろうか。

きつと君は、受け入れてくれないだろう。愚かだと、蔑むだろう。それでも…僕は、結局、最後に残ったのは後悔だけだった。そうならないように、生きたはずなのに消えていく。

青年は誰にも看取られず消えていく。

今度は、戻って来れない。

これは青年にとって初めての死だ。

(ああ、やっぱり…)

こうして物語の幕は閉じる。

数万年にも及ぶ、青年の旅はここで終わる。

——死ぬのは、怖いな

かくして

悪は消え去り、第三魔法は正しく発現した。

少女と少年は共に罪を背負い、幸せを甘受する。

それがこの物語の結末。

それが怪物だった人間の物語の終わり。

観客席にも、舞台にも、もう誰もいない。

ただ、黒い塵が積もるだけだった。

## エンドロール 【明けない夜】

強い雨が打ちつけている。

青年が話の幕を閉じて、夜が明ける気配はなかった。服から滴る水滴はなく、とつくに乾いてしまった。

黒髪の青年と美しい新緑の髪をした狩人は向かいあって座っている。

ごう、ごうと、嵐の音だけが聞こえている。

『…どうして』

苦々しい声で狩人は言った。

『苦しいくらいなら、誰かを傷つけるくらいなら、どうして』

青年は答えない。

『わたしは確かに望んだ。また、汝と共に生きること、ここで過ごせる夢を見ていたんだ。だが、落ちてしまいうくらいなら、忘れてくれた方が良かった』

愛していた。

『ずっと、あなたといたかった。共に生きて欲しかった。ただ、それだけで良かったのに』

愛しているんだ。

『わたしはお前を恨む。これまで愛した分、憎み続ける。永遠にだ。決して癒えることのない傷を、わたしにもたらしたお前を、嫌い続ける』

青年は答えない。

弁解のしようがなく、それを受け入れるしかない。

『…随分と長居した。そろそろ、出ていくよ』

乾いた服に着替え、青年は立ち上がる。

家の外はいまだに嵐が吹き荒れている。それは決して鳴り止むことはない。

それでも青年は行かねばならない。

永遠に止むことのない怨嗟の雨に打たれ続け、冥界にも、無に消えることもできず、明けることのない旅路を進む。

この家に残ることは許されない。  
ここに存在することが許されるのは、英霊の座に向かい入れられた者だけ。

ただ一人の人間として、忘れ去られた青年はその座には至れなかった。

おそらくはこの時間が、青年に与えられた慈悲なのかもしれない。本来ならば、永遠に彷徨うだけの青年に、この世界に、この場所に立ち寄ることなど許されるはずがないのだから。

青年が歩いていく。外への扉に。

一瞬、扉を開ける手が躊躇するが、右手に力を込めて、戸を開ける。勢いよく、雨風が吹き込んでくる。

狩人は思わず立ち上がる。

——共に歩きたい。叶うのならば、許されるのならば、そうしたい。

だが、彼女が追うことはできない。

正義が悪とは分かり合えないように、英霊である彼女と、倒されるべき怪物では居るべき所が違うのだから。

アタランテは青年を見送ることしかできなかった。

『何度でも言う。わたしは』

声は震えている。

『わたしは汝を恨み続ける。わたしに寂しさを教えた汝を嫌う。どれだけの時間が経とうと、記憶に刻み続ける。いつまでも、いつまでも、永遠に汝を恨み続ける。…けれど』

それでも、と言葉を紡ごうとした時、

水滴が頬伝う。

『愛してる』

本当は恨んでなんかいない。

何度迷惑をかけられても良かった。

傍にいたかった。

共に、生きて欲しかった。

——愛しているんだ。

青年は振り返らなかつた。

——違うんだ。

僕は確かに君を愛していた。

君のことだけを想つて、ここまで来た。

——今も、叫びたいほどに

けれど、君の愛と僕の愛はきつと違う。これは美しいものなんかじゃない。

邪魔者は皆殺しにして、君を傷つけないように閉じ込めて、犯して、その全てを喰らつてしまいたいような、

汚くて、黒くて、醜い愛情。

愛す資格なんて、ない。

一瞬、全てを吐き出してやろうと想つた。己の愚行をここまで赤裸々に語つたのだから、今更隠すようなことではないような気がした。

が、

何もかも遅く、取り返しもつかず、取り繕うことも叶わないとしても。

青年は、振り返らず、決して振り返らずにこう言った。

『——その言葉があれば、僕にも生きていた意味があると思えるんだ』

せめて最後だけでも、一人の人間として。君を愛した男として、彼女の記憶に残りたかつた。

怪物だつた青年は、再び歩みを始める。

アタランテは彼を追つたが、扉はそれを阻むように閉まり、外へ出ることは叶わなかつた。

読み終わった本のように、扉は重い音を立てて閉まる。

嵐は過ぎ去つた。それでも夜は明けない。

太陽は、もう二度と上らない。その代わりにいつまでも満月は照らし続ける。

誰かが啜り泣く音だけが、世界に響いた。

## 子連れれの怪物

### 第一話 「子連れれの怪物」

【プロローグ】

それは誰もが寝静まる夜に始まった。

突如、窓ガラスを砕く轟音が鳴り響き、眠りについていた住民たちを飛び起きさせる。

” 災害か、事故か、脳裏に憶測が浮かぶ。ならば避難すべきか？、いや防災アラームのように危険を知らせる物の反応はない。”

だが、戸惑っている時間はなかった。

もう一度、轟音が鳴り響いたかと思うと街全体を激しい炎が包み込んだのだから。

燃え盛る町を赤子を抱え走る女がいた。

人一倍早く危険を察知し、子供を抱き抱え外に飛び出したは良いもの、もう既に火の手は回っていた。

辺りは炎に包まれ逃げ場は無い。それでも構わず、女は走り続けた。

瓦礫の山を飛び越え、町の出口へと向かう。

倒壊した建物の下敷きになった人々が助けを求めているが、そんな余裕はない。

もとより自分の物以外どうでも良いというのがこの女の信条なのだ。

”助けて、” “どうかこの子だけでも、” “お願い、お願いします” “と嘆きの声が聞こえる。

『チッ』

声はどうにも煩わしい。

耳を塞いでしまえば声は無視できる。なにより足を止めている暇はない。今、自分が優先すべきことは娘と共に逃げ出すことなのだ。

だから指を走らせた。

空中に『?』の刻印が浮かび上がる。



この行為は声を鎮めるため、決して助けようなどとしたわけではない。

ゴゴゴツと、倒壊した建物を押し上げるように無数の大樹が生えてくる。

人が抜け出せるほどの空間があき、動けるものは必死の形相で這い出ようとする。それで助かるか、死ぬかは当人達の努力次第だろう。たとえ建物の倒壊から逃げ出したとしても辺りを包み込む炎は誰一人として逃すつもりはないのだから。

数十分後。

女は走り続け、やがて気づいた。

どうやっても町の外に出ることはできないのだと

なんと外に通じる道を走り抜けても、いつの間にか数百メートル前へと戻されていた。

そうして、女は走るのをやめた。

『引き返すか…いや、そう悠長なこととはできない。』

せめて、この結界を張っている者を見つけないければ』

思考を巡らすこと数秒、女は視線に気づく。

それは背後のビル、その屋上から向けられていた。

屋上の影は自身が発見されたと悟る。

彼ら暗殺者にとって相手に目撃されるということは失敗を意味する。ならば一度撤退し、再度機会を狙うのが定石だが。

「……………」

暗殺者もまた、時間の猶予がなかった。

もう間も無く暗殺者はこの世界から消える。自身を召喚した主人は既にもいない。確認をしたわけではないが、令呪を介しての念話がでない以上そういうことなのだろう。

何もしなければ得られる物なくこの世界から退去することになる。

否、それは容認できない。

願いを叶えるために願望機に手を伸ばしたのだ。

現界するための魔力を得られれば、まだチャンスはある。どこかの

陣営に取り入りのも良いだろう。最後に出し抜きさえすれば、願いは叶う。

幸い、アテは見つかった。

眼下からこちらを見上げる女は、常人にはあり得ぬほどの魔力を有している。

好都合だ、と暗殺者は口角をあげた。

例えあの女が魔術師の類だとしても彼らにとって造作もないこと。

『ただいま——にて火災が発生いたしました。危険は——

——が安全の為、——へ避難してください。——へ避難して下さい

い。——に従って慌てずに避難して下さい』

市内に響き渡る警告音。

町中に敢えて人間の不安を呼び起こすサイレンがけたたましく鳴り響く。

一瞬、女の意識が逸れる。

それを合図に暗殺者は飛び出した。

生身の人間如きに小細工はいらない。

英霊という聖杯に呼ばれた彼らには、生半可な魔術、銃器等の武器は通用しない。

瞬時に距離を詰め、首を掻く切る。気配を遮断し生前のように、ただ当たり前のように殺す。

あと3歩。

疾風の如き速さで距離を詰めた暗殺者は女の方に視線を向けた。

見た目は二十代前半から後半。

腕には眠り続ける子供の姿。

あと2歩。

だが、ここで違和感が生じる。

ここまで近づいてようやくよく理解した。

——この気配……こいつは人間なのか……？

あと1歩。

女と目が合う。

その目は、恐怖に染まっているのではなく、獲物を捉えた蛇のよう

に鋭い物。人間とは思えないほど紅く、血の如き染まっている。  
暗殺者は戸惑う。

追い詰めたはずなのに、なぜこの女を恐る。なぜ、自分こそが獲物  
なのだと認識してしまうのか、と。

いや、そもそも

——なぜ、目が合うのだ…？

暗殺者は目前で飛び上がり、女の背後にまわる。

その様子を口角を吊り上げ女は見ている。

関係ない。

その首を取れば、それで終わりなのだ。

女が何かを口にする。

「アンサズソウエル

？——」、  
なっ

「イングス

？」

大気を疾る、劫火の導火線。

ルーン 刻印は空中に浮かぶ人体に刻まれ、コンマ数秒で炎を巻き起こした。

「!?

——、!!?」

内部からの魔術抵抗は意味をなさない。

ルーンは対象を燃やしたのではなく、対象を炎で包み込んだのだか  
ら。

悲鳴をあげて地面に転げ回る襲撃者。

苦悶に荒れ狂う体、助けを乞うように掲げられる手は、死にかけの

虫が蠢くようで、ただただ見苦しい。

転がり回ろうと炎は消えず、暗殺者は息絶えるまで炙られ続ける。

「

女の視線は、すでに周りのビル群に向けられている。

生き急ぎの燃えカスなど始めから興味がない。

敵は一人ではない。

最初に視線を感じた時から女はそれを判断していた。

「チツ、まとめて掛かってくれば焼き払えたのに…。」

腹立たしげに舌打ちしつつ、女は腕を振るう。  
「?！」<sup>エイワズ</sup>

周囲数百メートル、女を中心にルーンの刻印が刻まれる。

退去のルーンで彼らの気配遮断スキルを解除し、再びルーンを刻む用意をする。

「げっ」

顔を顰める。

複数人いるのは判っていた。しかし、これは余りにも多い。多すぎる。

目視で確認しただけでも、ざっと四十人弱。

彼らはそれぞれの暗器を構え、一斉に女を目指して襲いかかる。

女は指を振るうが、いかんせん数が多い。

そのため、防御に徹することを選ぶ。これ以上火力を上げてしまえば腕の中で眠るこの娘が危険だ。

女の周りを、ルーンの障壁が覆う。

暗殺者たちは百の貌を冠する教団の頂点。

「個にして群、群にして個」その名に恥じぬ力を以って獲物を捉えた。

その時、

「――、ガッ」

その内の一人が、矢に撃ち抜かれた。

いや、一人どころではない。女を仕留めるために飛び出した暗殺者たちは次々に撃ち抜かれていく。

「まさか、アーチャーか!? おのれ、卑怯なっ！」

飛来する矢は、正確無比に暗殺者たちの霊核を打ち抜き消滅させていく。

これは堪らないと、運よく矢を避けた暗殺者たちは退避しようとするが、

「――逃すわけ、ないでしょう…！」

「なっ!? キ、キサマ」

散らばった個体であれば十分にルーンを刻み込むことができる。

八つ当たり気味に「一人一人丁寧に燃やしてやる」と女は笑った。

◇

(誰だか知らないけど、腕のいい弓兵ね)

あらかた燃やし尽くし、あたりに暗殺者の気配がないことを確認すると、女は名も知らぬ弓兵を探した。

友好的であるのならば、この機を逃すわけにもいかない。

「とはいえ、厄介なことに巻き込まれたな」

ため息混じりに愚痴を溢す。

暮らしていた家は燃え、サーヴァントには襲われるし、まさに踏んだり蹴ったりと言ったところだろう。

女は弓兵を探すべく、しばらく歩くことにした。

「あの弓兵が友好的な人だと有難いんだけど。」

とにかく、お前が安全に寝れるところをみつけないとつちやね」

娘の香気な寝顔を見ながら女は歩く。

コレは自分の命よりも大事なものだ。決して傷つけさせはしないと、

「呑気なものだ。戦場でよそ見など」

背後からの突然の殺気。

「っ——！」

振り返る暇もなく、女の首に短剣が振るわれる。

それをしゃがみ込むことでなんとか回避する。

「しっ——」

その行動を読んでいたように、容赦なく二対の短剣が女を切り裂くべく叩きつけられる。

それを自身の血液を使用して創り出した盾で防ぐ。

短剣を振るうのは赤い外套の男。

男はしたり顔で言った。

「ここまで踏み込めば、ルーンを使うこともできまい」

「……そうか、お前がさっきの弓兵か」

眉間に迫った短剣を弾き、女は忌々しげに口を開く。

弓兵が言った通り、この距離ではルーンを使うことは憚れる。娘を

巻き込んでしまうのだ。それだけは避けねばならない。

片手が塞がっている女では彼が振るう短剣を弾くことが精一杯。打ち崩されて仕舞えば、そこで勝負はつく。

女は少し距離をとり、大地を踏みしめた。

「ふっ——」

弓兵が踏み込み、剣を繰り出す。

それを、

「なにっ……！」

突如、地面から飛び出した無数の剣が弓兵の剣を砕く。

見れば、女が踏みしめた大地からは次々に「宝具」とも呼べるほどの武具が創り出されている。

それは奥の手。

この数千年もの間、女が必要とすらしなかった手である。

武具は女の背後に展開し、敵を捉える。

娘を庇うように体を向け、弓兵に叫ぶ。

「弓兵なら弓使いなさいよ弓を、出鱈目にも程があるつてのっ！」

なにが、友好的だったらだ。英霊に期待などするべきではなかったと、心の中で悪態をつく。

弓兵は苦笑し、

「それはお互い様、と言っておこう。」

……いつもの案件だと思っていたんだがね、これは少しばかり骨が折れそうだ」

「ちっ」

(厄介なもんに目を付けられた)

弓兵の背後にも女と同じように、無数の剣が映し出されていく。

それは魔術による投影。

馬鹿げた話だ。この弓兵は弓ではなく剣を取り、あまつさえ魔術を行使するというのだ。

無数の宝具が向かい合う。

もはや衝突は避けれず、純粋な力勝負に持ち込まれた。

「穿て!!」

「投影、開始。

装填——」

そして、賽は投げられた。

## 第二話 「娘」

【目覚め】

「穿て!!」

「装填——」

そして、賽は投げられた

「——待ちなさい、アーチャー!」

… かに思えたが、それを制する声に邪魔をされる。

ビルの上からだというのに、透き通るように響く声。

声の主は怒気を孕みながらアーチャーと呼んだ男の側に降り立つ。

「アンタ、なに勝手な行動してくれてんのよ!」

少女はアーチャーに詰め寄る。

「勝手、とはこれは異なことを言う。敵を排除しろというのが君の指示ではなかったかね?」

「そうよ、確かにそう言ったわ。でもね、敵であるアサシンを仕留めた以上、これ以上の戦闘は行わず帰ってこいって命令したわよね、わたし」

アーチャーの態度に苛立ちを隠せない少女。

「そうだな。」

だが、その人の皮を被った化け物も、私の敵であることには変わらない。排除すべき対象が目の前にいるのに、君は背を向けて帰ってこいとても言うのかね?」

少女の視線がこちらを向く。

「… 酷い言われようだ。どっからどう見たって、善良な一般市民にしか見えないと思うんだけど」

「良く言うよ。」

お前のような輩は嫌と言うほど相手にしてきた。その中でも、比べ物にならないほどの脅威を感じる。

本来、私の役目はそういった者達の排除でね。今だけは私情を優先したいのさ」



「話にならないなあ。まだやってもない罪を被された気分だよ」  
眉間に皺をよせる女。

依然として、武器の展開は解いていない。少しでも動きを見せるのであれば少女ごと撃ち抜けばいい。

お互いに譲らない膠着状態を見かねた少女はため息を吐き。

「アーチャー、貴方の主は誰？」

と、問う。

「いま答える必要性はないと思うが「いいから答えて」… 君だ。マスターである君だよ凜」

「そうよね。分かっているならいいわ。」

なら、今は黙っていて。貴方が喧嘩腰のままじゃお互い得もしないから」

そう言われてしまったてはアーチャーも従うしかない。

サーヴァントである限りマスターの意向は優先しなければならぬ。い。

凜はアーチャーに向かって剣を下ろせという仕草をした。

しかし、納得はいつていないようで少しでもマスターである凜を傷つけばただでは済ませない、という意味を含んだ視線が送られてくる。

向こうが武器を下げるのであればこちらも合わせる。単純な力比べであれば、絶対に女の方が強い。だが、それも一人であればの話。

優先事項を間違えてはいけない。交戦の必要がないのであれば願ったり叶ったりだ。

「で、一体何者なの貴方？」

凜は女を見た。

一見するとただの母親とその子供にしか見えない。実際、子供にはなんら魔力は備わっておらず言葉通り、ただの一市民にすぎないのだから。

問題は母親と思わしきこの女だ。

どう考えても異常だ。

そう感じてしまう程の何かがある。言い表すなら、少しでも隙を見

せれば一口で食べられてしまう、それほどの悪寒。

これは、人間ではない。

女の背後の影が、醜い何かへと変わっていく。

「……………」

女は少し悩んでいるようだった。

正体を話したところで、自身に利点があるとは思えず、さりとして黙って見逃してくれるはずもなし。

アーチャーの言う通り、女は人間の敵であることには変わらない。今は、その気がないだけ。

それを分かってもらうには、正直に答えるしかない。

(… 再び交戦することになれば、町ごと吹き飛ばしてしまおう。後処理は知ったこつちやじやない)

何秒間か考えたのち、女は口を開いた。

「今はフジマルという名があるが…： そうだな、通りの良い名は確か、

—— 『黒き怪物』」

人はワタシをそう呼んで畏れる。」

と怪物は、なるべく笑顔で言った。

言った… のだが、その名を聞いた途端、凜の顔はみるみるうちに青白くなつていき、

「な、な、な…： なんとってアンタみたいなのがここに居るのよおおおおお!!!」

悲痛な叫び声を上げるのだった。

「あ、アーチャー！ お願い、後ろに隠れさせて！」

「あの、できれば大きな声は…：」

「ヒッ！…、こつち来ないですよ！」

凜はアーチャーの背後にしがみつくように隠れてしまう。

怪物としては慣れた反応なので、気分がどん底に落ち込むだけで済むが、問題はそこではない。

そんなに大きな声で騒がれると、

「…： う、うううん…： ん、お父さん？」

ほら、起きてしまった。

目を擦りながら、娘が周囲をキョロキョロと見渡す。

「どこどこ？ お家でねんねしてたのに」

「… ちょっと散歩中なんだ。ごめんね、起こしちゃったね」

不安にさせないように、優しく怪物は答える。

そして、凜に向かって「これ以上騒ぐな」と人差し指を口に当てながら視線を送る。

「なんで、お家燃えてるの？」

「さあ、どうしてだろうね。火事か、地震でもあったのかもしれない。

… そうだ、立香。火事の際はどうすればいいんだっけ？」

ポンッと手を叩いて尋ねる。

娘である立香は、しばらく頭を悩ませたがパッと顔をあげ、

「安全なところに避難します!!」

「よくできましたー」。

… そういうことだから、ね？」

手をパチパチを鳴らしながら、再び凜の方を見る。

「な、なによ」

「安全なところ、連れてってくれる？」

「断ったら食べちゃうぞ？」と意味を含ませながらの脅迫。

それにブンブンと首を振ることしか凜はできなかつた。

## 幕間 【夢】

### 【泡沫の夢】

遠い遠い昔、ある夜のことです。

『貴方、愛を知っていても恋を知らないのね』

月の女神は目の前の怪物に声をかけました。

彼女の腕には薄緑の産毛が生えた赤子がいます。慈愛に満ちた顔で女神は抱いています。

『… 同じものだろうか？』

やはり怪物にはわかりません。独りぼっちの怪物には、その感情を向ける相手はいないんです。

女神は首を振って否定します。

『全然違うわよ！ いい？愛は与えるもの、受け取るものだけど、恋はその、ええっと、胸がこう、ぎゅー、と締め付けられるの！』

『… 痛いのは嫌だなあ』

『比喩よ比喩… 貴方ずつと一人でしょう？だから相手を見つけた方がいいんじゃないかって』

『別にいい。一人の方が気楽だし、人間と居るくらいなら動物達と戯れた方がよっぽど有意義だ』

ムツと頬を膨らませる女神。

『じゃあこの子をお世話してどうだった？ 少しは考えも変わったんじゃない？』

女神は今日一日、怪物に赤子の世話を任せていました。彼が四苦八苦する様子を空から眺めていたのです。

『いい迷惑だった… だいたい、子供は嫌いなんだ。すぐ喚くし、ワガママだし、食べ甲斐もない貧弱な生き物だ』

顔を顰めて答えます。

それをニヤニヤと笑いながら、

『えー、その割には楽しそうだったけど？』と女神。

『…』それを無言で返す怪物。

楽しそうに女神は笑います。

他の神様は分かりませんが、月の女神は怪物に対して怨みを抱いていません。むしろ感謝しているのです。

『愛だの、恋だの、人間みたいなこと言うじゃないか』

『ええ、貴方が壊してくれたおかげよ。おかげでわたし愛を知れたの』  
『…そう、そりゃよかったね。もう少し喰つとくんだった』

怪物は神様たちのことが嫌いです。

月の女神はともかく、他の神たちは怪物のことを恨み、蔑み、奪われた権能を取り返そうとしてきます。この女神が特別、壊れているだけなのです。

『もういいだろ？ その赤子を連れて消えてくれ。恋だとか、愛だとか、いらぬ感情を植え付けようとしなくてくれ…他人から向けられる好意ほど気持ち悪いものはないんだから』

人間として生きようとしても上手くいかない。怪物としても生きれない。彼は独りぼっちになりました。

『そっ…じゃあ行くわね』

女神は優しく赤ん坊を抱きしめ怪物の元を離れます。

『そうだ、この子の名前知ってる？』

怪物は答えません。

どうせ会うことなどないのです。既に記憶から赤子の顔は消しました。無駄なことをいちいち覚えていてもしょうがないから。

『この子の名前は、—————』

### 第三話 「真似事」

【目覚め】

ソファーに座り、怪物は眠っている。  
いつものように夢を見ていた。

「…と… きなさいてば…」

夢見の悪さに薄く目をあけた。

昔のことを夢に見た気がした。

最近はどうも眠気が酷い。あまりいい夢も見れないし、気分は最悪。

夢というのは自身の記憶が元になっているのだと言う。いつもののか分からない記憶を抱えて生きるのは難しい。捨てていければ楽なんだけど、そうもいかないのだ。

「起きなさいって！」

… そういえば、僕はなにをしてたんだっけ。

「——お、は、よ、う！ 目は覚めたかしら？」

oh… 目を開けるとそこには赤い悪魔の姿が。

ああ、そうだ。確か安全な場所に案内して貰ってそれから… なんだったか。

「あのねえ、人がせっかく寝場所を貸して、さらには説明までしてあげてるのにいくらなんでも非常識よ！」

「あー、あまりにも退屈だったから、つい… 悪いけど三行程度でまとめてくれないかな？」

「あ、アンタねえ。人のことを馬鹿にするのも大概にしなさいよね」

「まさか、人聞きの悪い」

悪いとは思っている。

けど、聞けば聞くほどどうでもいい内容で、つい欠伸も出てしまう。なぜだか彼女の顔を見ると、話を聞く気も失せていく。なぜだろうか、と考えたが理由はよく分からない。ただ、どこぞの誰かを思い出してしまうのだ。

怪物は反省の素振りなく、凜に再度の説明を求める。完全に弄んで

いるようだ。

凜はため息をつき、

「はあ…。いいわ。ならもう少し噛み砕いて説明してあげる」  
再び語り出した。

ここ、冬木市で行われる魔術師達の大規模儀式のあらましを。

遡ること19世紀ごろ。アインツベルン、マキリ、遠坂と言われる魔術師達が手を組み、大規模な魔術儀式を行おうとしました。

ですが、思想の違いか、もしくは仲違いか、ある日に儀式のシステムを担当するマキリが離反してしまった。

アインツベルンと遠坂だけでは儀式を作り上げることはできません。そこで、外部の魔術師、協会の魔術師達を招き入れなんとか『大聖杯』というあらゆる願望を叶えられる器を作り上げました。

三百年ほど遅れに遅れましたが、ようやく魔術師達の悲願は目前となったのです。

しかし、聖杯を得たところで願いを叶えられるのは一人だけ。当然、争奪戦が起きます。

そこで考えられたのが『聖杯戦争』。

この戦いに最後まで残ったのが願いを叶える権利を得るのです。魔術師達はそれぞれ、サーヴァントという過去の英霊の写し身を使い魔として使役し争うことになりました。

「ふーん」

いつの時代も、人間は近道ばかりしようとする。過程よりも結果を求めてしまう、それが正しいものだとは限らないと分かっているのに。目先の利益に囚われすぎて、本質から目を背けるのは決して良いものではない。

しかし、怪物にとっては魔術師達が何しようが知ったことではないのだ。

問題なのは、

「神秘の秘匿が魔術師の義務だろうか？ この状況は、その義務を放り

出してる気がするんだけど…。土地の管理者としてどうなのかな、遠坂さん？」

怒りを微かに孕んだ声。

なにせ、住んでいたアパートを燃やされたのだ。せつかく住み慣れて来たというのに、これではまた引越しをしなければならぬ。家財を持ち出せたから良かったものの、これを無責任と言わずになんと言うのか。

「うっ…。それは、その、弁解のしようがないというか。

わたしだって協会の連中がここまでやるなんて思わなかったの」

怪物の至極真つ当な怒りに身を竦めながら凜は項垂れる。

彼女も予想外のことだったようだ。

「連中、町に結界を張ったのよ。聖杯戦争が終わるまで解けない結界をね。町から出る人間がいなければ状況が外に伝わるはずもないし、目撃者ごと消してしまえば秘匿はできるもの。」

全部終わった後でガス漏れ事故やら、災害とか誤魔化すのでしようね」

現代では情報技術も発達し、神秘の秘匿は非常に困難になっている。

だが、魔術師達は自身の願いのためになりふり構わない方針のようだ。

聞けば、時計塔の君主も参加しているようで、彼らにとっては下剋上の機会でもあるのかもしれない。なにせよ、いい迷惑であることには変わらない。

さて、どうしたものか。

「…君も大変なんだね」

「ええ、頭が痛くなる程にね。貴方のおかげで悪化しそうだけど」

「照れるね」

「ほめてないっつうの！」

うーむ、表情の変化が面白い子だ。実に揶揄い甲斐がある。

最初は警戒心の塊のようだったが、こちらに敵意がないと見ると即座に状況に対応する。その判断力、才能をどこぞの女神と比べるの



は失礼だったようだ。

「冗談さ。」

まあ、君たちが何しようがどうでもいいし、関わる気もないけど。僕はあの娘に危害が及ぶならこの町ごと……そういえば、立香は？」

「貴方がうとうとしてる間に家中を駆け回ってるわよ。本当、元気で好奇心旺盛な子ね。」

まあ、あまり暴れられても困るからアーチャーが面倒見てるはずだけど。待って、アンタ今とんでもないこと言おうとしてなかった？」

しまった。膝の上に抱えてたはずなのにすっかり忘れていた。あの子はまだ4歳になったばかりなのだ。好奇心旺盛で、目新しいものに飛びついてしまう。子供というのは困ったもので、ふと目を離れた隙に消えてしまう。慣れない子育てのせいもあってか、肝が冷える毎日である。

どこにいるのかと視線を巡らせた時、ドタドタと騒がしい足音が近づいてくる。

「あー！ お父さん起きてた！」

広い家の探索に満足したのか、勢いよく飛び込みながら帰ってくる立香。

それを仰け反りながら受け止める。  
「おっと。」

「こちら、人様の家で走り回っちゃダメだ。それに前から言うてるだろう？勝手に離れちゃダメだって」

「えー、だってお父さんすぐ眠っちゃうから、たいくつなんだもん」  
んん。それは、確かにそう。

「この家すごいよ！ 広いし、よくわからないものたくさんあるの！あとねえ、赤いおじさんがいっぱい遊んでくれた！」

夢中で冒険譚を話す立香。

広い家という今の家とは違う環境は、少女の心を弾ませてしまう。

「…立香は広い家の方が好き？」

「うん！ あのね、広かったらねえお部屋いっぱい作るの！ えつと

お、立香のお部屋でしょ！あとお父さんのお部屋、あとはお本を読むところ！それとねえ……」

なら、ちょうどよかったのかな。

この町を出たらまず、大きな家を建てよう。この子が幸せに暮らせるような立派なものを。今度は火災保険もしつかり入らなければ。

「まったく、おま……君の娘には手を焼かされたよ。所々走り回り、タンスをよじ登り、飛び降りる。そして、」

「あ、赤いおじさん！」

「……おじさん呼びはやめてくれないか」

若干疲れ切った様子のアーチャーが戻ってくる。

そういうえば面倒を見てくれたらしい。意外と良いやつなのかも。

「お疲れ様アーチャー。それにしても意外と面倒見が良いのねアンタ」

「はあ、冗談はよしてくれよ凜」

「ふふつ、サーヴァントなんかより世話役のがお似合いだね。うん、雇いたいぐらい」

「勘弁してくれ……それで？君はこれからどうするのかね？」

「そうね。家には戻れないから、大人しくしていたいところだけど、あまりこの町に留まるわけにはいかない」

魔術師がこの町にたくさんいる。更にはサーヴァントも。出会えば争いは避けられないだろう。だから、この家に留まるのも一つの手だ。

しかし、彼女達が敗退してしまえばここも安全ではなくなる。優先順位を間違っただけとはいけない、この子を安全に守るためには……

と、誰かに裾を引かれる。

不安そうに怪物を見上げる立香の姿がそこにあった。

「お父さん」

「ん？ どうしたの？」

「お家、帰れないの？」

怪物は返答に困る。

しまった。つい顔に出してしまったらしい。

立香が涙を浮かべてしまう。弱ったなあ、不安にさせてしまったよ  
うだ。

怪物はオロオロとなんと宥めようかと思案する。少女の悲しむ姿  
は見たくないのだ。

けれど、娘は家に帰れないのが不安じゃないようで、

「クマさん……」

「え」

「クマさん、置いてきちゃったの」

そのクマのぬいぐるみは、怪物が立香の誕生日に買ったものだっ  
た。

それ以来すぐく大切にしてくれて、いつも一緒に持ち歩いている。  
この子にとっては父親からの何より大切なプレゼント。

「ああ、それなら大丈夫。ちゃんと、全部持ち出してきたから」

娘に対して笑みを浮かべ、怪物は懐から一本の鍵を取り出した。

それは一見すると何も変哲もない唯の鍵であるが、怪物が魔力を込  
めるとその形を変化させていく。これこそ、彼の王が持ったとされる  
宝物庫を開くための王律鍵……の合鍵である。

ガチャリと音がしたと思えば、空間が揺らぎ黄金の波紋が開かれ  
る。

「ええっと、どこいったかな。これじゃない、これでもない……んも  
う、邪魔！」

怪物は波紋の中に体を突っ込み探し出そうとする。

いやはや悲しいかな。

怪物には本来の宝物庫を開くための目が無い。精々、空いている隅  
の隅を倉庫がわりに使うのがやつとのこと。

急いで家財丸ごと投げ込んだのが運の尽きとでも言うべきか。こ  
の中には、彼／彼女が生きてきた数万年の思い出という名のガラクタ  
たちが積もりに積もっているのを探し物を探すのは、麦藁の山から針  
一本を探し出すようなものなのだ。

「ちよ、ちよっと。散らかさないでよ！　というか何よそれ、家で物騒  
なもん開かないでよね」

ポイポイと辺りを散らかしまくる怪物に注意する凜だったが、ふと、転がってきた石に目がいく。

「石ころまで転がってきて…ん？」

手に取ってみると、それは石ころなどではなく、磨けば輝く宝石だった。

それがゴロゴロと次々に転がってくる。

「あ、アーチャー、こ、これ」

「むっ…驚いた。処理やテリ、価値も一級品のものばかりだな。

哀れなものだ。宝石達も持ち主に恵まれなければ、石ころ同然に過ぎないとはね」

「こんな価値のあるものを塵みたいに…アンタ、一体どういう神経してんのよ！」

罵声を背中越しに浴びせられる。宝石魔術を駆使する彼女にとって我慢ならなかったのだろう。

でも、使い道があまりないので埃をかぶってしまうのはしょうがないじゃないか。

「価値と言っても、僕はコレクターじゃないんだ。お金に困ったときに市場に売り捌くぐらいしか使い道がなくてね、つと。あつたあつた」

ようやく探し物が見つかったようだ。

ぬいぐるみを立香に渡す。

「クマさん！」

「ふう、散らかして悪かったね。すぐ片付けるから」

日頃から整理しなきゃね、と言いながら怪物は指を鳴らした。途端に散らばった宝石達は波紋の中に吸い込まれていく。

「ああ…」

「凜、君という奴は」

口から手が出るほどの代物に後ろ髪が引かれる凜。それをアーチャーは呆れた口調で嗜める。

「じゃあ、話の続きを…どうかした？」

「別に」

「凜」

「ああもう、分かったわよ！ それで？アンタ達はどうするの？」  
「なんで怒り気味なんだろうか。」  
「まあ、それはそれとして。」

怪物は凜に向き合う。

「君たちさえよければだけど、少しの間同盟を結びましょうか？」

「…一応聞くけど、どうして？」

「どうしたもこうしたも、この町から一刻も早く出たいのさ。長居して、他の魔術師やサーヴァントと鉢合いたくない。」

「ああ、誤解はしないでほしい。聖杯には興味ないし、対価はここを避難場所として使わせてくれればいい。悪い条件ではないだろう？君は少ない対価でもう一騎のサーヴァントを得たと考えればいいんだ」

凜は顔を顰める。

怪物の提案は破格の物だ。アーチャーとの戦闘を見るに怪物の能力は申し分ない。彼／彼女がいれば勝ち残ることもできるかもしれない。

しかし、疑問が浮かぶ。

「私、貴方の信用を買うほどのことをしたのかしら？ この瞬間でも貴方を殺すこともできるのよ？」

「ふふっ、強がるじゃないか。でも、君はそうしないだろう？ あの女神とは似ているようで違う。それだけで十分なのさ」

似ているけど違う。

怪物はそう笑った。

「…そんなに似てるの？私とその女神って」

「うーん。君とあの糞は似てるけど、即座に状況を掴む洞察力と判断力、そして才能に甘んずることなく努力する姿勢… どれを取っても君の方が優れている。」

君こそ、聖杯戦争のマスターを名乗るのに相応しい存在だ」

「なっ、そ、そんなに言われると悪い気はしないけど… えへへ、ちよつとアーチャー。貴方も少しぐらい見習いなさいよ」

こうして、同盟は結ばれた。

聖杯戦争が終わるまでのひと時の間、正義の味方と怪物は手を組む。お互いの大義は違えど、守るべき物があるのは変わらないのだから。

「まあ、これだけ似ているんだ。性格に多少難があっても、目を瞑ってあげるから安心してくれ。うっかりとか、守銭奴とか」

「アンタ、喧嘩売ってる?」

「まさか」

◇

「じゃあ、立香。少しの間、このお姉ちゃんと待っていないさい」

怪物はアーチャーと共に戦場に赴く。

娘の為に、彼／彼女は戦うのだ。

「お父さん・・・ちゃんと帰ってくる?」

立香は心配そうに親を見上げる。

それを解消させるように怪物は子を抱き上げ笑った。

「勿論。お父さんが約束を破ったことないだろう?」

「あるもん。この前、おやつ買ってきてくれなかった」

「んん・・・そう、だっけ? じゃあ、今度はおもちゃ付きのおやつ

買ってあげるから、ね?」

「・・・本当?」

「ああ、本当だとも。約束だよ。だから、信じてくれるかい?」

「うん! 早く帰ってきてね!」

勿論だとも、と怪物は大きく頷いた。

その様子を、凜とアーチャーは見ていた。

“親子”をではなく、正しくは、彼らの後ろにある鏡を。

(疑っていたわけじゃないけど、本物だったのね)

鏡には、立香が映っている

立香だけが映っている。

(君の決定に意見するわけではないが、よかったのかね? あれは人

類の敵だ。いくら人の皮をかぶろうとそれは変わらない)

(∴) しょうがないでしょ。放り出しちやえばなにするか分かんないし、手綱を握れるだけマシよ)

娘を抱く、怪物の姿は鏡には映らない。

彼／彼女は、正真正銘の人類史を否定する “怪物” なのだから。

## 幕間 【恋】 2 / 1

最初の出会いは何の思い入れもなかった。

あの日、一人の青年と出会った。

彼はアタランテを見上げ、言葉を口にする。

『麗しと称されるアナタを一目見たかったのです』

軟弱で、気弱。男か女かも判断しかねる半端者。それが私が彼に抱いた最初の印象だった。

彼は言った、私に挑まないと。

少し意外だった。彼も私を手に入れようとする…。いや、正確にはこの国の王の後継になろうと画策する愚かな男共と同様だと考えていたからだ。

「ふんっ。挑戦者でないのであれば即刻この国を去るといい」

だが、それだけだ。挑戦者ではない、名も知らぬ青年。

明日になればその顔も声も忘れてしまう…。はずだった。

二度目の出会いは最悪だった。

その日の挑戦もひと段落つき、私はいつものように森に入った。

森の奥に踏み入ってゆくと、岩が剥き出しになった斜面へと出る。そこには湧水が溪流となつて沢をつくり、奥まった場所には滝と小さな水場が出来ていた。少し上の方の斜面には無数の木々がそびえ立ち、いくつか獣道らしきものも見える。

(あとで、獣を狩るのもいいかもな)

水場の深い辺りはちょうど岩場の影になつており、また滝の音もあるため、たとえ誰かが通りがかったもおそらくは気付かないだろう。それゆえ、私もここでは誰かの目を気にせず解放的になることができた。

「——と…」

身に纏った衣服を脱ぎ、狩りを行うため持参した弓矢も近くの木へ掛ける。そして、全裸のまま水場へ足を踏み入れて、身を沈める…。その心地よい冷たさに思わず、笑みが溢れた。

「ふう…。気持ちいいな」



この国に来てから川や池、湖で水浴びをしたことは多々あるがこの場所が一番気に入っていた。この水場で競争の疲れを癒し、狩りに向かう。それが私の日常であり、日々の中で唯一の心休まる時間だった。

夕暮れが穏やかに水面を照らして、今日の終わりを告げる風を運ぶ。巢へ帰る鳥のさえずりが遠くの方から、少しにぎやかに聞こえてくる。時折、水の岩陰には小さな川魚の動く気配。そして、適度な水量の滝は直接に浴びても心地良さを全身に伝えて、この長く伸びた髪を梳き洗うにはもってこいだった。

(明日も挑戦を受け、勝利し、殺す…。その次の日も、また次の日も) ばしやばしや、と何度も水を手ですくって、脳裏に浮かんだ戯言を冷やす。そしてふと、視線を水面に落とし…。そこに映し出された自分に思わず、顔をしかめた。

「なぜ、私はここにいるのだろうか」

父から呼び出しを受けた時はあんなにも心が躍ったというのに…。家族と、生きれると思ったのに。そんな泡い希望はとうに消えた。

私は、ひとりぼっちだ。

しかめ面を水で洗い流す。栓無きことと押し込み、体を水に沈めた。

「…ん？」

その時、頭上に見える木々の奥から、風のものではない葉擦れの音が聞こえる。それは断続的に響いていて、時折土を踏み締める足音も混ざり合っていた。

(獣か…。？ いや、これは人のものだな)

そう思っただけをすませ、その音の正体を確かめようとする。そして反射的に、岩場に立ってかけていた弓と矢を手繰り寄せる。

わずかに岩場の影から身をのり出して、森の奥を見る。

「ふむ…」

が、ちやうど死角になっているためかその音の主の姿は見えず、心なしか遠ざかっていくようにも聞こえた。

(… 狩りか、採取か)

確かこの山には、かなり美味な果実がなる木があると聞いた。ただ、ここは人里からかなり離れた奥地のため、危険な獣が住みつきやすく、狩人であっても危険は大きい。ゆえに、この付近を今まで他人が訪れることは滅多になかった。

(まあいい。やり過ぎせば、すぐに立ち去るだろう)

正直言つて、今は心が疲れていた。ゆえに隠れて、様子を伺うといった好奇心も起こらない。

——しかし、

「…っ?」

先ほどのものとは明らかに異なる気配が重なって伝わる。それは禍々しいほどの狂気と殺気があり…。今度こそ間違いはなく、獣と呼べるもの。

そして、その衝動は明らかにある一点に向けられていた。

「わあ、本当にあつた。ありがとう、君のおかげだね…。ん? どうしたの? 後ろかい?、——え? っ…?!」

それを示すように思いがけない驚嘆に引きつった声が、かすかに聞こえてくる。やはり、人間。それも男で、それほど年を経っていない若者だろう。

間違いなく獣はそれを狙っており…。そして気の度合いを探つても、このままではその者の生命を奪われることが容易に想像できる。

「あはははは、いやあすまない。キミの縄張りに入るつもりはなかったんだ。できれば話し合いで解決をしようじゃないか…。だめ?」

「——グオオオオオ!!」

「わっ、ちよつと待つて! わ、わああああ…。!!」

叫び声を聞いた途端、私は水場から飛び出ると軽やかな足取りで岩場を一気に駆け上がり、瞬く間に斜面へと登りである。

そこにいたのは、やはり若い男と…。私の背丈の倍ほどもある、巨大な猪。

助ける義理はないが、見て見ぬ振りが出来るほど落ちぶれてはいない。男と猪の前に私は飛び出した。突然現れた私の姿に、猪はその動

作を止めてその巨体をこちらに向ける。

その距離はほんの僅かでしかなく、私の乱入があと一瞬遅れていれば、その巨体の突進により青年の体は宙に舞い散っていたことだろう。

「えっ!? キミは…。」

「下がっている」

状況が飲み込めていないのか、あっけにと取られている青年を庇うように立ち、背中越しに声を掛けてから、猪と対峙する。そして、その獣系の相手を私に選び直し、足を掻き突進を開始しようとした隙を付き、弓を振り絞り矢を放った。

「グオオオオオオツツ!!」

その矢は猪が突進を開始する前に脳天を射抜いた。震え上がるほどの咆哮が響く。それに気圧されることなく、第二射、第三射を両眼、喉元に放つ。

「グオオオオオオ!!!」

しかし、それでもなお猪は突進を止めることなく私に迫ってきた。

「このっ…!!」

…押しつぶされそうな重量感が四肢に伝わって、関節がみしりと、悲鳴をあげる。

次の瞬間。

「はああああアア!!」

私をかち上げようとする猪の頭部を掴む。そして、重心を受け流すように巨体を背負いながら、自分諸共に崖下にめがけて投げ放った。

ドオオンと、豪快な響きと水柱を上げて、私たちは滝壺に打ち付けられる。

「え… えええ…。」

ほんの数秒の出来事に、しばらく青年は呆然となっていたが…はっ、と我に返り斜面を軽々と下ってゆく。

そして、滝壺に溢れ返っている大量の血溜まりを見て、思わず沢に飛び降りた。

「…。」

間も無くして、猪の死体が浮かび上がってくる。だが、彼を身を挺して守ってくれた彼女の姿はどこにもない。

「まさか」

沈んでしまったのか？そう悟った青年は、少女を助けようと駆け出し、水音を立てながら沢へと踏み入っていく。

その時、

「……ふん。馬鹿の一つ覚えのように向かつてこなければよかつたものを」

猪の身体を掻い潜るようにして私は水面から浮かび上がって、沢のほとりに上がり出る。少し身体を打ったが特に問題ではない。

「だ、大丈夫ですか？」

「それはこちらの台詞だ、汝こそ大事はないか？」

先程の青年がこちらに駆け寄って心配そうに声をかけてくる。それに答え青年に対しても問いかけをするが、これが不思議なもので青年は顔を真っ赤に染めながらこくこく、と頷くのだ。

疑問は残るが、青年の様子から無事を感じた私は、共に転がり落ちた弓と矢を担ぎ直し猪の亡骸に振り返ってため息をついた。

「気に入った水場だったが、当分は使えそうにないな。まずは猪の身体を運び出さねば」

「………」

「むっ？ ああ、念のため言っておくが、お前を助けようとしたのではない。後ほど狩りをするつもりだったからな、手間が省けた。ゆえ礼などいらぬ、命を拾ったことを幸いに思い、早急に立ち去るといい」

「あ、ああ……」

「……？」

青年の反応を見て、違和感を抱く。恐怖や、不測の事態に思考が停止しているのなら、わかる。ただ、青年はそのどちらでもない。むしろ顔を紅潮させて、何かを恥ずかしがっているような……。

……あつ。

よく考えてみれば、今私は衣服も何もかも身に付けていない。

ゆえに、今の姿は――

待て、待ってくれ。咄嗟に飛び出して気が付かなかったが、何も纏っていないということは…つまり、今の私は、

——裸？

「…ひ、ひやああああああっ?!」

今までほとんど上げたこともないような悲鳴を上げて、大慌てで水場の中へと身を沈める。それを見て、青年も硬直が解けたのか我に返り、急いで背を向けた。

なんたる迂闊、なんという失態…っ!!

「き、貴様…っ!!」

「?! いやつ、僕は見てないです！ ええ、もう全然!! じ、実は目が悪くてね、ええ本当！なのでキミの裸は全く見えてない!!」

「——裸だとわかっておろうがっ!!」

見られた！ 間近で、力いっぱい見られたのだ!!

しかも、よりによって全裸！

少なくとも、この生涯においてあの船の仲間にも…同性にすら見られたことがなかったのに?!

それを、よりにもよって、男にだとおっつ?!

「…正直に言え、貴様、どこまで見た？」

「い、いえつ、全然見てないから！ ち、ちらつと全身見えただけです!!」

「~~~~ツツ!!」

よし、殺す。

この男にとっては精一杯取り繕っているつもりなのだろうが、明らかにそれは逆効果で私の羞恥と憤怒はますます高まる。というか、この男わざと言っているのでは？

「あ、あはははっ… あ、あのお…」

「——はっ」

ぷちん、と頭の中にある何かが切れて、燃え上がるように熱くなった思考が急速に冷えていく。

そうだ、わざとだ。今の言葉で確信した。背を向けながら、今見た光景を思い出してほくそ笑んでいるに違いない。

… 殺しても文句はあるまい？

私にも恥じらいぐらいはある。少なくとも異性に自らの秘所を曝け出したなど、屈辱以外の何物でもない。

「最後に… 何か言い残すことはあるか？」

「あ、あのあのっ…！ と、とりあえず…。」

「… なんだ？」

青年は満面の笑みで、

「ご馳走様でした…。」

「——沈めッツ!!」

「にやっがああ?!」

襟首を掴み上げて、そのまま後ろの沢に放り込む。

ドボンッ、と豪快な水柱が吹き上がり、青年の姿は滝壺の中へと消えていくのだった。

「ほら、すっかりせんか… まったく」

呆然とした気分のまま、私は衣服を羽織って再び滝壺に向かった。… その間、先ほどまで全裸であったことが思い出されて、恥ずかしさで悶えてしまう。本当であれば、この青年を殺してしまいたい程だが、

(私も道徳心ぐらいは持っている)

… 一応ではあるが。

ゆえに、ぶかぶかと水面に浮いていた青年を引き揚げた。

「う、ううん…。」

「おい、起きろ軟弱者」

滝壺から引き揚げた青年を岩場に横たえて、私はその頬をペシペシと叩く。青年は呻き声をあげながら目をうつすらと開く。

「目を覚ましたか。気分はどうだ？」

「え——」

声をかけられたことで、青年は側に立つ私の存在に気づき頭を押さえて顔を顰めながら起き上がってくる。

私は先程の痴態を見られた気恥ずかしさを押し隠す意図もあって、

あえてしかめ面のまま見下ろした。

「ぼ、僕はなんでここに…」

「よい、何も思いだすな。そのほうが長生きができるだろう」

「…美しいもの見た気が」——何か言ったか？」「いえ、綺麗さっぱり何も覚えていません…多分」

「うむ、よろしい」

お互い何もなかったと、言い聞かせる…。これで、いい。のか？

いや、これ以上考えるのはやめておこう。一刻も忘れなければ舌を噛み切つてしまえそうさ。

「そうだ… さつきはありがとう。おかげで助かったよ」

「礼はいらぬと言つただろうに」

「いやいや、お礼は大事だよ。お陰様で良いものを見れ「忘れろと言つただらう!!」

なんなのだこの男は！人がせっかく何も考えぬようしているというのに、なぜ掘り返す!!

「いや、それはできない。無理だよ。見たのは事実なんだから」

「無理でも事実でも、なんでも忘れぬか！ さもなければその脳天撃ち抜いてみせようぞ?!」

「え、それは困る。せっかく話せたのに… 大丈夫、誰にも言わないよ。僕の心の中に永遠に焼き付けるとも」

「ふざけるなっ！なれば、その心の臓ごと撃ち抜いてみせる！…？」

…何をやっているのだろうか、私は。

我にかえり、弓を取りかけていた腕を引つ込めた。いつにもない自分の反応に、自分自身でも驚く。裸体を見られたことに対する羞恥心は確かにあった。それでも今まで、こんなにも相手に、ましてや名も知らぬ他人に感情的になることなど、思い出す限りほとんどなかったはずだ。

「？」

私はまじまじと青年の顔を見る。名は確かに知らぬが、その顔には見覚えがあつた。男か女、言われなければ気がつかぬ程の中性的な見

た目の軟弱者。そういえば、あの日も安い口説き文句をかけてきたことを思い出す。

「私は言ったはずだぞ、用がないのであればこの国を去れと」

「ん？ ああ、そうだったね」

「そうだったではないだろう!?!」

「ごめん。あの日出会ったキミがあんまりにも印象的でね、そんなこと『すっかり』忘れていた。あつはは…。」

「笑うなっ！ …… なんなんだ、汝は」

声を荒げながら、胸にかき抱く戸惑いがどんどん大きくなる。それにさつきから、なぜか顔が非常にほてって… 暑い。わけもなく息苦しいほどに動悸が止まらず、言葉が時々もつれるほどだった。

今まで、私の近くにきた男は皆欲にまみれ、穢らわしい視線を向けてくる輩ばかりだった。しかし、目の前の青年はそれとは違った。会話してる内にやわらかな空気に飲まれるというか、馬鹿らしくなってくると言うべきか。それに猪に対して手も足も出てなかった癖、それを屠った私に対してこれほどに余裕をぶちかました態度は、どこから来るのだろうか？

あいも変わらず、人当たりのいい笑みを浮かべる青年を見ると、考えるだけ無駄な気がしてくる。

「もう、いい… 他言しないことを誓い、ここから消えるがいい」

「いいのかい？ 良かった、その弓で射抜かれたらどうしようかと、少し怖かったんだよ」

「そうは思えんがな… ほら、私の気が変わらぬうちに去れ。そして、この国から出ていけ」

私はしかめ面を保ったまま、青年で手で追い払う。青年は「わかったよ」と返事をし、立ち上がる。むう… 本当にわかってるのだろうか。

「じゃあね、今度はたくさんお礼を持ってくるから」

「… もしや、話が通じない獣か何かか、汝は？」

思わずため息をついてしまう。

なんなのだ、本当に。



◇

まあ、流石に青年も懲りただろう。

私はあれ以来水場には足を運んでいない。体を洗い流す程度であれば付近の川でも十分だからだ。だからもう出会うことはない。

「…それにしても変な男だったな」

今まで会った男と比べればある意味純粋な目をしており、不思議と向けられる視線は不快ではなかった。

…まあ、話を聞かないところは難点であり私の痴態が広められてないかは不安ではあるが。

今日の競走も終わり、私は自分の天幕の元に帰る。

間も無く日も暮れる。そろそろ火を焚くかと準備をしようとした時、

「——おーい！」

と、何やら聞き覚えのある声が森の奥から足音と共に聞こえてくる。

ため息と共に、頭を抱えてしまう。

振り返れば腕いっぱいに果実を抱え、こちらに手を振る青年の姿。

「… 汝は、馬鹿なのか？」

「えっ」

それが、私たちの関係の始まりだった。

## 幕間 「恋」 2 / 2

「汝が持つてくる果実は（もぐもぐ…ゴクツ）美味しいな」

「本当かい？ それは嬉しいな、わざわざ獲りに行った甲斐があった」  
彼が持つてきた果実を頬張る。これがなんとも美味なもので、一口頬張るたびに甘い果汁が溢れ出し喉を潤す。そしてまた一口、また一口と果実に手が伸びる。思わず、顔が綻びそうになるがそれを見られるのは少し癪なのでついそっぽを向いてしまう。

「ふふっ」

「…むっ、なんだ」

「いいえ、なんでも」

「むう（もぐもぐ）」

不思議なもので、彼は腕いっぱい果実を持つてくる癖して自分で口をつけようとはしないのだ。聞けば、「食べるよりも、誰かが美味しくそうに食べてるのを見る方が好きなんだ、と嬉しげな声色と共に返事が返ってくる。

… 本当に変な奴だ。



『よかったら一緒に食べませんか？ これ、凄く甘いんだ』

『… いらぬ』

出会ったその数日後、彼は何度も私の元を訪れた。この国を去れと言いつ聞かせたのにも関わらず、何度も何度もしつこく。それを嗜め、時には武力行使で思い知らせる。それでも訪れる彼に呆れ果てる、それが日常となっていた。

『今日はブドウを持つてきたんだ、よかったら』

『いらん、去れ』

『え』

次の日も

『今日はザクロを』

『…（無言で矢を放つ）』

『なんでえ?!』

そのまた次の日も

『あれ?居ないのかな...』

「……(木の影に隠れている)」

『... また明日来るね』

『(何なのだ、いったい)』

性懲りもなく私のもとを訪れてくる。それが何日続いたのだろうか。そんなある日のこと、こちらもいい加減、我慢の限界がきた。

『今日はね、林檎を貰っ『っ... ええい、寄越せ!』え、あ』

一度、食ってやれば満足するだろう。それに、林檎などに食べ飽きている、こんなくだらないもの...。

そう考え、少々乱暴に口に入れる。

『もぐっ——こ、これは!』

口いっぱい広がる甘美な味わい。噛めば噛むほど溢れてくる甘み。何なのだこれは、私が今まで食べた林檎は腐ってでもいたのか? 一口食べるたびに身震いするほどの快感が全身を駆け巡る。噛むたびに溢れる果汁はとにかく甘い! 思わずほっぺたが落ちそうになる。

口に運ぶ手が止まらない、あつという間に一つを平らげてしまう。思わずもう一つ食べようと手が伸びてしまうが、ふと視線に気づいた。

『... なんだ』

『いえいえ、気に入って貰ったみたいで。もしよかったら、一緒に食べませんか?』

『... 好きにしろ』

林檎につられたとか、断じてそういうわけではない、決して。

彼はどこか嬉しそうに私の隣に座って話し始める。気に食わないが、私は果実に齧り付く。

『森にいる動物たちが美味しい果実が実っている場所を教えてくださいませんか?』

『モグモグモグモグ... (林檎を食べるのに夢中)』

『え、もしかして聞いてない?』

何か言ってるような気もするが、今は林檎を齧るのに夢中になってしまう。

そういうえば、と青年の方に視線を向ける。名前をまだ聞いていなかった。あちらは知っていて、こちらが知らないのは不公平だろう。

『… 汝、名はなんという？』

『名前、なまえ… そういえば決めてなかったな。ううん、いつもは誰かが名付けてくれるからなあ、そうだな…』

僕の名は——メラニオス。うん、メラニオスだ』

その日から、彼が何か持ってくるたびに、共に食事をするようになった。始めは彼の話をただ聞いていることが多かったが、次第に私からも話題を振ることが増えていった。所詮たわいのない会話だ。だが、それが心地よい。

「どうしてこの国に来た？」

「ん？… さあ、なんでだろう」

「おい、考えなしにも程があるだろう。汝はもう少しこう、頭を働かせた方が…」

「あははっ、そうだね。」

この国に来たのは偶々なんだ。一晩もすれば去る予定だった。ここは居心地も悪いしね」

「ならば、なぜ？」

「最初に言っただろう？ 噂に聞いた君を一目見たかった」

彼はグイッと体をこちらに近づける。

ち、近い！

思わず顔を背ける。しかし、彼はクスリと笑って言葉を続ける。

「そして想像以上だった。君は強く美しくそして可憐だ。うん、君と  
いう女性に会えただけでこの国に来た甲斐はあった」

「~~~~~!!」

鼓動が痛みを感じる程早まる。なんなのだろうこの痛みは。今までだってこんなこと、こんな想いを抱くことなかったのに。

「おや？顔が林檎のように赤い、熱でもあるのか、——ひでぶっ!？」  
「っ…ふんっ」

それはそれは見事な肘打ちだった。  
つまらないことで騒いだり、軽口を叩きあったり…。まあ、さつきのような少々勢いづいてしまうこともあったが。イタズラ遊びのようないひとときだった。怒りながらも嬉しく、嫌がりながらも楽しいひとときだった。

思えば、あの船に乗るまで私は、誰かと親しく会話を交わした記憶があまりない。まして、男に挑まれ競争し勝利する。——そんな日々の繰り返しに、誰かと触れ合う機会など皆無だった。

だからこそ、なのだろうか。彼と出会ってからというもの…。自分以外の誰かと会話することがこんなにも心地良いということが、新鮮な驚きだった。

メラニオスのほうでも…。一度、遠目に見ただけではあるが商人や群がる女性に対しては完璧に気取っていたが、私にだけは子供のような茶目つきと明るさをさらけ出してきている。勝手な自惚れかもしれないが、それが私には他の人とは違う、上手く言い表せないが…。きつとそれは——に似た感情を持つてくれている所作のようにも思えて。

「ん？ どうしたのそんなに見てきて」

「べ、別に。相も変わらず間抜け面だと感心してただけだ」

「え…弱ったなあ、作り替えるべきか？」

…嬉しかった。

◇

『どうして？ 他人から向けられる好意ほど』

——気持ちいいモノなんて…。ないのに??』

◇

私は知らなかった。

それを知らなかった。

「大丈夫……大丈夫だから。大丈夫何度だってやってきたことなんだから……失敗なんてしない。こんなの、僕にだって……！」

彼と、メラニオスと出会うまでは。

彼は私を一人の人間として見てくれた。野蛮な男どもの欲望を孕んだ目とは違い、父親からの醜い侮蔑の目とは違い、柔和な優しい目で私を見てくれる。

「どうして……どうして僕は、助けることが出来ない……！」

私が病に浮かされた時、彼は何度も私の名を呼び、手を握っていてくれた。必死に、自分のことではないのに必死に。

初めてだった。誰かに手を握られるのは。

知らなかった、手を握られるのが心地よいことに。

優しい彼にいつしか惹かれていった。

似たような男と友人になったこともある。その男は英雄と呼ぶに相応しい男だったが、メラニオスは違う。決して英雄ではない、それでも強い者だ。

私は彼の手を強く握った。

「……ほら、口を開けて。そう、この林檎を食べればきつと良くなるから」

……だから、私に挑んで欲しくない。

アタランテはメラニオスが自分に勝負を挑もうとしてることを、培ってきた経験から察していた。

——殺したくない。

その優しさは他の誰かに向けられるべきものだ。決して私ではない。願わくばその優しさに見合う生き方をして欲しい。私を忘れて、どうか幸せに。

……それでも彼は、

「勝つよ。僕は絶対に、君に勝つ」

悲しい笑みを浮かべ、そう言った。

その日のことは、記憶に焼きついている。

「はああああああ!!」

「っ……」

メラニオスはアタランテにかけられた呪いを解くために女神アフロデーテの元に向かった。女神に呪いを解くように訴えたが、それと引き換えにある条件を指定された。

それはアタランテを負かすこと。彼女を汚すこと。

彼には黄金の林檎が渡された。数は4個。一つは彼女の呪いを解呪するために。残りの三つは、競争の際に彼女の注意を引くために。女神は笑う。

怪物がアタランテに——を——を知っているから。それを利用しようと思案したのだ。

走り続ける今も、メラニオスの懐には黄金に輝く林檎がある。一つ投げれば目が泳ぐ。二つ投げれば足は止まる。三つ投げれば貴方は虜に。それが林檎の魅了の力。だが、彼は林檎を投げる事ができなかった。

『——隠し事や、卑怯な手を使う者は、あまり好かん……。汝は違うだろう?』

こんな勝負、挑むつもりなどなかった。

本当に救いたかったのであれば、無理矢理攫ってしまえばよかった。翼を生やして、大空へ羽ばたきどこか遠い地へ——

それはしなかったのは、何故?

「はあっ…… はあ…… はっ……」

何はともあれ彼は必死に、がむしゃらに走り抜けた。誰一人、たどり着くことなかったゴールに、彼はたどり着いてしまった。無様なものだったかもしれない。それでもいいとメラニオスと思う。勝たなければならぬ、それは勿論そう。でも、どんなに無様でも、彼女と並び走れたことが何よりも喜ばしいことなのだから。

私は彼に駆け寄る。

「無茶をする」

「絶対に勝つ、と言ったろう?」

「そうだな。お前の勝ちだメラニオス」

彼は私に勝利した。手を差し伸べる。

言わなければならぬ。今まで言葉にできなかったけれど、今ここで言うのがふさわしい、そうに違いない。

彼が手を握り、立ち上がる。彼に向かいあい、私は口にする。

「メラニオス、私は汝を——え?」

その言葉は続かなかった。

「あ——」

彼の体が揺れ、こちらに倒れ込んでくる。

その背中には、一本の矢が突き刺さっていた。

「うおおおおおおおおおおお!!」

沸き立つ観衆。周りを囲んでいた男衆が一斉に叫び出す。それに呼応してか次々と矢の雨が二人に降り注ぐ。

メラニオスはアタランテを引き寄せ、庇うように抱きしめる。痛み  
に苦しみ悶えながらも、彼女を守るために

それでもなお、矢の雨は降りそそぐ。

「お、おい。いいのか?アタランテごと撃つちまつても?」

「ああ?知らねえよそんなの。あの怪物を退治すれば、この国の王にしてやるって?アフロディーテ様から直々の神託だぞ。へっ、それによお——王になれば、あの程度の女、いくらでも抱き放題だぜ?」  
「そ、それもそうだな。競争に勝つより、こっちのほうがいいってもんだもん!!」

「おい!早く矢を持ってこい!!あいつを殺し続けろ!!」

男たちは矢を放ち続ける。誰もかれもが、チャンスを狙い続ける。あの怪物を退治すれば王になれるのだ。

アタランテは自分をかばい続けるメラニオスを前に何もできない。何が起きているのか、理解するにはそう時間はかからなかった。数百





それと同時に、身体を人の姿に変化させていく。… どちらが、本当の姿なのだろうか。

「残念、だ。君の記憶の中では、人の姿で在りたかった」

彼は酷く暗い声色で言った。

だが、私にとつてどの姿の彼も、彼であることには変わりないと信じていた。恐ろしい怪物であつても、あの日あの時、私に向けてくれた青年の笑みを思い出すことができる。

だから「大丈夫だ」と彼を安心させるように声を掛けた。

彼は、驚いたように表情を変えたが、すぐに微笑み、

「君は優しいね」

と、子供の頭を撫でるように私の頭に手をおいた。

そして、そのまま

「これで、君は自由だ。どこへだつて走り出せる」

と、地平線の方へ目を向けながら言った。

「… 自由？」

聞き返した。「そうだ」と彼は答える。誰も彼も、父ですらも、もう縛ることはできない。

「そして、君が西へ行くなら、僕は東へ。北へ行くなら南へ。… ここに留まるというなら、まあそれも君の自由だろう。どちらにせよ、ここでお別れだ」

「い、一緒に来ては… 共に居てくれないのか？」

震える声で聞き返す。「何故？」という返事が返ってくる。

嫌だ、と心の底から声が聞こえた。もう二度と、一人になりたくないのだ。

彼の目を真っ直ぐ見て、疑問に答えるように言葉にする。

「私は、汝を——愛している、から」

月が私たちを照らしている。

私はようやく、言葉にすることができた。今まで、胸に抱いていた想いを伝えることができた…

が、

「——嘘だよ、それは」

聞いたこともないような無機質な返事が聞こえる。

「え．．？」

相も変わらず、彼は笑みを浮かべていた。

貼り付けたような．．．まるで、人の振りをしているような異質さを纏って。

## 第四話 『親』

「随分と上手く化けているんだな」

ビルからビルへ飛び移っていると、後ろからそんな言葉が聞こえた。

怪物はフワリと着地し、アーチャーに振り返る。

「いやなに、たいてい貴様のような輩は異形の姿の場合が多い。見かけは害のない人間を装つても一皮剥けば排すべき敵となる。そんなのをごまんと見てきたものでね」

「なんだい、言いたいことがあるならばつきり言ったらどうだい正義の味方人理の奴隷さん？」

怪物は苛ついている。

別に争うつもりもないと先ほど言ったはずなのに、なぜ蒸し返すのか。癩につく言い方も無性に腹立たしい。まず最初に彼から退場させてやるべきではないだろうか、などつい頭によぎってしまう。

怪物はふんつと鼻を鳴らしアーチャーを無視して先を行こうとするが、追及は止まらない。

「逸話通りであれば、時に手を差し伸べ時に牙を剥く、人間のフリをしたがるなり損ない。その人間気取りの紛い物が、なぜ人間らしい行為をしているのか気になってね。——あの子は貴様の娘ではないだろう？」

ビルの屋上に風が吹き渡る。

娘ではない。

脳内で反復する言葉。

怪物は、——は子を成せない。単一として完成されているからか、それとも欠陥を背負っているためか、純粹に生物的な意味での子を成すことは出来ない。

(いいえ、違うわ)

——そうだ、違う。あの子は真正銘ワタシの…

「そう、そうよ。あの子はワタシの…この身体が腹を痛めて産んだ

子だ」

だから当然だと怪物は言った。

親は子を守る、それは当然の行為だ。

それはアーチャーの追求に答える言葉ではなく、まるで自分に言い聞かせるようだった。

「ねえ？ どうしてお父さんなの？」

「？」

凜は立香に疑問を投げた。

少女は首を傾げる。凜の問いにどう答えればいいのか判らないのだ。

「あー、質問が悪かったかしら。えつくと、その貴方のお父さん？ つてどう見てもその、お母さんと言うべきじゃないかしら？」

藤丸■、と名乗った怪物の姿はどう考えても女性体だった。彼女の逸話は様々な土地、文化によって描かれる姿は異なる。それは子供であつたり、青年であつたり、時には美しい姫のようであつたりなど様々な姿形で描かれている。

それを加味するのであれば、今の怪物が女性の姿をとっているのはなんら不思議ではないのだが、

「お父さんが、違うって」

少女は首を振って否定した。

「なら… お母さんは？ お父さんがいるならお母さんもいるんじゃない？」

ならばと、凜は再び疑問を投げかける。

「うーんとね、お空！」

少女は窓の外の空を指差した。

「お母さんはお空に居るんだって。だからお父さんって呼ばなきゃダメって」

拙い言葉で少女は話す。

凜はその言葉を聞き、どう返したらいいか判らなくなってしまう。お空、ということは恐らく少女の母親はこの世にはもう…。

だからぎこちない笑みをうかべて話を逸らしてしまう。

「そう…。お父さんは優しい？」

「うん!! えつとね、わたしがピーマン食べると褒めてくれるし、お手伝いしたらいい子いい子してくれるの! あ、でも…。お片付けしないと、すつごく怒るの。あのね、お父さんが怒るとすうーごく怖いんだよお

少女は必死に凜に伝えようと両手を精一杯広げ、身振り手振りでの恐ろしさを表す。

それはなんとも可笑しくて可愛らしい様子だった。

「ぶつ。ふふふつ! なんだ、アイツ意外と親らしいことをしているのね」

親子の微笑ましい一面が脳裏に浮かんだ。

少し安心した。

「立香ちゃんはお父さんのこと大好きなんだ」

「うん!!」

「そっか、そっか。」

なら、アイツらが帰ってくるまで私と遊びましょっか?」

「いいの!?!」

歓喜の声をあげて少女は飛び跳ねる。

その様子を見て、凜は遠い場所の誰かと面影を重ねるのだった。

…。しかし、凜は後ほど後悔することになる。

元気一杯の子供というのは、実に手に余る存在なのだということ  
を。

◇ 『誰にも傷付けさせない、誰にも渡さない…。あの子はワ・タ・シの  
だ』

「——っ、違う。あの子は物じゃ、ない」

顔を手で覆い隠し、怪物は自分に言い聞かせた。

「あー、すまない。人間を憑代にするのは初めてでね。気を抜くと…  
自分があやふやになってしまう」

アーチャーは可哀想なものを見るように視線を向ける。

彼の目に映ったのは嘆く母親か、それとも偽りの父親怪物か

「… 難儀なものだな。」

なぜそこまで親にこだわる？ その身体は母親のものだろうか？ なら本来の父親も、」

「いない」

「……」

「そう珍しい話じゃないだろう？ 今も昔も」と怪物は言った。

戸籍上の父親はこの日本中どこを探しても存在しない。子供を認知する前に飛んだか、それともこの世からいなくなってしまったか。なんにせよ、この身体の記憶を探っても

『嫌————つて!! お願——痛っ いやっ——あ、あ、あ——!!』

判らない（思い出したくない）ので、仕方がないのだ。ノイズが視界を覆う。どうやら、これ以上は見たくもないと拒否反応が出ているようだ。

怪物は笑う。

「したんだ、約束。」「あの子をお願い」「つて」

それは、怪物が交わした約束。

夜の住宅地

悪魔憑き

神父

偽物

魔法使い

母親

「——も厄介な存在を押し付けてくれる」

「この、子を……どう、か」

使い魔

「ワタジハ選バレダノ！ ガミザマガワダジニカヲクレタノオ！」

橙子

本物

歪曲

焼殺

協会

『原初の怪物から新参の怪物へ、言葉を送ろう』

それはある一夜のお話。

一人の母親と人喰い怪物の約束。

たとえ、全てが偽りだったとしても怪物は親として娘を愛すると自

身を定義した。母親の姿でいるのは、彼女が生きていたことを証明するためにすぎない。彼女は確かに母親で、立香を愛していたのだから。

怪物は端に飛び乗った。

「今代の僕はあの子の親だ。この命に変えても、守る。それが親の役目だ」

「なるほど。大した理想じゃないか」

ビルが目下を見る。

そこに戦場がある。

金属音が鳴り響き、サーヴアント同士が攻防を広げる。

一方は槍を携えた西洋風の騎士、対するは騎馬に騎乗する島国の戦士。

その後方にはマスターと思しき人間たちがいる。欲望に塗れた醜悪な表情だ。ビルから見下ろすこちらの気配に微塵も気付いてはいまい。

「それで、君はなんのために戦うんだい、アーチャー？」

「…ふつ、——己のくだらん理想のためだ」

アーチャーは矢を構える。

目標は目下に繰り広げられる戦場。

互いの信頼など皆無。もとより正義と悪。二人の信念が交わることなどあるはずもない。

それでも、

「いいね、お互い偽りの大義をかけて戦おうじゃないか」

互いに譲れないものはある。

舞台へ、怪物は上る。

「さあ、幕を上げよう！、童話の怪物のお通りだ!!」

瞬間、戦場に魔力が駆け巡る。

サーヴアント達は突然の乱入者に視線を向けた。両陣営はビルの屋上を見上げる。

そこに、怪物がいる。



「——あいにく、戦闘は苦手だね」

彼／彼女の周りには幾重もの文字が浮かび上がる。  
頬が邪悪に歪む。

「ゆえに蹂躪だ。————死に物狂いで謳ってみせるがい  
い——！」

戦場を薔薇の壁が覆う。

そして、サーヴァント達を取り囲むように影からトランプの兵隊た  
ちは躍り出る。

12時を告げる鐘は鳴り響き、ドラゴンは産声を上げる。

主人の命令に従い、物語の怪物プロイキツシャーは乱れ集う。

『薔薇の花を♪ 薔薇の花を♪ 赤く塗ろう♪ 急がにや♪ しぼむ  
よ♪ 花の命♪』

兵隊は歌い、サーヴァントに槍を突き出す。

黒きドラゴンは口から緑炎を吐き出し、何もかも炎に包んでいく。

「チツ、マスター——」

マスターを守護しながらの戦闘は不利だと感じたのか、槍兵は主人  
と共に離脱を図るが

「くっ——」

はるか屋上からの狙撃。

無名の弓兵は逃走者を許さない。

一撃、二撃。たとえ防いだとしても、その狙撃は一撃ごとに力を増  
す。相手の力を測るように。隙を見せればマスターごと貫けるよう  
に。

そして、薔薇の壁は徐々に牙を剥く。触れれば猛毒、燃やせば暴れ  
狂う。

逃げ場など最早ない。

「ならば——！！」

騎馬兵はドラゴンに立ち向かう。

果敢に剣を振るい、馬車をもって攪乱しその首に剣をかける。

「(獲った——！)」

しかし、彼は竜殺しの逸話は持たない。

ドラゴンはニヤリと笑う。

残念ながら、このサーヴァントでは怪物達の伝承防御は崩せない。

『さあ、薔薇を塗ろうよお♪ ピンク？グリーン？ブルーは駄目！  
薔薇を塗るには真っ赤な、真っ赤な赤に限る♪』

「ひっ、やめろ… やめろ！やめてくれえ!! わた、私はこんなところで終わるはずがない!!」

ラ、ランサー！何をしているのだ?! なんのための使い魔だ!!」  
縋り付く魔術師。

だが、槍兵は既に

「お、のれ… 卑怯者どもガア!!」

その心の臓は矢に貫かれ、その身体はトランプ兵によって切り刻まれてゆく。

『花のない薔薇なんてごめんさ♪ さあ、ペンキは持った？ 血は手に入れた？ なら、赤く塗ろう♪ そうすりや綺麗な薔薇の出来上がりさ♪』

「や、やだ！ 嫌ダアあああー！ー！ー！ー!!」

荆棘は綺麗な赤に彩られ、

「ガッ、——あー、チャアあ…」

騎馬兵は脳天射抜かれ、ドラゴンに丸呑みに。

「——」

もう一人の魔術師はいつの間にやら荆棘の餌食に。

怪物達は歓喜の歓声をあげ、満足感を抱きながら去っていく。

「——これにて、閉幕。またのご来場をお待ちしております… なんてね」

夢の再現は終了。

戦場は静けさと共に消えゆく。

「ふわあ… 今夜はこれで限界。早く帰ろうじゃないか」

欠伸をしながら怪物は去っていく。

残してきた娘の顔を見るために、少し足早に。

「恐ろしいものだな。人理の否定者、星そのものの影法師。私は、君が死ぬまで親としての役割に従事することを願うことにしよう」

「――」としての力。それを遠慮なくふるい、第一夜は終える。  
アーチャーは、戦場に転がる無惨な死体を一瞥し後を追いかけるのであった。

◇

「……………」

「お、おかえりなさい」

二人を出迎えたのは、沢山遊んでぐっすりと眠る立香と

「舐めてたわ。馬になったり、ままごとしたり…：魔術を扱うより疲れたかもお」

疲れ果てた姿の凜だった。

(…：あの子がいた頃を思い出しちゃった。元気かなー)

遠い親戚に預けられた妹の姿を思い浮かべ、ぐっつりと眠るのであった。

## 第五話 『幕切れ』

聖杯戦争の勝者は決した。

「…悪いが、ここまでだ」

冬木市で行われた人類史上初の聖杯戦争。

市内では建物の崩落、広域にわたる大火災に見舞われ、都市としての機能は失われた。

勝者は（表向きは）セイバー陣営。であるが、そのマスターの所在、生死は不明。

生き証人である遠坂家当主、遠坂凜は順調に他のサーヴァントを撃破。それには他勢力の同盟もあつたとされる。（教会からの報告によれば『――』がこの地域に潜伏していた可能性があるとのこと。この土地の管理者である遠坂家当主を召集し、説明の場を設けるとする）「あのサーヴァントにはどうやっても勝てない。手負いの君を援護しても無駄だろう。あれは他のサーヴァントとは違う。規格外のものだ。

当初の予定通り、僕は娘と共にこの町を脱出する。君が退去すれば聖杯は成り、結界も解かれるだろうしね」

「…そうか」

しかし、一月一日に、セイバー陣営と同盟を結んだ彼女達は魔術協会から参加した天体科君主であるマリスビリー・アニムスファイアが召喚したキャスター（真名は不明）に挑み、――敗北。

「一つ、頼みがある」

「おいおい、共に心中しろなどと言ってくれるなよ？ 僕も腕一本犠牲にしたんだ、これ以上の戦闘はしない」

その後、遠坂凜は敗走。しばらく行方をくらます。

（同時刻に「――」と思われる人型実体も逃走。※人の形を得ている間は手出し無用と第八秘蹟会、および埋葬機関からの命あり。これ以後の追跡を終了する）

以上が、聖杯戦争のあらましである。

「…マスター、を。凜を助けてやってくれ。あの娘のことだ、最後まで抗おうとする。…雇い主に無駄死にされてしまうのは、己の矜持に反るのでね」

「やだね。タダ働きはごめんだ。あの魔術師からの借りは返し終わってる。お願い事があるなら、対価をくださいな。古来から君たち人間はそうしてきただろう?」

「対価、か。」

今の俺が渡せるものは、これしかない」

アーチャーは千切れていない方の腕に魔力を込め、一振りの短剣を投影する。

「持つていくといい。君が望んでいたものだろう」

「…これは」

それは歪な形をした短剣。これでは人一人すら殺せないナマクラに過ぎない。

が、この短剣の真価はその能力にある。

その能力こそ、数万年生きた怪物が望んでいたものだった。

「投影により、宝具としての格は下がってはいるが問題あるまい」

そう… わかった。引き受けようじゃないかアーチャー君。借りは多く作つた方がいいしね」

怪物は哀しそうに短剣を見つめたあと、懐にしまい。アーチャーに誓った。

それは昔からの礼儀か、人間に求められればその対価次第で事を成してきた。

今回は間違いなく、正しいことだろう。うん、それは喜ばしいことだなと怪物は笑った。

「君はどうするの? 介錯ならやってあげてもいいよ。頸を落とすのは得意だからね」

腕を刃に変化させ怪物はアーチャーに問う。

首を振り、彼は立ち上がる。

「いいや、俺は最後まで自分を貫くさ」

信頼し、共に夜を駆け、背中を預けた協力者。彼女を守るため、無名の弓兵は戦場へと向かう。

今にも消えそうなその身体で、騎士のように歩むのだ。振り返れば「楽しかった」と笑える日々々の記憶がある。

この弓兵にとって、この戦いはそれで十分だったと断言できるだろう。

未練はない。

あの少女には笑って生きていてほしい。

彼にとつて少女はいつだって前向きで、現実主義者で、怪物に手を差し伸べるくらい甘い。

その姿にいつだって励まされてきた。

「そう。…じゃあ、ここでお別れね」

怪物は背を向け歩き出す。

忠義の騎士にいくつかの問いをしながら。

「アーチャー、君にとつての正義とは」

「——死んでいく人を見たくない。助けられるなら、苦しむ全ての人々を救いたい」

「アーチャー、君はなぜ戦う」

「——一人の少女の笑顔のために」

赤い騎士は誇らしげに笑い、少女の姿を思い浮かべた。

たとえ、自身の自我が擦り切れたとしても決して忘れないように記憶に留めた。

「じゃあね、理想の体現者。縁があれば、また会おう——」

こうして、2004年冬木市で起こった数日間の戦争は幕を下ろした。

## 幕間 「怪物と狩人」

籠に閉じ込められる鳥を見てどう思うか。

——ある者は正しいと言った。

天敵もおらず、食事も、繁殖の相手すらも見繕ってもらえる。彼らは種の存続を約束され、危険を犯すことなく暮らしていける。それが鳥にとつての幸せに違いないと。籠を抱いて、そう言った。

——ある者は、哀れだと言った。

籠の中には息も詰まるだろう。彼らは、大空を自由自在に羽ばたくことこそが生きる意味。それこそが、鳥にとつての幸せなのだ。その者は、籠の鍵をあげて鳥を逃した。

怪物がどう思つたのか。それは間違ひなく後者だろう。

鳥は自由に飛んでこそだ。籠に囚われているのは間違ひっているに違ひない。

そう、それが怪物の犯した間違ひ。

彼女を一目見た時、「哀れ」だと思つた。

籠に囚われた鳥……いや、彼女を鳥と称するのはおそらく違ひ。例えるなら、野をかける獅子の方が正しいだろうか。彼女が走るその姿を見てそう想起した。

聞けば、彼女の父アルカディア王は後継たる男児を欲したために彼女に婚約を強いた。彼女はそれを拒んだ。しかし、王である父に逆らう事はできず、一つの条件を出し、それを満たせれば従うことを約束した……らしい。

だとすれば、彼女はそれに抗うためにくだらない競争を続けているのだろう。

「それにしても、挑む者も挑む者だ。勝てないと判っているだろうに……判つてないから挑むのかな。」

競争が行われる場にはいくつもの死体の山が積み上がっていた。

彼女に負ければ、矢に射抜かれる。敗北は死なのだ。

男達は彼女に挑み、死ぬ。しかし、その覚悟もない癖に挑み、命乞いをする輩がいるのは何故だろうか。継り付くぐらいなら止めれば

いいのに。

やはり、人間はよく判らないと怪物は肩をすくめた。

一方的な暴力の鑑賞も終わり、そろそろ月も昇る頃。

怪物は国を出るかと歩き始めた。

「なんだ、汝は挑戦者ではないのか？」

その時、背後から声をかけられた。——この時人の姿をとつていたことは幸運だった——振り返れば、月光に照らされ輝く髪。新緑色と数かに混じる金色の細髪。

「美しい、と見惚れてしまったのかもしれない。

「むっ、なんだ。言葉が通じぬわけではあるまい。なにゆえここを訪れた？」

だからこそ

「——貴方を一目見たくて」

その場の勢いで口に出してしまったのだ。

それが、彼女との最初の出会い。

怪物は、美しい彼女——アタランテを自由にしたいという願望を抱き。少しの間、居心地の悪いこの国に留まることにした。

『あそこッス！ あそこに美味しいのがあるんスヨー！』

と言つても、どうすれば自由にできるのだろうか。怪物は行き詰まってしまった。

競争に勝てばいいのか？彼女に勝てるのだろうか。アレは速い。

苦労しそうだ。

しかし、よく考えれば彼女の足があればいくらでも逃げ出せるというのに、それをしないのは何故か。

情か、それとも愛か。

判らない。

怪物は彼女のことを何も知らない。

『それにしても珍しいっスねえー。果実が欲しいなんて。アンタはご飯とか無関心っつか無問題っつか？水と空気さえ生きていけるバケ



モン？蛋白質も食物繊維も要らないのは羨ましい限りです。狩りの必要もないとか、ジブンだったらぐうたら化身になるっすもん』

「僕が食べるわけじゃないよ。というか酷い短絡思考だね。さすが鳥頭、痺れるよ」

『うひゃー、照れるっすー！…あれ、褒められたんっすよねジブン？』

「その少ない記憶容量でよく考えて。最初の数日はいいかもしれないけど、〴〵何もしない〴〵ということは何よりも辛いことだよ。得る物もなければ、捨てる物もなく、いつか朽ちるのを待つ日々。どう？」  
『うーん。狐や人間に恐れる毎日に比べればマシな気もするっすけどねー』

「…一度味わえばわかるさ。」

人間も神も、食事はともかく少しは何かに夢中になってないと生きていけないの」

『はあー、ジブンらに言わせれば意味不明ッスね。生きていけるならそれでいいと思うんすけどねー。娯楽？楽しみ？こちとら生きるだけで必死っすから』

怪物はチリリと鳴くコマドリを引き連れ、山の奥地へと訪れていた。

目的は美味しい果実を手に入れるため。

『人型って、よく分かんないッス。 必要なのに果実を求めるアンタも良く分かんないスけど』

「人間と親しくなるためさ。ほら、同じ物を食べれば親しくなるって言うだろう？ 誰かと同じ事を共有すれば自ずと仲も深まる」

『いやー無理っすね。所詮野生は弱肉強食。そんな偽善者、真っ先に喰われるっす』

「…」

知らないのであれば知ればいい。

しかし、人間は嫌いなものになぜ彼女に関わるのか。今更ながら疑問に思う。

怪物は理由がなければ動けない。

つまり彼女のためではなく、知りたいという好奇心を満たすため。自由にしたいたいの自分がそうしたいから。うん、そうに違いない——だって、そういう理由づけをしないと自身の行動を理解できないから——兎にも角にもまずは会話しないと。

と考えつき、果実を探してるといいうわけだ。

「コホン。」

それはそれとして、本当にあるのかい？君に頼ったのは僕だけど、こんな山奥に突ってるだなんて聞いてなかった」

『もしかして疑ってるんすか？心配しなくつても直ぐに着くつすよー。もしかして山とか苦手なタイプすつか？』

「山や森は神の息がかかった神聖な場所だから居心地が悪いのさ。」

それと君の鳥頭、もとい記憶力も大して信頼してない」

小煩いコマドリを話し相手にしながら木々をかき分けて進む。

居心地が悪いのは本音。

今現在の怪物は西の土地の神々。この地に信仰されるオリユンポスの神々に嫌われているのだ。それはしょうがない。非があるとすれば怪物の方なのだ。

とはいえ、彼らのちよっかいは怪物にとって小蠅がまとわりつく程度。鬱陶しいのが傷だが、神々が怪物を殺すことはできない。それに人の姿でいるうちは神々は怪物を認知できない。だから我が物顔で出歩けるのだ。

『あつ、アレっすーあそこっすよ!!』

バサバサと騒がしく羽を動かす。

どうやら目当ての物は本当にあつたらしい。

『どうっすか？どうっすか？』と肩から肩へ動き回るコマドリを手で払いながら木へと近づぐ。

「わあ、本当にあつた」

『ふふーん。少しは見直したスか？褒めてくれてもいいんすよ？あ、報酬は美味しい麦とかニワトコの実とかでお願いするつす』

「はいはい、ありがとう。君のおかげだね」

それは果実の楽園と言うべきか。

そこに生える木々には色鮮やかな果実が実っていた。どれも市場で見るものよりもみずみずしく、人間が見れば迷わず齧り付いてしまおうだろうと思えるほど。差し詰めここは天然の果実園なのだ。(人の手がついてないように見えるのは不思議だが)

怪物はここまで案内してくれたコマドリの頭を撫でながら実る果実に手をのぼした。美味しそうと思えるこの果実なら一緒に食べてくれるかもしれない。

その時、

『おっと... あー、あはは。あのお、後ろ向いた方がいいかもツス』  
「ん?どうしたの?」

怪物は果実をもぎ取るのに夢中だ。

コマドリが知らせる危険に気づかない。

『後ろつす、ヤバイつす。殺意バンバンつす。主にアンタに向けての』  
「後ろ?。——えっ?」

長らく怪物は殺意というものを経験していなかった。

それは絶対的な強者だったためである。

しかし、今の姿はどうか。脅威など見る影もなく、吹けば消える人間の姿。つまり弱者である。

その弱者に殺意を向けていたのは、背の丈を越えるほど巨大な猪。なるほど、人が寄り付かなかったのはこの猪がいるからか。

彼はこの楽園の番人なのだろう。

盗人である人間を食い殺しに来た、と言うわけか。

グルルと唸り声をかけ、今にも突進してきそうな様子。

「あはははは、いやあすまない。キミの縄張りに入るつもりはなかったんだ。できれば話し合いで解決しようじゃないか」

採った果実を地面に置き、敵意がないことを示すため両手を上げた。

無論、この程度の猪なら払いのけることなど容易い。

容易いのだが、この辺りで騒ぎを起こすのは不味い。

(正体を晒せばいい)

だめだ。人の姿を解くわけにいかない。人であるうちは煩わしい

神の目をごまかせるのだ。

『■■■■ーーー!!』

対話は不可。

そもそも野生の猪かどうかも怪しい。

ひよつとして神の遣いとかだつたりして。余計、手を出すわけには  
いかない。

「——グオオオオオ!!」

「わっ、ちよつと待って！ わ、わあああ……！」

これは痛いなあ、と目を瞑る。

肩にいたはずのコマドリはいつの間にか居なくなっていた。

(あの、薄情者め！)

と、恨み言を言ったその時、バツと岩影から何かが飛び出してきた。  
それは、

「えっ……キミは?」

「——下がっている」

あの夜に出会ったアタランテ、その人であった……。あつたのだが。  
彼女の姿を見て、怪物はギョツとした。

驚きもあつた、だがなんとも言えぬ想いが込み上げてきたのは間違  
いない。

「グオオオオオツツ!!」

猪は標的を変え、彼女に襲いかかった。

彼女はその突進をヒラリと飛び越え、弓を振り絞り矢を放つ。

その矢は脳天、続いて第二、第三射がそれぞれ目と喉元に放たれた。  
神業的な見事な腕前だった。

うん、見事だ。

あまり直視はできないけど。

怪物は混乱する頭で（それでも冷静に）この場を傍観していた。  
さすが俊足の狩人と称されるだけあるなあ、とか。

……意外と無いのだな、とか。

綺麗だな。うん綺麗、とか。

もしかして、そういうのが人間の流行なのだろうか、とか。

ただ、その光景を見つめることしかできなかった。

「あ」

そんなことをしてるうちに、彼女が猪と共に崖下へ転がり落ちていった。

ドオオンつと豪快な水飛沫が上がる。

幸いにも下は沢が広がっていたようだ。

「え… えええ…」

イメージしていたアタランテ像が崩れていく。

気高く、高潔で誰も寄せ付けないありがちな想像をしていたのだが、まさかここまで大胆な人間だったとは。

やはり事は実際に目で見ないと判らないなと怪物は思い知った。

とはいえ流石に心配だ。

水面には大量の血が浮かび上がっている。彼女の物ではないと願っていたが不安が残る。

まだ会話すら碌にしていなのに死なれてしまっただけは意味がないじゃないか。

怪物は崖を軽々下っていく。

そして迷いなく沢に飛び降りた。

程なくして、猪の死体が浮かび上がってくる。だがアタランテの姿はない。

「まさか」

沈んでしまったのだろうか。

怪物は水音を立てながら沢へと踏み入っていく。

その時、

「…ふん。馬鹿の一つ覚えのように向かってこなければ良かったものを」

猪の身体を掻い潜るようにして彼女は水面から浮かび上がって、沢のほとりに上がり出てきた。

無事な様子に少し安心して、思わず声を掛けた。

「大丈夫ですか？」

「それはこちらの台詞だ、汝こそ大事はないか？」

彼女は振り返る。思わず目を背けたが、ダメだ視線がどうしても向いてしまう。

その身体には何も纏っていない。

「……つまり裸だ。」

依然彼女は堂々としていた。いや、曝け出していた。

顔が熱くなっているのが嫌でも分かる。

なぜだ、今までこんな感情を抱いた事はなかった。

「そうか！この姿の所為だ。そうだ！久方に人の姿をとった所為に違いない。」

視線が泳ぐ。

「気に入った水場だったが、当分は使えそうにないな。まず猪の身体を運び出さねば」

「……そう」

「むっ。ああ、念のため言っておくが、お前を助けようとしたのではない。後ほど狩りをするつもりだったからな、手間が省けた。ゆえ礼など要らぬ。命を拾ったことを幸いに思い早急に立ち去れ」

「あ、うん、ああ……」

もしかして、そういう趣味なんだろうか。

ある意味自由な人間だな。

アマゾネスの方がもう少し恥じらいがあつた気がする。

「?…… あっ?!」

…… あっ、彼女は何かに気づいたらしい。

みるみるうちに顔が真紅に染まっていく。

もしかして

今、気がつきました？

「——ひ、ひゃああああああっ?!」

悲鳴をあげて彼女は身を水場へと沈めた。

これはもしかして不味い？

大慌てで背を向けた。

キツと彼女が睨みつけてくるのが伝わる。猪に負けぬほどの殺気。

「き、貴様……っ!!」

多分、いや絶対、これは僕のせいじゃない。

自分でも驚くほど必死に弁解した。

「?!いいいや、僕は見てないです!ええ、もう全然!! あっ!じ、実は目が悪いんです、ほんとほんと!なのでキミの裸は全く見えてない!!」

「——裸だと判っておろうがっ!!」

しまったー!

ああ、どうしたものか。こんな時に限って口が変に回る。

こうなつてしまつては何を喋つても彼女の怒りを買つてしまう。

「あ、あははっ... あ、あのお...」

「最後に... 何か言い残すことはあるのか?」

死刑宣告。

驚いた、一歩どころか何もかも飛び越えてしまった。

“とりあえず服は着た方がいいんじゃないかな”

いや違うな、こういう時は、お礼を... 待て、それも違う!

後は勝手に口が動いた。

「ふっ、ご馳走様でした」

「——沈めツツ!!」

「にやつがああ?!」

視界が反転したかと思うと、思いつきり水面に叩きつけられた。

聞こえる豪快な水音。

スウーと意識が遠のいていく。

その後、——非常に断片的であるが——彼女との時間を過ごせたよ  
うだ。

彼女は怪物を引き上げ、自分の天幕へ連れ帰った。

そこで、何を会話したのかはつきりと思いつけないが、アタランテが顔を赤らめたり、怒ったり、後は怒ったり、などなど色んな表情を見せてくれた気がする。

「ほら、私の気が変わらぬうちに去れ、そしてこの国から出ていけ」  
まだ頭がぼんやりしている。

目の前の不機嫌そうな彼女と何を話したのかさえ臆げだ。だが、得るものはあった。

彼女の居場所も判ったし、少しは親しく…。いや壁ができたか。良いもの見れた。——待て、そんなこと思ってない。

やはり人間の体に引き摺られやすくなっているらしい。変な事を口走るのもその所為だ。

「じゃあね、今度はお礼をたくさん持ってくるよ」

「…もしや話を通じない獣か何かか、汝？」

もう少し会話をしたいが、今日はこの辺にしておこう。

彼女に手を振り、怪物はこの場を去った…。ため息が聞こえたのは勘違いだろうと頷きながら。

自分の寝ぐらへの道を歩く途中、チリリと鳴きながらコマドリが肩に留まった。

『いやあー災難だったつすね。いやマジで。まあおつかないのは、あのお嬢さんだった気がするっすけど』

「よく言うよ途中から置いていったくせに」

『ごめんっす。いや本当に、焼き鳥だけは勘弁で。』

ほら、お詫びに果实！置いてきた果实持ってきたっすから!!』

コマドリは持ってきた果实を怪物に手渡す。

それは赤く染まった林檎。

怪物は林檎を口に運ぶ。シャクつと軽快な咀嚼音が聞こえる。

思わず笑みが溢れた。

「うん…。甘いね。ふふっ」

『？　なんかご機嫌ツスね。良いことあったんすか？』

「さあ？　なんでだろう自分でもよくわかんないや」

久しぶりの味覚を楽しみながら怪物は歩く。

まず第一步を踏み出すことができたのが嬉しかった。

…　今思えば、積極的に彼女と関わろうしたのは僕自身が望んでいたからかもしれない。

人間は嫌いだ。でも、彼らが羨ましかった。やはり一人は寂しい。この時の僕は理解できなかっただろうけど。誰だって、一人では生き



ていけないんだから。

数日後、再び山に入る。籠一杯に果実を積み込み、アタランテの天幕を訪れた。

笑顔の練習。水面を覗き込み、はいニツコリ。

よし、表情の問題なし。

「おーいー！」

と、手を振る。

ちようど彼女は帰っていたらしい。

彼女が振り返る。ため息をつきながら。

「… 汝は、馬鹿なのか？」

「え、っ」

この後、矢を射られたのは内緒だ。

## 幕間 「メラニオス」

『魅了の果実』

信頼を築くのは難しい。

なにせ、出会い方が散々だったのだ。警戒心はMAX。視界に入つた瞬間、矢が放たれる始末。

うーむ、困った。

怪物は今日も受け取って貰えなかった果実（今日は葡萄を持っていった）を食べながら悩んでいた。

その頭の上では二匹のトカゲがおしやべりをしている。

『今日もお姫様は無情で無関心！』

『けれど、ヨダレを垂らしてた！』

『次は、次こそいけるかも！ 押してダメなら引いてみる！』

『いやいや、引いてみるより押すべきだ!!』

「元氣だねキミたちは。」

「はあ、せめて話くらいは聞いてくれないものか」

双子のトカゲは怪物の頭の上で踊る。

彼らの言うことは当てにならない。それぞれが喋りたいことを言うだけの愉快的兄弟。

けれど、一つ気になる事を言った。

「よだれ垂らしてたの、あの子？」

『そうそう本当に垂らしてた！ だってそれは極上さ！』

『僕らだって中々ありつけない！ 一目見りゃあよだれも垂れる！』

一房の葡萄を見る。

まるでエメラルドのような輝きを見せるそれは、味も素晴らしい。

一噛みするだけで果汁が溢れ口の中が宝石箱に生まれ変わる。

人間でも、動物でも喉から手が出る程の一品なのだという。

怪物は房から一つ実を千切り、口の中に放り込んだ。

「甘さ」

人間の体で良いところは味覚があることだ。

甘味、辛味、苦味、酸味、旨み、あの身体では味わえないもの。わざわざ作り替えた甲斐はある。

久方の人間気分を彼／彼女は堪能していた。

——誰かと分け合う喜び。君にも伝われば良いのだけれど

「はあ」

もう一度、ため息を吐く。

けれどこの身体の難点、昔の事を思い出すのが難儀なものだった。うるさい、うるさいと頭の中で念じても聞こえてくる友の声。

——だって、できなかつたんだ。仕方ないじゃないか  
過去を引きずる自分の愚かさに嘆く。

やり直しはできない。

「もしも」は、怪物にとって一番嫌いな言葉だ。

『あれあれ、気分は絶不調？ 困った困った大変だ』

『あれまああれま、驚きだ！ 無敵の怪物が諦めちゃうの?!』

・・・いけない。

どうもネガティブな思考に陥っていたようだ。

頬叩いて切り替える。

——明日こそ、仲良くなれるかも。

そう思えば、いくらか気持ちちは楽になった。

残りの葡萄を双子に分け与え怪物は寢床に向かうのだった。

『美味しい！美味しい!! 御褒美もらえりや僕らは幸せ!!』

ふと、足が止まった。

「?」

・・・はたと気づいた。

別に仲良くなりたいたいわけではないだろう。

なぜ自分はここまで彼女に拘る？

怪物は疑問を抱える、答えはでない。

この世で一番難しいのは自分を理解することなのだ。

日を追うごとに二人の壁は少しづつ無くなっていく。

怪物の努力はひたむきで、ひたすらだった。

「今日は林檎を持ってきたんだ。これ凄いなだよ噛めば噛むだけー」

「っ……ええい、寄越せー」

結果を言えば、彼の努力は叶った。

コマドリがもたらした果実は、アタランテの味覚に突き刺さったのだ。

それでも、最初は会話らしい会話はなかった。

怪物が一方的に喋り、”そうか”、”ああ”など相槌が返ってくればいい方。

未だ、壁はある。それも高く、堅い壁だ。

けれど、ほんの少しでも柔らかくなったことが怪物には嬉しかった。

そして一週間を過ぎた時、アタランテの方から怪物に話しかけてきた。

そう言えば、と。

「汝の名は何という？」

怪物はしばらくポカンとした。

そこで初めて未だに名前がないことに気づいた。

人間として名乗る名前を持っていないのだ。少し考え込む。

名付けられたことなど思い返しても過去一度しかない。

その名も既に死人だ。今の自分が名乗ることはできない。

数秒か、数分か頭の中で吟味し、怪物は自身で人間としての名を決めた。

「メラニオス……そうだね、メラニオスだ」

と、青年は名乗った。

「メラニオス、か。いい名だな」

ふっ、と彼女が微笑む。

初めて彼女が見せてくれた笑顔だった。

色々な話をするようになった。

「私を愚かだと笑わないのか？ 父の言う通りにすればそれで良いはずなのに、くだらない競争を続け父に反抗する私を」

「笑わないよ。親に反抗するのは子の権利：：と云えばいいのかな。キミが納得のいくまですればいいのさ」

「子の権利、か」

「そうとも。いわゆる愛情の裏返し？ 反抗心とはそういう物だと聞いた」

「愛・・・ははっ、あの男にそんな感情を抱いてはいない。あれは私の胎しか興味がないのだ。私達に愛などあるものか」

青年は少しづつ人間に近づこうとした。

そのために人のルールに順応し、知ろうとした。苦痛で窮屈なものだったが、我慢して学んだ。

彼女と会った時と比べ、青年は人間らしくなった。人間として振る舞ったと言うべきか。

それでも、彼女を自由にしたいという願いは変わらない。

「ならキミは、どうして逃げ出さないの？」

「どうしてだろうな」

そんな悲痛な笑みは見たくない。

彼女に縛りつけられる鎖を、どう切り離してしまおうか。

青年はそれしか頭になかった。

(親を殺そう。しかし彼女はと思う。愛がなかろうが親子であることに変わらない。きっと、笑いはしまい)

話の最中でも、そんな世迷言を考えては否定を繰り返す。

驚いたことに、青年はアタランテに笑って欲しかった。

彼女が悲しむ姿など見たくなかったのだ。

笑うキミが見たい。

「汝は、獣に好かれるのだな」

「ん？ そうだね、愉快的友達さ」

青年の周囲にはいつも獣がいた。

チリリと鳴くコマドリに、膝で眠る狐、餌をせがむ鹿など多種多様な獣達。

彼らと青年はまるで言葉が通じてるように触れ合う。

実際のところ、青年は動物の言葉を理解することができていた。

人の姿でも、彼の本質は獣に近いのかもしれない。

そんな様子をアタランテは興味深そうに視線を送っていた。

青年がそれに気づく。

「触ってみるかい？　この子、キミのことが気になるみたいなんだ」

「・・・いいのか？」

「いいとも」

一匹の子鹿がアタランテの元に近づく。

頭を差し出す、どうやら撫でて欲しいようだ。

ぎこちないながらもアタランテは優しく触れた。

「ほお・・・ 触り心地が良いな。暖かい、それに肉付きもいい。メラニ

オス、この鹿は立派になるぞ。　わぷっ！　こら、頬を舐めるな、ふ

ふっ」

「あははっ。良かったね、褒めて貰って」

「しかし困った」

「え？」

「今夜は鹿肉のつもりだったのだが」

『!?!』

その言葉を聞いて子鹿は逃げ出した。

しまった、とアタランテは口を押さえたが時は遅し。

ははっ、と青年の苦笑だけが残った。

目を重ねるうち、気軽な会話が増えていく。

アタランテの方にも変化があった。

青年は時折アタランテを見つめた。

真紅の真っ赤な瞳で、じーっと。観察するように。

それがどういう風に受け取られたのかはわからない。

ただ、そうすると彼女は頬を赤らめてそっぽを向くのだ。

「なんだ。なぜ見てくる」

ムツと睨みながら聞いてきた。

青年にしてみれば観察以外の意味はなかった。

彼女がどんな表情をしているのか、何が嘘か、真実か。それを知りたいだけだ。

とはいえ、何か答えなければならぬ。

こういう時、人間ならどう答える。

「可愛い顔してるなあ、って」

「~~~~~！」

青年は冗談を覚えた。

「~~~~~ひでっ?!」

その言葉を言った瞬間、どういうわけか青年は空を見上げていた。

顎と頭の後ろがジンジンと痛い。

どうやら返答を間違えたらしい。

人間の言葉はやっぱり難しい。

「・・・ばか」

顔を伏せながらアタランテは果実を齧った。

『美の女神』

陽が落ちた。

その日は静寂だった。

鳥の声も、虫の鳴き声すら聞こえない。

獣達も姿を見せなかった。

まるで何かを恐れているように、静まり返った森。

胸騒ぎがした。

青年はアタランテの元へ足を運ぶ。

今日の競走は終わっている。

未だ誰一人ゴールに辿り着くことはない。

死体の山は積み重なる。

日に日に参加者の数は増え続ける。だが、アタランテは勝ち続ける。

そう確信できるほど、アレの足は速い。

今日は月が見えない。

青年はアタランテの天幕に通じる道の途中で二人の人間に出会った。

一人は煌びやかな衣服を着ている男性、噂に聞くアルカディア王ス  
コイネウスだ。もう一人は……嫌悪感で青年は顔を顰めた。

「おや、こんばんは。ひよつとしてアタランテの所へ行くのかね？」

王に声をかけられる。

「ええそうです。では、さようなら」

「ははっ、そう急ぐ必要はなからう。最近の若者は生き急ぐので困る」  
貼り付けた笑みを浮かべるその目には生氣はない。

気味が悪い。青年は背筋に薄寒いものを感じた。

「アレは私の娘でな。いやはや反骨精神が高くてね。まったく、あの  
ような条件をつけよって。親としては早く婿をとって欲しいのだが  
ね」

嘘である。

顔を見れば一目瞭然。

以前彼女が言っていた通り、この男に娘への愛はない。

「子というのは、いずれ巣立つものです。彼女の生き方は彼女が決め  
る。親であるなら、それを見守るべきでは？」

「これは異なることを言う。良いかね君？ 私は王だ。そしてアレの親  
だ。子は親に従う。そして、それが王の命であるなら尚のこと。アレ  
の生き方を私が決めるのは当然であり必然だ」

ニタニタと王は気色の悪い笑みを浮かべる。

青年は何も言わない。

ただ黙って心の底から侮辱の言葉を繰り返していた。

「それに君だつて、娘に惚れているのだらう？ 君が望むのであれば、私  
が場を整えよう。ああ、なに心配せずとも良い。アレは私の呼びかけ  
には答える。どうだ可愛いだらう？」

ふふっ、そして城に呼び出し、夜迦の準備でもさせようではないか。  
そうすれば流石のアレも折れるはずだ。どうだ？ 悪い話ではないだ  
r」



限界だった。

青年にしてはよく耐えた方だろう。

『——黙れ、人間』

そこに青年の姿はなかった。

在るのは醜い怪物の姿。身体に鋭い突起状の外殻を纏い、肩からは異形のシルエットを形作る4対の触腕が生えている。人間と共通点など、人型である以外残っていない。

獣でも、人間でもなく、人の理を侵すモノ。

暗闇に燃える炎の瞳が浮かび上がった。

怪物は怒りを露わにした。

王の喉元に触手を巻きつけ宙に浮かす。

『オマエか?』『オマエのせいだ』『オマエが悪い』『オマエがあ』

ギギッと首を絞めるが王は微動だにしない。怪物を見もしない、まるで糸の切れた人形のように。

何かに妄信するように、その濁った眼には青年の姿は映っていないのである。

話したことは、確かに王自身の言葉であろう、だがそれとは別に違和感がある。

『——やめてあげて頂戴な。それ、お気に入りの人形なのよ』

傲慢の匂いがする。

「こんばんわ、怪物さん。人間ごっこは楽しい?」

周囲が光に照らされた。

女が正体を表す。

その身姿を見れば同じ神々でさえも我を忘れ、求婚に走るであろう。

神の名はアフロディーテ。美と愛の女神、それが怪物の前に姿を現した。

『・・・オマエか。オマエだな?オマエを喰えばああ』

大きな顎が開かれた。

遙か太古、神々を喰らった時と同じように。

「あら怖い。そんなにもあの子が大事なのかしら?」

ピタツと動きが止まる。

「なら急いだ方が良くないんじゃない？・・・彼女、ちよつと体調が悪いみたいだから」

視線がアタランテの方へと向いた。

怪物に迷いが生じる。

この二人は彼女の天幕の方から歩いてきた。

もし、もし彼女の身に何かあったら

「神に対してその態度、本来なら八つ裂きにしてあげるところだけど今日は許してあげるわ。今は機嫌がいいの」

もう一度視線を向けるとそこには女神の姿も王の姿も見当たらず。

——話がしたいなら、私の神殿にいらっしやいな。いつでも相手してあげる。

と、言葉を残して。

「・・・っ」

ここで考えても無駄なことだった。

青年は顔を歪める。

ああ、なぜだ。どうして自分はここまで弱くなった。

青年は闇を駆けた。

「アタランテ、いい加減父の言葉に従わぬか」

「申し訳ありません。ですが、これが私の信仰なのです。」

「そんなくだらない信仰など捨て置け！なぜ、私の言葉に従わぬ!!」

このような問答をするのも初めてではない。

数か月前だろうか、私のもとに一人の使者が来た。なんでも、父を名乗る者が私を呼んでいると。

嬉しかった、嬉しかったんだ。今まで親の顔すら知らなかったので一目会いたいと常々思っていた。

私はすぐに父のもとに向かった。

「おお、アタランテ・・・会いたかったよ」

父は暖かく私を向かい入れ、温かい食事まで用意してくれた。

「そこでイアソンの馬鹿が・・・」

「ほう、そうかそうか」

つい口が軽くなり、これまでの旅の話をしてきた。嬉しかった、私  
の話を楽しそうに聞いてくれて、それだけでも、もう満足だった。

話がひと段落ついた頃、父から一つの提案を出された

「お前を王女として迎え入れたい」

「本当ですか!」

今まで生きていて良かった。

その時は、本気で思った。

孤独だった。

私は生まれてから、愛というものを理解できなかつた。

だからこそ、この男から向けられた「親の愛」というモノを信じて  
しまいそうになった。

「———そこでお前に、婿を取ってもらいたい。」

「え・・・」

時間が止まった気がした。

ああ、結局のところそれが目的だったのだな。

体から熱が抜けていく気がした。

「で、でも、私はアルテミス様に誓いを・・・」

「だからどうした?子は黙って親に従うものであろう?」

「アタランテ・・・私の、父の頼みをどうか叶えてはくれぬか?」

肩に手が置かれる。

口調はこちらを諭すようなものだが、その目は濁り、自らの欲望に  
取りつかれている。

この男は、自分の父だというのに、「嫌悪」その感情が湧きおこる。  
「つ・・・なら条件があります」

この時点で、逃げ出していればよかったのだ。それができなかった  
のは———

「私に競走で勝つこと。それでなければ結婚には応じません」  
嬉しかったのだ、必要とされたことが。

まだ縋っていたかった。

それから、求婚してくる男を打ち負かす日々が始まった。私に足の速さで勝てる男など、ギリシヤ中探してもいないだろう。だから時間の無駄だ。だどいうのに日に日に参加者は増え続ける。どうやら、父が手をまわしているらしい、小賢しい男だ。

父は時折、私のもとを訪れては先程と同じようなことを繰り返す。まるでそれしか言えない人形のように。

「アタランテ、何のためにお前を呼び寄せたと思っている！」

だが今日は少し状況が違った。いつもは一人で来るのだが、今日は一人の女性を連れてくる。顔はよくわからないが……

「お帰り下さい。貴方と話すことはない」

「お、おのれ……！」

いつもならこれで終わりだ。

しかし、今日は状況が違った。

『あらあら、父に対して随分厳しいのね』

「何者だ？」

『あなたに名乗る気はないわ。それ、よ、り、も、やっぱり、貴方気に食わないわね』

女性がこちらに手をかざし、なにか呪文のようなものを唱えだす。いったい何のつもりだ！と抵抗しようとした瞬間、

「あれ……」

突然、力が抜け、ガクツと膝をついてしまう。身体が燃えるように熱くなり呼吸をするのも辛くなってくる。

「はあ……はあ……な、なに……を」

『せいぜい苦しみなさいな。私の可愛いお人形さん……さて、そろそろ戻りましょうか。あの子も、そろそろ来るだろし』

何か言っているようだが、もうよく分からない。

ドサツと床に倒れ込む。

既に二人は立ち去っており、この場は私一人。

「……っ……ふう……ふう」

このまま、死んでしまうのだろうかど覚悟した。  
視界が何度も暗転する。

「キ……ミ……大丈夫……!!」

声が、聞こえた。

体を揺すられる。

誰だ。誰かが、いる。

意識がハッキリしないので判らない。

「……だ……だれ、か……」

思わず、手を伸ばした。

幻だったらそうしようかと不安がよぎる。だれもこの手を握って  
くれないかもしれない。

けれど、それは杞憂だった。

「ああ……メラニオス」

——しっかりと、手は握られた。

その手の温もりに安心した。

アタランテが意識を手放す瞬間、目にしたのは心配そうにこちらを  
覗き込む青年の姿だった。

「キミー・キミー」

青年がアタランテの天幕に辿り着いた時、目にしたのは熱に浮かさ  
れる彼女の姿だった。

横たわり、苦しそうに呻き声をあげている。

「これは……呪いか」

この症状には見覚えがあった。

かつて友を蝕んだ、あの忌まわしい呪いと同じ。

青年の脳裏に、あの雨の夜が映し出される。

「イヤだ。イヤだ……っ!!」

青年はアタランテの胸に手を当てた。

顔を歪めながら、魔術を唱える。

「・・・大丈夫、こんなの何度だってやってきた事なんだ・・・！」

大丈夫、失敗なんてしない、失敗なんて・・・！」

安心して、肩代わりするから・・・今度こそ、絶対・・・！」

青年は魔術が不得意だ。それゆえに解呪の仕方など知らない。

もはや懇願だった。

だから、だから

「ひ・・・なんで、なんで——やだあ、待って、なんで、お願い、お願い・・・!!」

効果はなく、口にする言葉も、普段の力を失っている。

青年の顔は、刻一刻と悲しさを増していく。

「うそだ、うそだあつ、今までだって治って、今までだって失敗したことなんて、一度もなかったのに・・・!!」

呪いの解呪も、肩代わりもできない。

青年は何一つ救えない。

怪物の役割は人の理を汚すコトだけ。

自分の傷を治し、塵から蘇ることはできても、純粹に人を助けることだけは決してできないのだ。

・・・きつと、青年は今まで本気で誰かを助けようとしたことが無かった。

奪い、奪われ、排斥されるだけの生き方だったから。

そのルールを、怪物は今の今まで知らなかったのだ。

## 幕間 「臆病者」

王様は困っていました。

娘が提案した” 自分に競争で勝つ”

そんなもの、直ぐに終わると思っていました。ですがいつまで経っても娘に勝てる男は現れません。

それもそのはず、彼女はギリシャにおいて最も足の速い狩人なのですから。

時には大勢の男で挑ませました。時には妨害をさせました。時には・・・そのすべてを娘は打ち破り何日たっても勝者が出ることはなく、只々、男たちの死体の山が連なっていくばかりです。

「なぜだ、なぜだ！どうしてこうも思い通りにいかない!!」

王様は嘆きます。全て上手くいくはずだったのに、なぜ自分ばかり、アイツが悪い、なぜ従わない。そういった想いばかりが湧きおこります。

その嘆きが届いたのでしよう

王様は再び神に縋りました。

「おお、神よ！女神アフロディーテよ！どうか、どうか私に神託を!!」  
あるいは利用されたのかもしれないが・・・

『いいでしょう、スコイネウス王。お前の願い聞き入れてあげます。』  
おお！、と歓喜の声を上げます。まさか神から直接お言葉を聞けるとは思ってもみなかったのです。

ですが、

『でも、貴方。自分の顔よく見たことがあるのかしら？——私、醜いものは嫌いなもの』

王様は鏡をとって自分の鏡を見てみると、そこには、酷くやせ細り、頬もこけ、とても王族とは見えない容姿。他人の目に怯え、自身の存在意義すら見失い、王としても親としても価値はなく、ただ不気味な存在がそこには映っていました。

「どうか心配しないで頂戴。お前はただ、私の言う通りに動く人形になればいいのよ。醜い人形でも飾り付けられる程度の価値はあるで

しよう」

目の前に女神がその御身を現します。全てを包み込むようなその美貌。そしてのぞき込まれれば何も考えられなくなるほど美しい魔眼。

王様は段々と消えゆくその意識の中、思い浮かべたのは、娘の顔——ではなく、「これで私の願いは叶う」という欲望に満ちたものでした。

◇◇◇

命は平等に軽い。

たかが、人間一人の命だ。

「はっ……はっ……はっ……」

ではなぜ走る？

なぜ、助けようとする？

『……メラニオス？』

アタランテ  
彼女を助けるため？

馬鹿みたいな理由だ。

何度も何度も転びながら、青年は大地を駆ける。

思考はぐちゃぐちゃだ。

自分の行動理由すら理解できない。

それでも、駆ける足は止まらない。

死は怖い。

何度経験しても慣れない。

生きるのも怖い。

迫る死に恐れ続けなければならない。

それで……それでも

最近は少し違ってきた。

『ふふっ。変な奴だな汝は』

誰かのために生きるのは、暖かくて気持ち良かった。  
だから、甘えてしまった。



「あらあら、どうしたの？ そんなに睨んじゃ怖いわ」

「・・・あれはオマエの仕業か？」

神殿には怪しげな光が灯り、二人の声が響いていた。

青年は怒り、殺意、それら全てを押し込めて問いかけた。

アタランテのあの熱、ただの風邪などではない。『呪い』、いや、もつとタチの悪いもの。

女神は一瞬面食らったものの、すぐに笑いながら答える。

「ねえ、逆に聞きたいのだけど——私以外にいて思ったの？」

無駄だった。

聞くだけ無駄だった。

空間は黒く染まる。青年の怒りに呼応するように神殿を侵食する。

神殿の床、壁が轟音を立てながら幾つもの武具を組み上げていく。

組み上げられたその全ての武具が女神に狙いを定めた。

「相変わらず野蛮ね。でもいいの？ こんな事しても、あの子は助からないけど」

腕を振るえば武具は女神を射るだろう。

しかし、燃え上がる感情を抱きながらも青年は冷静だった。

「なにが・・・」

なにが目的かと問うた。

青年には理解できなかった。

アタランテが何をした。

女神の怒りを買うほどの行為を彼女がするはずない。

青年はどう足掻いても、人間的な思考から抜け出せない。

女神の思考回路など理解できない。

「そうね、理由があるとしたら『気に入らなかった』」

「・・・は？」

それだけ？

たったそれだけの理由で？

「ええ、それだけ。・・・これって妬み？ それとも嫉妬？ いいえ違うわ、不快よ。何が麗しの狩人よ。気取っちゃって。それを誇りに思っ

いることも、群がる連中も、その在り方を美しいと思う貴方も何もかも気に入らない。

いい？世界で最も美しいのはこの私、女神アフロディーテなの。だから、これは罰。煩わしいこの感情を解消するための罰よ」

女神は淡々と言った。

神にとつての美とは自分自身であり、それ以外を認めない。

他人とは自信を飾り立てる道具でしかないのだ。

「でもこれ、貴方の責任でもあるのよ？」

怪物の過去の罪を曝け出す。

「貴方が私たちを壊したから、可笑しくなっちゃったの。本来の私たちは意志や感情もないシステムに過ぎなかった。それを貴方が壊したの。」

ああ、でも勘違いしないで。一様は感謝してるのよ。他人を貶める娯楽を理解できるようになったのは貴女のおかげだもの」

くすくすと女神は笑う。

青年は俯きながら「もう十分だ」と言った。この神に人の常識など通じない。これ以上の会話は意味を持たない。

一刻も早く、アタランテのもと急ぎたかった。

青年は背を向け、神殿を後にしようとす。

「貴方も健気ねえ。そんなにもあの子が大切かしら。空っぽの塵の癖に」

足を早める。

「理解できない癖にして、人間の振りをしたがる。楽しいふり、悲しいふり、滑稽ね馬鹿みたい」

分かっている。

それでも、歩き続ける。

「でもいいの？あの呪いは貴方じでは解けない。このままじゃ、死んじゃうかもね」

止まる。足が止まる。

「ねえ、取引をしましょう。この黄金林檎を授けてあげる」  
耳を傾けるな。

惑わされるな。

振り向くな。

「ここに4つあるわ。1つは呪いの解呪に。そして3つは競争に使いなさい。それであの子に勝つのよ」

差し出される4つの林檎。

なぜだか。目が背けられない。

「なにが、目的、だ」

「単純なことよ。私のための娯楽。貴方は私を楽しませるお人形。貴方がどんな結末を迎えるか、その瞬間を見たいの。」

「はっ・・・君たちにボクは殺せない」

「なに言っているの？ここが何処だか分かっていて？ここは私達オリュンポスの神々が祝福する土地。貴方を殺せる英雄なんて山ほどこい。私達自ら手を下す必要などないのよ」

この土地に入った瞬間、怪物の運命は決まっていたのだろう。

林檎に手が伸びる。

怪物は自身の命よりも、アタランテの命を優先した。

それは同時に彼女に対しての裏切りでもある。

呪いは治る。だがそのあとは？

彼女に勝つために林檎を使えば、使ってしまったえばきつと・・・

それでも怪物は林檎を手にとった。

雨は相変わらず降り続けている。

「・・・聞きたいことがあるんだ。」

「あら、何かしら？」

「彼女の父、スコイネウス王は娘を愛していたのか？」

女神の傀儡となった王に意思があるのかはわからない。

でも、親として、人として、愛情があってもいいではないか。

でなければ、あまりにもアタランテが・・・

「——ぶっ」

哀れじゃないか。

「ぶっ、あーははははは！馬鹿じゃない？あのような男に？愛？そん

なものあるわけないじゃない、アレはね自分の娘がいたことすら八ナから忘れていたのよ？娘のことなんか子供を産む道具としか考えちやいなかったわよ」

青年は夜を駆ける。

背後に響くは女神の笑い声

今は彼女のもとに急ぐことしか考えは浮かばなかった。

——貴方は知っているのかしら。人はね、恋をすると臆病になるの。

◇◇◇

「ほら、口を開けて・・・そう、ゆっくり飲み込むんだ」

すり潰した林檎を彼女の口に運ぶ。

小さな口から咀嚼音が聞こえる。

「すう・・・すう・・・すう・・・」

青白かった顔もスルスルと血色を帯びていく。

溢れ出た汗を拭き取れば、もう大丈夫。

「何が大丈夫だ、何が」

思わず吐いた言葉に悪態をつく。

結局のところ、無駄なことをしている。

神々の手の上で踊る人形に過ぎなかった。

『理解できない癖にして、人間の振りをしたがる。楽しいふり、悲しいふり、滑稽ね馬鹿みたい』

いつそのこと神々のように壊れてしまおうかと考えた。

青年は理解できない。

ただの塵に人間のことは理解できない。

嬉しいことも、辛いことも、苦しいことも、本当は空っぽで何にもない。

アタランテに向ける笑顔さえ、青年にしてみれば取り繕った仮面で。

全て嘘でしかなくて。

「それでも」

それでも、と青年は言う。

「(キミの笑顔を見たいのは本当なんだ。)」

それだけは嘘じゃないと、信じたかった。本物にしたかった。そして、目を瞑った。

しばらくして外を見た。

雨は上がり、雲は晴れ、星々が輝きを見せる。

嵐は過ぎ去った。

アタランテはまだ眠っていた。

額に手を当てる。

熱は下がってる。ふうー、と胸を撫で下ろす。

「(それにしても・・・)」

眠っている姿を見るのは初めてのことだった。

こうしてみれば、年相応の可愛らしさがある。

・・・もう少し近くで見てもいいかな、と体を近づける。

が

「・・・(目を開けこちらを見ているアタランテ)」

「・・・(まさか起きてるとは思わず固まるメラニオス)」

意図せず二人は見つめ合った。

目を逸らしたのはどちらが先だったか。

「・・・私の顔はそんなに面白いか？」

「んー、見惚れるくらいには・・・あー、その、おはよう？」

「っ・・・おはよう」

少しだけ、気まづかった。

「汝には礼を言わなければならぬな」

一言二言、言葉を交わした後、アタランテが頭を下げる。

「借りを返したただけだ。お互い様という奴さ」

「そうか」

彼女はそう言ったあと、背を向け黙ってしまった。

青年も特に喋ることはなく押し黙る。

沈黙が続く。

なんとも居心地が悪い。

「どうやって、この呪いを解いたのだ？」

それはあちらも同じだったようで。

さて、どう答えたものか。

青年は懐にある林檎を握りながら考える。

「・・・内緒、かな」

言えなかった。

知られたくない、嫌われたくない。

青年は臆病になった。

「・・・汝は隠し事ばかりだな」

こちらからは顔が見えないので、どのような表情なのかわからない。

そうだ。青年は結局のところ彼女に、本当のことを何一つ話していない。

「隠し事する人は嫌い？」

嫌われたくないんだ。

胸が痛い、痛い、痛い。

なんでだろうか、青年も壊れてしまったのかもしれない。

「そうさな。隠し事や卑怯な手を使う輩は、あまり好かん」

「そう」

本当の事を話してしまえば彼女は拒絶するだろう。

本当の姿を見せれば、逃げ出すだろう。

それは、嫌だなと思った。

「——ふふっ、汝もそんな顔をするのだな」

アタランテは微笑を浮かべこちらを振り向く。

「人は誰しも言いたくないことの一つや二つあるものだ。私もそうだ、言えないことなどたくさんある。汝が言いたくないのであればそれでもいいんだ・・・私を助けてくれたことに変わりはないのだからな」

「ありがとう」とそう言ってくれた。  
困った。

そんな笑みを向けられた時、どういう表情をすればいいか判らなくなってしまうた。

だから、

「あつ・・・えつと・・・焚き火を焚いてくるよ」

青年はその場から逃げ出したのだ。

背中だろうか、腰かな、いやこれは胸だ。心の臓がムズムズする。  
なんでだろう。

分かんない。

音を立てて火は燃える。

暗い夜を照らすように。

「メラニオス」

天幕からアタランテが出てくる。

青年は笑顔を取り繕った。

「どうした？まだ横になっていた方がいい」

「・・・側に行ってもいいか？」

「あ、ああ」

青年のすぐ横に腰を掛ける。

すると、肩に柔らかい感触がした。

頭を乗せているようだ。

「少し、こうさせてくれ」

「触れるのはダメじゃなかった？月女神の誓いがあるのだろうか？」

「いい、今だけはいいい。それに、汝なら構わない・・・から」

「・・・？」

彼女でも、気の迷いというのはあるのだろうか。

青年には拒否する理由などないため、されるがままにしておいた。  
沈黙が続く。

先ほどのように気まずいものではない。心地良いものだった。

しばらくの間、二人は星を見上げた。

青年は口を開いた。

「君の父上に会ったよ」

「そうか」

「傲慢な方だったよ」

「そうだな、初めて会った時からそうだった」

感情のこもっていない声。

青年かわこれからいうことを知っているのだろう。

「君は父親に・・・きつと・・・」

“愛されていない”その言葉を紡げない。でも、彼女は理解しているのだ

“愛されてない”か。そうだと前にも言っただろう?」

「・・・なら」

逃げ出してしまえばいい、投げ出せばいい、彼女にはその資格がある。

これは八つ当たりに近い。

「逃げたい、助けて」、それを言ってくれのであれば直ぐにでも行動に移せるというのに。

「どうしてだろうな・・・家族だからかな。あれでも私の・・・血の繋がった、たった一人の家族で親なんだ」

青年には判らない。

空っぽの心では判ってやれない。

子が親を想う気持ちなど。

愛など、判らない。

「父から、私に勝負を挑めとでも言われたか?」

「ああ」

実際はあの男ではなく女神から言われた事ではある。

懐の林檎を握りしめた。

「やめておけ。汝は私には勝てない」

それは確信めいたものだろう。彼女の足の速さにかなう“英雄”など今まで現れなかったのだ。



青年は「英雄」などではない。  
それでも、微笑んだ。

「勝てるとも」

「否、無理だ。勝てるはずなどない」  
どんなことを言われようと、ともあれ勝てばいいのだ。  
それを彼女は望んでいないだろう。  
が、知ったことではない。

「大丈夫、僕は人として勝負を挑むよ」

アタランテは立ち上がり、キツと青年を睨んだ。

「なぜっ!!私ほ、お前を」

“殺したくない”、それがアタランテの本心。

たった数日の関係、それでも彼女にとってメラニオスは、『生きてほしい』そう心から思えるほどの存在となっていた。

それが、青年に伝わっていたのかは定かではない。

「勝つよ、僕は絶対にキミに勝つ」

どうしてだろうか。

アタランテの目にはその瞬間、一瞬だけ、

メラニオスが別の生き物に見えたのは

「どうしてと」アタランテは問うた。彼女は青年の事を何も知らない。

青年は笑って答える。

「どうしてかな、どうしてだろう。もう・・・判らないんだ」

それで会話は終わり。もはや言うべきことはない、背を向け、青年はいるべき場所へと帰る。

◇◇◇

青年は勝った。

卑怯な手は使わず、自身の力で勝ったのだ。

「・・・はあ・・・はあ・・・」

しかし、それは女神の手のひらの上でしかなく、矢の雨は降り注いだ。  
だ。

かくして、災厄は産声を上げた。

戦士たちは死に、太陽神は嘲笑う。

女神の思惑は外れ、惨劇として幕を下ろすこととなった。

いつの間にか日は暮れていた。空には月が浮かび、星が瞬いている。

憔悴しきったアタランテを腕に抱え、怪物は巨体を引きづりながら歩いていた。

怪物の体は血に塗れている。それが自分のモノなのか、返り血なのかはもう判らなかつた。

「…すまない…ここで降ろす」

怪物はそつと、アタランテを地面に下ろした。

それと同時に、身体を人の姿に変化させていく…彼女を怖がらせなくなかつた。

人間はこの姿を見ると、ひどく怖がるからだ。

「残念だ。君の記憶の中では、人の姿で在りたかつた」

酷く暗い声色で言った。

だが、アタランテにとつてどの姿の青年も、青年であることには変わりないと信じていた。恐ろしい怪物であっても、あの日あの時、自分に向けてくれた青年の笑みを思い出すことができたからだ。

だから「大丈夫だ」と青年を安心させるように声を掛けた。

青年は驚いたように表情を変えたが、すぐに微笑み、

「キミは優しい人間だね」

と、別れを惜しむように頭を撫でた。

そして、そのまま。

「これでキミは自由だ。縛り付けるものはない」

と地平線へ向けながら口にする。

それで青年の役割は終わり。

二人はもう会うこともない。

「…自由？」

聞き返した。「そうだ」と青年は答える。

誰も彼も、父ですらも、もう縛ることはできない。

「キミが西へ行くなら、僕は東へ。北へ行くなら南へ…ここに留ま

るといふなら、まあそれもキミの自由だろう。どちらにせよ、ここで  
お別れだだ」

「い、一緒に来ては、共に居てくれないのか？」  
首を傾げる。

「何故？」と疑問を投げた。

青年が少女にできることはもう無かった。

だから、震える声でそんな事を言われるなんて夢にも思わなかつ  
た。

アタランテは青年の赤い目を見て、口にする。

「私は、汝を——愛している、から」

狩人は青年に恋をしていた。

感覚が冷え切っていくのが分かる。

ありえないと、ありえるはずがないと。

無機質な声で答えた。

「——嘘だよ、それは」

「え……？」

怪物には少女の恋は理解できない。

だから、嘘だと断言する。

「いいかいキミ？人はね他者から『得をもらう』と好意を抱くんだ。僕  
は呪いに蝕まれるキミを助けた。死にかけていたキミにとつては、さ  
ぞ幸運だっただろう。それがキミの恋。わかりやすく言えば、雛鳥の  
刷り込みだ。全部演技だよ、優しさなどボクにはない」

笑って青年は答える。

人間が怪物に好意を抱くことなどないと。

「ボクはキミを自由にできればそれでいい。やりたいことをやっただ  
けだ。理解できたいかい、麗しのアタランテ？」

「違う……違う！」

少女は激しく首を振った。

「汝が嘘をついていたとしても、私のこの想いは嘘じゃない……！」

「嘘だよ」

「違う」

「嫌いにならなければ可笑的い」

「可笑しくなどない」

「ボクは人間が嫌いだ」

「私は汝のことが好きだ」

『っ——この姿を見てもか』

再び青年は怪物の姿へと変わった。

それは醜悪で、恐怖そのものだった。誰しもこの姿を見れば青年を恐れる。

少女はその姿を見て体を震わせた。

それでも、と。

「どんな姿でも、汝であることには変わりないよ」

目の端に涙を溜めながら少女は言った。

「私に初めて優しくしてくれたのは・・・汝だから」

他の誰でもない汝なんだ、と少女は言う。

『共にいたい』と。

無理な話だった。

怪物は人間と生きることができない。

だがしかし、少女が泣く姿は見たくない。

それだけは本当だった。

「この国の人間が汝を排するなら、共に逃げよう。共に人に扮して生きよう」

「一人にしないで」と少女は怪物に抱きついた。

そこで、怪物は気づいた。

自分は少女を自由にしたのではなく、居場所を奪ってしまったのだと。

少女の抱きしめる力が強まる。

この姿では、抱きしめ返すことも、引き剥がすこともできない。

それは諦めのようなものだったかもしれない。

怪物は青年の姿に擬態する。夜空のように暗い黒髪、その目は真紅に染まっている。

青年は自身の致命的失敗を悔やみながら、少女に語りかけた。

「・・・分かった。一緒に逃げよう。少し、人として生きてみよう」と青年は言ったが、これはアタランテと共に人として生きることを決めたからではない。

少女の居場所を探す旅に出るためであった。

「本当か・・・？」

「ああ」

「ああ・・・！好きだ・・・好きだメラニオス」

青年は何も返せなかった。

抱きしめ返すこともなかった。

それでも少女が笑ってくれるならと考え、月を見上げた。

今日は新月だった。

## 2004年『空腹』

懐かしい夢を見た気がした。

「——ん」

どうやら、ウトウトしている間に眠ってしまったようだ。  
怪物は炬燵の中で身を伸ばした。

睡眠など必要ないはずなのに最近ひどい眠気が襲いかかり、日に  
数時間は睡眠をとってしまふ。

あんな事があつたんだ。疲れているからに違いない。

再び目を閉じ、身体を縮める。

「(それにしても・・・うう)」

寒い。

可笑しいな、炬燵の電源はついているはずなのに。

季節は冬だ。

窓を開けていることなどあり得ないのだが。

「(ん・・・重・・・ツ?)」

なんだか身体も重い・・・重い？

というか！寒い！あまりにも寒い!!

「ん、もっさんむ!!」

怪物はむくりと身体を起こす。

その身体には何故か大量の衣服が乗せられており、それが重みと  
なっていたのだ。

なぜ？という疑問が浮かぶが、犯人は一人しかおるまい。

確か自分の胸に抱いて寝ていたのだが・・・と、布団をめくるが姿  
はない。

「立香・・・?」

周りを見渡す。居ない。

広い居間だと言えど子供一人の姿が見えないのは可笑的い。

ふと、先ほどからの寒気が気になった。この風はどこから来てるの  
かしら？

もしやと、窓を見る。

「……開いている。」

ピューッと風が吹き込みカーテンは揺れ、雪が降り積もる庭へと続く窓が開放されていた。

「(嘘でしょ……!?)」

血の気がみるみる引いていき、顔が真っ青になっていく。

頭の中で、考えうる最悪のパターンが次々に想起する。

まずい、まずい!、と怪物は慌てる。

とりあえず軽く服を着込んで、裸足のままでもいいからと庭へと飛び出そうとする。

「……お父さん! ゆき!」

飛び出そうとした瞬間、カーテンの後ろから立香は顔を出す。

自分で着たのかジャンパーを羽織り、その手には小さな雪玉が握られている。

「……はっ!」

いた? 雪? なんで? と、突然のこと故、しばし混乱していた怪物だが、ようやく理解したのだろう。

急いで娘に駆け寄る。

「うおお!? 外で遊んでたの?!」

「うん」

「冷たっ!!! ほら早くこれ着なさい!」

「んむ」

「もう……一人でお外に行ったらダメじゃない」

「行つてないもん! お家で遊んだもん!」

娘は庭を指差す。

見れば、窓から身を乗り出して手が届くギリギリの範囲だけ雪がなくなっていた。

「……屁理屈では?」

はあ、と安心からのため息を吐く。なんであれ、無事でよかった。冬空の下で迷子になられでもしたらと考えるだけでも心臓が痛い。

「お外で遊びたいなら、起こしてくれば良いのに」

「お父さんが寒いからヤダって」

「・・・そんなこと言ったかしら?」

「だから、暖めてあげたら起きてくれると思っただけ起きなかったもん」

「あー」

あの積み重ねられた衣服はそういうこと。

そういえば、何度か体を揺すられたような気がする。・・・寝ぼけてたか。

今度から気をつけないといけないわね。

「うーん、まあ・・・でも、寒かったでしょう?まずは暖まろう。ほら、ぎゅー」

「ぎゅー!」

「おー、よしよし」

立香を抱きしめ窓を閉める。

寒さで凍えた少女の身体をしつかりと温める。

「(んー、起き抜けのイベントは辛いなあ)」

小さい欠伸をしながら炬燵に体を入れる。

体の疲労というより、精神的な疲労の方が酷い。

心配事というのは尽きないものだ。

少女の身体を抱きしめながらそう考えた。

「ん」

「・・・立香?」

子供は聡いもので、何かを思いついたのか怪物の腕を解き立ち上がる。

そして、ゆらゆらと身体を揺らし始めた。

「あれ?キミは一体誰かな?」

それは親子のマイブームのようなものだ。

これは一体誰でしょう?という真似っこをする単純な遊び。

「ちんあなごお〜〜!」ゆらゆら

「ん〜〜可愛い!」

「んふ〜。お父さんもやって!」

「ん?よーし・・・チンアナゴお〜〜」ゆらあ



「むふ〜！」

二人で揺れながら笑い合う。

心配事はどこかへと吹っ飛んでいった。

「お父さん、元気になった？」

「ん〜、ありがとう・・・！おかげで元気満タンさ」

「ふひひっ」

そうだ。

この子の前では笑顔でいよう。

どうせ老い先短いのだ。せめていい親であり続けたい。

怪物はそう思った。

「おなか空いた」

すると「ぐう〜」と空腹を伝える音。

そういえばと、時計を見る。時刻は6時を少し過ぎたぐらい。

夕食にはいい時間だろう。

「ふふっ、じゃあご飯にしましょうか。今日の夜は何を食べたい？」

「ハンバーグ！チーズが乗ってるの！」

「おお贅沢だね。じゃあ、お手伝いしてくれるかな？」

「うん！」

「ありがとう。いい子だね立香は」

「んふ〜」

キッチンに向かい手を洗う。清潔は大事なのです。

調理器具を用意し、次は食材だ。

「合挽肉に卵。それと醤油に胡椒少々を入れてかき混ぜる」

「わたしが！わたし！」

「じゃあお願いね」

「だいたい粘り気が出るまでかき混ぜて、みじん切りにした玉ねぎを入れてさらにかき混ぜる。」

「ねちよねちよしてきた」

「よし。じゃあ形を作ろうか」

「おっきいの作る！」

「あんまり大きいと火が通りにくくなるから気をつけてね」

小判形にこねれたらフライパンに油を引き、ハンバーグを中火で焼き色がつくまで焼く。

だいたい色がついたらハンバーグを裏返し、今度は蓋をして弱火で3〜5分ほど加熱を続ける。

「この間に、ソースを作ろう」

水80gにトマトケチャップを多め。中濃ソースを適量入れて砂糖をちよびつと加えて混ぜ合わせる。

この間でハンバーグが焼き上がるはずなので一度ソースは置いておく。

ハンバーグに箸を刺して、透明な肉汁が出たら、一度皿に移す。

「うん、いい感じ」

「もうできました？」

「まだまだ。もうちよつとき」

肉汁の残ったフライパンにさっきのソースを入れて弱火で煮詰める。とろみが付いたらもう一度ハンバーグをフライパンに戻す。

「さあ、最後にチーズの出番だ」

「チーズ!!チーズ!」

チーズをハンバーグに乗せて、余熱でとろけたら完成。

「出来上がり」

「わあー!」

あとはお好きに野菜など盛り付けて、と。

飛び跳ねる少女を宥めながらテーブルに運ぶ。

「んふふ、いただきますー!」

「はい、召し上がれ」

パクパクと頬を膨らませながら立香は頬張る。

そんなにも急いでもハンバーグは逃げないだろうに。

そんな様子が微笑ましくて怪物は笑った。

「お父さんは食べないの?」モグモグ

「ん?・・・ああ、今はお腹空いてないの。それよりも立香が美味しそうに食べる姿見る方が好きなんだよ」

「ふーん」モグモグ

少女は父親が目の前で食事を摂る姿を見た事がなかった。大抵の場合「お腹が空いてない」「気分じゃない」など誤魔化されてしまう。冷蔵庫に大量に保管してある赤い液体を飲んでいるのをみたことはあるが「ただの薬だよ。でもアナタは飲んじやいけない。美味しくないからね」と一緒の食事をしたことはただのひとつもない。

父親は優しい。時には厳しい一面を見せるが、よく笑い、褒め、想ってくれた。

けれど、一緒にご飯を食べられないのが少し寂しかった。

「こら、そんなに急がないでも大丈夫だよ・・・もう、ふふっ」

まあそれはそうと、目の前のハンバーグに舌鼓を打つ。少女は父親の料理が好きだった。

「ごちそうさまー!」

「はい、お粗末様」

あっという間に全部食べてしまった。

それだけ美味しかった。

「ねえ!絵本読んで!」

「いいとも。洗い物しちゃうから少し待ってね」

怪物は自分の食事に何一つ手を付けないまま皿を片し始める。どうしても手をつける気は起きなかった。

そんなことよりも、かけらも残さず娘が食べてくれたことが嬉しい。鼻唄をしながら皿を洗っていく。

少女は、まだかなあまだかなあとクマのぬいぐるみと睨めっこしながら待つことにした。あの炎の中でも手放さなかったぬいぐるみは、今でも少女の一番のお気に入りだ。

「♪〜っと。終わったよ」

数分も経たないうちに怪物は洗い物を片付け少女の元に戻った。

「さて、どの絵本を読もうか?」

「うーんとね・・・あっ!あの絵本がいい。新しく買ったの!」

「・・・あー、あれね。2階の部屋だったかな。本棚に置いたような気がするなあ」

「わたし、とっってくる!」

そう言つて少女は階段を駆け上がった。いった。  
その様子を心配そうに怪物は見送る。

：：正直言つて、怪物はあの絵本を好ましく想つていなかった。娘がどうしても欲しいというので渋々購入した。

その絵本はなんの変哲もないただの絵本だ。よくある昔話を可愛らしいイラストで描いたもの。

それでも、怪物にとっては目を背けたくなる内容だった。

今の怪物にとっては身に覚えのない昔話だ。

何度も何度も繰り返し続けた怪物にとっては他人事のようなお話。

怪物が恋をしたお話。

あつたかどうか分からない過去のお話。

それがあの絵本の内容なのだから。

◇◇◇

少女は2階へ上がった。

2階には少女の部屋に父親の部屋。あとは父親が買ってくる本を並べた書庫に、たまに客人が泊まってくいくつかの客室がある。

少女は書庫に向かう。

「えーつと。えーつと・・・」

どこかな、と下から順に本を探す。

困ったことに、父親は整理が苦手だった。いや、苦手というよりも興味がないのだ。

辞書に、何かの教科書。「乳児の育て方」、「猿でもできるお料理教室」、「父親とは」、「一流シェフのレシピ大全」、「ギルガメッシュ叙事詩」などなど。分類なんてものはなく、読んだらもう用はないと言わんばかりの雑さ。実際のところ父親が本を見返したことはなかった。一度見ればそれで十分だったからだ。

「んー、あ。あつた!」

しかし、少女の絵本だけは別だった。

「人魚姫」、「眠れる森の美女」、「シンデレラ」、「ラプンツェル」などなど。丁寧に専用の本棚を作つてまで整理をしている。

それなりに数があるので、少女が探している絵本は棚の一番上に置かれていた。

「届かない……」

椅子を足場にしても少女の背では届かない。

でも、どうしても絵本を取りたい。仕方なしに仕切りに足をかけ登ろうとするが、

「うう……もう、ちよつと——あつ」

足を滑らせてしまう。

ふわりと浮く身体。きつと痛いに違いないと、目をギュツと瞑つた。

けれどいくら待っても痛みはやって来ない。

「……立香ー？高い所のモノを取る時は？」

少女を支える怪物の姿があった。

「あ……っ……お父さんにいつかい聞いてから……とる」

怒られてしまうと思い、しよんぼりしながら答えた。

「よしー」

じゃあ次は僕の忘れたらイヤだよ？……泣いちゃうんだから」

「……うんー」

その言葉が聞ければ良しと怪物はニツコリと笑う。

少女も絵本を受け取りながら笑った。

「……次に会うときは一万年分の恋をしましょう。怪物はそう言うて居なくなつてしまいましたとさ。……おしまい」

パタンと本を閉じる。

……特にコメントはない。

膝の上で少女は眠っている。……いったいどこまで聞けただろうか。

優しく抱き抱え、寝室へと連れていく。

「……おやすみ。また明日、元気な姿を見せてね」

額に口付けをして毛布をかける。

それにしても、いつの間にかこんなにも育ってしまった。もう少し

落ち着けば新しい幼稚園に入園させる予定だ。

あの冬木の事件さえなければ友達と一緒ににだったのに。可哀想なことをした。

娘の頭を優しく撫でる。

どうか、いい夢をと。

「ふわああ……」

さて、自分も眠るとするかとベットに入ったが

「グギルルウウ」とお腹がなった。

思えば、今日はまだ食事をしていない。気が進まないが仕方あるまいとキッチンへと向かった。

冷蔵庫のドアを開ける。

その奥の奥の方。娘の手が決して届かぬ所においてある赤い液体に満たされたバツクを取り出す。

「……」

それは食事というにはあまりに異質で、とても人間の食事と言えるモノではなかった。

それにストローを突き刺す。

「……不味い」

ただ補給するだけの単純作業。

それが怪物にとつての食事。

たった200mlの人間の血液を吸うことが怪物の食事だった。

血液バツクを一つ吸い上げても腹はなる。

日に日に量は増える。

一つ、二つ……いずれ押しさえが効かなくなるかもしれない。それはダメだ。まだ我慢できる。

ゆつくり時間をかけながら一つのバツクを吸う。

こうすれば幾分かマシに感じた。

ふと、今日の夕飯の残りを見つけた。

娘と一緒に作ったハンバーグだ。

「……」

ラップを外し、一掴み。

恐る恐る口に入れる。  
噛んでみる。

「うっぷっ」

吐き出しそうになる。

気持ち悪い。まるで糞を噛んでいる気分だ。溢れる肉汁は粘りつく糊のようで、チーズなど乳臭い粘土のような食感。

怪物にとって人の食事は拷問と変わらない。

「オオげほウ!!?うグツ・・・!!」

血液を口に含み、胃に無理やり流し込んだ。

人前で取り繕うことはできても飲み込むのは苦痛でしかない。ましてや人の食事をしたところで栄養にすら還元されない。本当に無駄な作業だ。

「ごめん、ごめんねっ・・・うう、おえっ」

それは誰に向けての謝罪か。

怪物は無理やり血液で流し込み続けた。ゆっくり、何時間もかけて。

冬木の聖杯戦争からはや数週間。

やかましく吠える遠坂凜と共に冬木を脱出（その後、大量の資金をもたせロンドンに放り出した）。

いくつもの県を跨ぎ、この新居に怪物と少女は暮らしていた。

幸せな時間はあっという間だ。

怪物に残された時間は三年もないが、それでも娘のために生き続ける。

これは、そんな親子の物語だ。

## 幕間 「」

【いかないで】

二人は歩く。

青年は俯きながら、少女は青年の表情を伺いながら。

少女は青年に話しかける。

「どこへ行くのさ？」と少女。それに、「……ここを進めば大きな国がある。そこへ行く」と青年はぶっきらぼうに答える。

メラニオスはアタランテに対して取り繕うことをしなくなった。会話を振られても以前のように楽しげ笑ったりすることがなくなつた。

良い方に捉えるのであれば、本音で話すようになったと言えるのかもしれない。

「……」

分かっている。きっと伝わってないのだろう。

「愛している」「愛してるんだ」嘘ではない。本当に、本心なんだ。

ああ、なぜだ。どうしてか、どうしてこんな簡単なことが伝わらないんだ。

「(それでも)」

怪物の味方が世界のどこにも居ないと言うのなら、せめて私だけは、とアタランテは青年の裾を掴みながら共に歩いた。

月明かりが二人を照らす。

既に日は暮れていた。

近くの森に開けた場所があつた。

そこに天幕を貼り、青年が焚き火を起こす。

青年は臆病になつた。

人の姿の間、怪物は本来の力を十パーセントも発揮できない。ともすると、共にいる少女よりもずっと弱い。

万一、何かに襲われたら、少女を守ることは難しいのだ。

それが、どうしようもなく怖かつた。

パチパチと炎が舞う。



「汝も、食べないか？」

少女は青年に焼いた肉を差し出した。しかし、青年は首を振る。「必要ない。さつき水と果実を食べた。」

元々、食事なんてものは僕には無駄なことなんだ」

空気と水さえあれば生きていける。それが怪物という存在。しかし、人の姿をとっている間はどうしても食事を必要とする。それも最低限のもので良い。ようは生命機能が維持できればそれで事足りる。

「でも、私は共に食べたいな」

「なんでさ」

「その、だ。一緒のことをしたいんだ。汝がしてくれたように」

『——よかつたら、一緒に食べませんか？』

キミのことともっと知りたいんだ』

「私も汝のことを知りたい」

「・・・必要ないよ。それに、キミに話したいとも思わない」

「むっ」

アタランテは不満げに口を尖らせた。

それは卑怯だと。

「私のことは聞いておいて、自分のことは隠すのか。随分と都合が良すぎるのではないか？」

「別に話さなくてもいいと、キミが言った」

「むう、何も全てを話せというわけではない。そうだな、例えば・・・アタランテは少し悩んで、

「私は肉が好きだ。鹿肉が好みだな。あとは果実、特に汝がくれた林檎だ。あれは・・・とても美味だった」

「はあ・・・？」

「狩りが好きだ。大物を仕留めた時など心が高鳴る。」

走るのも好きだな。あのような競争はもう御免だが、汝ともう一度勝負をしたい。そう思えるほど楽しかった」

「だから、何言って」

「ほら、次は汝の番だ」

そう言って、肉を青年に投げ渡す。

「食べながらで構わない。

まずは、うん、汝の好物を教えて欲しい」

「・・・好物」

まあそれぐらいなら、と青年は言った。

これ以上続けても埒があかないと諦めたのだ。

それに、

「ダメだろうか?」

そんな不安げな顔で見られたら、少し困る。

青年は少し表情を柔らかくし、口を開いた。

「キミは変だ。ボクを人のように扱う」

まるで・・・

『共に生き、共に語らい、共に戦う。それは人でも道具でもなく

ーーよいか、それは・・・』

懐かしい言葉が聞こえてきた。

「どうした?」

「いや、少し昔のことを思い出しただけさ」

不思議そうにコチラを見つめるアタランテに微笑んで、青年は話を  
じめた。

大切な思い出を思い出すことができた対価として。

「ーーボクは、そうだな・・・」

◇

思いのほか会話は弾んだ。

とはいえ、月は天井に上がり眠気も訪れてくる。

「ふわあ」

「もう眠ったほうがいい。明日もしばらく歩くからね」

「・・・そうさせて貰おう」

目を擦りながら、少女は天幕の中へと入っていく。

語り合った内容はよく覚えていない。最初は好物のことだったが、

そこからは思い浮かんだことを口に出していた気がする。存外悪い時間ではなかった。

口角が僅かに上がる。

青年は少女の愛を偽りだと謳い続けるだろう。

それでも、この時間は想い出にしたいと思った。

「……汝は眠らないのか？」

少女が天幕から顔を出して尋ねてくる。

青年は同じように首を振った。

「火の番をしなければならぬ。大丈夫、キミは安心して寝るといい。焚き火に薪を継ぎ足しながらそう言った。

実のところ、それは少女のためではなく自分を襲ってくる者に対しての警戒でもあった。

怖いのだ。

人間の姿は弱く、脆い。

ならば怪物の姿でいようか。それは嫌だ。

醜い姿を見られたくない。

嫌われたくなかった。

「むう……」

そんな青年の心中を知らず、アタランテは不満げに口を尖らせ、天幕からズルズルと這い出てくる。

毛布を持ち、青年の側に身を寄せる。

「ちよっと」

「では、私もここで眠るとしよう」

青年の肩に寄りかかりながらアタランテは毛布を被った。

そればかりか、青年の手を取り握る。

「ふふ。決して離してくれないなよ？」

「いや寝にくいだろう」

「いい。私はここがいいのだ」

「でも……」

「しつこい。いいから手を握ってくれ」

そう言っつて、思いつきり体を青年に預けた。

・・・ため息を吐く音が聞こえる。  
青年は押しに弱いようだ。

そつと、壊れ物に触れるように手を握られる。大丈夫だと示すように強く握り返した。

触れられるのは好きじゃない。

私は、そうされたことが無かったから。

奪うのではなく、ただ私に寄り添ってくれる手も

怖がりながらも、優しく触れてくれるこの手も

私は知らなかった。

それが、存外に心地良いことも

「・・・薪が切れた。拾いに行ってもいいかい？」

握られた手が離れようとする。

それを逃さないように、強く、強く握った。

「ダメだ」

「でも」

「・・・いいから、ここにいろ。」

手を・・・離さないで、くれ」

離してしまえば、汝はどこかへ逃げてしまう。

離してしまえば、汝は帰ってこない。

困った顔をした青年の姿が思い浮かぶ。

一人になりたくなかった。

アタランテにとって青年はただ側にいてくれるだけで、一緒に居れるだけで幸せだった。

そうして、夜が明ける。

焚き火の火は、とうの昔に消えていた。

## 2005年 『嘘つききの2月』

【嘘つききの2月】

お父さんは嘘つきです。

「いいかい、危ないことはしちやダメだ。自分のことを一番に考えるんだよ」

他の人よりも自分を大事に。

でも、

「危ねえ!!? 何考えてんだアンタ!」

「すみません!すみません!」

「気を付けやがれ馬鹿野郎!」

わたしが轢かれそうになった時お父さんは道路に飛び出しました。

「よかった、怪我はないね」

「ひっぐっ・・・おどうざん」

「前向いて歩かないとダメって言ったでしよう? もしかしたら死んでいたかもしれないの」

「うん」

「・・・命は大事にしなさい」

お父さんは自分よりも、わたしを大切にします。

お父さんは嘘つきで、優しい人です。

お父さんは今日も嘘つきです。

「すみません先生!遅くなっちゃって」

「いいいえ、お母さんも大変でしようから。」

「あはは・・・そう言って頂けると助かります」

「立香ちゃん!お母さんお迎えに来たよー」

お父さんなのに、外の時は嘘をついてお母さんになります。 “そっちの方が都合が良いんだ” って言っていました。お化粧もしてオシャレもして、とても美人さん。(家に帰ったらすぐに戻っちゃうけど。)

でも今日はしてません。また眠ってたんだ。

「ふんっ」

「その、ちよっと機嫌が悪いみたいでして。ほら、立香ちゃんお母さん

きたよ?」

「プイツ」

嘘つき。嘘つき。

スタスタと門へと歩きます。

「ちよつと立香!

すいません先生、また明日もお願いします」

「そんな、こちらこそ。ささつ、早く行ってあげてください」

お父さんはすぐに追いかけてきます。

でも、わたしは止まらない。

約束を破ったのはお父さんだもん。

「立香、手を繋がないと危ないよ」

「ふんっ」

前をちやんとみてるから大丈夫だもん。

「幼稚園で何かあった? 困ったことがあったらボクに話してね」

「・・・違うもん」

少女は頬を膨らます。

父親が自分のことを分かってくれないのがどうしようもなく煩わ

しい。

あいも変わらず、首を傾げる父親。

ボソボソと少女は話し始めた。

「今日は・・・早くお迎え来てくれるって。遅くならないって、朝言っ

たもん」

「・・・ごめんね」

「いちばん最後だった」

「・・・そっか」

「さびしかったあ」

「・・・ごめん」

お父さんは「ごめん」と何度も謝ってわたしを抱き上げた。

しばらくの間、だっこされる。

その間もお父さんはごめんって言い続ける。

・・・ただ、約束を守ってほしいだけなのに。

「そうだ、と声を上げた。

「お菓子を買って帰ろう。今日のお詫びになんでも好きなもの買って良いから」

「ほんとう?」

「ええ、好きなもの持って来なさい」

「わかった!」

父親は目に着いたスーパーに入る。

物で釣るようで悪いが、自分には謝ることしかできないためそういった手段を取ることしかできなかつた。

少女を下ろす。

一直線にお菓子コーナーへと走り出していった。

「走ると危ないよ」と後ろから声がする。既に視界から少女の姿はなく聞こえていたのかも怪しい。

機嫌が治ってくれてよかった。

「さて、今日は何を作ろうか」

「ついで、というかこちらが目的なのだが。」

最近好き嫌いも増えてきて中々苦労する。この前はピーマンが苦手だと言うから細かく刻んでハンバーグに混ぜたが、見破られてしまった。器用にピーマンだけ吐き出したのには驚いた。・・・そんな美味しくないのだろうか? 食したことがないのではつきりした味は知らないのだが、子供のうちから好き嫌いが多いのは後々困るだろう。

今日こそはと意気込みピーマンをカゴに入れる。あとは、

「あつ、白菜安くなってる」

まだまだ冬だなあ、としみじみ思う。最近は特に寒いしまだまだ炬燵も手放せない。人型でなければ冬眠をしたい、まああの子を放って置くわけにはいかないのだけけれど。

しかし、白菜を見て冬を感じるなどなんだか不思議な気分。思考が肉体に寄っているのだろうか。

今日は鍋でもいいかなと、顎に手をやりながら考える。

「お父さん、これ!」

「ん、おお」

持ってきたのはBIGサイズのスナック菓子。確かに好きなものを持ってきていいと言ったが、食べ切れるのだろうか。

「これ、お父さんと一緒に食べるの！」

「あ、ああ。そういうこと」

「えへへ。一緒に食べようね！」

・・・最近では食べる練習もしている。以前のようにとまではいかないが、だいぶ自然に出来るように改善出来たはずだ。

だから、立香の善意を無碍にしなくて済む。

「ええ、勿論。キミは優しいね」

頭を撫でてやる。

嬉しそうに笑った。

「今日は鍋にしようか」

「鍋・・・ピーマン入れない？」

「さて、どうかしら？」

「えー!!」

なんで意地悪するのぉ」

「好き嫌いしないの。ちやあんと食べないと大きくなれないらしいぜ？」

「むう・・・じゃあ食べる」

「いい子だ」

お菓子と野菜やその他必要な物を会計し店を後にする。

荷物を片手に持ち、もう片方で立香の手を握って歩く。

日は沈みかけ、辺りは夕焼けに染まっていた。こんな日は夕焼け小焼けと歌いたくなる。

仕事も学校も終わり、そろそろ人混みも増えてきた。

この街は活気に満ちている。はしゃぎながら帰る子供、家族にお土産を選ぶ父親、本屋で立ち読みをする客がいて、夜間営業の店も準備を始めている。

意外とこんな風景が好きだった。



「———すみません、そこの方。ちょっと宜しいですか？」  
すれ違った青髪の少女に声をかけられる。

・・・知っているニオイだ。  
振り返る。

東洋人の顔立ちではない。旅行者だろうか。

見た目は高校生ぐらい？・・・しかし、何処かで会ったようなそんな気がする。気のせいかな？

「ええ、何か？」

「実は、このお店に行きたいのですが、道がわからなくなっちゃってしまいました」

「どれどれ」

少女がチラシを見せてくる。

それは巷で話題の本格カレー屋。確かTVでも紹介されていた。

どうやら本場インドからの出店のようで、雰囲気、質、味も絶賛されていた。

「そこを進んで、突き当たりで右に曲がって駅前あたりだったかしら。この時間だと少し混んでいるかも」

「なるほどなるほど。ご親切にありがとうございます♪」

感謝されるほどではないと、会話も控えめに終わらす。

大丈夫。

ボロは出さない。

どうしてここに代行者がいるのかは分からないが穩便に済ませればいい。

「お姉ちゃん、カレー好きなの？」

「はい、当然です！」

「可愛いお嬢さんですね、お子さんですか？」

「・・・ええ」

一瞬だけ、蛇に睨まれたような悪寒がした。  
弱ったな。

獲物になる気分なんて久しぶりだ。

「あのね、おと、じゃなくて、お母さんが作るカレーも美味しいよー！」

「立香」

「そうなんですか？ふむ、それは興味深いですね。

いわゆる家庭の味という物でしょうか。是非とも私も食べてみたいです」

「むふー。」

でもね、今日は鍋の日なんだ。だからカレーの日にお姉ちゃんおいでよー。」

「立香。お姉ちゃん困ってるから」

「いえいえ、そんなことありません

ところで・・・貴方が作るのは日本式でしょうか？それともインド式でしょうか？」

「・・・は？」

なに、急に？

「いえ、ですから貴方が作るのはどちらのカレーですか、と私は聞いているのです」

「え、えつと。日本式かな、多分？」

「ふむ、何故です？」

「なぜと言われても。ルーを入れれば簡単にできるし。ほら、インドとかの本格な奴はスパイスから作るでしょう？そういうの中々難しくて」

「成程」

「あー、何か気に障ったかしら？」

「いえいえいえいえ、そんな事はありません。

しかしながら、本場のカレーを味わっていないのは勿体無いと思うのです」

「あはは。知りたくても知れないなあ、残念だけど。

じゃあ、ボクらはこの辺で」

「待ってください。」

いいですか、カレーというのは時間をかけて作る芸術品です。いえ、別にルーで作るカレーを卑下しているわけでは断じてありません。日本のカレーはインドなど海外の物とは違い、独特の味わいが

あつて非常に美味しい！それぞれには良さがあるのです」

「そつかあ、そうなんだ」

「そもそもカレーというのは・・・」

ヤバイ。

この子、目が本気だ。

少女のカレーへの愛は止まることをしらない。こういうタイプに話題を振ってはダメなんだ。

似たような同胞を知ってる。ソイツは全ての血をカレー味にしようと躍起しているイカれた奴だったが、多分この子はそれと同類だ。カレーに、自分の全てを捧げている。

「——というわけです。お分かりですね！」

「ええ十分わかった。カレーって辛いよね」

30分間綿密に講義された。

立香に至ってはぐっすりと腕の中で眠っている。

「そろそろ行った方がいいんじゃないかなー。もういい時間だ」

「はっ、いけません。わたしのオアシスが!!」

駆け出していく青髪の少女。

ホッ、と息を吐く。頼むから、この子がいる間は会いたくないものだ。

けど、疑問が残る。

友人の匂いがする彼女に声をかける。

「ねえ、どこかで、その、面識があったかな？」

なんだか、懐かしい気がして」

少女は振り返らず、無機質な声で

「いえ。他人の空似でしょう・・・お互い」

「幸せ」なんて、あつという間に崩れ去る。

## 幕間「悪役」

二人は旅を続け、大きな国『デルフォイ』についた。なにやら祭り事を行なっているようで、すれ違う大人も、子も、女も男も一様に浮かれていた。皆、国の中心地へと向かっている。

青年は少女の腕を引いた。

「離れないように」

もし、自分の正体がバレたら青年は殺されるだろう。

それでも、この国には彼女の居場所があるかもしれない。だから、危険を冒してでも進む。

万一、襲われるようなことでもあれば身を挺して少女を守るつもりだった。

この国の中心地には都はある。青年たちはそこを目指した。

景色は街道を進むにつれ、田園風景から、徐々に発展した都市へと変化していく。

その間も青年は少女の手を引いていた。

少女の頬は赤い。しかし、それは恥ずかしさからくるものではなく、また別の紅潮だった。

少女は腕だけでなく、身体も青年に寄せた。

きつと、少女にとっての幸福はそれだけでよかったのだ。

ここ『デルフォイ』の大通り、この国が祀る神の名が彫られたアーチをくぐり、都に入ろうかというところで青年は足を止めた。

青年はアタランテの目をまっすぐに見つめて言う。

「どうか楽しむといい。この国はきつと・・・良いとこだ。キミが居たいと思えるかもしれない」

懇願だったかもしれない。

「ボクはキミに幸せになつて欲しい。ここにその場所があるかもしれない。どうか、よく周りを見てほしい」

少女は深く考えず頷いた。

その頷きに、嘘が混じっていた事を青年は気づかなかつた。

というのも、アタランテは既に幸福をみつけ、居場所もあつたのだ。

青年と共に旅するだけで楽しかった。たわいのない会話を繰り返して、手を引かれて歩いているだけで幸せだった。胸が高鳴った。もう一度、手を取って、今度は青年から身体を引き寄せてくれたらどんなに幸せか。

だから、「もう楽しい」と「もう十分に幸せ」だと伝えることはしなかった。口にすればそれで青年は満足し、全部おしまいになってしまふかと危惧したのだ。

少女はまだ、青年と居たかった。

都というだけあつて活気に溢れていた。

だが、それだけだった。

少女が楽しいと思えるものなど、なに一つなかった。

どこを見ても「怪物殺し」ばかり。そこらかしこに溢れていた。

詩人がいた。英雄が怪物を打ち倒す唄を紡いでいた。終われば拍手喝采の雨。高らかに紡いでいた、英雄の誉と醜い怪物の無様を。

広場には石像があった。怪物の胸に剣を突き立てる英雄の像。広場を駆け回る子どもたちが、怪物殺しごっこをして楽しんでいた。英雄の役は人気で、取り合いになっている。結局、見窄らしい服を着た子供が怪物役を押し付けられていた。

この国では英雄を讃える祭り事が盛んに行われていた。

「楽しそうだね」

どこが

「みんな笑ってる」

質の悪い冗談だと思った。

そうにしか思えなかった。

「ねえ、キミもそう思うだろう?」

なのに、青年は笑っていた。

アタランテは限界だった。

青年が「幸せがある」、「楽しみがある」と言ったこの国はアタランテにとって、

悪夢でしかなかった。

もう十分だった。

青年はまだ見るところはあると言っていたが、もう限界だった。なにより、この光景を見ても平然と笑っている青年に我慢ならなかった。

少女は青年の腕を引き、国の外へ向かった。

国を出た時、アタランテは青年に言った。

「何も、感じないのか？」

「なにが？」

「汝が汚されている。それが賛美されている。何も感じないのか？」

青年は不思議そうに首を傾げている。

「別に。当然のことだと思うけど」

「・・・何が」

「人間は正義だ。そしてボクは「悪」。そういう風に古来からしてきた。」

だから障害である「悪」を乗り越えた英雄は賛美され、人間はこうして祭り事や御伽話として語り継いでいく。そうやって繁榮していく」

自分は人類のための「足場」なのだと青年は言った。障害である自分を乗り越えて、人間は繁榮を証明する。「悪」に負けるほど自分達は弱くはないと。

故に人間を恨むことはないし、自身を迫害する神々を呪ったりはしない。

それは彼らの当然の権利であり、永遠に繰り返すのだと。

「だが、これは・・・納得がいかない。汝はわたしを救ってくれた。謳われるような残虐非道な行いばかりをしているわけではないのだから？」

どうして・・・どうして！ 全部諦めたようなことを言うんだ！」

怒ってもいいと、悲しんでもいいとアタランテは言った。

青年の優しさを少女は知っている。

だから、この現状に我慢がならなかった。

青年は後にしてしまった国を見て言った。

「人間の親を、子を、仲間をボクは殺したよ、挑まれたからね。」

人間に乗り越える権利があるなら、ボクにも「報復」の権利がある。それがボクの役割だ」

だから仕方ない。

どうあっても、人間にはなれない。

「・・・汝が死んでも、誰も悲しまないのだぞ」

「悲しむ必要など皆無だ。ボクが死んだことはキミたちにとって喜ばしいことだろうか？」

キミたちの文明は強いということの証明なんだから」

青年は怪物で。少女は人間だった。

——どうして分からないのだろう

二人は絶望的にすれ違い、同じ想いを抱いていた。

「・・・ここは嫌だ。早く離れたい」

ここでは幸せになれないと、アタランテは言った。少なくとも青年はそう解釈した。

二人はまた歩き始めた。

アタランテは青年の腕に身を寄せる。

それだけで良いと、青年に示すように。

——好きだから、生きて欲しい。

わたしだけは彼の味方でいよう。

2006年 三月『青』

【子】

「嫌いだよ」

「なっ」

めんどくさそうに手をひらひらさせ、青年は答える。

二人はいくつもの国を訪れ、しかし居場所が見つかることはなく、旅を続けていた。

そんなある日のこと、野盗に襲われている親子に出会った。青年は関わらないようにしようと考えたが、アタランテは止める間も無く飛び出して行った。どうして子どもになると盲目になるのか、野盗の首を刎ねながら青年は不思議に思った。

襲われていたのは母親と生まれて間もない赤子。母親はアタランテと青年に感謝と共に頭を下げてくる。お礼と言ってはなんだが、母親から赤子を抱かせて貰うことにしたが、しきりに青年がそれを拒むので、『子供が嫌いなのか?』と恐る恐る問うたことから話は始まる。どうしてだ、とアタランテが聞く。

嫌そうに赤子を見ながら

「だって、すぐ喚くし、軟弱で、乳臭い」

とボソボソと溢した。

「乳臭いとは失礼な。」

いいか? 乳の匂いというのはそれだけ母親から愛情を受けている証拠だ。

子は愛がないと育たないのだから」

ぐずる赤子をあやししながらアタランテは優しく言った。

青年はそれを聞いても、「ふーん」と興味なさそうにそっぽを向く。仕方ないなど、半ば無理矢理に青年に赤子を抱かす。

「こら、嫌だって」

「しっかり首を支えて、ほら抱いてやらねば泣いてしまう」

「・・・っ」

驚いたことに、青年は中々手慣れていた。



赤子は泣き喚くどころか、不思議そうに青年を見上げ手を伸ばしている。安心しきっていた。

「なんだ、随分と様になっているのだな」

「・・・伊達に長生きしてないさ。知識ぐらいはある」

「なのが好きではないと」

「・・・はあ、なぜそこまで子に拘る？訳がわからない」

青年はアタランテの願いを知らない。出生も知らない。彼女が何を望んでいるのか知らない。

「そ、それは・・・その、将来的には二人ぐらいは・・・」ゴニヨゴニヨ「？」

変な子だなと思いつつながら、大人しくなった赤子を見る。

赤子はすやすやと腕の中で眠り始めている。

少しでも力を込めれば、この赤子はどうなるの？

(・・・ここで殺してやるべきか)

ふと、そんな事を思った。

世界は幸福であり、不幸で満ちている。

どうせ苦しむのだから幸せな内に殺してやるべきではないか。

(こんなにも簡単に殺せるのに・・・こんなにも柔らかいこの子は生きていけるのだろうか)

弱い命は怖い。触れ方も分からない。一刻も早く手放したい。

何故だか胸が苦しい。

奪うだけの生き方しかできない怪物は人の温かみを恐れた。

「——と・に・か・く！ 汝には子を好きになって貰わねばならぬいのだからな」

「・・・いみふー」

ため息を吐く。

いつのまにか、主導を握られてる気がする。

まあ、不快では、ない。

青年はアタランテの願いを知らない。出生も知らない。彼女が何を望んでいるのか知らない。

青年が彼女の青い夢を知るのもう少し後のことだった。

【青】

今日は雲ひとつない快晴。

空には真つ青な青空が広がる。

少女は父親を待ちながら、誰もいない草むらの海の中にいた。

「君、そんなところでしゃがんでいると危ないわよ」

後ろから、女の人の声がした。

綺麗な赤色の髪だった。

「？」

「もう、ただでさえちっこいんだからこんな草むらの中で遊んでると見えないのよね。気をつけなさい。あやうく蹴り飛ばされるところだったんだから」

不機嫌そうに女の人は少女を指差した。

横暴だと、少女はちよつとだけムツとした。

「おばちゃん、誰？」

「・・・あはは、お父さんいる？これは再教育が必要だわ。やっぱりあれね、暴力は言葉に勝るってやつね。つといけないいけない。

おっほん、いい、お嬢さん？私の事はお姉さんって呼んでね。い・

い・わ・ね？」

青筋を立てながら女の人は腕を組んでいる。

怒ってる。

渋々従うことにした。

「・・・お姉さんはお父さんの知り合い？」

「ええそうよ。知り合い・・・て言うか保護観察員？まつ、なんだっていいわ。君がああ怪物の娘ってわけだ。

「お父さんはそんな名前じゃないもん」

「ふふ、そうね。失礼でした」

まるでずつと知り合いだった友達のような気軽さで、女の人は手を差し伸べてきた。

「まつ、ここで会ったのも何かの縁ってね。私の名前はさつき名乗っ

たわ。じゃあ、次は君の名前を教えて欲しいな」  
断る理由もなかったから、

「ふじまるりつか」

と自分の名前を言って、青子さんの冷たい手のひらを握り返した。

一方その頃、父親はというと。

「ふうー。卵1パック98円、無事ゲット！」

ふふふ、主婦たちにはまだまだ負けないとも」

戦利品とも言える、おひとり様1パックまでのセール品を高らかに手にしていた。

特売セール。それは世の主婦たちにとっての戦場。蹴落とし、髪を引つ張り、怒声をあげるなんて生優しい。話し合いなんて物騒な、ここは平和的に暴力で。それが特売セールの日常だ。

「くっ、腕を痛めたか・・・佐藤さんのパンチは効いたなあ」

欲に満ちた人間ほど恐ろしいものはない。

そも今の怪物は貧弱だ。主婦（と書いて友）と争いにより強烈な一撃を貰った。まだまだ新参者の怪物に主婦たちは容赦しない。それでも勝ち取ることができたので良しとする。だが、次はこうもいかましい。戦略を立てねば。

それはそうとして、早く戻らなければ。

せつせと荷物を持ち、待ち合わせ場所へと向かう。娘を一人つきりで待たせているので少し心配だ。あの子を戦いに連れて行くわけにはいかないのだから。

「本当に！本当に魔法使いさんっているの!?!」

「ええ、いるわよ。意外と身近にね」

「すごいすごい！じゃあお姉ちゃんはあったことあるの?」

「もちろん、あるに決まってるじゃない」

「じゃあじゃあ、箒で空を飛んできるとこ見たことあるの?」

「あく、意外と難しいのよアレ。浮くくらいなら頑張ればできると思うけど、飛ぶのはコツがいるのよね」

「えー。じゃあ杖で魔法を使ったりは?」

「あつ、それは使う人もいるわね。あくまで増幅装置としてだけど」  
「ゾウフク？ よく分かんない」

娘は何やら見覚えがある人物と楽しんでいた。

赤い髪の破壊者。

最新の魔法使い。

今代の怪物にとつての一番のトラウマ。

「げっ」

「あら？ やつと戻ってきたのね」

ミス・ブルーと名高き魔法使い。蒼崎青子、その人が居た。

どさつと落とす荷物。

卵が割れた音がした。

「アオザキ・・・さん。何でここに」

「ハイ、久しぶりく人喰い怪物さん。いきなりで悪いけど、路銀が尽きちゃったからお金貸してくれない？」

青空広がる昼下がり。

怪物の日常が崩れていく。あと卵も。

◇◇◇

「ジャジャーン！ どう？ 世界各国のお菓子。いやー子供がいるって聞いてたから随分奮発しちゃったのよ。そのおかげで懐が寂しいのなんのって」

「はあ」

「うわー！ 凄い凄い！ これ食べてもいいの?!」

「もちろん。そのために買ってきたんですから」

「やった！」

アオザキは旅慣れた服装だった。

簡素なシャツとくたびれたジーンズ。無造作に背中に下された長い赤髪。

女らしさを引き出させる化粧はなし、飾り立てる洒落っ気すらない。

にも関わらず、この上ない魅力を醸し出すのは、身に纏った清涼感と美しいプロポーションあつてのものだろう。

庶民気分を味わうお姫様。

はじめて彼女を見た時、怪物はそんな印象を抱いたものだ。

「こら、ご飯前に食べすぎちゃダメだ。つまむだけにしときなさい」「わかった！どれにしようかな」

「なんだ、案外まともに親をやってるじゃない」

「・・・案外は余計だろう。ったく、なんだって急に来るんだキミは。アポを取るぐらいできるだろう。姉の方を見習ったらどうだ」

「なによその言い方。心外なんですけど」

アオザキは拗ねるように口を尖らせた。

こう見れば可愛げがある。が、騙されてはいけない。見た目が二十代前半ぐらいだろうと、実年齢はそろそろ三十路。まあ怪物が言えることではないが。

「しかし、なんだってここに？ しばらくはキミの言う通り大人しくしてたつもりだけど。ああ、路銀が尽きたのは信じよう。キミたち姉妹は使い方が荒いからね」

「お金の無心はついでよついで。日本に立ち寄る用があつたから顔ぐらい見とこうと思つてね」

「じゃあもういいでしょう？ ただでさえ、時間は限られてるんだ。さあ帰った帰った」

「いいの？ せっかく手土産も持ってきたのに」

そう言つて旅行鞆からワインボトルを取り出す。

「オールドヴィンテージ。これが一番値が張つたのよ。ああ、心配しないで。ちゃんと寝かせてある。味わい方ぐらいなら聞いたことあるし。」

「どう？ 貴方、お酒なら飲めるんでしょ？」

「・・・それあら、まあ。」

好意を受け取らないのは、失礼だもんね」

少し頬を緩ませながらボトルを受け取る

「それにしても、美味しいのかしらね。ワインつて余り飲まないから、

店主が一番いいのでって適当に貰っちゃった。

古いのは熟成されてて美味しいって聞くけど本当？」

「いや、一概にそうとは言えない。古ければ美味しいなんて事はないさ。例えば、82、90、00年。ボルドーのものならこの年が当たり年だ。熟成が進むほどブドウの個性が様々に変化する。味わいが繊細で複雑に、その違いを楽しむのがいいのさ。そしてこのボトルは当たりの82年物だ。いい目利きをしてる」

ボトルが滑らないよう、タオルで固定しそつとコルクを抜く。

グラスにゆっくり注ぐ。

繊細で慎重に。しばらく放置して、二人分持っていく。

「どもー」

うん、いけるわね、これ」

「そつ、それはよかった」

怪物はすぐさま口をつけることはなく、ワインに赤い液体を注ぐ。

「・・・調子はどう？」

「見ればわかるだろう、お陰様で最悪だ」

ワインはさらに赤みを増した。

「我慢できてるようで何より。まっ、時間の問題でしょうけど」

「だろうね。日に日に量が増えてる。ああ、こんなにも時間が過ぎるのが怖いなんて」

怪物はグラスに口をつける。

理由はわからないが、酒だけは人間のように味わうことができた。

それだけが怪物が人間と共有できる唯一のものだ。

「皮肉なことに、辛い分だけこの子と一緒に生きれる。」

この子のためにも、もう少しだけ生きなきゃならん」

「随分と親らしくなったのね。貴方、そんな風に笑わなかったでしょう」

アオザキは悪戯に笑った。

怪物は顔に手を当てる。辛い、苦しいと言いながらも口角は上がっていた。

「・・・まあ、ボクも日々努力してる。今風に言うなら、アップデート

してるのさ」

「相変わらず、自分を機械であるかのように言うのね」  
なにを今更と笑う。

結局は全部偽物であることには変わりない。ただ、そうあれと振る舞ってるに過ぎない。それを悲しいと想う事も偽物なのだ。

「馬鹿ね。本当に偽物なら、そんな風に笑えないわよ」

その言葉が聞こえたのかは分からない。

アオザキの姿がぶれた。ああ、まただ。

瞼が重くなる。

また眠気が襲ってくる。

「ん……」

「少し休んでなさいな。気を張り過ぎよ」

「あの子、ほっとくわけには」

「大丈夫、大丈夫。わたしが見とくから安心しなさい」

「……不安だ」

それでも、瞼を下す重力には勝てない。

深く、深く、眠りについていく。

「(人喰いの怪物かあ……)」

懐かしい呼び名を反芻しながら。

次回 1993年【徒に死を運ぶもの】

## 19??年【徒に死を運ぶもの】

### IXインタビュー

被質問者：聖堂教会所属代行者ダルコパナス、以降、〃代行者〃と表記。

質問者；ノエル・クリス、以降、〃質問者〃と表記。

序：このインタビューは19?―?―?において調査中のIX階梯が引き起こした事件後に行われました。代行者ダルコパナスはIX階梯の調査任務における唯一の生存者でした。以下は、調査失敗後に行われた状況報告の写しです。

〈記録開始〉

では、始めましょう。まずあなたの名前と所属部門を述べてください。

代行者ダルコパナス。西方部門所属。

ありがとうございます。それではあなた方が失敗した任務について、覚えてることを話すことができますか？

俺は、悪くない。俺のせいじゃ・・・

「不適切な表現」

・・・申し訳ありませんでした。どこから始めれば？

最初からお願いします。あなた方の行動はいかんせん不透明な部分が多い。命令を受けた時、どこにいましたか？

「削除済み」

なるほど。では、現場に到着した時何が起こっていましたか？

何の問題もありませんでした。俺達は現場に到着し、???へ向かいました。蘇生したっていうアレを確認するために。封印係の俺の他に「代行者1」と「代行者2」はそれぞれ記録と戦闘。俺達がその時わかっていたのは被害者の数と目撃者の証言からアレが獣の姿をとつてることだけです。

目撃者がいたんですか？

ええ。と言ってもガキばつかです。周囲に小さな村があつたんですが、そこにはガキと妊婦しか残ってなかったんです。ひどく錯乱し



てました。食い散らかされたんですよアレに。でも話を聞くとどうも可笑しかった。皆んな見たものが違うんです。一人のガキはソレを蛇だつて言った。もう一人は狼だと、獅子だと、あまつさえ竜だと言い出すやつも。でも一番多かったのが「削除済み」だった。童話に出てくる「削除済み」です。今思えば、あそこに問題の始まりがあったんだと思う。

説明してもらえますか？

「代行者1」と「代行者2」は二人とも???? 人だったけど俺は??人だったんです。俺たち両方の文化にアレが出てくる話があるが、????って土地の民話には違いがあった。これが問題でした。彼らの話は口マンチックな傾向があった。探せばあの怪物が人間と恋に落ちる話やその逆の話も大量に見つけられるはずですよ。クソ、あいつらはあの怪物を嫁にするって冗談さえ言ってたんだ。確か??にはアレが美しい姫に化けた御伽噺もあった。俺の母親はそんな話をしなかった。あいつはヒステリックな糞婆で俺を殴るのが大好きな「不適切な表現」だった。

「以下省略」

俺達は滝の下で女の子が座って髪を梳かしているのを見つけました。裸ってわけじゃなかった。あの女は薄いマントを羽織っていた。美しい女だった。まるで絵画の中から出て来たような。でも、脚を見てソレがアレだと分かった。あの女は脚を隠そうとしたが遅かった。まだ、擬態途中だったんだ。「代行者1」と「代行者2」はそれを見て笑ってた。今回の怪物はとんだ間抜けモンだつて。俺だつて俺達が彼女に太刀打ちできると思ってた。ああ、主よ、俺達はとんだ間抜け者だった。

詳しく説明を。

あの女は、俺達が自分より劣っていることを知っていた。俺達が自分のことを知ってることを知っていた。あの女は・・・怪物は、そう、蜘蛛みたいだった。アイツは俺達を網へと引き摺り込んだんです。俺達が独りよがりで自信過剰な連中だと知っていたから警戒を緩める振りをしたんだ。俺は何か・・・何をだかわからないがとにかく試

してみるべきだった。何かするべきだったんだ。

・・・一旦休憩を入れましょうか？

いえ、いえ・・・問題ありません。続けます。あの女は俺達に近くに自分の小屋があると云った。俺達に飯を出し、他の人に紹介したいと言いました。なんで俺は・・・主よ、なんで俺はそんな提案に乗ったのか。「代行者1」と「代行者2」は彼女に着いていくべきだと言った。「他の人」も一緒にいるのはいいチャンスだと考えたんだ。他の村人はそこに居るんだって。どうしてそんな馬鹿げたことを思ったのかは分かりません。そんなはずなのに、あの惨状を俺達は確かに見ていたはずなのに。アイツは嘘をついていた。そこには誰も居なかった。だがアイツは俺達がこのチャンスを見逃すはずないとわかっていた。

あの女は俺達を近くの小屋へと連れていった。本当に小さな小屋だったなあ。貴方も見たでしょう？古くて素朴だった。でも、温かみがあつて家庭的だった・・・。俺達を招き入れると夕食を出してくれた。アイツ、完璧だったんです。「代行者1」がなんて言ったか知ってますか???ですよ。控えめで親切で甘く丁寧でこちらを立ててくれる献身的な完璧な妻。俺だって一瞬魅了されちゃった。そして夕食が出された。そうだ、思いだした。パンと、暖かなスープ、あとは・・・何かの肉だった。多分牛肉か豚肉だと思つてました。何にしてもそれは美味かった。・・・美味かったんです。

疲れていたし眠かつたから俺達は寝た。安心しきっちゃつた。ふと目が覚めた。「代行者1」がそこにいないのに気づいた。きつと小便にでも行つたんだと思つて探しに行つた。茂みの後ろに行つてみたらあの女が・・・。「代行者1」と一緒に居た。服もはだけていた。「代行者1」が無理矢理引つ張つてきたようだった。だから、つまり・・・アイツらは・・・  
続けて。

・・・俺がこの記憶を消してくれって頼んでも大丈夫でしょうか？、その、これは酷く、頭に残つて・・・  
もし、アンタが望むならツテを紹介する。

それで、その後何を見たんです？

あの女は・・・??はそれを食いちぎった。  
もつと詳しく。

?? はそれを全部食いちぎった。そしてそいつを吐き出し、彼に何が起こったのか見せつけやがった。彼は最初何が起きたのか信じられなかったようだった。それから叫ぼうとした。だが、あの?? は彼の喉を自分の牙で噛み裂いた。それから腕を剣みたいに尖らせると彼の腹に突き刺した。「代行者1」はゴポゴポ言っつて血を吐き出していた。でもまだ生きていた。?? を突き飛ばそうとした。だが、アイツはただ指で押しただけで「代行者1」を地面へと倒すと、指を彼の腹へと突っ込んだ。そして腹の奥深くにまで指を入れると、何かを掻き出した。それは、彼の・・・肝臓だったと思います。何でわかったかって？だって、そう、なんていうか正しい色と形をしていたんです。まるで魚のワタを抜くみたいにそれを掻き出して、それを怪物は丸呑みした。  
丸ごと？

ええ、まるで蛇みたいに一瞬だった。それから果実か何かを剥くみたいに彼の皮を剥がし始めた。俺は、とてもそこに居ることができなくなつた。立ち止まるなんて冗談じゃない。部屋へと駆け戻つて「代行者2」を揺り起こすと銃を掴んで今すぐ出ると言った。だが彼はそうしなかった。俺は武器を取りに行き、45口径とあの銃弾を手にとつた。アイツが300年前それで殺せたって聞いていたから。

そこへ「代行者1」が入つてきて、何が起きたのかと呑気に尋ねてきやがった。だから俺は撃つた。

「代行者1」を撃つた？

俺は彼が死んだの見たんです！あいつは殺された！あの「削除済み」に殺されたんだ!!だからあの「削除済み」に間違いなかつたんですよ！

いいか??? はあいつの内臓を引き摺り出して食つたんだ！あいつは死んだ！そしてアレの目は赤く輝いていた！人間の目が赤く光るわけあるかよお!?

落ち着け。分かったから、ゆつくり続けてくれ。

「代行者2」は自分の銃を掴むと俺へ向けました。「代行者2」は今すぐ銃を降ろせと怒鳴り始めた。俺は彼によく見ると怒鳴り返した。だが「代行者2」は、俺が汚い??だから頭をぶち抜くと叫んだ。奴は多分、俺と「代行者1」が既に殺されていて?? に化かされてるんだと言った。今度は俺が必死に?? じゃないと証明する番だった。でも、そんなことしてる暇なんてなかった。奴の背後に?? が居た。あのクソ野郎は「削除済み」すると後ろから「代行者2」を捕まえて、奴が持っていた銃を発射した。

アンタはその時負傷を?

そうですね。奴は俺の肩の上を撃った。俺は崩れ落ち主の名を赤ん坊のように叫んだ。幸い脂肪のついた部分だったが痛みは尋常じゃなかった。?? は大声で高笑いしていやがった。主よ、もし俺が自分の母親を恐れていなかったから…。もし、悪魔が本当いるならば…アイツは…。その、つまり、俺が言いたいのは、あの話は正しかったってことです。

「削除済み」されて、俺は逃げ出した。何とか這いずって今夜早くに夕食を食った食堂へと向かって、ドアを閉めようとした。紙でできた遮蔽物だろうと、とにかく何かをあの怪物との間に置きたかった。

そこに、彼女がいたんです。同僚だ。とびつきり美人で、絵画から出てきたような女でした。ここまで俺達調査班を輸送して、山道で別れたんだ。ああ、何で気づかなかったんだ。ともすれば、滝で見たあの女は…。彼女は「削除済み」され、殺されて食卓の上に乗せられていた。目は見開かれ、皮膚は剥がされ開かれていた。まるで肉屋だ。そして、ああ、そこには俺達が食った夕飯の肉以外の皿が残っていた。肉は牛でも豚でもなく…。彼女の肉だった。そして米は…。彼女の肉の中で蠢いていた蛆虫だった。あいつは俺達と合流する前に死んでいたんだ。あの山道で別れた時にはもう。始めから俺達は誘い込まれていた。餌だったんだ。

何せよ俺は吐いた。そして…。蛆虫のいくらかはまだ生きていやすかった。俺の胃でそれは這いまわっていた。俺は…。俺は、人を

休憩が必要か？

いや、もう、大丈夫です。まだ、大丈夫。俺は御伽噺の中に入り込んじまっていた。一刻も早く終わらせたかった。そのためにはどんな「削除済み」もしないと覚悟しました。

「削除済み」

——俺は、その名を呼んじまった。あの?? に役割を与えてしまったんです。だから、残りの銃弾は少なかったが、?? の腑に撃ち込んだ。対して効いてなかったが——

「削除済み」

——師匠に感謝しました。俺には到底扱えないと思っていましたが黒鍵は一瞬奴の動きを鈍らせた。そのおかげで距離を幾分か稼げた。その隙に川へ這い進んだ。吸血鬼は流水を超えられないって伝承が「削除済み」、けど奴は克服していた。?? の触手が足に絡みついて——

「削除済み」

——もう、燃やすしかなかった。最後の手段はいつだって炎なんだ。俺はようやく朝日が登ろうって時に、あの車を見つけた。俺は窓を割って後ろに潜り込んだ。そこには火炎放射器があって、そいつを握り、火種のスイッチを押した。俺はあいつが木立から顔を見せた瞬間——

「削除済み」

回収部隊がアンタを見つけた時、?? は一緒にいたのか？

いや、部隊が到着する前に走り去りました。多分?? です。あそこは人がたくさん居るはずですから。

その後、俺は病院へ運ばれました。知っての通り激しい感染症で数日寝込みましたよ。

最後に一つ。アンタはあの怪物に役割を与えたと言ったが、なんと呼んだ？

……??です。俺にとってそれが一番馴染み深かった。今のアイツは二十七の一つ——  
銃声が響く。

記録はここで終了。



「記録は以上です司祭代行」

黒服の男は少年に言った。

「司祭」とは聖堂教会において幹部に位置する者。驚いたことにこの金髪碧眼の少年はその地位に値するという。

少年は苛立たしげに呻いた。

「くそつ。終末案件にも程があんだろ、頭が痛え」

「??・・・アレの祖としての名でしたよね」

「おい、それ以上呼ぶんじゃないやねえ。アレは呼び方次第で役割が変わりやがる性質の悪いバケモンだ。チツ、あの代行者も余計なこととしてくられた。獣のままならオレたちで何とかなかったのによ」

「獣・・・確か三百年ほど前の、ジエヴオーダンでしたか。教会総出で殺したという。記録にもあった弾丸で、と聞いていますが。何かの概念武装だったのですか?」

18世紀のフランス・ジエヴオーダン地方に出現した、オオカミに似た獣。それは1764年から1767年にかけてマルジュリド山地周辺に現れ、200人から500人の人間を襲った。最終的にはフランスから派遣された龍騎隊をも全滅させ、事態を重く見た聖堂教会所属騎士団により討伐された。歴史的には獣の正体が何であったかは、現在も分かっていない。

黒服の男は古めかしい記録用紙をめくりながら尋ねた。

「ああ?アレはただの弾丸だ。主に祈りを捧げた、ただの銀の弾丸<sup>Silver Bullet</sup>。なんで奴に通じたかはわからないが、三百年前は数百人の騎士団を犠牲にしてようやく殺した。だが、もう通じねえ。同じ死因で死ぬような馬鹿なんて居ねえよ」

「ああ、と少年はため息を吐く。

数十年ぶりに蘇生した怪物は文字通り人間の理を侵す存在として役割を与えられた。もはや、殺したくても殺せない存在に。

「今のオレたちじゃアレを殺す手段がない。もう散々殺してきたから

な。『死徒』としてのアレは代行者如きじゃ相手にならない」

『死徒』とは文字通り死人である。彼らは何らかの魔術により変性したものか、親である真祖に血を吸われ傀儡となったものに分けられる。

真祖と異なり、どちらも人間の血液を吸わなければ生きられない欠陥生物。彼らにとって血液は生命活動を維持するために必要なのだ。

その中でも、死徒たちの大元である二十七の祖がいる。最も古い死徒のことではあるが、中には厳密な意味での死徒ではないながらも、吸血種ということと名を連ねているものもいる。齡四千を超える神代連盟の祖、教会によって封印中の祖、人知れず秘境にて時間を数える祖、五百年単位で後継者に座を譲る血族編集のような祖、と内訳は様々。??はその中の？席に位置し、西暦以後に死徒化したのにも関わらず、絶対的な存在規模を有している。

数百年から数十年の頻度で蘇生を繰り返し、与えられた役割に応じた報復行為を行う。それが??という祖の性質。時には賢者として振る舞おう。あるいは人類を守護する側にもなろう。しかし、此度の??は国中の人間を食い尽くし、やがて海を渡り文明を喰らい尽くす悪魔として蘇生した。このまま食欲に身を任せ暴食を繰り返すだろう。

「では、我々に打つ手はないと」

悲観するように黒服が口にする。

もはや黙って見ていることしかできないのかと。自身の無力感に拳を振るわせた。

しかし、

「ああ、オレ達にできることはねえ。

——ならば、出来るやつにやらせればいいだろ？」

少年は口角をあげ、ポツケから取り出した端末で連絡をとり始めた。



そこは御伽噺の国だった。

荊棘の壁が国を覆い、トランプの兵士は巡回し、薔薇は悲鳴を奏で、ドラゴンが腹を鳴らす。

まさに夢の国。

されど、夢をみるものはおらずただ静寂が鳴り響く。

その中心に二つの影があった。

『忠告？』

「ああ、古き友人としてな」

一方は人のカタチをしていなかった。

身体を無数の触手が覆い、見るだけで吐き気を催す醜悪な姿。

??、死徒の王である祖の名を冠する怪物。

もう一方は人のカタチをしていた。

外見は60代ながら若々しく、厳つい顔をした老人。いかにも魔法使いらしい服を身に纏い、目の前の災厄に臆することなくむしろ懐かしみを含んだ声色で話しかけた。

二人の再会はおよそ四半世紀ぶり。懐かしい面に思わず話も弾んだ。

これまで何度死んだか、新たな魔法使いが現れたことなど。

そして、話のネタもほどほどになった頃、老人は目を細め怪物に忠告する。

「——これ以上人を喰うのをよせ」

怪物は困ったように肩をすくめた（少なくとも、そう見えた）。

『おいおい、ボクたちにそれを言うのか？』

それは死ねと言っていると同義であると。

いくら死を経験しているからといって、気軽に死ぬのは御免だと言った。

「そうさな。だが、おまえさんの場合

——些か、食べ過ぎではないか？」

骸、骸、骸。

一つ、二つどころではない。幾千もの骸が積み重なり、二つの周囲に積み重なっていた。

ここには夢をみるものなど残っていない。皆、怪物が喰らってし





『?』

ではな、と手を振り何処かへと去って行った。

老人とすれ違いになるように、その者が現れる。

簡素なシャツとくたびれたジーンズを履き、大きな旅行鞆を携えた赤髪の女。

なのはどうしてか。

一見ズボラに見える彼女に、うっかり室内着で冒険に出してしまった王女様といった正反対の印象を怪物は抱いた。

『……へえ』

口角が上がる。

これほど力を持つ相手と相対したのはいつぶりだろうか。

『そうか、キミが最新の魔法使い。なるほどなるほど、まさかこの時代でお目にかかれるとは。

で? キミが答えを示してくれるってわけか?』

その言葉の中に驕りと慢心が感じられた。

自分が格上だと信じて疑わない。そこだけは数百年経っても成長しないのが怪物の難点だ。

しかし、魔法使いと称された女はあっさりと言葉を返す。

「はあ? 知らないわよそんなの」

『……』

「いい? 私は仕事を果たすだけ。貴方がなんだろうがどうだっていいの。」

「こちとらわざわざオーストラリアからかつ飛んできたんだから旅行費ぐらいは稼がせて貰うわよ」

「思わず面食らう。」

「ここまで小馬鹿にされたのは初めてのことだった。」

「巫山戯ている。」

「ただまあ、座興には丁度いい。」

「一応聞いとくけど、大人しく死んでくれないかしら? あんまり壊し過ぎると怒られちゃうのよね」

怪物は高笑いをする。

『やだよ。』

——まだ食い足りないもの』

周辺の物語の怪物は一斉に標的へと目を向ける。

ここは怪物の原理血戒。魔法よりも魔法らしい、夢を否定する国。

『キミ、よく見たら美味しそうじゃないか。魔法使いを食べるのは初めてだ』

味はどうだろうか？甘いのか、苦いのか・・・なら、味わう為に力  
たちはちやあんと残してあげる』

「そ？ 私の血、冷たくはあるかもだけど、甘くはないと思うわよ？

あと、そつちと違って『カタチ』を残せるかは運次第ってとこね」

そうして、最古の怪物と最新の魔法使いの戦いは幕を上げた。

「涎を垂らす暇があったら、ささっと消えてくれる？」

『やってみろよ、魔法使いさん？』

次回 19?? 「Dream」

19?? 年 「D r e a m」

地響きが国中に轟く。

青い光が見えたかと思うと、それは空から流星のように大地を撃ち抜いた。

地上からそれを見上げる標的ただ一点に向かって。

それを防ぐように、花卉の盾が開かれた。空から堕ちる砲撃を花卉を散らしながら受け止めていく。

「いい加減……！諦めろつてえの！」

最新の魔法使いは宙で身体を翻し、?? に向かって飛び込んでいく。

その姿は赤い彗星となつて花卉の盾を撃ち抜かんとする。

「フウ——！……」

??は既に死に体だった。

国中の人間を食い尽くし得た血液は、魔法使いから受ける損傷の回復に当て、残量は0に等しい。血液を得たことで、かつての姿を取り戻した?? だったが、既にその姿を維持することは叶わず、この時代に蘇生した際、一番最初に擬態した女の姿にクラスダウンすることしかできなかった。

——なぜだ？

花卉の盾にヒビが入る。

——なぜ、押し負ける？

魔力量では圧倒的にこちらが上回っていたはず。この魔法使いの魔術回路は低級なものだ。生成量は完全にこちらが上。

——ならば、なぜ？

「——あと、一枚！」

拳にエーテルを纏い、魔法使いは花卉を砕いていく。

残された花卉はあと一枚

現実的な話、魔力を使うにしても莫大な熱量が失われていく。人間は常にエネルギーを消費し続けている。

ならば、この女は一体その熱量をどこから消費しているのだ!?

「——これで、最後……！」

花卉が消滅する。

——砕け散った最後の守り。

二人は拳を放てば届く距離で向かい合う。

「消費の先延ばし……負債の押し付け。

それが、お前の魔法か」

怪物は吐き捨てる。

「最悪だぞ、キミ。

そんな魔法意味がない。それは人間の結末をより確かなものにするだけだ」

無意味だと嘲笑う。

それは星の行く末を決定づけると。人理の終わりが目に見えたと。

際限のない広がり。

際限のない消費。

際限のない成長の先に、希望の未来など待ち受けていない。

あるのは、〃自滅〃という名の終わりだけ。

全てはいずれ、無に帰る。

「言われなくても分かっているわよ！責任は、私が生きてる間になんとかするっての！」

「できるものか！」

人のことを言えたものではないが、馬鹿ここに極まったな魔法使い  
！」

「やってみなきや、わかんないでしょ！」

「な——……」

「——そんなの、終わりが来てから考えるわよ!!」

「くっ……!!」

黒色の魔力と青色のエーテル砲。

打ち出された魔弾は、国中に張り巡らされた原理血戒ごと、怪物を粉砕した。



—— 思えば、何度繰り返してきたのだろうか

魔法使いは宣言通り怪物を粉碎した。

人のカタチこそ保っているが、小石一つでも当たれば塵に還ることになるだろう。

残念、これまで幾度も殺される度に報復を繰り返してきたが、今回も負けか。

—— いい加減、疲れたな

自分は足場だ。

人理がより強固になるための足場。障害である自分を人類が乗り越えられるのであれば種の収穫には程遠く、未だ熟成しきっていない証拠なのだから。

人理のための悪、それが自分の役割である。

最新と、最古。

相対する二つの戦いは幕を下ろした。

怪物は自身が食い荒らした骸の残骸に崩れ落ちていた。

傷つきながらも、こちらへ向かってくる魔法使いから視線を離さない。

カタチを保っているだけ奇跡。

エーテル砲が直撃したことで内部骨格は粉碎され、擬似内臓もいくつかに死滅。それだけの満身創痍ぶりです、どことなく余裕を醸しだすのは最後の意地か。

目前で、無傷のまま見下ろしてくる魔法使いに対しての。

沈黙。

生命の声がない静寂の中心に月明かりが差し込む。

火花散る嵐は過ぎ去り、張り詰めた寒気だけが、この国を支配している。

「馬鹿ね。無闇矢鱈に突っ込まなければもう少し保ったでしょうに」  
唐突に魔法使いが口を開く。

怪物はそうだね、と答えた。

「持久戦は苦手なんだ」

走馬灯だろうか。

脳裏に浮かぶ懐かしき日々。

いつの日か、自分の目の前に立ちはだかった二人の友の姿。

「キミを相手取るなら……せいぜい三日三晩ぐらいしか持たないからね」

短期決戦を選んだのさ、と渋い顔をした。

擬態しているおかげか実に人間らしい表情をする。

そもそも、童話の怪物達が一瞬にして粉碎された時点で勝負は着いていた。魔法使いの彼女に言わせれば、『あの子のものよりも劣るわね。原作の理解が足りないんじゃない』だそう。

「何か言い残すことはある？」

「おや、負け犬の戯言を聞いてくれるのかい？」

「ええ、私は優しいもの」

「なら遠慮なく遠吠えを上げさせて貰う」

煙草はない？ワインも？……そう、それは残念、と不満を漏らす。

怪物の声は自虐気ではあるが、敵意も憎悪もない。

——おそらく。

怪物が報復しようとしたものは一個人ではなく、人類という種なのだろう。

「…第5の魔法使いをお目にかかれるとは、うん、いい経験だった。

その魔法は、人類が星と共生する立場から星を消費する者へと進んだ結果とも言えるだろう」

けれど、と口にする。

「底が見えたぞ人類？文明の熟成も時期に終わる、そうなれば収穫の時は近い。

そうさな、次……いや、あと2、3で終わらしてみせよう。此度は時間が足りなかったが故、間に合わなかったが次こそは『報復』の獣として立ちはだかる。そうさ、もう直ぐ、もう直ぐ終わる」

「……それ、貴方が本当にやりたいこと？」

「——まさか、役割というだけさ。」

正直言うかね、キミたち人類と心中なんてごめんだよ」  
乾いた笑い声をあげる。

「本来のワタシの役割は、人類文明の成熟を見守ること。時に壁となり、キミたちの発展を促すのが役目・・・この2千年間でだいぶ歪んでしまったがね」

そこまで言うのと、怪物は口を閉ざした。

少し喋りすぎたと。

「さあ、さつさと殺してくれ」

「・・・」

「キミがここで殺してくれなきゃ次にいけない。さもなければ、これからも何十、何百、何千も人を喰わなきゃならん」

「・・・」

「早くやりなさいな、魔法使い。そのために来たのでしよう？」

憎しみのない遺言。

怪物はもう首を起すこともできなもので、ただ受け入れることにした。

魔法使いが高々と掲げる右手が下ろされれば、それで終わり。

朽ちたこの国が墓標になるだろう。

その機会を魔法使いは、

「——やーめた」

あつさりと放り投げた。

「自分がこの世で一番不幸みたいな顔。私ね、アンタみたいなのが一番腹立つのよ」

生者の居ない静寂の国では彼女の声はよく響く。

「何、言ってる」

「役割だとか、役目だとか知るかつつうの。そんなの迷惑でしかないのよ」

「けれども」

「けれども何も無いのよ！別にアンタが障害になろうがなるまいが、こちとら毎日生きるのに必死だったの。余計なお世話よ」



「むう」

「大体ね、しつこいのよアンタ。死にたいならささつと自害でもしないな。他人に生殺与奪を任せるとか何様なの？」

「できたら苦勞しない。」

それに、手を出してくるのはキミらの方だろう。今回だって…」

「うっさいわね！ やりたくないなら、やらなければいいでしょうが！」

アンタには自分の意思ってもんがないわけ？」

「——」  
やりたい事。

ワタシの願ひ。

そういえば、なんだったかと怪物は一度目を閉じた。

◇◇◇

赤い瞳が開かれる。

「——なに？ 人間になりたい？」

「うん！」

名無しの怪物は大きく頷く。

王様はそれを面白い冗談だと笑った。

「はっ、なれるはずなからう。大体、人間になったとしてどうする？」

「どう、と言われても…うくん、わからん」

「それ見たことか」

「でも、なりたい！」

「…姿形だけの再現はできておらう？ それでは不満か」

「そういうことじゃなくて、もつとこう…こんぽん的な感じで人間になりたい」

なぜ、無駄なことを選ぶ？、と王様は尋ねた。

怪物は人間よりも優れた能力を持ち、万能とはいかないものの生物として上位だった。

姿を見失った者が、人間になど戻れるはずがない。

「どうしてそれを望む。それもわからないか？」

怪物はしばし黙考した。

「そう、したいって・・・思ったから？」

「自分自身で、か」

「・・・」

王様は知っていた。

怪物が人間になるのは不可能に近いことであると。それゆえ否定してやるのが正しいということも。

目を細めて、口にしようにとした。それは怪物のためでもあるし、これから歩み続ける人類のためでもあった。

「——いいじゃないか、ギル」

緑の人はそれを遮るように隣に立つ。

彼／彼女は優しく怪物の頭を撫で、嬉しそうに微笑んだ。

「意思も自己すらなかった物が願いを抱いたんだ。それは喜ばしいことだと僕は思うけれど」

「その願いが破滅の物だとしてもか」

「それはこれからのこの子が決めることさ。たとえば、待つのが悲劇だとしても喜劇だとしても、得られるものがあるはずだよ。」

人と共に歩むと決めた、僕のように」

「ほう、らしくなったではないかエルキドウ。似たもの同士、憐みでも抱いたか？」

「そういうわけではないよ。ただ・・・」

怪物は不思議そうに緑の人を見上げた。

彼らの姿は似通っており、違いがあるとすれば外見年齢と髪の色ぐらいか。

兄弟、親子だと言われれば疑う者は居まい。

「困ったな。この感情をどう表せばいいのか、なんだろうねコレ」  
緑の人は胸に手を当て首を傾げる。

人のように成ったとて、理解できぬ物は沢山あった。

泥人形は塵の怪物を肯定する。

それは哀れみでもなく、ただ純粹に祝福として。

「ふ・・・フハハハハハハ！」

良い、良いぞ。そうまでして在りたいのであれば、好きにせい。貴様が歩んだその先。我の<sup>オレ</sup>前に、どのような面を見せるか愉しみでしようがないではないか」

王様も祝福した。

それは結末を知つてのことだったが、それでも愉快だと笑う。

「では名を付けてやらねば。一人の人間としてな。

雑種、好きな名を名乗れ」

「・・・じゃ、ギルガメッシュ」

「たわけ。その名は天上天下唯一の我の<sup>オレ</sup>名だ。

仕方あるまい。我が<sup>オレ</sup>付けてやろう」

「ほんとっ?」

パツと顔が輝く

それは人の子となんら変わらない。

「ふむ・・・。雑種その1。うむ、これで構わんだろう?」

「待つて」

「何だ。我の<sup>オレ</sup>好意を無碍にする気か」

「・・・できれば他の名前がいいな」

「僕もそう思う、流石に」

「ちっ」

「かつこいいやつがいい」

「知らん。我は<sup>オレ</sup>子など持ったことがないからな・・・。適当でよかろう」

王様は様々な名前が刻まれた粘土板を取り出し、怪物の前に差し出した。

「ほれ、好きなものを選び」

「やっ!」

そういうのが一番いやというか・・・来る」

「来る?」

「精神的なものが・・・」

めんどくさそうに王様は粘土板に目を通す。

いくつか候補を挙げるが、怪物は嫌だと首を振る。

見かねた緑の人が口を開いた。

「来る……ックルッでいいんじゃないかな」

「それは……」

「シユメールの言葉で何だっけ、ギル？」

「ふむ、「山」、あるいは……「怪物」だったか」

「ごつい」

「はっ、お似合いだろうよ。」

そも、己の姿を見失うでない。今の貴様は理想を追うままに溺死するのがオチよ。溺れゆくものは、海の深さに気を取られ広さに気づけないのだから」

「そうだね。キミは人として、怪物として生きるんだ。どちらにも属する者として選ばなきゃならない時もある」

「ふーん」

「——ねえ、クル？ キミはどんな風に軌跡を残すのだろう。それを、僕が見届けられるといいのだけれど」

◇◇◇

紅い瞳が開かれた。

「——人として、死にたい」

そうして、彼／彼女はかつての姿を取り戻す。

人として生きる夢みた怪物の姿に。

だからどうしたと言うのか。

今更だ。

もう取り返しがつかぬほど堕ちてしまった。

必要のない衝動に塗れ、殺戮を繰り返し、人理の敵であるこの現状が全てだ。

「死にたかったんだ。」

そうか、そうだったね。ワタシは死なないといけなかった」

その願いは歩みの果てに忘れ去り、ただの吸血鬼になり果ててしまった。

人類の障害になど相応しくない。

「……貴方はね、誰かを頼ればよかったのよ。苦しいなら、助けを求

めるべきだった」

「うん、チャンスは何度かあったのだろうけど、ふふっ、衝動に負けてしまった」

首を差し出し、殺してくれ、と懇願する。

それを魔法使いはできるはずなのだから。

「いやよ。どうせまた蘇生するでしょうに。」

わざわざ出張ってくるの面倒なのよ」

「えー」

「だからチャンスをあげる」

そうやって魔法使いの彼女は彼／彼女に手をかざした。

「応急処置みたいなものだけどね。その衝動を決壊寸前で止めてあげる。」

時間は・・・まあ、貴方の我慢次第ってところかしら？」

「・・・我慢ねえ」

「そこは心配しないで。もし、人を喰いそうになったらすすっ飛んでいってあげる。」

責任ぐらいは取ってあげるわよ」

「見つければいいけど」

「見つければではなく、見つけなさい。それが貴方の責任。」

貴方が喰らってきた人たちへの贖罪。

あの人たちにも日々があり、物語があつたのだから」

「・・・ええ、わかってる」

じゃあ、やっちゃいましょうと青い光が灯り出す。

辛く、幸せな旅を祝福するように。

「あつ、料金は後払いね！」

財宝とか溜め込んでるでしょう？」

「・・・はい」

◇◇◇

「つこのクソガンナー！」

壊すこと以外頭にねえのかテメエはよお！」

少年は声を荒げる。

「どうやら彼の目的は失敗に終わったようだ。」

「怪物を取り逃すどころか、国まで消し炭にしやがって、復興にどんだけ時間がかかると思ってるんだ！」

「あーあ、魔法使いなんかには依頼したオレが阿呆だった！」

「くれてやる金なんざねえぞ、ブタバコにブチ込まれる前にとっとと消えな！」

「何よー、責任は取るって言ってるじゃない。だいたい、手遅れ状態で呼ぶあんたらにも問題があるでしょうに！」

頬を膨らせながら真っ赤になる魔法使い。

依頼内容がそもそも不当だと。

「じゃあ、聞かせてくれよ。その責任ってやつをよ」

「大したことはしないわよ。ただ、どうしようもないなら、アレが居た時間軸ごと吹っ飛ばしてやるわよ」

「なっ」

「存在してたのは確かに人類のターニングポイントだったかもしれないけれど、過去の人類史とか、だるま落としみたいで百年単位ですっ飛ばしても行き先は似たようなものになるわよ」

例えば、怪物の存在が、疫病や災害、戦争に置き換わるだけで現在、未来に影響なんてないんだから」

「はあ・・・デタラメにも程がある」

頭をおさえ、疫病神めと呻いた。

そして、顔をあげ彼にとって重要な質問をした。

「奴に役割を与えてないだろうなあ？...ことによっちゃあ、国の一つ、二つ犠牲にする手を取らなきゃならん」

「してませーんよ。どうせ、残り時間は少ないんだし放っておいてあげなさいな」

「そうやって少ない手荷物を持ち、魔法使いはその国を後にしようとする。」

「あ、お代は必要ないわよ。」

「たんまり貰っておいたから」

じやらじやらと宝石の音が鳴る袋を手土産に手を振る。

「はあ・・・」

少年はもう一度ため息を吐き、後処理に向かう。

怪物が食べ起こした妊婦、幼い子供たちの処遇。

瓦礫の山となった国の復興計画など、少年の寿命を縮めるほどの問題が山積みされてるのである。

「厄日だ、今日は」

◇◇◇

【日本】

「いやー、飛行機というものは便利だ。大戦中にみたが、それよりも技術の発展が見れる。あれは一機ほど欲しいな」

海を渡った疲れはあるので、一伸び。

科学の力つてすごい、と感動しながら久しぶりの日本を訪れた。

サムライは居ないようだ。少し残念。

「さて、メモの場所は」

空港から、タクシー、バス、電車を介して目的地へと移動する。

すれ違いざまに気にいる姿はないか確認するが、見つからない。

しばらくは、この姿でいようと決める。

ふと、誰かの視線を感じる。

すれ違う人々は物珍しさからか、彼／彼女に振り返ってるようだ。

少し、煩わしい。

「ここか」

今にも崩れそうなほど錆びついた廃ビルにたどり着いた。

見えるか見えない程度の場所に「伽藍の洞」と書かれた看板がある。

隠匿の結界でも張っているのだろうか。

扉を開く。

「・・・なっ」

中に居た魔術師は驚いたのか、啞えかけたタバコを落としてしまった。

妹とは少し違う、くすんだ赤色の髪。

そして眼鏡の下の琥珀の瞳。

「初めましてこんにちは。」

妹さんの紹介で訪れたんだけど・・・大丈夫？」

蒼崎橙子の前に現れたのは、少年と少女、矛盾した印象を併せ持つ人間離れした容姿。

赤い瞳を持つ魔性の存在。

「黒い怪物」の姿がそこにあった。



1999年 「悪魔払い」 ①

◇◇◇

月明かりが二人を照らした。  
いつだって彼／彼女に役割を与えるのは、人間だ。  
今回も同じこと。

足元には、焼き焦げた少女と、事切れた母親。そして赤子を抱く女が居た。

赤子は不思議そうに手を伸ばす。

女は、そっと赤子を抱きしめ言った。

『……こんばんわ、哀れな子』

母親に成り代わった怪物は赤子を抱きしめる。

明るい橙色だった髪は黒く染まり、瞳は紅く輝いている。

それはある暑い夏の夜の出来事。

怪物がもう一度、愛を紡いだ日。

【悪魔祓い】

日の沈んだ真夜中午後22時。山田さんのお宅にお邪魔する。呼び鈴も鳴らさず、挨拶もなしに玄関の戸を開け放った。

窓を破って侵入しようかと考えたが、玄関に鍵は掛かっておらず、これ幸いと堂々と侵入する。しかし不用心にも程がある。これでは盗人と変わらないじゃないか。

……まあ、間違いではないか。

この夜、黄色い雨合羽を羽織ったボクは、確かに盗人まがいの不法侵入を行ったのです。

なんでも、この町で一家心中が起こったそうなの。

報せを受けたのは最寄りの交番のお巡りさん。朝一番で山田さんの旦那から電話があったらしい。

『昨夜、親子3人仲良く首を絞めて自殺した。このままでは死体が

腐って近所に迷惑がかかるので、早めに片付けに来て欲しい』

タチの悪い冗談だ。死んだ本人から電話してきたのと言うのだ、律儀にも程がある。が、正義感の強いお巡りさんにはどこが笑点なのか理解するセンスがなかったようで、真っ先に突撃、そして見事玉砕。それきり、消息を絶ってしまいましたとさ。

昼過ぎに、あまりにも帰りが遅い相棒を捜しに行ったお巡りさんも同上。この街の交番は半日も、もぬけのカラとなり異常が警察署に伝わるよりも早く、噂話として辺りに伝播した。あくまでも、近隣住民達の間ではあるが。

あらやだ、山田さんのお宅にお巡りさんが入ったきり出てきませんわオホホ、ところでどうして昨日つから閉めつきりなのかしらねオホホホホ。鋭いのか、ズボラなのやらよくわからない奥様達なのです。

そうやって噂話がゆつくりと町内を回って、警察署の耳へ届いたのが午後2時過ぎ。警察署にいる一人の刑事がこれは異常だと判断し、知り合いのカウンセラーに電話した。まあ、それが現在の主人というか、雇い主というか、魔術協会では名を馳せる人形師だったのである。『ごめーん。今、手が離せないのよ。代わりに行ってくれるかしら?』

「えー」  
そうして午後6時前。日が沈みかけた頃、面倒ごとの押し付けの電話があった。

この携帯電話というのは凄い。いくら離れていても、こう捕まえられてしまえば逃げようがない。最新機器は好きだが、これは嫌いかも。

一応、人形師とは使い魔契約を結んでいるので命令を遂行する理由はあるものの、眠いし、気が滅入る。

ので、しばらく放っておくことに。もちろん行くさ、行けたらね。そうして午後7時、日が沈み切った後、再び電話があった。相手は非通知。取るか取るまいか、間を取ってから電話にでる。話はこれ以上無いくらい簡潔だった。電話の主人は山田と名乗り、自宅の住所を口にして、

『申し訳ない。つかれたので被ってほしい』

そんな、本気で申し訳なさそうな台詞が聞こえてきた。

なんで番号を知っているのかはさておき、どうでもいいと二度寝に洒落込もうとしたが、無視できない理由が二つもある。

一つ、それは自身の目的のため。二つ、人形師からの伝言。おつと後一つ、単純に小遣い稼ぎである。

蔵のなかに宝石は溜め込んでいるが、いかんせん換金に手順が必要である。うっかり市場に流してしまえば足がついてしまうので困る。それゆえ、現金が少しでも欲しい。

そして、一番重要なのは二つ目の人形師からの伝言。「目を見たら死ぬ」。

「目を見たら死ぬ」驚いた、凄い。労働値を期待値が僅かに上回る。

一度やる気になった以上、二度寝に戻るのも億劫だった。

そんな訳で山田宅である。

土足で玄関に上がる。生活臭が染み付いた木造の壁。歩けば軋む狭くて華奢な廊下。ジリ、ジリリ、と落ち着きなく点滅する電灯。その癖モノク口画像のように家の中は暗い。黒いフィルムにすっぽりと包まれたような家。

居間にはテレビがつけっぱなしで、日曜夕方定番のアニメ？が流れている。確か、中流家庭の日常を主軸としたエバーエンディングストーリーらしい。もう何十年と変わらずに維持している彼らの前には、維持できなかつた人間の死体があつた。

母親と娘だろうか。テーブルに突っ伏した母親と、床に転がる娘。そのどちらも、うつ伏せでありながらはつきりと天井を睨んでいた。死ぬ直前まで意識があつたのだろう、表情は悲しげで一生分の感動を使い果たしたかのような泣き顔。見覚えがある、人は理解できない暴力に出逢った時こんな顔をするものだ。

しかしまあ、どうやればこんな死体が出来上がるのか。

自殺というものは、どうしても楽な手段を選びがちだ。有名どころで言えば、首吊りとか煉炭を用いたものとか（まあ、それはそれで苦

しいものではある。だが、この死体は異様だった。頭そのものを回転させて首を折っているのだから。流石に引く、些か力技すぎないか？頭部を大きな万力で固定し、グキツと捻じ曲げたしか思えない……まあ、どうでもいい話である。コソ泥のような行為をしてる時点でこの先に密室殺人が起きていようが、自分には関係ない話なのだ。

程なくして今週の一家団欒は終わった。垂れ流される愉快的なエンディングを後にして、階段に足をかける。

家を覆うフィルムは益々汚れていき、2階に上がった瞬間????。

『??:  
????』

寝室のドアに手をかける。

ガチャッと、すんなり開いてくれた。

1999年 【悪魔祓い】②

ガチャ。ドアはすんなりと開いた。

踏み込んだ寝室は薄暗く、雨戸は閉められ、電灯は今にも消えそうに点滅する電球だけ。閉め切っているためか、部屋はまるで蒸し風呂の様に息苦しい。寝室にはベットが二つ。奥のベットにスーツを着たままの男が腰を下ろしている。こちらには気づいていない。男は背を向け、力なく項垂れている。体格からいって田中さん家の旦那さんに間違い無いだろう。

一階に転がっていた二人と違って首は正常。まだ生きている。まだ真つ当なヒトの形を保っている。当然だ。でなければ、親子三人で自殺した、などと電話はかけない。

足音を忍ばせる。田中氏は背中を向けている。こちらに気づいているのかいないのか。俯いた後ろ姿は、崩れ落ちる砂城を思わせた。ベットまで、後三步。相手がどんな症状だろうと、確実に燃やせる距離だ。・・・のだが、邪魔が入った。がつ、と足元に障害物。なにかに躓いた。

ソレは目をひん剥いたまま死んだ人間だった。警察官の死体。それも二つ。どっちも首を捻じ切って腹這いに死んでいる。

「おや、こんばんわ。こんな早く来てくれるとは思わなかった」

反射的に顔をあげる。

瞬間、呼吸が止まった。

——部屋の隅。

大きな姿見に、男が映っている。鏡の中の男と目が合った。男とボクは互いに認識し、

『目を見ると死ぬ』

「あ」

痛い。まずい。痛い。体中の筋肉が痙攣した。痛い。魔眼の類であればある程度の抵抗ができるが、これはそういう類のもんじゃない。痛い。指先一つ動かせない、強力だ。痛い。たった一瞬、目が

合つたと認識しただけで、脳からの命令系統をグチャグチャにされた。

足元には首を振じ切られた死体が二つ。目前には、いかにも人生疲れきつてますという中年。蒸し風呂のように蒸した暗室。困った。眼球すら動かさせないので、目線すら逸らせない。痛い。なにより体に命令できないので、さつきから呼吸が止まっている。痛い。無駄に臓器まで擬態するんじゃないやなかった。ここにきて、無駄に凝った趣味が足を引つ張る。

「君がその、なんだ。憑かれた人間を楽にしてくれるっていう悪魔祓いかね？・・・いや、その、なんだ。てつきりテレビで見たような神父でも来るのかと期待していたのだがね。」

そりや、黄色い雨合羽を着てくる神父なんていないでしょうよ。まあ、文句を言いたくてもリアクションは出来ず。あつちが目を切つてくれないかぎり、こっちはやられるままされるがまま。

「もしかして警察の方かい。ああ、困った。彼らにも事情を説明したんだが、聞く耳を持ってくれなくてね」

転がっているのは警官らしい。誰だって、いきなり憑かれたと言われても理解できないでしょう。だからといってこの仕打ちはあんまりじゃありませんかね？

「私は、その、ほらあれだ、君らが言う悪魔憑きにかかったらしい。こうして部屋に閉じこもっているのも、悪魔祓いが来てくれるまで一人になりたいからなんだ。できる限り関わりたくないんだよ、他人と。通報されるのは困るし、悪い噂は流してほしくない。この歳になるとね、世間体は二番目ぐらいに気にかかるのだよ」

田中氏はもう殺る気満々。待て、待て、待って、それはボクですよー。話なら聞いてあげますよー。

「しかし、それも維持するべき家庭があつてこそだ。下で妻と娘を見ただろう？ ああなつてから一日経ったが、まだ腐っていないかったかね。まだ夏場だからね、冷蔵庫にでも入れたかったのだけれど、とても入りきらなくてね。お隣さんから苦情がくる前になんとかしたかったんだが——まあ、もうどうでもいい。いや、はじめからどう

でもいいことだったのに、なぜか二人とも私に付き合つて死んでしまった。無意味な付き添いだ、結局最後まで家庭というのは重りになつてしまう」

田中氏がゆっくりと、少しづつ振り返る。鏡越しにあつていた視線が、ゆっくりと向かい合う。

同時に、

「いや、貴方に迷惑はかけない。これ以上、誰かが死ぬ前に自殺する。ハハっ、本当はどうに死んでいるはずなんだがね、これが不思議で私だけ上手く死ねない。昨日も、まず私が自分で首を回したはずなのだが」

首が、

ボクの首が、男の振り向きに合わせてキリキリと横に向いていく。「二人で死にたかつた。家族には黙っていたんだがね、会社は一週間前に退職したんだ。疲れた、疲れたんだ。くだらない人間関係、責任、労働、今まで疲れているのに気づかないほど誤魔化し続けた。私はもう五十過ぎだ。そろそろ自由になつていい頃合いじゃないか？」

仮だが、背中を向けていた田中氏の首が零度だとするなら、今は三十度。これはまずい。今回の悪魔憑きのカラクリはなんとなく読めてきたぞ。

「なのに家族は反対してね。勝手に辞めるな、貴方一人の体じゃないのよ、私達を誰が養うの、大学の費用は、パパには稼いでくる義務がある、だとか。ハハっ、思い返せば実に酷い剣幕だった。いや、長年暮らしてきたが、あれだな、女のヒステリーとは実に興醒めするんだ。思うんだが、アレは女だけの特技だ。私達男性はなまじプライドだけは高いんで、あんな風に子供に戻ることはできないんだ。」

四十度、六十度。田中氏の首を倣うように、ボクの首も回っていく。ちなみに九十度でほぼ真横。その先は、まあ人間の限界はどんなに鼻戻しても百二十度当たり。それ以上は、他の動物でなければ不可。

「断っておくとね、私だつて一家心中なんて望んじやいなかった。ただ一人になりたかつただけなんだ。理由は……ああ、なんだつたか。そもそも会社を辞めたのは、そうだ、この歳になつて手痛い失敗をし

てね。なんとか取り返そうと努力は重ねたんだが、その、そういう時ほど失敗を重ねてしまうものだろう、人間っていうもんは。ついに、上から首を吊れと言われるし、失敗の埋め合わせで金を工面しすぎてね、借金で首が回らなくなっちゃった」

九十度、百度。

ギチツ、つと首がこれ以上できないと軋む。

こっちの首はもう回らない。人体はそういう風に設計されている。だが——田中氏の首は実に滑らか。脊髓がスタイド式にでもなったのだろう。もはや、三百六十度回転する首振り扇風機。

「だから一人で死のうと思つたのに家族は反対した。いや、死ぬならせめて金を残す死に方にしろと反対した。馬鹿な奴らだ、そういうのが面倒くさいから死ぬんだって、あいつらには最期まで理解されなかった。だからね、何も言わず目の前で自殺したんだが……魔が刺したのかな？ 妻も、娘も、私につられて首をひねって自殺してしまつた。」

それ、君の仕業では。

百二十度、百三十度。首が回る。田中という悪魔憑きにつられて、周囲の人間の首が回る。首を支える筋肉が切れ始める。プツ、プツ。口からは泡を拭き始める。ブク、ブク。

田中が悪魔憑きによつて得た症状。患部は首、それによつて新しく生まれた新部きのうは煽動、原因は過労といったところか。

糞食らえ。結局は現実逃避にすぎないじゃないか。田中氏は自分の症状に気づかないように思考を閉ざし、こうして他殺自殺を繰り返している。この人間と視線があつた者は、コレと同じ動きを強制されるのだ。冗談じゃない。この男は首がスライド式だからいいもの、人間は首なんて回らない。

ボクは死ぬ、あと数秒で、首を振り切られる。

「でもまあ、思つたんだ。私に家族を養う義務があるなら、家族にだって、私と死ぬ義務があつたんじゃないかってね。だって、私が居ないと生きていけないのだろう？ それが本当だというなら、私と一緒に死ぬのは当然だった。だからこそ家族はそれを実行したのだ。はあ、



実に重苦しい。そんなにまで命を繋げたいなんてね。まったく——  
—愛というのは、無自覚の地獄だな。」

田中氏の首が真後ろを向く。

きつかり百八十度、綺麗に回り、ボクの首は皮膚が裂け、血が噴き出し、ボキッ。

◇◇◇

転がった三人の死体。

男はまた自分だけ死ねなかったと肩を下ろし、再びベットに座った。未だ来ぬ悪魔祓いの到来を待ちながら、男は何度でも自殺を繰り返すだろう。

「あ————ああつ」

だが、それは杞憂に終わった。

黄色い雨合羽を羽織った人間が、ゆっくりと起き上がる。ぐるりと百八十度捻じ切った首が、ゴリゴリと軋みを上げながら本来の位置に戻ろうとする。それはまるで映像を逆再生するように。飛び散った血液、皮膚すらも再生していく。

それは人間などではなく、カタチが似ているだけの存在にすぎなかった。男は再び振り向く、そこにいたのは悪魔と変わらない存在だった。

「ワ、・・・ワタシにはキミの悲哀は分からない」

発声器官の再生完了。

今度は視線を合わせないように合羽のフードを下げ、田中氏に手を伸ばした。

崩壊した精神は戻らない。悪魔というものは、そういう崩壊した心に漬け込むのだから。しかしまあ、原因である部位を燃やせばマシになる。要は病気と同じだ。侵されたところを取り除いてやればいい。

田中氏はこちらを見ている。百八十度回転したその首で。

「君も、同じなのか。私と同じ」

「懐くな人間。ワタシは喰った側で、君は喰われた側だ。カタチが似

てるからといって同類扱いは不愉快だ」

指先を田中氏の首に向ける。

刻むのは「?」。本来であれば、この文字に火に連なる意味はない。「言葉の力」「信号」といった幅広い解釈ができるからこそその芸当だ。現代の魔術は苦手分野だが、これなら割と得意な方ではある。

「そうか、そうか。君が悪魔祓いだったのか。良かった、これで死ぬるのだね」

田中氏は首に刻まれていく文字を見つめながら、何やら安心しきつた表情を浮かべている。

何を誤解しているだろう。

殺すわけないじゃないか。

「知るか。死にたいなら一人で死ぬ…って、おや、ブーメランが返ってきたね。うん、それができないのは理解してるし同情もしよう。けれど、五人も殺しておいてそれは虫が良すぎる。今から燃やしてあげるけど、その後は然るべき所に引き渡しますから、解剖なり、治療なり、刑罰なり受けなさいな」

「——待て、話が違う。そんな責任を取りたくないから私は悪魔祓いなんてもんを呼んだんだ」

「知りません。悪いけどね、ワタシには分からない。その程度のこと崩壊する心の弱さを、その程度で壊れてしまう人間の悲哀を」

目の前の怪物には、何かを悲しむ余裕がなかった。人と歩んだ怪物は、ついで、人間と分かりあうことはできなかつたのだから。

ぼつ、と男の首が炎に包まれる。上がる叫び声。許しを求める声。けれど、怪物は神父ではないため祈るようなことはしない。ただ、つまらなさそうに横目で見ながら、事の終わりを主人に連絡した。

「報酬は血液でいいよ。今は腹が空いてしょうがない…ん? ああ、実にいい体験だった。首を振じ切られたのは久しぶりだったからね、機会があればキミも体験してみるといい——橙子」

# 1999年 「最新の怪物 上」

1999年 秋

「いつまで眠っているの。もう直ぐ着くわよ」  
パチリ。

目を開ける。

ガタゴト揺れる車内。煙草の匂いが鼻をつく。ふむ、どうやら眠っていたらしい。このところ栄養不足なので体が睡眠というカタチで回復しているようだ。車内に持ち込んだ荷物を漁り血液パックを取り出す。チュー。影は顔を顰めた。まずい。

「?????」

「首が痛いって?…ああ、先月の田中某によるものね。それは侮った貴方が悪いでしょう。あれだけ注意したじゃない、「目を見たら死ぬ」って」

「?????」

「ええ、「いつそ殺してくればよかったのに」って泣くほど感謝してたみたいよ。今は病院で治療中。まあ、貴方が患部を燃やしてくれたおかげで悪魔憑きとしてではなく、重度の火傷治療になるでしょうけどね」

ケタケタケタケタと黒い影は笑う。自家中毒、自家発電、自己崩壊。鏡写しで自分を見ているようで愉快愉快。

影の言葉は聞き取れない。しかし、不思議と意味は伝わってくる。不気味だ。

「…いい加減普通に喋れ。何言ってるか分からないくせに、意味だけ頭に流れてきて気味が悪い」

彼女は眼鏡を外し不機嫌そうにこちらを見てくる。どうやら遊ぶすぎたらしい。言語を調節する。

黒い影はクツクツと笑い声をあげ、喉に手を当てる。調整するように声を鳴らす。あー、あー。中性的な声が聞こえる。

「くくつ、いやあすまない。ちよつとしたジョークと言うやつさ。主

人と従者同士コミュニケーションを取ろうと思つてね」

声の主はわざとらしく手を広げる。ケタケタ、暗い車内で三日月みたいに口角が上がる。

「コミュニケーションというのは双方が同じ向きを向いてこそ通じる物だ。一方的なものでは不愉快でしかない」

「そうですか、そうですか。でもこの言語、すごい便利なのです。なにせ、人の言葉が一つだった頃のものだからね。世界共通、人の無意識の奥深くに響くのさ」

「統一言語か。けど、それも一方通行の会話だろう。神代の頃であれば皆が識っていたから会話が成立しただろうが、今はお前と・・・あと一人ぐらいだな。前に獣と会話ができると言つたな。それもこれの応用か」

「ええ、ボクのこれは言い聞かすほどの力は持たないけれど、獣たちには通じる。おかげで寂しくはなかったけど、人と会話するのはやはり難しくてね。蘇生の度に言語を覚え直すことが多かったなあ」

「どうやら、直ぐに着くと言つてもあと一時間ほどかかるようだ。なら、もう少し寝てもいいじゃないかと影は文句を言おうとしたが、長旅だったので彼女も眠気が大分きてるよう。ようは、話し相手になれということ。」

「お前は神秘そのものだ。言語の再現も、その肉体も、全てが貴重な研究対象になるだろうさ。なにせ、数万年規模の神秘なんてこの世界には数えるほどしか残っていない。古くから多くの魔術師、果てには権力者までその体を求める理由が判るといふモノだよ。」

「そうかな、こちらとしては食いはつくれなくて済むけど、時には不老不死の手段を教えろ、なんて連中もいて困りモンだよ。思い返せば、十字軍の時は酷かった。彼ら、魔術師も雇うわ、宗教の内輪揉めに巻き込むわ、果てには山の教団と共闘してくるわ、散々な目にあつた。特にあの・・・獅子王だったけ？あの子は正しくその時代の英雄だった」

「その出来事は我々の中でもトラウマだよ。記録では、当時の有力魔術師の大半が死んだ。魔術の進歩は数世紀分は遅れたと言われている」

る。しかしお前を討伐した獅子王リチャード一世の名声は上がった。そうだ。ふつ、英雄の足場といっても差し違えないな」

「・・・足場ね。それが今じゃ、悪魔祓いのお手伝い。いっそのこと、不死殺しの悪魔でも現れないかしら」

「あるわけないだろう。悪魔というのは比喩表現でしかない。その症状は決して他者へ向けるものではなく、自己へと向けるものなのだから」

悪魔憑きとは流行病である。

まあ、端的に言えば自分の感情をコントロールできなくなった精神障害者の事である。鬱や精神病のことを病原菌も何もない症状だけの病名だし、単に自己矛盾に陥っただけだと笑う者もいるだろうが、侮るなかれ。鬱だって立派な「病」だ。風すら受け付けない健康的な肉体だろうと、病はあの手この手で肉体に宿る。頭の中がズレてしまつたら、それは精神が病んだのではなく、人体機能が病んだに過ぎない。人間は神秘と不思議とシステムで成り立っている。原因のない故障はあるわけない。

もつとも、これを病気だと認知しているのは一部の物好きと魔術師ぐらいで、世間一般には発病者を「悪魔憑き」と呼んでいる。それはなぜかって言いますと、田中氏のようにそりやもう悪魔に取り憑かれたとしか思えないほど豹変してしまうからである。

「しかしまあ、悪魔」なんてこの国には似合わない。悪魔なんて概念は宗教の延長でしょう？多神教の貴方たちは唯一神の宗教には靡かないだろうに。ああ、どうせなら獣憑きとかにすればいい。そちらの方が馴染みがあるし、落ち着くつてもものだろう」

「いや、それでは駄目だ。分かりやすくても落ち着いてもダメなんだよ。いくら信仰が薄れたからと言って我々は日本人ということだ。なんだかんだで古来から伝わる獣憑きという言葉には敏感なんだ。悪魔憑きなら他人事のように感じるし、元からこの国にある病気では変にリアルでつまらないだろう」

「ふむ・・・悪魔憑きって言葉の方が都合がいいのね」

「そうだ。だから今流行っている悪魔憑きというのは、本当に流行っ

ている現代病なんだ。協会では中々意見が割れていたが私たちが提供したサンプルの調査では、あくまで人間の精神病の延長線ではない、だそうだ。それにしても異常だとは思うがね」

「なるほど、誰がいつ墮落するか分からない。自分だって墮落するかもしれない。——それはとても安心できる。自分は破滅への覚悟ができているから大丈夫だと勘違いの麻酔を打つことで防御膜を貼ってるのか。そうか、今のキミたちはみんなで仲良く鈍感になりましょうというのが流行だものね。悪魔憑きって言葉は、その風潮を押し付けられただけか。名称通りの責任転嫁には格好の生贄だ」

悪魔憑きは存在する。

それは例えば、本当に精神を病んだものであり、

それは例えば、田中氏のように人間を辞めた『超能力』者である。

そのような悪魔憑きを蒼崎橙子の使い魔として排除していくのが今のボクの役割であった。

車の窓を開け空を見上げる。

今日はどうしようもなく月が綺麗だった。

だからこそ、顔を伏せる。

——月は少しだけ苦手だ。

◇◇◇

誰も知らないけど、わたしの家族は人殺しだ。

実はわたしも、隠れて殺人鬼をやっている。

◇

異常に気づいたのは少し前、要するに今年の春。去年の身体測定でおや、と思い、今年の身体測定でやっぱりなー、と確信した。

悪魔憑きには体の一部が増えるか、体の中身が変わるタイプに分かれている。わたしは爪が伸びたり口が増えたりはしていないので後者だが、別に中身も変わったわけではない。特別な新部なんてどこにもない。

けれど、それがわたしの症状だった。

体の成長に合わせて身体能力が上昇する。人間として当たり前のことではあるが、わたしの場合、通常の人体に設定されている上限が

大幅にアップしたらしい。

特別な箇所はないが、人間としての機能が全体的に上がる特別性がわたしの、病気。

直す術はきつとないけど、その必要はないと思うのだ。だってこれ、黙っていれば誰にもわからない秘密だし、悪魔憑きになったら遠からず破滅するっていうけど、これはこれで良いものだし、誰にも迷惑はかけていないので、わたしは今日も、日に日にどうかしていく自分を楽しいと思っているのですから。

◇

学校が終わって、日が沈んで、わたし好みの時間になった。

—— 走れ。

—— 走れ。

—— 走れ。

今日も自分に急かされて止められない。今のわたしは誰よりも速く、強く、そして退屈だった。（わたしは時々後ろを振り返る）  
わたしには目的がない。

この病気を自覚してからただ、走り続けているだけだ。誰もいない、誰もいない道をトップで走り続けるのはどうしようもなく気持ちいい。だが、ずっと迷っている。ただ走るだけで気持ちいいなんて人間らしくない。目的とか、夢とか、対価とか、記録とか、自分の将来とか、何らかの意味がないと、無償になんて走れないのが人間だ。

でもわたしにはそういったものが存在しないらしい。むしろそういうゴチャゴチャしたものが邪魔なだけ。最近はそんな理由を持っていた過去の自分がバカみたい。

「——なんて、大丈夫かな、わたし」

自分らしくない愚痴に自分でつつこむ。何かおかしいなあ、このままでいいのかなあ、と自分なりに頭を悩ませてみたが、やっぱり走り続けることに目的は見出せなかった。

「まっ、こつちの方が愉しいんだから」

しょうがないよね。

となれば怪物になるのが一番らしい。

だってわたしは強いんだし、優れているし、怪物になれば縦横無尽に走ること自体が存在意義で、いちいち悩む必要がないと思う。なら簡単だ。わたしも同じように怪物になろう。そうすれば、無意味な自分に負い目を感じることはない。

そんなわけで、今日も今日とて倣つてみる。

屋根から屋根へ。壁から、壁へ。

ゲームに出てくるモンスターののように。そんな感じで俊敏に移動する。

二階建てぐらいの家なら三拍子で跳び越えられる。路を平面ではなく立体で、街はわたしのフィールド。すごく爽快。ドロっとしていた部分が剥がれていく。

わたしは、物語の怪物に憧れている。

七階建ての屋上をから、トンつと一つ屋根を飛び越えて六階建ての屋上に着地する。

十メートルぐらい全力で走って、

二メートルぐらいジャンプして、

その間一メートルぐらい落下して、

着地の瞬間、反復横跳びみたいに衝撃をスライドさせる。なびく長い髪がちよつとウザい。わたしは童心、ではなく無心で夜の散歩を楽しんでいる。この体は華麗な怪盗のように、街の頭上を闊歩している。

もちろん、この程度なら怪物じゃなくても十分可能。人並みの力があれば誰にもできる。

必要なのは自由な手足と助走距離。あと一メートル以上の落下はしないこと、小さくてもいいから足場を確保すること、そして、できないなど決して思わないこと。

本当にそれだけ。現実の話、例えば一流アスリートなら、十階建てのマンションをベランダからホイホイと降りるだけの性能を持ち合わせている。

みんなだって、これぐらいのことは経験しているはずだ。



子供の頃、玄関の鍵をなくして二階の窓から家に入るなんてよくある話だ。けれど、それが大人になるとできなくなる。なんて逆さまな話なんだろう。体は成長している。運動能力は倍以上に向上しているのに、なぜそんなことができなくなるのか。

それは単純に精神の問題だ。扉はよじ登るものじゃないとか、服が汚れるだとか、落ちたら危ないとか。性能は十分あるのに、そんな人間らしい理性が、わたしたちを人間という動物に引き留めている。

まあ、それはそれでいいと思う。人間って便利だし。わたしだって少し前は同じものだったのだ。わたしはたまたま体の性能が上がって、人間よりも優れてしまっただけ。下から上に鞍替えしてしまっただけなのだ。

さて、十分に機能を堪能したら家路に着く。

ぴよんぴよん跳ねながら（時たまに後ろを振り返る）そして、何となく空を見上げてみた。足を止めると落ちて死ぬので、走りながらうつとりとため息を一つ。

うん、秋はやっぱ好きだ。

なんとたって、月がこんなにも綺麗なのだから。

◇

家に着いたらすぐに鞆を階段において父の待つ書齋に向かう。

「おかえり、言いつけを守ってくれて、お父さん嬉しいよ」

ものすごいいい笑顔で、お父さんは座れとわたしに命じる。

ここではわたしは言葉を発するのを制限する。お父さんの話を聞き流すのに必死で、喋るなんて億劫にも程がある。

というか、人間の言葉って不便すぎない？ どうして誰も不思議に思わないんだろう。

「ダメだぞ。この頃、夜更かしがすぎるようじゃないか。お母さんも心配していたよ。お父さんも、生活の乱れは感心しないなあ」

あの日と同じ、惚れ惚れするほど理想の父親の皮を被ってる。お祖父ちゃんが亡くなった日も、こいつはこうやってわたしを宥めた。

わたしが5歳の頃、祖父は家族の重荷だった。

若い頃からの不衛生が祟って、その頃には完全に寝たきりで、肺も心臓も壊していた。体の節々が痛いらしくて、酷い時は聞くに堪えない奇声をあげていた。それもほとんど息切れみたいなもので、二階にいるわたしには聞こえなかったけど。

けれどお父さんとお母さんにとっては、いつまでも終わらない宿題みたいなものだったんだろう。

夏休み、わたしは母の田舎に遊びに行かされた。けれど……何だったか、つまらな過ぎて一日早く帰ってきてしまった。家に帰った時、祖父の寝室からガサガサと音がしていた。何だろう、と覗いてみたら、祖父が顔をぐしゃぐしゃにして、芋虫みたいに蠢いていた。

夏は些細なことで体調を崩しやすいし、体力のない老人なら尚更だろうし。お父さんに伝えると、いつものことだから放っておきなさいと命令された。

そう命令だ。お父さんも今日は休みだから、ずっと一緒にいようと肩を掴まれた。

わたしは父と母がなにをしようとしているのか、

——あるいは肩に食い込む父の指や——

わたしになにを望んでいるのか察しながら、

——もしくはのっぺりとした母の能面や——

まあ、言われてみればわたしも祖父はいらぬやと納得したし、そのまま一晩を過ごした。

翌朝、祖父の寝室には手足の付いた奇怪なオブジェクトが転がっていた。題名は「ダレカタスケテ」とか名付けてみたり。

お父さんとお母さんは血相を変えて、すぐに病院に電話をした。二人の作業は、必死な台詞とは裏腹にととてもとても冷静だった。

——そう、わたしの家族は人殺しだ。

——わたしだって人殺しだ。

「私たちに隠し事をしていないかい？ お父さんはしてないよ。だからお前も、きちんと節度を持っていこうね」

以来、優しい声で、気持ち悪い声色で、この会話を繰り返す。

わたしは空を見上げている。

父は共犯者であることを確認する。

これを三日も明けるともう落ち着かなくなつて、わたし呼びつけては繰り返す。本当は学校にも行かせたくないはずだ。

休日なんて最たるものだ。わたしは高校生になると、休みの日はこの書齋で一日を終えていた。

「お前がいつまでも良い子でいてくれて嬉しいよ。お母さんは口うるさいけど、ちゃんとお前をわかつてくれているよ。お母さんは、お前が可愛いから厳しく見張っているんだから」

わたしは月を眺めている。

この書齋には天窓があつて、そこから月光が差し込んでくる。

母は共犯者であることを監視する。

主語のない会話は気持ち悪い。でも主語を入れると会話そのものが成立しないから仕方ない。この家で、祖父とか事故死とか、病死とか、そういう単語は一生禁止。

わたしは正直、

「わかつてる、お父さんは疑つてなんかいない。だって、——わたしたちは共犯者かぞくなんだから」

祖父を意図的に見殺しにしたことよりも、それをいつまでも引き摺つてることよりも、——わたしより弱いコイツらが、わたしに対して命令してくる方が気に食わなかった。

家族会議とは名ばかりの共謀密談は、こんな幹事の並行戦で終わりを告げる。お陰様で、この若さで月の妙に目覚めてしまった。

月ばかり観ていると人ならざるものになる。

国語に出てくる有名なお話だ。あつちは確か虎だったけど、わたしは怪物。うん、いい感じ。どうせもう人でないし、そっちの方がいいだろう。

◇

でも、近頃は悪化してきた感じ。

子供の頃は口封じで良かったけど、大人になればそうはいかない。お父さんたちも気づいたんだろう。五歳の子供なら放っておけば

忘れたのに。それを何度も言い含めるから、誤魔化しようのない事実を共有してしまったと。

お父さん達は、ようするに、娘が真つ当な人間になればなるほど疑心暗鬼に囚われてったのだ。

ほんと、いい迷惑だと思う。勝手に引き込んでおいて、勝手に育てておいて、勝手に邪魔者扱いだもん。

わたしのストレスは際限なく溜まって行って、些細なことで拗ねるようになってしまった。

だから、それはちよつとしたはずみだった。

◇

秋が深まるにつれ、わたしの深度はどんどん上げていった。

走れ。走れ。走れ。走れ。

声に急かされて走り続ける。たまに後ろを振り返る。

人間としての生活は色々あったけど、走っていれば楽しかった。ああ、けれど——わたしはいつから、走っている時だけが楽しいようになつたんだろう。

“良い子にしてるんだよ”

安定は慢心をよぶ。

しくじった、しくじった。待ちきれなくて1時間早く出かけたのがいけなかった。真つ直ぐ走るはずの交差点を、気分で曲がってしまったようなもの。

その女は呆然と空を、

屋根を走る怪物を不思議そうに、

“いつも誰かが見守っているよ”

ゾツとしたけど、やっぱりなと納得した。

わたしはこうなることを知っていた気がする。まあいいや、ともかく、

——やつと、人間に見つかった。

“わたしたちは共犯者だよ”

事は一撃で終わった。女は森の中に隠しておいた。

考えなしでこう、ポキつと。しようがないよね、わたしは怪物なん

だし。

立ち止まって考えればそれなりに人間らしい理由もあつたのだからけど、これが初体験でもあるまいし、そこまで罪悪感はなかつた。

……でも、なんて言うかな。見つかった時の薄寒い感覚は、ちよつと癖になりそうだ。

1999年 最新の怪物（中）

秋の夕暮れは早く、すでに住宅地は闇に包まれていた。車を脇に付け、二人は辺りを見回す。

辺りは不気味なほど、静まり返っている。

「そこだ、その家……おかしいな。あまりにも静かすぎる」  
橙子はある一軒家に指を刺した。

なんの変哲もない、ただの家。しかし、もう夕飯時だというのに明かりはなく、人の気配もない。どこかに出掛けているか、あるいは……可能性を示唆するが、なんにせよ直接見なければならぬ。

「ところで、一つ聞いておかないといけないことがある」

黒い影は、黄色い雨合羽を羽織りながら問う。

「なんだ」

「その子の年齢はどれくらいかしら？」

「年齢か？ 17歳、高校2年生だな。」

しかし、なんだ？ 今までも年齢を気にすることが度々あったが、こだわりでもあるのか？」

報告書らしきものをめくりながら橙子は答えた。

なぜか、黒い影は依頼のたびに対象の年齢を聞く。その理由は以前不明だった。

「いや、こだわりというべきか、自分でも不思議なんだけどね」

そう言つて、悩ましげに手を当てる。

トントンと頭を叩きながら。

自分でも、理由をはっきりとしない。何を忘れているのか、何を忘れたいのか。

『子供は好きだ。彼らは世界の宝だ』

それすらも、もう擦り切れてしまった。

「17か。うん、困った」

「おいおい、今更放り投げるのは勘弁してくれよ。こつちだつて、タダで引き受けてるわけじゃないんだ。前借り分でも稼がにやならん」

「金がないのは先月呪物を買ったからだろう」

「ぐつ、しょうがないだろ。出会いとは、運命的なものであるが故に機会があれば手を出さずにはいられないんだ。」

「勘弁してくれ。こちらの儲け分も持つてかれちやあたままない」

「分かった、分かった。今回は多めにくれてやるから」

「ふむ・・・まあいいが」

「ここにはもう居ない、警察を呼べ」と、橙子に言う。

すでにこの家には何も無い。対象は移動し回っている。

「ここら一帯は狩場だ。」

「・・・手遅れか」

「すでに終末期つてとこだね。まあ、あれだけ暴れ回ったんだ」

「むう、あまり大事にはしたくなかったが。仕方あるまい」

そう言つて、橙子は連絡をかける。

警察には悪魔憑き専門の特別課がある。彼らなら、町中の包囲程度はできるだろう。悪魔憑きは決して神秘などではない。あくまで精神病の延長線にすぎない現実的な物だ。ゆえに銃火器でも対応は可能。それでも能力は人ならざるものであるので安心はできない。

「そういえば、聞いたか。今回の悪魔憑きの別名」

どこからか、悲鳴が響き渡る。

悪魔憑きが「狩り」を始めた。

「——」  
「モンスター」だとき。ふつ、連続殺人鬼にしては大層な名じゃないか」

◇

流行り廃りが娯楽の常。昨日まで面白かったものが明日には、なんだがチンケなものになってる。楽しかったけど、やりすぎると飽きちやう。こんな時代遅れだって。

こんな感じで、娯楽には鮮度がある。

いつまでも頂点であり続ける娯楽はない。

娯楽自体に変化はなくとも、消費側の気持ちは変化していく。

娯楽はそのあり方を維持し続けるのに、変化を続ける生き物には、その誠実さを煩わしく感じる。

「あの日の事は」  
楽しい時間は変化していく。  
初めは何が楽しかったのか。  
今は何が楽しいのか。

「あの日の事は」  
我慢できない。

それは禁断症状のように、間隔を空けるのが苦痛に変わる。  
我慢できない。

見られた人間から、片っ端に始末したい。  
走る目的にはピッタリだ。狩猟は「怪物」である今の自分に合っている。

できるなら男も女も分け隔たりなく、大人も子供を満遍なく。でも男より女で、大人より子供の方がいいってのが私の趣味。命を食べる実感がする。年老いた獲物は食べ応えがないし、いかつい男は追い詰めてもつまらない。

うん、だつてか弱い生き物がふるふると震えてる方が、今際の際って感じだし。恐怖が限界になった時、食べてやるのが一番喰いごたえがあるのだ。

「ずっと黙っているんだよ」

そうだ。誰か、誰でもいい。早く私を見つけて欲しい。

早く獲物になってほしい。

たまに後ろを振り返る。一人襲うとホツとして、けど三日経てば不安になって、新しい目撃者が欲しくなる。

これじゃまるで、

「なあ——お父さんに隠し事はしてないかい？」

骨の髄から奴らと一緒。結局、血の繋がりに抗えない。

私の家族は人殺しだ。実は私も、隠れて殺人鬼をやっている。

でも、お父さんとお母さんも馬鹿じゃない。私の隠し事に気づいている。奴の不安そうな目を知っている。だつて同類だもん。七日ぐらい狩りができなくなった私の目と一緒。だからバレるのは時間の問題で、そうなったら家族会議はおしまいで、後は互いに殺し殺され



の伺いで……って、あれ？。そういえば私、なんで奴らを生かしてやっているんだっけ？

◇  
さて、今宵は決行日。

お父さんとお母さんの仲はもうどうしようもなく、まあ、私にとってはどうでもいいことでそれでいいかと決断した。

「じゃあ、少し早めの冬籠としますカ」

目標はお父さんとお母さん。でもそれだけだと動機が丸わかりなので撒き餌がいくつか必要だ。

どうせなら楽しい狩りをしよう。

緻密に地形を調べ、繊細に正体を隠し、一斉に牙を剥く。警察には私の情報が回ってるらしいが、最近が悪魔憑きを殺し回ってる殺人鬼の噂もあるし、派手にやれば派手にやるほど目眩しになるだろう。死体を隠すなら死体の中、殺人鬼をかくするなら殺人鬼の中。よし。そんな適当な思いを抱いて、ここの町中の、私好みの女子供を片っ端から狩り獲ろう。

「——うん、コレナライイカ」

私は窓から飛び出し、屋根に駆け上り、空を仰いだ。

今日は綺麗な満月。

骨の軋むような夜。

そんな適当な理由で私は、今夜を殺戮の日に決めた。

◇  
「……ここかな」

さしたる理由もなく、なんの準備もなく、標的を見つけた。

それは標的の家から少し離れた一軒家。

『藤丸』と書かれた表札に目を向け、鉄門を開く。きい、と物悲しい音を上げる。

◇  
さて、少女にしてみれば全てが予想外の出来事だった。  
血の匂いが充満した家の中で、考えに耽る。

遠くからはパトカーのサイレンが聞こえてくる。  
どうしてか、警察の対応が早すぎる。

何故だろうと、少女は訝しみながら夜空を駆けた。

両親の死亡は確認した。居間で仲良く眠っている。最後なので、手と手を繋いで仲の良い恋人のように死化粧を施してやった。

ますます街中が騒がしくなってきた。

頃合いかもしれない。そろそろ殺してきた連中に混じって姿をくらませるか。

ああ、でも。もう一人ぐらいい見つかりたい。

もう一人ぐらい、殺したい。

わざと音を立てて跳躍する。誰か私を――

「アッ――ハッアアア」

見つかった、見つかった、見つかった。

見上げてる。

馬鹿みたいに、呑気に、赤子を抱きながら。

呆然としているその親子に笑みを向ける。

それでは――愉しく美味しく、遠慮なく頂きましょう。

## 息抜きでも

【それとこれは別】

「今日は帰りが遅いからな」

「んー、はいはい」

「寂しくないか？」

「全然」

「そうか・・・位置情報を送った方がいいか？」

「いらんいらん。キミのプライベートまで介入する気はないよ」

「むう、そうか」

そろそろ時間が迫っている。もう少し興味を持ってきてくれないじゃないかと不満を溢しながらもアタランテは足早に準備を終わらせて

「では、食事に誘われているから」

「そう言っただけで出て行こうとする。」

「・・・」

その瞬間、寝っ転がっていた体をぱっと起こし、出かける私の腕を掴む。

「・・・誰に？」

「不安げに彼が顔を覗かせている。」

「その顔見て、少し安心した。」

【痺れビレ】

「はッ」

眠っていた彼女の体が突然震え出す。

「アタランテ？」と、どうしたものかと不安に思い声をかける。彼女は目に涙を浮かべながら体を擦り寄せてきた。

「こ・・・こわい夢を見た」

「そう言っただけで胸に顔を埋めるので、優しく頭を撫でる。」

「大丈夫。ワタシはここに居るよ。だから安心して眠るといい」

抱き寄せ、耳や背をさすつてやると数刻もせぬうちに寝息を立て始めた。

このままでは寝苦しいと思い、腕を枕代わりにし頭を乗せてやる。ただ、これはあまりいいやり方ではなかった。

「あゝゝゝ腕痺れてきた」

腕を動かそうにもこうも気持ちよさそうに寝ているので動かしようもなく、痺れた腕のまま一夜が明ける。結局一睡も出来ぬまま、今日も今日とて食堂に立つ。

「むっ！ この煮物は風味が飛びすぎています。八角を入れるのならばタイミングに気をつけたまえ」

「・・・小姑かっつての。はいはい、間違えただけです」

何百のサーヴァント達の食事を終わらせ、自室に戻る。

その日の夜も彼女が近くで寝ることをせがむので、さて、どうしたものかと考え

「アタランテ、ちよつと・・・」

「わわわっ、どうしたんだ!？」

背に手を回し、肩の方へ抱き寄せる。

「腕、痺れるから肩で寝て」

これなら腕が痺れることはあるまい。我ながらナイスアイデア。

と、彼女の方を見入ると何やら顔を赤らめていて「どうしたの」と視線を送ると

「・・・すき・・・」

「え」

時折、彼女の情緒が分からない。

【ケモノ】

「フオウ！」

「ん、おや珍しい。ワタシのところに顔を出すなんて」

フオウ君、今日は怪物の元へやってきた。

普段はマッシュや立香にベツタリなのでこうして誰かの元に来るのは珍しいこと。

「フオウ、フオーウ」

「ブツラシング？ それなら立香たちにやってもらった方がいいんじゃない。いつもやって貰っているだろう」

「フオツ、フオウ」

「そう、忙しいのねあの子達。うーん、あまり得意ではないけれど」

彼はパチンと指を鳴らすと、その手にはケモノ用のブラシが生み出される。

「おいで」とモフモフを太もものにのせブラッシングを始める。

「・・・むう」

それを見て、不満げな声が漏れた。

私には滅多にしてくれないのに。

「それにしても、最初に会った頃より随分可愛げのある姿になったじゃないか」

「フオー、フオーウ」

「ふふっ。お互い、環境が変わると性質も変わるからね。いい出会いに感謝だ」

毛を掻き分けて根元からブラシを入れる。元々、日頃から手入れをされているのだろう。あとは毛束をほぐして毛並みを整えてやれば完成だ。

フワフワな毛並みを十分堪能してしまった。

「ほら、慣れないなりに上手くやれた」

「フオツ！・・・フオフォ、フオーウ」

「文句言わないの。口が悪いなキミ」

「フオウ。フオフオツ」

「ん？ ふふっ。うん、上手くやれてると思う。死んでから未練を叶えるなんて可笑しな話ではあるけどね」

「・・・むう」

まだ終わらないのか。

笑みを浮かべ、楽しげにソレを撫で続けているのを横目に口を尖らす。・・・私にだって、獣耳や尻尾がある。手触りでは・・・負けて

いる気はしなくもないが。

しかしだ。私というものが身近にあるというのに、どうしてなんだ。もう。

「・・・フォツキユ、フォウ」

「ん、そうかい。じゃあまたね」

そう言ってフォウは彼の膝から飛び降りどこかへ駆けてしまった。扉から出ていく瞬間、ちらっとこちらを見て「フォツ」と、勝ち誇ったような顔を見せてきた。

カチンときた。

「おっと」

ので、彼の膝に思いつきり寝転ぶ。無理やり手を掴み、自分の耳の方へ持つていく。

「どうしたの？」

「・・・にやあ」

「？」

「——にやあー！」

撫でろ、という感情で鳴いたつもりだ。

うう、やってから言うのもなんだが、この状況は本当にみっともない姿を曝け出してはいないだろうか。

「・・・ふふっ」

私が、恥ずかしいや何やらで目を逸らしていると、クスリと笑いなから彼が頭を撫でてくれた。

決して、決して目を合わせるわけにはいかないので憶測ではあるが、どうせ意地の悪い笑みを浮かべているに違いない。

「そんな顔するくらいならやらなきやいいのに」

「うるさい」

「はいはい・・・羨ましかったの？」

「うるさい馬鹿喋るな。いいから、汝は黙って撫でていればいい」

体を反転させ、彼の体に顔を押し付けるように抱きつく。「苦しいよ」と声が聞こえるが知るものか。

「耳や尻尾触ると怒ると思ってた」

彼は諦めたのか、私の耳や尻尾を触り始める。やはり、落ち着かない。自分でやらせておきながら言うものではないが、肌に触れられる度に小さく声が漏れる。

「んっ……それは、汝の触り方がいやらしいから」

「おや、今はいいのかな」

「ふっ……ツ……うる、さい。私がいいと、言ったんだっ……ひうっ」

「そっ。なら、しつかり堪能させてもらうさ」

満足気に目を細めながら、少しずつ力が強められる。それでも、こちらに痛みがないようにする気遣いが見られる。

「にやっ……ふっ……ッ!……っあ」

耳や尻尾に体温が伝わり、自然とその感覚に集中してしまう。ゆっくり、徐々に、強く撫でられるうち次第に吐息も荒くなり、自分の全てを彼に預けてしまう。

「まずい。」

これ以上は止まれなくなってしまう。

たまらず顔をあげ、もう十分だと彼に伝えようとする。

「あっ」

そこにはケモノがいた。

目が合えばもう逃げられない。

——喰われてしまう。

徐々に近づいてくる顔から目を逸らすことが出来ず、

「んっ」

ケモノは、美味しそうに私を——